長岡市埋蔵文化財調査報告書

上条遺跡

―上条高畑土地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2016

新潟県長岡市教育委員会

例　言

1．本書は、新潟県長岡市上条町地内に位置する上条遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、上条高畑土地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター建設事業に伴うものであり、両者から委託を受けて長岡市教育委員会が実施した。

3．遺跡確認試掘調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫・県費の補助交付金を受けた。本発掘調査に要した費用は原因者である上条高畑土地区画整理組合及び医療法人立川メディカルセンターが負担した。

4．遺物の注記は、14＋上条＋出土位置＋層位＋取り上げ番号とした。

5．遺構番号は、遺構略号＋調査区全体の通し番号とした。

6．出土した遺物と調査に関わる資料は、すべて長岡市教育委員会で保管している。

7．本書の執筆は、第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅲ章第１・２節・第Ⅳ章第３節・第Ⅴ章第１～５節・第Ⅶ章第１～４・７・９節を山賀和也（長岡市教育委員会）、第Ⅲ章第３・４節・第Ⅳ章第１～３節・第Ⅴ章第６・７節・第Ⅶ章第５・６・８節を竹部佑介（株式会社大石組）、第Ⅵ章第１節・第２節をパリノ・サーヴェイ株式会社、第Ⅵ章第３節を四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）が行った。編集は竹部が担当し、山賀がそれを統括した。

　第Ⅳ章第３節の記述は、調査時に調査員がまとめた所見をもとに山賀、竹部が執筆した。

　遺物の観察については、笹澤正史氏にご教示いただいた。なお、担当者の理解不足により事実記載等に誤りがある場合には、その責は執筆担当者にある。

8．調査・整理体制は、第Ⅲ章第１節に記した。

9．遺物のＸ線写真及び赤外線写真は、新潟県埋蔵文化財センターで撮影した。

10．報告書掲載の北は真北を指す。

11．調査、整理の過程で成果を報告したが、本報告を持って正とする。

12．発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）

　浅井 勝利　石坂 圭介　堅木 宜弘　小林 昌二　中沢 悟　藤巻 正信　前嶋 敏　三ツ井 朋子

　医療法人立川メディカルセンター　上条高畑土地区画整理組合　上条町町内会　高畑町町内会

　山通連合町内会

　（株）加賀田組　（株）中越興業　（株）竹中工務店　高野不動産（株）

　佐渡市教育委員会　新潟県教育庁文化行政課　公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　長岡市都市整備部都市開発課

目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境 …… 2
　第１節　遺跡の位置 …… 2
　第２節　周辺の遺跡 …… 2
第Ⅲ章　調査の概要 …… 6
　第１節　調査体制 …… 6
　第２節　調査の経過 …… 6
　第３節　グリッドの設定 …… 7
　第４節　基本層序 …… 7
第Ⅳ章　遺　　構 …… 9
　第１節　遺構の概要 …… 9
　第２節　遺構の分類と記述 …… 9
　第３節　各説 …… 10
　　掘立柱建物 …… 10
　　竪穴建物 …… 14
　　埋納遺構・土器溜まり …… 17
　　埋葬関連遺構 …… 18
　　土坑 …… 20
　　井戸 …… 22
　　溝 …… 22
　　畝状小溝群 …… 24
　　柵列 …… 26
　　ピット …… 26
　　湿地・その他 …… 27
第Ⅴ章　遺　　物 …… 28
　第１節　出土遺物の概要 …… 28
　第２節　土器 …… 29
　　（A）記述の方針 …… 29
　　（B）土器の器種分類 …… 29
　　　１　須恵器 …… 29
　　　２　土師器 …… 29
　　　３　内面黒色土器 …… 33
　　　４　施釉陶器 …… 33
　　（C）遺物各説 …… 34
　第３節　土製品 …… 41

第４節　石製品 …… 41
第５節　木製品 …… 41
第６節　鍛冶関連遺物 …… 42
第７節　金属製品・銭貨 …… 42
第Ⅵ章　自然科学分析 …… 43
第１節　上条遺跡の自然科学分析 …… 43
（A）はじめに …… 43
（B）放射性炭素年代測定 …… 43
（C）樹種同定 …… 45
（D）花粉分析 …… 47
（E）種実同定 …… 48
（F）リン酸・カルシウム分析 …… 49
第２節　上条遺跡出土骨同定報告 …… 52
第３節　長岡市上条遺跡出土曲物付着物の科学分析 …… 61
第Ⅶ章　考　　察 …… 65
第１節　掘立柱建物について …… 65
第２節　四面廂建物について …… 66
第３節　土器埋納遺構について …… 67
第４節　埋葬関連遺構について …… 68
第５節　焼土坑（SK342）について …… 69
第６節　畝状小溝群について …… 70
第７節　出土土器の位置づけ …… 71
第８節　墨書・漆書土器について …… 74
第９節　集落の変遷と遺跡の性格 …… 77
《引用・参考文献》 …… 80
《遺物観察表》 …… 83

挿図目次

第１図　遺跡位置図　1
第２図　遺跡分布図　5
第３図　グリッドの設定及び基本層序の観察地点　7
第４図　土層柱状図　8
第５図　遺構の形状・覆土の堆積状況の分類　9
第６図　器種分類（１）　30
第７図　器種分類（２）　31
第８図　器種分類（３）　32
第９図　器種分類（４）　33
第 10 図　暦年較正結果（１σ）　44
第 11 図　人体骨格各部の名称　54
第 12 図　花粉化石・種実遺体　57
第 13 図　木材（１）　58
第 14 図　木材（２）　59
第 15 図　木材（３）　60
第 16 図　出土骨　60
第 17 図　赤外線吸収スペクトル　62
第 18 図　漆塗膜の顕微鏡写真　63
第 19 図　掘立柱建物変遷図　66
第 20 図　土器種別組成図（重量比）　72
第 21 図　食膳具変遷図　73
第 22 図　古代文字資料出土位置図　75
第 23 図　遺構変遷図　78

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧　4
第２表　作業工程表　6
第３表　土器・陶磁器重量計測表　28
第４表　放射性炭素年代測定及び暦年校正結果　44
第５表　樹種同定結果　46
第６表　花粉分析結果　48
第７表　種実同定結果　49
第８表　土壌理化学分析結果　50
第９表　骨同定結果　53
第 10 表　土器埋納遺構一覧　68
第 11 表　編年対照表　71
第 12 表　墨書・漆書土器集計表　75

図版目次

【図面図版】

図版１　調査区全体図
図版２　調査区分割図（１）
図版３　調査区分割図（２）
図版４　調査区分割図（３）
図版５　調査区分割図（４）
図版６　調査区分割図（５）
図版７　調査区分割図（６）
図版８　調査区分割図（７）
図版９　調査区分割図（８）
図版 10　遺構個別図（１）　SB166
図版 11　遺構個別図（２）　SB167
図版 12　遺構個別図（３）　SB316
図版 13　遺構個別図（４）　SB317（１）
図版 14　遺構個別図（５）　SB317（２）
図版 15　遺構個別図（６）　SB317（３）
図版 16　遺構個別図（７）　SB317（４）

図版 17　遺構個別図（8）　SB318（1）
図版 18　遺構個別図（9）　SB318（2）・SB320（1）
図版 19　遺構個別図（10）　SB320（2）
図版 20　遺構個別図（11）　SB348（1）
図版 21　遺構個別図（12）　SB348（2）・SB504
図版 22　遺構個別図（13）　SB535
図版 23　遺構個別図（14）　SB550
図版 24　遺構個別図（15）　SB571
図版 25　遺構個別図（16）　SB574
図版 26　遺構個別図（17）　SB608（1）
図版 27　遺構個別図（18）　SB608（2）
図版 28　遺構個別図（19）　SB608（3）
図版 29　遺構個別図（20）　SB609
図版 30　遺構個別図（21）　SI 5 ・SI10
図版 31　遺構個別図（22）　SI46・SI49
図版 32　遺構個別図（23）　SI54・SI70
図版 33　遺構個別図（24）　SI130・SI207・SI211
図版 34　遺構個別図（25）　SI212・SI268
図版 35　遺構個別図（26）　SI429・SI465
図版 36　遺構個別図（27）　SI664
図版 37　遺構個別図（28）　P2・43・SX32・SK280・359・P279・306
図版 38　遺構個別図（29）　SK492・493・573・594
図版 39　遺構個別図（30）　SK106・146・SK205
図版 40　遺構個別図（31）　SK246・260・482・512
図版 41　遺構個別図（32）　SK6・42・48・151・210
図版 42　遺構個別図（33）　SK216・259・361・365・378・396
図版 43　遺構個別図（34）　SK342・SD347
図版 44　遺構個別図（35）　SE403・SE677・SD3・7
図版 45　遺構個別図（36）　SD8・97・153・267・273・302・480・481・491・SX494
図版 46　遺構個別図（37）　溝群 1 ・ 2
図版 47　遺構個別図（38）　溝群 3
図版 48　遺構個別図（39）　溝群 4 ・ 5
図版 49　遺構個別図（40）　溝群 6 ・SA680・P127・156
図版 50　遺構個別図（41）　P278・426・527・651・SX119・120
図版 51　土器（1）
図版 52　土器（2）
図版 53　土器（3）
図版 54　土器（4）
図版 55　土器（5）
図版 56　土器（6）
図版 57　土器（7）
図版 58　土器（8）
図版 59　土器（9）
図版 60　土器（10）
図版 61　土器（11）
図版 62　土器（12）
図版 63　土器（13）
図版 64　土器（14）
図版 65　土器（15）
図版 66　土器（16）
図版 67　土器（17）
図版 68　土器（18）
図版 69　土器（19）
図版 70　土器（20）
図版 71　土器（21）
図版 72　土器（22）
図版 73　土器（23）
図版 74　土器（24）
図版 75　土器（25）
図版 76　土器（26）
図版 77　土器（27）
図版 78　土器（28）
図版 79　土器（29）
図版 80　土器（30）
図版 81　土器（31）
図版 82　土器（32）
図版 83　土器（33）
図版 84　土器（34）
図版 85　土器（35）

図版 86　土器（36）
図版 87　土器（37）・土製品（1）
図版 88　土製品（2）・石製品
図版 89　木製品（1）
図版 90　木製品（2）・鍛冶関連遺物・金属製品・銭貨

【写真図版】

図版 91　調査写真（1）　遺跡全景
図版 92　調査写真（2）　基本層序・SB317・P306・SK205・SK482・SK342
図版 93　調査写真（3）　基本層序･SX1･掘立柱建物（1）
図版 94　調査写真（4）　掘立柱建物（2）
図版 95　調査写真（5）　掘立柱建物（3）
図版 96　調査写真（6）　掘立柱建物（4）･竪穴建物（1）
図版 97　調査写真（7）　竪穴建物（2）
図版 98　調査写真（8）　竪穴建物（3）
図版 99　調査写真（9）　土器埋納遺構･土器溜まり（1）
図版 100　調査写真（10）　土器埋納遺構・土器溜まり（2）・埋葬関連遺構（1）
図版 101　調査写真（11）　埋葬関連遺構（2）
図版 102　調査写真（12）　埋葬関連遺構（3）･土坑（1）
図版 103　調査写真（13）　土坑（2）
図版 104　調査写真（14）　土坑（3）・井戸・溝（1）
図版 105　調査写真（15）　溝（2）・畝状小溝群（1）
図版 106　調査写真（16）　畝状小溝群（2）
図版 107　調査写真（17）　畝状小溝群（3）・湿地・その他・作業風景
図版 108　遺物写真（1）　遺物集合写真
図版 109　遺物写真（2）　漆付着土器・施釉陶器・石製品・墨書・漆書
図版 110　遺物写真（3）　土器（1）
図版 111　遺物写真（4）　土器（2）
図版 112　遺物写真（5）　土器（3）
図版 113　遺物写真（6）　土器（4）
図版 114　遺物写真（7）　土器（5）
図版 115　遺物写真（8）　土器（6）
図版 116　遺物写真（9）　土器（7）
図版 117　遺物写真（10）　土器（8）
図版 118　遺物写真（11）　土器（9）
図版 119　遺物写真（12）　土器（10）
図版 120　遺物写真（13）　土器（11）
図版 121　遺物写真（14）　土器（12）
図版 122　遺物写真（15）　土器（13）
図版 123　遺物写真（16）　土器（14）
図版 124　遺物写真（17）　土器（15）
図版 125　遺物写真（18）　土器（16）
図版 126　遺物写真（19）　土器（17）
図版 127　遺物写真（20）　土器（18）・土製品・石製品
図版 128　遺物写真（21）　木製品・鍛冶関連遺物・金属製品・銭貨

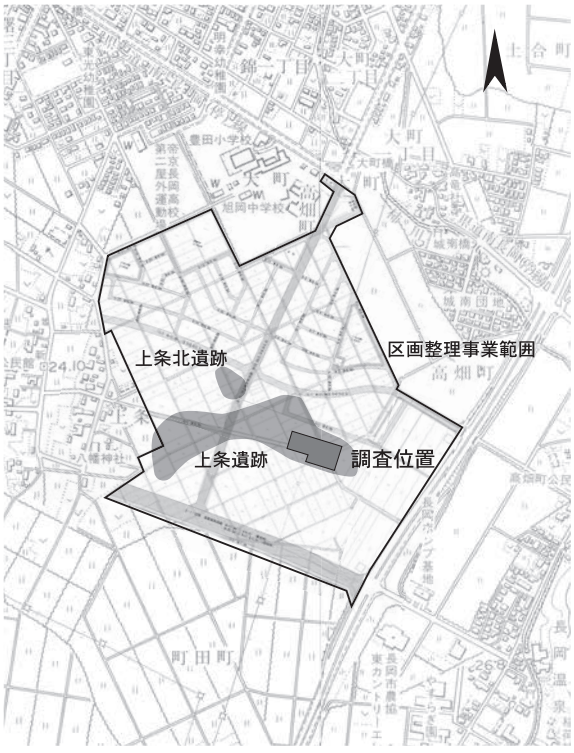
第Ⅰ章　調査に至る経緯

上条町では、上条高畑土地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター建設事業が計画され、長岡市教育委員会（以下、市教委と略称）は、平成 24 年 10 月に事業を所管する長岡市都市整備部都市開発課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。事業計画地には周知の遺跡は存在しないが、周辺に周知の遺跡が存在するため、未発見の遺跡が存在する可能性があることから、試掘調査を実施し、遺跡の有無を確認することとした。その結果、遺跡が発見された場合には、事業計画と照らし、取り扱いを協議することで合意した。

試掘調査は、平成 25 年 5 月 9 日付け長教博第 62 号で新潟県教育委員会教育長に対し調査着手を報告し、 5 月 13 日から 24 日まで調査を実施した（平成 25 年 9 月 5 日付け長教博第 220 号終了報告）。対象面積は約 331,000㎡で、調査トレンチを任意に 304 ヶ所設定し調査を行った。その結果、地表面から 20 ～ 50㎝下で遺物包含層を確認し、土坑や溝といった遺構も発見された。遺物は、平安時代の土師器、須恵器が出土した。これらの結果から平安時代の遺跡を 2 ヶ所で発見し、それぞれ上条遺跡、上条北遺跡として周知化した（平成 25 年 9 月 5 日付け長教博第 219 号）。

試掘調査の結果を踏まえ、上条高畑土地区画整理事業組合及び医療法人立川メディカルセンター（以下、事業者と略称）と協議を行った。上条遺跡及び上条北遺跡の範囲は、商業施設エリア及び立川メディカルセンターのエリアにまたがって広がっていた。商業施設エリアについては、詳細な開発計画が出来ていないため、計画が出来上がった段階で協議することとしたが、その一方、立川メディカルセンターのエリアは、病院本体が上条遺跡の範囲内に計画されており、遺跡保護の観点から建設位置の変更等を協議したが、計画変更は困難で遺跡の現状保存がはかれないことから、工事着手前の記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。調査面積は、病院本体が上条遺跡にかかる部分の 5,900㎡である。調査時期は、立川メディカルセンター建設工事が始まる平成 26 年 10 月までに調査を終了する必要があったため、雪解けがある程度進んだ平成 26 年春から 9 月までの期間で実施することとした。なお、発掘調査から報告書刊行までの費用については、事業者の双方から負担していただくことで合意した。

その後、事業者から市教委経由で新潟県教育委員会教育長に文化財保護法第 93 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の届出（平成 26 年 3 月 20 日付け）が行われた。それを受けて新潟県教育委員会教育長は、事業者に対し平成 26 年 3 月 26 日付け教文第 1563 号で工事着手前の本発掘調査の実施を通知した。そして、市教委は平成 26 年 3 月 26 日付け長教博第 427 号で新潟県教育委員会教育長に本発掘調査着手を報告し、調査を開始した。



第 1 図　遺跡位置図（1：15,000）

第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境

第１節　遺跡の位置

長岡市は、新潟県のほぼ中央部に位置しており、市町村合併により西は日本海から東は守門岳までの広大な範囲が市域となっている。上条遺跡が所在する長岡地域は、その中央部を日本一の長さを誇る信濃川が縦断し、その両岸に沖積平野が広がっている。さらに、その沖積平野の周縁部に丘陵が延びている。

平野部の西側には東頸城丘陵から派生する西山丘陵が位置している。西山丘陵は、南南西から北北東に延びる丘陵で、東頸城地方では 1,000m を越えた標高も長岡市周辺では 300m 程になり、沖積地に埋没している。丘陵の周縁には信濃川によって形成された数段の河岸段丘があり、これらの河岸段丘は上流の中魚沼郡津南町・十日町市・小千谷市から続く大規模の段丘で、旧石器時代から縄文時代の遺跡が数多く存在する。段丘面は高いところほど形成期が古く、長岡付近では高いところから高寺面・関原面・上富岡面・深沢面に区分されており、関原面・深沢面は沖積地の下に埋没している。東側には魚沼丘陵から延びる東山丘陵が位置している。東山丘陵は、標高 700m を越える急峻な地形で、北北東に向かって次第に高度を下げ、そこから信濃川に流れ込む栖吉川や椿桂川などの中小河川よって山裾に扇状地が形成されている。その扇状地に主に縄文時代から古代の遺跡が存在している。

平野部は、信濃川によって形成された全国でも有数の沖積平野である新潟平野の南端部に位置している。これらは信濃川の自然堤防が発達した氾濫原となっており、その自然堤防上に多くの遺跡や、現在の集落が形成されている。上条遺跡もこれらと同じく自然堤防上に形成された集落遺跡である。

第２節　周辺の遺跡

東山丘陵沿いには縄文時代から古代の遺跡が数多く分布している。その多くは発掘調査が行われておらず詳細は不明であるが、これまでの発掘調査成果と採集資料から主な遺跡を概観することにしたい。

旧石器時代の遺跡は長岡地域で五荘山遺跡、長峰団地西遺跡、大沢遺跡の３遺跡が確認されているが、すべて西山丘陵の高位及び中位面に位置しており、東山丘陵では発見されていない。縄文時代の東山丘陵で最も古い遺跡は松葉遺跡で少量ではあるが早期後半に位置づけられる土器が出土している。前期の遺跡としては、金倉遺跡、三貫梨遺跡、小毬山遺跡が挙げられる。いずれも、土器が少量確認されているのみで、遺構や集落の状況は不明である。中期になると遺跡の数が急激に増加しピークを迎える。その中には、多くの遺構や遺物が出土する大規模な集落跡が出現し、地域で中心的な性格を持った拠点的集落と考えられている。この拠点的集落としては、山下Ａ遺跡、茨崎遺跡、中道遺跡、西片貝遺跡、松葉遺跡などが挙げられている。中道遺跡は、中期中葉から晩期まで続く大規模集落で、東山丘陵沿いでは唯一集落全体の発掘調査が行われた貴重な事例である。特に中期の集落構造については、詳細な検討がなされており、集落構成要素である廃棄域、居住域、貯蔵域、墓域は、広場を中心として同心円状に区分される重帯構造を持ち、また居住群を分割する分節構造が見られ、環状集落の特徴を備えている。したがって、その形状は広場を中心に同心円状に建物が展開する典型的な環状集落ではないが、扇状地に突き出た舌状台地という地形の制約を受けた、やや変形した環状集落と考えられるものである［小熊 2002］。後・晩期の遺跡は、中期に比べると減少する。代表的な遺跡としては、中期から晩期にかけて営まれた中道遺跡や大明神遺跡が挙げられる。

弥生時代～古墳時代の遺跡数は、時期不明を除くと弥生前期３、弥生中期７、弥生後期 15、古墳時代 10 ヶ所となっており、弥生前期から徐々に遺跡数を増やし、後期でピークを迎える。古墳時代になると不明確ではあるが前期まではやや減少しながらもいくつか見られるが、中期以降の遺跡は現在のところ１ヶ所しか見つかっていない。

弥生中期までの様相は明らかではないが、中期～後期にかけて営まれた横山遺跡は、集落の周囲を深さ 1.5 ｍの環濠が取り囲んでおり、防御機能を持った遺跡である。また、近接する原山遺跡では崖面で溝が確認でき、同じく環濠を持つ集落と見られている。古墳前期の集落遺跡は、五百刈遺跡、藤ヶ森遺跡、榎町遺跡、浅田遺跡など弥生末期から続く遺跡で、沖積地に立地する遺跡が多くなる。藤ヶ森遺跡では、方形周溝墓と方形台状墓が発見されている。古墳は、丘陵の頂部に麻生田古墳群（２基）と七ッ塚古墳群（７基）が位置しており、調査されていないが、前期に属すると考えられている。古墳時代前期までに地域を支配する有力者が存在したことを窺わせる。しかし、中期以降の遺跡はほとんど発見されておらず、詳細は不明である。

古代になるとそれまで越国として包括されていた地域が、越前、越中、越後に三分割され、長岡地域は越中国古志郡に属していた。その後、古志郡は大宝２年（702）に頸城、魚沼、蒲原の各郡とともに越後国に編入されることとなった。古志郡の中心は、大領の館と考えられる八幡林遺跡や郡衙と考えられる下ノ西遺跡が存在する和島地域であり、長岡地域はそこから離れた場所に位置している。

信濃川右岸の古代の遺跡は、上条町周辺から見附市にかけての東山丘陵裾部とそれに近い沖積地内に遺跡が多く存在している。奈良時代の遺跡は少なく、平安時代に入ると徐々に増加し、９世紀後半にピークを迎える。奈良時代の様相ははっきりしないが、須恵器窯が４ヶ所存在している。間野窯跡は、８世紀前半に位置づけられ、信濃川左岸の笹山窯跡に次ぐ古さである。間野窯跡からは、佐波理の椀や皿の金属器を模倣した土器が出土しており、官衙に供給されていた可能性がある。岩村窯跡、中野内遺跡、朴ノ木谷遺跡は表採や試掘調査のみで詳細は不明であるが、８世紀後半に位置づけられる。これらの窯跡の製品の供給先は、現在のところ不明であり、今後の検討されるべき課題である。

平安時代の遺跡は、これまで存在は知られていたが詳細は不明であった。しかし、近年発掘調査が行われており、その様相が徐々に明らかとなってきた。富島町では、９世紀に営まれた五百刈遺跡、盲田遺跡がある。特に盲田遺跡では、神功開寶、隆平永寶、金属製の帯金具、漆器などの貴重な遺物が出土しており、９世紀半ばから後半頃の官衙関連施設あるいは有力者が存在した集落と考えられる。また、いずれの遺跡も墨書土器、漆書土器を出土し、特に五百刈遺跡で出土した「東人女」はどういった意味を持つのか注目される。悠久山の裾に位置する土用木西遺跡は、10 世紀末から 11 世紀前半の遺跡で、平面積が 110㎡の三面に廂が付く大型の建物とそれに付属する建物が検出され、有力者の居宅と考えられている。このほか、抜間遺跡、大原Ｃ遺跡も小規模であるが発掘調査され、９世紀半ばから 10 世紀初頭に営まれた集落遺跡が存在している。

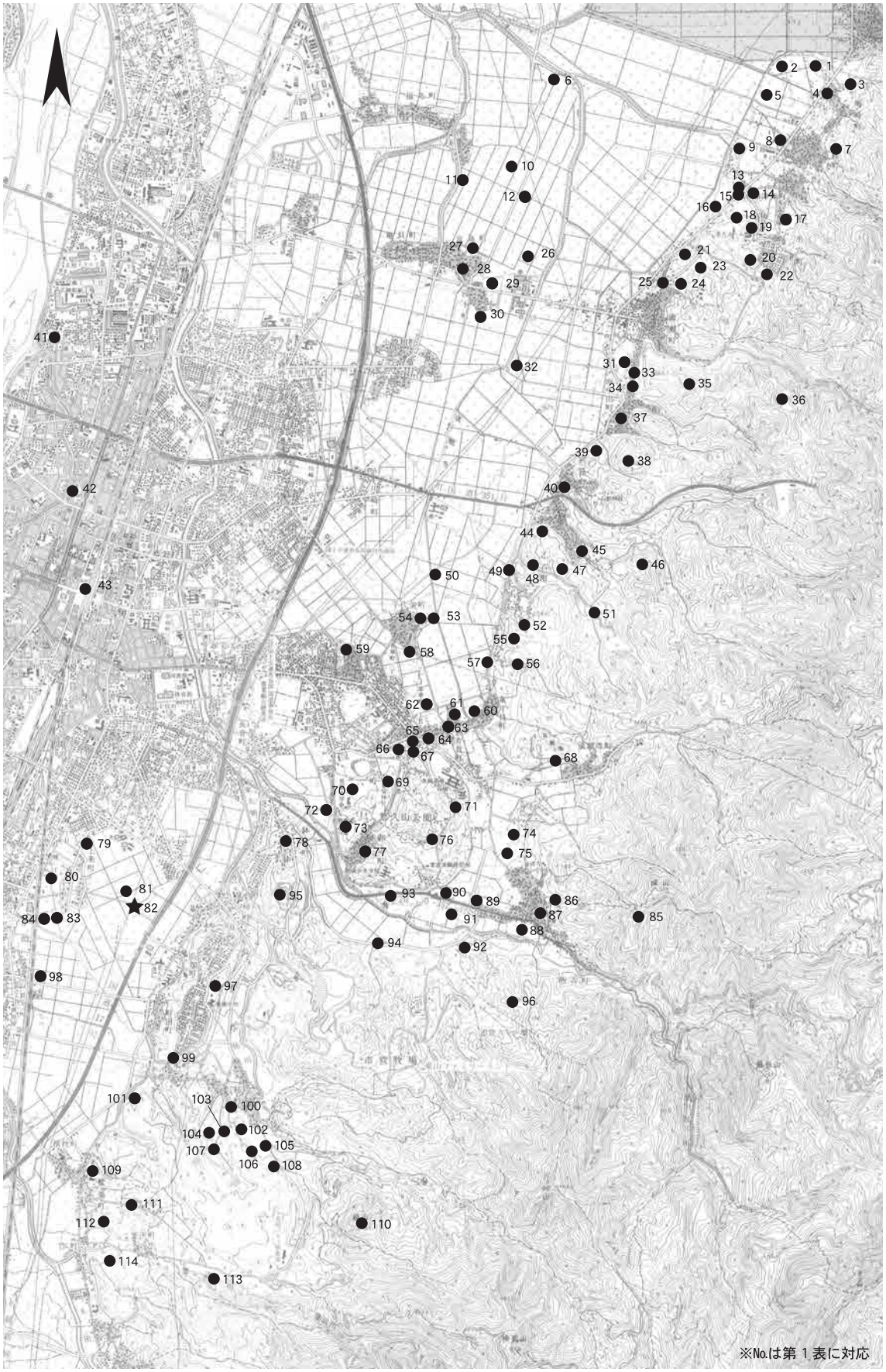
中世において、古志郡は５つの荘園と２つの国衙領の保が展開しており、上条町は大島荘の範囲となっていた。荘域は上条、中条、下条の３つに分かれており、上条町はその上条であったと考えられている。上条町付近に中世の遺跡は上条城跡が存在しているが、現在では土塁や堀などの遺構は失われており、その様相は不明である。栖吉町付近で発掘調査が行われており、三貫梨遺跡、松葉遺跡、中道遺跡、ソデクネ遺跡が調査されている。遺跡は 14 ～ 16 世紀に営まれた集落で、三貫梨遺跡、松葉遺跡、中道遺跡では、掘立柱建物や井戸のほか土葬墓や火葬墓などの墓域が検出されており、当時の集落構成を想定することが

できる。三貫梨遺跡は、掘立柱建物と北側を除く三方を区画する溝が確認され、有力者の存在が窺われるが、一方で寺院の可能性も指摘されている。中道遺跡では地下式横穴が多数検出されており、禅宗との関連が指摘されている。ソデクネ遺跡は、空堀で囲まれた16世紀前半の屋敷跡が検出された。また、下道遺跡では、14世紀後半頃に埋蔵されたと考えられる備蓄銭が出土している。城館、塚は、地形や伝承などから存在は知られている。栖吉城跡は、古志長尾氏によって築かれた山城である。大型の主廓や、堀切、縦堀、畝形阻障などを持ち、戦国期城郭としての特色を明確に残している。蔵王堂城は、信濃川右岸沿いの沖積地に位置し、主郭を囲む土塁と濠の一部が残っている。

No.	種別	名称	時代	No.	種別	名称	時代	No.	種別	名称	時代
1	包含地	藤ヶ森	弥	39	包含地	南谷B	中世	77	包含地	御山大沢	古代
2	集落跡	五斗田	古墳	40	包含地	出清水	縄	78	包含地	西谷	奈～中世
3	包含地	西ノ谷A	古代	41	城館跡	蔵王堂城跡	室・安・江	79	包含地	加内	古代・中世
4	包含地	大石	中世	42	城館跡	大沼城跡	鎌	80	包含地	八十刈	古代
5	包含地	横山	弥	43	城館跡	長岡城跡	中世・江	81	包含地	上条北	平
6	包含地	西八町	古代	44	包含地	岩村	弥	82	包含地	上条	平
7	包含地	北邑	弥	45	包含地	安楽寺	古代	83	包含地	上条谷内	古代・中世
8	包含地	早生田	弥	46	城館跡	乙吉城跡	室	84	包含地	山伏	古代・中世
9	包含地	原山	弥～古墳	47	城館跡	乙吉(扣)城跡	室	85	城館跡	栖吉城跡	南・室・安
10	包含地	抜間	古代	48	窯跡	岩村窯跡	平	86	城館跡	栖吉支城跡	室～戦
11	包含地	盲田	平・中世	49	包含地	中野内	平	87	包含地	北原	中世
12	包含地	五百刈	弥・古墳 平・中世	50	包含地	八枚田	古代	88	包含地	下道	中世
13	包含地	茨崎	縄	51	包含地	朴ノ木谷	古代	89	包含地	大明神	縄
14	包含地	大原A	中世	52	窯跡	間野窯跡	平	90	包含地	栖吉	縄
15	塚	大原塚	中世	53	包含地	杉本	古代	91	包含地	中道	縄
16	包含地	大原C	平	54	包含地	岩瀬	古代	92	包含地	栖吉岩野	古代・江
17	包含地	村ノ内	古代・中世	55	古墳	七ツ塚古墳群	古墳	93	墳墓	三貫梨遺跡	縄・中世
18	包含地	大原B	平	56	包含地	東片貝Ⅱ	縄	94	包含地	松葉	縄・奈～室
19	包含地	加津保行塚	弥	57	包含地	東片貝Ⅰ	縄	95	包含地	鉢ガ峰	弥
20	包含地	長者原西B	縄	58	包含地	向谷内	古代	96	城館跡	新田山砦跡	南
21	包含地	阿字原C	縄・古代 ・中世	59	城館跡	中沢城跡	室	97	包含地	長岡高畑	縄・平
22	包含地	長者原東	縄・古墳 ・中世	60	包含地	花ヶ崎	中世	98	包含地	横田	古代・中世
23	包含地	阿字原B	平・江	61	包含地	宮ノ前	古代	99	城館跡	町田城跡	鎌
24	包含地	阿字原E	中世	62	包含地	西片貝	縄	100	城館跡	柿館跡	中世
25	城館跡	浦瀬館跡	戦	63	包含地	上ノ田	中世	101	包含地	下条山	縄
26	包含地	浅田	弥・古墳	64	包含地	西片貝上ノ山東	古代・中世	102	包含地	山下C	縄
27	包含地	古村	平	65	包含地	戸左衛門	縄・弥	103	包含地	金場	縄
28	城館跡	富島館跡	室～安	66	包含地	戸左衛門西	弥・古墳	104	包含地	青木	縄
29	包含地	榎町	弥・古墳・平	67	包含地	西片貝上ノ山	古代	105	包含地	山下A	縄
30	包含地	火焚面	古代	68	包含地	百間堤	縄・古代	106	包含地	山下B	縄
31	包含地	石ノ下	古代	69	包含地	蒼柴神社裏	弥	107	包含地	金倉	縄
32	包含地	長表	縄・弥・平	70	包含地	土用木	弥・古代	108	包含地	小毬山	縄
33	包含地	地下城	古代	71	包含地	栖吉前山	縄・古代	109	城館跡	鷲巣城跡	戦
34	包含地	北谷	古代	72	集落跡	土用木西	平	110	城館跡	柿城跡	室
35	城館跡	地下城跡	戦	73	包含地	堅正寺	弥	111	包含地	鷲巣	弥
36	包含地	桂貝	縄	74	包含地	村下	縄・中世	112	包含地	天神山	縄
37	包含地	南谷A	古代	75	集落跡	ソデクネ	室	113	包含地	山入	縄
38	古墳	麻生田古墳群	古墳	76	包含地	御山前山	縄・弥	114	経塚	糠塚	鎌

縄：縄文　弥：弥生　奈：奈良　平：平安　鎌：鎌倉　室：室町　戦：戦国　安：安土桃山　江：江戸　　※包含地＝遺物包含地

第１表　周辺の遺跡一覧



第２図　遺跡分布図（1：50,000）

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査体制

平成 25・26 年度

調査主体	長岡市教育委員会（教育長　加藤　孝博）
事 務 局	長岡市教育委員会科学博物館（館長　山屋　茂人　平成 26 年 3 月 31 日まで、 小熊　博史　平成26年４月１日から）
調査担当	山賀　和也（長岡市教育委員会科学博物館　主任）
調 査 員	笹澤　正史（株式会社　大石組）、瀧口　泰孝（同）、竹部　佑介（同）、南波　守（同）
調査補助員	遠藤　昌代（株式会社　大石組）、櫻井　美由貴（同）、田辺　美子（同）、 中村　美智子（同）
現場代理人	笹川　順司（株式会社　大石組）

平成 27 年度

調査主体	長岡市教育委員会（教育長　加藤　孝博）
事 務 局	長岡市教育委員会科学博物館（館長　小熊　博史）
調査担当	山賀　和也（長岡市教育委員会科学博物館　主任）
調 査 員	竹部　佑介（株式会社　大石組）
調査補助員	榎本　好美（株式会社　大石組）

第２節　調査の経過

平成 25 年 3 月 26 日調査区の南東から西に向かって重機による表土掘削を開始した。調査区南側が湿地（SX 1）であることが判明し、重機で底面付近まで掘削を行った。包含層は良好に残っており、古代の遺物が多量に出土した。４月 28 日、大甕が出土した SK42 を検出する。５月 28 日、木棺墓の SK205 で、布掘り状の痕跡を検出し、木棺が打ち込み式であることが判明した。６月４日、調査区の南側を中心に測量のための１回目の写真撮影を行った。６月 16 日、四面廂建物の SB317 を検出した。柱穴の半裁を行い、複数の柱穴から柱根が出土した。７月２日、調査区の西側を中心に２回目の測量用写真を撮影した。７月 11 日に長岡市立旭岡中学校の１年生が遺跡を見学した。８月６日、３回目の測量用写真及び全体の俯瞰写真を撮影した。その後、追加の調査を行い、新たな溝や SI664 などを発見し、記録した。８月 23 日に一般向けの現地説明会を開催し、約 200 名の方が来場した。９月２日、長岡市立豊田小学校の６年生が遺跡見学を行った。９月３日、全ての作業を終了し調査を終了した。その後は、土壌洗浄、土器洗浄、注記、図面整理を行い、平成 25・26 年度の作業を終了した。

	3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月		
調査準備																					
表土掘削																					
包含層掘削																					
遺構精査																					
現場撤収																					

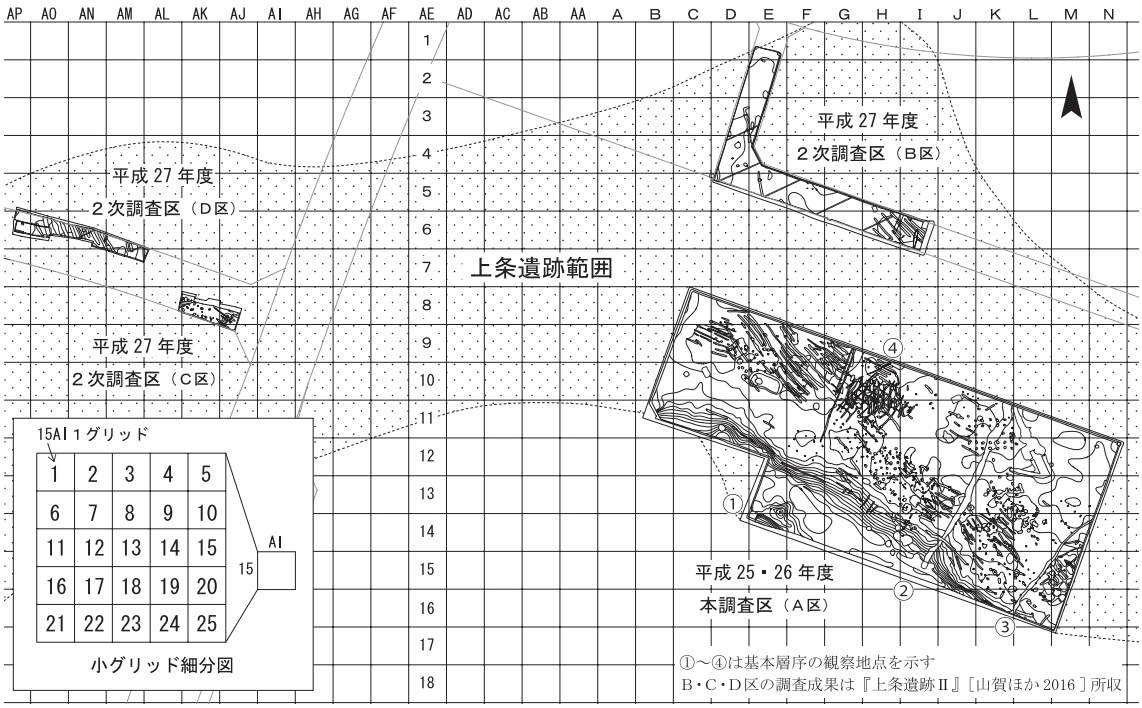
第２表　作業工程表

第３節　グリッドの設定

本調査を行うにあたり、調査区周辺の基準点を参考にして国家座標値によるグリッドの設定を行った。当該調査区（以下Ａ区）外側、北西に原点１Ａ（Ｘ＝ 158070、Ｙ＝ 31610）を定め、10ｍ方眼による大グリッドを設定した。原点となる１Ａの杭より南東側に該当する大グリッドが存在する。大グリッドの名称は原点と同様にアルファベットと算用数字を用いることとし、１Ａグリッドから南に向かって１、２、３、４、５、６……、東に向かってアルファベットを順にＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ……と割り当てた。グリッドの呼称は算用数字を語頭に配し、１Ａ、２Ａ、３Ａ……と呼称する。また、平成 25 年に行われた試掘の結果から、本遺跡はＡ区の北西および西側に広がりを持つことが判明している。そのため、今後の調査の利便性を考慮して、東西方向を示すアルファベットを２文字に拡張し、原点より西側へＡＡ、ＡＢ、ＡＣ……となる名称が与えられている。この他、各々の大グリッド内において 25 個の２ｍ方眼を設定し、北東より順に１～ 25 までの小グリッド名称を与えた。よって、本遺跡における特定の地点について言及する際には、15AI １のように大グリッドと小グリッドを合わせた名称で表す。

第４節　基本層序

平成 25 年に行われた試掘調査の結果、上位より順に、Ⅰ：耕作土・盛土、Ⅱ：灰色～灰褐色土、Ⅲ：暗灰色～茶褐色粘土、Ⅳ：暗褐色～灰褐色粘土（遺物包含層）、Ⅴ：漸移層（遺物包含層）、Ⅵ：灰黄色シルト・青灰色粘土（地山）の計６層を検出しており、地点により高低差はあるが、おおむね一様の堆積を示すことが判明している［長岡市教委 2014］。だが、表土除去を実施した際にＡ区南西側に谷地形 SX １が広がっていることが判明し、当初想定されていたよりも旧地形は起伏に富む可能性が考えられた。このため、調査区内における SX １の最深部①・②地点において土層の堆積状況を確認し、新たに層位を整理することで、本調査における基本層序とした（第３・４図）。なお SX １内には、微高地上の遺物包含層であった試掘調査時のⅣ層に類似した黒色土層が、間層を挟みつつ計３層に渡り堆積している状況が観察された。遺物は



第３図　グリッドの設定及び基本層序の観察地点（１：2,000）

最も下位の黒色土層（基本層序Ⅶ層）にほぼ限られることから、同層を微高地上の遺物包含層相当層と位置付けた。このため、観察地点によっては微高地上とSX 1内において堆積状況が異なるため、Ⅲ～Ⅵ層間の相違が認められる場合もある。

以下、検出した基本層序を上位より記載する。ただし、土層の観察内容は観察者や観察地点等の条件により統一的な表記となり難く、同様の堆積状況であっても記載内容に異同が生ずる可能性がある。本調査及び平成27年に実施された2次調査において、表記が統一されていない場合があることを留意されたい。

Ⅰ層　にぶい黄橙色粘土　粘性・しまり強　管状斑紋を多量に含む。現代の耕作土または盛土に相当する。

Ⅱ層　灰黄褐色～褐灰色粘土　粘性・しまり強　管状斑紋を多量に含む。近・現代の耕作土であり、他の層位に比べて比較的厚く堆積している。そのため、同一層位内において色調が漸移的に変化する状況が認められた。細分化も可能であったが、遺構や遺物との関係性に乏しかったため、一括しておく。微高地上においては、下面が遺物包含層であるⅦ層と接続しているためか、古代以降の遺物が少量混ざる。

Ⅲ層　黒色粘土　粘性・しまり強　微細な炭化物が多量に混ざる。SX 1内でのみ検出された層位である。

Ⅲｂ層　黒色粘土　粘性・しまりやや強　青灰色粘土ブロックが混ざる不連続層で、未分解植物が多量に混ざる。SX 1内でのみ検出された。

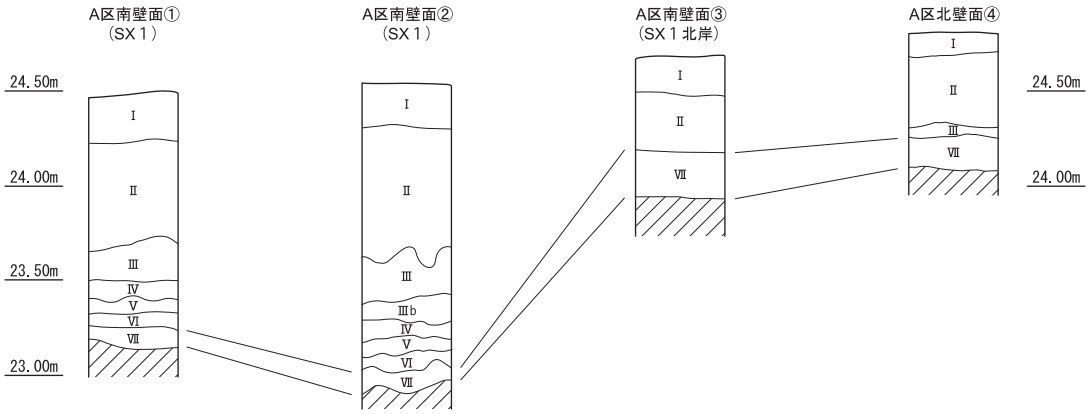
Ⅳ層　明青灰色粘土　粘性・しまり強　SX 1内でのみ検出された層位である。

Ⅴ層　黒色粘土　粘性・しまり強　未分解植物が少量混ざる。SX 1内でのみ検出された。

Ⅵ層　明青灰色粘土　粘性・しまり強　Ⅴ層同様、未分解植物が少量混ざる。SX 1内でのみ検出された。

Ⅶ層　黒～暗灰色粘土　粘性・しまり強　微高地上およびSX 1内で検出された。古代を主体とする遺物が出土している遺物包含層である。前述の通り、試掘調査時のⅣ層に相当し、遺構覆土に同層相当層が堆積していることが多い。Ⅷ層との境界に灰色を呈する漸移層が識別可能であった地点もある。検出遺構の中でも比較的古相段階に帰属するものは、この漸移層を覆土としている場合がある。

Ⅷ層（地山）　明青灰～明褐色シルト　粘性弱　しまり強　砂質傾向が強く、地点によっては砂層と相違なくしまりの弱い場所も認められた。本遺跡における遺構検出面である。壁面の観察から、古代の遺構はⅦ層中より掘り込まれていたと考えられるが、遺構プランを識別できたのはⅧ層上面であった。



第４図　土層柱状図（1：40）

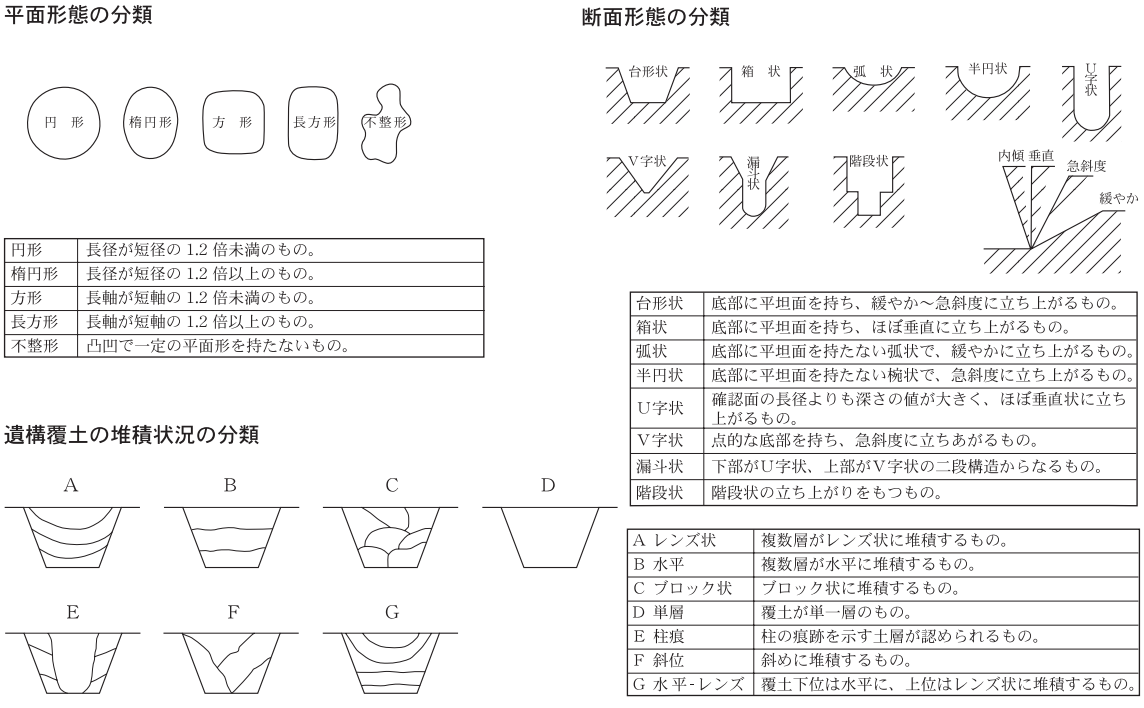
第Ⅳ章　遺　　構

第１節　遺構の概要

本調査では掘立柱建物 14 棟、竪穴建物 14 棟の他、土器埋納遺構･土器溜まり･埋葬関連遺構･土坑･井戸･溝・畝状小溝群・柵列・ピットなどを検出した。遺構の多くは調査区のほぼ中央を北西－南東方向に延びる馬の背状の微高地上に展開している。調査区の南西部は谷地形 SX 1 が広がっており、低地における遺構密度は希薄である。このため、北側低地で検出された SB317 や SK260・SK280 等、南側低地の SX 1 斜面で検出された SE677 は例外的といえる。また、微高地を分断するように溝 SD 3 ・ 7 ・480・481 が伸びており、集落を区画する目的で掘削された溝であると考えられる。出土遺物から、集落は 9 世紀後半に竪穴建物を中心とした居住域が形成され、10 世紀第２四半期頃には廃絶したと考えられる。

第２節　遺構の分類と記述

遺構名称にはアルファベットによる略号を用い、遺構種別に、掘立柱建物（SB)、竪穴建物（SI)、埋葬関連遺構・土坑（SK)、井戸（SE)、溝（SD)、柵列（SA)、ピット（P)、性格不明・自然地形（SX）とした。また、土器埋納遺構・土器溜まりに関しては基本的に SK を用いたが、調査時に用いた P または SX を付したまま記述した遺構もある。この他、畝状小溝群は基本的に SD としたが、溝群６に関しては調査時に用いた SX ４として記述した箇所がある。性格不明遺構および自然地形と考えられるものは SX とし、SX １や風倒木痕も含めて記述した。遺構の平面形や断面形の分類及び覆土の堆積状況の分類に関しては、『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 93 集　和泉Ａ遺跡』［荒川・加藤 1999］、『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 133 集　青田遺跡』［荒川ほか 2004］を参考とした（第５図)。



円形	長径が短径の 1.2 倍未満のもの。
楕円形	長径が短径の 1.2 倍以上のもの。
方形	長軸が短軸の 1.2 倍未満のもの。
長方形	長軸が短軸の 1.2 倍以上のもの。
不整形	凸凹で一定の平面形を持たないもの。

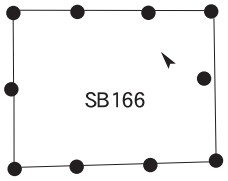
台形状	底部に平坦面を持ち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの。
箱状	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
弧状	底部に平坦面を持たない弧状で、緩やかに立ち上がるもの。
半円状	底部に平坦面を持たない椀状で、急斜度に立ち上がるもの。
U字状	確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直状に立ち上がるもの。
V字状	点的な底部を持ち、急斜度に立ちあがるもの。
漏斗状	下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。
階段状	階段状の立ち上がりをもつもの。

A レンズ状	複数層がレンズ状に堆積するもの。
B 水平	複数層が水平に堆積するもの。
C ブロック状	ブロック状に堆積するもの。
D 単層	覆土が単一層のもの。
E 柱痕	柱の痕跡を示す土層が認められるもの。
F 斜位	斜めに堆積するもの。
G 水平-レンズ	覆土下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。

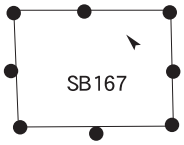
第５図　遺構の形状・覆土の堆積状況の分類（荒川・加藤 1999・荒川ほか 2004 を転載・一部改変）

第３節　各説

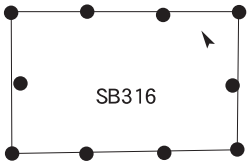
掘立柱建物



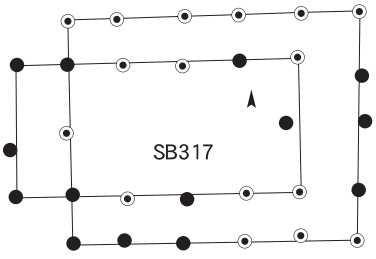
SB166（図版 10）　14K・15J・15K グリッドに位置する。調査区の南東側で、SX １の北肩付近にあたる。南東隅で SB167 と重複するが直接の切り合いはなく前後関係は不明である。また、建物南東辺の中央付近では SK76 および P143 が建物プランと重複する位置に検出されている。２×３間で平面長方形の側柱建物である。桁行 6.7 m、梁間 5.2 m、床面積は 34.8㎡を測る。長軸はＮ－ 52°－Ｗを向き、おおむね SB167・SB535 と主軸方位が一致する。柱穴は平面形が円形を基調とし、長軸が 0.35 m～ 0.6 mを測る。断面形はＵ字状及び柱痕部が一段下がった階段状を呈する。深さは 0.21 m～ 0.4 mを測る。P10 を除く９基の柱穴で柱痕状の覆土の堆積が認められた。覆土は黄灰色及び褐灰色を基調とし、地山の色調と類似している。柱間距離は、桁行方向ではＰ２･Ｐ３間及びＰ７･Ｐ８間が長く 2.4 m～ 2.5 m、その他は 2.1 m前後を測る。梁間方向では 2.6 m前後で一定する。遺物は柱穴より土師器の食膳具･煮沸具、須恵器食膳具が少量出土した。時期は、出土遺物から９世紀後半から末頃と考えられる。



SB167（図版 11）　15・16K グリッドに位置する。調査区の南東側で、SX １の北肩付近にあたる。北西隅で SB166 と重複するが直接の切り合いはなく前後関係は不明である。２×２間で平面長方形を呈する側柱建物である。両梁間の中央の柱が建物外側へとわずかに突出し、独立棟柱建物の形式に類似する。桁行 5.1 m、梁間 3.8 m、床面積は 19.4㎡を測る。主軸方位はＮ－ 50°－Ｗを向き、概ね SB166 及び SB535 と一致する。柱穴は平面形が円形を基調とし、長軸は 0.3 m～ 0.66 mを測る。断面形は台形・箱形・弧状・Ｕ字状と一定しない。深さは 0.13 m～ 0.28 mを測る。Ｐ１を除く７基の柱穴で柱痕状の堆積が認められた。覆土は黄灰色及び褐灰色を基調とし、地山の色調と類似する。柱間距離は、桁行方向ではＰ６・Ｐ７間が最も長く 2.7 mを測り、その他はおおよそ 2.5 m前後である。梁間方向は 1.9 m前後で一定する。遺物は柱穴より土師器の食膳具及び須恵器食膳具が少量出土した。時期は、出土遺物から９世紀後半から末頃と考えられる。

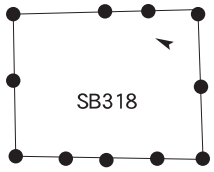


SB316（図版 12）　11・12F グリッドに位置する。調査区の西側で、SX １の北肩付近にあたる。他の遺構との切り合いは認められなかった。２×３間で平面長方形を呈する側柱建物である。梁間中央の柱穴は建物内側に寄っている。桁行 7.5 m､梁間 4.62 m､床面積は 34.7㎡を測る。主軸方位はＮ－ 58°－Ｗを向き、SX １の岸際に沿うように建てられている。また、SB608 と概ね一致する。柱穴は円形を基調とし、長軸は 0.29 m～ 0.42 mを測る。断面形は半円またはＵ字状､階段状を呈する。深さは 0.16 m～ 0.42 mを測る。Ｐ２・３・５では柱痕状の堆積が認められた。覆土は灰色及び褐灰色を基調とし、検出された遺構の中では色調が比較的暗い。柱間距離は、桁行方向で 2.4 m～ 2.6 mを測る。梁間方向は概ね 2.3 m前後である。遺物は柱穴より土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。時期は、出土遺物及び覆土の色調から９世紀末から 10 世紀前半頃と考えられる。

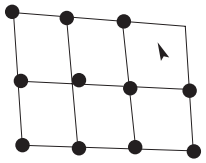


SB317（図版 13 ～ 16）　11J・K・L 及び 12J・K・L グリッドに位置する。北東･南西方向に延びる SD ７と重複しており､SD ７を切る。また、P20 は SK378 を切り、P26 が SK280 及び SK359 と重複する。P28 は SD611 を切る。身舎２×４間で、四方に廂が付く四面廂建物である。北西および南西隅は廂柱穴を欠く。身舎の桁行は 7.6

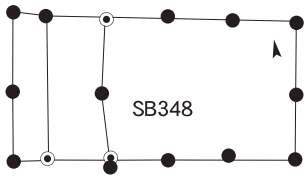
m、梁間 4.4 mを測る。廂を含めた規模は桁行 11.35 m、梁間 7.6 mを測る。床面積は 33.4㎡であり、廂を含めると最大 73.7㎡となる。主軸方位はN－89°－Wを向いており、方角が意識されている可能性が高い。身舎は東の梁間柱穴が内側に寄る。また、廂柱穴は P25・29 を除き概ね身舎と対応する。柱穴は平面形が円形ないしは隅丸方形を呈し、身舎柱穴で長軸 0.53 m～ 0.94 mを測り、廂柱穴で 0.47 ～ 0.89 mを測る。断面形はU字状及び階段状を基調とする。深さは身舎柱穴で 0.34 m～ 0.57 m、廂柱穴で 0.14 m～ 0.6 mを測る。P28 を除き柱痕状の堆積を確認、身舎柱穴で径 0.1 m～ 0.21 m、廂柱穴で 0.12 m～ 0.19 mを測る。P１・２・４・６・８・９・11・13・14・15・19・20・21・22・23・24 の 16 基の柱穴で柱根が出土した。覆土は黒褐色及び黄褐色を基調とし、検出された遺構の中で色調が最も暗い一群に含まれる。柱間距離は、身舎桁行で 1.7 m～ 2.2 m、梁間は 2.1 m～ 2.3 mを測る。廂柱穴は 1.4 m～ 2.9 mで一定しない。また、身舎柱穴列と廂柱穴列の距離は、南北辺が 1.4 m～ 1.7 mで東西辺が 1.6 m～ 2.6 mである。遺物は柱根の他、柱穴より土師器の食膳具・煮炊具及び須恵器食膳具が少量出土した。時期は遺物より９世紀末から 10 世紀初頭を上限とし、周囲の土器埋納遺構 SK280 及び P306 出土遺物との比較から 10 世紀第２四半期より下らないと考えられる。



SB318（図版 17･18）　12･13K 及び 13L グリッドに位置する。SD267･SI268 を切る。周囲は広範囲に渡り後世の撹乱を受けている。２×４間で長方形を呈する側柱建物である。P ７･P ８間は撹乱により柱穴が失われている。桁行 6.16 m、梁間 4.92 m、床面積は 30.3㎡を測る。主軸方位はN－24°－Wを向く。柱穴は平面形が円形ないしは楕円形を基調とし、長軸 0.52 m～ 0.66 mを測る。断面形はU字状・箱形・台形を呈し、深さは 0.22 m～ 0.5 mを測る。P １･P ５及びP ９では柱痕状の堆積が認められた。覆土は褐灰色を基調とする。柱間距離は、桁行方向では 1.3 m～ 1.6 m、梁間方向では 2.2 m～ 2.6 mを測る。遺物は柱穴より土師器の食膳具・煮炊具、P ８出土の墨書土器など、須恵器の食膳具が少量出土した。時期は遺物より９世紀後半から末頃と考えられる。



SB320（図版 18・19）　８・９D グリッドに位置する。P ５・８・９は溝群１の SD332・SD326 を切る。P10・11 は SI664 を切る。２×３間の総柱建物で、桁行方向の柱間が一致せず、平面形が平行四辺形を呈する。主軸方位はN－62°－Wを向く。桁行 5.7 m、梁間 4.34 m、床面積は 24.7㎡を測る。柱穴は平面形が円形を基調とし、長軸 0.36 m～ 0.63 mを測る。断面形は階段状またはU字状を基調し、深さは 0.07 m～ 0.43 mを測る。束柱はP ５･８共に深さが 0.1 m前後であり、側柱に比べて浅く掘り込まれている。P １・２・３・４・６・７・９・10・11 では柱痕状の堆積が認められた。P10 は柱痕が北西寄りに傾斜している。覆土は灰色を基調とし、検出遺構の中では比較的色調が暗い。柱間距離は、桁行方向では 1.8 m～ 1.95 m、梁間方向では２m～ 2.3 mを測る。遺物は柱穴より土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器及び須恵器の食膳具が少量出土した。時期は９世紀末を上限とし、10 世紀第２四半期より下らないと考えられる。



SB348（図版 20・21）　９・10D、９・10E グリッドに位置する。北西隅では P13･15 が SI664 を切り、東辺は P12 が SK368 を切る。南辺ではP ２･３が SD347 を切っている他、溝群２と一部重複、P ７およびP ９がこれを切る。梁間２間、桁行方向に５間の柱穴列が巡る側柱建物だが、西辺の P12・14・15 は桁行方向の柱間距離が他の柱穴列に比べて短く、廂ないしは目隠し塀等の可能性がある。また、東辺で検出された P10 に対応する棟持柱穴はP ５および P12 であり、P ５を西辺側柱とした身舎

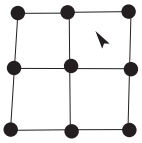
２×３間の平面プランであった可能性も考えられる。また、Ｐ４では、ほぼ同規模の柱穴２基による切り合いが認められるため、同一地点における建て替えが行われた可能性も看過できない。ここでは便宜的に西辺をP11・13とした２×４間の身舎にP12・14・15の柱穴列が付属する平面プランを想定し、記述を行う。身舎の桁行は8.22ｍ、梁間4.72ｍ、床面積38.8㎡を測る。P12を初めとする西辺を含めた最大規模では桁行9.32ｍ、床面積44㎡となる。主軸方位はＮ－80°－Ｗを向く。柱穴は平面形が円形を基調とし、Ｐ３・11では方形が志向されている。長軸は0.32ｍ～0.66ｍを測る。断面形はＵ字状・階段状・方形を呈し、深さは0.3ｍ～0.81ｍを測る。覆土が柱痕状を呈する柱穴が多く、Ｐ４Ａは柱痕が西側に傾斜している。Ｐ４・６・11の３基から柱根が出土した。覆土は黒褐色から褐灰色を基調とし、検出遺構の中では比較的色調が暗い。柱間距離は、身舎の桁行方向では1.89ｍ～2.18ｍ、P11・P14間は1.16ｍ、P13・P15間は1.08ｍを測る。梁間方向では2.13ｍ～2.72ｍを測り、Ｐ５がやや南側に寄る。遺物は柱根の他、柱穴より土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器の食膳具、須恵器の食膳具・貯蔵具が出土した。また、Ｐ３の覆土上面付近から羽口が１点出土している。時期は９世紀末頃を上限として、10世紀第２四半期より下らないと考えられる。

SB504（図版21）　９・10H及び10Gグリッドに位置する。溝群３に隣接し、他の遺構とは切り合い関係を持たない。１×１間の平面形が方形を呈する柱穴列であり、住居でない簡易的な施設と推測される。規模は東西1.4ｍ～1.6ｍ、南北1.4ｍを測り、やや南辺が長い。

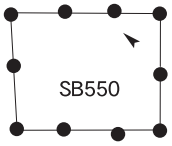
SB504

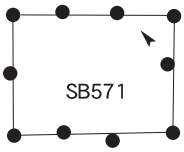
床面積は2.2㎡を測る。主軸方位はＮ－20°－Ｅを向く。柱穴は平面形が円形で、断面形はＵ字状ないしは階段状を呈する。柱穴の径は0.23ｍ～0.28ｍ、深さは0.18ｍ～0.21ｍを測る。P471・472ではそれぞれ径0.12ｍ・0.16ｍの柱痕状の堆積が認められた。覆土は黒褐色を基調とし、検出遺構の中では比較的色調が暗い。遺物は出土しなかった。時期は覆土及び掘方が小さなことから、10世紀以降と考えられる。

SB535（図版22）　15・16Lグリッドに位置する。調査区南東部において、SD３と重複するが、前後関係は判然としない。２×２間の総柱建物であり、平面形は方形を呈する。規模は北東･南西方向で3.9ｍ、北西･南東方向で3.6ｍ～４ｍ、床面積は13.65㎡を測る。主軸方位はＮ－35°－Ｅを向く。柱穴は平面形が円形ないしは楕円形を基調とし、径は0.22ｍ～0.36ｍを測る。断面形は弧状・Ｕ字状・階段状が認められ、深さは0.16ｍ～0.5ｍを測る。Ｐ３からＰ８では柱痕状の堆積が認められた。覆土は黒褐色を基調とする。柱間距離は1.6ｍ～2.1ｍを測る。遺物はＰ９より須恵器食膳具及び土師器の食膳具・煮炊具が微量出土した。時期は遺物及び覆土から９世紀末頃を上限として10世紀第２四半期より下らないと考えられる。

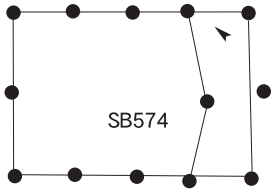

SB535

SB550（図版23）　11・12Gおよび12Hグリッドに位置する。調査区のほぼ中央において、SB574・608に隣接し、SX１の北肩付近にあたる。Ｐ４はSD295を切る。２×３間の側柱建物である。桁行は4.9ｍ、梁間3.85ｍ、床面積は18.9㎡を測る。主軸方位はＮ－40°－Ｗを向き、SB574と類似する。柱穴は円形を基調とし、径は0.22ｍ～0.41ｍを測る。断面形はＵ字状・階段状を呈し、深さは0.16ｍ～0.32ｍを測る。Ｐ１・３・５・６・８・９・10において柱痕状の堆積が認められた。覆土は黒褐色から灰色を基調とする。柱間距離は桁行方向でＰ１・２間が最短となる1.46ｍ、Ｐ６・７間が最長となる1.83ｍを測る。梁間方向はＰ５・６間の1.7ｍが最短、Ｐ４・５間の2.1ｍが最長となる。遺物はＰ４より土師器食膳具が微量出土した。時期は掘方が小さいことから、９世紀末頃を上限として10世紀第２四半期より下らないと考えられる。

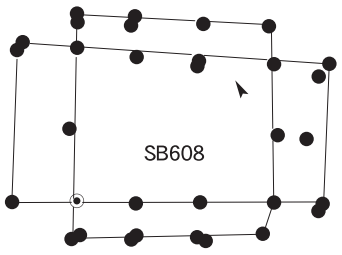

SB550



SB571（図版 24）　12H・I グリッドに位置する。調査区の中央付近で SB574・609 と重複しており、Ｐ１・２・３は SB574 の柱穴を切る。２×３間の平面長方形を呈する側柱建物である。桁行は 5.35 m、梁間は 3.93 m、床面積は 21㎡を測る。主軸方位はＮ－ 48°－Ｗを向く。柱穴は円形を基調とし、径は 0.33 m～ 0.63 mを測る。断面形はＵ字状・階段状を呈し、深さは 0.33 m～ 0.54 mを測る。Ｐ１・３・４・８・９では柱痕状の堆積が認められた。また、Ｐ２の覆土中からは拳大の礫が出土した。柱抜き取り時に投棄されたものと考えられる。覆土は褐灰色から暗灰色を呈し、検出遺構の中では比較的色調が暗い。柱間距離は桁行方向で 1.6 m～ 1.96 mを測る。梁間方向は南東辺の P10 が北側に寄っており不均等で、1.6 m～ 2.3 mを測る。北西辺はおおよそ２m前後で一定する。遺物は柱穴より須恵器食膳具、土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器の食膳具が少量出土した。切り合い関係より、本遺構は SB574・609 に後続し集落内で新相段階に帰属する建物であると考えられる。建物プラン内では SK573 及び SK594 を検出、SK573 は SB609 を切っている。両土坑とも出土遺物より 10 世紀第２四半期頃と考えられ、本遺構も同様の年代に帰属する可能性がある。

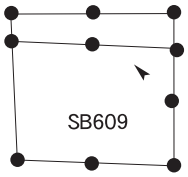


SB574（図版 25）　12H･I 及び 13H グリッドに位置する。SB571 に切られ、南東隅は SB609 と重複する。２×４間の平面長方形を呈する側柱建物である。北西及び南東辺中央のＰ５・12 は建物プランの外側に寄っている。また、建物プラン内の束柱 P10 は当初Ｐ５に対応する棟持柱の可能性が考えられた。やや南西側に寄っている。桁行は 7.8 m、梁間 5.45 m、床面積 42.5㎡を測る。主軸方位はＮ－ 40°－Ｗを測り、隣接する SB550 と主軸方位が一致する。柱穴は平面形が隅丸方形ないしは円形を呈し、長軸 0.49 m～ 0.86 mを測る。柱穴掘方は SB317 に次いで大きい。断面形は台形・半円・弧状と一定ではない。深さは 0.24 m～ 0.48 mを測る。Ｐ１・２・９・10 では柱痕状の堆積が認められた。柱痕径は 0.13 m～ 0.25 mを測る。覆土は黄灰色から灰色を基調とする。柱間距離は桁行方向で 1.7 m～ 2.05 mを測り、梁間方向はＰ４・５間で 2.8 m、Ｐ５・６間で 2.6 mを測る。遺物は柱穴より須恵器の食膳具・貯蔵具、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。Ｐ２からは漆書須恵器無台坏が１点出土している。時期は覆土の色調が地山に近いこと、掘方が大きいことから集落内の古相段階に位置づけられると想定される。出土遺物から９世紀後半から末頃と考えられる。



SB608（図版 26 ～ 28）　10・11G 及び 11H グリッド、調査区中央付近に位置する。溝群３と重複し、Ｐ７・18・19 が SD478 を切り、Ｐ８・P20・P21 が SD487 を切る。P22 は SD475 及び SK512 を切り、埋没後に土器溜まり SK493 が形成される。P23 は SD438 に切られ、P28 は SD522 を切る。本遺構は、身舎２×３間で四方に廂を持つ四面廂建物である。廂柱穴列は身舎の側柱列とほぼ対応しているが、北西及び南東辺の中央は身舎の棟持柱に対応する廂柱穴を持たない。また、南東隅の P12 は身舎側のＰ２より南西側に寄る。四隅の廂柱穴は検出されなかった。北東及び南西辺の廂列、北西隅の P30・31、北東隅の P26・27 は近接した距離に柱穴が２基ずつ検出されており、廂の改修が行われた可能性が考えられる。規模は、身舎の桁行が 6.55 m、梁間 5.08 m、床面積 33.3㎡を測り、廂を含むと桁行 10.3 m、梁間 7.2 m、総面積 66.8㎡となる。主軸方位はＮ－ 58°－Ｗを測り、SB316 と一致する。柱穴は平面形が円形ないしは楕円形を基調とし、径 0.26 m～ 0.64 mを測る。断面形はＵ字状･階段状･方形を呈し、深さは 0.2 m～ 0.59 mを測る。身舎と廂列では柱穴規模に明確な差異は認められない。Ｐ３・４・５・６・７・８・10・12・

13・18・19・20・21・22・23・25・26・27・28・31 では柱痕状の堆積が認められた。また、P 5から柱根が出土した。覆土は黒褐色から褐灰色を基調とし、検出遺構の中で比較的色調が暗い。身舎の柱間距離は桁行方向でP 1 ・ 2間の 1.6 mが最短で、P 9 ・10 間の 2.6 mが最長となる。梁間方向は 2.28 m～ 2.6 mを測る。廂列の柱間距離は桁行方向で 1.96 m～ 2.28 mを測る。また、身舎柱穴列と廂柱穴列の距離は、梁側にあたる北西・南東辺で 1.6 m～ 2.12 m、桁側にあたる北東・南西辺で 1.16 m～ 1.3 mを測る。遺物は柱根の他、須恵器の食膳具、土師器の食膳具･煮炊具、黒色土器の食膳具が少量出土した。P22 からは、SK512 より混入したと考えられる骨片が少量出土している。時期は覆土及び切り合い関係から、 9 世紀末から 10 世紀初頭頃を中心とした年代が考えられる。



SB609 （図版 29） 12H･I、13H･I グリッドに位置する。調査区中央付近において、SB571・574 と重複する。SD8 を切り、SK573・594 に切られる。身舎 2 × 2 間で北東辺に廂が付く建物である。身舎北西辺の側柱は検出できなかった。桁行 5.3 m、梁間 3.9 m、身舎床面積は 20.7㎡を測る。廂を含むと梁間 5.1 mとなり、床面積は最大で 27㎡を測る。主軸方位はN － 46° －Wを測り、SB550 と類似する。柱穴平面形は円形を基調とし、径は 0.3 m～ 0.53 mを測る。断面形は台形･U字状または階段状を呈し、深さは 0.21 m～ 0.43 mを測る。P 2・5・9・10 では柱痕状の堆積が認められた。覆土は褐灰色から黒褐色を基調とし、検出遺構の中で比較的色調が暗い。柱間距離は桁行方向で 2.48 m～ 2.8 mを測る。梁間方向は、P 8 が身舎の中心軸から外れた位置にあるため、1.68 m～ 2.14 mで一定しない。また、P 8 に対応する北西辺中央の柱穴は検出できなかった。北西辺の廂柱穴列と身舎柱穴列の距離は、0.9 m～ 1.2 mである。遺物は須恵器甕・壺の細片及び土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。時期は、切り合い関係から 9 世紀末から 10 世紀初頭頃を中心とした年代が考えられる。

竪穴建物

SI 5 （図版 30） 13・14I グリッドに位置する。P47・58 に切られる。平面形はやや不整な隅丸長方形で、断面は弧状を呈する。主軸方位はN － 30° － E を向く。長軸 2.8 m、短軸 2.25 m、深さは 0.32 mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、黄灰色から褐灰色を基調とする。北東辺には平面形が半円形、深さ 0.05 m程度の浅い落ち込みが検出されており、本遺構に伴う施設であると考えられる。柱穴は検出できなかった。遺物は須恵器の食膳具・甕、土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器の食膳具、管状土錘及び鉄滓が出土した。時期は、出土遺物から 9 世紀末から 10 世紀初頭頃を中心とした年代が考えられる。

SI10（図版 30） 14K・L グリッドに位置する。SK114・SK148・P150 に切られるほか、溝群 5 の SD115 と重複する。平面形はやや不整な隅丸方形で、北東及び南東側に突出する。断面形は台形状を呈する。主軸方位はN － 21° － E を向く。長軸 2.75 m、短軸は 2.37 m、深さは 0.19 mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、褐灰色を基調とする。柱穴は検出できなかった。北東辺の突出部は、覆土下部に炭化物粒及び焼土ブロックが混ざり、カマドであると考えられる。重複関係にある SK148 からも焼土ブロックを検出しており、カマド構築材が周囲に分散した状況が認められる。遺物は須恵器食膳具・甕、土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器が出土した。時期は 9 世紀後半から末頃と考えられる。

SI46（図版 31） 13J グリッドに位置する。SD 7 に隣接し、溝群 4 に切られる。平面形はやや不整な隅丸長方形で、断面形は箱形から台形状を呈する。主軸方位はN － 65° － E を向く。長軸 2.96 m、短軸 2.36 m、深さは 0.22 mを測る。覆土はレンズ状に堆積、灰黄色を基調とする。柱穴は検出できなかった。遺物は須

恵器の食膳具、土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器の食膳具、灰釉陶器壺の細片が出土した。時期は覆土の堆積状況から、９世紀後半から末頃と考えられる。

SI49（図版 31）　13K グリッドに位置する。溝群５に隣接し、SD50 に切られる。平面形は方形で、北東隅付近に煙道と考えられる突出部を検出した。断面形は弧状を呈する。主軸方位はＮ－ 49°－Ｗを向く。長軸 1.93 m、短軸 1.77 m、深さ 0.1 mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、褐灰色を基調とする。柱穴は５基検出した。Ｐ１からＰ４までは方形に並ぶ。平面は円形で、断面は半円形及びＵ字状を呈する。径 0.24 m～ 0.32 m、深さは 0.16 m～ 0.25 mを測る。Ｐ２では柱痕状の堆積が認められた。煙道は長軸 0.49 m、短軸 0.4 m、深さ 0.16 mを測る。覆土には焼土ブロックが混ざる。遺物は須恵器の食膳具、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。時期は９世紀後半から末頃と考えられる。

SI54（図版 32）　14K グリッドに位置する。SK ６・SK48・溝群５の SD111 に切られる。平面形は方形で、南東辺の中央付近が突出する。断面形は弧状ないしは台形状を呈する。主軸方位はＮ－ 49°－Ｗを向き、SI70･268、SB166 と類似する。長軸 3.01 m、短軸 2.64 m、深さは 0.25 mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、褐灰色及び黄灰色を基調とする。色調は地山に近く、検出遺構の中では比較的明るい。南東辺の突出部は一段浅いテラス状で、人頭大の礫が出土した。カマドであった可能性が考えられる。また、床面北側には炭化物粒の広がりを検出した。微量の焼土ブロックを含む。炭化物粒を取り除いた後、床面において４基のピットないしは土坑を検出した。SK602 は平面楕円形、断面は半円形を呈する。長軸 0.72 m、短軸 0.58 m、深さ 0.24 mを測る。覆土はレンズ状に堆積する。P602 から P605 は平面円形、断面は弧状からＵ字状を呈する。長軸 0.37 m～ 0.58 m、深さは P603 及び 605 が 0.11 m、P604 が 0.52 mを測る。床面検出遺構の中から、掘方規模の比較的大きな SK602 及び P604 は、主柱穴として用いられていた可能性が高いと考えられる。遺物は P604 内から土師器煮炊具の細片が１点出土したほか、SI54 覆土中から墨書土器細片を含む須恵器食膳具、土師器食膳具及び煮炊具が少量出土した。時期は９世紀中葉から後半頃と考えられる。

SI70（図版 32）　15K・L グリッドに位置する。SB166・167・535・溝群５と隣接している。切り合い関係はない。平面は不整な隅丸方形で、北東隅は溝状に突出する。断面は不整な弧状を呈する。主軸方位はＮ－ 38°－Ｅを向く。長軸 2.32 m、短軸 2.08 m、深さ 0.12 mを測る。覆土はレンズ状に堆積、黄灰色シルトを基調とする。覆土２層は地山ブロックが多量に混ざり、貼床されていた可能性が考えられる。主柱穴は検出できなかった。遺物は須恵器の食膳具・煮炊具、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。時期は、出土遺物から９世紀末を上限とし、10 世紀第２四半期より下らないと考えられる。

SI130（図版 33）　14M グリッド、調査区の東端部に位置し、一部は調査区外に延びる。SD131 を切る。平面は方形で、断面は弧状を呈する。主軸方位はＮ－ 14°－Ｅを向く。長軸 2.44 m、短軸 1.5 m以上となり、深さは 0.1 mを測る。覆土はレンズ状堆積で、褐灰色を基調とする。主柱穴は検出できなかった。遺物は須恵器食膳具、土師器食膳具・煮炊具が少量出土した。覆土中より完形の土師器小皿が出土しており、本遺構の帰属年代は 11 世紀後半から 12 世紀初頭頃に下る可能性がある。

SI207（図版 33）　13J グリッドに位置する。南西側に SI46 が隣接し、溝群４に切られている。東辺は SD ７に切られる。試掘調査 169 Ｔは本遺構と SD ７の重複地点に該当する。平面は隅丸方形、断面は台形状を呈する。主軸方位はＮ－ 72°－Ｅを向く。長軸 3.03m、短軸 2.55m、深さ 0.21m を測る。覆土はレンズ状に堆積、黄灰色を基調とする。主柱穴は検出できなかった。遺物は出土しなかった。時期は、切り合いから集落内の古相段階に帰属すると考えられる。９世紀後半か。

SI211（図版 33）　13I グリッドに位置する。周囲には SI ５・SI212 が存在し、南東辺が溝群４に切られて

いる。平面は隅丸方形、断面は台形状を呈する。長軸はＮ－ 48°－Ｗを向く。長軸 2.82 m、短軸 2.5 m、深さ 0.1 mを測る。覆土は黄灰色シルトの単層である。主柱穴は検出できなかった。北西辺中央付近に径 0.5 mの円形ピット P628 を検出した。焼土ブロックは認められなかったが、カマド等の建物内施設か。遺物は須恵器食膳具･煮炊具、土師器の食膳具･煮炊具、黒色土器の食膳具が少量出土した。時期は SI207 同様、９世紀後半と考えられる。

SI212（図版 34）　13I グリッドに位置する。周囲には溝群４が広がり、北東辺を SD213 に切られる。また、北西辺は SD ８に切られている。平面は不整な隅丸長方形、断面は台形状を呈する。主軸方位はＮ－ 53°－Ｗを向く。長軸は 3.66 m、短軸 2.53 m、深さ 0.1 mを測る。西隅が張り出し、平面楕円形のカマドを有する。長軸 0.65 mで、深さは 0.06 mを測る。覆土は灰黄色シルトの単層で、カマド覆土によって切られる。このため、１層は貼床である可能性が考えられる。カマド覆土２層は焼土ブロックが多量に混ざる。建物内において P255・SD254 等の遺構を検出しているが、覆土１層を切っており、建物に伴う可能性については判然としない。遺物は須恵器甕、土師器食膳具・煮炊具が少量出土した。また、SD254 から土師器煮炊具が出土した。この他、カマド底面より帯金具が１点出土した。時期は９世紀後半頃と考えられる。

SI268（図版 34）　13K･L グリッドに位置する。SK205 及び SB318 に切られ、北東辺は撹乱を受けている。平面は隅丸方形、断面は台形状を呈する。主軸方位はＮ－ 51°－Ｗを向く。長軸 2.64 m、短軸 2.4 m以上、深さ 0.2 m～ 0.3 mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、褐灰色を基調とする。覆土中位にあたる２層は炭化物ブロックが多量に混ざる。また、床面中央付近にて焼土ブロック・炭化物粒の広がりが検出された。覆土２層中の炭化物粒の存在も含め焼失住居の可能性も考えられたが、焼土ブロックの検出範囲が建物中央付近にまとまることから､その他の燃焼行為が行われた可能性も考慮すべきと考えられる。床面からピットを４基検出した。P314 は最も掘方が整っており、長軸 0.48 m、床面からの深さ 0.26 mを測る。覆土はレンズ状に堆積しており、褐灰色を基調とする。遺物は須恵器の食膳具・甕類が少量、土師器の食膳具・煮炊具が出土した。また、P314 より土師器の食膳具細片が１点出土した。時期は SK205 に先行することから、９世紀第４四半期を下限として考えられる。

SI429（図版 35）　11H・I グリッドに位置する。溝群３の東端部にあたり、SD452・468・524 に切られ、SD440 を切る。平面は北西隅が撹乱により判然としないが、方形であったと考えられる。断面は弧状を呈する。主軸方位はＮ－ 37°－Ｗを向く。長軸 2.85 m、短軸 2.74 m、深さは 0.07 mを測る。覆土はレンズ状に堆積、黒褐色を基調とする。検出遺構の中で、色調は比較的暗い。床面において P528・543・544・545 を検出したが、SI429 覆土を切る様子が認められた。このため、建物に伴うピットであるかは判然としない。遺物は須恵器食膳具・壺類がわずか出土した他、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。また、黒色土器有台椀が１点出土した。時期は９世紀末から 10 世紀初頭頃を中心とした年代が考えられる。

SI465（図版 35）　10H、10I グリッドに位置する。調査区の北端部にあたり、本遺構の大半は調査区外に延びている。溝群３、SD460・464 に切られている。平面は方形と考えられるが、検出時点では軸線がやや北東に寄った平行四辺形が想定される形状を呈していた。断面は弧状で床面は平坦である。主軸方位はＮ－ 63°－Ｗを向く。東西辺 3.66 mで、南北方向は残存長 1.27 m、深さは 0.23 mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、黒褐色から褐灰色を基調とする。柱穴は検出できなかった。遺物は覆土１層より土師器・須恵器の細片が微量出土した。時期は覆土の堆積状況から SI429 と同様、９世紀末から 10 世紀初頭頃を中心とした年代が考えられる。

SI664（図版 36）　９D・E グリッドに位置する。SB320・348・溝群２に切られている。平面形は長方形、

断面は弧状を呈する。主軸方位はＮ－ 56°－Ｅを向き、SD325 とほぼ直交する。長軸 5.06 ｍ、短軸 3.82 ｍ、深さは 0.25 ｍを測る。覆土はレンズ状に堆積し、褐灰色から灰白色を基調とする。覆土は地山に酷似している。当初は検出できなかったが、覆土が周囲の地山と異なってわずかに粘土質であり、検出に至った。カマドは南東辺の壁面付近で検出、焼土層及び炭化物粒の広がりが認められた。焼土層は径 1.14 ｍを測り、炭化物粒の広がりは長軸 1.6 ｍ、短軸 0.96 ｍに渡る。床面においては、Ｐ１からＰ４まで４基のピットを検出した。Ｐ１・２は平面が楕円形、断面は台形状を呈する。長軸 0.75 ｍ～ 0.85 ｍ、深さはＰ１が 0.16 ｍ、Ｐ２が 0.23 ｍであり、ほぼ同規模と言える。Ｐ３は平面が隅丸方形、断面は台形状を呈する。SD325 により北東側が破壊されている。一辺 0.4 ｍ前後で、深さは 0.13 ｍを測る。Ｐ４は平面が円形、断面が弧状を呈する。径は 0.62 ｍ、深さは 0.16 ｍを測る。覆土は地山と酷似する。遺物は須恵器食膳具、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。また、Ｐ１底面より土師器煮炊具の細片が出土した。時期は、切り合い関係から９世紀後半頃と考えられる。

埋納遺構・土器溜まり

Ｐ２（図版 37）　10F22 グリッドに位置する。SD374・416 の上に位置しており、溝群２よりも新しい。平面は円形で、断面は弧状である。直径 0.48 ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。覆土は、２層に分けることができ、１層は灰色シルト層で、２層は地山由来の灰黄層シルトである。１層に完形の土師器無台椀が正位で２個体（62・64）並んで出土しており、土器埋納遺構と考えられる。遺物は底面から浮いているが、下層は砂質が強いシルト層であり、埋没が早いと判断できることから埋納時期と遺構構築時期の時間的な差はほとんどないと判断される。時期は、出土遺物から 10 世紀前半頃と考えられる。

SX32（図版 37）　9 E19・24 グリッドに位置する。SD44 の直上に位置し、P43 に切られる。約 30㎝四方の範囲に土器が集中しており、出土状況は、土師器の無台椀が正位で、重なった状態で出土している。明確な掘り込みがないため、地面に直接置いただけの可能性が高い。本遺構を切っている P43 から出土している遺物は、本来は本遺構に属するものと考えられる。出土遺物は、土師器無台椀が出土している。また、P43 からは、内面黒色処理の有台椀も出土している。時期は、10 世紀前半と考えられる。

SK280（図版 37）　11K25、11L21 グリッドに位置する。SB317 － P26 を切り、本遺構のほうが新しい。検出当初は、隣接する SK359 と一体の遺構と捉えていたが、調査の過程で２つに分けることにした。本遺構の平面形は円形で、断面は弧状を呈する。規模は、直径 0.77 ｍ、深さ 0.11 ｍを測る。覆土は、黒褐色土が主体となり、地山土が混ざる。出土遺物は、本遺構検出面より上から土師器無台椀を中心にまとまって出土している。SK359 の上面にも及ぶが、主体が本遺構であるため本遺構の中に捉えることにした。しかし、そのほとんどが、遺構上面からの出土であるため、本遺構及び SK359 がほぼ埋まった状態で、廃棄あるいは置かれたものと考えられる。土師器の無台椀の４個体が正位で置かれたような状況もうかがえ、SB317 に係わる埋納遺構と見ることもできる。出土遺物は、土師器無台椀がほとんどで、わずかに土師器煮炊具と内面黒色土器の無台椀が出土している。時期は、10 世紀前半でも新しい時期と考えられる。

P306（図版 37）　11J14･15 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面は弧状を呈する。規模は、直径 0.54 ｍ、深さ 0.15 ｍを測り、覆土はレンズ状に堆積し大きく２層に分けることができる。遺物は、１層上面に土師器無台椀が正位で重なるように置かれている状態で出土した。出土状況から、土器埋納遺構と考えられ、遺構の位置から判断して SB317 に伴うものと考えられる。時期は、10 世紀前半と考えられる。

SK492（図版 38）　11G15 グリッドに位置する。SD439 を切っている。平面形は楕円形であり、断面は弧

状である。規模は、長軸 0.90 m、短軸 0.63 m、深さ 0.25 mを測り、覆土は 2 層に分けることができる。底面は一定ではなく、やや雑な印象を受ける。遺物は、土師器無台椀が 4 個体正位で出土しており、すべて 2 層直上に位置している。底面から浮いている状況は他の埋納遺構と状況が一致する。出土状況から土器埋納遺構と考えられる。時期は、 9 世紀末から 10 世紀初頭と考えられる。SK492 は SB608 内に位置しており、土坑内に土器が完全に埋められている状況から、SB608 の構築時の地鎮のための埋納であると考えられる。

SK493（図版 38） 11G 5・10 グリッドに位置する。本遺構は、SB609 － P22 の上面にあり、完全にこれを覆う。長軸 0.70 m、短軸 0.50 mほどの範囲に遺物がまとまって出土した。出土遺物は、須恵器甕、土師器無台椀、内面黒色土器無台椀などが出土した。遺物は破片資料が多く、意図的に置かれたような状況が見られないことから、廃棄された土器であると考えられる。時期は、10 世紀前半と考えられる。なお、480 は出土位置の主体が包含層だったため、遺物図版は遺構外の場所に掲載した。

SK573（図版 38） 12H15 グリッドに位置する。SB609 － P 9 を切り、SB517 の中に位置している。平面形は楕円形で、断面は台形状である。規模は、長軸 0.74 m、短軸 0.46 m、深さ 0.12 mを測る。覆土は、灰色シルトと黄灰色シルトの 2 層に分けることができる。出土遺物は、土師器無台椀・小甕、内面黒色土器無台椀が出土している。土師器無台椀が土坑の底面ではなくやや浮いた位置で正位や逆位に置かれ、それらが完形や残りのいい状態で出土しており、他の埋納遺構と同じ状況である。本遺構の位置からすれば、SB571 に係わる埋納遺構と考えたい。時期は、出土遺物から 10 世紀第 2 四半期頃と考えられる。

SK594（SX266）（図版 38） 12I16 グリッドに位置する。SB609 － P10 を切り、SB571 の中に位置している。SX266 は SK594 の上面の土器溜まりである。平面形は楕円形で、断面は階段状である。規模は、長軸 0.76 m、短軸 0.49 m、深さ 0.21 mである。覆土は、5 層に分けることができるが、4 層に焼土が溜まっており、何らかの燃焼行為があったものと考えられる。出土遺物は、須恵器食膳具、土師器食膳具・広口壺、内面黒色土器食膳具が出土している。これらは本遺構上面から完全に浮いた状態で出土している。土師器無台椀の中には正位に置かれたようなものも見られるが、全体的に乱雑な状態で、貯蔵具が含まれる器種構成から、埋納遺構というよりは、SK594 の廃絶後に SX266 部分の遺物が廃棄されたものと考えられる。時期は、10 世紀第 2 四半期頃が考えられる。

埋葬関連遺構

SK146（図版 39） 14L 8・9 グリッドに位置する。北西側を SK106 に切られている。検出当初は、SK106 と暗渠が通されていたことによって、木棺墓とは認識できなかった。平面形は、隅丸長方形で長軸 1.76 m、短軸 0.92 m、深さ 0.44 mを測る。断面は箱状になり、 9 層は地山由来の粘性の強い黄灰色シルトを多く含み、構築時の裏込土と考えられ、掘方の内側を 10㎝程度の幅で巡っている。 8 層は、炭化物を多く含む層で、整地土であろうか。 4 ～ 7 層はレンズ状に堆積していることから、木棺が腐食したことによる崩落土と推定される。なお、 5 層には焼土が多く含まれており、木棺を埋めた後の儀式であろうか、墓の上で火を焚く行為が行われていた可能性がある。人骨や木棺の部材などの出土はなかった。出土遺物は、須恵器食膳具・貯蔵具、土師器食膳具・煮炊具などが出土したが、埋葬関連遺構内に据えられたと認識できる状況での遺物はなく、木棺の上に置かれていたものと推測される。時期は、出土遺物から 9 世紀中葉から後半と考えられる。

SK205（図版 39） 13K25・14K5 グリッドに位置する。SI268 と重複し、それを切っている。SK205 から

は骨や木棺材などは出土していないが、土坑の形状や土層の堆積状況及び遺物の出土状況から、木棺墓と判断した。平面形は隅丸長方形で、長軸 2.46 m、短軸 1.02 m、深さ 0.3 mを測る。覆土は、水平に堆積する２～５層とそれを貫くように堆積している６層と両壁側に堆積する７～ 10 層に大きく分けることができる。６層は縦長に褐灰色粘土が堆積し、さらに地山を掘りこみ、その掘り込みは土坑の底面の四周に巡っている。これは、木棺の側板であった打ち込み板の痕跡と考えられる。木棺の規模は、長軸 1.79 m、短軸 0.44 mである。木棺内の覆土と見られる２～５層は、水平に堆積している。側板は立ったまま土質化しており、腐朽による崩落の痕跡は確認できない。また、棺蓋が存在したかどうかは覆土の堆積状況から確認できなかった。棺外とみられる７～ 10 層は裏込め土と考えられる。１～５層については、リン酸カルシウム分析を行ったが顕著なリン酸及びカルシウムの富化は認められなかった。出土遺物は、棺内にはなく、棺外から土師器無台椀１点が正位で出土している。埋葬時に供献されたものと考えられる。時期は、出土遺物から 10 世紀前半と考えられる。

SK246（図版 40）　13H １・６グリッドに位置する。平面形は、隅丸長方形で断面はやや不整な台形状を呈する。規模は、長軸 2.01 m、短軸 1.18 m、深さ 0.24 mを測る。覆土は、２層に分かれるが、地山由来の黄灰色シルトを主体としている。出土遺物は、土師器の細片が出土しているのみで、図化できる資料は出土していない。骨などの出土はないが、土坑の規模や形状、遺物が少ない状況などから、埋葬関連遺構である可能性がある。時期は９世紀末から 10 世紀前半頃であろうか。

SK260（図版 40）　12L20・12M16 グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長軸 1.11 m、短軸は残存している部分で 1.00 m、深さ 0.46 mを測る。断面形は、半円状を呈する。覆土の堆積状況は、レンズ状に堆積し、大きく分けて黒色シルトを主体とし炭化物を含む上層（１～ 10 層）と灰色～オリーブ灰色シルトを主体とする下層（11 ～ 13 層）に分けられる。上層は灰と見られる灰白色土と焼土ブロックを含み、特に３層は焼土が主体となっている。遺物は、土師器の無台椀・長甕、内面黒色土器の無台椀、被熱した礫などが出土している。遺物はすべて上層から出土し、下層からの出土はなかった。出土した土師器無台椀を見てみると、煤が付着したものがいくつか認められる。これらの覆土の堆積状況及び遺物の出土状況から、別な場所で火焚きが行われ、その際に発生した灰や炭、焼土を埋めたものと考えられる。また、煤が付着している土師器無台椀や被熱した礫などはその時に使われていたもので、一緒に廃棄されたものと考えられる。また、覆土のリン酸カルシウム分析を行ったところリン酸及びカルシウムの富化が認められた。覆土の状況及び出土遺物や土壌分析の結果から、火葬の際に発生した灰や焼土などを埋める「火葬灰埋納土坑」［小林 1992］と考えられる。遺構の年代は、出土遺物から９世紀末から 10 世紀初頭と考えられる。

SK482（図版 40）　10G ９・14 グリッドに位置する。SD441・484 を切っている。平面形は、楕円形で断面は弧状を呈する。規模は、長軸 1.73 m、短軸 0.75 m、深さ 0.14 mを測る。覆土は、黒褐色シルト質土を主体としている。出土遺物は、土坑の南東隅から土師器と内面黒色土器の無台椀が出土している。前者が正位で、後者が逆位で据えられた状態で出土し、埋葬時に供献されたものと考えられる。土坑の形状や出土遺物の出土状況から埋葬関連遺構と判断した。また、土層堆積からは木棺の痕跡は確認できなかったため、土坑墓と考えられる。時期は、出土遺物から９世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

SK512（図版 40）　11G5 に位置する。溝群３に切られており、また南東端は SB608 － P22 に切られている。平面形は長方形で、断面は弧状である。規模は、長軸 1.57 m、短軸 1.1 m、深さ 0.27 mを測る。覆土は、全体に炭化物を含んでいるが、特に４層は多量に含まれている。また、２・４～６層で微細な焼骨片を含んでいた。そのため、覆土を水洗いして、骨を抽出する作業を行った。その結果、多くは粉状の骨片であっ

たが、数点小さな骨片と歯を抽出することができたため、骨同定の分析を実施したところ、人骨であることが確認できた。従って、多量に含まれる炭化物は、遺体を焼いた時に発生したものと考えられる。しかし、大きな骨は発見されていないことや炭化物とシルトブロックが混ざって堆積し、火を焚いた痕跡が見られないことから、遺体を焼き拾骨した後に残った炭や骨が入れられたものと考えられる。従って、SK260 と同様に「火葬灰埋納土坑」と考えられる。出土遺物は、図化できない微細な土師器と炭化米が少量出土している。時期は、切り合い関係から 9 世紀中葉から後半頃と考えられる。

土坑

SK 6（図版 41）　14K 6 ・ 7 ・12 グリッドに位置する。当初は 1 基との認識で調査を進めたが、 2 基の方形土坑が切り合っていることが判明し、A、Bと付けて区分した。Aの規模は、長軸 1.56 m、短軸 1.10 m、深さ 0.12 mを測る。 Bの規模は、長軸 1.38 m、短軸 0.94 m、深さ 0.07 mを測り、ややBの方が規模が小さい。両遺構とも断面は弧状を呈し、黄灰色シルトを主体とする。出土遺物は両遺構で、須恵器食膳具、土師器食膳具・煮炊具、内面黒色土器食膳具が出土している。時期は、やや古い遺物も混ざっているが、 9 世紀末から 10 世紀初頭を主体としているため、その頃に位置づけられる。切り合いは、 Bが古くAが新しいが、遺物から見ればほぼ時期的な差はないと思われる。SK 6 は、SK48、SI54、P53、と切り合っている。切り合いから判断すれば、SI54 が最も古く、次が SK 6 B、最も新しいのが SK 6 A、SK48、P53 である。SK 6 A、SK48、P53 の中での新旧関係は不明である。出土遺物からも SI54 は 9 世紀中葉から後半に位置づけられ、SK 6 が新しいことに矛盾しない。

SK42（図版 41）　10D 5 ・10 グリッドに位置する。SB348 及び SK342 に隣接している。土坑の平面形は楕円形で、断面形は台形である。規模は、長軸 0.76 m、短軸 0.72 m、深さ 0.28 mを測る。本遺構からは、須恵器の大甕が潰れた状態で出土している。覆土の 3 層は地山ブロックを多く含み、裏込め土の可能性があり、大甕が据えられていたものと推定される。出土遺物は、大甕のほか土師器の無台椀、鉢が出土している。時期は 10 世紀前半頃が考えられる。

大甕がどのような用途で使われていたのか推定するため、大甕の内部に当たるであろう部分の土壌について花粉分析を行った。詳細は、「第Ⅵ章第 1 節」に掲載しているとおりであるが、良好な花粉化石が残っておらず、甕の内容物の推定までに至らなかった。

SK48（図版 41）　14K 7 グリッドに位置する。SI54、SK 6 B と重複し、これらを切っており、SI54、SK 6 B、SK48 の順に新しくなる。平面形は楕円形で、断面は不整な弧状を呈する。規模は、長軸 1.12 m、短軸 0.82 m、深さ 0.09 mを測る。出土遺物は、須恵器無台坏、土師器無台椀・小甕が出土している。時期は、 9 世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

SK151（図版 41）　14K23 グリッドに位置する。SB166 に隣接し、SD69 に切られる。平面形は不整形で、断面形は不整な弧状を呈する。規模は、長軸 0.99 m、短軸 0.87 m、深さ 0.30 mである。出土遺物は、須恵器無台坏が出土している。時期は、 9 世紀後半と考えられる。

SK210（図版 41）　13I20 グリッドに位置する。SI46 に隣接し、SD38 に切られる。平面形は長方形で、断面は弧状を呈する。規模は、長軸 1.12 m、短軸 0.7 m、深さ 0.16 mを測る。出土遺物は、土師器鍋と須恵器横瓶が出土している。時期は、9 世紀後半と考えられる。

SK216（図版 42）　13I16 グリッドに位置する。SI 5、SI211 に隣接する。平面形はやや不整な楕円形、断面はやや不整な弧状である。規模は、長軸 0.98 m、短軸 0.77 m、深さ 0.25 mを測る。出土遺物は、土師

器無台椀・鍋、内面黒色土器の無台椀が出土している。鍋（158）は、破片資料であるが、口縁部に布状の繊維が付着している。時期は、９世紀末から 10 世紀初頭頃が考えられる。

SK259（図版 42）　14L ２・７グリッドに位置する。SI10 に近接し、SK148 と重複しこれを切る。平面形は不整形で、断面は台形である。規模は、長軸 1.62 m、短軸 0.74 m、深さ 0.21 mを測る。出土遺物は、須恵器無台坏、土師器無台椀・甕である。時期は、出土遺物から９世紀後半から末頃と考えられる。

SK342・SD347（図版 43）　10E11・12 グリッドに位置する。SK42、SB348 に隣接する。平面形は隅丸方形に近い円形で、断面は浅い土坑（１～６層・上層）の中央やや東寄りに井戸状の土坑（７～ 12 層・下層）が掘り込まれ、階段状を呈する。規模は、長軸 1.88 m、短軸 1.56 m、深さ 0.17 mの土坑で、中央の土坑は長軸 0.76 m、短軸 0.66 m、深さ 0.50 mを測る。覆土は、全体的に炭を多量に含むシルトであるが、灰を多量に含む層（２・８・９層）と含まない層が互層となっている。また、中央の土坑の西側に長軸 0.34 m、短軸 0.27 m、深さ 0.18 mの小ピットがある。小ピットから南西側の上層の土坑の底面に焼土が広がり、この小ピット内の覆土は、焼土層と炭層の互層になっており、２・５・８層に焼土が認められ、複数回の燃焼行為があったものと考えられる。しかし、最後の燃焼行為は下層が完全に埋没してからであり、下層の灰を含む層と小ピットでの燃焼行為が必ずしも対応するわけではない。そのため、上層と下層が本来は別な目的を持った遺構である可能性もあろう。出土遺物は、須恵器食膳具・貯蔵具、土師器食膳具・煮炊具、土錘、粘土塊、炭化米、骨粉などが出土している。多くが微細な破片で、実測に耐えるものは少ない。また、小ピット内からは、土師器無台椀が多量に出土したが、土器の被熱の痕跡は明瞭ではない。時期は、９世紀末から 10 世紀前半頃と考えられる。

SD347 は、SK342 を囲むと推測される周溝で、SD362 を切る。SB348 と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は長楕円形になり、断面は台形あるいは階段状になる。規模は、溝の外側で長径 9.28 m、短径 4.12 m、幅 0.32 ～ 0.87 m、深さ 0.11 ～ 0.26 mを測る。覆土は、２層に分層でき、下層は地山由来の黄褐色シルト層、上層は未分解植物を含む黒褐色シルト層である。上・下層ともに地山由来のシルトや黒褐色シルトをブロック状に混ざり、安定した堆積状況を示さない。出土遺物は、須恵器、土師器食膳具・煮炊具、内面黒色土器有台椀、緑釉陶器の椀などが出土している。時期は、覆土の色調と出土遺物から、９世紀末から 10 世紀前半と考えられる。

SK342 と SD347 の関係は、不明瞭であるが、一体のものであれば雨水や湿気対策などの機能が想定される。SK342 の東側のスペースに掘立柱建物などの作業場のような建物が存在も想定したが、発見することはできなかった。

SK361（図版 42）　９D15・20 グリッドに位置している。SB348 及び SI664 と重複し、切り合い関係から古い順に示すと SI664・SK361・SB348 となる。平面形は楕円形で、断面は台形状である。規模は、長軸 1.06 m以上、短軸 0.92 m、深さ 0.30 mを測る。覆土は全体的に黒味が強く、有機質由来の土質である。出土遺物は、土師器無台椀・甕類が出土している。時期は、９世紀末から 10 世紀前半頃と考えられる。

SK365（図版 42）　９E19 グリッドに位置する。SD44 と重複し、本遺構がこれを切る。平面形は丸みを帯びた方形で、断面は台形状を呈する。規模は、長軸 0.64 m、短軸 0.57 m、深さ 0.14 mを測る。出土遺物は、土師器有台鉢・無台鉢が出土している。有台鉢は１層から出土しており、遺構底面から浮いた状態で発見されている。これは、ほかの埋納遺構と同じ状況であり、やや傾いてはいるが、本来は正位で据えられた可能性もある。時期は、10 世紀前半頃と考えられる。

SK378（図版 42）　11K11 グリッドに位置する。SB317 － P20 と重複し、これに切られる。平面形は円形で、

断面は不整な漏斗状を呈す。規模は、径 1.4m、深さ 0.58m を測る。覆土はレンズ状に堆積し、上半部の１・３層は２層の黄褐色砂を挟んで黒褐色シルトが、下半部の４・５層は黒褐色とオリーブ灰色シルトが堆積している。遺構の形状や堆積状況から井戸の可能性があるが、湧水はなく深度が浅いため、断定するには至らなかった。出土遺物は、土師器の長甕が出土している。時期は、９世紀後半が考えられる。

SK396（図版 42）　10E ６グリッドに位置している。SB348 に隣接している。平面形は不整な楕円形であり、断面は弧状を呈す。規模は、長軸 0.49 m、短軸 0.36 m、深さ 0.10 mを測る。出土遺物は、土師器無台椀が出土している。時期は、10 世紀前半頃と考えられる。

井戸

SE403（図版 44）　11F ４・５・９・10 グリッドに位置する。湧水はないが、規模と形状から井戸と判断した。平面形はやや不整な円形で、断面は漏斗状である。規模は、径 1.68 mで深さ 0.78 mを測る。中に施設はなく、素掘りの井戸である。覆土は、レンズ状に堆積し、１～３層は黒色粘土を主体として、未分解植物を多く含んでいる。４～ 10 層は、未分解植物を含んだ層と地山由来の層と互層になって堆積している。出土遺物は微細な須恵器と土師器が出土しているが、図示できる遺物は出土していない。SB608 に近接した場所に位置していることから、SB608 に伴う井戸の可能性が高い。時期は、SB608 との関係から、９世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

SE677（図版 44）　11D16・17・22 グリッドに位置する。微高地状の平坦地ではなく、SX １に向かってやや下がった傾斜地に構築されている。湧水はないが、規模や形状及び覆土の堆積状況から井戸と判断した。平面は不整円形で、断面はU字状を呈する。規模は、長軸 1.92 m、短軸 1.66 m、深さ 1.07 mを測る。覆土は、レンズ状に堆積し、１・２層は黒色土が堆積するが３～ 11 層は、明オリーブ灰色土と灰色土の互層になっている。遺物は、上層で土師器無台椀及び須恵器の微細片が、下層でヒョウタンと木製品が出土している。土師器の無台椀は完形であり、内外面にススが多量に付着している。井戸を埋め戻す儀式に使われたものであろうか。出土状況は、当初立木痕との認識で掘削を開始したため、記録を残すことができなかった。下層のヒョウタン及び木製品は、比較的底面に近い場所から出土している。時期は、出土遺物から 10 世紀前半でも新しい時期と考えられる。

溝

SD ３（図版 45）　14M・14N・15L・15M・16L・16K グリッドに位置しており、調査区東側の 14N から入り、緩やかに南方向に進路を変え、わずかに蛇行しながら SX １に直交するようにして交わる。調査区内の全長は約 33.0 mで、最大幅 1.14 m、深さは最大 0.29 mを測り、断面は漏斗状を呈する。覆土は、２層に分かれ、上層である１層には黒味を帯びた灰色土が堆積し、下層である２層は灰黄色シルトで地山由来の土が堆積していた。重複する SD131・163・201 よりも本遺構のほうが新しいが、SB535 については、切り合いを確認できず、前後関係は不明瞭である。出土遺物は、土師器食膳具・煮炊具、須恵器食膳具・貯蔵具、内面黒色土器食膳具などが出土しているが、微細な破片が多く、ほとんど図化できなかった。時期は、９世紀後半頃であろうか。

SD ７（図版 45）　11K・12J・12K・13J・13K・14I・14K グリッドに位置しており、調査区北側の 11K から入り、わずかに蛇行した後ほぼ直線状に伸び、南端は SX １に落ち込み収束する。調査区内の全長は 47.2 mで、幅は 1.22 ～ 2.78 m、深さは 0.4 m前後で、断面は弧状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、

大きく分けて上層（１・２層）と下層（３・４層）に分けることができる。上層は黒褐色～褐灰色土を主体とした層で、下層は明オリーブ灰色～黄灰色シルトを主体とする層で、地山とかなり近い色調で識別しづらい。上層と下層が確認できるのは、ちょうどSB317の南側の12Kグリッドの南半からSX 1までの南半分の区間（南区間）であり、遺物が出土するのもこの区間である。12Kグリッドの北半から11Kまでの北半分の区間（北区間）は、下層の土のみが堆積し、ほぼ地山と同質化している状況で、遺物も全く出土しなかった。北区間で重複するSB317は、本遺構に柱穴が掘り込まれており、確実に新しい。南区間は、SI207とSD153が重複する。SI207は、試掘トレンチが当たっていたため、新旧関係を把握することができなかった。SD153は、本遺構を切っており、新しいと言える。

出土遺物は、南区間から出土している。須恵器食膳具、土師器食膳具、内面黒色土器食膳具が出土し、これらの中に転用硯、墨書・漆書土器を含む。この他、甕類や壺類、土錘などが出土している。このうち、食膳具の種別割合（重量計測）を上層と下層に分けてみてみると、下層では土師器が42.6%、須恵器が57.4%であるのに対し、上層は土師器が58.1%、須恵器が38.5%、内面黒色土器が3.4%となり、土師器が須恵器を上回る。これは長岡市下ノ西遺跡SX852とほぼ同じ割合であり、食膳具の特徴をみても同時期に位置づけられよう。下層の食膳具は、特徴的には上層と大きく変わらない。また、下層出土遺物の総計のSD 7出土遺物総計に対する割合は、約１割と少ない。そのため、下層の期間は、上層に近い時期でごく短かったと考えられる。従って、SD 7の時期は９世紀後半から末頃に位置づけられよう。

以上の状況から、もともと自然の流路のような溝が存在していたが、集落が形成される頃には、北半分の区間は、埋没していたものと考えられる。一方、南半分の区間は、まだ埋没せず存在しており、利用され、９世紀末頃には埋没したものと考えられる。

SD 8（図版45）　12I・13Iグリッドに位置する。真北から約45度西偏し、概ね直線状であるが途中Ｓ字状にクランクする。規模は、全長約6.9ｍ、幅0.50～0.88ｍ、深さ0.09～0.13ｍを測る。断面形は弧状で、覆土は黄灰色シルトが主体である。SB571及びSB609と重複するが、いずれも本遺構より新しい。出土遺物は、須恵器無台坏、土師器無台椀・煮炊具、内面黒色土器の無台椀などが出土しているが、微細な破片が多くほとんど実測できなかった。時期は、９世紀後半から末頃と考えられる。

SD97（図版45）　14M19・24グリッドに位置する。SI130に隣接し、SD131と重複し、切り合いから本遺構のほうが新しい。主軸は、北東－南西方向で、やや湾曲しながら伸びる。断面形は、弧状を呈する。規模は、全長1.20ｍ、幅0.32ｍ、深さ0.07ｍを測る。出土遺物は、須恵器有台坏のほか土師器片が出土している。時期は、９世紀末頃と考えられる。

SD153（図版45）　14I・14J・15Jグリッドに位置している。遺構が乗る平坦面からSX 1に傾斜する斜面の転換点に位置し、ほぼ直線状に伸び、北西側でやや蛇行する。規模は、全長14.2ｍ、幅最大１ｍ、深さ0.13ｍで、断面形は弧状を呈する。SD 7と重複し、切り合いから本遺構のほうが新しい。出土遺物は、須恵器食膳具・貯蔵具、土師器食膳具・煮炊具、内面黒色土器の食膳具が出土している。時期は、切り合いから９世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。なお、SD56・27・18・17・14・11は、本遺構と同じような軸方向、形態、位置であり、連続した溝群と捉えられよう。

SD267（図版45）　13K･13Lグリッドに位置している。SB318と重複し、切り合いから本遺構のほうが古い。西側はSB318の柱穴と重複し、SB318－Ｐ２を境に屈曲する。東西方向へは緩やかに弧を描きながら延び、SB318の東側で北西方向へ再度屈曲する。途中で枝分かれするように小溝が多く伸びており、平面形は不整形なコの字状を呈する。断面形は、弧状である。規模は、全長11.67ｍ超、長さ0.40～0.80ｍ、深さ約0.15

mを測る。出土遺物は、須恵器無台坏、土師器長甕が少量出土している。時期は、出土遺物から 9 世紀後半から末頃と考えられる。

SD273（図版 45）　13L グリッドに位置する。本遺構は単独で存在し、やや湾曲して北西－南東方向に伸びる。規模は、全長 2.35 m、幅 0.40 m、深さ 0.18 mを測り、断面は弧状を呈する。出土遺物は、須恵器無台坏が出土し、底部外面に「千」とみられる墨書が書かれている。時期は、出土遺物から 9 世紀後半から末頃と考えられる。

SD302（図版 45）　12I グリッドに位置する。本遺構は、SD307 を切り、P309 に切られている。南北方向にほぼ直線状に伸び、規模は全長 2.38 m、幅 0.34 m、深さ 0.12 mを測る。断面形は、台形状を呈する。出土遺物は、土師器食膳具、須恵器食膳具、墨書土器、土錘が出土している。時期は、出土遺物から 9 世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

SD480・481（図版 45）　9 G・10G・11F・11G・12F グリッドに位置し、調査区北側から入り、やや蛇行しながらほぼまっすぐに南西方向に伸びている。SD480 は調査区内全長約 13 m、SD481 は調査区内全長約 26 mで、約 13 mにわたって平行に走っている。両遺構の幅は約 0.30 m、深さ 0.05 ～ 0.12 mである。溝の規模や形状からすれば、畝状小溝群と大きな違いはないが、他に同じ主軸方向で群を形成する溝はなく、小溝群と小溝群の間に位置していることから、区画溝のような性格を持ったものであろうか。出土遺物は、SD480 から土師器無台椀の細片が、SD481 からは須恵器無台坏と土師器無台椀が出土している。時期は、 9 世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

畝状小溝群

本調査区では、地形に沿って微高地上に展開する畝状小溝を多数検出した。各々の小溝の主軸方位及び検出地点によって溝群 1 から溝群 6 までの 6 グループに大別した。溝群 1 が調査区の北西端部で検出されており、以下、東に向かい順にグループ名を付した。

溝群 1（図版 46）　9 C･D グリッド、調査区の北西隅に位置する。SB320 に切られ、SI664 を切っている。また、後述する溝群 2 とも切り合っており、本グループは溝群 2 に後出する。16 条の溝が主軸方位Ｎ－ 66°－Ｗ付近を向く。最も長く検出した SD332 は全長 7.34 mを測る。16 条とも、幅は 0.3 m～ 0.4 m、深さは 0.1 m～ 0.12 mを測り、ほぼ同規模である。断面は弧状を呈するものが主体である。覆土は褐灰色シルトの単層が主体で、地山由来のシルトが混ざる。溝間は最も狭い SD332・333 間で 0.37 m、最も広い SD339・340 間で 1.2 mを測る。遺物は土師器食膳具・煮炊具、黒色土器食膳具が少量出土した。この他、SD326 より土錘が 1 点出土している。時期は、遺構の切り合いから 9 世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

溝群 2（図版 46）　8・9・10D グリッド、調査区の北側に広範囲に渡り平行する溝が検出され、溝群 2 とした。東端は SD480・481 によって限られ、西側は主軸方位の異なる溝群 1 と重複する。溝群 1 ・SB348・SD347 に切られ、SI664 を切っている。43 条の溝が概ね主軸方位Ｎ－ 42°－Ｗ付近を向く。SD44 が最も長く全長 26.57 mを測り、SD410 の 19 mがこれに続く。幅は 0.3 m～ 0.5 m、深さは 0.1 m～ 0.2 mを測る。断面形は弧状を基調とし、灰色ないしは褐灰色シルトの単層が主体である。溝間は SD416・417 で見られる 1 m前後を基本とするが、溝が不均等に並ぶ地点があり、一定しない。遺物は須恵器の食膳具、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。SD44 の埋没後には SX32 及び P43 が形成されており、土師器無台椀が定量出土している。また、SD323 覆土中から土錘が 1 点出土した。時期は、SX32 等との切り合いから 9 世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

溝群３（図版 47）　10G･H、11G･H グリッドに位置する。西側は SD480･481、東側では SI429 と重複する。また、南端では SK512、SB608 と重複する。49 条の溝が主軸方位によって細別可能な３グループを形成し、各々が切り合っている。おおよその主軸方位は前後関係の古いものからＮ－ 61°－Ｗ、Ｎ－ 43°－Ｅ、Ｎ－３°－Ｅを向き、それぞれ溝群３－１、３－２、３－３とする。溝群３－１・３－２はほぼ直交しており、SK512 を切り、SB608 に切られる。SI429 は溝群３－１に後出し、３－２に切られている。SB504、SD480・481 が近接した主軸方位をとり、併存した可能性が高い。溝群３－１及び３－２はそれぞれ前者の SD440 が全長 12.3 m、後者の SD443 が全長 14 mと比較的長く延びており、溝群３－３は 8.1 m程度と短い。溝幅は 0.3 m～ 0.5 mの間で推移、深さも 0.06 m～ 0.2 m程度と各時期を通じてほぼ一定の値をとる。断面形は半円形を呈する。覆土は溝群３－１の色調が黄灰色を基調とし最も明るい。溝群３－２・３－３と時期が下るにつれて覆土の色調は暗くなる傾向があり、最新段階の溝群３－３では黒褐色を基調とする。溝間は溝群３－１の SD432・440 間において 1.8 mを測り、北壁付近の SD456・466 間では 0.8 mと狭い。溝群３－２では SD436・439・443・444 間が２m前後の値をとる。溝群３－３では SD487・488 間が最も広く 2.1 m、次いで SD448・449 間が 1.8 mを測る。狭い地点では 1.1 m程度であり、溝間は一定ではない。遺物は須恵器食膳具・小壺・甕類、土師器の食膳具・煮炊具が少量出土した。SK524 より土錘が１点出土したほか、SK512 に隣接する SD438 で骨片が少量出土している。時期は、切り合いから溝群３－１が９世紀後半頃、溝群３－２・３－３が９世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

溝群４・５（図版 48）　13I・J、14I・J グリッドに位置する。SD ７の東西両岸には畝状小溝群が展開しており、SD ７を境に主軸方位が異なる傾向が認められる。SD ７西岸の畝状小溝群を溝群４とし、東岸の方は溝群５と呼称する。溝群４は SI46・207・211・212 を切っており、溝群５は SI54 を切る。両群とも竪穴建物群より後出する点で共通する。また、溝群５は SB166 と一部重複するため、同建物との併存は想定し難い。溝群４は 17 条の溝を検出、主軸方位は SD204 に代表されるＮ－ 67°－Ｗ付近の値をとるグループ溝群４－１と SD39 に見られるＮ－ 41°－Ｗ付近の値をとるグループ溝群４－２に細別できる。SD34・35 間の切り合いから、溝群４－１が古く溝群４－２が新しいと判断した。溝群４－１は鍵の手状に屈曲した状態で検出された SD204 や、全長９mを測る SD35 等により構成される。幅は 0.24 m～ 0.5 m、深さは 0.14 m～ 0.25 mを測る。これに対し溝群４－２は比較的小規模で、全長は 2.5 m程度、幅 0.2 m～ 0.3 m、深さは 0.12 mである。断面形は半円形ないしは台形状、覆土は黄灰色を基調とし、溝群４－１より４－２の方が、色調が暗い傾向にある。溝間は溝群４－１では SD40・41 が切り合っており、多数時期の溝が含まれている点も看過できないが、おおよそ 1.5 m前後の値が認められる。溝群４－２では SD37・38・39 間において、1.16 m～ 1.3 mを測る。溝群５は 32 条の溝を検出、主軸方位はＮ－ 33°－Ｗ付近の値をとるグループ溝群５－１とＮ－ 47°－Ｗ付近の値をとるグループ溝群５－２に細別できる。両群の切り合いは明瞭ではない。溝群５－１は全長 0.9 m～５m、幅 0.2 m～ 0.25 m、深さは 0.05 m～ 0.15 mを測る。溝群５－２は全長２m～ 12 m、幅 0.25 m～ 0.4 m、深さは 0.08 m～ 0.25 mを測り、溝群５－１に比べやや大きな規模となる。断面形は両群とも弧状ないしは弧状を呈し、覆土は黄灰色から褐灰色を基調とする。溝間は溝群５－１で 0.4 m～ 1.3 m、溝群５－２で 0.7 m～ 1.34 mを測る。溝群４・５ともに遺物は須恵器食膳具、土師器食膳具・煮炊具が少量出土した。時期は９世紀後半から末頃と考えられる。

溝群６（SX4）（図版 49）　15L・M、16L・M グリッド、調査区東端部に位置する。東西 7.4 m、南北 14 mの範囲で畝状小溝群が広がっており、一部が調査区外に延びている。SD ３に隣接する。当初、幅 0.4 m、深さ 0.15 m～ 0.2 m前後の溝で仕切られた隅丸方形の区画を検出し、SX ４と名称を与え調査を進めた。

主軸方位はＮ－ 41°－Ｗ前後ないしはＮ－ 52°－Ｅ前後を向き、各溝が直交する。区画は溝の内辺で一辺 1.6 ｍ～ 2.3 ｍを測る。区画を構成すると考えられる溝同士の明確な切り合いは SD178・182・183・184 を除き認められない。溝群の掘削当時から方形区画が意識されていたようである。また、前述の切り合いが発生する溝は、区画内に単独で存在する P679 も含めて主軸方位がＮ－ 38°－Ｗを前後する値でまとまっており、P679・SD182・SD183 によって構成される平行する溝群が先行して存在していた可能性が高い。各溝の断面形は弧状から半円状を呈し、色調は褐灰色を基調とする。遺物は SX ４から須恵器の食膳具、土師器の食膳具・煮炊具、黒色土器の食膳具、鍛冶滓の細片が１点出土した。SD183 からは土師器煮炊具の細片が１点出土した。時期は、出土遺物から９世紀末から 10 世紀前半と考えられる。

柵列

SA680（図版 49）　10J19･24･25、10K21 グリッドに位置する。P382 ～ 385 の４基で構成される柱穴列で、規模は直径 0.16 ～ 0.26 ｍ、深さ 0.16 ～ 0.24 ｍを測る。柱間は西から、1.3 ｍ、1.5 ｍ、1.5 ｍとなる。掘方は検出されず、杭を打ち込んで立てたものと考えられる。当初は、調査区外へ広がる掘立柱建物と考えたが、調査区外まで若干広げて調査したが柱穴は発見できなかった。そのため、柵列と判断した。SB317 に近い場所に位置するが、SB317 と軸方向が合わないことから SB317 に伴うものではないと思われる。調査区北側に軸方向が合う建物が存在している可能性がある。時期は、軸方向が SB320・608 に近いことから、９世紀末から 10 世紀初頭が考えられる。

ピット

P127（図版 49）　14K ３・４グリッドに位置する。本遺構は、SD112 に切られる。平面形は不整形で、断面形状は階段状である。規模は、長軸 1.52 ｍ、短軸 1.19 ｍ、深さ 0.13 ｍを測る。出土遺物は、須恵器食膳具と土師器煮炊具であるが、図化できなかった。時期は、９世紀後半頃であろうか。

P156（図版 49）　13L24 グリッドに位置する。本遺構は P155 に切られている。平面形は楕円形で、規模は長軸 0.80 ｍ以上、短軸 0.70 ｍ、深さ 0.35 ｍを測る。断面形は漏斗状で、２層は柱痕と考えられるが、建物となる他の柱穴との関係は見いだせなかった。出土遺物は、墨書された土師器無台椀が出土している。時期は９世紀末から 10 世紀前半頃であろうか。

P278（図版 50）　12L １グリッドに位置する。本遺構は、P366 を切っている。平面形は円形で、規模は長軸 0.56 ｍ、短軸 0.50 ｍ、深さ 0.10 ｍを測る。断面形は不整な弧状を呈する。出土遺物は、土師器無台椀、須恵器、人頭大の礫が遺構確認面からやや浮いた状態で出土している。本遺構は、SB317 に隣接しているが、遺物の遺存度は悪く、出土状況も置かれたような状況でないことから、本遺構が廃絶し、ほぼ埋まった状態で廃棄されたものと考えられる。時期は、出土遺物が 10 世紀前半頃と考えられることから、それよりもやや古い時期かほぼ同じ頃に位置づけられよう。

P426（図版 50）　10E10 グリッドに位置する。溝群２と重複し、SD414 を切っている。平面形は楕円形で、断面形はＵ字状を呈する。長軸 0.48 ｍ、短軸 0.39 ｍ、深さは 0.49 ｍを測る。覆土は褐灰色を基調とする単層で、底面付近で柱根（615）が出土した。柱根は北東側に傾いており、柱底面はピット底面より 0.16 ｍ下まで到達していた。本遺構と対応する柱穴列は検出できなかった。出土遺物は、土師器の食膳具・煮炊具がわずかに出土した。時期は、溝群２を切ることから、10 世紀初頭から前半に位置づけられる。

P527（図版 50）　11I ２・７グリッドに位置する。SI429 に隣接するピットで、SD524 に切られる。平面形は楕円形で、断面形は台形を呈する。規模は、長軸 0.68 m、短軸 0.54 m、深さ 0.46 mを測る。出土遺物は土師器の食膳具・煮炊具が出土している。時期は、９世紀後半から末頃と考えられる。

P651（図版 50）　12H ７・４グリッドに位置する。SB574 の西側に隣接する。平面形は楕円形で、断面形は階段状を呈する。規模は、長軸 0.86 m、短軸 0.55 m、深さ 0.45 mを測る。底面からは、柱根が出土しているが、他に結び付けられる柱穴を発見できず、建物にならなかった。出土遺物は、柱根のほかに土師器片が出土している。

湿地・その他

SX １　調査区南側に広がる湿地帯である。東西方向に伸びており、遺構確認面からの深さは約 1.5 mで南側の立ち上がりは確認できていない。調査区の制限から詳細は不明であるが、試掘調査の結果から想定される遺跡範囲は、SX １を取り囲むように位置していることが想定される。覆土は、包含層相当層と見られるⅦ層の上には青灰色粘土と黒色粘土が互層になって堆積している。このことから、滞水と陸化を繰り返していたものと考えられる。また、SX １内に風倒木と思われる痕跡が検出された。これらは、SD ７と交差する辺りに集中して見られる。本遺跡が形成される時点で木が立っていたのかどうかは不明であるが、この風倒木痕からも遺物が出土している。

SX １から出土した遺物は、食膳具、煮炊具、貯蔵具などの土器類を主体として、漁労具である土錘やわずかであるが鍛冶に関わる鉄滓や羽口が出土している。これらは概ね北側斜面の裾部での出土であり、微高地上の遺構検出面から流れ込んだものと考えられる。

SX120（図版 50）　13L16・21・22 グリッドに位置する。SK205、SI268 に近接する。SX119、P242、SK245 と重複し、切り合いから SX119 が最も古く、次いで SX120、最も新しい遺構が P242、SK245 である。本遺構の平面形は不整形で、断面は弧状を呈する。SX120 は長軸 2.34m、短軸 1.35m、深さ 0.18m を測る。重複する SX119 は径１m 程度、P242 は長軸 0.6m、短軸 0.48m、深さ 0.18m である。SK245 は長軸 0.85m、短軸 0.47m、深さ 0.17m で平面楕円形を呈する。覆土は、黄灰色シルトと褐灰色シルトを主体としている。出土遺物は、須恵器食膳具、土師器食膳具・煮炊具、土錘が出土している。この他、人頭大の自然石が出土している。SI268 に近接した位置であることを考慮すれば、SI268 のカマド構築材であった可能性もあろう。時期は、９世紀後半から末頃に位置づけられよう。

SX400　11J21・22、12J1・2・3 グリッドに位置する。SB317 の西側に隣接する。土坑の形状や堆積状況および底面から木の根が発見されたことから風倒木痕と判断した。遺構ではないため、断面図等の掲載は省略した。発見された木の樹種同定を行ったところ、オニグルミと同定された。遺物は、土師器食膳具・煮炊具、須恵器食膳具・貯蔵具が出土している。ほとんどが細片であった。382 は底部外面に漆書がある須恵器無台坏で、例外的に遺存状況が良好であった。

第Ⅴ章　遺　　物

第１節　出土遺物の概要

今回の調査では、土器、土製品、石製品、木製品、金属製品、鍛冶関連遺物が出土している。その量は、コンテナにして約 100 箱であり、そのほとんどが土器である。Ⅱ層からは、近世とみられる木簡が出土した以外は、包含層（Ⅶ層）と検出された遺構から出土したものであり、ほぼ全てが平安時代の遺物である。遺構出土土器の内訳は、重量比で、須恵器が約 30％、土師器が約 67％となり土師器が須恵器の２倍以上出土している（第３表）。他は、内面黒色土器、施釉陶器が出土しており、合わせて２％程度である。土製品では土錘が多量に出土している。石製の権状錘や金属製の巡方の裏金具、漆紙などわずかではあるが、特殊な遺物も出土している。分布は、当然のことながら建物とその周辺に多く分布している。

遺構		須恵器(g)					土師器(g)					内黒	灰釉陶器	緑釉陶器	計(g)	食膳具量比(%)		
		食膳具	甕	壺類	その他	計	食膳具	煮炊具	貯蔵具	その他	計	食膳具				須恵器	土師器	内黒
掘立柱建物	SB166	1	0	0	0	1	38	34	0	0	73	0	0	0	73	2%	98%	0%
	SB167	3	0	0	0	3	32	0	0	0	32	0	0	0	35	8%	92%	0%
	SB316	0	0	0	0	0	12	13	0	0	24	0	0	0	24	0%	100%	0%
	SB317	7	0	0	0	7	47	41	0	0	88	0	0	0	95	14%	86%	0%
	SB318	63	9	0	0	72	27	305	0	0	332	0	0	0	404	70%	30%	0%
	SB320	3	0	0	0	3	15	1	0	0	16	3	0	0	23	16%	69%	16%
	SB348	19	0	323	0	343	262	189	0	0	451	17	0	0	810	6%	88%	6%
	SB535	3	0	0	0	3	2	6	0	0	8	0	0	0	11	57%	43%	0%
	SB550	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	2	0%	100%	0%
	SB571	50	0	0	0	50	62	104	0	0	166	18	0	0	233	38%	48%	14%
	SB574	73	0	16	0	89	39	172	0	0	211	0	0	0	299	65%	35%	0%
	SB608	3	4	0	0	7	125	141	0	0	266	17	0	0	290	2%	86%	12%
	SB609	0	16	9	0	25	26	72	0	0	98	0	0	0	124	0%	100%	0%
竪穴建物	SI5	58	6	0	0	65	236	305	0	0	541	71	0	0	677	16%	65%	19%
	SI10	374	13	0	0	388	163	1,330	0	0	1,493	0	0	0	1,881	70%	30%	0%
	SI46	0	0	0	0	0	81	218	0	0	299	43	6	0	348	0%	65%	35%
	SI49	3	0	0	0	3	58	132	0	0	189	0	0	0	193	6%	94%	0%
	SI54	55	0	0	0	55	127	316	0	0	443	0	0	0	498	30%	70%	0%
	SI70	32	3	0	0	35	30	169	0	0	199	0	0	0	234	51%	49%	0%
	SI130	13	0	0	0	13	67	16	0	0	83	0	0	0	96	17%	84%	0%
	SI211	33	9	0	0	42	21	71	0	0	92	8	0	0	142	54%	34%	12%
	SI212	0	24	0	0	24	17	229	0	0	245	0	0	0	269	0%	100%	0%
	SI268	11	3	0	0	14	28	484	0	0	513	0	0	0	527	27%	73%	0%
	SI429	10	0	4	0	15	79	70	0	0	149	20	0	0	184	9%	72%	19%
	SI465	2	0	0	0	2	5	33	0	0	37	0	0	0	39	31%	69%	0%
	SI664	25	0	0	0	25	97	394	0	0	491	0	0	0	515	20%	80%	0%
土器溜まり埋納遺構	P2	0	0	0	0	0	381	9	0	0	390	0	0	0	390	0%	100%	0%
	SX32	0	0	0	0	0	1,051	49	0	0	1,101	153	0	0	1,253	0%	87%	13%
	P43	0	0	0	0	0	726	88	0	0	814	40	0	0	854	0%	95%	5%
	SK280	0	0	0	0	0	840	41	0	0	880	5	0	0	885	0%	99%	1%
	P306	0	0	0	0	0	594	0	0	0	594	0	0	0	594	0%	100%	0%
	SK492	0	0	0	0	0	511	58	0	0	569	0	0	0	569	0%	100%	0%
	SK493	0	740	0	0	740	220	178	0	0	398	110	0	0	1,248	0%	67%	33%
	SK573	0	0	0	0	0	519	87	0	0	606	5	0	0	611	0%	99%	1%
	SK594	11	0	0	0	11	701	64	551	0	1,316	42	0	0	1,368	1%	93%	6%
埋葬関連遺構	SK106	35	0	0	0	35	15	171	23	0	209	0	0	0	245	70%	30%	0%
	SK146	179	0	30	0	209	158	1,065	0	0	1,224	0	0	0	1,433	53%	47%	0%
	SK205	13	0	0	0	13	139	75	0	4	217	0	0	0	230	8%	92%	0%
	SK260	0	0	0	0	0	646	200	0	0	846	9	0	0	855	0%	99%	1%
	SK482	0	0	0	0	0	115	12	0	0	127	240	0	0	367	0%	32%	68%
	SK512	0	0	0	0	0	0	27	0	1	27	0	0	0	27			
土坑	SK6	211	0	0	0	211	262	64	0	0	326	103	0	0	639	37%	46%	18%
	SK42	23	12,684	0	11	12,717	245	32	0	2	279	7	0	0	13,004	8%	89%	3%
	SK48	93	0	0	0	93	7	92	0	0	99	0	0	0	192	93%	7%	0%
	SK342	8	4	42	18	73	2,021	599	0	18	2,638	24	0	0	2,735	0%	98%	1%
	SD347	13	34	22	0	69	620	1,029	0	0	1,649	33	9	6	1,767	2%	93%	5%
井戸	SE403	11	41	21	0	74	48	24	0	0	72	0	0	0	146	19%	81%	0%
	SE677	6	0	0	0	6	594	232	0	0	826	2	0	0	834	1%	99%	0%
溝	SD3	63	20	5	0	88	67	353	0	0	420	0	0	0	508	49%	51%	0%
	SD7	3,097	1,497	187	0	4,781	4,673	16,435	15	0	21,124	275	19	0	26,199	38%	58%	3%
	SD8	37	8	0	0	44	355	1,035	0	0	1,390	45	0	0	1,479	8%	81%	10%
	SD267	183	0	0	0	183	16	641	0	0	657	0	0	0	840	92%	8%	0%
	溝群6	197	0	0	0	197	258	1,065	14	0	1,337	4	0	0	1,538	43%	56%	1%
SX1		539	5,374	4,627	0	10,541	5,022	8847	0	9	13,878	256	0	0	24,675	9%	86%	4%
遺構全体		6,793	21,680	6,008	29	34,510	26,548	46,774	657	35	74,014	1,678	34	6	110,242	19%	76%	5%

第３表　土器・陶磁器重量計測表（主要遺構のみ）

第２節　土器

（Ａ）記述の方針

土器は、まず遺構から出土したものを遺構毎に記載し、その次に包含層出土を主体とする遺構外出土のものを記載した。遺構の順番は「第Ⅳ章　遺構」に準じている。土器の記載については、特徴的な点について記載し、その他については遺物観察表に記載した。調整技法の表現については、ロクロを利用した撫で、ハケ目を「ロクロナデ」・「カキ目」とし、ロクロを利用しないハケ目を「ハケ目」とした。また、ロクロの利用の有無にかかわらず削りは「ヘラケズリ」とした。貯蔵具、煮炊具に見られる成形痕は、外面の工具痕を「タタキ」、内面の工具痕を「当て具痕」とした。

須恵器の胎土の特徴から産地を推定したが、そのほとんどが佐渡小泊窯跡群と推定されるため、特に分類せずに佐渡小泊産以外の産地と推定されるものについて、その都度記載した。なお、土師器については、胎土分類はしていない。

（Ｂ）土器の器種分類

１　須恵器（第６図）

須恵器は食膳具と貯蔵具に大別され、食膳具は坏蓋・有台坏・無台坏、貯蔵具は小壺・長頸壺・広口壺・直口壺・突帯付壺・横瓶・甕、そのほか焼台が出土している。

坏蓋　全形を窺えるものはないが、扁平なつまみを持ち、端部が屈曲する。出土量は少ない。

有台坏　坏のうち、高台を持つもの。形が分かるものは身が深いものがほとんどで、浅いものは１点のみである。出土量は少ない。

無台坏　坏のうち、高台を持たないもの。身の形態により、分類した。Ａ類は、底部から口縁に向かって直線的に立ちあがるもの。Ｂ類は、底部から口縁に向かって湾曲しながら立ちあがるもの。Ｂ類は、Ａ類に比べて器高が低い。

小壺　外側に広がる高台が付き、やや長い頸で単口縁になるもの。

長頸壺　長い頸部を持つ壺類で、底部に張り付け高台が付く。

広口壺　長い頸部を持つ壺類のうち、口径 10㎝を越えるもの。１点のみ確認した。

直口壺　平底で肩が張る器形を呈し、直立気味の口縁になるもの。１点のみ確認した。

突帯付壺　体部上半および下半に突帯を巡らす壺。高台を有する。１点のみ確認した。

横瓶　俵型の体部に「く」の字状に外反する口縁が付くものと推定されるが、全体が窺えるものはない。

甕　丸みを帯びた体部から頸部が「く」の字状に屈曲するもの。底部は丸底になるものと思われるが、底部が平らなものが１点出土している。

焼台　小型で折縁状の口縁部を持つ。壺類の蓋等の可能性も考えられる。１点のみ出土した。

２　土師器（第７・８図）

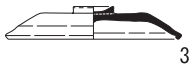
土師器は、食膳具、煮炊具、貯蔵具に大別され、坏蓋・有台椀・無台椀・有台皿・小皿・有台鉢・鉢・仏鉢型土器・広口壺・小甕・甕・長甕・鍋・羽釜型土器・甑・ミニチュア土器が出土している。煮炊具、貯蔵具については、非ロクロ成形のものをＡ類、ロクロ成形のものをＢ類に大別した。

坏蓋　須恵器と同様の技法を用いて製作されている。出土量は極めて少なく、１点のみ図示した。

有台椀　椀のうち、高台が付くもの。全体を知れるものは１点で、他は高台部分のみの出土である。口縁部は外反し、やや高い高台が付く。出土量は少ない。

須恵器

坏蓋



318

有台坏

119

28

無台坏

A

135

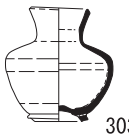
36

B

323

406

小壺

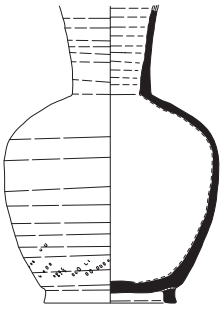


303

焼台

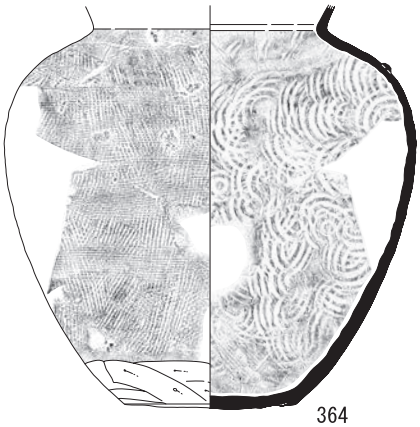
413

長頸壺



363

直口壺



364

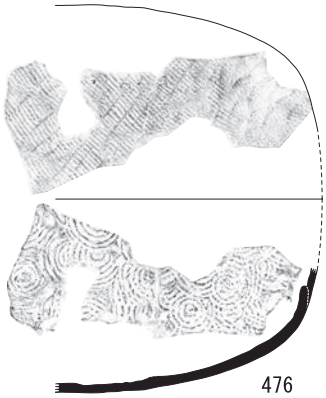
広口壺

472

突帯付壺

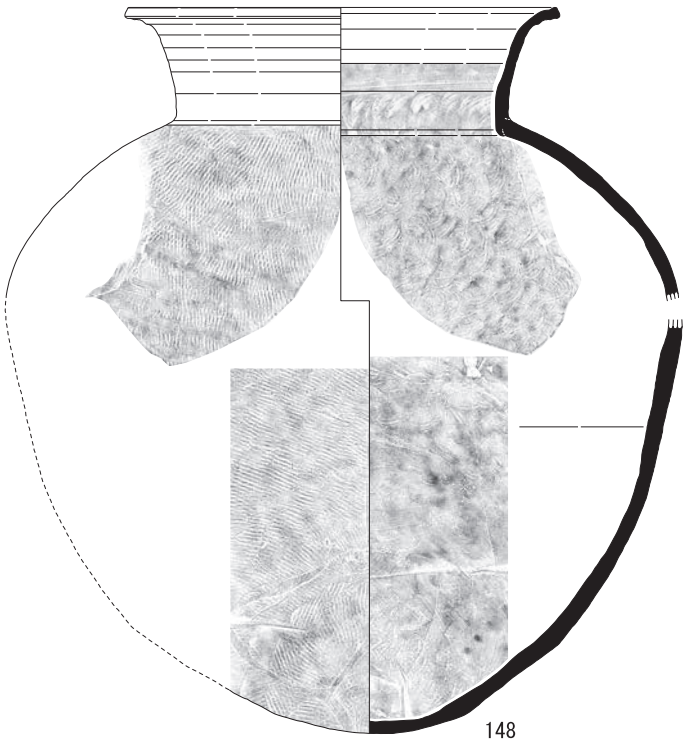
475

横瓶



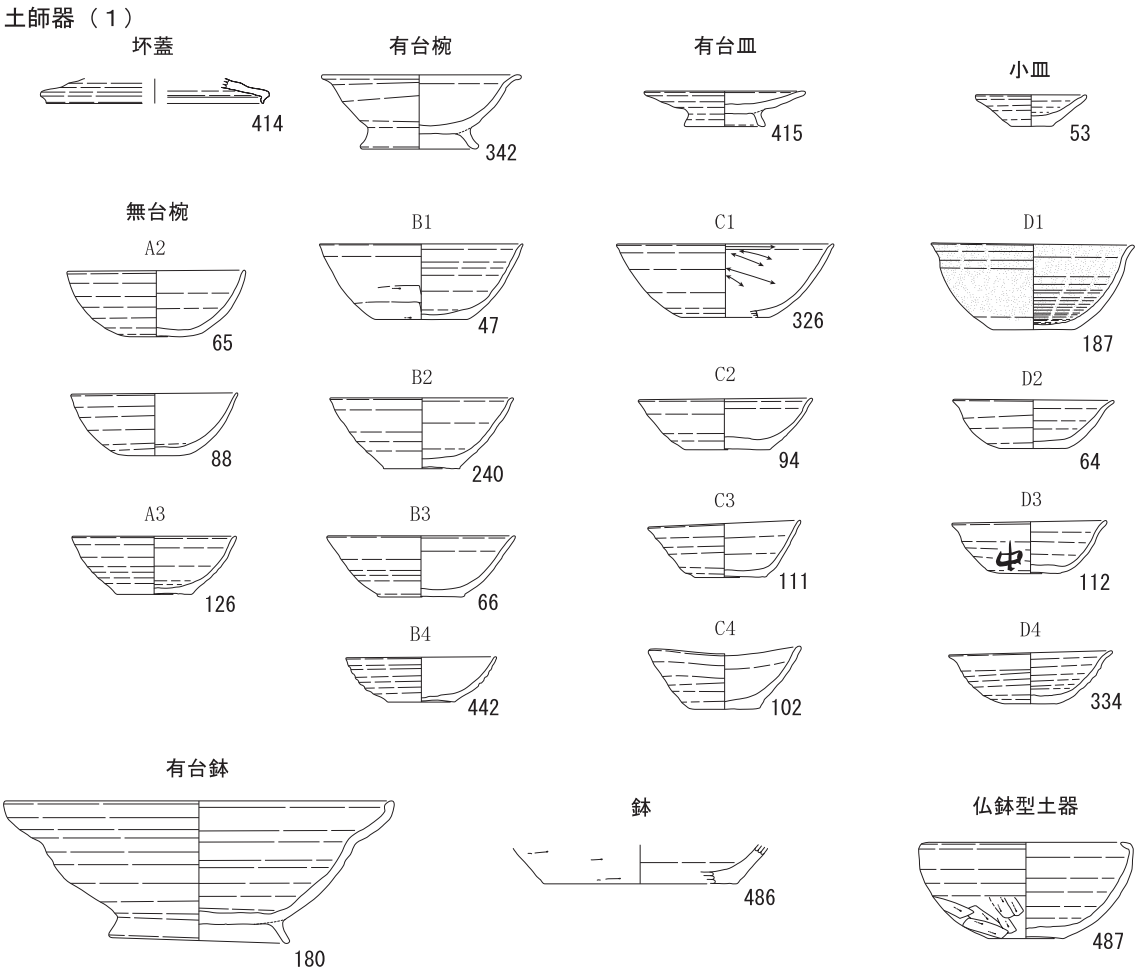
476

甕



148

第６図　器種分類（１）　　148 のみ１：８、その他１：６



第７図　器種分類（２）　（１：６）

無台椀　多量に出土し、食膳具の主体を占める。体部や口縁部の形態から４つに分類した。底部から体部が内湾しながら立ちあがり、口縁部がほぼ真上に向かって伸びる、ボウル状のものをＡ類、体部が内湾して立ちあがり、概ね斜め上方に向かって口縁部が伸びるものをＢ類、体部が直線的に立ちあがるものをＣ類、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部で外反するものをＤ類とした。さらに、ヘラミガキやヘラケズリなどの再調整が施されるものを１類、施されないもので、丁寧に撫でられているものを２類、歪みが大きくロクロ痕が顕著に残るものを４類、２類よりもロクロ痕が残るが４類程顕著ではないものを３類とした。なお、底部片でＢ類としている中に実際はＤ類も含まれると思われるが、ここではＢ類に分類した。

有台皿　高台を持つもののうち、身が浅く皿状を呈するもの。出土量はごく少量である。

小皿　平底を呈し、身が浅く皿状を呈するもの。１点のみ出土した。

有台鉢　有台椀よりも深く、口径が大きいもの。糸切りの底部に張り付け高台が付く。

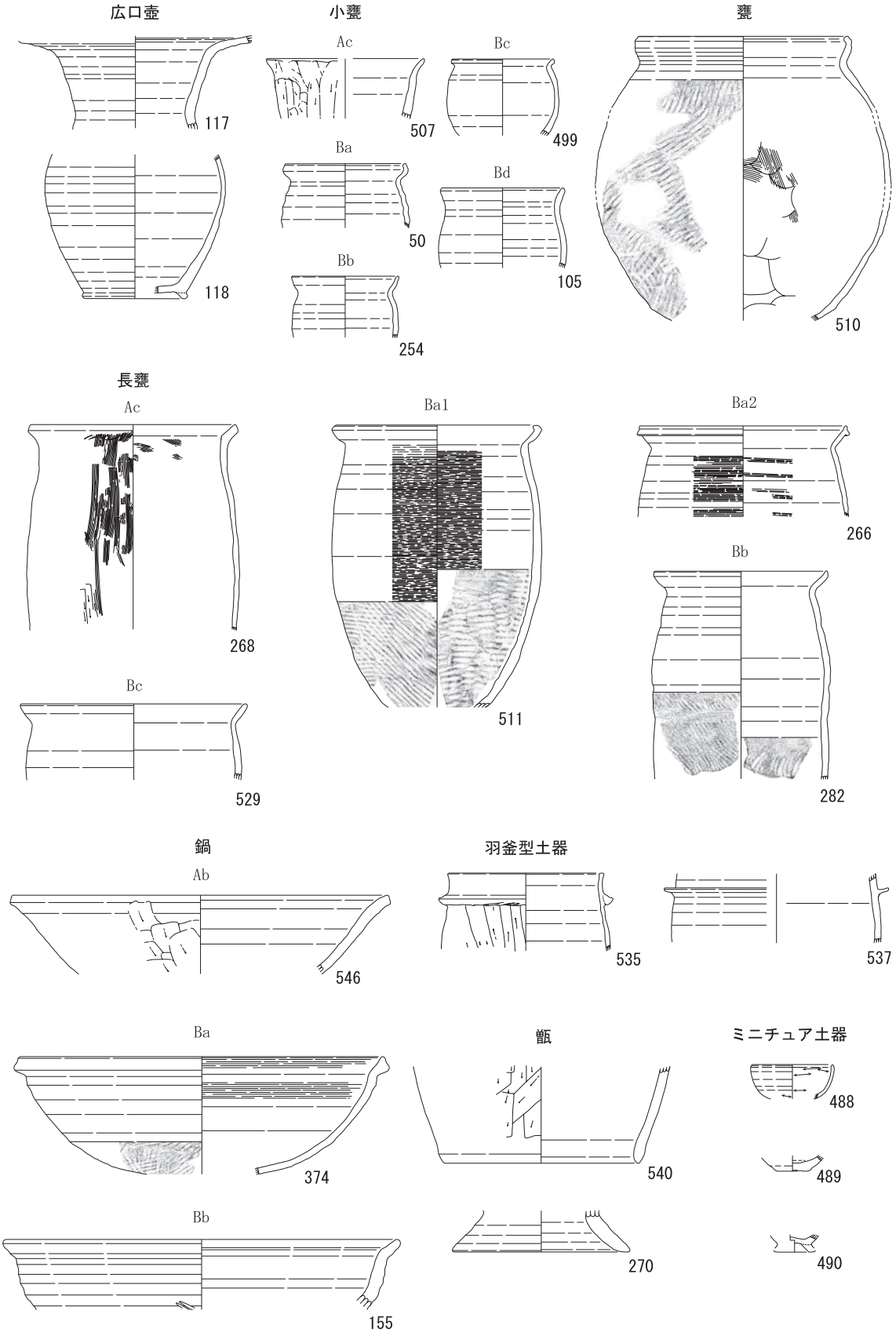
鉢　椀よりも底径が大きく、平底のもの。全体を知れるものはなく、底部の出土のみである。

仏鉢型土器　平らな底部から体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部が内側に屈曲するもの。出土量は少なく、須恵器の同器種は出土していない。

広口壺　須恵器の広口壺と同じ形態・技法で作られ、酸化焔焼成のものである。

小甕　非ロクロ成形のＡ類はわずかに３点であり、残りは全てロクロ成形のＢ類である。口縁部の形態に

土師器（２）



第８図　器種分類（３）　　（510 のみ１：８、その他１：６）

より４つ細分した。口縁端部が屈曲し、明確に受け口状になるものをａ類、口縁端部内面の曲がりが弱く、ゆるく受け口状になるものをｂ類、口縁部が「く」の字状に外反するものをｃ類、上記にあてはまらないものをｄ類とした。ｂ・ｃ・ｄ類は少なく、ほとんどがａ類である。

甕　須恵器の甕と同じく胴部が丸くなり底部は丸底になると思われる。須恵器と同じ技法で作られているが、酸化焔焼成のものである。

長甕　口縁部形態により分類でき、小甕と同じ基準で分類した。さらに、ａ類については口縁端部の外面を下方につまみ出さないものを１類、つまみ出すものを２類とした。Ａ類は少なく、掲載した１点はｃ類である。Ｂ類は、ａ類が大半を占め、その中でも１類が主体となっている。

鍋　口縁部形態により２つに分類した。口縁端部が上方や横方向などにつまみ出されるものをａ類、口縁端部がつまみ出されることなく、丸く収まるものや平坦になるものをｂ類とした。Ａ類は１点のみであり、Ｂ類のなかでも、口縁端部をつまみ出すａ類が主体を占める。

羽釜型土器　口縁部の下に鍔が付くもの。全体を窺えるものはないが、鍔の断面形が三角形になるものと細長くなるものの２種類が認められる。出土量は少ない。

甑　全て底部資料である。単孔で底面はない。底部の形態は、まっすぐのものと、内傾するものと、外反するものに分けることができる。

ミニチュア土器　法量が小さく、通常の器種に入らないものをここに入れた。椀・壺・甕と思われる３点が出土している。

３　内面黒色土器（第９図）

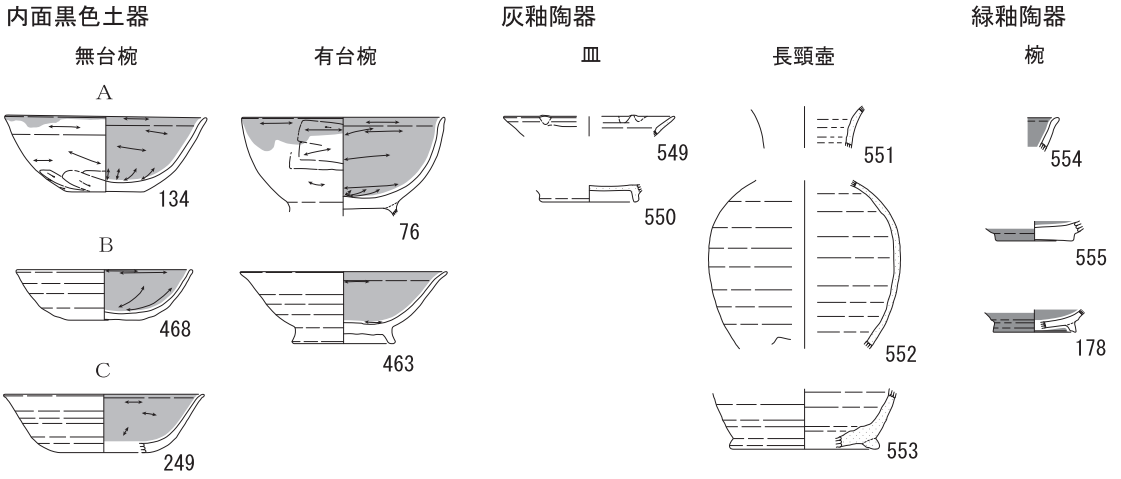
内面黒色土器は、食膳具のみで、無台椀と有台椀が出土している。

有台椀　椀のうち、高台が付くもの。口縁部形態で分けられるが、数が少ないため分類はしなかった。

無台椀　原則として土師器無台椀の分類を適用した。しかし、再調整の有無に関しては基本的にはヘラケズリが施されるものであるため細分は適用していない。出土量は少ない。

４　施釉陶器（第９図）

緑釉陶器と灰釉陶器が出土している。緑釉陶器はわずかに４点の出土で全て椀である。灰釉陶器も同様にわずかに 24 点の出土で、皿と長頸壺が出土している。緑釉陶器は３点、灰釉陶器は５点を図示した。



第９図　器種分類（４）　（１：６）

（C）　遺物各説

SB166（図版 51）　1は小甕の下半部でＰ 9から出土している。2は長甕の口縁部でＰ 8から出土している。口縁部は大きく外反し、端部が上方に屈曲している。破片が小さいため、口径は出せなかった。

SB316（図版 51）　3は土師器無台椀の口縁部でＰ 1からの出土である。口縁端部が外反している。

SB317（図版 51）　4は土師器無台椀の底部で P25 からの出土である。Ｃ 2 類に分類される。

SB318（図版 51）　5・6は須恵器無台坏の底部である。5は底部外面に墨書が書かれており、3画以上の直線が直交する。7は小甕の底部で外面の底部付近にヘラケズリが施されている。8は長甕の口縁部で「く」の字状に屈曲したあと、湾曲しながら上方に伸び、受け口状の口縁部を形成する。

SB348（図版 51）　9は須恵器長頸壺の下半部である。底部付近にヘラケズリが施され、高台は貼り付け高台である。高台には一部網代痕が残る。10 ～ 14 は土師器無台椀である。破片資料が多く詳細は不明であるが、Ｂ類とＤ類が見られる。15 は内面黒色土器の無台椀である。

SB571（図版 51）　16・17 は須恵器無台坏の口縁部である。18 は土師器無台椀の底部で、内面は丁寧にヘラミガキが施されている。19 は内面黒色土器の無台椀の底部である。

SB574（図版 51）　20 ～ 22 は須恵器無台坏である。20 の底部外面には漆書が見られる。「×」の一部か。22 は在地産とみられる。23 は土師器無台椀の口縁部で、Ｂ 3 類に分類される。

SB535（図版 52）　24 は土師器小甕の口縁部である。口縁部が受け口状になるＡ類に分類される。

SB608（図版 52）　25 は土師器無台椀の口縁部である。Ｂ 3 類に分類される。

SB609（図版 52）　26 は土師器無台椀の底部である。27 は土師器長甕の口縁部でＡ 1 類に分類される。

SI 5（図版 52）　28 は須恵器有台坏である。外端接地する方形の高台が付き、底部付近は丸みが強く椀に近い形態である。29 は須恵器無台坏の底部である。30 は内面黒色土器の無台椀で、外面の底部付近はヘラケズリが施されている。31・32 は土師器小甕で、31 は口縁部で頸部は弱く外反し、ゆるい受け口状になる。

SI10（図版 52）　33 は須恵器有台坏の底部で、方形で外端接地する低い高台が付く。34 ～ 38 は須恵器無台坏である。口径 11.8 ～ 13.4㎝、底径 6.6 ～ 8.4㎝、器高 2.5 ～ 3.2㎝と比較的まとまっており、体部は外側に大きく開く形態である。37 の底部外面にはわずかに墨痕が見られる。39 は土師器無台椀である。底部から体部が直線的に伸び、坏の形態に近い。40 は土師器小甕の下半部である。

SI46（図版 52）　41 は須恵器無台坏の口縁部である。42 は土師器無台椀の底部で、底径はやや小さい。

SI49（図版 52）　43 は土師器小甕の口縁部で、ゆるい受け口状になる。

SI54（図版 52）　44 ～ 46 は須恵器無台坏である。44 の体部外面には墨書が見られるが、文字は判読できない。47 は土師器無台椀で外面底部付近はヘラケズリが施されている。身が深い大型の無台椀である。48 は土師器鍋の口縁部で、「く」の字状に屈曲し口縁端部は上方につまみ出されている。

SI70（図版 53）　49 は土師器無台椀で、粗雑な作りである。50 は土師器小甕、51 は土師器長甕の口縁部でいずれも受け口状の口縁である。

SI130（図版 53）　52 は須恵器無台坏で、在地産の可能性がある。器壁にやや厚みがあり古い様相を持つ。53 は小皿で、11 世紀後半から 12 世紀初頭頃に位置づけられる。流れ込んだものか。

SI211（図版 53）　54 は須恵器無台坏で器壁が薄い。55 は内面黒色土器の無台椀である。

SI212（図版 53）　建物内の溝 SD254 からの出土である。56 は土師器小甕の底部、57 は土師器長甕である。

SI268（図版 53）　58 は土師器無台椀で、内面にヘラミガキが施されている。59 は土師器長甕、60 は土師器鍋であるが両者とも口径は出せなかった。

SI429（図版 53）　61 は内面黒色土器の有台椀である。高台は貼り付け高台である。

P 2（図版 53）　62 ～ 64 は土師器無台椀である。62 はＡ２類に分類され、身が深い。63 は粗雑な作りである。

SX32（図版 54）　65 ～ 73 は土師器無台椀である。口径 13.5 ～ 14.9㎝、底径 5.6 ～ 7.0㎝と比較的大きいものがまとまっている。67 は内面全体に漆が付着しており、漆塗りの椀とも考えられる。74 も土師器無台椀であるが、口径が 20㎝を超え、鉢ともいえる特に大型のものである。75 は土師器有台椀の底部で、やや長い高台が付く。76 は内面黒色土器の有台椀でボウル状の椀に高台が貼り付けられている。

P43（図版 54）　77 ～ 80 は土師器無台椀である。81 は土師器有台鉢の底部で、180 と同様の形態になると思われる。

SK280（図版 54）　82 ～ 87 は土師器無台椀である。全て口縁端部が外反するＤ３類に分類される。87 は内面に漆が付着しており、漆パレットとして使われたものと考えられる。

P306（図版 55）　88 ～ 91 は土師器無台椀である。88 は身が深いＡ２類で、他は口縁端部が外反するＤ３類である。

SK492（図版 55）　92 ～ 96 は土師器無台椀である。94 は丁寧に撫でられている。96 は身が浅い。

SK493（図版 55）　97・98 は土師器無台椀で、丁寧に撫でられている。99 は内面黒色土器の無台椀で、内面はヘラミガキが、底部外面付近にヘラケズリが施されている。

SK573（図版 55）　100 ～ 104 は、土師器無台椀である。比較的口径が小さく、器壁は若干厚い。また、粗雑な作りで、101 や 102 のように歪みが大きいものもある。105 は土師器小甕で、くびれがゆるく口縁部はやや外側に開く。口縁端部は丸くおさまる。

SK594（SX266）（図版 56）　106 は須恵器無台坏である。底部は欠損しているがやや深身の椀に近い形態になる。107 ～ 114 は土師器無台椀である。107 は法量が大きく深身で内面はヘラミガキが施されている。109 ～ 112 はやや深身の形態となり、109・110 は歪みが大きい。112 は体部外面に「中」の墨書が倒位で書かれている。115 は土師器無台椀の高台部分である。116 は内面黒色土器の無台椀で口縁部がわずかに欠損している。117･118 は土師器の広口壺で、須恵器模倣である。両者は接合しないが同一個体とみられ、太い頸部から大きく開く口縁を持ち、底部には高台が貼り付いている。

SK146（図版 56）　119 は須恵器有台坏である。底部から直線的に立ち上がる深身の坏に方形の高台がやや踏ん張る形で貼り付けられている。本遺跡では古い様相を持つ。120 は須恵器無台坏で口縁に油煙痕が付着し灯明皿として使用されたとみられる。121 は須恵器長頸壺の頸部から口縁部で、断面に漆が付着し、漆継ぎをしていた可能性がある。122 は土師器長甕で、123 は土師器小甕の底部である。124 は土師器鍋で外面上半にカキ目、下半に平行タタキが施される。

SK205（図版 57）　125 は土師器無台椀である。器壁はやや厚く、体部は内湾しながら立ち上がる。

SK260（図版 57）　126 ～ 131 は土師器無台椀である。126 は身が深く、129 ～ 131 は口径がやや大きい。132 は内面黒色土器の無台椀の底部片である。

SK482（図版 57）　133 は土師器無台椀である。器壁は丁寧に撫でられている。134 は内面黒色土器の無台椀である内外面ヘラミガキが施され、外面底部付近にはヘラケズリが施されている。

SK 6（図版 57）　135 は須恵器無台坏で器高が低く、体部は外に大きく開く。136・137 は土師器無台椀で 136 は内外面にヘラミガキが施されている。

SK 6B（図版 57）　138・139 は須恵器無台坏で、138 は底部外面に「×」の墨書がある。140 は土師器無台椀でＢ２類である。141 は土師器長甕で内面にカキ目が施される。

SK42（図版 58）　142 ～ 145 は土師器無台椀である。142・144 は油煙痕が残り、灯明皿として使われた可能性がある。147 は土師器の鉢である。外面底部付近および底部切り離し後ヘラケズリが施される。148 は須恵器の大型の甕で、口径 45㎝を測る。外面には平行タタキが施されるが、内面上半は同心円当て具痕が見られ下半部はハケ目が施される。

SK48（図版 58）　149 ～ 151 は須恵器無台坏で体部が外に開く。152 は土師器小甕で口縁端部は内側に屈曲している。

SK151（図版 59）　153 は須恵器無台坏で体部外面に墨書があるが、判読できなかった。

SK210（図版 59）　154 は須恵器の横瓶の胴部片で体部外面に平行タタキが施される。155 は土師器鍋で口縁部は外側に屈曲し、口縁端部は丸くおさまる。

SK216（図版 59）　156 は土師器無台椀の底部片である。157 は内面黒色土器の無台椀で、内外面にヘラミガキが施される。158 は土師器鍋で口縁部に繊維が付着しており、その上から漆が付着している。

SK259（図版 59）　159 は須恵器無台坏で、器高が低く体部が外に開く。

SK361（図版 59）　160 ～ 163 は土師器無台椀である。160 は身が深い形態になり、他は口縁端部が外反する。162・163 は内面と外面口縁部に漆が付着しており、漆パレットとして使われた可能性がある。

SK342（図版 60）　164 ～ 170 は土師器無台椀である。164 は油煙痕が残っており灯明皿と考えられる。171 は土師器有台椀になるものと考えられる。口縁端部は外反し、内外面が丁寧に撫でられている。172・173 は土師器小甕である。172 は状態が悪く体部表面が剥落している。173 は小甕としてはやや大きい形態で、下半部はヘラケズリが施されている。166 ～ 169・173 は小ピットからの出土である。

SD347（図版 60）　174 ～ 176 は土師器無台椀である。175・176 は口縁端部が外反する。177 は内面黒色土器の有台椀で外に開く高台が付く。178 は緑釉陶器の椀である。全面に淡緑色の釉薬が掛かり、胎土は暗青灰色で、底部には有段輪高台が付くことから、近江産と考えられる。179 は土師器長甕の口縁部である。

SK365（図版 60）　180 は土師器有台鉢である。口縁部は外反し端部は上方に折れ曲がっている。底部には細長い高台が張り付く。181 は土師器小甕である。外面底部付近にヘラケズリが施される。

SK378（図版 61）　182 は土師器長甕である。内外面にカキ目が施される。

SK396（図版 61）　183・184 は土師器無台椀で、体部は内湾しながら立ち上がり、183 は丁寧に撫でられている。

SE677（図版 61）　185 ～ 187 は土師器無台椀である。186 は作りが粗雑で、器壁が厚い。187 は身が深く鉢に近い形態で、底部はヘラで撫でられている。内面に条線が巡っており、金属器模倣の可能性がある。内外面前面に煤が付着しており、井戸を埋める儀式に使われた可能性が高い。

SD 3（図版 61）　188 は須恵器無台坏で、Ａ類に分類される。

SD 7（図版 61 ～ 66）　189・190 は須恵器坏蓋である。189 は扁平なつまみを持ち、190 は山笠形で端部が下方に屈曲し断面三角形になる。両者とも内面に墨痕が残っており、硯として利用されたとみられる。191・192 は須恵器有台坏である。192 は身が浅く椀に近い形態で、有段の高台が付く。193 ～ 230 は、須恵器無台坏で、全て佐渡小泊産である。口径は 11.5 ～ 14.0㎝であるが 12㎝台が主体である。底径は 6.4 ～ 8.3㎝、器高は 2.6 ～ 3.4㎝である。全て底部ヘラ切りである。201・206・208・219 ～ 221 は油煙痕が付着しており、灯明皿として使われたと考えられる。193・196 ～ 198・205・207・209・216・225・227・229 は墨書土器である。196・216 は体部外面に「三」、198・229 は底部外面に「卄」、205 は体部外面に「H」のようなもの、207 は底部外面に「前ヵ」、225 は底部外面に「千」、227 は底部外面に「寺」が書かれて

いる。他は、判読できなかった。215 は底部外面に「×」の漆書が認められる。230 は内面に墨痕が残り、硯に転用されていた。231 ～ 247 は土師器無台椀である。口径は 11.8 ～ 17.2㎝であるが、11.8 ～ 13.6㎝と 14.5 ～ 17.2㎝の大きく２法量に分けられる。底径は 5.0 ～ 8.2㎝に分布し、器高は 3.4 ～ 6.1㎝に分布するがほとんどが 4.0㎝を超える。231 ～ 236・245 はヘラミガキやヘラケズリ、底部ヘラケズリなどの再調整が施される。246 は作りが粗雑である。244 は底部に段を持つような形態となっており、緑釉陶器椀の模倣の可能性がある。233・235・241・243 は油煙痕が残り、灯明皿として使われたとみられる。246・247 は墨書土器で、体部外面に書かれているが、内容は判読できなかった。248・249 は内面黒色土器無台椀で、249 は底径が大きい。250 は須恵器長頸壺の胴部で、高台が欠損している。251 ～ 259 は土師器小甕である。すべてロクロ成形で、底部の確認できるものは回転糸切りであるが、255 は静止糸切りである。260 ～ 269 は土師器長甕である。260 ～ 267 はロクロ成形で、全体を知りえるものはないが、底部が丸底になると思われる。268 は、非ロクロ成形で、ハケ目調整される。口縁部は大きく外反し、端部は平坦になっている。270 は甑の底部と見られる。外側に開く形態でロクロ成形である。271 ～ 274 は土師器鍋である。底部を欠損しているが丸底になるものと考えられる。全てロクロ成形で下半分に平行タタキが見られる。

SD 8（図版 67）　275 ～ 277 は土師器無台椀である。275 は内外面ヘラミガキが施され、底部もヘラケズリされている。277 は底部付近にヘラケズリが見られる。278 は内面黒色土器の無台椀で、体部が外に大きく開く。279 ～ 281 は土師器小甕である。279 と 280 は接合はしないが同一個体である。279・281 ともに受け口状の口縁部である。282 は土師器長甕で、口縁部はゆるい受け口状になる。体部下半には外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が見られる。283 は土師器鍋で、口縁端部はわずかにつまみあげられる。

SD97（図版 67）　284 は須恵器有台坏である。方形の高台がやや内傾して貼り付く。

SD131（図版 67）　285 は須恵器無台坏である。底部片のみだが器壁は薄い。底部外面に「×」の墨書がある。

SD153（図版 67）　286 は須恵器無台坏である。体部外面及び底部内面に「土」のような墨書が見られるが、内容は判読できない。287 は土師器小甕である。内外面の口縁部に煤・油煙痕が付着している。

SD267（図版 67）　288 ～ 290 は須恵器無台坏で、全て墨書土器である。288 は底部外面に「廾」と考えられる墨書、289 は体部外面に上半は不明だが下半は「十」、290 は体部外面に「巾」が書かれている。291 は、土師器長甕の口縁部で、わずかに受け口状になる。

SD273（図版 68）　292 は須恵器無台坏である。底部外面に「〒」のような墨書が認められる。「千」字の変形したものと考えられる。在地産とみられる。

SD302（図版 68）　293 は須恵器無台坏で、底部内外面に墨書が認められる。内面は「×」であろうか。外面は判読できなかった。

SD480（図版 68）　294 は須恵器無台坏で、底部から体部にかけては丸みを帯びている。295 は土師器無台椀である。

溝群 2（図版 68）　296･297･300 は須恵器無台坏である。300 は底部外面に「廾ヵ」が墨書されている。また、内面には墨痕が残っており硯として転用されていた。298 は土師器小甕の底部である。299 は土師器長甕の口縁部で、断面に漆が付着しており漆継ぎをした可能性がある。

溝群 3（図版 68・69）　301・302・306 は須恵器無台坏である。全て体部が外側に大きく開く形である。304・305・307・308 は土師器無台椀である。全てＢ類に分類され 304 はヘラミガキが、305 は外面底部付近にヘラケズリが施される。303 は須恵器小壺で、方形の高台が付き内端接地している。口縁部は少し外に開きながらまっすぐ伸びる形態である。309・310 は土師器長甕である。311・312 は土師器鍋である。

311 は口縁端部が上方につまみ出され、312 は平坦面を形成している。

溝群 4（図版 69）　313 は須恵器坏蓋で、山笠形で端部を下方に折り曲げている。内面にわずかに墨痕が残り硯として使用された可能性がある。314 ～ 316 は須恵器無台坏である。314 は口径が 11.0㎝と小さい。315 は在地産とみられる。

溝群 5（図版 69）　317 は須恵器無台坏である。底部外面に墨書があるが、欠損部が多く判読不能である。318 は須恵器坏蓋である。内面に墨痕が残り、硯として転用された。319 は土師器無台椀で、内面はヘラミガキ、外面底部付近にヘラケズリが施される。

溝群 6（SX4）（図版 70）　320 は須恵器有台坏である。短い方形の高台が付き、身は深い形態である。321 ～ 324 は須恵器無台坏である。いずれも比較的身が浅く体部が外側に開いている。322・324 は油煙痕が付着しており、灯明皿として使われたと思われる。325・326 は土師器無台椀である。325 も灯明皿として使われたと考えられる。326 は内面がヘラミガキされ、丁寧な作りである。327 は口縁部しかないが有台鉢になると考えられる。口縁部はゆるく受け口状になっている。328・329 は土師器小甕である。いずれもロクロ成形で 328 は外面が剥離している。330 は土師器長甕の口縁部である。

P156（図版 70）　331 は土師器無台椀である。底部外面に墨書が見られるが欠損部が多く判読不能である。

P278（図版 70）　332 ～ 334 は土師器無台椀である。332 は丸みが強いＡ類、333・334 は口縁端部が外反し、334 は作りが粗雑である。

P527（図版 70）　335 は土師器無台椀で、底径がやや大きい。336 は土師器長甕で、口縁部は「く」の字に外反する。

SX 1（図版 71 ～ 74）　遺物は主に、基本層序のⅦ層に相当する覆土下部より出土した。また、SX 1 内の 14H・I、15H・I グリッドにおいて検出された風倒木痕（立木痕か）内からも遺物が出土しており（344・349・351・353・374・434）、ここでは一括して扱う。337 ～ 341 は須恵器無台坏である。338 を除く 4 点が墨書土器である。337 は底部外面に「×」、339 は底部から体部にかけての外面に「嶌」が、340 は体部外面に「三」が書かれている。341 は底部外面に書かれているが、判読不能である。342 は土師器有台椀である。口縁部は大きく外反し、底部は長い高台が外側に開くように付いている。343 ～ 356 は土師器無台椀である。口径は 11.0 ～ 16.7㎝であり、11.0 ～ 12.1㎝と 13.6 ～ 16.7㎝の大きく 2 法量に分かれる。底径は 4.0 ～ 6.6㎝で、5.0 ～ 5.5㎝と 6.2 ～ 6.6㎝の大きく 2 法量に分かれる。器高は 3.1 ～ 6.2㎝である。343 は底部外面に「千」が墨書されている。345・346 はヘラミガキや底部付近および底部の外面にヘラケズリが施される。357 は仏鉢型土器である。底部は欠損しており、全体を知ることはできないが 487 のように平底になるものと思われる。体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁端部は内側に屈曲した形態になっている。358 ～ 360 は内面黒色土器の無台椀である。359 は内面に漆がきれいに付着しており、漆塗りの椀の可能性もあろう。360 は器厚がやや厚い。361 ～ 363 は須恵器長頸壺である。全形を窺える資料はないが、全てロクロ成形で、肩が丸みを帯びており、高台を持つ形態になると思われる。361 は体部外面に漆が付着している。364 は須恵器直口壺で SI429・SD 7 ・SD431・包含層から出土の破片と接合している。もともと SI429 で使われていた可能性もあろう。口縁部は欠損しているが、肩は丸みを帯び、底部は平底となる。胴部は外面に格子目タタキ、内面に同心円文当て具痕が残り、胴部外面の底部付近にはヘラケズリが施される。365 ～ 368 は土師器小甕の底部片である。いずれも回転糸切りである。369 ～ 371 は土師器長甕の口縁部である。いずれもロクロ成形で、下半は欠損しているが、丸底になる器形である。371 の口縁端部は外面下方につまみ出されている。372 ～ 377 は土師器鍋である。全てロクロ成形で内外面にカキ目を残

すものがほとんどである。372 ～ 375 は口縁端部を上方あるいは下方につまみ出し、376・377 は単口縁となり、端部が丸くなるものと平坦になるものがある。

SX120（図版 74）　378 は土師器無台椀で、丁寧に撫でられている。379 ～ 381 は土師器小甕である。381 は底部の切り離しは静止糸切りで、胴部は球胴型になる。

SX400（図版 74）　382 は須恵器の無台坏である。底部外面に「×」が漆で書かれている。

遺構外（図版 75 ～ 87）　383・384 は須恵器坏蓋である。山笠形の身に扁平なつまみが付き、端部は下方に折れ曲がる。383 は内外面に、384 は内面に墨痕が残り、硯として使われたものである。385 ～ 389 は須恵器有台坏である。短い方形の高台を持ち、外端接地するものがほとんどであるが、388 はやや丸みを持った高台で内端接地する。また、388 は在地産とみられる。387 は底部外面の高台内に墨痕があり、硯に転用されていたものである。390 ～ 412 は須恵器無台坏である。口径は 11.6 ～ 14.4㎝であるが、391・408 が約 14㎝と大きい。残りは 13.0㎝以内におさまる。底径は 6.4 ～ 8.1㎝であるが、ほとんどが 7 ㎝台である。器高は 2.0 ～ 3.6㎝である。全て底部ヘラ切りで、ほとんどが佐渡小泊産であるが、407 は在地産とみられる。392・400・404 は油煙痕が付着しており、灯明皿として使われたと思われる。411 は内面に墨痕が残っており、硯として転用されている。390・391・397 ～ 399・412 は墨書土器である。391・412 は体部外面及び底部外面に「卄」が、399 は底部外面の端に「×」が書かれている。その他は、体部や底部の外面に文字や記号のようなものが見られる。401 は底部外面に「×」とみられる漆書が残っている。408 は内面に漆がわずかに付着している。413 は体部がまっすぐ上に伸び、口縁部は外側に屈曲し端部は上方に屈曲して受け口状の口縁になっている。形態からは折縁坏のような形態であるが、口径が小さく、焼台の可能性もあろう。414 は土師器の坏蓋である。端部の小片しかないため口径は出せなかったが、山笠形で端部が下方に屈曲する須恵器の模倣である。415 は有台皿で 1 点のみの出土である。口径の小さな皿に長めの高台が貼り付く形態で、灰釉陶器皿の模倣の可能性がある。416 ～ 418 は土師器有台椀の底部で、いずれも外に開く高台が付く。419 ～ 462 は土師器無台椀である。口径は 10.4 ～ 16.7㎝、底径 4.2 ～ 7.6㎝、器高 3.3 ～ 5.9㎝である。Ａ類は 420 の 1 点で、他はＢ類がやや多くＣ、Ｄ類がほぼ同数である。再調整を施すものも定量存在する。422・426・457・461 は油煙痕が付着し、灯明皿として使われたと思われる。423・438・439・441・448 は墨書土器である。423 は底部外面に「几」のような文字とも記号ともみられる墨書が書かれている。438 は底部外面の端に「加」が、439 は体部外面に「千」が、441 は体部外面に「大」が書かれている。448 は「千」のように見えるが、全体が窺えず判読できない。423 は内面に多量の漆が付着しており、赤外線撮影を行ったところ、墨書が確認され漆紙が付着していることが判明した。紙はそのほとんどが失われており、器面付近にわずかに残った部分に墨書が確認された。小林昌二氏に見ていただいたところ、「魄」と読めそうな文字が見えるとの御意見をいただいた。419・440 は内面に漆が付着している。463 ～ 465 は内面黒色土器の有台椀である。全形が分かるものは 463 のみで、残りは底部片である。463 は口縁部が外反しやや深身の椀に外に開く高台が付く。465 は内面に漆が付着している。466 ～ 470 は内面黒色土器の無台椀である。466 は口径 17.0㎝で身も深く、大振りである。また、内面に漆が付着している。471 は須恵器の小壺で底部片である。全形は窺えないが 303 に類似した器形になると思われる。底部には方形で外に開き内端接地する高台が、貼り付けられている。472 は須恵器広口壺である。頸部片のみが出土している。473・474 は長頸壺である。全体を知りえるものはないが、いずれも肩に丸みを帯び、長い頸部に外反する口縁が付くものである。473 は胴部下半にヘラケズリが施されている。475 は突帯付壺である。この 1 点のみの出土である。胴部下半とみられ、底部には、欠損しているが、高台が付く。胴部には、突帯が巡り、

等間隔に切り込みが入っている。詳細は不明であるが、器形は上越市今池遺跡出土の有耳壺や長岡市八幡林遺跡出土の短頸壺と類似したものになると考えられる。しかし、上記２例は突帯部分に耳が付くものであるが、475 は耳が付かず切り込みが入る。これが耳の省略形であるとすれば、上記２例よりも後出するものと考えられる。476 は須恵器横瓶の胴部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が残る。477 ～ 480 は須恵器甕である。477 ～ 479 は口縁部で、いずれも外反し端部を外側につまみ出す。477 は外面に「＊」のヘラ記号がある。480 は胴部で SK493 出土片とも接合する。外面に格子タタキ、内面上半に同心円、下半に平行当て具痕が残る。481 ～ 483 は有台鉢である。いずれも破片資料で全形は窺えないが、いずれも 180 に類似した形態になるものと思われる。484 ～ 486 は鉢の底部片か。487 は仏鉢型土器である。底部は平底で、丸みを持って立ち上がり、口縁端部は内側に屈曲する。SX 1 出土の 357 と類似する。488 は椀、489 は甕、490 は高台が付く壺のミニチュア土器である。491 ～ 509 は土師器小甕である。491 ～ 506 はロクロ成形で、底部を確認できるものでは、切り離し技法が回転糸切りと静止糸切りの２種類がある。また、胴部にカキ目が見られるものもある。507 ～ 509 は非ロクロ成形で、体部外面に縦方向のヘラケズリがみられる。ロクロ成形の小甕のように口縁部が「く」の字状に屈曲するものはなく、弱く外反し端口縁をもつ。510 は、土師器の甕である。SB317 － P 5 及び SK280 からも破片が出土している。また、ほとんどが包含層であるが、11K グリッドを中心に SB317 を含めてその周辺のグリッドからの出土であることから、SB317 で使用されていた可能性が高い。須恵器の甕の形態と同じく丸い胴体に「く」の字状に屈曲した広い口縁が付き、基本的には須恵器模倣の甕である。しかし、口縁端部を見てみると、須恵器では外に開くが、これは内側に屈曲し、土師器煮炊具によく見られる口縁端部の形態である。511 ～ 534 は土師器長甕である。ロクロ成形によるもので、丸底になるものである。胴部上半はカキ目を残すものもあり、胴部下半は外面に平行タタキ、内面に同心円当て具などの痕跡を残す。516 は胴部外面に斜位の工具痕が残る。533 は内面にハケ目がみられる。535 ～ 537 は土師器羽釜型土器である。長い胴部で口縁部直下に鍔が付く形態である。３点のみの出土で全形が分かるものは出土しなかった。535 は非ロクロ、536・537 はロクロ成形である。鍔の断面形で２種類に分類される。535 は断面三角形の鍔が付き、鍔から下の胴部にはヘラケズリが施される。ヘラケズリは下から上への縦方向であり、鍔にヘラがぶつかった痕跡が残る。これらの特徴は、群馬県北部で盛行する月夜野型［中沢 1986］と一致する。また、魚沼市金屋遺跡からまとまって出土しており、伝播経路が窺える。536･537 は細長い鍔が付くものである。小片のため口径は出せなかった。538 ～ 540 は甑の底部である。538・540 は内傾し、539 はまっすぐの端部である。また、外面に煤が付着しているが、底部から約 2.7㎝までの部分には煤が付着せず、何かに乗せて使用していたものと考えられる。539・540 は胴部外面にヘラケズリが見られる。541 ～ 548 は土師器鍋である。全てロクロ成形によるもので、丸底になるものと思われる。上半部はロクロナデとカキ目がみられ、下半は外面平行タタキ、内面同心円当て具痕やハケ目が残る。544・546 は外面に一部ヘラケズリが残る。548 は他に比べて、深い形態になる。549 ～ 553 は灰釉陶器である。549 は内面に段を持ち、口縁部にユビオサエがある輪花段皿である。釉薬は透明に近く漬け掛けである。550 は底部で皿であろうか。549 とは同一個体ではないと思われる。両者とも東濃産とみられ光が丘１号窯～大原２号窯の時期に位置づけられる。551 ～ 553 は長頸壺でいずれも猿投産とみられる。551 は頸部で、２次焼成を受けている。552 は繭型の胴部である。553 は底部で端部が丸い高台が付く。554・555 は緑釉陶器の椀である。いずれも軟陶で濃緑色の釉薬が掛かっており、畿内産と思われる。554 は椀の口縁部で、555 は有台椀の底部で、削り出しの円盤状高台である。

第３節　土製品

円筒型土製品（図版 87）　556・557 は円筒型土製品で、包含層からの出土である。非ロクロ成形である。556 は高さ 4.5㎝と低く、上下端部は平坦になっている。煤が付着しているため、カマド等で使用されたものと思われる。557 は端部片で平坦になっている。

土錘（図版 87・88）　土錘は、総点数 171 点が出土した。管状（558 ～ 569・577 ～ 592）と、球状（570 ～ 576・593・594）の大きくわけて２種類の形態に分かれる。内訳は、管状土錘が 143 点、球状土錘が 28 点である。管状土錘は長さが 2.4 ～ 7.4㎝に分布するが、長さにより 4.2㎝未満を小型、4.2 ～ 5.1㎝を中型、5.2㎝以上を大型として分けることができる。太さは、概ね 1.0 ～ 2.0㎝の間におさまり、大きな違いはない。端部を見てみると、平坦に加工しているもの（558・561・563・565・566・568・579・581・586 ～ 588）、わずかに面になるもの（560・567・582・591・592）、加工されないもの（564・569・580・583・585・589・590）に分けることができる。端部の加工の違いによる数量の違いや、サイズの偏りなどはみられない。球状土錘は、管状土錘に比べて数は少ない。サイズは最大径２㎝前後で、比較的まとまっている。

第４節　石製品

石錘（図版 88）　595 は包含層からの出土である。本資料１点のみである。やや歪んだ球体の石に抉りを入れてつまみ状の部分を作り出している。サイズは長さ 4.4㎝、最大径 4.3㎝、重量 81.9 ｇで、石材は砂岩である。一部赤彩されている。抉りの部分に糸等が巻けるような形状になっていることから、錘と想定した。

権状錘（図版 88）　596 は包含層からの出土である。石材は砂岩である。形態はやや縦長の三角形で、頂部は丸みを持つ。もう少し厚さがあったと思われるが欠損している。また、被熱している。表面は全面丁寧に研磨され、上部に径１㎝弱の孔が穿たれている。

砥石（図版 88）　14 点あり、全て遺構外から出土した。遺存状況の良好な７点を図示した。597 ～ 603 の内、602 以外は凝灰岩である。602 は砂岩である。597 ～ 601 は四角い棒状に近い形態で、複数面を砥面として使用されている。また、598 を除いて擦痕が残っている。602 は撥形の扁平な形状で、広い面の表裏のほか狭い面の側面も使用されている。603 は長楕円形の石材を使用しており、表面と左側面は全面が使われ、真ん中が最も窪んでいる。また、持って砥ぐには石が大きいことから置いて使われたものと思われる。表面にはやや深めの溝が入っており、細いものを研いだ痕跡がある。

第５節　木製品

柱根（図版 89・90）　全部で 22 点出土している。その内、実測に耐えうるもの 12 点を掲載した。樹種同定を行っているので詳細は「第Ⅵ章第１節」で述べているが、ほとんどがクリである。SB608 － P ５から出土した 614 はヤマグワ、掲載していないが SB317 － P15 出土の柱根はサクラ属であった。木取りは多くが芯持材で、他に分割状や半裁状のものがある。604 ～ 611 は SB317 からの出土である。全て底面を平らに加工している。604・607 は底部付近に抉りが入っている。612・613 は SB348 からの出土である。612 は底面を平らに加工している。木取りは芯持丸木である。613 は、底面を両側から斜めに加工し、尖らせている。615 は P426 からの出土で、木取りは芯持丸木である。底面は少し尖らせるように加工されている。

漆桶（図版 90）　616 は包含層からの出土で、漆桶である。本来は、曲げ物状の木製品に漆が何重にも重なって付着していたものと考えられ、木製品の部分が朽ち果てた結果、漆の部分だけが残ったものと考えられる。後述の四柳氏の分析（第Ⅵ章第３節）によれば生漆を保管していた小型の容器であることが判明しており、

本遺跡で漆を使った作業が行われていたことが窺える。

その他（図版 90）　617 は包含層からの出土である。隅丸長方形の板に柄が付くような形状である。厚さは薄く約 0.5㎝である。618 は棒状の木製品で、端部を加工し尖らせている。619 は包含層出土で曲物の蓋板である。２ヶ所に小さい孔が穿たれており、縁辺付近に穿たれている孔には側板との連結に使われたと思われる樹皮がわずかに残存している。621 は SE677 からの出土で、弓状に加工された木製品である。樹種はトネリコ属でわずかに樹皮が残っている。大きさは、直径約 1.5㎝、長さ 75㎝以上のものである。実際に弓かどうかは、上下先端部が欠損しているため、判断できない。620 は木簡である。「さけ□たし」と読める。Ⅶ層からの出土であるが、字体から近世の所産であると考えられる。

第６節　鍛冶関連遺物

炉壁・羽口・椀形鍛冶滓・鉄滓・被熱粘土塊が出土したが、総重量は 2.2kgと少量である。内訳は炉壁（滓付含む）0.03kg、羽口 0.49kg、椀形鍛冶滓１kg、鉄滓 0.17kg、被熱粘土塊 0.47kgとなる。炉壁には鍛冶滓が付着する資料も見受けられた。また、形状より椀形鍛冶滓とその他の鉄滓に分類したが、細片のため形状の判断が困難で、本来椀形鍛冶滓の一部であったものも鉄滓に含まれる可能性がある。点数による内訳では羽口の 17 点が最も多く、椀形鍛冶滓の 13 点がこれに次ぐ。鍛冶関連遺物全体のおよそ６割が SX １を含む自然地形ないしは遺構外からの出土であり、特定の建物ないしは遺構に集中する傾向は認められなかった。また、被熱粘土塊に限ると３割が竪穴建物出土で、遺構外出土量が２割を切る。鍛冶関連としてだけではなくカマドの構築材が含まれる可能性が高い。

羽口（図版 90）　622 は SB348 － P3 上面から出土した。先端部が欠損し、体部のみが残存する。最大径 6.9㎝、通風孔径 2.4㎝を測る。先端部側は被熱し黄灰色から暗灰色を呈しており、先端部寄りが発泡する。胎土色は灰色～橙色を呈し、内外面ともに先端部－基部方向の成形痕が残る。胎土には軟質の白色粒子や砂粒を含む。623・624 は共に SX1 の覆土下層から出土した。２点とも同一グリッドからの出土であり、同一個体である可能性がある。２点とも先端部から体部にかけての破片で、外面は黒色に滓化・発泡する。体部は黄灰色を呈し、内面は橙色である。胎土にはスサが混ざる。623 では通風孔部は径２㎝以上となる。

椀形鍛冶滓（図版 90）　625 は SD ７から出土した。同一グリッドから出土した２片が接合した。最大径 8.6㎝を測る。上面中央部付近は窪み、下面中央部付近が椀形突出する。上面側の側面付近および下面に径 0.2㎝以下の気泡が認められる。また、上面付近は径 1.5㎝程度の気泡が重なる。

第７節　金属製品・銭貨

出土量はわずかであり、帯金具・鉄釘・板状鉄製品・銭貨合わせて６点であった。ここでは帯金具および銭貨を報告対象とし図示した。

帯金具（図版 90）　626 は巡方の裏金具であり、SI212 のカマド底面より出土した。平面方形の薄板状を呈し、一辺 2.9㎝、厚さ 1.5㎜、最大厚４㎜を測る。表裏面共に全体が緑青に覆われており、表裏面とも平滑ではない。Ｘ線撮影により、四隅よりおよそ 0.5㎝内側の位置に４箇所の鋲孔が認められた。ただし、右下の鋲孔のみ下辺に近接するように穿たれており、鋲孔を繋ぐプランは正方形にならない。孔径は 0.18㎝を測る。写真では鋲孔が二重円状を呈していることから、鋲足の一部が残存している可能性が考えられる。

銭貨（図版 90）　627 は遺構外 15K17 グリッド、Ⅶ層から出土した。元祐通寶（初鋳年 1086 年）で、銭文は篆書体が用いられている。背側は摩耗によるためか平滑である。

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　上条遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

（Ａ）はじめに

上条遺跡（新潟県長岡市上条町地内）は、信濃川右岸に分布する沖積地の微高地に立地する。本遺跡では、発掘調査の結果、９世紀後半から 10 世紀前半頃の集落であることが明らかとされており、竪穴建物跡や掘立柱建物跡、井戸跡のほか、畠跡と想定される小溝群、土坑墓や木棺墓、火葬墓などの遺構が検出されている。

本報告では、発掘調査成果から課題とされた、１）掘立柱建物跡の年代、２）柱根や木製品などの樹種および木材利用、３）古植生および植物利用、４）木棺墓・火葬墓とされる遺構の遺体埋納などの検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

（Ｂ）放射性炭素年代測定

１．試料

放射性炭素年代測定に供された試料は、２棟の掘立柱建物（SB317、SB348）に伴う木柱（柱材）４点である。SB317 試料は、Ｐ１、P11 の木柱２点が選択されており、面取りなどの加工痕が認められる芯持材である。一方の SB348 試料は、Ｐ４A、P11 の木柱２点が選択されており、いずれも芯持丸木である。

試料の採取は、資料に認められた加工痕を避け、観察範囲内に残存する最外年輪から２～３年内側の３～４年分に相当する部位を対象とし、当該箇所より採取した木片を測定に供している。

２．分析方法

測定試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、１g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}C/^{12}C$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ

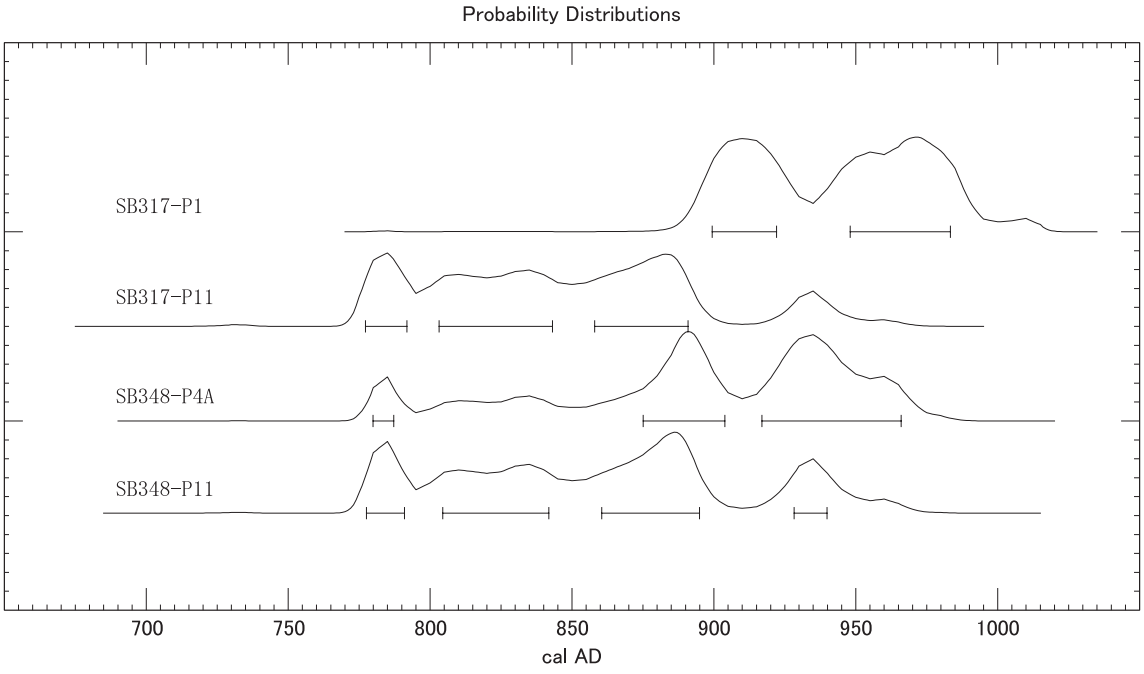
Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 7.0.1 のマニュアルにしたがい、１年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正結果はσ・2σ（σは統計的に真の値が 68.2% の確率で存在する範囲、2σは真の値が 95.4% の確率で存在する範囲）の値を示す。また、表中の相対比は、σ・2σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表された値を記す。

試料	測定年代 (yrBP)	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果			相対比	測定機関 Code No.
SB317-P1 柱根 木材(クリ)	1,100±20	-27.68±0.43	1,098±24	σ	cal AD 899 - cal AD 922	cal BP 1,051 - 1,028	0.405	IAAA-141364
					cal AD 948 - cal AD 983	cal BP 1,002 - 967	0.595	
				2σ	cal AD 890 - cal AD 994	cal BP 1,060 - 956	1.000	
SB317-P11 柱根 木材(クリ)	1,170±20	-26.63±0.61	1,172±23	σ	cal AD 777 - cal AD 792	cal BP 1,173 - 1,158	0.182	IAAA-141365
					cal AD 803 - cal AD 843	cal BP 1,147 - 1,107	0.421	
					cal AD 858 - cal AD 891	cal BP 1,092 - 1,059	0.397	
				2σ	cal AD 773 - cal AD 898	cal BP 1,177 - 1,052	0.925	
					cal AD 924 - cal AD 945	cal BP 1,026 - 1,005	0.075	
SB348-P4A 柱根 木材(クリ)	1,150±20	-28.00±0.52	1,147±24	σ	cal AD 780 - cal AD 787	cal BP 1,170 - 1,163	0.060	IAAA-141366
					cal AD 875 - cal AD 904	cal BP 1,075 - 1,046	0.353	
					cal AD 917 - cal AD 966	cal BP 1,033 - 984	0.587	
				2σ	cal AD 777 - cal AD 792	cal BP 1,173 - 1,158	0.067	
					cal AD 802 - cal AD 846	cal BP 1,148 - 1,104	0.130	
					cal AD 855 - cal AD 972	cal BP 1,095 - 978	0.803	
SB348-P11 柱根 木材(クリ)	1,160±20	-27.38±0.59	1,164±23	σ	cal AD 778 - cal AD 791	cal BP 1,172 - 1,159	0.157	IAAA-141367
					cal AD 805 - cal AD 842	cal BP 1,145 - 1,108	0.313	
					cal AD 860 - cal AD 895	cal BP 1,090 - 1,055	0.421	
					cal AD 928 - cal AD 940	cal BP 1,022 - 1,010	0.109	
				2σ	cal AD 774 - cal AD 901	cal BP 1,176 - 1,049	0.839	
					cal AD 920 - cal AD 953	cal BP 1,030 - 997	0.157	
					cal AD 958 - cal AD 961	cal BP 992 - 989	0.004	

第４表　放射性炭素年代測定及び暦年較正結果



第 10 図　暦年較正結果（１σ）

３．結果および考察

掘立柱建物を構成する柱根の同位体効果による補正を行った測定年代（補正年代）は、SB317 － P 1 が 1,100 ± 20yrBP、 同 P11 が 1,170 ± 20yrBP、SB348 － P4A が 1,150 ± 20yrBP、 同 P11 が 1,160 ± 20yrBP である（第４表）。また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果（1 σ）は、SB317 － P 1 が calAD 899 - calAD 983、同 P11 が calAD 777 - calAD 891、SB348 － P4A が calAD 780 - calAD 966、同 P11 が calAD 778 - calAD 940 である（第４表・第 10 図）。

上条遺跡は、発掘調査成果から 9 世紀後半～ 10 世紀前半頃の集落と推定されている。２棟の掘立柱建物に伴う柱根の暦年較正年代（1 σ）は、SB317 が 9 世紀末から 10 世紀後半頃（P 1）および 8 世紀後半から 9 世紀後半頃（P11）、SB348 が 8 世紀後半から 10 世紀後半頃（P4A）および 8 世紀後半から 10 世紀前半頃（P11）までの範囲（第 10 図）を示しており、上記した調査所見より推定されている集落の年代観とも概ね整合する。なお、今回の得られた年代の詳細な評価にあたっては、資料に樹皮が認められず、表面に面取りなどの加工が認められることや、これらの加工痕を避けて残存する最外年輪のやや内側より試料を採取していることなどから、実際の使用（伐採）年代より古い年代を示している可能性があることを考慮する必要がある。

（Ｃ）樹種同定

１．試料

試料は、３棟の掘立柱建物に伴う柱根 20 点（SB317;16 点、SB348; 3 点、SB608; 1 点）、井戸跡（SE677）から出土した弓状加工品 1 点、立木痕より出土した自然木２点（SX399、SX400）、さらに遺構外より出土した曲物蓋板 1 点（11E3 Ⅶ層）と遺構外の地山より出土した自然木２点（11K11、12K3）の計 26 点である。各資料の詳細（名称、木取りなど）は、結果とともに第５表に併記したので参照されたい。

２．分析方法

資料の木取りを観察した後、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、［島地・伊東 ,1982］、［Wheeler 他 ,1998］、［Richter 他 ,2006］を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、［林 ,1991］や［伊東 ,1995;1996;1997;1998;1999］を参考にする。

３．結果

同定結果を第５表に示す。分析に供された柱根や木製品および自然木は、針葉樹 1 分類群（スギ）と広葉樹 6 分類群（オニグルミ、クリ、ヤマグワ、カツラ、サクラ属、トネリコ属）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ（*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔

遺構名等	グリッド	層位	器種	木取り	種類（分類群）
SB317-P1			柱根	芯持材（面取？）	クリ＊
SB317-P2			柱根	分割状	クリ
SB317-P4			柱根	芯持丸木	クリ
SB317-P6			柱根	半裁状	クリ
SB317-P8			柱根	芯持丸木	クリ
SB317-P9			柱根	分割状（破片）	クリ
SB317-P11			柱根	芯持材（面取）	クリ＊
SB317-P13			柱根	分割状	クリ
SB317-P14			柱根	半裁状	クリ
SB317-P15			柱根	芯持材	サクラ属
SB317-P19			柱根	芯持材（破片）	クリ
SB317-P20			柱根	芯持丸木	クリ
SB317-P21			柱根	芯持丸木	クリ
SB317-P22			柱根	半裁状	クリ
SB317-P23			柱根	破片	クリ
SB317-P24			柱根	半裁状	クリ
SB348-P4A			柱根	芯持丸木	クリ＊
SB348-P6			柱根	分割状	クリ
SB348-P11			柱根	芯持丸木	クリ＊
SB608-P5			柱根	芯持材	ヤマグワ
SE677			弓状加工材	芯持丸木	トネリコ属
SX399			自然木	芯持材	カツラ
SX400			自然木	芯持材	オニグルミ
遺構外	11E3	Ⅶ層	曲物蓋板	柾目	スギ
	11K11	地山層	自然木	芯持材	カツラ
	12K3	地山層	自然木	芯持材	カツラ

＊放射性炭素年代測定試料

第５表　樹種同定結果

はスギ型で、１分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura）　クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または 2-3 個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1-3 細胞幅、1-40 細胞高。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）　クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は 3-5 列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または 2-4 個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6 細胞幅、1-50 細胞高。

・カツラ（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）　カツラ科カツラ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-2 細胞幅、1-30 細胞高。

・サクラ属（*Prunus*）　バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または 2-6 個が複合、年輪界に向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5 細胞幅、1-30 細胞高。

・トネリコ属（*Fraxinus*）　モクセイ科

環孔材で、孔圏部は 1-3 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、厚壁の道管が単独または２個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3 細胞幅、1-30 細胞高。

４．考察

（１）柱根・木製品

掘立柱建物を構成する柱根や木製品の樹種同定の結果、針葉樹のスギ、落葉樹のクリ、ヤマグワ、サクラ属、トネリコ属の計５種類が認められた。スギは、主に低地に生育する常緑高木で、木材は木理が通直

で割裂性が高く、加工は容易である。クリとサクラ属は、二次林などに生育する落葉高木で、クリは重硬で強度と耐朽性が高く、サクラ属は重硬・緻密で強度が高い。ヤマグワは、河畔等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。トネリコ属は、湿地などに生育する落葉高木で、木材は重硬で強度が高い。

遺構・用途別の樹種構成についてみると、廂付掘立柱建物とされる SB317 の木柱 16 点は、形状や木取りなどから芯持丸木、芯持材、分割状（半裁状を含む）とに分類され、さらに芯持材の一部には面取りなどの加工をする資料も認められた。これらの柱根は、P15 にサクラ属が認められた他は、全てクリであったことから、強度が高く、腐りにくい木材の利用が推定される。また、P15 に認められたサクラ属も重硬であることから、クリと同様に強度が高いという材質などにより利用された可能性がある。

SB348 の木柱 3 点は、芯持丸木と分割状を呈する。これらの資料も全てクリであったことから、SB317 と同様の木材利用が推定される。一方、SB608 の柱根はヤマグワの芯持材であった。他の 2 棟には認められなかった樹種であるが、強度が高く腐りにくい木材を利用している点は共通する傾向と言える。

なお、［伊東・山田 ,2012］などにより本遺跡周辺の古代の調査事例についてみると、岩田遺跡（旧越路町）、江添 C 遺跡（旧吉田町）、馬越遺跡（加茂市）などで出土した柱材にはクリの利用が多く、今回の結果はこれらの傾向と調和的である。

木製品では、曲物蓋板がスギ、弓状加工材がトネリコ属に同定された。曲物蓋板は、スギの割裂性などを利用した木材利用と考えられ、同様の事例は新潟県内でも多くの報告がある。弓状加工材は、形状から弓そのものである可能性が指摘されている。新潟県内の古代の遺跡から出土した弓の調査事例についてみると、屋敷遺跡・蔵ノ坪遺跡（旧中条町）、桃川遺跡群（旧神林村）等で針葉樹のイヌガヤやカヤが認められている。樹種による器種の特定は困難であるが、今回の資料がトネリコ属であったことから強度を要する器種であると想定される。

（2）自然木

自然木は、立木痕より出土した資料（SX399、SX400）と遺構外の地山層から出土した資料とがあり、SX399 と遺構外試料がカツラ、SX400 がオニグルミに同定された。カツラやオニグルミは、河畔等に生育する落葉高木であることから、地山形成時にはカツラやオニグルミなどの落葉広葉樹を含む河畔林が分布していたと考えられる。また、花粉化石に認められたサワグルミ属や種実遺体に認められたトチノキなども渓畔林・河畔林を構成する分類群であることから、これらも周囲の河畔に生育していた可能性がある。

（D）花粉分析

1．試料

試料は、上記した掘立柱建物（SB348）の南側に位置する須恵器甕埋設遺構（SK42）より出土した須恵器甕内より採取された土壌（黒褐色シルト質細粒砂）1 点である。

2．分析方法

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9 ：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同

定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や［島倉 ,1973］、［中村 ,1980］、［三好ほか ,2011］等を参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

3．結果

結果を第 6 表に示す。SK42 の須恵器甕内土壌からは花粉化石がほとんど検出されず、検出された花粉化石も外膜が破損あるいは溶解するなど保存状態が悪い。わずかに産出した花粉化石の産状は、木本花粉はツガ属、サワグルミ属、ブナ属、草本花粉のガマ属、イネ科、アカザ科が、１～数個体認められた程度である。

なお、分析残渣中には、強分解～炭化した微細植物片が多く認められた。微細植物片のほとんどは母材の推定が困難な不明型であったが、分野壁孔が残る針葉樹（スギ）の組織片や、イネ科葉部に由来するとされる波状構造を持つもの［小椋 ,2007;2008 など］が確認された。

種類	SK42 須恵器甕内土壌
木本花粉	
ツガ属	1
サワグルミ属	1
ブナ属	2
草本花粉	
ガマ属	1
イネ科	7
アカザ科	1
不明花粉	
不明花粉	1
シダ類胞子	
ゼンマイ属	1
他のシダ類胞子	20
合　計	
木本花粉	4
草本花粉	9
不明花粉	1
シダ類胞子	21
合計（不明を除く）	34

第 6 表　花粉分析結果

4．考察

SK42 の須恵器甕内土壌からは、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、或いは取り込まれた花粉が消失したなどの可能性が考えられる。また、一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている［中村 ,1967、徳永・山内 ,1971、三宅・中越 ,1998 など］。試料の採取位置や花粉化石の保存状態などを考慮すると、堆積時に花粉や胞子が取り込まれ難かったことや、その後の経年変化により分解・消失したことなどが推定される。

なお、わずかに検出されたツガ属、サワグルミ属、ブナ属などの木本類は、周辺の山地・丘陵や河畔などの森林植生に由来すると考えられ、イネ科、アカザ科などの草本類は集落内やその周囲に分布した草地、水湿地生植物のガマ属は周辺に分布した水湿地などに由来する可能性があり、このような草地および水湿地環境の存在は、後述する（E）の種実同定結果からも示唆される。

（E）種実同定

1．試料

試料は、井戸跡（SE677）の最下層より出土した種実遺体 1 試料である。分析に供された試料は、植物片などを含む多数の種実遺体からなり、いずれも乾燥した状態にある。

2．分析方法

試料を粒径別に篩別けした後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本および［石川 ,1994］、［中山ほか ,2000］、［鈴木ほか ,2012］等を参考に実施し、部位・状態別に個数を数えて、結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管

する。分析残渣（植物片等）は、容器に戻して保管する。

３．結果

同定結果を第７表に示す。また、種実遺体各分類群の写真を図版１に示し同定根拠とする。

井戸跡（SE677）最下層より出土した種実遺体試料からは、被子植物６分類群 364 個の種実遺体が抽出・同定された。種実遺体以外の分析残渣は、植物片主体で、炭化材や昆虫、骨片等も確認された。

種実遺体群は、木本１分類群（トチノキ）１個と、草本５分類群（イネ科、カナムグラ、サナエタデ近似種、ミゾソバ、ボントクタデ近似種）363 個から成り、草本主体の組成を示す。木本種実は、落葉広葉樹で高木になる河畔林要素のトチノキの炭化した種子（種皮）の破片が１個確認され、残存径は 5.0mm を測る。草本種実は、道ばたや荒れ地などに生育するつる性一年草のカナムグラの核が 203 個（うち 43 個果皮残存）、一年草のサナエタデ近似種の果実が 10 個、水辺などのやや湿った場所に生育する一年草のボントクタデ近似種の果実が 78 個、ミゾソバの果実が 71 個確認された。

４．考察

井戸跡（SE677）最下層からは、木本１分類群（トチノキ）１個、草本５分類群（イネ科、カナムグラ、サナエタデ近似種、ミゾソバ、ボントクタデ近似種）363 個の種実遺体が確認された。種実遺体群の主体を占める草本類は、カナムグラやサナエタデ近似種などのやや乾いた場所にも生育可能な中生植物と、ミゾソバやボントクタデなどの湿生植物が確認され、いずれも明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群から構成される。これらは、おそらく井戸跡（SE677）周辺域の湿地などを含む草地環境に生育していたと考えられる。

分類群	部位・状態		10D-17 SE677 最下層	備考
木本種実				
トチノキ	炭化種子	破片	1	残存径5.0mm
草本種実(中生植物)				
イネ科	胚乳	完形	1	
カナムグラ	核(果皮残存)	完形	36	
		破片	7	
	核	完形	15	
		破片	145	
サナエタデ近似種	果実	完形	6	
		破片	4	
草本種実(湿生植物)				
ミゾソバ	果実	完形	26	
		破片	45	
ボントクタデ近似種	果実	完形	28	
		破片	50	
合計				
木本種実			1	
草本種実(中生植物)			214	
草本種実(湿生植物)			149	
種実合計			364	

第７表　種実同定結果

また、木本類で確認されたトチノキは、河畔林要素の落葉高木で、あく抜きすれば種子内の子葉が食用可能な有用植物である。トチノキは、当時の信濃川流域の河畔林に生育していたと考えられる。出土種子は破片１個のみであるが、炭化していることから人が利用した痕跡の可能性がある。

（Ｆ）リン酸・カルシウム分析

１．試料

試料は、木棺墓（SK205）および火葬墓（SK260、SK512）とされる遺構の覆土や地山より採取された土壌 19 点である。本分析では、上記した各遺構の性格として推定される遺体痕跡の有無の検討を目的として、土壌化学性、とくに遺体や骨成分を構成するリン酸やカルシウムの含量に着目した。なお、分析に供された試料の詳細（試料採取位置、土色、土性など）は、結果とともに一覧として第８表に記したので参照されたい。

２．分析方法

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法［土壌標準分析・測定法委員会,1986］に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

（１）分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して２mm の篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で４時間乾燥し、分析試料水分を求める。

（２）リン酸・カルシウム含量

粉砕土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

３．結果

測定結果を第８表に示す。以下に、遺構別の産状を記す。

１）SK205

試料の野外土性［ペドロジー学会編,1997］は、LS（壌質砂土）から SL（砂壌土）と砂分が多い土壌からなる。土色は、１,２層が暗灰黄色、３層・地山が暗オリーブ褐色、４層が暗オリーブ色と、いずれも黒色味に欠ける。リン酸含量は、１層が 1.34mg/g、２層が 1.08mg/g、３層が 0.92mg/g、４層が 0.98mg/g、地山が 1.04mg/g である。カルシウム含量は、１層が 6.83mg/g、２層が 6.58mg/g、３層が 6.88mg/g、４層が 5.60mg/g、地山が 5.88mg/g である。

２）SK260

試料の野外土性は覆土および地山試料のいずれも SiL（シルト質壌土）からなる。土色は、覆土１・５・８層が黒色、覆土３・11 層が黒褐色と黒色味に富み、覆土 12 層・地山は暗灰黄色～オリーブ褐色とやや明るい土壌である。リン酸含量は、覆土１層が 4.61mg/g、覆土３層が 6.31mg/g、覆土５層が 1.09mg/g、覆土８層が 1.85mg/g、覆土 11 層が 0.81mg/g、覆土 12 層が

試料名		土色[1]	土性[2]	全リン酸 P_2O_5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)
SK205	1層	2.5Y4/2　暗灰黄	LS	1.34	6.83
	2層	2.5Y4/2　暗灰黄	LS	1.08	6.58
	3層	2.5Y3/3　暗オリーブ褐	LS	0.92	6.88
	4層	5Y4/3　暗オリーブ	SL	0.98	5.60
	地山	2.5Y3/3　暗オリーブ褐	LS	1.04	5.88
SK260	覆土1層	2.5Y2/1　黒	SiL	4.61	7.36
	覆土3層	2.5Y3/2　黒褐	SiL	6.31	7.01
	覆土5層	2.5Y2/1　黒	SiL	1.09	7.05
	覆土8層	2.5Y2/1　黒	SiL	1.85	7.51
	覆土11層	2.5Y3/1　黒褐	SiL	0.81	6.14
	覆土12層	2.5Y4/2　暗灰黄	SiL	0.86	5.85
	地山	2.5Y4/3　オリーブ褐	SiL	0.87	5.83
SK512	覆土1層	10YR4/2　灰黄褐	LS	1.73	7.64
	覆土2層	2.5Y4/2　暗灰黄	LS	1.42	8.20
	覆土3層	2.5Y4/6　オリーブ褐	LS	0.95	5.06
	覆土4層	5Y3/1　オリーブ黒	SiL	43.7	58.6
	覆土5層	2.5Y3/3　暗オリーブ褐	LS	3.70	7.48
	覆土6層	2.5Y4/3　オリーブ褐	LS	2.25	7.40
	地山	2.5Y5/3　黄褐	LS	0.86	5.19

1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修,1967）による。
2）土性：土壌調査ハンドブック改訂版（ペドロジー学会編,1997）の野外土性による。
SiL：シルト質壌土（粘土0～15%,シルト45～100%,砂0～55%）
SL　：砂壌土（粘土0～15%,シルト0～35%,砂65～85%）
LS　：壌質砂土（粘土0～15%,シルト0～15%,砂85～95%）

第８表　土壌理化学分析結果

0.86mg/g、地山が 0.87mg/g である。カルシウム含量は、覆土１層が 7.36mg/g、覆土３層が 7.01mg/g、覆土５層が 7.05mg/g、覆土８層が 7.51mg/g、覆土 11 層が 6.14mg/g、覆土 12 層が 5.85mg/g、地山が 5.83mg/g である。

３）SK512

試料の野外土性は、覆土４層が SiL（シルト質壌土）である他はいずれも LS と砂質主体である。土色は、覆土１層が灰黄褐色、覆土２層が暗灰黄色、覆土３・６層がオリーブ褐色、覆土５層が暗オリーブ褐色、地山が黄褐色とやや明るい土色であり、覆土４層がオリーブ黒色と暗色である。リン酸含量は、覆土１層が 1.73mg/g、覆土２層が 1.42mg/g、覆土３層が 0.95mg/g、覆土４層が 43.7mg/g、覆土５層が 3.70mg/g、覆土６層が 2.25mg/g、地山が 0.86mg/g である。カルシウム含量は、覆土１層が 7.64mg/g、覆土２層が 8.20mg/g、覆土３層が 5.06mg/g、覆土４層が 58.6mg/g、覆土５層が 7.48mg/g、覆土６層が 7.40mg/g、地山が 5.19mg/g である。

４．考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。

土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例［Bowen,1983、Bolt･Bruggenwert,1980、川崎ほか ,1991、天野ほか ,1991］があり、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0mg/g 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5mg/g［川崎ほか ,1991］という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では 6.0mg/g を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通１～ 50mg/g［藤貫 ,1979］といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。なお、今回の調査において比較対照試料として供された各遺構の地山３点（以下、地山試料）についてみると、リン酸含量は 0.86 ～ 1.04mg/g、カルシウム含量は 5.19 ～ 5.88mg/g であり、概ね同程度の値を示している。

以上の既知の天然賦存量および上記した地山試料の値を参考とすると、火葬墓とされる SK512 では、特に覆土４層においてリン酸含量が 43.7mg/g、カルシウム含量が 58.6mg/g と極めて高い値を示した。いずれも上述した天然賦存量および比較対照の地山試料の含量を上回る状況から、これらの成分の富化が示唆される。なお、提供資料を参考とすると、覆土４層は黄灰色土の偽礫が混じる黒色土からなり、遺構内に面的に分布するほか、白色物質が混じる状況が確認できる。おそらく骨片や黒色に起因する腐植物などが混在する状況を反映していると思われる。また、同遺構の覆土３層を除く、覆土４層の上・下部（覆土２・６層）や側方（覆土５層）に相当する層準も、比較対照の地山試料と比較してリン酸・カルシウム含量が高い値を示した。これらの層準には、覆土４層に由来するとみられる偽礫（ブロック）の分布も認められるため、覆土４層の影響も考えらえる。

同じ火葬墓とされる SK260 は、覆土１・３層において天然賦存量を超えるリン酸含量が認められ、カルシウム含量は覆土１層から覆土８層までの層準において地山試料より明瞭に高い値を示すことが確認された。このような状況から、これらの層準にはリン酸およびカルシウムの富化が推定される。ただし、覆土１・３層と覆土５・８層との間ではリン酸およびカルシウム含量の増加幅が付随していないため、特に覆土上部試料（覆土１・３層）におけるリン酸の由来については腐植の影響も想定する必要がある。

次に、木棺墓とされるSK205は、フク土試料のリン酸含量は地山試料と同程度あるいは僅かに高い値を示す程度であり、カルシウム含量は1～3層では地山試料よりやや高い値を示した。このようにリン酸およびカルシウム含量に若干の変化が認められるものの、上記した火葬墓とされる遺構との比較ではいずれも含量の値が低く、また含量幅の変化も乏しいなど明確な有意差を見出せないため、遺体痕跡の有無（遺体成分の富化など）を判断するには至らない。

第2節　上条遺跡出土骨同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

（A）はじめに

上条遺跡（新潟県長岡市上条町地内）は、信濃川右岸に分布する沖積地の微高地に立地しており、発掘調査により9世紀後半から10世紀前半頃の集落であることが明らかとされている。なお、本遺跡では、土坑墓をはじめ、木棺墓、火葬墓などの埋葬施設と考えられる遺構が検出されており、これらの遺構覆土（埋積物）からは水洗選別により骨片が回収されている。

本報告では、出土骨の種類や部位、被葬者に関わる資料の作成を目的として、特に多量の骨片が回収された火葬墓とされる土坑（SK512）および溝跡（SD438）を対象として出土骨の同定を行った。

（B）試料

試料は、土坑（SK512）や溝跡（SD438）の覆土の水洗選別により回収された骨片試料16試料である。これらの試料は、水洗選別により回収された骨片のうち、篩目2mm以上の破片と、担当者により抽出された歯牙等の特徴を有する部位などからなる。

なお、今回の試料は、同一試料名の試料が複数含まれていたため、便宜的に分析番号（№1～16）を付して扱っている。各試料の詳細は結果とともに表1に示したので、参照されたい。

（C）分析方法

試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、形態学的な特徴から種および部位を同定する。なお、人体骨格各部の名称を第11図に示す。

（D）結果

結果を第9表に示す。№14は、表面が白色を呈するものの、海綿質がオレンジ色を呈する。この他の骨片は内部まで白色を呈し、表面に微細なひび割れが確認される。以下、遺構・試料別に結果を記す。

（1）SD438

・№1

哺乳類の四肢骨と部位不明破片である。

・№2

哺乳類の四肢骨である。

・№3

哺乳類の頭蓋骨・四肢骨、および部位不明破片である。

分析番号(No.)	グリッド	遺構	層位	日付	重量(g)	種類	部位	部分	数量	被熱	備考
1	11H6	SD438	覆土1層	2014.7.15	2.6	哺乳類	四肢骨	破片	1	○	
							不明	破片	1.82 g	○	
2	11H6	SD438	覆土1層	2014.7.14	1.3	哺乳類	四肢骨	破片	1	○	
3	11H6	SD438	覆土層	2014.7.8	18.2	哺乳類	頭蓋骨	破片	1	○	
							四肢骨	破片	7	○	
							不明	破片	10.48 g	○	
4	11G5	SK512	覆土上層	2014.7.23	8.8	哺乳類	四肢骨	破片	3	○	
							不明	破片	4.61 g	○	
5	11G5	SK512	覆土上層		60.1	ヒト	基節骨	近位端片	1	○	
							基節骨/中節骨	遠位端	1	○	
						哺乳類	頭蓋骨	破片	1	○	
							四肢骨	破片	1	○	
							不明	破片	57.81 g	○	
6	11G5	SK512	覆土上層		0.4	ヒト?	歯牙	歯根片	3	○	
7	11G5	SK512	覆土1炭層	2014.7.23	3.5	ヒト?	上腕骨/大腿骨	近位端片	1	○	
						哺乳類	不明	破片	1.47 g	○	
8	11G5	SK512	覆土1･2層	2014.7.29	4.2	哺乳類	脳頭蓋	破片	4	○	
							不明	破片	1.49 g	○	
9	11G5	SK512	覆土1･2層	2014.7.25	8.5	ヒト	足根骨(舟状骨)	破片	1	○	
						哺乳類	四肢骨	破片	1	○	
							不明	破片	4.16 g	○	
10	11G5	SK512	覆土3層	2014.7.29	57.8	哺乳類	脳頭蓋	破片	3	○	
							頭蓋骨	破片	1	○	
							肋骨	破片	5	○	
							四肢骨	破片	14	○	
							不明	破片	31.29 g	○	
11	11G5	SK512	覆土3層	2014.7.25	8.5	哺乳類	頭蓋骨	破片	1	○	
							四肢骨	破片	3	○	
							不明	破片	5.58 g	○	
12	11G5	SK512	覆土3層			ヒト	第2頸椎	歯突起	1	○	
							中手骨/中足骨	遠位端片	1	○	
						哺乳類	四肢骨	破片	10	○	
							不明	破片	281.81 g	○	
13	11G5	SK512	覆土3層		0.1	ヒト?	歯牙	歯根片	1	○	
14	11G5	SK512	覆土3層		0.2	哺乳類	不明	破片	0.2 g	○	被熱表面のみ
15	11G5	SK512	覆土4層	2014.7.28	2.2	哺乳類	不明	破片	2.24 g	○	
16	11G5	SK512	覆土6層		22.4	哺乳類	肋骨	破片	1	○	
							不明	破片	21.41 g	○	

第９表　骨同定結果

（２）SK512

・No.４

哺乳類の四肢骨と部位不明破片である。

・No.５

ヒトの基節骨と基節骨 / 中節骨、哺乳類の頭蓋骨・四肢骨、および部位不明破片である。

・No.６

ヒトの可能性がある歯牙歯根部である。

・No.７

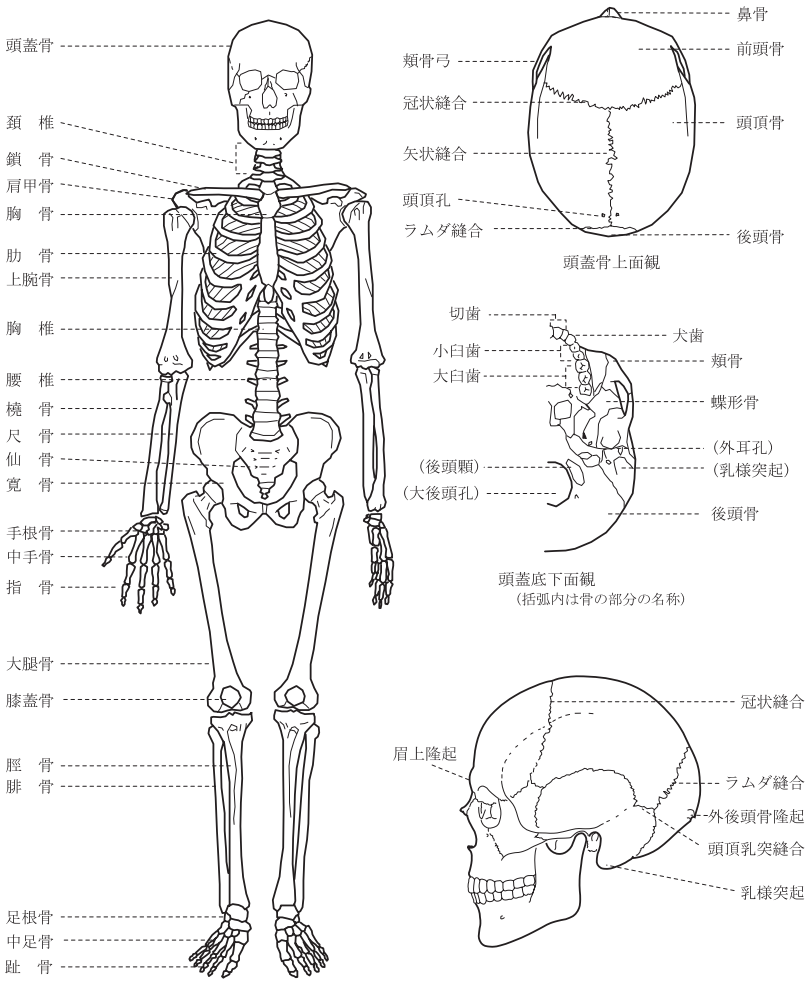
ヒトの可能性がある上腕骨 / 大腿骨の骨頭部、および哺乳類の部位不明破片である。

・No.８

哺乳類の脳頭蓋と部位不明破片である。

・No.９

ヒトの足根骨（舟状骨）、哺乳類の四肢骨、部位不明破片である。



第 11 図　人体骨格各部の名称

・№. 10

哺乳類の脳頭蓋・頭蓋骨・肋骨・四肢骨、および部位不明破片である。

・№. 11

哺乳類の頭蓋骨・四肢骨、および部位不明破片である。

・№. 12

ヒトの第 2 頸椎歯突起および中手骨 / 中足骨、哺乳類の四肢骨、および部位不明破片である。

・№. 13

ヒトの可能性がある歯牙歯根部である。

・№. 14

哺乳類の部位不明破片である。

・№. 15

哺乳類の部位不明破片である。

・№. 16

哺乳類の肋骨、および部位不明破片である。

（Ｅ）考察

SD438 より出土した骨片には、頭蓋骨や四肢骨の破片が認められた。ただし、いずれも小さな焼骨の破片であったため、種類等の詳細は不明である。一方、SK512 より出土した骨も焼骨の破片であったが、明らかにヒトの第２頸椎・足根骨（舟状骨）・中手骨 / 中足骨・基節骨・基節骨 / 中節骨、ヒトの可能性がある歯牙・上腕骨 / 大腿骨骨頭が確認された。このことから、本遺構の哺乳類とした破片もヒトに由来する可能性がある。また、今回の SK512 の出土骨は、いずれも小型の破片であり、１体の出土骨として数量的に少なく、さらに頭蓋骨や主要四肢骨などの大型の破片が検出されないという特徴が指摘できる。このような状況から、別の場所で火葬された遺骸の一部が、本遺構に埋葬された可能性が考えられる。なお、被葬者の性別や年齢などについては、前述したように小片かつ特徴的な部位が認められないため、その詳細を言及することは困難である。

さらに、今回の試料には、前述したように焼骨の特徴が認められた。楢崎［2007］によると、遺体をそのまま火葬にした場合、横に曲がった亀裂、縦に不規則な亀裂、また歪みや捻れが生じるとされるが、これに対して白骨化させたものを火葬にするとひび割れが生じるが歪みや捻れが生じないとしている。また、馬場ほか［1986］を参考にすると、人骨を焼いた際、600℃以下ではほとんど変化がなく、800℃付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われる等、最も激しく変化するとされている。今回の試料では、SK512 の№.14 のように表面だけが白色を呈し、内部の海綿質部が被熱していない骨もみられることから、高い温度で火葬されてなかった、火力にムラが生じていた、火葬時間が短かったことなどが推定される。

＜第１節　引用文献＞

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信　1991 「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』28-36p

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M　1980 『土壌の化学』岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳　学会出版センター　309p

Bowen,H.J.M.　1983 『環境無機化学 - 元素の循環と生化学 -』浅見輝男・茅野充男訳　博友社　297p

土壌標準分析・測定法委員会編　1986 『土壌標準分析・測定法』博友社　354p

藤貫　正　1979 『カルシウム . 地質調査所化学分析法』52,57-61 p

林　昭三　1991 『日本産木材　顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

石川茂雄　1994 『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会　328p

伊東隆夫　1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料　31』京都大学木質科学研究所　81-181p

伊東隆夫　1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料　32』京都大学木質科学研究所　66-176p

伊東隆夫　1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料　33』京都大学木質科学研究所　83-201p

伊東隆夫　1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料　34』京都大学木質科学研究所　30-166p

伊東隆夫　1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料　35』京都大学木質科学研究所　47-216p

伊東隆夫・山田昌久（編）　2012 『木の考古学　出土木製品用材データベース .』海青社 ,449p.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久　1991 「九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量」農林水産省　農林水産技術会議事務局編 『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』23-27p

三宅　尚・中越信和　1998 「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究６』 15-30p

三好教夫・藤木利之・木村裕子　2011 『日本産花粉図鑑』北海道大学出版会　824p

中村　純　1967『花粉分析』古今書院　232p

中村　純　1980『日本産花粉の標徴　Ⅰ Ⅱ（図版）大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第 12,13 集　91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会　642p.

農林省農林水産技術会議事務局監修　1967『新版標準土色帖』

小椋純一　2007「微粒炭の母材植物特定に関する研究」『植生史研究 15』85-95p

小椋純一　2008「釧路湿原北東陸地部における微粒炭分析」『日本植生史学会第 23 回大会講演要旨集』46-47p

ペドロジー学会編 ,1997, 土壌調査ハンドブック改訂版 . 博友社 ,169p

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）2006「針葉樹材の識別」『IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）海青社　70p［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.,2004,IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫　1982『図説木材組織』地球社　176p

島倉巳三郎　1973『日本植物の花粉形態』大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集　60p

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文　2012『ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632 種－』誠文堂新光社　272p

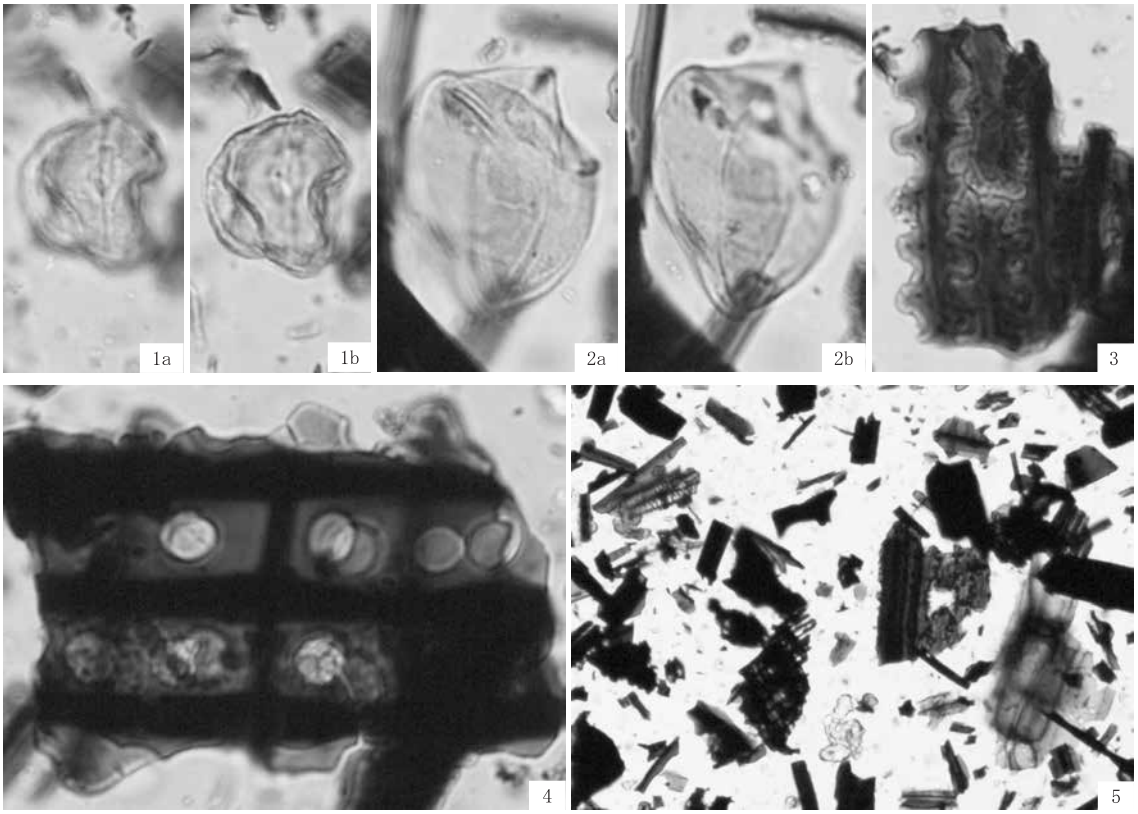
徳永重元・山内輝子　1971「花粉・胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社　50-73p

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）1998「広葉樹材の識別」『IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）海青社　122p［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.,1989,IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

＜第 2 節　引用文献＞

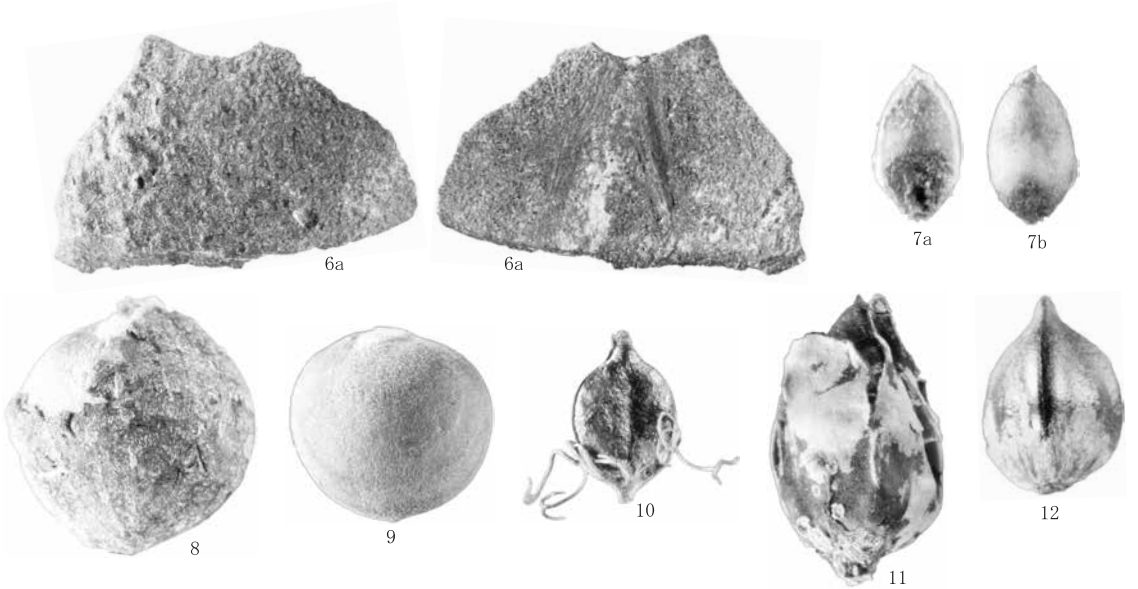
楢崎修一郎　2007「火葬人骨と考古学」狭川真一編著『墓と葬送の中世』高志書院　107-126.

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治　1986「根古屋遺跡出土の人骨・動物骨」『霊山根古屋遺跡の研究　－福島県霊山町根古屋における再葬墓群－』福島県霊山町教育委員会　93-113.



1. ブナ属(SK42)　2. イネ科(SK42)
3. 微細植物片(草本由来)(SK42)　4. 微細植物片(木本由来)(SK42)
5. 分析プレパラート内の状況(SK42)

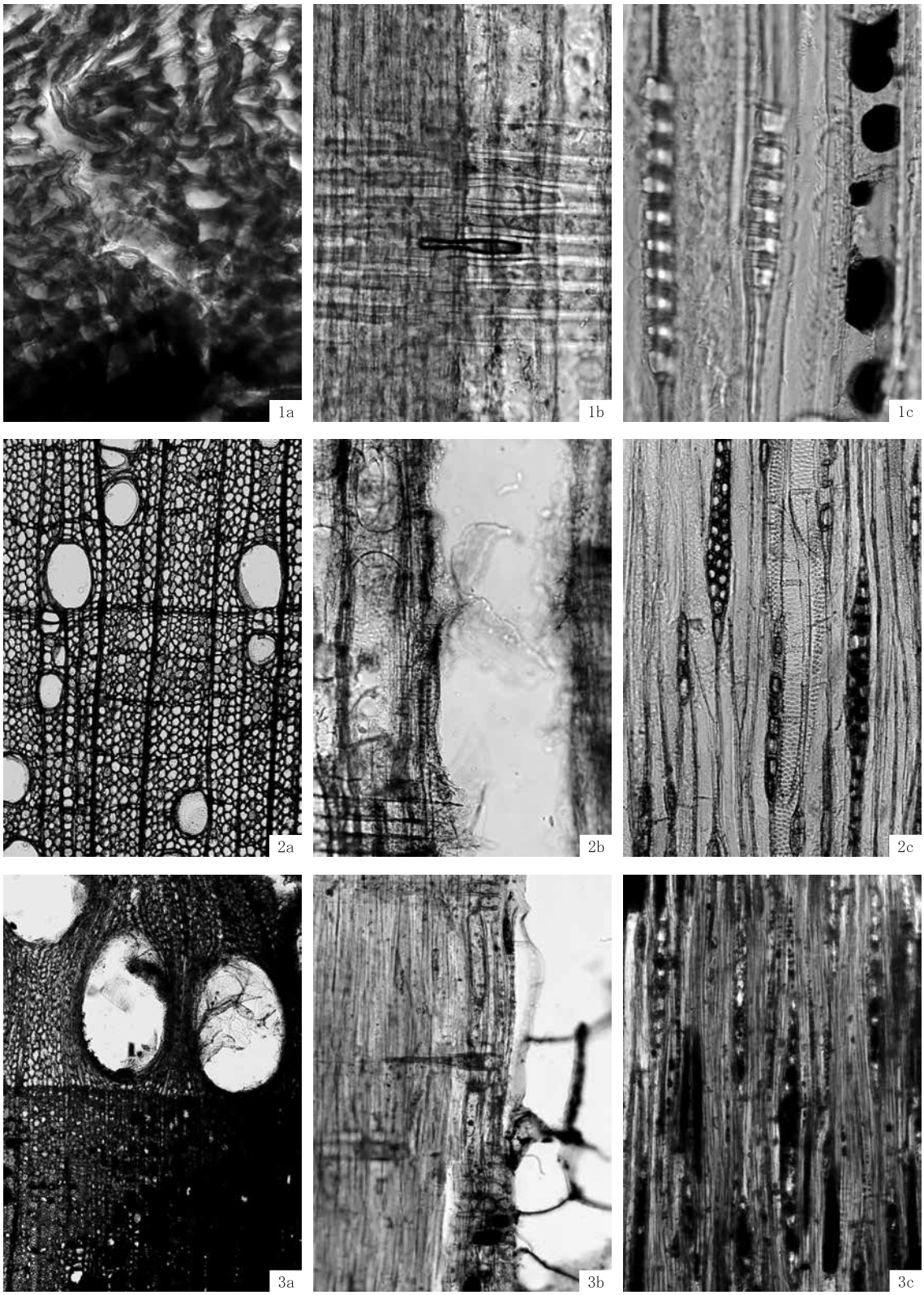
50 μm (1-4)　50 μm (5)



6. トチノキ 炭化種子(SE677)
7. イネ科 胚乳(SE677)
8. カナムグラ 核(果皮残存)(SE677)
9. カナムグラ 核(SE677)
10. サナエタデ近似種 果実(SE677)
11. ミゾソバ 果実(SE677)
12. ボントクタデ近似種 果実(SE677)

1mm (8, 9)　1mm (6, 10-12)　1mm (7)

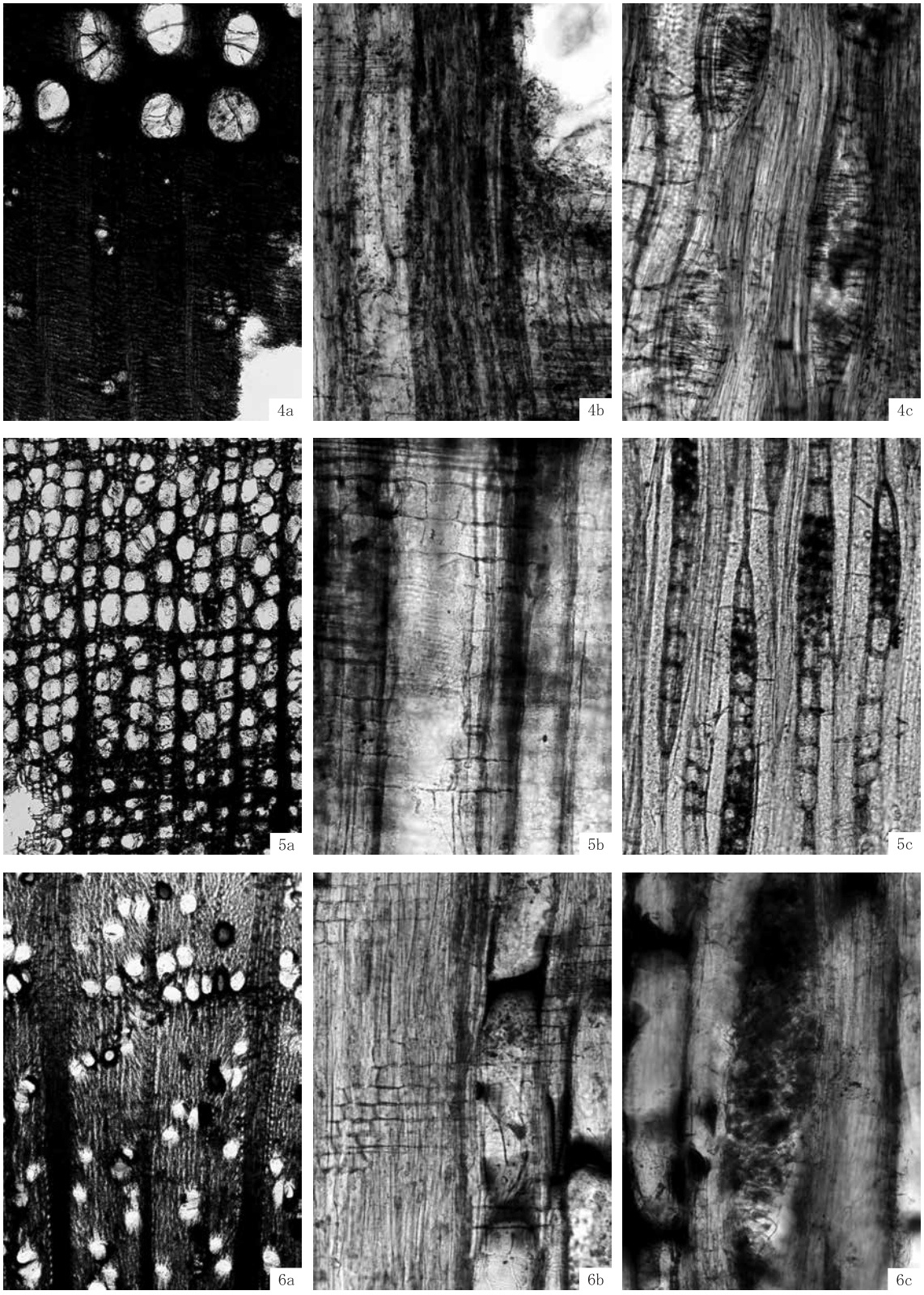
第 12 図　花粉化石・種実遺体



1. スギ(11E3Ⅶ層;自然木)
2. オニグルミ(SX400;立木痕の自然木)
3. クリ(SB317-P1;木柱)
　a:木口,b:柾目,c:板目

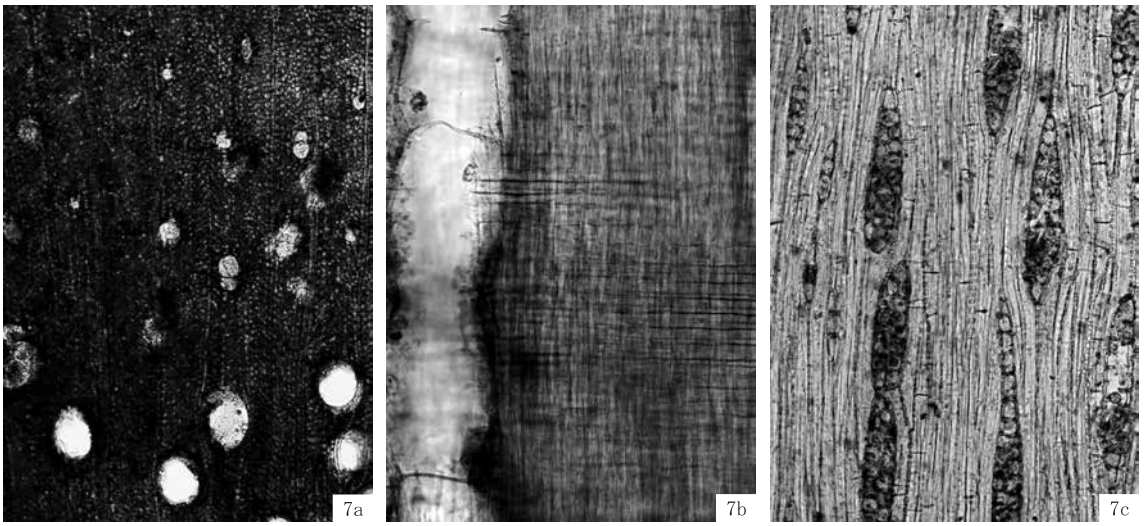
100μm:2-3a
100μm:1a,2-3b,c
100μm:1b,c

第 13 図　木材(1)



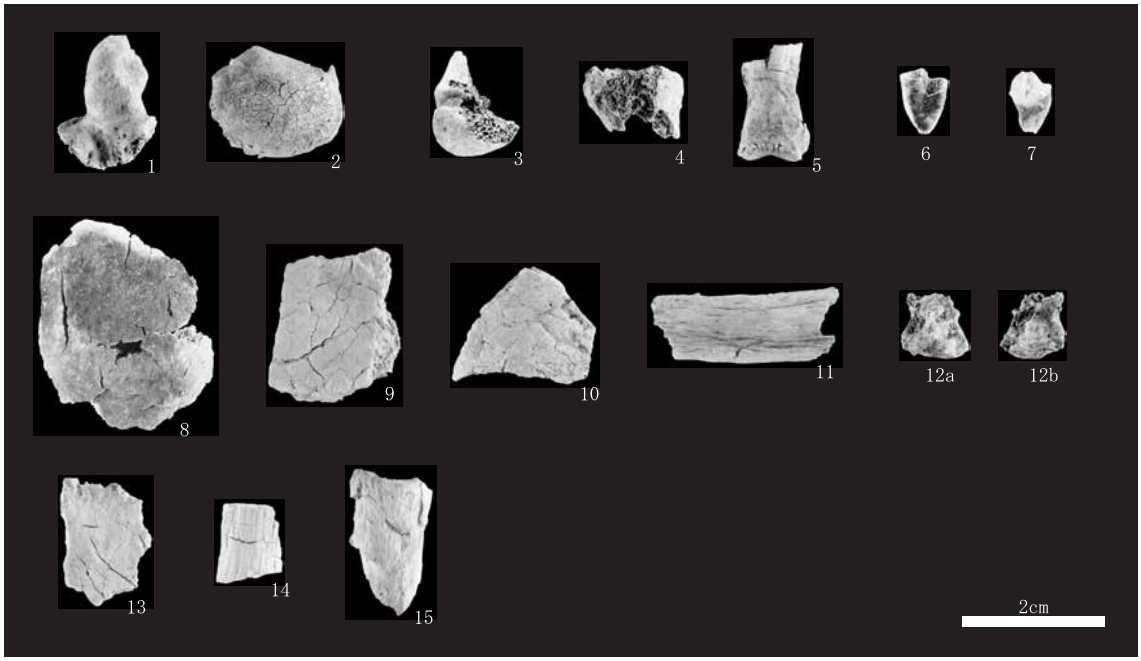
4. ヤマグワ(SB608-P5;木柱)
5. カツラ(11K11;自然木)
6. サクラ属(SB317-P15;木柱)
a:木口,b:柾目,c:板目

第 14 図　木材 (2)



7. トネリコ属(SE677;弓状加工材)
a:木口,b:柾目,c:板目

第 15 図　木材(3)



1. ヒト　第2頸椎(No.12；11G5 SK512覆土3層)
2. ヒト　足根骨(舟状骨)(No.9；11G5 SK512覆土1･2層)
3. ヒト　中手骨/中足骨(No.12；11G5 SK512覆土3層)
4. ヒト　基節骨(No.5；11G5 SK512覆土上層)
5. ヒト　基節骨/中節骨(No.5；11G5 SK512覆土上層)
6. ヒト? 歯牙(No.6；11G5 SK512覆土上層)
7. ヒト? 歯牙(No.13；11G5 SK512覆土3層)
8. ヒト? 上腕骨/大腿骨(No.7；11G5 SK512覆土1炭層)
9. 哺乳類　脳頭蓋(No.8；11G5 SK512覆土1･2層)
10. 哺乳類　脳頭蓋(No.10；11G5 SK512覆土3層)
11. 哺乳類　肋骨(No.10；11G5 SK512覆土3層)
12. 哺乳類　不明(No.14；11G5 SK512覆土3層)
13. 哺乳類　頭蓋骨(No.3；11H6 SD438覆土層)
14. 哺乳類　四肢骨(No.1；11H6 SD438覆土1層)
15. 哺乳類　四肢骨(No.2；11H6 SD438覆土1層)

第 16 図　出土骨

第３節　長岡市上条遺跡出土曲物付着物の科学分析

漆器文化財科学研究所　四柳嘉章

（Ａ）はじめに

長岡市上条（じょうじょう）遺跡からは、内外面にびっしりと付着物（膠着液）のある曲物容器が出土した。時期的には平安時代（９世紀後半から 10 世紀前半）の可能性が高いと考えられている。膠着液が漆であることを以下に報告する。分析には下記の塗膜分析と赤外分光分析を実施した。

（Ｂ）塗膜分析（第 18 図）

塗膜分析は膠着液の塗装工程や液の特徴を識別するもので、実体顕微鏡による観察後、漆器の内外面数箇所から数㎜の塗膜片を採取し、ポリエステル樹脂に包埋する。包埋断面を研磨の後プレパラートに接着し、さらに研磨を加えて（＃ 100 ～ 3000）、金属・偏光顕微鏡で観察する方法である。各種状況に応じたデータ（手板）と比較検討しながら塗装工程や下地材料の同定を行う。これによって表面観察ではわからない塗装工程や材料の特色が把握できる。塗膜分析は１資料につき、内外面各３～５点の試料を作製し平均値を算出した。したがって必ずしも図版のスケールとは一致しない。塗膜断面写真は偏光顕微鏡下における透過光。

曲物の法量：口径 12.6㎝、現存器高 6.6㎝、底径（推定）12.0㎝。内外面に素地が隠れるほど膠着液が付着している。

塗膜分析（外面）：分析面の最大層厚は 260 μ m 前後で、７層前後の重なりがみられる。中ほどに径 27 μ m の大きな円形のゴム質水球と径３μ m 以下のゴム質水球が見られ、生漆の特徴を示している。

（Ｃ）赤外分光分析（第 17 図）

赤外分光分析は膠着液を特定するもので、赤外線（普通赤外波長 2.5 ～ 25 μ m、波数 4000 ～ 400㎝ $^{-1}$）を固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて照射して、分子構造を解析するフーリエ変換赤外分光法（FT － IR）を用いた。測定機器は日本分光製 FT/IR － 4600。試料は 1㎎を採取し KB r（臭化カリウム）100㎎をメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものを用いた（錠剤法）。条件は分解能４㎝ $^{-1}$、積算回数 16、アポダイゼーション関数 Cosine。縦軸は吸光度（Abs）、横軸は波数（カイザー）。

第 17 図は基準データとした岩手県浄法寺産精製漆（③ 1992 年作製）と生漆（② 1994 年作製）の赤外線吸収スペクトルに、上条遺跡出土曲物膠着のデータを重ねたものである。2920㎝ $^{-1}$（炭化水素の非対称伸縮振動）、2850㎝ $^{-1}$（炭化水素の対称伸縮振動）、1720 ～ 1710㎝ $^{-1}$（カルボニル基）、1630 ～ 1620㎝ $^{-1}$（糖タンパク）、1465㎝ $^{-1}$（活性メチレン基）、1280 ～ 1273㎝ $^{-1}$（フェノール性 OH）、1070 ～ 1030㎝ $^{-1}$（ゴム質）の吸収が確認でき漆の同定要素を満たしている。表面は茶褐色化しているが、基準データの生漆に近似しており、さほどの劣化もなく遺存状況は良好である。

（Ｄ）小　結

長岡市上条遺跡は信濃川右岸の沖積微高地（標高 24m）に立地し、９世紀後半から 10 世紀前半に営まれた集落。14 棟の掘立柱建物や墓域が検出され、畿内・東海産の施釉陶器や墨書土器が出土している（1）。掘立柱建物のうち２棟が廂付であることから富豪層の居館跡と考えられている。生漆入りの曲物は漆パレットではなく定型的な小型の漆容器である。これから小分けされた漆パレットも出土していることから、

集落内で接着などの作業が行われていたことを示している。漆は古代では貴重品であることから、一般集落では使用されなかったことが明らかになっており、当該集落の性格を検討するでは重要な遺物の一つと考えられる（2）。

〈第 3 節　引用文献〉

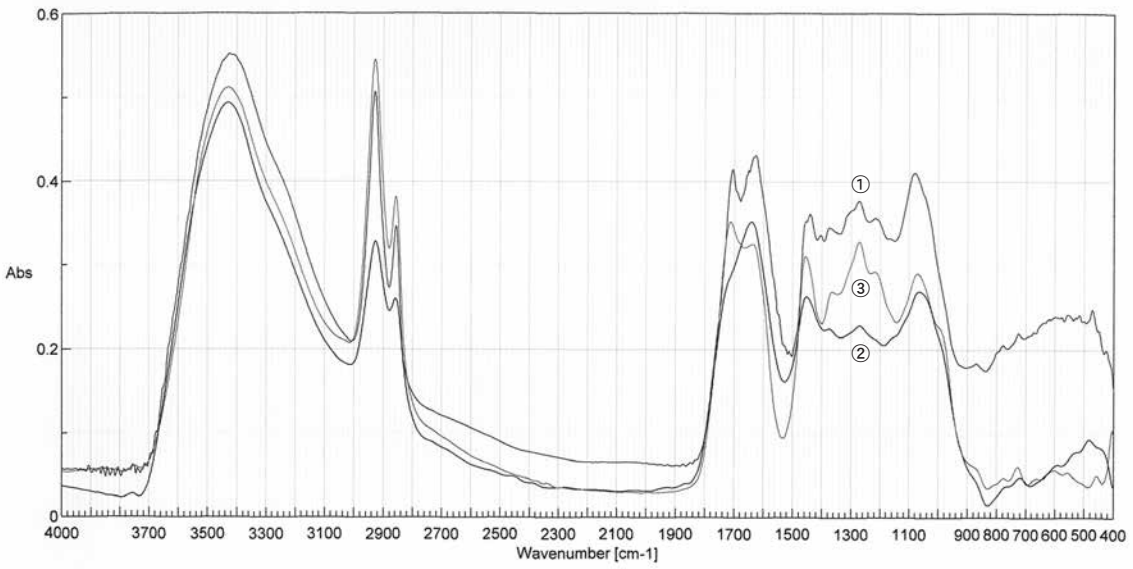
（1）長岡市教育委員会・大石組　2014 「上条遺跡現地説明会」資料

山賀和也　2015 「長岡市　上条遺跡の調査成果」『新潟県考古学会第 27 回大会研究発表会発表要旨』

（2）四柳嘉章　2010 「加茂市馬越遺跡出土漆器（平成 18 年度）の科学分析」『馬越遺跡Ⅲ』加茂市教育委員会

四柳嘉章　2011 「太田遺跡出土須恵器・土師器付着物の科学分析」『荒又遺跡・太田遺跡』加茂市教育委員会

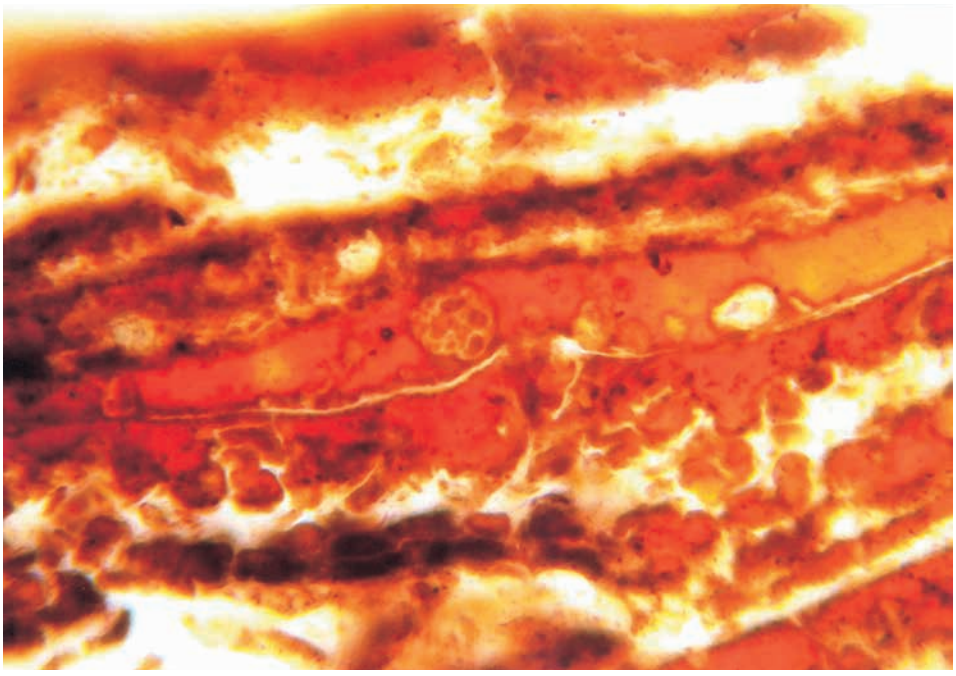
四柳嘉章　2010 「西部遺跡出土漆器等の科学分析」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告ＸＸＸⅢ　西部遺跡Ⅱ（本文編）』新潟県教育委員会、新潟県埋蔵文化財調査事業団



①上条遺跡容器
②生漆（1994）
③精製漆（1992）

第 17 図　赤外線吸収スペクトル

1　曲物内面付着漆の重なり　×200



2　同上拡大　×400

第 18 図　漆塗膜の顕微鏡写真

第Ⅶ章　考　　察

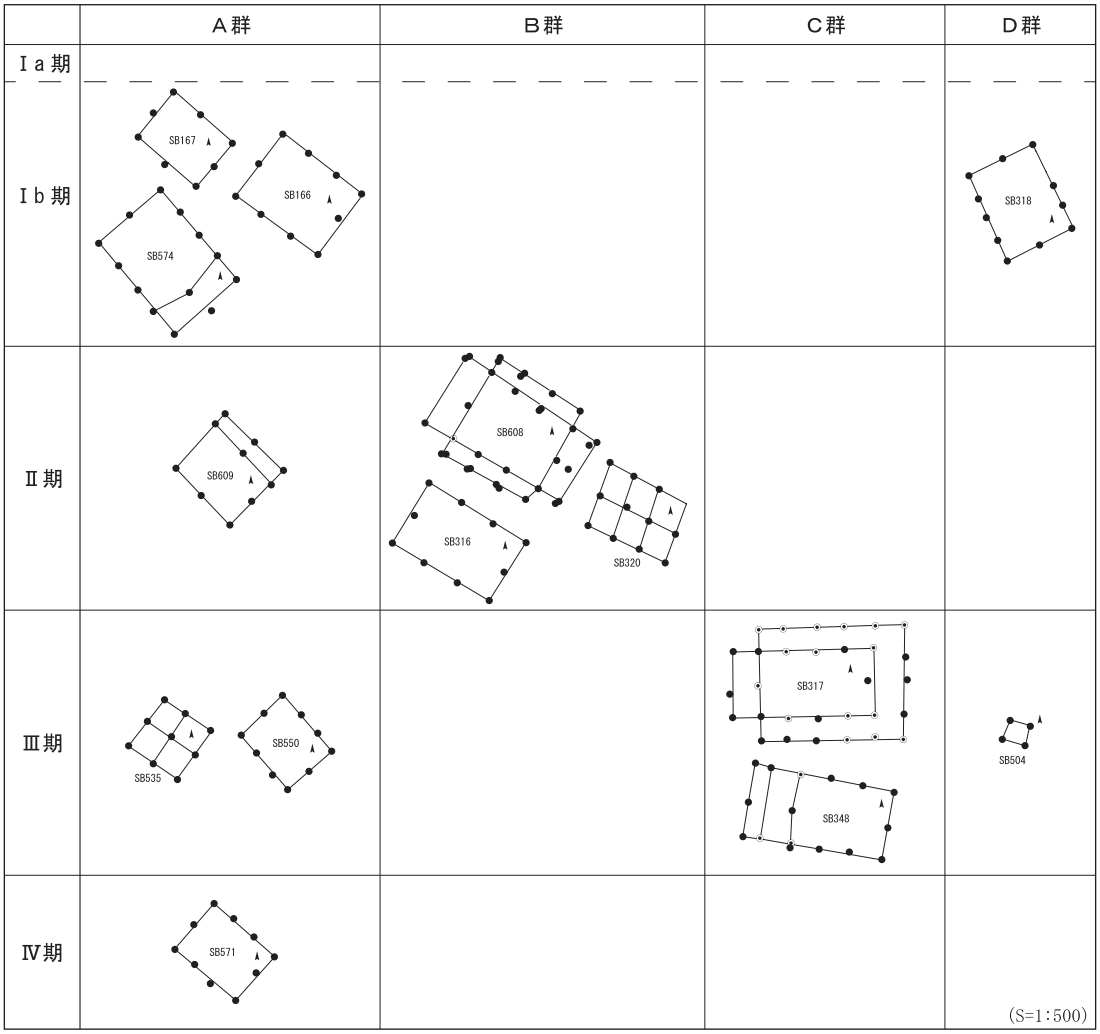
第１節　掘立柱建物について

今回の調査では、掘立柱建物は 14 棟発見された。ここでは、掘立柱建物の規模や主軸方向、切り合い関係、出土遺物などから帰属時期について検討し、その変遷について考えてみたい。

建物の長軸を主軸として、北を基準に東西への傾きを整理してみると、大きく４つのグループに分けることができる。Ａ群は、Ｎ－ 40 ～ 55°－Ｗを示す一群である。SB166・167・535・550・571・574・609 の７棟であり、最も数が多い。A 群は、SX １の岸際に立地しており、概ね地形に合わせた主軸方向になっている。SB609 は、２間×２間の身舎に北東側に１間分の廂が付く。SB535 は、２間×２間の総柱建物である。その他の５棟は２間×３間が４棟、２間×２間が１棟の側柱建物である。SB166・167 が切り合い、SB571・574・609 が切り合っている。SB166・167 は前後関係を判断する材料がなくはっきりしないが、時期はどちらも９世紀後半から末頃の時期とみられ、短い期間に建て替えられた可能性がある。SB571・574・609 は柱穴の切り合い関係から、SB574 が SB571 に切られており、SB574 → SB571 の変遷が捉えられる。SB609 は柱穴同士の切り合いはなくやや不明瞭であるが、SB609 を切る SK573・594 が 10 世紀第２四半期頃と考えられることから、それより前の段階である９世紀末から 10 世紀初頭頃が考えられる。これを整理すると SB574 → SB609 → SB571 と変遷したことが考えられる。A 群は９世紀後半から 10 世紀第２四半期頃までの本遺跡の全期間にわたって存在する。Ｂ群は、Ｎ － 58 ～ 62° － Ｗを示す一群である。SB316・320・608 の３棟である。３棟は、調査区西半分に位置しており、SB320 がやや離れた位置に立地する。３棟とも形態が違い、SB316 は２間×３間の側柱建物、SB320 は２間×３間の総柱建物、SB608 は２間×３間の身舎に四方に廂の付く四面廂建物である。時期は３棟とも９世紀末から 10 世紀初頭を中心とする時期に帰属し、まとまっている。Ｃ群は、Ｎ－ 80 ～ 89°－Ｗを示す一群である。SB317・348 の２棟である。主軸は、ほぼ方位に合っている。２棟は約 60 ｍ離れている。SB317 は２間×４間の身舎に四方に廂が付く四面廂建物である。SB348 は、やや変則的な柱穴配置で、２間×４間の身舎に西側に１間分の廂あるいは目隠し塀などの施設が付く形態と思われる。時期は、両者とも 10 世紀第１四半期を中心とする時期に帰属する。Ｄ群は、Ａ～Ｃ群に属さない建物である。SB318・504 があり、SB318 がＮ－ 24°－Ｗで、SB504 がＮ－ 70°－Ｗである。SB318 は２間×４間の側柱建物で、９世紀後半から末頃が考えられる。SB504 は１間×１間の建物で簡易的な建物が想定される。時期は、10 世紀以降が考えられる。

平面積を見てみると、20㎡付近と 30㎡台に比較的まとまった数値を示す。最大の面積を持つ建物は、SB317 で 73.7㎡と突出している。それに次ぐのが、SB608 で 66.8㎡である。SB317・608 は四面廂付建物で、側柱建物よりも格が高い建物であると考えられており、形態、面積から本遺跡の中心的な建物であると言える。SB317・608 と同じ群に属する建物との関係は不明瞭であるが、SB348・320 ともに一般的な側柱建物でないことから、倉庫やその他何らかの施設であった可能性もあろう。側柱建物で最大のものは SB574 で 42.5㎡である。これも他の建物と比べるとやや大きい数値となっている。

以上の検討結果を踏まえ、建物の変遷を整理してみると第 19 図になる。Ａ群が全期間をとおして存在し、Ｂ群からＣ群への主軸方向の変遷がたどれる。中心的な建物とみられる SB608 はＢ群、SB317 はＣ群に属し、次に大きい SB574 はＡ群で９世紀後半と考えられ、この時期では最大の建物となる。従って、集落の中心的な建物は SB574 → SB608 → SB317 と変遷する可能性が考えられる。



第 19 図　掘立柱建物変遷図

第 2 節　四面廂建物について

四面廂建物は、一般的に官衙関連施設、寺院、有力者層の居宅、村落内寺院などに採用される建物である。ここでは、本遺跡で発見された 2 棟の四面廂建物の性格について検討してみたい。

SB317 は 2 間×4 間の身舎に 1 間分の廂が付くが西側廂部分の隅を欠く形態であり、SB608 は 2 間×3 間の身舎に 1 間分の廂が付くが廂の四隅を欠く形態となっており、両者とも特異な平面形態である。柱穴は円形あるいは隅丸方形であり、これらに付属する建物は認められず、単独で立地している。これらの状況から官衙関連施設や寺院にはならないと考えられる。だが、本調査では、「寺」字墨書土器、灯明皿、仏鉢型土器などの仏教に係わる遺物が出土しており、村落内寺院が存在した可能性が考えられる。村落内寺院は、須田勉氏によって提唱された、集落の中に建てられた仏堂施設である［須田 1985］。須田氏は、千葉県の事例を取り上げ、村落内寺院は四面廂建物であるが、柱間寸法のばらつきや柱掘方が円形であるなど、造営技術が低い建物とした。そして、村落内の結合を強化する目的で建てられたものと想定した。さらに、笹生衛氏は、同じく千葉県内の事例をとりあげ、建物構造や配置、出土遺物の内容を分析し、寺院や小規模の仏教施設などの 7 類型に整理している［笹生 2006］。

本遺跡は四面廂建物が単独で位置しており、笹生氏の分類に従えば、本遺跡の建物が仏堂施設であるな

らば、第２類型の一定の仏教儀礼を執行可能な「村寺」に当てはまる可能性がある。しかし、仏教関連遺物の時期は９世紀後半から 10 世紀初頭頃に位置づけられるものが多く、出土地点を見てみると、仏鉢型土器は調査区隅からの出土であるが、灯明皿、「寺」字墨書土器は SD ７及び SD ７周辺からに集中している。遺物の時期に属する建物は SB608 で、SB317 は SD ７埋没後の 10 世紀前半頃に位置づけられ、SB317 を仏堂とみるのは難しい。一方、SB608 は同時期に存在するものの、出土位置からは離れた場所に位置するため、仏教関連遺物との関係が希薄である。従って、両建物を仏堂施設として積極的に評価しがたい。

有力者の居宅の可能性もあるが、居宅は門新遺跡や時代は少し下るが本遺跡の東方に位置する土用木西遺跡など見ても、中心的な建物に主軸を合わせた建物が周辺に立ち並ぶことが多く、本遺跡のように単独で存在するものは少ない。

四面廂建物の性格は、村落内寺院と有力者の居宅では、どちらも積極的に評価することができないが、仏教関連遺物以外の遺物を見てみれば、施釉陶器、漆紙を含む漆関連遺物、巡方の裏金具など一般集落では出土しない遺物が出土することから、門新遺跡のような開発領主層とまではいかないまでも、この地域を開発するにあたり、本遺跡が拠点的な集落として存在し、その首長的な役割を持った人物の居宅と考えるのが妥当であろう。

一方で、仏教関連遺物の出土は仏事があったことを窺わせるものである。仏堂施設が調査区外にあった可能性もあるが、調査区内にあったとすれば、時期及び位置的に可能性が高いものとしては SB318 が考えられるが、あくまでも推測にすぎない。本遺跡の仏堂施設がどのようなものだったのか今後検討していくべき課題である。

第３節　土器埋納遺構について

土器がある程度まとまって出土した土坑あるいは土器溜まりの中に土器埋納遺構として分類できるものがある。埋納遺構は、完形あるいはそれに近い食膳具が正位あるいは逆位で置かれたような状況で出土した遺構とされ［前田 1997］、本遺跡では土器埋納遺構及びその可能性を指摘できる遺構は P ２、P306、SK492、SX32、SK280、SK573 の６基である。

土器埋納遺構については、石川県千木ヤシキダ遺跡における掘立柱建物の柱穴や建物敷地内外に存在する土坑の検討から建物の造営・廃棄に係わる祭祀土坑であることが指摘されている［楠 1987、出越 1991］。さらに、前田清彦氏によって石川県三浦・幸明遺跡の調査成果から、出土土器の器種構成と数量、出土遺構の性格の違い及び建物、建物群との関係から、祭祀の対象と規模に応じた数種類の土器の祭祀類型が想定された［前田 1996・1997］。

埋納遺構が地鎮などの建物に係わる祭祀の遺構として、本遺跡の埋納遺構と建物との関連を見てみると、第 10 表のようになる。各遺構が個別の建物に対応しているが、P ２は SB348 と 608 の中間地点に位置し、どちらともいえない状況である。建物との位置関係を見てみると、P306 と SX32 は建物の外、SK492 と SK573 は建物の中、SK280 は柱穴列上に位置し SB317 の廃絶後に廃棄された土器の可能性もある。出土遺物の内容を見てみると、土師器無台椀がほとんどでわずかに有台器種や内面黒色土器、小甕が出土する。須恵器は出土しない。時期は、９世紀末頃から 10 世紀前半頃に位置付けられる。

前述の前田氏の分析から、祭祀の対象が個別建物→建物群→村落全体と大きくなるに従い、土師器無台椀の点数は増え、同時に器種構成が変化し、輸入陶磁器・国産施釉陶器・黒色土器・土師器有台器種の比率が高くなっていくことが明らかにされている［前田 1997］。これに従えば、本遺跡の埋納遺構は、土師

器無台椀が中心でその数も少なく、個別の建物に対する小規模の祭祀だったものと考えられる。また、埋納遺構は、どの建物にも伴うものではなく、SB348・571 にも伴うものの、中心的な建物である SB317・608 に伴うものであり、SB571 もⅣ期の主要な建物とみることも可能であろう。出越氏は祭祀が執り行われる大型建物は、他の建物より一段上の格付けがなされたと想定したが、本遺跡の状況もそれに当てはまるものであろう［出越 1991］。

遺　構	遺　物	関連建物	建物との位置
P２	土師器無台椀３点		
P306	土師器無台椀４点	SB317	建物外
SK280	土師器無台椀６点	SB317	柱穴列上
SK492	土師器無台椀５点	SB608	建物中
SK573	土師器無台椀５点・小甕１点	SB571	建物中
SX32（P43含む）	土師器無台椀 14 点、有台椀１点、有台鉢１点、内面黒色土器有台椀１点	SB348	建物外

第 10 表　土器埋納遺構一覧

第４節　埋葬関連遺構について

これまでの新潟県内の古代の埋葬関連遺構は、調査事例が少ないため研究の蓄積が少なく、春日真実氏［春日 1995］と江口友子氏［江口 2000］によって集成され、その後の調査例を追加しても 18 遺跡と少ない。これは、実際はかなりの数の埋葬関連遺構が検出されていると想定されているが、比較的わかりやすい火葬墓の検出例が少なく、土坑墓は出土遺物や遺構の状況から積極的に位置づけが難しいことから検出例が少なくなっていると考えられる［伊藤 2005］。

本遺跡からは、埋葬関連遺構は可能性があるものも含めて、SK146・205・246・260・482・512 の６基が発見された。その内訳は、木棺墓２基（SK146･205）、土坑墓２基（SK246･482）、火葬灰埋納土坑２基（SK260･512）である。木棺墓は、大きな意味で土坑墓に含まれるものであるが、覆土の堆積状況から木棺の存在が推定できるものを木棺墓とし、堆積状況から推定できず、遺体を直接埋葬したと考えられるものを土坑墓として取り扱う。木棺墓、土坑墓ともに墳丘などの上部構造は確認できなかった。

木棺墓は、２基で違いが見られる。SK146 は、覆土中に土器が散在していたため、木棺を埋めた後その上あるいは墓上で祭祀を行った可能性があろう。確実に木棺内に納められたと言える遺物は確認できなかった。遺物は、食膳具・貯蔵具・煮炊具とバラエティーに富む。SK205 は、側板を打ち込んで木棺部分を形成しており、棺外に土師器無台椀が１点埋納されているのみである。時期は、SK146 が９世紀中葉から後半、SK205 が 10 世紀前半頃と考えられる。

土坑墓は、SK246 からの出土遺物などがないため詳細は不明であるが、土坑の規模や形状から土坑墓と判断した。SK482 は、楕円形で南東隅に土師器無台椀が正位、内面黒色土器無台椀が逆位で埋納されている。その他の遺物は出土していない。時期は、SK482 が９世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

火葬灰埋納土坑は、今回の調査では２基がそれに該当すると思われる。SK260 は円形の土坑で、炭化物、焼土及び灰と見られる白色土が多量に含まれており、土師器無台椀を主体とした遺物が出土している。SK512 は長方形の土坑で、底面には炭化物がまとまって埋まっており、その中に微細な焼骨片が混ざっていた。骨は分析を行ったところ、人の骨との結果であった。土器などの遺物は出土していない。両遺構と

も覆土の土壌分析を行ったところ、リン酸およびカルシウムの富化が認められた。どちらも炭化物や焼土を多量に含んでいるが、焼土が面的に広がらず覆土に混ざる状態で含まれており、遺構内で火を焚いた可能性は低いと考えられる。また、火葬墓としては、骨蔵器がなく、まとまった骨も出土しないことからその可能性も低い。覆土の状況が火葬灰埋納土坑に類似することから、そのように判断した。火葬墓の発見はできなかったが、調査区外に存在する可能性がある。

本遺跡の特徴は、木棺墓、土坑墓、火葬墓が併存する可能性が高く、それぞれが集落内に散在し単独で造られていることである。古代の墓制については、各地域で研究が進んでおり、畿内の様相は９世紀後半以降は火葬墓と薄葬化した木棺墓が混在する時期とされており［黒埼 1980］、隣接する長野県あるいは関東の様相も９世紀後半から 900 年を前後する頃まで、火葬墓と土坑墓が混在しているとされる［原 1998、仲山 1995］。９世紀中葉から 10 世紀の前半頃まで営まれる本遺跡はちょうどその期間にあたり、土葬と火葬が混在していることは畿内や周辺地域の様相に沿ったものと言えよう。

被葬者は、集落の有力者である可能性が高いが、木棺墓、土坑墓、火葬墓の採用の違いについては、今回の調査からは明確ではない。木棺墓と土坑墓の違いは、遺体を木棺に入れて埋葬するという、より丁寧な埋葬方法である木棺墓の方が集落内において上位者が被葬者であることが考えられる。しかし、火葬墓が見つかっておらず様相が分からないことから、土葬と火葬あるいは木棺墓と土坑墓の違いが何に起因するのかは今後の検討課題である。

第５節　焼土坑（SK342）について

調査区北西部で焼土層の広がりを検出した SK342 の性格については、判然としない。遺構形状と推定されるべき性格の不一致が問題を困難にさせている要因である。調査時から SK342 に関しては１．土師器焼成坑、２．鍛冶関連遺構、３．廃棄土坑、４．炊事場、５．祭祀場、６．火葬関連遺構と６つの可能性を想定しており、覆土の洗浄を行った。本遺構では 2.7kg を越える土師器が出土しており、SX １や SD ７を除くと最も出土量が多い。また、その内 74％が無台椀であり、器種の偏りが認められる。SK342 の周囲には平面楕円形を呈する溝 SD347 が巡っており、煮炊具の割合が多いものの、土師器が 1.6kg と比較的多数出土している。遺物出土量の偏重から、両遺構合わせて一体の施設が形成されていたと推定される。なお、本遺構は SK342 の形状が漏斗状を呈しており、加えて小ピットが併設される。各部の名称について、ここでは漏斗状の上部で断面弧状を呈する部位を土坑上部（図版 43：SK342 覆土１～６が該当）、漏斗状下位の覆土７～ 11 が堆積する部位を土坑下部、小ピットに分けて呼称する。

最も可能性が高いと考えられるのは１．土師器焼成坑としての性格であろう。まず、小ピットにおいては断面より少なくとも３回に渡る焼土の堆積が認められ、本遺構が複数回運営された燃焼施設であったと推定される。また、小ピット覆土下位より土師器無台椀（167 ほか）が出土しており、燃焼行為と土師器無台椀の関係性が示唆される。小ピット内から土師器無台椀は 494g が出土しており、これらは SK342 から出土した土師器総量の２割弱に相当する。調査時においても小ピット内には土師器無台椀が多く含まれている印象であったが、SK342 における土師器の出土量と各部の規模とを比較すると、相対的に無台椀の破片が小ピット内の焼土及び炭層に多量に含まれている状況がうかがえる。対して土坑下部からの土師器の出土量は散発的であり、燃焼行為ならびに土師器無台椀の関係性から、土坑下部は燃焼行為が行われた際にある程度埋没していた可能性を示唆するものと捉えられよう。これは、土師器の出土量に限らず、覆土中における焼土ブロックないしは焼土層の広がりが小ピット及び土坑上部に限られる点と相補的に考えら

れる。ただし、土坑下部の覆土８層中には灰が含まれており、土坑下部の完全埋没後に燃焼行為が行われたとも考え難い。燃焼行為が複数回行われつつ小ピットおよび土坑下部の埋没が進行していった状況が窺える。最終的には土坑上部の底面で検出された焼土範囲が小ピットの最終焼土層と接点を持つことから、遅くとも土坑下部の完全埋没後に３度目の燃焼行為が行われたと考えられる。これらの状況から、SK342は土師器焼成坑である可能性が考えられる。

県内における土師器焼成坑には、出雲崎町の梯子谷窯跡や小千谷市の城之腰遺跡、新潟市の草水町２丁目遺跡などの事例がある［望月 2005］。また近年では、新発田市の丸山Ａ遺跡で８世紀後半から９世紀の中頃まで継続的に土師器の焼成が行われていた事例が報告されている［渡邊ほか 2014］。時期が下った 10 世紀第４四半期には、本遺跡と同じ東山丘陵沿いに長岡市土用木西遺跡の事例がある［田中 2007］。県内を含めた北陸の土師器焼成坑に関しては望月精司氏の一連の研究があり、梯子谷窯跡に見られるような拠点的な須恵器窯との密接な関係が認められる一方、９世紀代には須恵器生産と切り離された形で経営される小規模な土師器生産が主体となっていく様相が指摘されている［望月 1997・2005］。その過程において望月氏が小規模経営窯の類型とした「Ａ類不整形タイプ」［望月前掲書］が、越後で主体的であるとされる。Ａ類不整形タイプの土師器焼成坑は掘方が浅く床面の被熱度合いが弱いとされ、SK342 土坑上部のみであれば越後特有の小規模経営窯としての評価が与えられよう。しかし、SK342 土坑下部や SD347 といった付随する施設は一般的な土師器焼成坑には見られないようである。

そのため、１．土師器焼成坑以外の可能性について検討を行った。本遺構の調査を進めるにあたり切り合い関係にある SB348 － P ３より羽口が出土したこともあり、２．鍛冶関連遺構の可能性を考慮して遺構覆土を水洗し微細遺物の獲得に努めた。その結果、期待されるべき鍛冶関連遺物は含まれておらず、また遺構内の被熱痕跡も弱いことから、本遺構に関し鍛冶関連遺構としての性格は想定し得ない。同様に、微細骨片は２ｇ弱が出土したが、あまりに少量で６．火葬関連遺構である可能性も低いと考えられる。SD347 に隣接して SK42 が存在し、須恵器の大甕が本来は据えられていた可能性が考えられるため、４．炊事場、５．祭祀場としての可能性も検討したが、断定的ではない。洗浄の結果、土坑覆土中に炭化米が 275 粒含まれていることが判明したが、土坑の性格についてほぼ全ての可能性について何らかの理由付けが可能である。ただし、炭化米は小ピットが７粒、土坑下部が 212 粒、土坑上部が 56 粒であり、土坑下部に多い傾向が認められる。土師器焼成時に藁燃料を用いた場合、米が残る可能性も皆無ではないが、その場合、SK342 土坑下部があくまで廃棄土坑、つまりは灰捨て場であった可能性を支持する要因となり得るに過ぎない。以上のことから、SK342 の中でも土坑下部は焼土坑上部に先行する廃棄土坑であった可能性が考えられる。廃棄土坑の埋没に合わせて、同地点を利用して土師器の焼成を行ったという複合的な利用形態があった可能性が示唆される。

第６節　畝状小溝群について

「第Ⅳ章第３節」で触れたように、居住域と重複する形で畝状小溝群が展開しており、主軸方位から６群に分けた。調査区を大きく SD480・481 以西、SD480・481 － SD ７間、SD ３－７間、SD ３以東の４地域に分けるとするならば、それぞれの地域に溝群１・２、溝群３・４、溝群５、溝群６が対応し、各溝群は微高地の方向と SD ７等の溝によって区画される状況が窺える。また、各溝群は、集落の居住域ないしは墓域と重複して検出されており、本遺跡では各時期において集落内の構成が大きく変化していた可能性が考えられる。畝状小溝群に関しては、近年、細井佳浩氏が県内の事例を集成し、その性格や集落内にお

ける土地利用のあり方について考察を行っている。そこでは居住域との位置関係から畝状小溝群を大きく「集落周辺型」と、坂井秀弥氏が「住耕一体型」［坂井 1999］とした「居宅地内型」の２種に分類されており［細井 2014］、本遺跡における検出事例は「居宅地内型」に比定される。畝状小溝群の性格に関しては、一般的に「畠」跡と考えられており、本遺跡もこれに従う。溝群１・２・４・５では微高地の方向に沿って平行する状況、溝群３では同一地点において主軸方位を変えながら切り合う状況、そして溝群６では切り合いを持たず方形区画を志向したと考えられる状況の３つの耕作パターンを確認することができた。溝群３では最も古い溝群３－１が北西－南東方向で、これと直接切り合う溝群３－２は北東－南西方向で直交する。最も新しい溝群３－３は南北軸をとり、方角を意識した集落構造のあり方へと変化する状況がうかがえる。畝状小溝群の帰属年代は遺物量が豊富ではないため断定的ではない。しかしながら、遺構の切り合いを参考に、９世紀末から 10 世紀初頭頃を中心に、溝群３－１がやや古く溝群３－３および溝群６はやや新しいと考えられる。当該期の集落のあり方については、信濃国域における木棺墓を主軸とした原明芳氏の論考があり、「朝野群載」巻十七所収の上総国藻原荘の記事を引用して、「墓を造った地を子孫が手放し、自らの墳墓が「牛羊」に踏み荒らされ（中略）継承して経営されないことが想定されており、それが当然であった可能性さえ」あると指摘される［原 2009］。本遺跡において溝群３－１が SK512 を切る状況も同様であろう。加えて、地山は砂質分の多いシルトであり、調査時は少雨であっても遺構内に土壌が堆積したり遺構の肩が崩れたりした経験がある。小溝群の埋没・変遷に関しては時期を大きく隔てず、居住域・墓域・生産域の構造も比較的短期間に変化した可能性が考えられる。

第７節　出土土器の位置づけ

新潟県における古代の土器編年については、上越市今池遺跡、聖籠町山三賀遺跡の調査から坂井秀弥氏によって整理され［坂井 1984・1989］、また一方で、新潟県内の古代須恵器の主要な供給元の佐渡小泊窯跡の編年が再検討され［坂井・春日ほか 1991］、これによって供給元及び消費地での編年の大枠が示された。これを基礎に、その後は百瀬正恒氏［百瀬 2008］や笹澤正史氏［笹澤 2011］によって問題提起がなされているものの、春日真実氏の一連の研究［春日 1999・2005 など］により示された土器編年が基準になっている。その中で、古志郡の土器編年については、春日氏によって出雲崎町梯子谷窯跡調査成果［春日 2001］から、田中靖氏によって長岡市八幡林遺跡［2005］、下ノ西遺跡［2003］、門新遺跡［1995・1996］、土用木西遺跡［2007］の発掘調査成果から、その概要が示されている。ここでは田中氏の成果に依拠しながら、食膳具を中心に検討し、本遺跡の年代的な位置づけを行いたい。

年代	春日1999	春日2001	田中1996・2003・2005	本書
850	Ⅴ１期	梯子谷窯跡７期	下ノ西遺跡７期	
	Ⅴ２期	（＋）	下ノ西遺跡８期	Ⅰa期
	Ⅵ１期	梯子谷窯跡８期		Ⅰb期
900	Ⅵ２・３期	梯子谷窯跡９期	下ノ西遺跡９期	Ⅱ期
	Ⅶ１期	梯子谷窯跡10期	下ノ西遺跡10期	Ⅲ期
	Ⅶ２期	梯子谷窯跡11期	門新遺跡Ⅲ期	Ⅳ期

第 11 表　編年対照表

Ⅰ期は、量は少ないが、やや古い様相を持つものが存在し、ａ期とｂ期に分けることが出来る。ａ・ｂ期ともに食膳具は須恵器が土師器よりも多い傾向がある（第 20 図）。

Ⅰａ期として捉えられるのは、SI54・SI664・SK146 である。須恵器有台坏は底径が大きく、身が深い形態であり、しっかりした高台が付く。須恵器無台坏は、器壁が厚く、体部の外傾度合いは弱い。土師器無台椀は、口径が大きく身が深い形態で、外面にヘラケズリの再調整が施されている。

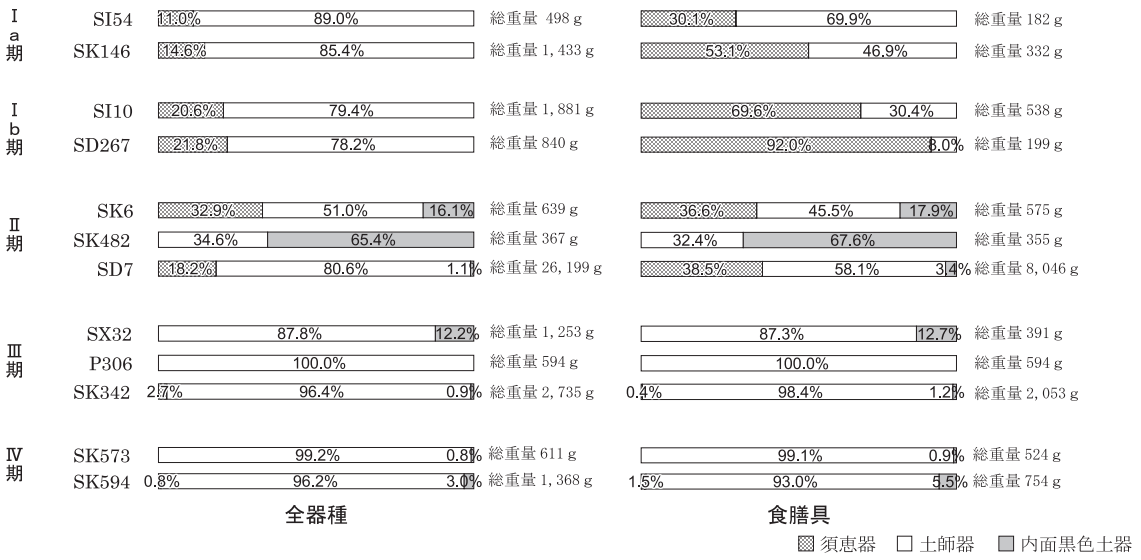
Ⅰｂ期は、SI10、SD 3・8・267 が該当する。須恵器有台坏は、ａ期に比べ底径が小さくなり、体部は外に開く。高台は低くなり、外端設置する。須恵器無台坏は、口径 11.8 ～ 13.4㎝、底径 7.0㎝～ 8.4㎝、器高 2.5 ～ 3.2㎝を測り、器壁が薄くなり体部はより外に開く。土師器無台椀はａ期と同様に大振りのものも見られるが、器高が低く坏型に近い形態のものも見られる。

Ⅰ期の時期は、土器の特徴から下ノ西８期に相当するものと考えられるが、ａ期はそれよりやや先行するものと考えられることから、Ⅰａ期を 9 世紀中葉頃、Ⅰｂ期を 9 世紀後半頃と考えたい。

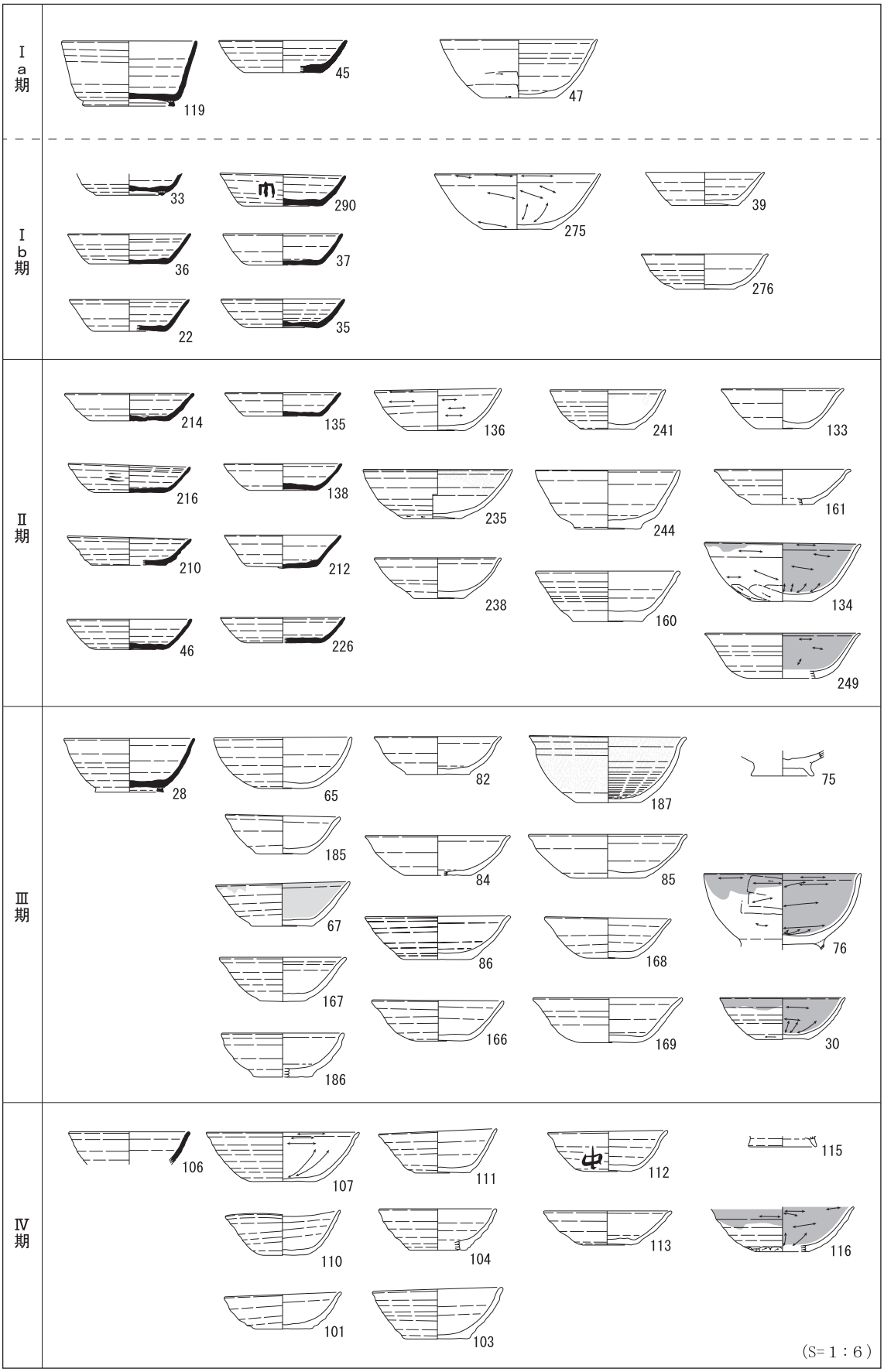
Ⅱ期は、SK 6 ・48・361・482・492 及び SD 7 が該当する。須恵器無台坏は、口径 11.8 ～ 12.8㎝辺りに集中する。底径 6.3 ～ 8.3㎝、器高 2.4 ～ 3.4㎝であり、Ⅰ期と大きな違いは見られない。土師器無台椀は、口径 12.4 ～ 13.8㎝が主体で、15㎝を超えるものも存在する。底径は、5.4 ～ 6.5㎝が主体となっており、Ⅰ期よりも小型化する。器形は、B 類が主体を占めており、C 類・D 類が同程度ある。Ⅰ期に続き再調整されるものも定量存在するが、ロクロ痕が顕著なものも多くあり、粗雑化が窺える。内面黒色土器も定量存在し、外面にヘラミガキやヘラケズリを施すものもある。

Ⅱ期の時期を考えてみたい。SD 7 の説明で述べたように、SD 7 の食膳具構成比率が須恵器 38.5％、土師器 58.1％、内面黒色土器 3.4％となり、土師器が須恵器を上回るようになる。これは、下ノ西編年 9 期にみられる変化であり、構成比率もほぼ近い。従って、Ⅱ期は 9 世紀末から 10 世紀初頭頃に位置づけられよう。

Ⅲ期は SK260・280・342、SE677、P 2・43・306、SX32 が該当する。須恵器食膳具はほとんど見られなくなり、流れ込みの可能性が高いが、SI 5 から出土している有台坏は、椀型にかなり近く新しい様相である。土師器食膳具は、数は少ないが有台椀が加わる。無台椀は、口径は、12.0 ～ 14.0㎝を主体とするが、15㎝以上の大振りのものも定量存在する。器高は 4.0 ～ 5.5㎝を主体とする。底径は、5.6 ～ 7.0㎝が



第 20 図　土器種別組成図（重量比）


Ⅰa期
119
45
47
Ⅰb期
33
290
275
39
36
37
276
22
35
Ⅱ期
214
135
136
241
133
216
138
235
244
161
210
212
238
160
134
46
226
249
Ⅲ期
28
65
82
187
75
185
84
85
67
86
168
76
167
166
169
30
186
Ⅳ期
106
107
111
112
115
110
104
113
116
101
103
(S=１：６)

第 21 図　食膳具変遷図

主体となる。再調整されるものはほぼなくなり、丁寧に撫でられるものもわずかにみられるが、ほとんどがロクロ痕を残すもので、さらに粗雑化が進んでいる。形態は、B 類と D 類がほぼ同程度で大半を占め、わずかにA類とC類がある。C類はⅡ期に比べて大幅に減っている。内面黒色土器は少ないながらも存在し、有台椀も加わる。

Ⅲ期の時期を考えてみたい。須恵器食膳具がほとんどなく、土師器食膳具が主体を占めること。土師器無台椀では口縁端部が外反する D 類が増え、Ⅱ期よりも粗雑化が進行するが、10 世紀第 2 四半期に位置づけられる門新遺跡 SD152 出土のものよりも全体的に口径が大きく器高が高いことから、それよりも前に位置づけられること。また、土師器と内面黒色土器に有台器種が加わることなどから、下ノ西 10 期に平行する、10 世紀前半頃が考えられる。

Ⅳ期は、SK573・594（SX266）が該当する。須恵器食膳具はわずかに残るのみである。土師器食膳具はこれまで同様 B 類が主体である。107 のように大振りの椀でヘラミガキが施される古い様相のものを含むが、口径 15㎝を超える大振りの椀が見られなくなる。全体的にはロクロ痕が顕著になり、さらに器形のゆがみが大きくなり、また器壁が厚くなるものがある。内面黒色土器もわずかに存在する。

Ⅳ期の時期は、土師器無台椀の粗雑化が進行し、ゆがみが大きくなる点は、門新遺跡 SD152 出土土器に類似するが、門新遺跡よりも若干深身の形態である。そのため、Ⅳ期を 10 世紀第 2 四半期の中でも早い時期に位置づけたい。

第 8 節　墨書・漆書土器について

本調査では、69 点の土器において墨書・漆書を確認することができた（第 12 表）。墨書は 64 点、漆書は 5 点であり、その内 50 点を図示した。最も多く出土したのは SD 7 で 17 点あり、次いで SX 1 の 6 点、SD267 の 3 点となる。結果として、墨書・漆書土器はこの SD 7 を中心として SD267 を含む半径 30 m程度の範囲に集中する傾向が見られる（第 22 図）。これに対して、漆書は「×」字で統一され、SD 7 と SB574 を結ぶ範囲にほぼ限られる。I・J グリッドの周囲に展開する建物群との関連性が示唆されよう。

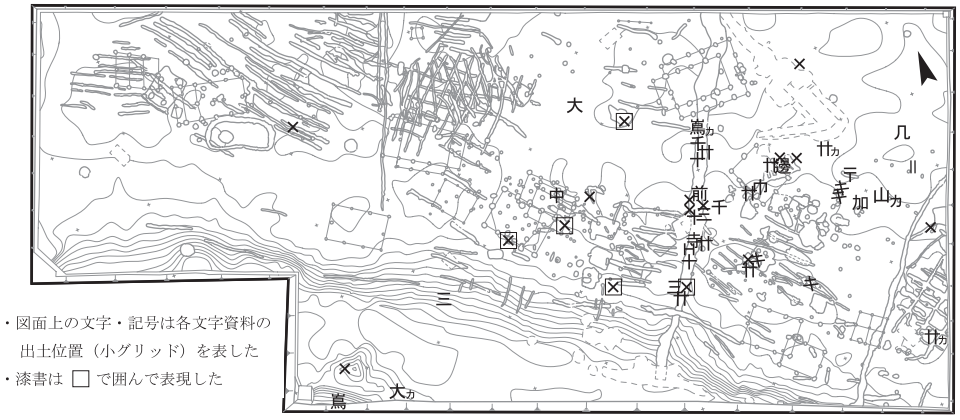
文字の構成は 1 文字墨書が主体であり、286・293 では内外面に 1 文字ずつ計 2 文字が書かれている。墨書・漆書の内、文字の一部ないしは全体が遺存しており判読対象となり得るものは 51 点を数え、墨書・漆書合わせて「×」字状の記号が 14 点と最も多い。類似した文字・記号に「十」字が 3 点あるが、「×」字の中には分類し難いものも含む。2 画の角度や正位ないしは倒位時における文様の向きで判断した。「卄」字は 10 点あり、「×」字の次に多い。その他の文字・記号は散発的で、各 1 ～ 5 点程度に留まる。また、記銘部位は須恵器無台杯の場合、体部外面に書かれるものは 3 割弱であるのに対し、土師器無台椀では 9 点を数え半数を超える。土器の種類および時期による選択が働いた結果と捉えられる。

文字種の判読に関しては『改訂新版　日本古代木簡字典』［独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所編 2013］を参考にしたほか、新潟県立歴史博物館の浅井勝利氏にご教示を賜った。また、県内外の事例に関しては新潟墨書土器検討会による一連の調査成果［小林ほか 2004・新潟墨書土器検討会 2013］及び、これらを基に明治大学日本古代学研究所において作成された 2013 年 3 月までのデータベース［吉村武彦ほか編 2014・加藤友康ほか編 2015］を参考にした。以下、主な文字種について概観する。

「寺」字墨書（227）　SD 7 の覆土 1 層より 1 点出土した。SD 7 では SB317 と SD153 の間の範囲に墨書土器の出土が限られており、この限られた範囲は微高地上ならびに居住域の範囲と重複する。SD 7 の埋没過程において近隣の建物群から遺物が流れ込んだ状況を示すものと考えられる。底部外面に「寺」字の

No.	出土位置			遺構	須恵器	土師器	内黒	記銘部位						向き	墨書	漆書	備　考
					食膳具	食膳具	食膳具	体部外面上半	体部外面	体部外面下半	底部外面	内面	不明				
5	13	K	5	SB318-P8	1						1			－	1		「廾」カ
20	13	H	2	SB574-P2	1						1			－		1	「×」カ
37	14	L	1	SI10	1						1			－	1		墨痕あり
44	14	K	12	SI54	1			1						正位	1		「キ」状
112	12	I	16	SK594		1				1				倒位	1		「中」
138	14	K	7	SK6B	1						1			－	1		「×」
153	14	K	23	SK151	1					1				－	1		文字種不明
193	13	J	15	SD7	1					1				正位	1		「十」カ
196	13	J	15	SD7					1					正位	1		「三」
197	13	J	15	SD7	1						1			－	1		「×」カ
198	14	J	12	SD7	1						1			－	1		「廾」
205	13	J	24	SD7	1				1					－	1		「H」状
207	13	J	10	SD7	1						1			－	1		「前」カ
209	12	K	21	SD7	1					1				正位	1		「十」カ
215	14	J	12	SD7	1						1			－		1	「×」
216	14	J	12	SD7	1				1					正位	1		「三」
225	12	K	16	SD7	1						1			－	1		「千」
226	13	J	10	SD7	1						1			－	1		「×」
227	13	J	24	SD7	1						1			－	1		「寺」
229	12	K	21	SD7	1						1			－	1		「廾」
246	14	J	3	SD7		1				1				正位	1		「十」カ
247	13	J	23	SD7		1				1				倒位	1		「乙」カ
285	14	M	19	SD131	1						1			－	1		「×」
286	14	I	15	SD153	1					1		1		正位	1		文字種不明
288	13	K	13	SD267	1						1			－	1		「廾」
289	13	K	13	SD267	1					1				－	1		文字種不明
290	13	K	14	SD267	1				1					正位	1		「巾」
292	13	L	20	SD273	1						1			－	1		「千」（「〒」状）
293	12	I	23	SD302	1						1	1		－	1		「×」「□」内外あり
300	10	F	17	SD416	1						1			－	1		「廾」カ
317	14	K	8	SD111	1						1			－	1		文字種不明
331	13	L	24	P156		1					1			－	1		「キ」状
337	13	E	24	SX1	1						1			－	1		「×」
339	14	E	8	SX1	1				1					倒位	1		「嶌」
340	13	G	12	SX1	1			1						正位	1		「三」
341	14	F	12	SX1	1						1			－	1		「大」カ
343	14	H	24	SX1		1					1			－	1		「千」カ
382	12	J	2	SX400	1						1			－		1	「×」
390	13	M	24	遺構外	1				1					正位	1		「廾」カ（∥）
391	13	J	24	遺構外	1				1					正位	1		「廾」
397	13	L	6	遺構外	1						1			－	1		「邊」
398	14	M	2	遺構外	1						1			－	1		「山」カ
399	13	L	6	遺構外	1						1			－	1		「×」
401	13	I	1	遺構外		1					1			－		1	「×」
412	14	K	12	遺構外	1						1			－	1		「廾」
423	13	M	14	遺構外		1					1			－	1		「几」、漆紙付着
438	14	L	5	遺構外		1					1			－	1		「加」
439	13	J	15	遺構外		1				1				正位	1		「千」
441	11	I	19	遺構外		1			1					正位	1		「大」
448				排土		1				1				斜	1		「千」カ
未報告（点数）					12	7	1	0	3	1	8	1	5		18	1	細片
計（点数）					50	18	1	2	11	11	38	3	5		64	5	

第 12 表　墨書・漆書土器集計表



第 22 図　古代文字資料出土位置図（1 ：1,000）

墨書が認められた無台坏もその一つと言え、SD 7 の比較的浅い位置から出土した。底部片のみが遺存しており全体像は判然としないが、底部のやや丸みを帯びた形状からⅡ期の所産と考えられる。県内における「寺」字墨書は、2013 年時点で 13 遺跡 26 点報告されている。須恵器・土師器の食膳具に関しては 11 点が本資料と同様の底部外面に書かれており、記銘部位としては最も多い。類例の中では比較的近い地域に所在する見附市上田遺跡では、「寺」字が２点、「寺万呂」が１点出土している。報文の中で分析者の田中一穂氏は上田遺跡出土資料について、県内における寺院や仏教的な施設が考えられない地点からの出土例などから、「寺」字墨書を「寺院・仏教とは無関係で、人名「寺万呂」の象徴的な一文字を抜書きしたもの」［田中 2005］とする理解を示している。本遺跡においては四面廂建物 SB317 が検出されたことから、本資料の出土をもって村落内寺院が存在した可能性を検討したが、「第Ⅶ章第２節」のとおり、寺院としての性格を確定するには至らなかった。「寺」字に関しては、前述の上田遺跡の例に見られたように、人名等を示した可能性や SB317 以外の遺構が寺院であった可能性についても看過すべきではないと考えられる。なお、SI54 出土の須恵器杯（44）やＰ 156 出土の土師器無台椀（331）など、文字の一部しか残存していない資料において「寺」字を想起させるものが４点出土しており、その形状から「キ」字状墨書とした。細片が多く原位置を留めていない可能性も含むが、出土地点は SD 3 および SD 7 によって区切られた SB318・SI54 等の建物群が所在する範囲に限られる。

数字を記した墨書　「卄」字（5・198・229・288・300・390・391・412）が 10 点、「千」字（225・292・343・439・448）が５点、「三」字（196・216・340）および「十」字が３点（193・209・246）出土した。漢数字を用いたものはⅠｂ期～Ⅱ期に見られる。「卄」字は全て須恵器の無台坏である。SB318 出土の５は他の文字である可能性も考えられる横・縦共に直線状で、払い、ハネは認められない。198・229・288・412 では４画目の横線が無い。県内では、可能性があるとされたものも含むと７遺跡 26 点が数えられている。新潟市的場遺跡や上越市今池遺跡の事例では４画目の横線も認められ、本遺跡と異なる。「千」字は須恵器無台坏および土師器無台椀が２点ずつ、計４点出土した。土師器の２点は共に遺構外からの出土である。皆、筆順は通常の「千」字と同じで、SD273 出土の 292 は１画目が２画目に平行し「〒」状を呈する。ここでは「千」字の変形と捉える。「千」字を用いた例は県内では 20 遺跡 108 点が確認されている。新潟市釈迦堂遺跡では「千縄」と２文字を用いた事例が報告され、人名を表した可能性が指摘されている［江口 2000］。だが、「千」字の類例は多いため、本遺跡における同字が人名を表すものか判然としない。「三」字は SD 7 から２点、SX 1 から１点出土しており、全て須恵器無台杯である。３点とも体部外面に正位で書かれており、216・340 は口縁寄りの高い位置に記される。「十」字としたものは SD 3 に限られる。須恵器無台杯が２点、土師器無台椀が１点である。体部外面下部に正位で書かれる点で共通する。

その他の文字を記した墨書　須恵器無台杯に「前」(207)、「巾」(290)、「嶌」(339)、「大」(341)、「邊」(397)、「山」ヵ(398)、土師器無台椀に「中」(112)、「几」(423)、「加」(438)、「大」(441) がある。「嶌」・「大」字を除く７種の文字では各１点ずつ出土した。須恵器無台杯はいずれもⅠｂ～Ⅱ期の所産である。「前」字は SD 7 出土で、県内でも２点が集成されているに留まり出土例は少ない。207 は底部外面の中央に書かれており、文字の右半を欠く。文字の上部に書かれるべき横画は所謂「ひとやね・ひとがしら」のように傾斜している。「嶌」字は SX 1 出土の 339 が文字の全形を留めており判読し易い。字形は、「山」へんが冠のように上部に配置された形をとっている。遺構外Ⅶ層からこの冠状の「山」が書かれていると考えられる細片が出土しており「島」字の可能性がある。339 は底部外周から体部外面にかけて倒位で書かれており、運筆は粗く下部の「島」は崩れた形をとっている。県内では「島」字が１点、「嶋」字が７遺跡 21 点集成されてお

り、数多く出土しているとは言い難い。長岡市八幡林遺跡における「足嶋」、上越市寺町遺跡における「嶋継」のように、複数文字を用いて人名を表したと考えられる事例があるため、本遺跡の事例も人名の一部である可能性がある。ただし本字の本来の意味から、地名を表した可能性に関しても留意すべきであろう。「邊」字（397）は遺構外出土であり、底部外面に書かれている。文字上部は大きく欠損するが、「しんにょう」及び上部の「方」形の運筆から同字と判断した。県内における出土例は認められず、隣県の富山県で２例報告されている［加藤ほか 2015］が全国的に見ても少ないようである。本字は「山・川・野・垣」などに後続し地名や人名を表すことが多く、本遺跡でも地名等を表す可能性が考えられる。しかし、底部の面積に対して文字が大きいため、複数字が書かれていたとは考え難い。「山」ヵとした 398 は遺構外出土で、底部外面に書かれている。直線状の３画がそれぞれ１点で交差しており、矢印状の記号である可能性も考えられる。見附市の上田遺跡において矢印状を呈する「山」字が報告されており、「集団内でも文字について不分明な者たちが真似て書き継ぐうちに次第に省画・簡略化が著しくなり、字体の変化が生じたもの」［田中 2005］と考えられている。

土師器無台椀における墨書土器は遺構外からの出土が多く、時期の特定は困難である。９世紀後半から 10 世紀第２四半期のいずれかの時期に収まるものであろう。「中」字が書かれた 112 は SK594 の浅い箇所から出土しており、遺構外の破片と接合した。墨書は体部下半にあり、運筆から倒位で記されたと考えられる。10 世紀第２四半期頃の所産と考えられ、本遺跡における墨書土器の中では後出的である。

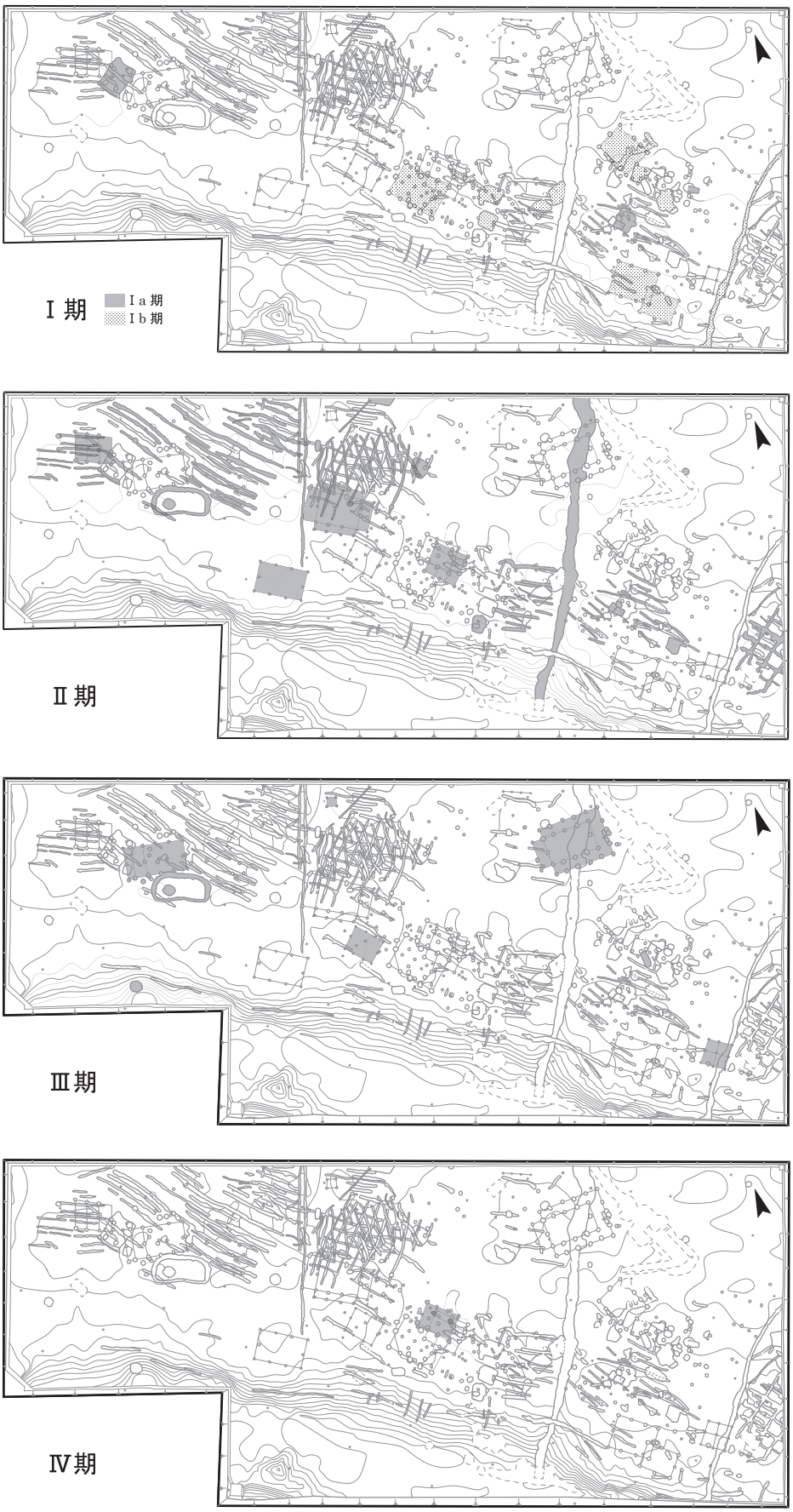
第９節　集落の変遷と遺跡の性格

Ⅰ期（９世紀中葉～末頃）

８棟の竪穴建物と４棟の掘立柱建物で構成され、畠や溝などが伴う。SD7 はこの頃から利用されていたと思われる。SI54・664 は他の建物に比べて若干先行するものと考えられる。今回の調査で検出された竪穴建物の面積は小さく 10㎡に満たないが、SI664 は集落の中では突出して大きく約 19㎡となっている。SB574 は平面積が 43.1㎡あり、当期の最大の建物で中心的な建物と考えられる。SB166・167 は重複するが、同時期で捉えられるため、短期間で建て替えが行われた可能性がある。竪穴建物は、２棟が一組になるように立地しており、掘立柱建物に隣接し、それぞれの建物に付属するものであろうか。SI212 からは巡方の裏金具が出土している。また、木棺墓および火葬墓の存在が想定される火葬灰埋納土構があり、有力者の存在が窺われる。

Ⅱ期（９世紀末～ 10 世紀初頭頃）

竪穴建物４棟と掘立柱建物４棟で構成され、畠、溝、土坑、井戸などが伴う。畠が大きく拡大し、広範囲で畠が作られる。竪穴建物は、Ⅰ期のように掘立柱建物に隣接した位置になく、畠に隣接し散在する。そのため、畠の耕作者の住居や作業小屋だった可能性が考えられる。一部の畠に後出して、掘立柱建物が建てられる。掘立柱建物は廂が付く建物や総柱の建物が見られる。中でも SB608 はやや特異な形態ではあるものの四面廂建物で、井戸を伴う可能性が高く、集落の中心的な建物であることは間違いない。また、SB608 には土器埋納遺構が伴っており、地鎮などの祭祀が行われた可能性が高い。SB316・320・608・SK342 は主軸方位を同じくし、同時期に位置づけられよう。SK342 はⅢ期まで存続していたものと考えられ、土師器焼成坑として機能していた可能性がある。SB320 は総柱建物で、穀物や耕作物の保管をしていた倉の可能性がある。集落で最大の溝であった SD ７はこの時期に埋没する。土坑墓（SK482）と火葬灰埋納土坑（SK260）があるが、SK482 は SB608 と溝群３に近接したところに位置し、居住区域の中に位置



第 23 図　遺構変遷図（1 ：1,000）

しており、SK260 は居住区域から離れた何もないところに位置している。当該期の遺物には、「寺」字墨書土器や灯明皿や仏鉢型土器が出土していることから、仏堂施設の特定までは至らなかったものの仏事が行われていた可能性が高い。当該期は、Ⅰ期から畠が大きく広がり、廂付建物が建つなど、開発が大きく進み集落の最盛期を迎える。

Ⅲ期（10 世紀前半頃）

掘立柱建物５棟で構成され、井戸、土坑などが伴う。竪穴建物は造られなくなり、掘立柱建物が主体となる。集落で最大の SB317 が存在し、Ⅱ期の SB608 より規模が大きく整った四面廂建物となり、集落の中心的な人物が成長したことが窺える。Ⅱ期に見られた畠は、ほとんどなくなり建物のみの景観になる。SB535 の存在は、農耕が行われ収穫物を収蔵していたことが考えられる。そのため、この時期まで残る畠もあったと想定され、また調査区外に広がっている可能性が考えられよう。大甕を据えた SK42 が隣接する SB348 に付属するものであるとすれば、SB348 は何らかの工房や祭祀を行う施設だった可能性も考えられよう。井戸（SE677）は、SX １の斜面に位置し、特定の建物に付属するような状況ではないため、集落全体で使う井戸だったであろうか。立地は悪いが、湧水する場所を選定した結果、少しでも低く水に近いこの位置になったと考えられる。木棺墓が造られ、SB317 に係わる人物が埋葬されていた可能性が考えられる。当該期は、Ⅱ期に引き続き集落の最盛期であり、安定した時期だったと考えられる。

Ⅳ期（10 世紀第２四半期頃）

建物は掘立柱建物１棟（SB571）でそれに伴う埋納土坑や廃棄土坑が存在する。Ⅲ期にみられた大型の四面廂建物がなくなり、建物数が極端に減少することから当該期を最後に集落は衰退していったものと考えられる。

以上から、９世紀中葉頃に新たにこの地域に進出し、周辺を開発した集団で、そこから急速に成長し、９世紀末頃には四面廂建物を持つほどの集団になっていった。しかし、10 世紀第１四半期頃を過ぎると衰退し、10 世紀第２四半期頃には廃絶するものと考えられる。これまで検討してきたように、建物の構造や配置、その他の遺構の構成からは官衙関連施設であることは考えがたく、新たに勢力を拡大してきた集団の集落と考えたい。集落が営まれた期間は 100 年にも満たず、居住域と耕地が一体となって住耕一体型の集落を形成しそれに井戸や土坑が伴う、「王朝国家型村落」［坂井 1999］ということができるだろう。そして、一般集落ではあまりみられない廂付の大型掘立柱建物、施釉陶器、帯金具が出土している。また、権状錘が出土しており、一般集落ではなく公的な色彩を帯びる遺跡からの出土が大半を占めること［望月 2003、神谷・笹澤 2008］が指摘されている。従って、本遺跡は一般集落よりも階層が上であることは間違いないだろう。

出土遺物からは、農業を生業の中心とし、手工業、漁労活動を行っていたことが窺える。手工業では、集落の始まりから一貫して漆を利用しており、漆紙が付着する漆パレットや漆桶の出土から漆工房の存在も想定される。また、土師器焼成坑があったとすれば、土器生産も行っていたということになろう。

信濃川右岸の地域では、富島地区の五百刈遺跡や盲田遺跡の調査において、９世紀代に有力者の存在が明らかとなり、また土用木西遺跡の調査から 10 世紀末から 11 世紀前半の有力者の居宅が存在していたことが明らかにされ、徐々に古代の様相が明らかとなってきている。今回の調査において９世紀後半から 10 世紀前半の様相を捉えられ、この地域の歴史を考える上で一つの事例を追加することができた。今後は、10 世紀中葉以降の空白を埋めることにより、より古代の様相を明確にしていくことが課題となろう。

引用・参考文献

相田泰臣　2012「第Ⅶ章第２節　遺物」『林付遺跡　第２次調査』 新潟市教育委員会

愛知県　2015『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』 愛知県史編さん委員会

天野努　2005「墨書土器からみた古代房総の郷と村と集落・家族」『千葉県文化財センター　研究紀要』24　財団法人千葉県文化財センター

雨宮龍太郎　1983「古代村落と仏教」『研究連絡誌』２号　千葉県文化財センター

荒川隆史・加藤学　1999『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 93 集　和泉A遺跡』 新潟県教育委員会　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史ほか　2004『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 133 集　青田遺跡』 新潟県教育委員会　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

安藤正美　2005『見附市埋蔵文化財調査報告　第 20　上田遺跡』 見附市教育委員会

石毛彩子　2007「古代豪族居宅の構造－官衙・集落との比較から－」『古代豪族居宅の構造と機能』 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

伊藤秀和　2001『加茂市文化財調査報告（13）　鬼倉遺跡』 加茂市教育委員会

伊藤秀和　2005『加茂市文化財調査報告（14）　馬越遺跡』 加茂市教育委員会

伊東隆夫ほか編　2012『木の考古学　出土木製品用材データベース』 海青社

江口桂　2012「東日本における古代四面廂建物の構造と特質」『四面廂建物を考える』 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

江口友子　2000「第Ⅶ章　まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 100 集　釈迦堂遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

小熊博史　2002「東山丘陵における縄文時代の集落跡－中道遺跡の中期集落を中心に－」『長岡市立科学博物館研究報告』第 37 号　長岡市立科学博物館

春日真実　1993「王朝国家期の越後－上越市一之口遺跡（西地区）・新潟市小丸山遺跡を事例として－」『新潟考古』第４号　新潟県考古学会

春日真実　1995「新潟県の奈良・平安時代の墓制について」『東日本における奈良・平安時代の墓制』 東日本埋蔵文化財研究会

春日真実　1995「古代集落の展開－越後を事例として－」『研究紀要』(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1997「越後・佐渡における 9 世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会

春日真実　1997「第Ⅶ章Ｂ　平安時代」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 87 集　上郷遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1997「越後における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第 7 号　北陸古代土器研究会

春日真実　1999「第４章第２節　土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会

春日真実　2001「第Ⅵ章２　和島・出雲崎地域における 7 世紀末から 10 世紀の土器の変遷」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 104 集　梯子谷遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　2005「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会

春日真実　2007「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第 18 号　新潟県考古学会

加藤真二　1997「木棺墓 SX6428 について」『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告書』 奈良国立文化財研究所

加藤友康ほか編　2015「全国墨書土器・刻書土器、文字瓦　横断検索データベース（試行版）『2014 年度科学研究費補助金 (研究成果公開促進費)　墨書土器データベース』(課題番号 268006)　http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/bokusyoDB.html　明治大学日本古代学研究所

神谷佳明・笹澤泰史　2008「出土度量衡遺物について」『研究紀要』26 号　(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

北村淳　2004「第Ⅵ章６Ｂ１　古代の遺物　仏鉢型土器」『中谷内遺跡Ⅲ・沖ノ羽遺跡Ⅱ・細池寺道上遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会

北村亮・山本肇ほか　1985『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 37 集　金屋遺跡』 新潟県教育委員会

楠正勝　1987「第５章第１節３　埋納土坑について－掘立柱建物に伴う祭祀について－」『金沢市文化財紀要 68　金沢市千木ヤシキダ遺跡』 金沢市教育委員会

黒埼直　1980「近畿における８・９世紀の墳墓」『研究論集Ⅵ』 奈良国立文化財研究所

小池邦明・藤塚明ほか　1993『新潟市的場遺跡』 新潟市教育委員会

小池邦明・本間桂吉　1995『新潟市小丸山遺跡』 新潟市教育委員会

小林義孝　1992「灰を納めた土壙」『究班』 埋蔵文化財研究会

小林昌二ほか編　2004『新潟県内出土古代文字資料集成』 新潟墨書土器検討会

齊藤孝正　1994「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３　施釉陶器－』 古代の土器研究会

坂井秀弥　1984「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 35 集　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥　1989「第Ⅶ章２　奈良・平安時代の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 53 集　山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥・春日真実ほか　1991「佐渡の須恵器」『新潟考古』第２号　新潟県考古学会

坂井秀弥　1994「庁と館、集落と屋敷－古代東国における館の形成－」『城と館を掘る・読む』 山川出版社（『古代地域社会の考古学』2008 所収）

坂井秀弥　1996「律令以後の古代集落」『歴史学研究』第 681 号　歴史学研究会
（『古代地域社会の考古学』2008 所収）

坂井秀弥　1999「第４章第１節　総論」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会

桜岡正信　2003「月夜野型羽釜の生産と流通－地域限定流通の背景－」『研究紀要』21 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

笹生衛　2006「古代東国集落と仏教信仰－千葉県内の事例を中心に－」『在地社会と仏教』 奈良文化財研究所

笹澤正史　1998「Ⅷ．付編　高田平野における平安時代前半期の食膳具について」『保坂遺跡発掘調査報告書』 上越市教育委員会

笹澤正史　2001「第Ⅵ章　まとめ」『新発田市埋蔵文化財調査報告書第 23 －２集　坂ノ沢Ｃ遺跡Ⅱ』 新発田市教育委員会

笹澤正史　2011「第Ⅶ章２　古代の土器の時期と特徴」『新発田市埋蔵文化財調査報告第 42 集　七社遺跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会

上越市　2003『上越市史　資料編２　考古』 上越市史編さん委員会

菅原祥夫　2012「石のおもりと土のおもり」『研究紀要 2012』 福島県文化財センター白河館

鈴木俊成・春日真実ほか　1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 60 集　一之口遺跡東地区』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

鈴木俊成・三ツ井朋子ほか　2010『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 206 集　西部遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

須田勉　1985「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢Ⅱ』 早稲田大学出版部

高橋照彦　1995「Ⅲ土器・陶磁器　３．緑釉陶器」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会

田嶋明人　1983「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡－加賀・能登の掘立柱建物群を中心とした覚え書－」『北陸の考古学』石川考古学研究会

田中一穂　2005「見附市上田遺跡出土の文字資料について」『見附市埋蔵文化財調査報告　第 20　上田遺跡』 見附市教育委員会

田中靖　1995「第Ⅴ章１　平安時代の土器食膳具について」『和島村埋蔵文化財調査報告書第４集　門新遺跡』和島村教育委員会

田中靖　1996「第Ⅳ章１　平安時代の土器について」『和島村埋蔵文化財調査報告書第５集　門新遺跡外割田地区』和島村教育委員会

田中靖　2003「第Ⅵ章２　出土土器について」『和島村埋蔵文化財調査報告書第 14 集　下ノ西遺跡Ⅳ』和島村教育委員会

田中靖　2005「第Ⅴ章２　出土土器について」『和島村埋蔵文化財調査報告書第 16 集　八幡林遺跡Ⅳ』和島村教育委員会

田中靖　2007「第Ⅵ章２　出土土器について」『土用木西遺跡』 長岡市教育委員会

鶴巻康志ほか　2003『新発田市埋蔵文化財調査報告　第 27　桑ノ口遺跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会

出越茂和　1991「第５章１　千木ヤシキダ遺跡に見る古代地鎮祭祀」『金沢市文化財紀要 86　金沢市千木ヤシキダ遺跡Ⅱ』 金沢市教育委員会

出越茂和　1999 「古代北陸における官寺・山寺・里寺」『北陸の考古学Ⅲ』 石川考古学研究会

戸田芳実　1967 『日本領主制成立史の研究』 岩波書店

冨永樹之　2007 「富豪の寺」『神奈川考古』第 43 号　神奈川考古同人会

鳥居美栄　2015 『五百刈遺跡』 長岡市教育委員会

鳥居美栄　2015 『盲田遺跡』 長岡市教育委員会

長岡市　1992 『長岡市史』資料編１　考古

長岡市教育委員会　2014 『平成 25 年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』

中沢悟　1986 「第６章第２節（３）月夜野型羽釜の様相と月夜野古窯跡群」『大原遺跡・村主遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

仲山英樹　1995 「古代東国における墳墓の展開とその問題点」『東日本における奈良・平安時代の墓制』 東日本埋蔵文化財研究会

奈良国立文化財研究所　1985 『木器集成図録　近畿古代編』

奈良国立文化財研究所　1993 『木器集成図録　近畿原始編』

奈良文化財研究所編　2012 『四面廂建物を考える』 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

奈良文化財研究所編　2013 『新訂新版　日本古代木簡字典』 八木書店

新潟墨書土器検討会編　2013 『平成 24 年度　新確認の新潟県内出土の墨書土器』 新潟墨書土器検討会

野村忠司ほか　2009 『子安遺跡』 上越市教育委員会

原明芳　1998 「埋められた大甕」『信濃』第 50 巻 11 号　信濃史学会

原明芳　1998 「信濃の古代墳墓」『長野県考古学会誌』第 86 号　長野県考古学会

原明芳　2001 「墓に埋められた品々」『中世土器研究論集』 中世土器研究会

原明芳　2003 「灰釉陶器考」『長野県考古学会誌』103・104 号　長野県考古学会

原明芳　2009 「平安時代に出現する木棺墓からみえる信濃の在地社会」『信濃』第 61 巻 4 号　信濃史学会

東日本埋文研究会　1995 『東日本における奈良・平安時代の墓制』

広瀬和雄　1986 「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』第６巻　岩波書店

広瀬和雄　1991 「古代の農村」『日本村落史講座２　景観１』 雄山閣

細井佳浩　2014 「新潟県における古代の「畝状小溝」（畠）について　－越後国域の検出事例から－」『三面川流域の考古学』第 12 号　奥三面を考える会

前田清彦　1996 「第４章第４節　土器祭祀の様相」『松任市三浦・幸明遺跡』 松任市教育委員会

前田清彦　1997 「土器祭祀類型試論」『北陸古代土器研究』第７号　北陸古代土器研究会

宮瀧交二　1992 「日本古代の村落と開発」『歴史学研究』638 号　歴史学研究会

宮瀧交二　2000 「日本古代の民衆と「村堂」」『村のなかの古代史』 岩田書院

望月精司　1997 「北陸における古代土器生産体制の変質と展開」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会

望月精司　2003 「古代権状錘に関する一考察－北陸出土権衡資料の検討を中心に－『北陸古代土器研究』第 10 号

望月精司　2005 「第２章　各地域の土師器生産と土師器焼成遺構　第４節　北陸」『古代の土師器生産と焼成遺構』 窯跡研究会

望月精司　2005 「第１章　土師器焼成遺構の研究の現状と展望　第２節　土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』 窯跡研究会

百瀬正恒　2008 「「新潟平野における中世土器の成立」報告の概要」『北陸中世のみち』 北陸中世考古学研究会

山下峰司　1995 「Ⅲ土器・陶磁器　灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会

山中敏史　2007 「地方豪族居宅の建物構造と空間的構成」『古代豪族居宅の構造と機能』 奈良文化財研究所

吉村武彦ほか編　2014 「新潟県墨書土器データベース」『私立大学戦略的研究基盤形成支援事業　日本列島の文明化を究明する古代学の総合化研究』（事業番号 S0901026）
http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/obj_bokusho.html　明治大学日本古代学研究所

四柳嘉章　2006 『ものと人間の文化史 131 － Ⅰ　漆Ⅰ』 法政大学出版局

渡邊美穂子ほか　2014 『新発田市埋蔵文化財調査報告　第 50　丸山Ａ遺跡　発掘調査報告書』 新発田市教育委員会

渡邊ますみ・奈良貴史　2012 『四十石遺跡　第２次調査』 新潟市教育委員会

遺物観察表

・複数地点から出土した遺物の場合、最も出土量の多かった遺構ないしは遺構外出土として扱う。
・遺構覆土を一括して取り上げた場合、出土層位は「覆土」とし、観察表では空欄とした。
　算用数字による「～層」表記は遺構覆土内の層序である。
・遺存状況が良好でない場合、法量には括弧を付けて復元径を記載した。
・残存率は口縁あるいは底部の円周を36等分した際の分子を表す。
・含まれる鉱物は以下の通りである。　石：石英　長：長石　チ：チャート　雲：雲母　角：角閃石　海：海綿骨針
　鉄：酸化鉄粒　白：白色粒子　黒：黒色溶出物　その他、砂粒や焼土ブロックなど観察できたものを記載した。
・胎土の色調観察は、『新版　標準土色帖　2006年度版』［農林水産省農林水産技術会議事務局監修］を用いた。
・調整の「R」はロクロ回転を利用していることを表す。また、「ケズリ」はヘラ状工具によるケズリ痕跡を表す。
・調整される部位は以下の通りである。　口：口縁部　体：体部　体上：体部上半　体下：体部下半　底：底部

土器観察表（１）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
1	SB166-P9 －	15K9 15K8	2層 Ⅶ	土師器	小甕	B			6.0		36	石・長・角・海	やや軟	橙～浅黄橙	Rナデ・底:ナデか	Rナデ	右	
2	SB166-P8	15K8		土師器	長甕	Ba1	(23.0)			2		長・チ	並	橙	Rナデ	Rナデ	左	
3	SB316-P1	12F14	1層	土師器	無台椀	D3	(14.1)			3		石・長・チ	やや堅	淡黄	Rナデ	Rナデ	－	
4	SB317-P25 －	11K20 11K20	1・2層 Ⅶ	土師器	無台椀	C3			6.9		15	石・長・チ・角・鉄	堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
5	SB318-P8	13K5		須恵器	無台坏				7.0		5	石・白	やや軟	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「廾」ヵ
6	SB318-P5	13K3		須恵器	無台坏				6.6		10	砂・黒・白	軟	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
7	SB318-P6	13K4		土師器	小甕	B			8.4		16	石・長・チ・海・鉄	やや堅	橙～にぶい橙	Rナデ・底付近:ケズリ・底:R糸切	Rナデ	左	
8	SB318-P5	13K3		土師器	長甕	Ba1	(18.6)			2		石・長・チ・角・海	やや軟	灰白	Rナデ	Rナデ	不明	
9	SB348-P6 － －	9E16 9D19・22 9E6	Ⅶ Ⅶ	須恵器	長頸壺				13.0		19	砂・白	並	灰～暗灰	体上:Rナデ・体下:ケズリ	Rナデ	右	高台に網代痕
10	SB348-P10	10E4		土師器	無台椀	B3			7.2		16	石・チ・砂	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
11	SB348-P6	9E16		土師器	無台椀	B3	(13.4)			2		石・長・チ・海	並	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
12	SB348-P4A	10E1	1層	土師器	無台椀	B3	13.2			7		石・長・チ	軟	灰白～赤褐	Rナデ	Rナデ	右	
13	SB348-P4B	10E6		土師器	無台椀	B3	17.1			5		石・長・チ・海	並	橙	Rナデ	Rナデ	－	
14	SB348-P3	10E2	1層	土師器	無台椀	D3	10.7	2.9	4.6	20	36	石・長・海	やや堅	浅黄橙～橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
15	SB348-P1 SB348-P4B	10E9 10E6	1層	黒色土器	無台椀	B	16.0			6		石・長・海	やや堅	浅黄	Rナデ	Rナデ・ミガキ	－	
16	SB571-P1	12I21	1層	須恵器	無台坏		11.9			5		チ・白	並	灰白～灰	Rナデ	Rナデ	－	
17	SB571-P6 SB571-P9	12H10 12I17	1層 1層	須恵器	無台坏		13.0			7		黒・白	並	灰	Rナデ	Rナデ	右	
18	SB571-P1	12I21		土師器	無台椀	B1			5.8		7	石・長・チ・鉄	並	浅黄橙～黄橙	Rナデ・底:R糸切	ミガキ	右	
19	SB571-P4	12H19	1層	黒色土器	無台椀	B			6.4		9	石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙	ナデ・底:ナデか	ミガキ	－	
20	SB574-P2	13H2	1層	須恵器	無台坏				7.2		7	砂・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	漆書「×」ヵ
21	SB574-P8	12H19		須恵器	無台坏				7.0		18	黒・白	並	灰～灰白	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
22	SB574-P4	12H16	1層	須恵器	無台坏	A	12.2	3.3	7.8	4	14	石・白	並	灰白	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	在地産
23	SB574-P2	13H2	1層	土師器	無台椀	B3	13.3			5		石・長・チ・海・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
24	SB535-P9 －	15L18 15L13	1層 Ⅶ	土師器	小甕	Ba1	13.4			4		石・長・砂	やや軟	灰白～浅黄橙	Rナデ	Rナデ	不明	
25	SB608-P20	11G4	1層	土師器	無台椀	B3	12.9			6		石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
26	SB609-P2	12H25		土師器	無台椀	C3			6.4		10	石・長・チ・海	やや堅	にぶい橙～浅黄橙	Rナデ・底:静止糸切	Rナデ	－	
27	SB609-P3	12H19・24		土師器	長甕	Ba1	(14.5)			2		石・長・雲・角	やや軟	橙	Rナデ	Rナデ	右	
28	SI5 －	13I21 14I1	Ⅶ	須恵器	有台坏		13.2	5.5	7.0	6	31	長・黒・白	並	暗青灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
29	SI5	13I21	3層	須恵器	無台坏				7.4		7	砂・黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
30	SI5 －	13I22 13I8	Ⅶ	黒色土器	無台椀	D	12.8	4.3	5.5	10	24	石・長・チ・海	やや堅	浅黄橙	上:Rナデ・底付近:ケズリ・底:ケズリ	ミガキ	右	
31	SI5	13I21		土師器	小甕	Bb	11.5			7		石・長・鉄	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ	Rナデ	左	
32	SI5	13I21		土師器	小甕	B			5.8		19	石・長・チ・海・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
33	SI10	14L6		須恵器	有台坏				6.8		36	石・長・チ	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
34	SI10	14L1		須恵器	無台坏	A	13.4	2.8	8.4	2	8	白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
35	SI10 SK114 －	11L6 14L11 14L7	1層 1層 Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.5	3.0	7.2	13	28	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	

土器観察表（２）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
36	SI10	14L6		須恵器	無台坏	A	12.6	3.1	8.1	18	20	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
37	SI10 SI10 SI10 －	14L1 14L1 14L6 14L1・4	1層 7層 Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.1	3.2	7.2	7	36	石・長・黒	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	墨痕あり
38	SI10	14J16		須恵器	無台坏	A	11.8	2.5	7.0	17	25	白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	左	
39	SI10	14I1		土師器	無台椀	C3	12.1	3.4	6.8	13	22	石・長・チ・海・鉄	やや軟	浅黄橙～橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
40	SI10 SI10 －	14L6 14L6 14L2	1層 Ⅶ	土師器	小甕	B			8.1		16	石・チ・鉄・白	並	外:浅黄橙～黒褐 内:浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	－	
41	SI46	13J16	1層	須恵器	無台坏		12.3			5		黒・白	並	灰	Rナデ	Rナデ	右	
42	SI46	13J17	1層	土師器	無台椀	B1			4.6		20	石・長・チ	やや軟	橙	Rナデ・底:ケズリ	Rナデ	左	
43	SI49	13K18	1層	土師器	小甕	Ba1	15.2			6		石・長・チ・角・海	やや堅	浅黄橙～橙	Rナデ	Rナデ	右	
44	SI54	14K12		須恵器	無台坏か		－	－	－	－	－	長	並	灰	Rナデ	Rナデ	－	墨書「キ」状
45	SI54 SK110	14K13 14K14	カマド 1層	須恵器	無台坏	A	13.0	3.3	7.8	4	22	石・長・海・砂・鉄	並	橙	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
46	SI54 －	14K8 14K8	2層 Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.8	3.1	7.0	12	19	砂・黒・白	堅	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
47	SI54 SI54 SK90 P98 －	14K13 14K13 14L10 14K25 14K8・17・25	1層 1層 1層 Ⅶ	土師器	無台椀	B1	16.0	6.0	7.3	20	36	石・長・海・鉄	軟	橙	Rナデ・体下:ケズリ 底:R糸切	Rナデ	右	
48	SI54	14K7	1層	土師器	鍋	A	(36.6)			1		石・長・チ・角・海	堅	橙	Rナデ	Rナデ	不明	
49	SI70	15K10	貼床	土師器	無台椀	B4	15.8			4		石・長・チ・白	やや堅	橙	Rナデ	Rナデ	右	
50	SI70	15K10	1層	土師器	小甕	Ba1	12.1			20		石・長・海	並	橙	Rナデ	Rナデ	左	
51	SI70 SI70	15K5・10 15K10	1層 貼床	土師器	長甕	Ba1	23.4			6		石・長・チ・白	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	－	
52	SI130	14M20		須恵器	無台坏				7.0		8	石・長・海	並	灰白～灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	在地産
53	SI130	14M19		土師器	小皿		8.8	2.5	3.4	36	36	長・雲・海・鉄	並	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
54	SI211	13I18	1層	須恵器	無台坏				7.4		9	長・黒	並	灰	Rナデ・底: Rヘラ切	Rナデ	右	
55	SI211	13I18	1層	黒色土器	無台椀	D	(15.2)			3		石・長	やや堅	灰黄	ミガキ	ミガキ	－	
56	SI212 (SD254) －	13I8 13I8・9	1層 Ⅶ	土師器	小甕	B			8.0		23	石・長・チ・海・鉄	やや堅	にぶい黄橙～にぶい褐	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
57	SI212 (SD254) －	13I8 13I8	1層 Ⅶ	土師器	長甕	Bb1	20.8			8		石・長・チ・角・鉄	軟	浅黄橙	Rナデ→カキ目	Rナデ→カキ目	－	
58	SI268	13K20	1層	土師器	無台椀	B1			5.0		9	石・長・海・鉄	並	橙	Rナデ・底:ケズリ	Rナデ・ミガキ	右	
59	SI268	13K20 13K20	1層	土師器	長甕	Ba1	(21.9)			1		石・チ・雲	やや軟	灰白	Rナデ・体下半:平行タタキ	Rナデ・体下:格子目タタキ	－	
60	SI268	13K20	1層	土師器	鍋	B	(33.0)			2		石・長・雲・角	やや軟	外:浅黄橙・黒褐/内:浅黄橙	Rナデ	Rナデ	－	
61	SI429	11I1	1層	黒色土器	有台椀				6.4		16	石・長・チ・角・海	軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ・ミガキ	－	
62	P2	10F22	1層	土師器	無台椀	A2	13.0	5.5	5.8	17	36	石・長・チ・海	やや軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
63	P2	10F22	1層	土師器	無台椀	B4	11.6	3.3	5.0	7	1	石	並	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
64	P2	10F22	1層	土師器	無台椀	D2	12.6	3.9	5.4	30	36	石・長・チ・鉄・白	やや軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
65	SX32	9E19		土師器	無台椀	A2	14.2	5.3	5.6	14	36	石・長・白	やや軟	浅黄橙	Rナデ・強いナデ・底:Rヘラ切か	Rナデ	右	
66	SX32 －	9E19 9E19	Ⅶ	土師器	無台椀	B3	14.9	4.9	6.8	10	25	石・長・海・鉄	やや軟	黄橙～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
67	SX32	9E19		土師器	無台椀	B3	13.8	4.6	6.3	26	36	石・長・チ・海・鉄	やや軟	浅黄橙～黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	内面全体漆塗り
68	SX32	9E19		土師器	無台椀	B3			8.0		9	石・長・チ・海	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
69	SX32	9E19		土師器	無台椀	D3	12.8			7		石・長・チ・鉄	やや堅	黄橙	Rナデ	Rナデ	右	

土器観察表（３）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
70	SX32 －	9E19 9E19	Ⅶ	土師器	無台椀	D3	14.4	3.5	6.9	9	30	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
71	SX32	9E19		土師器	無台椀	D3	13.8	4.0	6.2	17	36	石・長・チ・海・鉄・白	やや堅	浅黄橙～黄橙	Rナデ・体下半:強いナデ 底:R糸切	Rナデ	右	
72	SX32	9E19		土師器	無台椀	D4	13.5	4.3	7.0	13	36	石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
73	SX32	9E19		土師器	無台椀	D4	13.6	4.0	6.0	13	36	石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙～黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
74	SX32	9E8		土師器	無台椀	C3	20.9	7.9	7.9	5	16	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切→外周: ナデ消し	Rナデ	右	
75	SX32	9E8		土師器	有台椀				6.4		7	石・長・雲	軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
76	SX32 P43 －	9E19 9E19 10E3	1層 1層 Ⅶ	黒色土器	有台椀		16.0			24		石・長・角・海	やや軟	浅黄橙	ケズリ→ミガキ・底:R糸 切	ケズリ→ミガキ	右	
77	P43	9E19	1層	土師器	無台椀	B3			7.0		16	石・長・砂・鉄	堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	－	
78	P43	9E19	1層	土師器	無台椀	B3			6.8		36	石・長・チ	やや堅	浅黄橙～灰褐	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
79	P43	9E19	1層	土師器	無台椀	B3	15.8	4.1	7.0	4	26	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
80	P43	9E19	1層	土師器	無台椀	D2	14.0			9		石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
81	P43	9E19	1層	土師器	有台鉢				14.8		12	石・長・チ	やや軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	左	
82	SK280	11K25		土師器	無台椀	D3	13.0	3.9	6.5	12	16	石・長・チ・角	やや堅	浅黄橙～にぶい橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
83	SK280	11K25		土師器	無台椀	D3	15.4	4.5	7.0	17	7	石・長・チ・海・鉄	やや堅	黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
84	SK280	11K25		土師器	無台椀	D3	14.7	4.1	6.8	6	18	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
85	SK280	11K25		土師器	無台椀	D3	16.2	4.5	7.2	14	36	石・長・チ	やや堅	灰白～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
86	SK280	11K25 11K25 11L21	1層	土師器	無台椀	D3	14.8	4.5	7.0	34	36	石・長・角・鉄・白	やや堅	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
87	SK280	11K25		土師器	無台椀	D3	15.7	4.4	8.0	29	36	石・砂	並	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	－	内面漆付着
88	P306	11J14	1層	土師器	無台椀	A2	13.2	5.0	5.7	36	36	石・長・チ	やや軟	灰白～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
89	P306	11J15	1層	土師器	無台椀	D3	14.4	4.2	6.7	36	36	石・長・海・砂・白	やや軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
90	P306	11J14・15 11J15	上面 1層	土師器	無台椀	D3	13.7	4.3	6.0	24	30	石・長・砂	並	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
91	P306	11J14	1層	土師器	無台椀	D3	12.8	4.0	5.8	26	36	石・長・チ・角・礫	堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
92	SK492	11G15	1層	土師器	無台椀	B3	13.1	4.0	6.0	34	36	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
93	SK492	11G15	1層	土師器	無台椀	B3	14.8	5.1	6.0	2	12	石・長・チ	堅	浅黄橙～にぶい黄褐	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
94	SK492 －	11G15 11G15	1層 Ⅶ	土師器	無台椀	C2	13.7	4.1	6.8	12	21	石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙～橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
95	SK492	11G15	1層	土師器	無台椀	C3	14.2	3.9	6.2	13	36	石・長・チ・角	並	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
96	SK492	11G15	1層	土師器	無台椀	D3	13.4	3.3	6.2	10	24	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
97	SK493	11G10	1層	土師器	無台椀	B2	12.4	4.2	5.0	27	36	石・長・チ・雲・角・海・焼土	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
98	SK493 －	11G10 11G19	1層 Ⅶ	土師器	無台椀	B2	12.6	4.0	6.4	1	36	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
99	SK493	11G10	1層	黒色土器	無台椀	B	15.3	5.1	7.2	12	24	石・長・チ・角	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:ケズリ	Rナデ→ミガキ	右	
100	SK573	12H15	1層	土師器	無台椀	B3	13.1			27		石・長・雲・海	堅	浅黄橙～橙	Rナデ	Rナデ	右	
101	SK573 －	12H15 12H15	1層 撹乱	土師器	無台椀	B4	11.9	3.8	6.0	30	36	石・長・チ・海	やや堅	橙～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
102	SK573 －	12H10・15 12H10	Ⅶ	土師器	無台椀	C4	12.0	5.0	5.6	29	34	石・長・チ・鉄・白	やや軟	浅黄橙～橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
103	SK573	12H15	1層	土師器	無台椀	C4	13.2	5.3	6.6	23	18	石・長・海・鉄	堅	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
104	SK573	12H15	1層	土師器	無台椀	C4	11.8	4.3	6.1	12	10	石・長・海	やや堅	灰白～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
105	SK573	12H15	1層	土師器	小甕	Bd	12.3			12		石・長・チ・海	やや軟	浅黄	Rナデ	Rナデ	右	
106	SK594	12I16	1層	須恵器	無台坏か		12.2			5		砂・白	やや軟	灰	Rナデ	Rナデ	右	SX266出土
107	SK594	12I16	1層	土師器	無台椀	B1	15.6	5.1	6.7	16	21	石・長・雲	並	浅黄橙	Rナデ・底:ケズリ	Rナデ→ミガキ	－	SX266出土
108	SK594 －	12I16 12I16	1層 Ⅶ	土師器	無台椀	B2	12.9			15		石・長・海・鉄	並	黄橙・浅黄橙	Rナデ	Rナデ	－	SX266出土
109	SK594	12I16	1層	土師器	無台椀	B4	12.1	4.3	4.8	36	36	石・長・チ・角・海	堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	SX266出土

土器観察表（４）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
110	SK594 SK594 －	12I16 12I16 12I16	1層 Ⅶ	土師器	無台椀	B4	11.8	4.6	5.0	36	36	石・長・チ・角・海	堅	黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	SX266出土
111	SK594	12I16	1層	土師器	無台椀	C3	12.0	4.5	5.5	20	36	石・長・チ	やや堅	にぶい黄橙～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	SX266出土
112	SK594 －	12I16 12I16	1層 Ⅶ	土師器	無台椀	D3	12.1	4.2	4.8	27	36	石・長・チ・鉄	堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	墨書「中」 SX266出土
113	SK594 －	12I16 12I16	1層 Ⅶ	土師器	無台椀	D3	12.9	3.5	5.1	17	36	石・長・チ・海	やや堅	浅黄橙～黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	SX266出土
114	SK594	12I16	1層	土師器	無台椀	D3	14.1			8		石・長・チ・角・海	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	－	SX266出土
115	SK594	12I16	1層	土師器	有台椀				6.8		7	石・長・チ・鉄	堅	浅黄橙～黄橙	Rナデ	Rナデ	不明	SX266出土
116	SK594	12I16	1層	黒色土器	無台椀	D			5.5		6	石・長・チ	堅	淡黄～黒褐	Rナデ→ミガキ 体下:ケズリ・底:ケズリ	Rナデ→ミガキ	右	SX266出土
117	SK594 －	12I16 12I16・23	1層 Ⅶ	土師器	広口壺		－	－	－	－	－	石・長・チ・角	堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	SX266出土
118	SK594 －	12I16 11H3	1層 Ⅶ	土師器	広口壺				10.2		17	石・長・チ	やや堅	外:淡黄/内:黒褐	Rナデ・底:ナデ	Rナデ	右	SX266出土
119	SK146 － －	14L8 13L16 15L3	木棺1・3層 Ⅶ Ⅶ	須恵器	有台坏		13.7	6.7	9.5	16	26	白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切→外周:ナデ	Rナデ	左	
120	SK146	14L8	木棺3層	須恵器	無台坏		13.1			5		長・黒	堅	灰	Rナデ	Rナデ	－	灯明皿か
121	SK146 SK146 － － － －	14L8 14L9 14L9 14M9 15M11・13 13L20	木棺3層 1・木棺 Ⅶ Ⅶ Ⅶ 撹乱	須恵器	長頸壺		10.3			4		黒・白	並	灰	Rナデ	Rナデ	右	頸部漆継ぎ痕
122	SK146	14L9	裏込上層 木棺	土師器	長甕	Bb1	18.0			9		石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・カキ目	Rナデ	左	
123	SK146	14L9	木棺	土師器	小甕	B			8.0		36	石・長・チ	堅	浅黄橙～にぶい橙	体：ケズリか・底:R糸切	Rナデ	右	
124	SK146	14L8	木棺・3層	土師器	鍋	Ba	36.6			6		石・長・チ・角	やや軟	浅黄橙	Rナデ・カキ目 平行タタキ	Rナデ	－	
125	SK205	13K25	7層	土師器	無台椀	B3	11.9	4.3	4.9	35	36	長・海・砂	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
126	SK260	12M16	9層	土師器	無台椀	A3	12.8	4.6	6.0	8	22	石・長・海・白	軟	浅黄橙～灰白	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
127	SK260	12M16	6層	土師器	無台椀	B3			5.9		36	石・長・チ・鉄	堅	橙～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
128	SK260	12M16	9層	土師器	無台椀	B3			6.2		36	石・長・チ・鉄	堅	浅黄橙～橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
129	SK260	12L20 12M16	上・7層 5層	土師器	無台椀	C3	13.8	3.4	6.2	9	36	石・長・チ	堅	橙～にぶい橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
130	SK260	12L20 12M16	7・9層	土師器	無台椀	D3	14.0	3.9	6.0	4	29	石・長・チ・鉄	堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
131	SK260	12L20 12M16	上層 1・5・9層	土師器	無台椀	D3	14.0	4.4	6.8	10	15	石・長・チ	堅	にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
132	SK260	12M16	9層	黒色土器	無台椀	-			6.5		18	石・長・チ・鉄	堅	にぶい黄橙～黒褐	Rナデ・底:R糸切	Rナデ・放射状ミガキ	不明	
133	SK482	10G14	1層	土師器	無台椀	C2	12.4	4.1	5.4	36	36	石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
134	SK482	10G14	1層	黒色土器	無台椀	A	15.8	6.1	6.0	36	36	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ・ミガキ 体下半:ケズリ→ミガキ 底:R糸切→外周:ケズリ	Rナデ・ミガキ	右	
135	SK6 －	14K7 14K7	 Ⅶ	須恵器	無台坏	A	11.8	2.4	7.8	13	21	砂・白	並	灰～明褐灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
136	SK6 SK6A	14K12 14K12	1層 1層	土師器	無台椀	B1	13.0	4.3	6.0	11	34	石・長・鉄	並	橙	Rナデ→ミガキ 底:Rヘラ切→縁辺:ナデ	Rナデ→ミガキ	左	
137	SK6	14K7		土師器	無台椀	C1			7.6		18	長・鉄	並	黄橙	Rナデ・底:Rケズリ	Rナデ	－	
138	SK6B	14K7	1層	須恵器	無台坏	A	12.0	2.7	7.2	6	18	長・雲・黒	並	灰白	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「×」
139	SK6B －	14K7 14K7	1層 Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.7	3.0	7.5	25	36	海・砂・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	

土器観察表（５）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
140	SK6B	14K7	1層	土師器	無台椀	B2	12.7	3.5	6.2	7	36	石・長・チ・海・鉄	並	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
141	SK6B	14K7	1層	土師器	長甕	Ba1	19.6			4		石・長・チ・角	やや堅	浅黄橙～橙	Rナデ	Rナデ・カキ目	左	
142	SK42	10D10	1層	土師器	無台椀	B3	12.9			4		石・長	やや堅	浅黄橙～褐灰	Rナデ	Rナデ	右	灯明皿
143	SK42	10D10	1層	土師器	無台椀	B3	14.2	4.7	6.2	4	3	石・長・チ・海・鉄	やや堅	浅黄橙～黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
144	SK42	10D10	1層	土師器	無台椀	B3			6.0		13	石・長	やや堅	浅黄橙～黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	灯明皿か
145	SK42	10D10	1層	土師器	無台椀	B3			7.6		16	石・長・チ・角	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
146	SK42	10D10	1層	土師器	無台椀	D3	12.4			7		石・長・角・海・鉄	並	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
147	SK42	10D10	1層	土師器	鉢か				13.0		4	石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・ミガキか 底付近、底:ケズリ	Rナデ	右	
148	SK42 SK42 SX1 － － － － －	10D10 10D10 12E20 10D23 9D13 10D9・14 11J25 10D6	1・2層 下層 Ⅱ Ⅶ Ⅶ Ⅶ 撹乱	須恵器	長甕		45.0	(76.8)	丸底	16	36	長・黒	並	灰	口:ナデ 体:平行タタキ	口:ナデ 体上:同心円当て具 体下:ハケ目	－	
149	SK48	14K7		須恵器	無台坏	A	11.6	2.6	7.4	5	17	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
150	SK6A SK48 －	14K7 14K7 14K7・8・12	1層 Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.4	2.8	7.4	17	34	黒・白	やや堅	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
151	SK48 －	14K7 14K7・8	 Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.6	3.1	7.2	30	36	砂・黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
152	SK48	14K7		土師器	小甕	Ba	13.0			5		石・長・チ・海	やや堅	にぶい黄橙～にぶい黄褐	Rナデ	Rナデ	不明	
153	SK151	14K23	1層	須恵器	無台坏	A	11.2	2.7	6.4	5	18	石・チ・白	並	灰～黄灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「□」
154	SK210	13I20	1層	須恵器	横瓶		－	－	－	－	－	石・長・チ	堅	灰	平行タタキ	当て具	－	
155	SK210	13I20	1層	土師器	鍋	Bb	39.6			3		石・長・チ・角	堅	浅黄橙～淡黄	Rナデ・体下:平行タタキ	Rナデ	左	
156	SK216	13I16	2層	土師器	無台椀	B3			5.8		14	石・長・チ・海	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
157	SK216	13I16	2層	黒色土器	無台椀	D	14.8			3		石・長・チ	並	浅黄橙	ミガキ	ミガキ	－	
158	SK216	13I16	1・2層	土師器	鍋	Ba	31.7			8		石・長・チ・海	やや軟	橙	Rナデ・カキ目 ・ケズリ・平行タタキ	Rナデ・カキ目・ハケ目	－	内外漆、繊維付着
159	SK259 －	14L2 14L3	1層 Ⅶ	須恵器	無台坏	B	11.8	2.7	7.1	29	36	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
160	SK361	9D20	1層	土師器	無台椀	B4	14.5	5.2	7.2	3	36	石・長・チ・海・鉄	並	浅黄橙～橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
161	SK361	9D20	2層	土師器	無台椀	D3	13.8	3.6	6.1	4	20	石・長・チ・海	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
162	SK361 －	9D20 9D24	2層 Ⅶ	土師器	無台椀	D3	13.4			13		石・長・チ	やや堅	橙	Rナデ	Rナデ	右	内面全体漆付着
163	SK361	9D20	1層	土師器	無台椀	D3	15.8			4		石・長・チ・鉄	軟	にぶい黄橙	Rナデ		－	外面一部漆付着 内面全面漆付着
164	SK342	10E12	1層	土師器	無台椀	B3	15.5			4		石・長・チ・海	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	灯明皿
165	SK342	10E12	2層	土師器	無台椀	B3	13.3			8		石・長・白	並	灰白～浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
166	SK342 SK342内 小ピット	10E12 10E12	1・2・5層 2層	土師器	無台椀	B3	13.4	4.1	6.2	24	36	石・長・チ	やや軟	淡黄～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
167	SK342内 小ピット	10E12	6層	土師器	無台椀	B3	12.8	4.5	4.6	11	36	石・長・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
168	SK342 SK342 SK342内 小ピット	10E12 10E12 10E12	 1・2層 1・2層	土師器	無台椀	D3	12.8	4.3	4.6	16	36	石・長	やや軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
169	SK342 SK342 SK342内 小ピット	10E12 10E12 10E12	 1・2層 1層	土師器	無台椀	D3	15.4	4.6	5.8	27	36	石・長・チ・雲・海	やや軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切→外周 ナデ	Rナデ	右	

土器観察表（６）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
170	SK342	10E12	2層	土師器	無台椀	D3	14.2			21		石・長・チ・雲・鉄	やや軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
171	SK342内 小ピット	10E12	2・5・6層	土師器	有台椀		19.0			14		石・長・雲・角	堅	黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
172	SK342	10E12	1層	土師器	小甕	B			7.4		6	石・長・砂	並	外:橙～黒褐/内:浅黄橙	Rナデ・底:静止糸切り	Rナデ	－	
173	SK342 SK342 SK342内 小ピット	10E12 10E12 10E12	1・2層 5層	土師器	小甕	B	－	－	－	－	－	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ・体下:ケズリ	Rナデ	右	
174	SD347	10E6	1層	土師器	無台椀	B3			7.0		12	石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
175	SD347	10E7	2層	土師器	無台椀	D2	14.0			5		石・長	やや軟	灰白～淡黄	Rナデ	Rナデ	右	
176	SD347	10E17	1層	土師器	無台椀	D2	13.9			5		石・長・チ	軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	－	
177	SD347	10E11	1層	黒色土器	有台椀				6.8		8	石・長・角・海	やや軟	にぶい黄橙	高台:ケズリ	ミガキ	－	
178	SD347 －	10E8 10E12	1層 Ⅶ	緑釉陶器	椀				6.5		7	長	やや堅	土:暗青灰 釉:灰オリーブ	底:ナデ、緑釉		－	
179	SD347	10E8	1層	土師器	長甕	Ba1	19.0			6		石・長・チ・鉄	堅	褐	Rナデ	Rナデ	左	
180	SK365	9E19	1層	土師器	有台鉢		30.6	11.3	13.9	5	36	石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:Rケズリ	Rナデ	右	
181	SK365	9E19	1層	土師器	小甕	B			8.2		5	石・長・チ	やや堅	灰褐～にぶい褐	Rナデ・ケズリ・底:R糸切	Rナデ	左	
182	SK378	11K11	3層	土師器	長甕	Bb	19.2			3		石・長・チ・雲	やや堅	灰白	Rナデ・カキ目	Rナデ・カキ目	－	
183	SK396	10E6		土師器	無台椀	B2	14.9			10		石・長・チ	やや堅	浅黄橙～黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
184	SK396	10E6		土師器	無台椀	B3	15.3	5.4	5.2	21	36	石・長・チ	堅	黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
185	SE677	11D17	3層	土師器	無台椀	B2	11.7	4.1	5.2	27	36	石・長・チ・雲	堅	灰白～黄褐	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
186	SE677	11D17	1層	土師器	無台椀	B4	12.4	4.5	5.8	9	7	石・長・雲・海	やや軟	にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
187	SE677	11D17	3層	土師器	無台椀	D1	15.9	6.9	6.5	36	36	長・チ	やや堅	にぶい黄褐	Rナデ・底:ヘラナデ	Rナデ	左	
188	SD3 －	14M22 14M16	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	11.6	2.9	7.2	12	15	砂・黒・白	並	暗灰～褐灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	右	
189	SD7	13J19	3層	須恵器	蓋		－	－		－		長・黒	堅	灰	Rナデ・上:ケズリか	Rナデ	左	内面墨痕、転用硯
190	SD7 SD7 － －	12K21 13J5 14K19 15K2	1・2・3層 1層 Ⅶ Ⅶ	須恵器	蓋		14.0			16		長・黒	堅	灰白	Rナデ	Rナデ	－	内面墨痕、転用硯
191	SD7 －	13J5 12K17	1層 Ⅶ	須恵器	有台坏				7.0		24	石・黒・白	並	灰			左	
192	SD7	13J5	1層	須恵器	有台坏		11.8	4.5	6.2	2	7	石・白	並	灰	Rナデ 高台付近:強いナデ	Rナデ	－	
193	SD7	13J15	1層	須恵器	無台坏		11.5			6		長・黒・白	やや軟	灰～灰黄	Rナデ	Rナデ	右	墨書「十」ヵ
194	SD7	13K1	2層	須恵器	無台坏	A	12.3			6		石・長	堅	にぶい褐赤	Rナデ	Rナデ	－	
195	SD7	13J10	3層	須恵器	無台坏	B	14.0			5		長・黒	堅	灰白	Rナデ	Rナデ	－	
196	SD7	13J15	1層	須恵器	無台坏		(12.8)			2		長	堅	灰	Rナデ	Rナデ	－	墨書「三」
197	SD7	13J15	2層	須恵器	無台坏				(9.4)		1	石・白	並	浅黄橙～にぶい黄橙	底:Rヘラ切		左	墨書「×」ヵ
198	SD7	14I12	Ⅱ相当	須恵器	無台坏				7.0		29	白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「廿」
199	SD7	13J24	1層	須恵器	無台坏	A	11.9	3.0	7.2	28	22	黒・白	並	灰～黄灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
200	SD7	13J10	1層	須恵器	無台坏	A	12.0	2.7	7.2	6	14	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
201	SD7	14J12	1層	須恵器	無台坏	A	12.8	3.0	8.0	10	13	砂・白	並	褐灰～黄灰	Rナデ　底:Rヘラ切 体下半:強いナデ	Rナデ	左	灯明皿か
202	SD7	13J5 13J10	1層 3層	須恵器	無台坏	A	11.8	3.2	6.9	28	24	黒・白	堅	灰～青灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
203	SD7	14J13		須恵器	無台坏	A	12.4	3.2	7.2	20	24	砂・白	並	灰～褐灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
204	SD7	13J23・ 24	1層	須恵器	無台坏	A	12.2	3.0	7.1	10	36	黒・白	並	灰～褐灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	左	
205	SD7	13J24	1層	須恵器	無台坏	A	12.9	3.1	8.0	18	36	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	墨書「H」状
206	SD7	13J15	2層	須恵器	無台坏	A	11.8	2.8	7.0	4	12	石・砂・白	並	黄灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	左	灯明皿か

土器観察表（７）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
207	SD7	13J10	3層	須恵器	無台坏	A	(12.5)	2.9	7.6	2	19	砂・鉄・白	並	灰～灰白	Rナデ 底:Rヘラ切→粗ナデ	Rナデ	右	墨書「前」ヵ
208	SD7	12K16	2層	須恵器	無台坏	A	12.6	3.2	7.6	9	20	白	やや軟	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	灯明皿か
209	SD7	12K16 12K21	2層 3層	須恵器	無台坏	A	12.4	3.2	7.2	5	20	黒・白	並	灰～暗灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	墨書「十」ヵ
210	SD7 －	13J10 13J13	3層 撹乱	須恵器	無台坏	A	12.6	3.0	7.6	15	24	砂・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
211	SD7	14J3	2層	須恵器	無台坏	A	11.6	3.3	7.4	7	36	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	左	
212	SD7	13J24 14J8	1層 1層	須恵器	無台坏	A	11.8	3.4	7.2	20	36	黒・白	並	青灰～灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
213	SD7	13J10	1層	須恵器	無台坏	A	12.2	3.3	6.8	12	18	砂・白・小礫	並	黄灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
214	SD7	12K21 13J5	1・2層 1層	須恵器	無台坏	A	13.2	2.9	8.3	11	36	黒・白	並	灰～灰黄	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
215	SD7	14J11・12	3層	須恵器	無台坏	A	12.3	3.3	7.6	20	20	砂・白	並	灰～黄灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	漆書「×」
216	SD7	14J12 14J12	 1層	須恵器	無台坏	A	12.5	3.0	7.0	27	36	白	並	灰～黄灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	左	墨書「三」
217	SD7	13J19	1層	須恵器	無台坏	A	12.8	3.2	8.0	4	8	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	右	
218	SD7	14J16	1・2層	須恵器	無台坏	A	12.4	3.1	6.9	19	36	黒・白	並	灰～褐灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	左	
219	SD7	13J10	2層	須恵器	無台坏	A	12.1	2.9	7.2	9	12	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	－	灯明皿か
220	試掘169T SD7 SD7 SD7	- 13J5・10 ・14 13J24 14J3	- 1層 3層 2層	須恵器	無台坏	A	12.0	3.1	6.3	22	12	石・白	並	暗灰～灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	右	灯明皿
221	SD7	13J15	1層	須恵器	無台坏	A	12.3	3.1	6.8	5	13	黒・白	並	褐灰～黄灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	－	灯明皿か
222	SD7	12K21 13J5	2層 1層	須恵器	無台坏	A	12.6	3.4	7.3	9	7	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	右	
223	SD7	13J5	1層	須恵器	無台坏	A	12.6	2.8	7.4	27	36	黒・白	並	灰～褐灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
224	SD7	12J25 12K21	3層 1・2層	須恵器	無台坏	A	11.8	2.9	7.5	31	29	黒・白	並	灰～暗灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
225	SD7	12K16	2層	須恵器	無台坏	A	12.1	3.2	7.4	10	36	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「千」
226	SD7	13J10	2・3層	須恵器	無台坏	A	12.6	2.6	8.0	11	13	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	墨書「×」
227	SD7	13J24	1層	須恵器	無台坏	A			7.3		36	白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「寺」
228	SD7	13J5	2層	須恵器	無台坏	B	12.5	2.9	6.4	14	14	石・砂・白	並	灰～黄灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	－	
229	SD7	12K21	3層	須恵器	無台坏	A			6.8		27	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「廿」
230	SD7	13J5	3層	須恵器	無台坏	A			7.2		10	白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	内面墨痕、転用硯
231	SD7	12K12 13J5 13K1	2層 2層 2層	土師器	無台椀	B1	16.3			8		石・海	軟	橙	Rナデ→ミガキ	Rナデ→ミガキ	不明	
232	SD7	13J19	1層	土師器	無台椀	B1			6.5		9	石・長	並	橙	Rナデ・底:ナデ	Rナデ	右	
233	SD7	13J10	1層	土師器	無台椀	B1	11.9	3.6	6.4	15	27	石・長・鉄・砂礫	軟	橙・浅黄橙・灰	Rナデ・体下:ケズリ 底:Rヘラ切	Rナデ	左	灯明皿
234	SD7 －	12K12 12K19	2層 Ⅶ	土師器	無台椀	B1	13.6	4.1	6.4	4	36	石・長・チ・海・礫	並	にぶい橙～にぶい黄橙	Rナデ・底付近:ケズリ 底:ケズリ	Rナデ	右	
235	SD7	13J15	3層	土師器	無台椀	B1	15.2	5.1	5.8	8	18	石・長・チ・海	並	浅黄橙	Rナデ・体下:ケズリ 底:R糸切	Rナデ	右	灯明皿
236	SD7	14J13	3層	土師器	無台椀	B1	17.2	4.9	8.2	4	9	長・チ・砂・鉄	軟	黄橙	Rナデ・底:ケズリ	Rナデ	右	
237	SD7	12J19 12K21	1層 1層	土師器	無台椀	B2	12.2	4.2	5.0	4	15	石・長・海・砂	堅	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
238	SD7	13J5・9	1層	土師器	無台椀	B2	12.9	4.2	5.2	6	36	石・長・チ・角・海	並	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	

土器観察表（８）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
239	SD7	12K16 12K21	2層 1層	土師器	無台椀	B2	13.0	4.3	6.2	10	14	石・長・チ	軟	灰白～浅黄橙	Rナデ・底:Rヘラ切か	Rナデ	右	
240	SD7	15I4	1層	土師器	無台椀	B2	14.5	5.6	5.9	19	36	石・長・チ・角	堅	浅黄橙～にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
241	SD7	13J19	1層	土師器	無台椀	B3	11.8	4.1	5.4	7	21	石・長・チ	やや軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	灯明皿
242	SD7	13J5	3層	土師器	無台椀	B3			6.0		29	石・長・チ・海	やや堅	浅黄橙	Rナデ　底:R糸切 底付近:ケズリ	Rナデ	右	
243	SD7 －	13J5 13J14	1層 Ⅶ	土師器	無台椀	B3	12.6	5.3	6.0	5	8	石・長・鉄	並	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	外面全体煤付着
244	SD7	14J3		土師器	無台椀	B3	14.6	6.1	6.7	8	27	石・長・チ	軟	浅黄橙～にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	緑釉椀の模倣か
245	SD7 － －	12K21 12J19 12K16	1・2層 Ⅶ Ⅶ	土師器	無台椀	C1			6.3		27	海・砂	軟	浅黄橙～にぶい黄橙	ミガキ・底:ケズリ	ミガキ	右	
246	SD7	14J3 14J3	 1層	土師器	無台椀	C4	15.0	3.4	6.2	7	24	石・長・鉄	やや軟	淡黄～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	墨書「十」ヵ
247	SD7	13J23	1層	土師器	無台椀	D3	(13.6)			2		石・長・砂・鉄	堅	橙	Rナデ	Rナデ	不明	墨書「乙」ヵ
248	SD7	15I4	1層	黒色土器	無台椀	B	13.4			10		石・長・角・海・鉄	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ→ミガキ 体下:ケズリ	Rナデ→ミガキ	右	
249	SD7	13J9 14J7	1層 1・2層	黒色土器	無台椀	D	15.8	4.7	7.0	3	7	石・長・チ	やや軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ・ミガキ	－	
250	SD7	14J8	1層	須恵器	長頸壺		－	－	－	－	－	長・黒	堅	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
251	SD7	13J15	1層	土師器	小甕	Ba	9.6			13		石・長・チ	やや軟	にぶい褐～浅黄褐	Rナデ	Rナデ	右	
252	SD7	13J5・9・24	1層	土師器	小甕	Ba	15.0			18		石・長・チ	やや軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	－	
253	SD7	13J10	1・2層	土師器	小甕	Ba	11.4			5		石・雲・角	やや堅	外:にぶい黄褐/内:浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
254	SD7	13J15	2層	土師器	小甕	Bb	10.8			7		石・長・角・鉄	やや軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
255	SD7	14I25		土師器	小甕	B			5.6		36	石・長・チ	やや軟	浅黄橙～灰黄褐	体:Rナデ・底:静止糸切か	体:Rナデ	右	
256	SD7	13J19・24	1層	土師器	小甕	B			7.0		35	石・長・チ・海・鉄	やや堅	橙～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
257	SD7	13J10	1・2層	土師器	小甕	B			6.2		24	石・長・チ・海	やや堅	にぶい黄橙～にぶい橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
258	SD7	13J19・24	1層	土師器	小甕	B			5.9		22	石・長・チ・角・海	やや軟	浅黄橙～にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
259	SD7	14J12	1・2・3層	土師器	小甕	B			6.1		36	石・長	やや軟	外:褐/内:橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
260	SD7	13J5	1層	土師器	長甕	Ba1	22.3			6		石・長・チ	やや堅	にぶい黄橙～橙	Rナデ	Rナデ	右	
261	SD7	13J10 14J3 14J12	2層 1層 2層	土師器	長甕	Ba1	19.0			10		石・長・チ	やや堅	橙～浅黄橙	Rナデ	Rナデ	左	
262	SD7	14I25 14J3 14J7・12	1層 2層 3層	土師器	長甕	Ba1	19.8			19		石・長・チ・角	やや堅	黄橙	Rナデ・平行タタキ	Rナデ	左	
263	試掘169T SD7 SD7 －	ミゾ 13J10・14 ・15・23 13J14・15	 1層 1層 Ⅶ	土師器	長甕	Ba1	21.2			28		石・長・チ・海	やや堅	浅黄橙～灰黄褐	Rナデ	Rナデ	左	
264	試掘169T SD7 SD7 SD7 SD7 SD7 SD7 SD7	ミゾ - 13J15・24 13J23 13J23 14J3 14J3・7 14J3・12	- 1層 2層 3層 1層 2層	土師器	長甕	Ba1	22.5			13		石・長・チ・海	やや軟	橙	Rナデ・格子目タタキ	Rナデ・同心円当て具	左	
265	SD7	13J10	3層	土師器	長甕	Ba1	23.2			5		石・長・チ・鉄	堅	浅黄橙	Rナデ・カキ目 強い板ナデ	Rナデ	右	
266	SD7	12K21 13J5 13J10	2層 1層 1・3層	土師器	長甕	Ba2	20.7			24		石・長・チ・海	やや軟	橙～にぶい橙	Rナデ・カキ目	Rナデ・カキ目	左	

土器観察表（９）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
267	SD7	14J3 14J12	1層	土師器	長甕	Ba2	20.3			10		石・長・チ・角・鉄	やや堅	浅黄橙～橙	Rナデ	Rナデ	右	
268	試掘169T SD7 SD7 SD7 SD7 SD7 SD7 SD7 － － －	ミゾ 13J5 13J19・24 13J15・19 ・23・24 14J3・7・8 14J7 15I4 13J19・24 14J7・8 12I20	3層 1層 1層 1層 2層 1層 Ⅶ Ⅶ 撹乱	土師器	長甕	Ac	20.6			22		石・長・チ	軟	浅黄橙	縦ハケ		－	
269	SD7	13J10・15 13K1 14J8 15I4	1層 1層 1層 1層	土師器	長甕	Aカ			丸底		36	石・長・鉄	やや軟	浅黄橙～黄橙	ハケ→粗いナデ		－	
270	SD7	14J7		土師器	甑				17.8		4	石・長・チ	やや堅	橙	Rナデ	Rナデ	左	
271	SD7	12K16	2層	土師器	鍋	Ba	33.0			3		石・長・チ・角・海・鉄・円礫	やや堅	橙	口:Rナデ 体:ケズリ→平行タタキ	口:Rナデ	左	
272	SD7 － － － －	12K21 13K12 14K4 15L4 16L5	1層 Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ	土師器	鍋	Ba	35.9			7		石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙～にぶい黄橙	Rナデ・下:平行タタキ	Rナデ・下:ハケ→タタキ	右	
273	SD7	12K16 13J5	2層 3層	土師器	鍋	Ba	39.0			3		石・長・チ・海	やや堅	浅黄橙	口～体上:ナデ 体下:平行タタキ		右	
274	SD7	12K21 13J5	2・3層 1層	土師器	鍋	Ba	(39.6)			2		石・長・チ・海・鉄	やや軟	浅黄橙	口～体上:Rナデ 体下:タタキ	Rナデ	右	
275	SD8 －	13I2・3 13I2	1層 Ⅶ	土師器	無台椀	B1	17.0	5.7	6.9	7	36	石・長・雲	やや堅	明赤褐	Rナデ・ミガキ・底:ケズリ	Rナデ・ミガキ	右	
276	SD8	13I3	1層	土師器	無台椀	B3	13.0	3.6	6.0	12	22	石・長・雲	やや軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
277	SD8	13I3	1層	土師器	無台椀	C1			6.6		9	石・角	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ 体下半:ケズリ 底:R糸切→ケズリ	Rナデ	左	
278	SD8	13I3	1層	黒色土器	無台椀	B	17.8			4		石・長	やや軟	浅黄	Rナデ・ミガキ	Rナデ・ミガキ	左	
279	SD8	12I22	1層	土師器	小甕	Ba	11.6			31		石・長・チ・海・鉄	やや堅	黄橙～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
280	SD8	12I22	1層	土師器	小甕	B			6.0		36	石・長・チ・海・鉄	やや堅	黄橙～浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
281	SD8 －	13I3 13Ｉ3	1層 Ⅶ	土師器	小甕	Ba	14.0			8		石・長・チ・雲・角・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
282	SD8	13I3	1層	土師器	長甕	Bb	17.4			10		石・長・チ・鉄	並	浅黄橙	口～体上:Rナデ 体下:平行タタキ	Rナデ・同心円当て具	左	
283	SD8	13I3	1層	土師器	鍋	Ba	(38.5)			2		石・長・チ	やや堅	にぶい黄橙～橙	Rナデ	Rナデ	右	
284	SD97 Ⅶ Ⅶ	14M19 13L13 14M13・14	 Ⅶ Ⅶ	須恵器	有台坏		12.8	6.2	6.7	13	26	黒・白	並	灰	Rナデ	Rナデ	左	
285	SD131	14M19		須恵器	無台坏				8.4		7	長・黒	並	にぶい黄褐	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	墨書「×」
286	SD153	14I15	1層	須恵器	無台坏	A			7.4		17	砂・白	やや軟	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	内外面:墨書「□」
287	SD153	14J16	1層	土師器	小甕	Ba	10.6			8		石・長・海・鉄	並	にぶい橙～浅黄橙	Rナデ	Rナデ	不明	
288	SD267	13K13		須恵器	無台坏	A			6.2		18	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「廾」ヵ
289	SD267	13K13	1層	須恵器	無台坏	A			9.5		8	石・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「□」
290	SD267	13K14	1層	須恵器	無台坏	A	12.8	3.4	8.1	23	36	長・チ	堅	にぶい橙	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	墨書「巾」
291	SD267	13K13	1層	土師器	長甕	Bb	21.9			4		石・長・角・海	並	にぶい黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
292	SD273	13L20		須恵器	無台坏	A	12.2	3.6	7.8	26	36	石・長・チ・白	並	灰白	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	墨書「〒」、在地産

土器観察表（10）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
293	SD302	12I23	1層	須恵器	無台坏	A	12.6	2.6	7.6	10	14	砂・白	やや軟	灰～灰黄	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「×」「□」
294	SD480 SD480 －	- 10G22 10G12・17・22	- 1層 Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.2	3.1	7.2	18	21	長・黒	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
295	SD480 －	10G22 10G22	1層 Ⅶ	土師器	無台椀	D3	15.0	4.5	7.4	19	36	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
296	SD325	9D19	2層	須恵器	無台坏		11.6			5		黒・白	並	灰	Rナデ	Rナデ	左	
297	SD325	9D14	1層	須恵器	無台坏	A	13.0	2.9	8.4	1	8	長・黒	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
298	SD325	9D19	1層	土師器	小甕	B			6.6		23	石・長・白	やや堅	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
299	SD325	9D14	1層	土師器	長甕	Ba1	(23.7)			2		石・長・チ	やや堅	にぶい橙～灰褐	Rナデ	Rナデ	－	漆継ぎ痕あり
300	SD416	10F17	1層	須恵器	無台坏				8.0		7	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「廿」ヵ、転用硯
301	SD430	11H5	1層	須恵器	無台坏	A	13.4			4		黒・白	並	灰	Rナデ	Rナデ	左	
302	SD430	11H5	1層	須恵器	無台坏	A			8.0		9	長・雲	堅	外:青灰/内:灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
303	SD431	11H14		須恵器	小壺		4.4	9.1	3.7	36	36	砂・黒・白	並	暗灰～灰	Rナデ 底および底付近:ケズリか	Rナデ	右	
304	SD436	11H11	1層	土師器	無台椀	B1			5.6		8	石・長・角・海	堅	橙	ミガキ・底:ナデか	ミガキ	－	
305	SD436	10H19	1層	土師器	無台椀	B1			7.0		9	石・長・チ	並	橙～にぶい黄橙	ケズリ・底:ケズリ	ミガキか	右	
306	SD450 －	10H20 10H10・15・20	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.3	3.2	7.3	29	35	長・黒	堅	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
307	SD451 SD451	11H5 11H5	1層	土師器	無台椀	B3			6.0		14	石・長・チ	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	－	
308	SD451	11H5		土師器	無台椀	B3			5.8		16	石・長・チ・雲	並	橙・浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
309	SD451	11H5		土師器	長甕	Ba1	17.6			6		石・長・チ・海・鉄	やや堅	橙	Rナデ	Rナデ	右	
310	SD451 －	10H15 10H25	Ⅶ	土師器	長甕	Ba1	21.2			18		石・長・チ・雲・角	やや軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
311	SD451 SD452 － － － － － －	11H5 10H25 9H22・10G25 10H12・19 ・20・25・10I7 ・11・12・13 ・14・16・21 ・23・11H3・13	 Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ	土師器	鍋	Ba	43.0			5		石・長・チ	軟	浅黄橙	Rナデ・カキ目	Rナデ・カキ目	－	
312	SD452	11H5	1層	土師器	鍋	Bb	39.9			4		石・長・チ・海・鉄	やや軟	橙	Rナデ・平行タタキ	Rナデ	－	
313	SD40 －	13J11 9H24	 Ⅶ	須恵器	坏蓋		18.2			3		石・長・チ・海	堅	灰	Rナデ・上:ケズリ	Rナデ	左	内面墨痕、転用硯 在地産
314	SD40	13J11		須恵器	無台坏か		11.0			4		長・黒	堅	黄灰	Rナデ	Rナデ	左	
315	SD204	13J14	1層	須恵器	無台坏	A	14.4			6		長・黒	並	灰	Rナデ	Rナデ	左	在地産
316	SD204	13I5		須恵器	無台坏	A	12.8			6		砂・黒・白	並	灰	Rナデ	Rナデ	左	
317	SD111	14K8	1層	須恵器	無台坏	A			8.2		5	長・黒	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「□」
318	SD115 －	14K5 14K8	1層 Ⅶ	須恵器	坏蓋		13.4	2.6		10		長・黒	堅	灰	Rナデ・上:ヘラ切り→ナデ	Rナデ	－	内面墨痕、転用硯
319	SD581 －	14K3 14K4・8	 Ⅶ	土師器	無台椀	B1			6.0		12	石・長・チ・鉄	やや軟	浅黄橙～黄橙	Rナデ・底、底付近:ケズリ	Rナデ・ミガキ	右	
320	SX4 －	16M6 16M6・16	2層 Ⅶ	須恵器	有台坏				8.0		31	白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
321	SX4	15M11	1層	須恵器	無台坏	A	12.6	2.3	7.4	7	9	砂・白	並	灰～灰白	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
322	SX4	15M12		須恵器	無台坏		12.1			4		砂・白	並	灰	Rナデ	Rナデ	右	灯明皿か
323	SX4	15M16	1層	須恵器	無台坏	B	12.3	2.8	8.0	7	11	砂・黒・白	並	灰	Rナデ 底:Rヘラ切→外周:ナデ	Rナデ	右	
324	SX4	15M16	1層	須恵器	無台坏	B	13.3	2.7	8.3	5	4	白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	灯明皿か
325	SX4	15M11	1層	土師器	無台椀	B1			6.0		26	石・長	やや軟	浅黄橙～橙	Rナデ・底:ケズリ	Rナデ	右	灯明皿か

土器観察表（11）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
326	SX4 －	15M6 15M6	1・2層 Ⅶ	土師器	無台椀	C1	17.1	5.8	6.9	8	16	石・長・チ・角・海・鉄	やや堅	黄橙～にぶい橙	Rナデ・底:ナデか	Rナデ→ミガキ	不明	
327	SX4	15M16	1層	土師器	有台鉢		(38.4)			2		石・長・チ	並	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	－	
328	SX4	16M6	2層	土師器	小甕	Ba	14.0			7		石・長・チ・海	やや堅	橙～にぶい褐	Rナデ	Rナデ	－	
329	SX4	15L20	1層	土師器	小甕	B			6.0		25	石・長・チ・鉄	やや堅	にぶい黄褐～にぶい橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
330	SX4	15M11	1層	土師器	長甕	Ba1	20.8			22		石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙～橙	Rナデ	Rナデ	右	
331	P156	13L24	1層	土師器	無台椀	B3			6.0		19	石・長・チ・海・鉄	やや堅	にぶい橙～黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	墨書「キ」状
332	P278	12L1		土師器	無台椀	A3	13.9			6		石・長・海	軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
333	P278	12L1		土師器	無台椀	D3	13.6			12		石・チ	軟	灰白～浅黄橙	Rナデ	Rナデ	左	
334	P278 －	12L1 12L1	 Ⅶ	土師器	無台椀	D4	13.0	4.2	4.2	20	36	石・長	やや軟	灰黄～灰	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
335	P527	11I7	1層	土師器	無台椀	D3	15.3	4.3	7.4	3	6	石・長・チ	堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
336	P527	11I7	1層	土師器	長甕	Bc	18.4			4		石・長・チ・角	やや軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	不明	
337	SX1	13E24	下層	須恵器	無台坏	A	12.0	2.8	7.4	5	15	砂・黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	墨書「×」
338	SX1	14E4	下層	須恵器	無台坏	A	12.4	3.0	7.0	3	9	石・長・黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
339	SX1	14E8	下層	須恵器	無台坏	A	12.0	2.7	7.4	13	11	海・黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「鳥」
340	SX1	13G12	下層	須恵器	無台坏	A	12.5	3.0	6.9	5	5	白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「三」
341	SX1	14F12	下層	須恵器	無台坏				7.6		14	白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切→ナデ	Rナデ	右	墨書「大」ヵ
342	SX1	15I19	下層	土師器	有台椀		15.9	5.9	9.2	17	29	石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
343	SX1	14H24	下層	土師器	無台椀	A2	12.1	4.6	5.4	5	36	石・長・チ・海・鉄	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	墨書「千」ヵ
344	SX1	14H15・20	立木痕	土師器	無台椀	A3	12.0	3.7	5.0	17	19	石・長・チ・海	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
345	SX1	14I11	下層	土師器	無台椀	B1			6.2		36	石・長・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:ケズリ 底付近:ケズリ	Rナデ	右	
346	SX1	14F6	下層	土師器	無台椀	B1	16.7	6.2	6.6	2	4	石・長・チ・海・鉄	軟	橙～浅黄橙	Rナデ 底、底付近:Rケズリ	Rナデ・ミガキ	右	
347	SX1	13E15	下層	土師器	無台椀	B2	11.9	3.7	4.0	13	18	石・長・チ・海	軟	外:黄橙/内:浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
348	SX1	15H3	下層	土師器	無台椀	B3	15.0	4.0	5.3	8	36	石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
349	SX1	14I16	立木痕	土師器	無台椀	B3	12.0	3.3	5.1	23	36	石・長・チ・鉄	やや堅	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
350	SX1	13G25	下層	土師器	無台椀	B4	11.0	3.1	5.5	5	18	石・長・チ・角	並	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
351	SX1	14H15	立木痕	土師器	無台椀	C3	16.4	5.0	6.2	8	22	石・長・チ・海	軟	外:灰/内:浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
352	SX1	14H6	下層	土師器	無台椀	D3	12.0	5.4	5.5	3	36	石	並	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	－	
353	SX1	15I6	立木痕	土師器	無台椀	D3	11.9	4.0	5.4	28	36	石・長・チ・海	並	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
354	SX1	13E23	下層	土師器	無台椀	D3	12.0	3.7	5.2	10	19	石・長・チ・角・海	やや堅	浅黄橙～橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
355	SX1	15I19	下層	土師器	無台椀	D3	13.6	3.7	6.3	13	36	石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
356	SX1	13I19	下層	土師器	無台椀	D3	14.6	4.7	6.3	18	36	石・長・チ・鉄	並	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
357	SX1	14E10	下層	土師器	仏鉢型		15.4			3		石・長・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ→ケズリ	Rナデ	右	
358	SX1	15I4	下層	黒色土器	無台椀	B	13.1			7		石・長・海	やや堅	橙	Rナデ・口:ミガキ	Rナデ・ミガキ	右	
359	SX1	13E20	下層	黒色土器	無台椀	B			6.2		13	石・長	並	浅黄橙	Rナデ・底:ケズリ		右	内面・割れ口漆付着
360	SX1	14E4	下層	黒色土器	無台椀	B			5.4		10	石・長・チ・角	軟	にぶい黄橙	Rナデ・ミガキ 底:Rケズリ	Rナデ・ミガキ	右	
361	SX1 －	14E4 10E24	下層 撹乱	須恵器	長頸壺		－	－	－	－	－	長・チ・黒	並	灰	Rナデ	Rナデ	右	外面漆付着
362	SX1	14E3	下層	須恵器	長頸壺				9.9		36	黒・白	並	灰～暗灰	Rナデ 底:静止糸切→ナデ	Rナデ	左	
363	SX1	14H18	下層	須恵器	長頸壺				10.5		23	白	並	灰～暗灰	Rナデ・体下:タタキ 底:Rヘラ切	Rナデ	右	

土器観察表（12）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
364	SI429 SD7 SD431 SX1 － － － －	11I1 14J7 11H9 14I11 10J22 13J6・10 14J2 14M17	1層 2層 1層 下層 Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ	須恵器	直口壺				13.5		21	黒・白	並	褐灰～灰	体上半:カキ目 体下半:平行タタキ 底付近:ケズリ	口:ナデ 体:同心円タタキ	－	
365	SX1	14I24	下層	土師器	小甕	B			5.2		36	石・長・チ・雲・鉄	やや堅	黄橙～にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
366	SX1	17L5	下層	土師器	小甕	B			6.0		25	石・長・チ・海・鉄	やや軟	浅黄橙～橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
367	SX1	14H12・17	下層	土師器	小甕	B			4.6		36	長・海・鉄	並	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	－	
368	SX1	14G10	下層	土師器	小甕	B			8.1		36	石・長・チ	やや軟	外:にぶい褐 内:浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
369	SX1	14F11・12	下層	土師器	長甕	Ba1	20.0			11		石・長・チ・雲・海	やや堅	外:にぶい黄橙 内:浅黄橙	Rナデ	Rナデ・カキ目	左	
370	SX1	13F9	下層	土師器	長甕	Bc	21.2			5		石・長・チ・海	やや軟	浅黄橙	Rナデ 体:カキ目→縦位ナデ	Rナデ	－	
371	SX1	13F13	下層	土師器	長甕	Bc	19.6			5		石・長・チ	やや堅	浅黄橙～にぶい橙	Rナデ	Rナデ	左	
372	SX1	-		土師器	鍋	Ba	36.2			3		石・長・チ	やや堅	外:にぶい赤褐/内:橙	Rナデ・カキ目 ケズリ・平行タタキ	Rナデ・カキ目 ・平行当て具	－	
373	SX1	14I12	下層	土師器	鍋	Ba	(37.0)			3		石・長・チ・雲・小礫	やや軟	外:黒褐/内:にぶい黄橙	Rナデ・カキ目	Rナデ・カキ目	－	
374	SX1 SX1	15I1 1516	下層 立木痕	土師器	鍋	Ba	36.6			5		石・長・チ・角・海	やや堅	橙	Rナデ・平行タタキ	Rナデ・当て具	右	内面漆微量付着
375	SX1	13F9	下層	土師器	鍋	Ba	(39.0)			2		石・長・チ・角・海・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・カキ目	Rナデ・カキ目	－	
376	SX1	12F22	下層	土師器	鍋	Bb	39.4			3		石・長・雲	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	－	
377	SX1	13G22	下層	土師器	鍋	Bb	(38.6)			2		石・長・チ・海	軟	灰白	Rナデ	Rナデ	－	
378	SX120	13L21	1層	土師器	無台椀	C2	13.5	4.0	6.4	6	12	長・雲・鉄	並	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	左	
379	SX120	13L21	1層	土師器	小甕	Ba	11.4			5		石・長・チ・鉄	やや堅	黄橙～にぶい橙	Rナデ	Rナデ	左	
380	SX120	13L21	2層	土師器	小甕	Bb	(12.5)			2		石・長・チ	やや堅	橙～浅黄橙	Rナデか	Rナデか	－	
381	SX120	13L21	1層	土師器	小甕	B			8.0		36	石・長・チ・鉄	軟	外:浅黄/内:橙	Rナデ・底:静止糸切り	Rナデ	右	
382	SX400	12J2	1層	須恵器	無台坏	A	11.9	3.0	7.2	36	36	砂・黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	漆書「×」
383	－	13J14	Ⅶ	須恵器	坏蓋		13.6			12		石・長・黒	堅	暗青灰	Rナデ・上:ケズリ	Rナデ	右	内外面墨痕、転用硯
384	P125	14K4	1層	須恵器	坏蓋		－	－		－		長・チ・黒	堅	灰白	Rナデ	Rナデ	右	転用硯
385	－ － －	14K14 14L3 13L9	Ⅶ Ⅶ 撹乱	須恵器	有台坏		13.2	5.6	7.8	7	6	長・黒	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	－	
386	－	14M13・23	Ⅶ	須恵器	有台坏		12.3	6.0	7.0	2	12	黒・白	並	灰	Rナデ・底付近:ケズリ 底:Rヘラ切	Rナデ	左	
387	－ －	12H16 12G14	Ⅶ 撹乱	須恵器	有台坏				7.3		16	石・長・黒	やや堅	灰白	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	転用硯
388	－	14M20	Ⅶ	須恵器	有台坏				7.3		18	長・黒	堅	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	在地産
389	－ －	16L16 16L1	Ⅱ Ⅶ	須恵器	有台坏				6.0		25	長・黒	堅	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
390	－	13M24	Ⅶ	須恵器	無台坏		11.6			3		石・長	堅	灰	Rナデ	Rナデ	右	墨書「II」状
391	－	13J24	Ⅶ	須恵器	無台坏		(14.4)			2		長・黒	並	青灰	Rナデ	Rナデ	－	墨書「卄」
392	－	11L21	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.3	3.4	8.1	11	25	黒・白	軟	灰白	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	灯明皿か
393	－	10G6・12 ・13・18	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.2	3.2	7.2	14	36	石・長・黒	堅	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
394	－	14K8	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	13.0	3.2	7.9	11	11	石・長・黒	やや堅	灰白	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
395	－	14K7・8	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	11.6	2.9	7.0	15	24	長・黒	堅	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
396	－	11K15	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.3	3.2	7.2	13	17	石・長・黒	堅	青灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
397	－	13L6	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.9	2.9	7.8	3	14	石・長・黒	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	墨書「邊」ヵ
398	－	14M2	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	11.9	3.6	7.5	7	20	長・チ・黒	やや軟	灰白	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	墨書「山」ヵ、在地産か
399	－	13L6	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.1	3.0	7.4	8	20	長	堅	暗青灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	墨書「×」

土器観察表（13）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
400	－	14L1	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.5	3.2	7.6	7	9	長・チ	堅	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	灯明皿か
401	－	13I1	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.0	3.0	7.0	8	17	石・長・黒	やや堅	灰白	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	漆書「×」
402	－	14K7・8	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.0	3.0	7.4	15	20	海・黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
403	－	15L1・13	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.9	3.5	8.0	12	19	砂・黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
404	－	13J19・20	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.0	2.9	6.4	8	14	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	灯明皿か
405	－	15M6	Ⅶ	須恵器	無台坏	A	12.6	3.6	6.4	6	20	長・黒	堅	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
406	－	14L2	Ⅶ	須恵器	無台坏	B	11.8	2.0	7.6	13	23	長・黒	堅	青灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
407	－	13J15	撹乱	須恵器	無台坏	B	12.5	2.4	6.4	5	22	長・チ	堅	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	在地産
408	－	11H11	Ⅶ	須恵器	無台坏	B	14.0	3.0	7.8	9	15	長・黒	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	内面漆付着
409	－	13J13	Ⅶ	須恵器	無台坏	B	12.2	2.8	7.2	13	36	黒・白	並	灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	左	
410	－	14L7	Ⅶ	須恵器	無台坏	B	11.6	2.4	7.6	8	12	長・黒	堅	暗青灰	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	
411	－	10E11	Ⅶ	須恵器	無台坏				7.2		12	黒・白	並	灰	Rナデ・底:ヘラ切	Rナデ	右	転用硯
412	－	14K12	Ⅶ	須恵器	無台坏	A			7.8		10	長・角	堅	灰白	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	墨書「廾」
413	－ －	10F20 10G21	Ⅶ Ⅶ	須恵器	焼き台か		9.8	3.3	7.5	19	7	黒・白	並	灰	Rナデ・底:ナデ	Rナデ	－	
414	－	12I21	Ⅶ	土師器	坏蓋		(17.2)			1		石・チ・黒・鉄	やや軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	－	
415	－	10F13	Ⅶ	土師器	有台皿		12.4	2.8	6.0	4	36	石・長・チ・雲	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	灰釉模倣
416	－	10G16	Ⅶ	土師器	有台椀				6.3		11	石・長・砂・鉄	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
417	－	11M11・16	Ⅶ	土師器	有台椀				8.4		9	石・長	やや軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	左	
418	－	11K23	Ⅶ	土師器	有台椀				7.8		8	石・海	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	－	
419	－	9C14・15	Ⅶ	土師器	無台椀				(5.1)		－	長・チ・雲	軟	淡黄	不明	不明	－	内面漆付着 工具痕あり
420	－	12K13	Ⅶ	土師器	無台椀	A2	16.0	5.9	6.4	9	14	石・長・チ・鉄	やや軟	淡黄	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
421	－	14K17	Ⅶ	土師器	無台椀	B1	12.6	3.7	5.9	5	35	石・長・角・海	やや堅	にぶい橙	Rナデ・体下半:ケズリ 底:R糸切	Rナデ	左	
422	－	13I9	Ⅶ	土師器	無台椀	B1	16.0	5.8	5.2	5	20	石・長・鉄	やや軟	橙	Rナデ・体下:ケズリ	Rナデ	右	灯明皿
423	－	13M14	撹乱	土師器	無台椀	B1	13.6	4.5	5.8	16	36	石・長・チ・海	堅	橙～黄橙	体:Rナデ　底：R糸切 底付近:ロクロケズリ		右	内面全体に漆付着 漆紙付着、墨書「几」
424	－	12I11・21・22	Ⅶ	土師器	無台椀	B1	15.9	5.0	5.8	8	36	石・長・チ	やや堅	橙	Rナデ・ミガキ 体下半:ケズリ 底:ケズリ	Rナデ・ミガキ	左	
425	－	12M19	Ⅶ	土師器	無台椀	B1	16.7	5.7	7.4	32	34	石・長	やや堅	浅黄橙～黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ・ミガキ	右	
426	－	9D20	Ⅶ	土師器	無台椀	B1	15.6	5.0	7.4	9	17	石・長・チ	やや堅	橙	Rナデ・体～底:ケズリ	Rナデ	左	灯明皿
427	－	13J15	Ⅶ	土師器	無台椀	B2	16.1			9		石・長・海・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	－	
428	－	11J14	Ⅶ	土師器	無台椀	B3	11.0	3.6	4.2	16	36	石・長・チ・鉄	やや軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
429	－	12L8	Ⅶ	土師器	無台椀	B3	12.2	3.9	4.8	7	19	石・長・チ	軟	灰黄	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
430	－	14K5	Ⅶ	土師器	無台椀	B3	12.5	4.4	5.2	16	36	石・長・チ	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
431	－	10I14	Ⅶ	土師器	無台椀	B3	12.5	3.8	5.7	8	26	石・長・チ・海	やや堅	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
432	－	12K6	Ⅶ	土師器	無台椀	B3	13.0	4.1	5.4	26	25	石・長・チ・雲	軟	にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
433	－	12L1	Ⅶ	土師器	無台椀	B3	13.1			15		石・長	軟	にぶい黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
434	－ SX1 SX1	15I19 15H14 15I14	Ⅶ 立木痕 立木痕	土師器	無台椀	B3	13.2	3.9	5.5	8	36	石・長・鉄	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
435	－	13J1・14	Ⅶ	土師器	無台椀	B3	14.0	3.6	6.8	4	9	石・長・チ・海	やや堅	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	－	
436	－	11I2	Ⅶ	土師器	無台椀	B3	13.4	3.8	6.2	9	36	石・長・チ・海・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
437	－	10E6	撹乱	土師器	無台椀	B3	13.2	4.0	5.4	13	36	石・長・チ	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	左	
438	－	14L5	Ⅶ	土師器	無台椀	B3			6.8		6	石・長・チ	軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	墨書「加」
439	－	13J15	Ⅶ	土師器	無台椀	B3			7.0		7	石・長	やや軟	灰白	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	墨書「千」
440	－	12K12	Ⅶ	土師器	無台椀	B3			4.8		36	石・長・海	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	漆付着
441	－	11I15・19	Ⅶ	土師器	無台椀	B4	10.4	3.5	5.4	32	36	石・長・角	やや軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	墨書「大」
442	－	11I2	Ⅶ	土師器	無台椀	B4	12.0	3.6	5.4	12	27	石・長・チ・角・鉄	やや軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
443	－	12H4	撹乱	土師器	無台椀	B4	11.8	4.3	6.2	10	22	石・長・チ	軟	灰白	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	

土器観察表（14）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
444	－	14K14	Ⅶ	土師器	無台椀	C1	13.0	4.4	6.6	6	36	石・長・海	軟	黄橙	Rナデ・体:ケズリ 底:R糸切	Rナデ	左	
445	－	13M23	Ⅶ	土師器	無台椀	C1	16.0			8		黒	並	橙	Rナデ→ミガキ 下半:ケズリ	Rナデ→ミガキ	左	
446	－	10D7	Ⅶ	土師器	無台椀	C2	12.2	4.2	6.0	14	36	石・長・チ	やや堅	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
447	－	10E6・11	撹乱	土師器	無台椀	C3	11.9	3.6	4.5	12	36	石・長・チ	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ・底：R糸切	Rナデ	右	
448	－	-	排土	土師器	無台椀	C3			5.9		8	石・長	やや軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	墨書「千」ヵ
449	－	12L1	Ⅶ	土師器	無台椀	C3	14.2	4.5	5.7	9	36	石・長	やや軟	にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
450	－	13J19	撹乱	土師器	無台椀	C4	12.7	3.9	5.3	15	12	石・長・チ・鉄	やや堅	黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
451	－	12I11	Ⅶ	土師器	無台椀	C4	12.6	4.6	6.6	8	17	石・長・海	やや堅	にぶい橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
452	－	10D9	Ⅶ	土師器	無台椀	C4	13.3	3.7	6.4	2	36	石・長・角・海	やや堅	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
453	－	10E12	Ⅶ	土師器	無台椀	C4	13.5	4.0	6.6	25	25	石・長・鉄	やや堅	橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
454	－	10I14	Ⅶ	土師器	無台椀	D2	14.1	4.4	5.8	13	26	石・長・チ・鉄	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
455	－	13I9	Ⅶ	土師器	無台椀	D3	11.8	4.6	5.0	27	19	石・長・チ・海	やや堅	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
456	－ －	9D25 9E21・25	Ⅶ Ⅶ	土師器	無台椀	D3	13.4	4.2	4.8	14	30	石・長・チ・雲・鉄	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
457	－	11J25	Ⅶ	土師器	無台椀	D3	13.4	3.3	6.6	30	36	石・長・チ・鉄	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	灯明皿
458	－	11J18	Ⅶ	土師器	無台椀	D3	14.0	3.3	6.8	18	18	石・長・チ	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
459	－	11J25	Ⅶ	土師器	無台椀	D3	13.6	4.0	7.6	16	28	石・長・チ	軟	浅黄	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
460	－	12L8	Ⅶ	土師器	無台椀	D3	(15.6)	3.9	7.0	3	36	石・長・チ	軟	にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
461	－	11K13	Ⅶ	土師器	無台椀	D3	15.0	4.1	7.2	10	36	石・長・礫	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	灯明皿
462	－	15I3	Ⅶ	土師器	無台椀	D3	16.1	5.0	5.0	14	36	石・長・チ・鉄	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
463	－	10G24	Ⅶ	黒色土器	有台椀		16.3	5.7	8.0	1	10	石・長・チ・雲・角	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ→ケズリ	右	
464	－	14K8	Ⅶ	黒色土器	有台椀				7.3		12	石・長・チ・角	やや堅	暗灰黄	Rナデ	ミガキ	－	
465	－	12K7	Ⅶ	黒色土器	有台椀				(7.0)		－	石・長・チ・海	軟	淡黄	底:R糸切	ミガキ	右	漆付着
466	－	11H6・11	Ⅶ	黒色土器	無台椀	A	17.0			11		石・長・チ・海	やや堅	にぶい黄淡	Rナデ・ミガキ	ミガキ	－	内外面漆付着
467	－	9D24	Ⅶ	黒色土器	無台椀	A	15.8	4.5	6.0	5	23	石・長・海・鉄	軟	浅黄橙	Rナデ→ミガキ 底:ナデ消し	Rナデ→ミガキ	－	
468	－	12H20・25	Ⅶ	黒色土器	無台椀	B	13.9	4.0	5.7	3	20	石・長・チ・雲	軟	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ・ミガキ	右	
469	－	13I16	Ⅶ	黒色土器	無台椀	B			5.0		36	石・長・チ・海	やや堅	浅黄	Rナデ・底:R糸切	ミガキ	右	
470	－	11L20	Ⅶ	黒色土器	無台椀	B			7.0		13	石・長	並	にぶい橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ・ミガキ	－	
471	－ －	13K12 14M1	Ⅶ Ⅶ	須恵器	小壺				5.9		9	長・黒・白	並	灰	Rナデ・底:ナデ	Rナデ	右	
472	－ －	9F12 10F11	Ⅶ Ⅶ	須恵器	広口壺		(19.2)			1		石・白	並	青黒	Rナデ	Rナデ	右	
473	SD296 SX1 － － － －	12I21 14 I 11 11I13 11J16 12H16 12I21・22・23	下層 Ⅱ Ⅶ Ⅶ Ⅶ	須恵器	長頸壺				9.5		27	黒・白	並	灰	Rナデ・体下:ケズリ 底:Rヘラ切	Rナデ	右	
474	－	13I4・5・9 ・10・19・23	Ⅶ	須恵器	長頸壺				10.5		14	石・長・黒	堅	灰	Rナデ・底:ナデ	Rナデ	－	
475	－	9G11 10H9・10 10I13・17・19 ・22・10J25 11I15・25	Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ	須恵器	突帯付壺		－	－	－	－	－	長・黒	堅	外:暗灰～灰/内:灰	Rナデ	Rナデ	－	
476	－	10J22 11J2・3・4 13I2・16	Ⅶ	須恵器	横瓶		－	－	－	－	－	石・長	堅	外:暗灰/内:灰	平行タタキ	同心円文当て具	－	

土器観察表（15）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
477	－	9G21・22 10F19・23 10G1・2・7 11F5・8 12J2	Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ	須恵器	長甕		25.7			5		長・黒	堅	灰白	Rナデ・体:格子目タタキ	Rナデ・当て具	－	ヘラ記号「＊」
478	－ － － －	11J18 11K23 12L8 -	Ⅶ Ⅶ Ⅶ 排土	須恵器	長甕		29.0			8		海・黒・白	並	灰	Rナデ・格子目タタキ	Rナデ・同心円当て具	右	
479	－ －	11L14 11K23・24	Ⅲ Ⅶ	須恵器	長甕		33.2			4		長・黒	堅	灰	Rナデ・格子目タタキ	Rナデ・同心円当て具	－	
480	SK493 SX1 SX1 － － － － － － － － － － － － －	11G10 14H1 15I19 10F11 9F24・9G24 10F19・10G4 ・13・25・10H3 ・16・17・19 ・21・22・25 10I1・11G5 ・9・10・13 ・19・20・11H2 ・3・6・8 11I1・14・11J11 11L15・12K19 12M9・13I10 14I5・15K1	－ 下層 下層 Ⅱ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ	須恵器	長甕		－	－	－	－	－	長・黒	並	灰	格子目タタキ	上半:同心円当て具 下半:平行当て具	－	
481	－	9F17	Ⅶ	土師器	有台鉢		(32.8)			2		石・長・チ・雲・鉄	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ	Rナデ	－	
482	－	10F11	Ⅶ	土師器	有台鉢				13.8		4	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	ナデか		－	
483	－	11K7	Ⅶ	土師器	有台鉢				(17.3)		2	長・チ	堅	暗褐	Rナデ	Rナデ	左	
484	－	10F23	Ⅶ	土師器	鉢				9.6		7	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	ナデ	ナデ	－	
485	－	9D24	Ⅶ	土師器	鉢		11.4			4		石・長・チ	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ・ケズリ	Rナデ	－	内面漆付着
486	－	12L8	Ⅶ	土師器	鉢				15.2		9	石・長・チ・鉄	軟	浅黄橙	体:ケズリ・底:ナデ消し		－	
487	－	12N18	Ⅶ	土師器	仏鉢型		15.1	7.7	6.0	12	36	石・長・チ・海・黒	軟	浅黄橙	Rナデ・下半:ケズリ 底:R糸切	Rナデ	右	
488	－	12L1	Ⅶ	土師器	ミニチュア		8.2			10		石・長・雲・角	軟	浅黄橙	Rナデ・ミガキ	Rナデ・ミガキ	－	椀
489	－	10F11	Ⅶ	土師器	ミニチュア				3.5		24	石・長	軟	浅黄橙	Rナデ・底:Rヘラ切	Rナデ	右	甕
490	－	15K19	Ⅶ	土師器	ミニチュア				3.0		15	石・長・角	軟	橙	ナデ	ナデ	－	壺
491	－	13I8・9	Ⅶ	土師器	小甕	Ba	11.2			9		石・チ・雲	並	にぶい黄橙	Rナデ	Rナデ	－	
492	－	15L5	Ⅶ	土師器	小甕	Ba	12.8			9		石・長・チ・海・鉄	やや軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
493	－	13J15	Ⅶ	土師器	小甕	Ba	15.0			9		石・長	やや堅	にぶい黄褐	Rナデ	Rナデ	右	
494	－	14K7・8	Ⅶ	土師器	小甕	Ba	13.5			11		石・長・チ・鉄	軟	外:にぶい黄橙/内：浅黄橙	Rナデ	Rナデ	左	
495	－	13I9	Ⅶ	土師器	小甕	Ba	13.6			9		石・長・チ・海・鉄	やや堅	橙～黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
496	－	11I4	Ⅶ	土師器	小甕	Ba	13.8			13		石・長・チ	軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ・カキ目	－	
497	－	13I3	Ⅶ	土師器	小甕	Bb	(16.2)			1		石・長・チ・円礫	やや堅	黄橙	Rナデ・体:カキ目	Rナデ	左	
498	－	11I8	Ⅶ	土師器	小甕	Bc	13.2			8		石・長・チ・鉄・白	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
499	－	9F17	Ⅶ	土師器	小甕	Bc	10.2			6		石・長・チ	並	にぶい黄褐～にぶい褐	Rナデ	Rナデ	右	
500	－	9D13	Ⅶ	土師器	小甕	Bc	(15.9)			2		長・チ・鉄	軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ・カキ目	－	
501	－	13L13	Ⅶ	土師器	小甕	B			5.8		18	石・長・チ・角・鉄	やや堅	橙～浅黄橙	Rナデ・底:静止糸切りか	Rナデ	右	
502	－	11I16	Ⅶ	土師器	小甕	B			5.6		31	石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
503	－	13L14	Ⅶ	土師器	小甕	B			6.4		19	石・長・チ・角・鉄	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ・底:静止糸切	Rナデ	右	
504	－	11H20	Ⅶ	土師器	小甕	B			6.4		21	石・長・チ・鉄	やや堅	明赤褐～赤褐	Rナデ・底:静止糸切	Rナデ	右	

土器観察表（16）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
505	－ －	10H5・23 11G19	Ⅶ Ⅶ	土師器	小甕	B			7.7		36	石・長・海・鉄	並	浅黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
506	－	10I21	Ⅶ	土師器	小甕	B			7.4		15	石・長・チ・雲・海	やや軟	にぶい黄橙	Rナデ・底:R糸切	Rナデ	右	
507	－	12G20	Ⅶ	土師器	小甕	Ac	14.2			6		石・長・チ・角・海	やや軟	橙～黄橙	縦強いナデ・一部ケズリ	ヨコナデ	－	
508	－	12I16	Ⅶ	土師器	小甕	Ac	(17.0)			1		石・長・雲	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ・ケズリ	Rナデ	右	
509	－	11H4	Ⅶ	土師器	小甕	Ac	18.0			3		石・長・チ・海	軟	外:にぶい黄橙/内:灰白	縦ケズリ		－	
510	SB317-P25 SK280 － － － － － －	11K20 11K25 10J18 11J2・10・11・14 11K7・13・14・18 ・20・23・25 11L21・12K2・3 12L8	1・2層 Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ Ⅶ	土師器	甕		28.0			17		石・長・チ・鉄	やや軟	浅黄橙	口:Rナデ 体:平行タタキ	口:Rナデ・体:当て具	－	
511	－	10B15 10C16	Ⅶ Ⅶ	土師器	長甕	Ba1	20.4			15		石・長・チ・海・鉄	やや堅	橙	Rナデ・カキ目・平行タタキ	Rナデ・カキ目・当て具	－	
512	－	12M7	Ⅶ	土師器	長甕	Ba1	17.2			5		石・長・チ・角・海	やや堅	橙	Rナデ	Rナデ	－	
513	－	11L24	Ⅶ	土師器	長甕	Ba1	21.4			7		石・長・チ・角・海	やや堅	にぶい褐	Rナデ	Rナデ・カキ目	左	
514	－	12H12	撹乱	土師器	長甕	Ba1	24.4			6		石・長・チ・鉄	やや堅	黄橙	Rナデ	Rナデ	左	
515	－	10I13 11H10 11I3・4・8	Ⅶ Ⅶ Ⅶ	土師器	長甕	Ba1	25.8			6		石・長・角	並	にぶい黄褐	Rナデ	Rナデ	左	
516	－ －	13L25 13L20	Ⅶ 撹乱	土師器	長甕	Ba1	20.0			5		長・角・黒・鉄	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ・体:斜位工具痕	Rナデ	左	
517	－	10F19	Ⅶ	土師器	長甕	Ba1	19.0			7		石・長・チ・海	軟	外:にぶい黄橙/内:褐灰	Rナデ	Rナデ・カキ目	右	
518	－	13J13	撹乱	土師器	長甕	Ba1	23.0			3		チ・雲・角	やや堅	淡黄	Rナデ	Rナデ	－	
519	－	12K8	Ⅶ	土師器	長甕	Ba1	23.0			4		石・チ・角	軟	にぶい黄橙	Rナデ	Rナデ	左	
520	－	13I16	Ⅶ	土師器	長甕	Ba2	20.8			6		石・長・チ・角・海	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ	Rナデ	左	
521	－	13I8	Ⅶ	土師器	長甕	Ba2	21.4			9		石・長・チ・海・鉄	やや堅	橙	Rナデ	Rナデ	－	
522	－ －	10E11 10E6・12	Ⅶ 撹乱	土師器	長甕	Ba2	20.2			6		石・長・角	やや堅	にぶい赤褐	Rナデ	Rナデ	左	
523	－	12L15	Ⅶ	土師器	長甕	Bb	21.4			5		石・長・チ	軟	外:暗灰黄/内:灰黄	Rナデ	Rナデ	右	
524	－	11I2	Ⅶ	土師器	長甕	Bb	23.6			5		石・長・雲・海	やや堅	橙	Rナデ	Rナデ	左	
525	－	11K24	Ⅶ	土師器	長甕	Bb	21.2			9		石・長・チ・鉄	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ・カキ目	Rナデ・カキ目	左	
526	－	14M8	Ⅶ	土師器	長甕	Bb	20.4			4		石・長・チ	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	右	
527	－	10F8	Ⅶ	土師器	長甕	Bc	19.8			3		石・長・鉄	やや堅	にぶい黄褐	Rナデ	Rナデ	右	
528	Ⅶ Ⅶ	10H25 10I8	Ⅶ Ⅶ	土師器	長甕	Bc	23.8			8		石・長・雲・角	軟	橙	Rナデ	Rナデ	－	
529	－	11I8	Ⅶ	土師器	長甕	Bc	22.6			4		石・長・チ・鉄	やや堅	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	左	
530	－	12J12	Ⅶ	土師器	長甕	Bc	(30.9)			1		長・チ・雲	軟	浅黄橙	Rナデ・カキ目	Rナデ	右	
531	－	10C9 10D1	Ⅶ Ⅶ	土師器	長甕	B	－	－	－	－	－	石・長・チ	並	にぶい黄褐	Rナデ・平行タタキ	Rナデ・当て具・ナデ	左	
532	－	10I12・17 11H9	Ⅶ Ⅶ	土師器	長甕				丸底		36	石・長・チ	やや堅	外:にぶい黄褐/内:浅黄橙	平行タタキ	同心円当て具	－	
533	SK146 SX1 －	14L7 14E4 14K2・7	1層 下層 Ⅶ	土師器	長甕				丸底		36	石・長・鉄	やや軟	浅黄橙～にぶい橙	平行タタキ	粗いナデ	－	
534	－	14K1	Ⅶ	土師器	長甕	B	－	－	丸底	－	18	石・長・海・鉄	やや軟	浅黄橙～黄橙	Rナデ・体上:カキ目 体下:平行タタキ	Rナデ・体上:カキ目 体下:タタキ・同心円当て具	－	
535	－	10E1	Ⅶ	土師器	羽釜型	A	15.6			4		石・長・チ	軟	にぶい黄橙	ナデ・縦ケズリ	ナデ	右	
536	－	9D17・22・23	Ⅶ	土師器	羽釜型	B	－	－	－	－	－	石・長・チ	軟	浅黄橙	Rナデ	Rナデ	－	

土器観察表（17）

No.	遺構	グリッド	層位	種別	器種	分類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	口径残存率	底径残存率	胎土	焼成	色調	調整（外面）	調整（内面）	回転方向	備考
537	－	12J5	Ⅶ	土師器	羽釜型	B	－	－	－	－	－	石・長・チ	並	外：黄褐 内：浅黄橙	Rナデ		－	
538	－	10F18	Ⅶ	土師器	甑	B	18.4			3		石・長・チ・雲	やや堅	灰白	Rナデ	Rナデ	右	
539	－	11K7	Ⅶ	土師器	甑	B	(19.5)			2		石・長・チ・角・海	やや堅	淡黄	Rナデ・ケズリ	Rナデ	－	
540	－ －	11J14 11K7	Ⅶ Ⅶ	土師器	甑	B	19.6			6		石・長・チ・雲・海	やや軟	淡黄	Rナデか・ケズリ 口：ナデか	Rナデか	－	
541	－	12J2	Ⅶ	土師器	鍋	Ba	(39.0)			2		石・長・黒	やや堅	にぶい橙	Rナデ	Rナデ	－	
542	－	13I16	Ⅶ	土師器	鍋	Ba	36.9			4		石・長・チ・海	やや堅	外：黒褐/内：浅黄橙	Rナデ・カキ目 平行タタキ	Rナデ・ハケ目・当て具	－	
543	－	9F12・13	Ⅶ	土師器	鍋	Ba	37.1			4		石・長・チ・海	やや堅	外：にぶい褐/内：灰黄褐	Rナデ・平行タタキ カキ目	Rナデ・ハケ目	右	
544	－	13L17・22	Ⅶ	土師器	鍋	Ba	(32.6)			1		石・長・チ	並	浅黄橙	Rナデ・カキ目・ケズリ	Rナデ・カキ目	－	
545	－	11F20 11G17・19・24	Ⅶ Ⅶ	土師器	鍋	Ba	34.2			12		石・長・チ	並	にぶい黄橙	Rナデ・カキ目 平行タタキ	Rナデ・カキ目・同心円文当て具	－	
546	－	12L1	Ⅶ	土師器	鍋	Bb	38.0			3		石・長・チ・雲・角・円礫	やや堅	浅黄橙	Rナデ・縦方向のケズリ	Rナデ	右	
547	－	10I13	Ⅶ	土師器	鍋	Bb	39.2			4		石・長・チ・海	やや堅	にぶい黄橙	Rナデ・平行タタキ	Rナデ	－	
548	－	12H19 12I16・23	Ⅶ Ⅶ	土師器	鍋	Bb	(36.3)			1		石・長・チ・雲・海	やや堅	浅黄橙	Rナデ・平行タタキ	Rナデ・当て具	－	
549	－	13K10	Ⅶ	灰釉陶器	段皿		(13.5)			3		長・黒	堅	灰白	Rナデ・口：釉薬漬け掛け	Rナデ・口：釉薬付け掛け	－	輪花有、東濃産
550	－	13I1	Ⅶ	灰釉陶器	皿か				7.2		2	長・黒	堅	灰白	Rナデ・底：Rヘラ切	Rナデ	右	東濃産
551	－ －	11H10 10H25	Ⅱ Ⅶ	灰釉陶器	長頸壺		－	－	－	－	－	長・黒	堅	灰オリーブ	Rナデ・釉薬	Rナデ・釉薬	－	猿投産
552	－	12I17	Ⅶ	灰釉陶器	長頸壺		－	－	－	－	－	長・黒	堅	灰白	Rナデ・釉薬	Rナデ	右	猿投産
553	－ －	13I3 13J14・16	Ⅶ Ⅶ	灰釉陶器	長頸壺				11.4		3	長・黒	並	灰白	Rナデ・底：ケズリ	Rナデ	右	猿投産
554	－	9D24	Ⅱ	緑釉陶器	椀		－	－	－	－	－	砂	やや堅	土：橙/釉：濃緑	緑釉	緑釉	－	畿内産
555	－	11H11	Ⅶ	緑釉陶器	椀				6.2		28	長・チ	やや堅	土：橙/釉：濃緑	底：ケズリ		左	畿内産

土製品観察表

・円筒形土製品の場合、法量は土器と同様に口径、器高、底径を記載した。・欠損している場合、括弧の中に残長や最大の弦長を記載した。

No.	遺構	グリッド	層位	種別	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	胎土	色調	備考
556	－	11K14	Ⅶ	円筒形土製品	口径 15.6	器高 4.5	底径 16.7	石・長・雲	外:橙 内:黒褐	内外ナデ調整 内面工具痕 残存率３/36
557	－	14K14 11L24	Ⅶ Ⅶ	円筒形土製品	口径 21.4			石・長 ・雲・海	灰白	内外ナデ調整 内面工具痕 残存率３/36
558	SI5	13I22	1層	管状土錘	2.4	1.0	0.3	石	にぶい橙色	両端平坦
559	SI5	13I21	3層	管状土錘	3.3	1.1	0.5	石・チ	浅黄橙色	片側端部わずかに面
560	SK342	10E12	7層	管状土錘	2.8	1.3	0.4	石・長・チ	淡黄色	両端わずかに面
561	SK342	10E12		管状土錘	4.8	1.4	0.4	石・長・チ	にぶい橙色	両端平坦
562	SD3	14M17		管状土錘	(5.9)	1.5	0.3	石・長	橙色	両端欠損
563	SD7	13J24	1層	管状土錘	3.6	1.4	0.3	石・長	にぶい黄橙色	両端平坦
564	SD7	13J15	1層	管状土錘	4.6	2.0	0.4	石・長・チ	にぶい黄橙色	
565	SD7	14J7	1層	管状土錘	4.0	1.1	0.3	石・黒	にぶい黄橙色	両端平坦
566	SD7	13K1	1層	管状土錘	5.8	1.3	0.4	石	にぶい黄橙色	両端平坦
567	SD7	12K16	2層	管状土錘	6.5	1.5	0.4	石・長	黒褐色	両端わずかに面、側面欠損
568	SD7	13J5	1層	管状土錘	6.4	1.6	0.4	石・黒	灰黄色	両端平坦
569	SD7	13J19	2層	管状土錘	6.8	2.0	0.4	石・長	淡黄色	
570	SD7	14J7	1層	球状土錘	1.7	1.5	0.3	石・長	浅黄橙	
571	SD7	13J10	1層	球状土錘	2.0	1.7	0.3	石	灰白色	
572	SD7	13J10	1層	球状土錘	1.9	1.9	0.3	石・長	黒褐色	
573	SD7	13J10	1層	球状土錘	2.1	1.8	0.3	石・長	黒色	
574	SD7	14J7	1層	球状土錘	2.3	1.9	0.2	石・長・海	灰白色	
575	SD27	14I6		球状土錘	1.8	(1.5)	0.2	石・長	灰黄褐	
576	SD296	12I21	1層	球状土錘	1.7	1.6	0.4	石	灰白	完形
577	SX1	14H14	下層	管状土錘	(3.9)	1.1	0.5	石・長	にぶい黄橙色	片側端部欠損
578	SX1	11D17		管状土錘	(3.9)	1.4	0.3	石・長・黒	浅黄橙色	片側端部わずかに面 片側端部欠損
579	SX1	14H12	下層	管状土錘	5.0	1.6	0.4	石・長	にぶい黄橙色	両端平坦
580	－	13I19	Ⅶ	管状土錘	3.2	1.0	0.3	石・長・チ	にぶい黄橙色	
581	－	13I8	Ⅶ	管状土錘	3.5	1.0	0.2	長・海	浅黄橙色	両端平坦、切り離し痕
582	－	13I14	Ⅶ	管状土錘	3.8	1.0	0.3	石・長・チ	浅黄橙色	両端わずかに面
583	－	13I19	Ⅶ	管状土錘	3.2	1.4	0.4	石・長・チ	浅黄橙色	
584	－	10D2	Ⅶ	管状土錘	3.0	1.4	0.4	石・長・海	にぶい橙色	両端わずかに面
585	－	11H17	Ⅶ	管状土錘	3.1	1.7	0.5	石・長	浅黄色	
586	－	12I4	Ⅶ	管状土錘	3.5	1.4	0.5	石・長	浅黄橙色	両端平坦
587	－	13J24	Ⅶ	管状土錘	3.6	1.3	0.3	石・長	黒褐色	両端平坦
588	－	13J19	Ⅶ	管状土錘	4.7	1.0	0.3	石・長	浅黄橙色	両端平坦
589	－	14I3	Ⅶ	管状土錘	4.9	1.2	0.4	石・長	灰黄色	
590	－	13L24	Ⅶ	管状土錘	6.8	1.5	0.3	石・長	浅黄橙色	
591	－	13L23	Ⅶ	管状土錘	7.2	1.5	0.4	石・長・海	にぶい黄橙色	片側端部わずかに面
592	－	13L16	Ⅶ	管状土錘	7.4	1.7	0.3	石・長・海	橙色	両端わずかに面
593	－	12I17	Ⅶ	球状土錘	2.1	2.2	0.4	石・長	にぶい橙	
594	－	11J18	Ⅶ	球状土錘	2.1	2.3	0.3	石・長・チ	浅黄橙	

石製品観察表

・法量は残存部位の最大値を記載した。

No.	遺構	グリッド	層位	種別	長さ（cm）	最大幅（cm）	厚さ（cm）	色調	石材	備考
595	－	10G23	Ⅶ	石錘	4.4	4.3	3.8	にぶい黄橙色	砂岩	球状
596	－	10F18	Ⅶ	権状錘	4.2	3.6	1.2	褐灰色	砂岩	擦痕あり、成形痕か、孔径0.5cm
597	－	14K19	Ⅶ	砥石	4.3	2.0	1.4	灰白色	凝灰岩	方形、ややバチ状
598	－	11I24	Ⅶ	砥石	3.3	2.1	1.5	灰白色～明オリーブ灰色	凝灰岩	方形、ややバチ状
599	－	9C14・15	Ⅶ	砥石	6.1	4.0	2.4	灰白色	凝灰岩	バチ状
600	－	14L21	Ⅶ	砥石	8.3	3.3	2.8	暗褐色～灰白色	凝灰岩	方形、ややバチ状、被熱
601	－	12K1	Ⅶ	砥石	9.4	2.6	3.2	灰白色	凝灰岩	方形
602	－	9C2	Ⅶ	砥石	8.9	6.0	1.8	褐灰色	砂岩	バチ状、板状
603	－	10I21	Ⅶ	砥石	11.9	5.1	5.8	灰白色	凝灰岩	円礫状、金砥

木製品観察表

・法量は残存部位の最大値を記載した。

No.	遺構	グリッド	層位	種別	名称	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
604	SB317-P1	12K4		柱根		47.5	19.5	18.8	上端折損、加工痕明瞭、芯持割材、多角形状に成形
605	SB317-P4	12K1		柱根		34.5	15	11.5	上端折損、一部割れ、芯持丸木
606	SB317-P8	11K16		柱根		15	14.4	14.3	上部折損、芯持丸木、ブロック状に分裂
607	SB317-P11	11K19		柱根		55	19	17.5	上端折損、切削痕明瞭、芯持丸木、多角形状に成形、左右側溝が巡る
608	SB317-P14	12K9		柱根		19.3	11.6	7.6	底面切削痕、上端折損か、芯持材、腐食著しい
609	SB317-P20	11K11		柱根		31.2	17.9	14.6	底面切削痕、上端折損、芯持丸木
610	SB317-P21	11K12		柱根		14.4	14.3	12.4	底面切削痕、上端折損、芯持丸木
611	SB317-P22	11K13		柱根		30.1	17.1	13.8	底面2方向から切削、上端折損、裏面腐食か、芯持丸木か
612	SB348-P11	10D4		柱根		26.2	14.4	12.3	底面切削痕あり、上端折損、芯持丸木
613	SB348-P4A	10E1		柱根		80.9	12.5	10.8	底面2方向から切削、切削痕、上端折損(腐食か)、芯持丸木
614	SB608-P5	11G12		柱根		17.8	12	10.5	底面腐食、上端折損、芯持丸木、腐食著しい
615	P426	10E10		柱根		59.5	13.7	13.3	底面2方向から切削、上端折損、芯持丸木
616	－	16M11	Ⅱ	容器	漆桶	口径12.6	器高6.6	0.5	内外面厚く漆付着、塗膜のみ残存か、柾目か
617	－	13K10	撹乱	食事具ヵ	ヘラ状木製品	13	6.6	0.5	加工痕不明瞭、柾目
618	SX1	15H15	立木痕	祭祀具ヵ	斎串ヵ	14.4	1.4	0.8	表裏切削り痕、先端斜めに切削、柾目
619	－	11E3	Ⅶ	容器	曲物蓋板	17.4	3.3	0.9	穿孔あり、サクラ樹皮一部残存、柾目
620	－	11I16	Ⅶ	木製品	木簡	8.4	2.5	0.4	墨書、裏面切削痕あり、釈文「さけ□たし」か、板目
621	SE677	11D16	10層	木製品	弓状木製品	58.8	1.7	1.6	切削痕やや不明瞭、樹皮を剥いだ時のものか、芯持丸木

鍛冶関連遺物・金属製品観察表

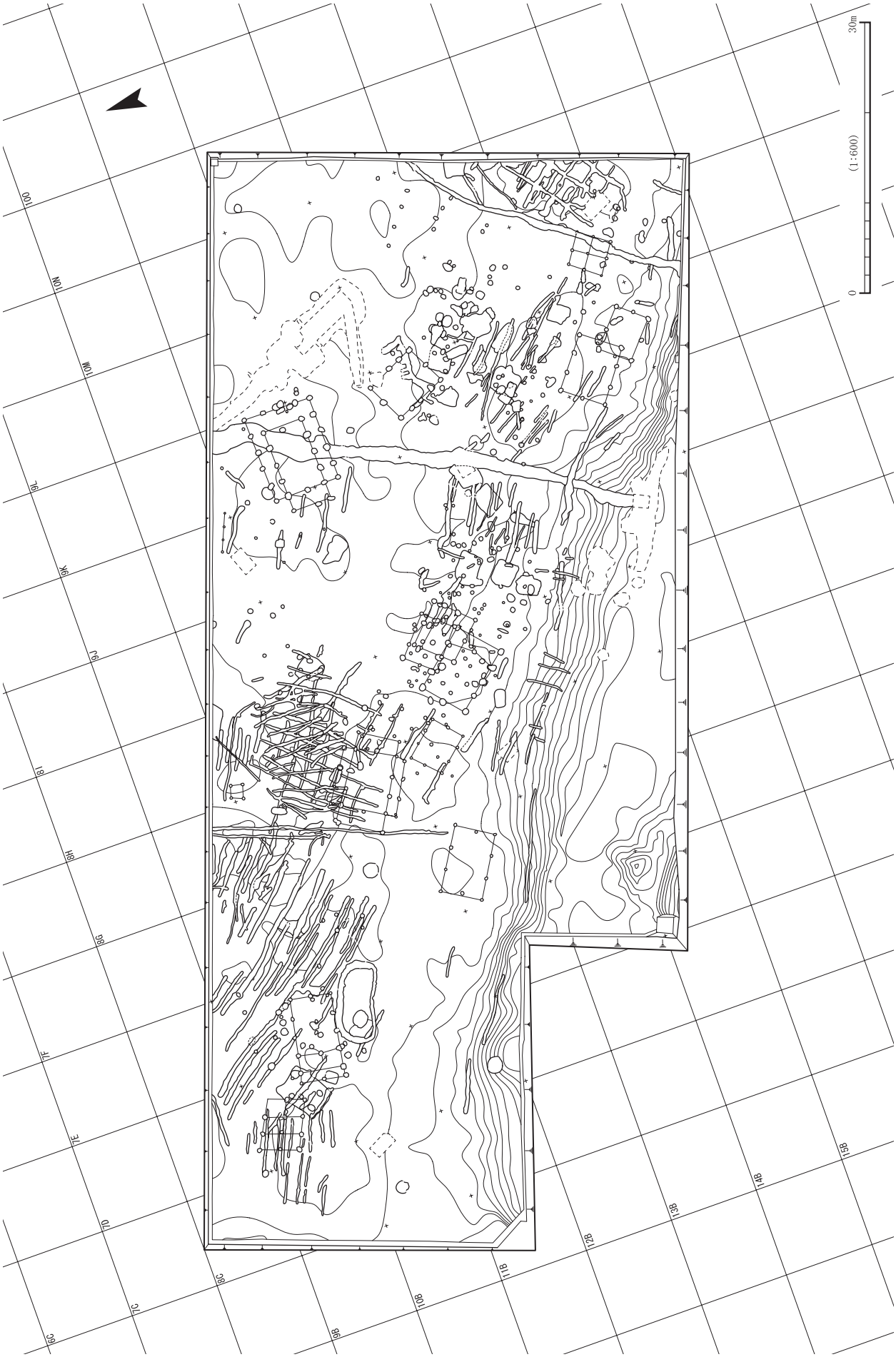
・欠損している場合、括弧の中に残存値を記載した。

No.	遺構	グリッド	層位	種別	名称	長さ（cm）	幅（cm）	孔径（cm）	備考
622	SB348-P3	10E2	1層	鍛冶関連遺物	羽口	(8.5)	6.9	2.4	先端部欠損、わずかに発泡
623	SX1	14E3	下層	鍛冶関連遺物	羽口	(5.8)	(5.7)	(1.8)	羽口先端部、発泡、滓化
624	SX1	14E3	下層	鍛冶関連遺物	羽口	(3.9)	(3.2)	(1.6)	羽口先端部、発泡、滓化
625	SD7 SD7	14J3	1層	鍛冶関連遺物	椀形鍛冶滓	(6.9)	8.6	厚さ2.7	上下面に微細な気泡多数
626	SI212	13I7	カマド底面	金属製品	巡方裏金具	2.9	厚さ0.4	0.18	表面緑青に覆われる、穿孔4ヶ所
627	表土	15K17		金属製品	北宋銭	径2.4		0.75	元祐通寶（初鋳年1086年）

図　　版

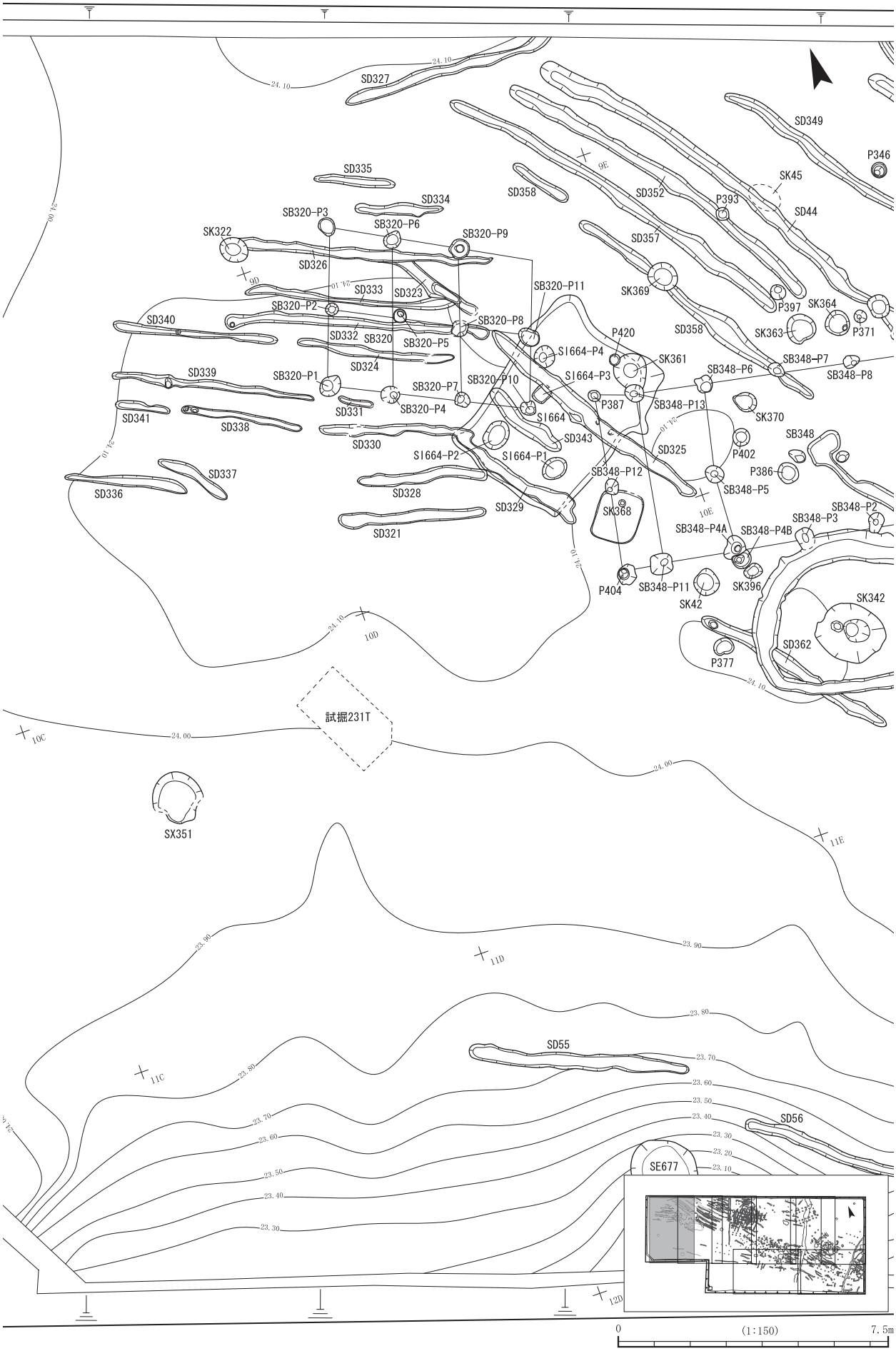
調査区全体図

図　版 1



30m
(1:600)
0
100
10N
10W
9L
9K
9J
8I
8H
8G
7F
7E
7D
7C
6C
8C
9B
10B
11B
12B
13B
14B
15B

調査区分割図（1）


SD327
SD349
P346
SD335
SD334
SD358
SD352
P393
SK45
SD44
SB320-P3
SB320-P6
SB320-P9
SK322
SD326
SD357
SD333
SD323
SB320-P11
SK369
P397
SK364
SB320-P2
SD340
SB320-P8
SD358
SK363
P371
SD332
SB320
SB320-P5
P420
SI664-P4
SK361
SD324
SB348-P6
SB348-P7
SB348-P8
SD339
SB320-P1
SB320-P10
SI664-P3
SB320-P7
P387
SB348-P13
SK370
SD331
SB320-P4
SI664
SD341
SD338
SD343
SB348
SD330
SD325
SI664-P2
SI664-P1
P402
SD337
SB348-P12
P386
SD336
SD328
SB348-P5
SD329
SK368
SB348-P2
SB348-P3
SD321
SB348-P4A
SB348-P4B
P404
SB348-P11
SK396
SK42
SK342
SD362
P377
試掘231T
SX351
SD55
SD56
SE677
0
(1:150)
7.5m

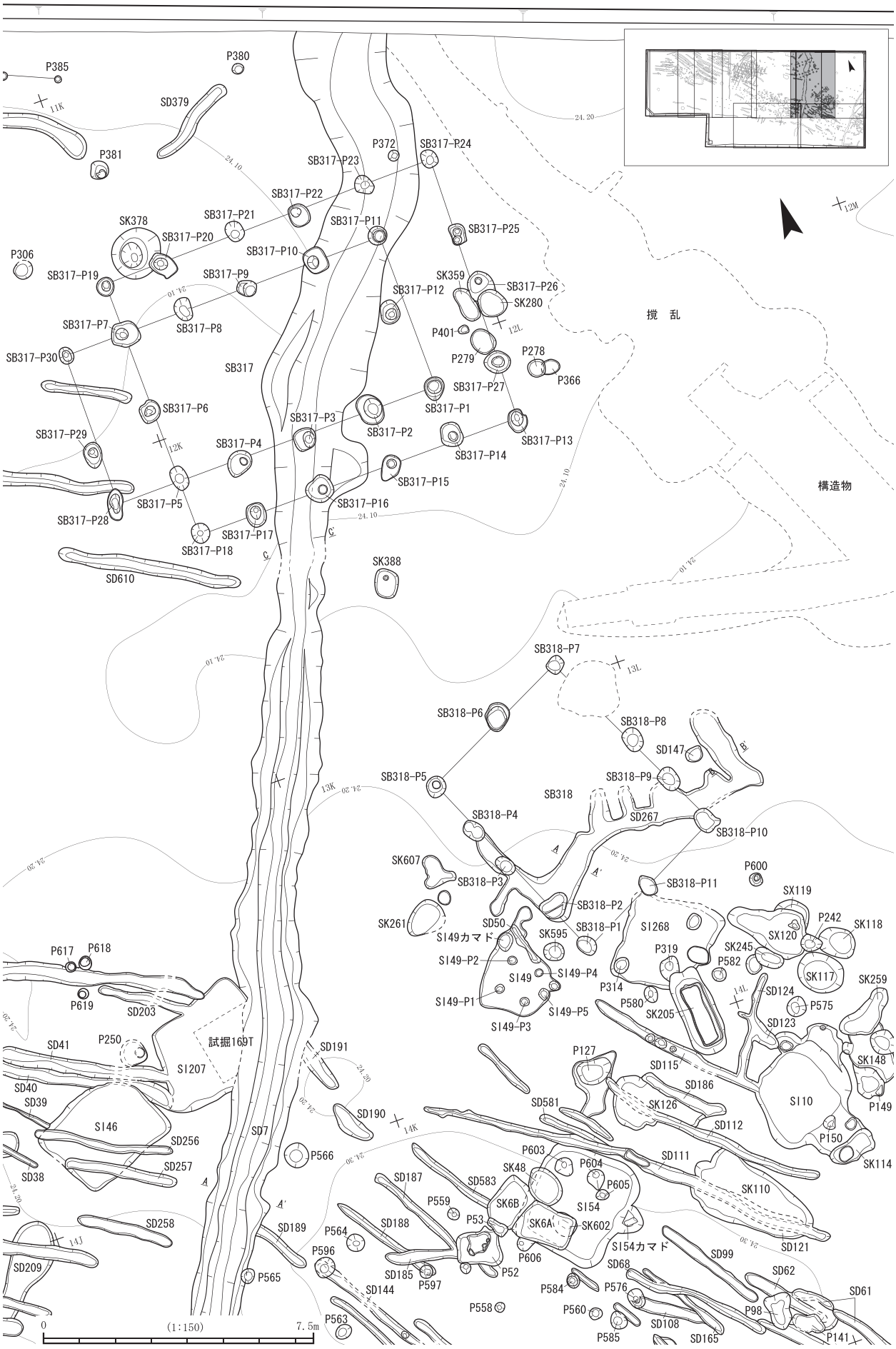
SD353
SD354
SD349
SD405
SD668
SD406
SD407
SD408
SD427
SD427
SD671
SD410
SD411
SD409
P346
P428
SK45
SD352
P393
SD44
SD357
SK369
P397
SK364
SK365
SX32
P420
SD358
SK363
P371
P43
SK361
SB348-P6
SB348-P7
SB348-P8
SB348-P9
P387
SB348-P13
SK370
SB348-P10
SD356
SD412
SD44
SD355
SI664
SD325
P402
SB348
P345
SD374
SD413
SB348-P12
P386
SD421
P376
P426
P424
SB348-P5
SK368
SB348-P2
P375
SD414
SD419
SB348-P4A
SB348-P4B
SB348-P3
SB348-P1
SD373
P422
SD374
SD347
P423
SD416
P404
SB348-P11
SK396
SD415
SK42
SK342
SD417
SD362
P425
P2
P377
SD60
SB316-P6
SB316-P5
SB316-P4
SB316-P3
SD56
SE677
0
(1:150)
7.5m

SD405
SD676
SD665
SD668
SD666
SD406
SD667
SD669
SD408
SD427
SD670
SD671
SD479
SD409
SD672
SD441
SD480
SK482
SD484
SD675
SD460
SD481
SD412
SX494
SD489
SD485
SD355
SD490
SD491
SD419
P422
P2
SE403
SB504-P471
SB504-P472
SB504
SB504-P473
SB504-P474
SI465
SD464
SD455
SD453
SD460
SD456
SD466
SD458
SD450
P457
SD434
SD447
SD439
SD478
SD446
SD442
SD449
SD443
SD448
SD451
SD487
SD441
SD447
SD488
SD440
SD486
SD444
SD461
SD434
SD439
SD436
SD467
SD462
SD438
SD440
SD432
P497
SD475
SB608-P20
SB608-P18
SB608-P19
SK512
SD496
SB608-P31
SD495
SB608-P22
SD437
SD469
SD432
SD435
SD433
SB608-P30
SB608-P21
SB608-P9
SB608-P7
SB608-P23
SD436
P503
SB608-P8
SB608-P10
SB608-P27
SD476
SB608-P24
SB608-P26
SD477
SK492
P526
SD521
P454
SB608-P6
SB608
P525
SD546
P519
P518
P657
SB608-P28
SB608-P11
SB608-P29
SD522
SB608-P5
SB608-P4
SB608-P3
SB608-P25
SB608-P15
SB608-P2
P656
SB608-P17
SB608-P16
SB608-P14
SB608-P1
P287
SB608-P13
SB608-P12
P654
SD481
SB550-P6
SD293
SB550-P7
SB574
SB550-P5
P652
SB550-P8
P651
P572
SD295
SB550
SB550-P9
SB316-P6
SB316-P7
SB550-P4
SB316-P8
SB550-P10
P653
SB550-P3
SB316-P9
SB550-P2
SB316-P5
SB550-P1
SB316
SB574-P4
SB316-P10
SD59
SB574-P3
SB316-P4
SB316-P3
SB316-P2
SB316-P1
SD11
0
(1:150)
7.5m

調査区分割図（4）

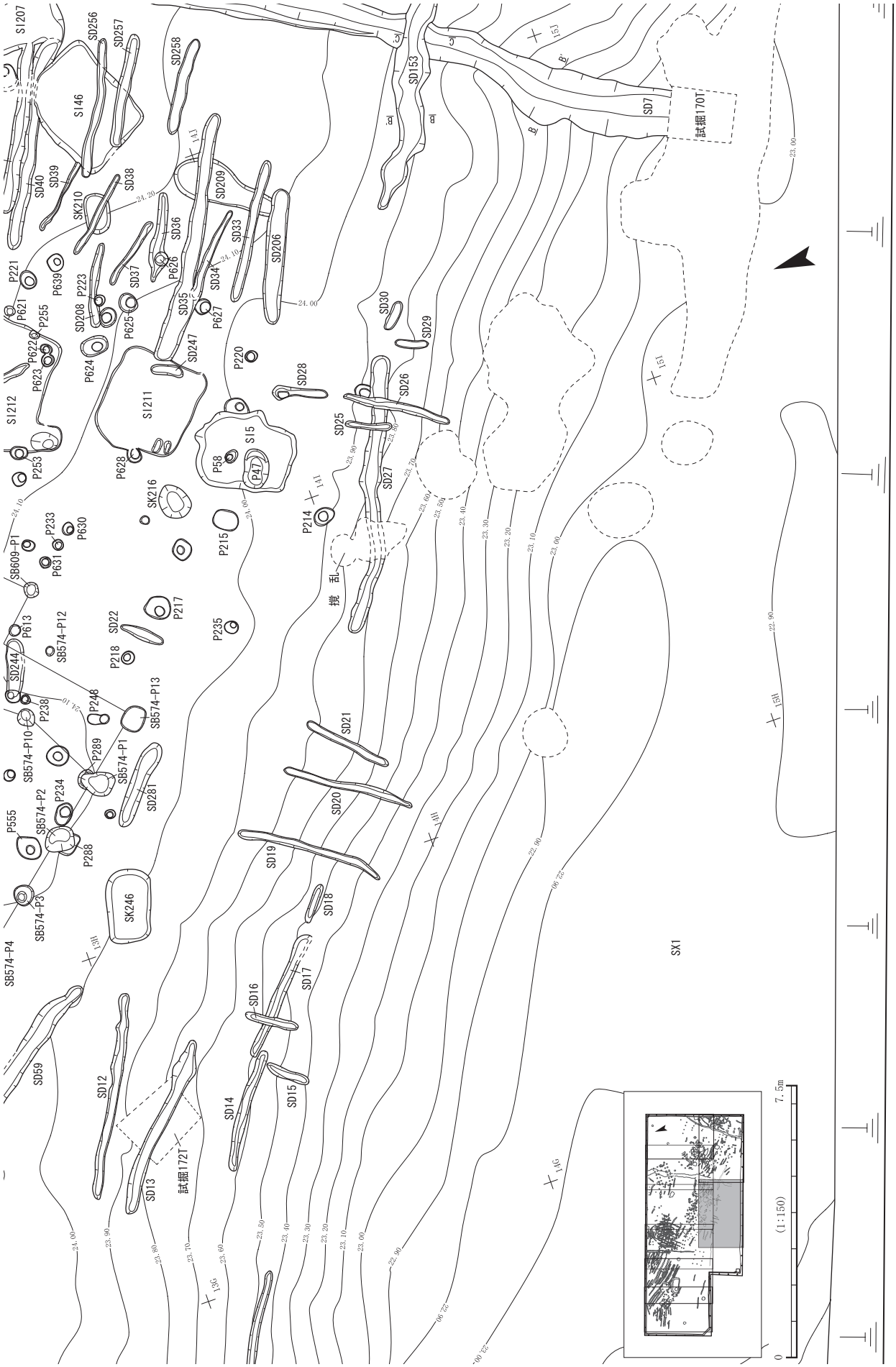
図　版5

SK678
P382
P383
P384
P385
11K
SD612
試掘229T
P389
P457
SD561
P548
11J
P398
P306
SX399
SB317-P19
P549
SD445
SD452
SD451
SD459
P542
P547
P390
SD510
P527
SB317-P30
SD436
SD509
P543
SD524
P391
SD462
SD445
P545
S1429
SD440
P544
SD463
SB317-P29
SD611
P392
SD430
P528
SD469
SD468
SX400
SD432
SB317-P28
SD433
SD431
12J
P454
P657
P658
12I
P659
P287
SB571-P6
SB571-P7
P265
P262
SB571-P5
P663
SB571-P8
SB609-P4
P635
SK573
P312
SB609-P5
SB571-P9
SD305
SB574-P6
P647
SB609-P9
SK594
(SX266)
P309
P652
P651
P634
SB571
P637
SD307
P648
SB574-P7
SB571-P10
SB609-P6
SB571-P4
SB609-P10
SD302
SB550-P9
SB574-P8
P570
P614
P642
SB609
P315
SB574-P9
SB609-P7
P653
SB574-P5
P643
SB571-P3
SD204
P617
P618
SB609-P3
P224
SD213
P227
P644
SB574
SB571-P2
SB571-P1
SD296
P633
P225
P616
SB574-P11
P230
SD8
P615
P619
P641
P240
SB609-P2
P231
P229
P226
P645
SB609-P8
P228
P620
SB574-P4
P640
13I
SD254
SD41
P555
SD244
P613
SB609-P1
P629
S1212
P621
P221
SB574-P10
P253
P623
P622
SD40
SB574-P3
SB574-P2
P238
P255
SD39
P234
SB574-P12
P631
P233
P639
P288
P630
SD208
P223
SK210
S146
P289
P248
P624
13H
SB574-P1
P218
SD22
P628
SK246
P625
SD37
SD38
SD281
SB574-P13
SK216
S1211
P217
P626
SD36
SD35
SD247
14J
P627
SD34
SD209
P235
P215
P58
SD33
P220
P47
S15
SD19
0
(1:150)
7.5m
SD206


P385
P380
SD379
P381
P372
SB317-P24
SB317-P23
SB317-P22
SB317-P21
SK378
SB317-P20
SB317-P11
SB317-P25
P306
SB317-P10
SB317-P19
SB317-P9
SK359
SB317-P26
SB317-P12
SK280
SB317-P7
SB317-P8
P401
SB317-P30
P279
P278
SB317
P366
SB317-P27
SB317-P6
SB317-P1
SB317-P3
SB317-P2
SB317-P29
SB317-P4
SB317-P13
SB317-P14
SB317-P15
SB317-P5
SB317-P16
SB317-P28
SB317-P17
SB317-P18
SD610
SK388
撹　乱
構造物
SB318-P7
SB318-P6
SB318-P8
SD147
SB318-P5
SB318-P9
SB318
SD267
SB318-P4
SB318-P10
SK607
SB318-P3
P600
SB318-P11
SX119
SB318-P2
SK261
SD50
SB318-P1
S1268
P242
SK118
S149カマド
SK595
SX120
P319
SK245
P617
P618
S149-P2
P582
S149
S149-P4
SK117
SK259
P314
SD124
P619
SD203
S149-P1
P580
P575
S149-P5
SK205
S149-P3
SD123
試掘169T
SD41
P250
SD191
P127
SK148
S1207
SD115
SD40
SD186
SD39
SD581
SK126
S110
P149
SD190
S146
SD112
SD256
SD7
P150
P566
P603
SD111
SK114
SD257
SK48
P604
SD38
SD187
SD583
P605
SK110
P559
SK6B
S154
SD258
SD189
P53
SK6A
SK602
SD188
P564
S154カマド
SD121
P596
P606
SD99
SD209
SD185
P52
SD68
SD62
P565
P597
P584
P576
SD61
SD144
P558
P560
P98
P563
SD108
P585
SD165
P141
0
(1:150)
7.5m

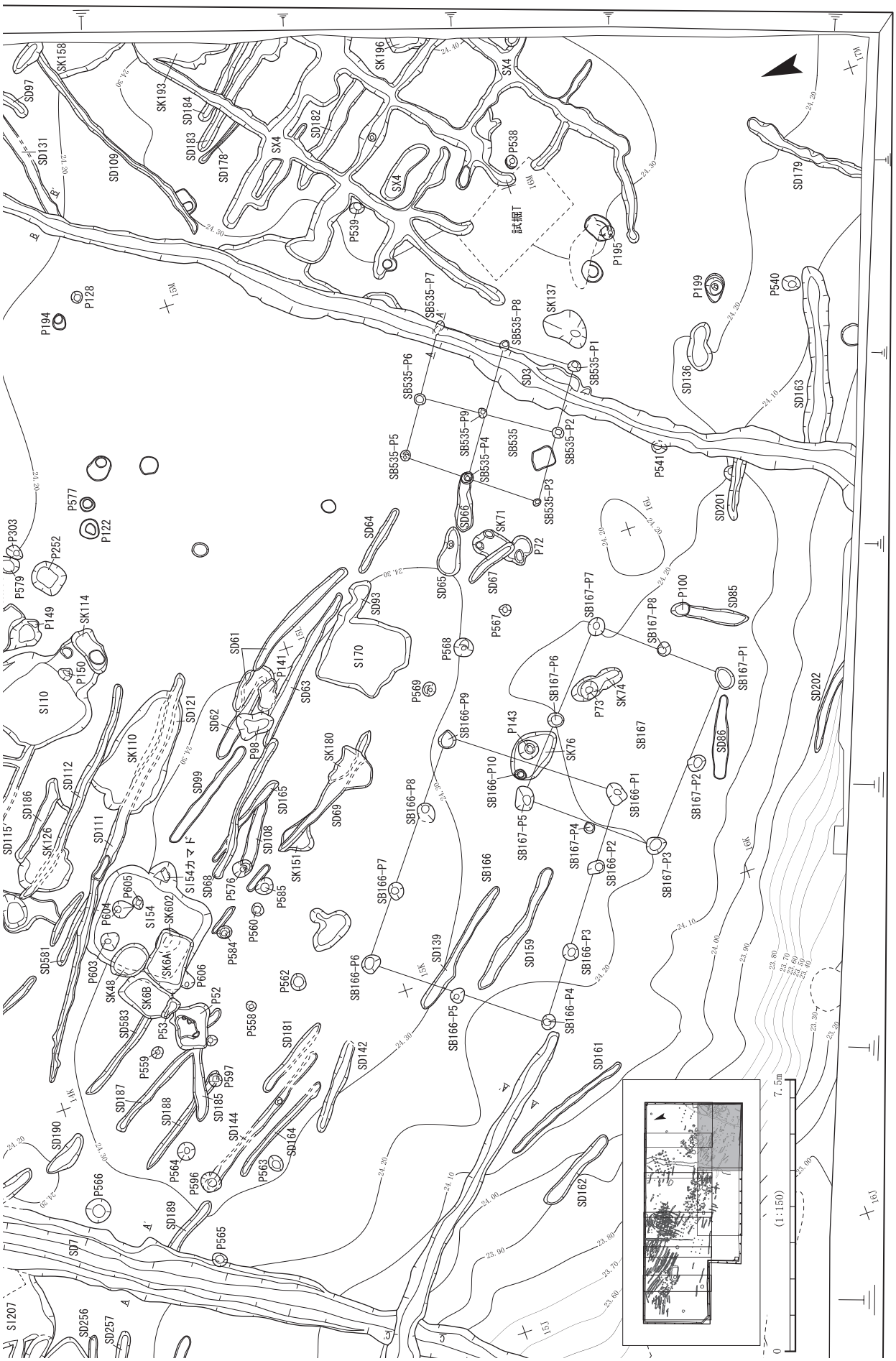
撹　乱
構造物
SK197
SK260
SB318-P8
SD147
SD267
SB318-P10
SB318-P11
P600
SX119
SI268
P242
SK118
SX120
P319
SK245
P582
SK117
SK259
SD124
P580
SK205
P575
SD123
SD115
SD186
SK126
SD112
SI10
P149
P150
SK114
SD111
SK110
SD121
SD99
SD62
SD61
P98
SD108
SD165
P141
SD273
P531
P537
P530
P529
P155
P156
P94
SK90
P134
P534
P533
P532
SK106
SK146
SK148
SK578
P579
P303
P252
P577
P122
SI130
SD152
SD97
SD131
SK158
P194
P128
SD109
SK193
SD183
SD184
SD178
SX4
12N
12M
13N
13M
13L
14N
14M
14L
15M
24.20
24.10
24.00
24.30
0
(1:150)
7.5m

調査区分割図（７）


SI207
SD256
SD257
SD258
SD153
SD7
試掘170T
SI46
SD40
SD39
SD38
SK210
SD209
SD36
SD33
SD206
P221
P639
P223
SD37
P626
SD34
P621
P255
SD208
P625
SD35
P627
SD30
SD29
P622
P623
P624
SD247
P220
SD28
SD26
SI212
SI211
SI5
SD25
P253
P628
P58
P47
SD27
SK216
P214
P233
P630
P215
SB609-P1
P631
P217
P235
P613
SD22
SB574-P12
P218
SD244
P238
P248
SB574-P13
SD21
SB574-P10
P289
SB574-P1
SD281
SD20
P234
SB574-P2
P555
P288
SD19
SK246
SD18
SB574-P3
SB574-P4
SD17
SD16
SD59
SD12
SD14
SD15
試掘172T
SD13
SX1
撹乱
(1:150)
0
7.5m

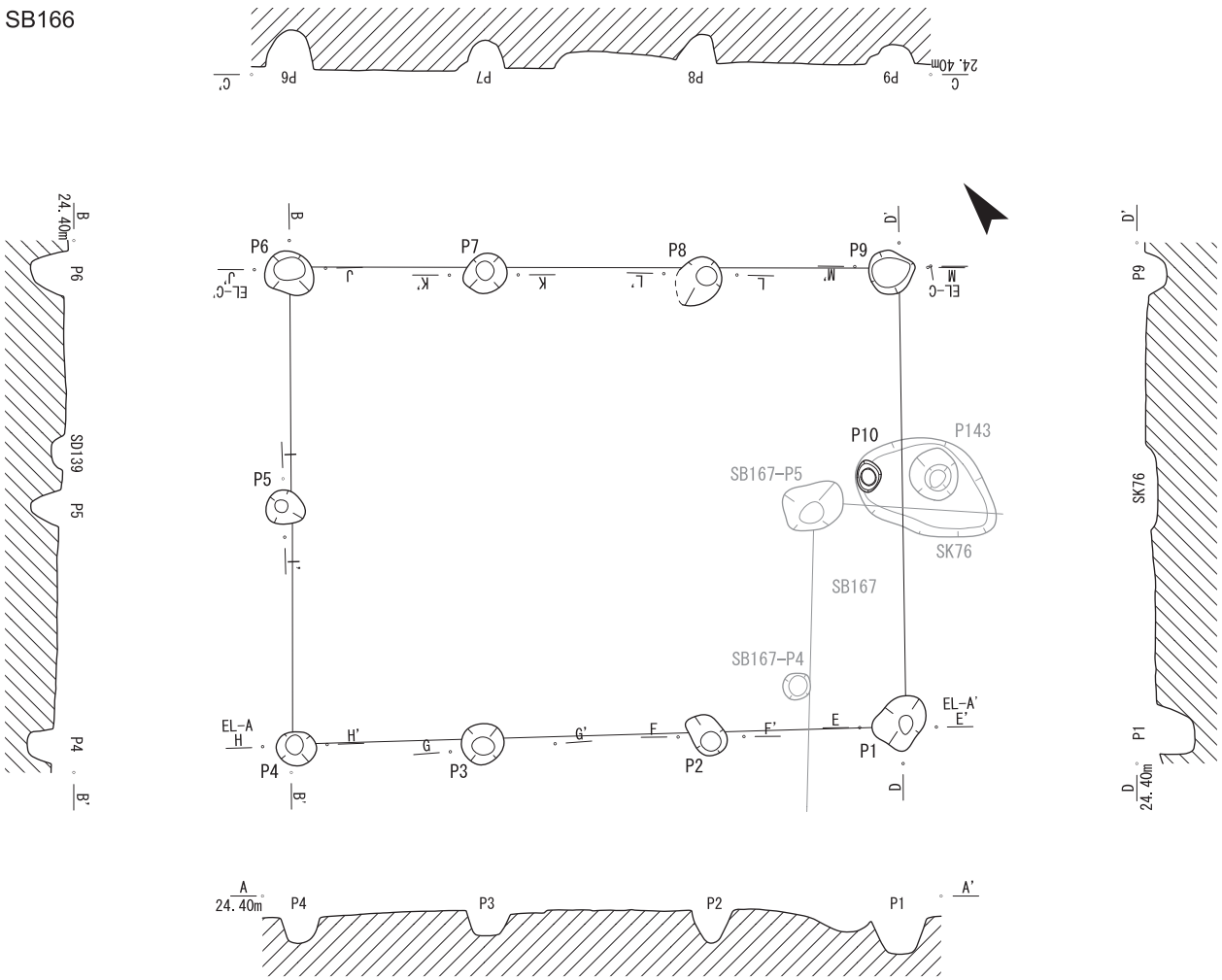
調査区分割図（8）

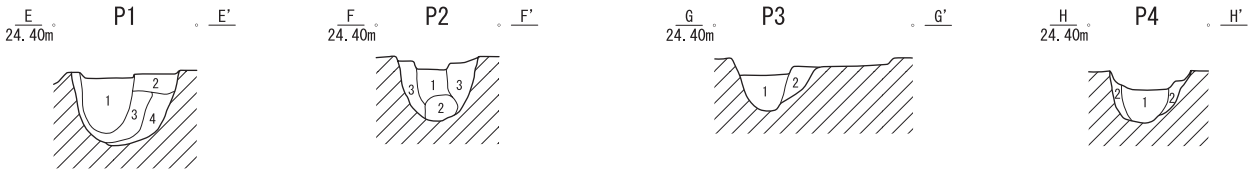
図　版 9



試掘T
SX4
SK158
SD97
SD131
SD109
SK193
SD184
SD183
SD178
SD182
SK196
P538
P539
P195
SD179
P199
P540
P128
P194
SB535-P7
SB535-P8
SK137
SB535-P1
SD3
SD136
SD163
SB535-P6
SB535-P9
SB535-P2
SB535-P5
SB535-P4
SB535
SB535-P3
P541
SD201
P577
P122
P303
P252
P579
P149
SK114
P150
S110
SD64
SD66
SK71
P72
SD65
SD67
SD93
P567
P568
P100
SD85
SB167-P7
SB167-P8
SB167-P1
SD202
SD61
P141
S170
SD63
P569
SB167-P6
P73
SK74
SD121
SD62
P98
SK110
SK180
SB166-P9
P143
SK76
SB167
SD86
SD112
SD186
SD99
SD165
SB166-P10
SB166-P1
SB167-P2
SD115
SK126
SD111
SD108
SD69
SB166-P8
SB167-P5
SB167-P4
SB167-P3
SB166-P2
SB166
SK151
S154カマド
SD68
P576
P585
P605
P604
S154
SK602
SB166-P7
SD581
P603
SK6A
P606
P584
P560
SD139
SD159
SB166-P3
SK48
SK6B
P52
P562
SB166-P6
SB166-P5
SB166-P4
SD583
P53
P558
SD181
SD142
SD161
P559
P597
SD187
SD188
SD185
SD144
SD164
SD190
P564
P596
P563
SD162
P566
SD189
P565
SD7
S1207
SD256
SD257
7.5m
(1:150)
0

SB166



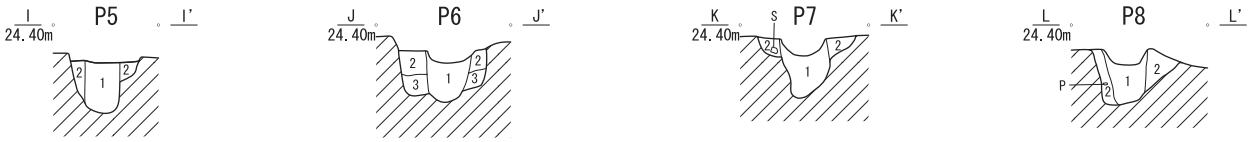


P1
1　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
2　灰黄色細砂　粘性・しまり弱
3　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色細砂混ざる
4　灰白色シルト　粘性・しまり強

P2
1　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
2　1層に灰黄色シルトブロック混ざる
3　灰白色シルト　粘性・しまり弱

P3
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

P4
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

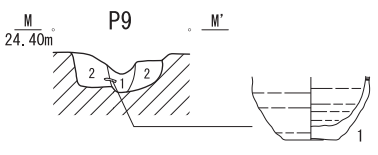


P5
1　黄灰色シルト　粘性・しまりやや強
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱

P6
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
3　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

P7
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

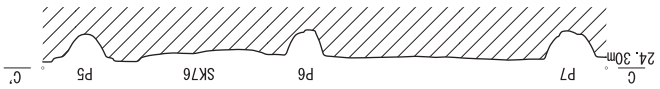
P8
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
　微細な炭化物粒多量に含む
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰白色シルトブロック混ざる

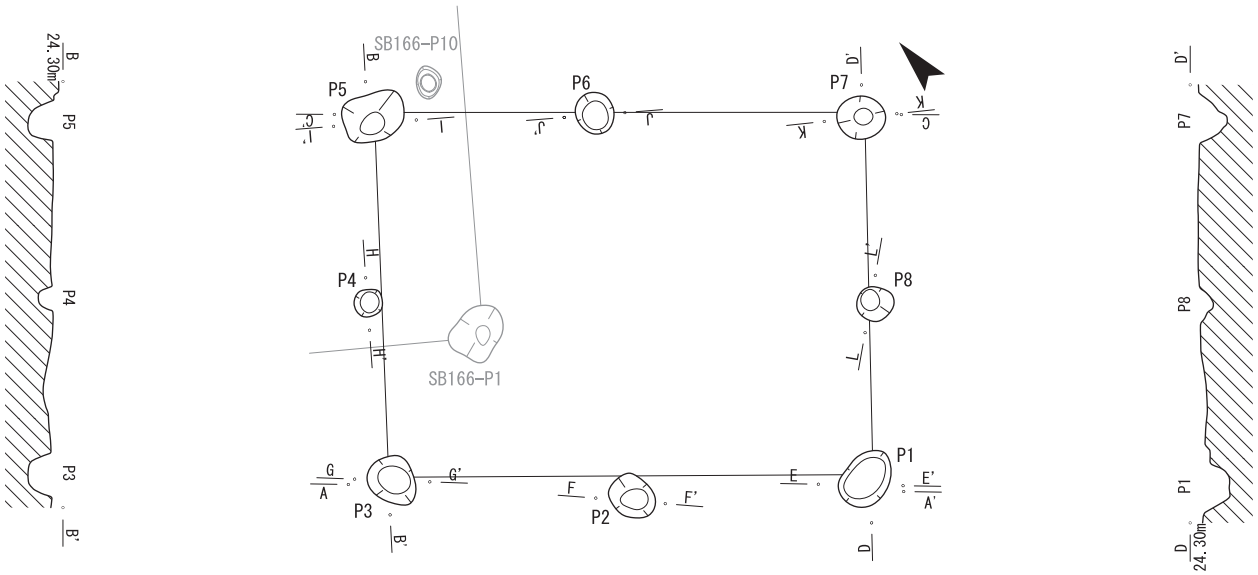


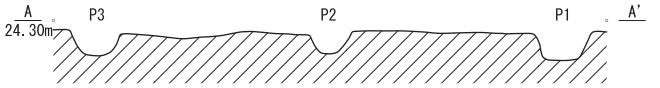
P9
1　黄灰色シルト　粘性・しまり強
2　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトブロック混ざる

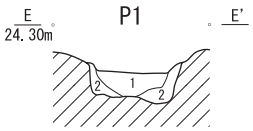
0　平面図・エレベーション図(1:80)　4m
0　断面図(1:40)　2m

SB167



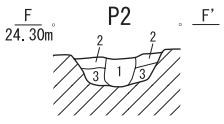






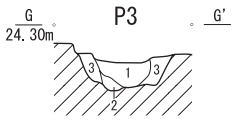
P1

1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　φ５㎜の炭化物粒多量に含む
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱



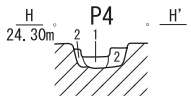
P2

1　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色シルトブロック混ざる
2　黄灰色シルト　粘性・しまり強
3　黄灰色シルト　粘性・しまり弱



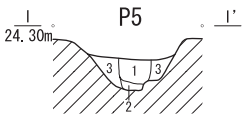
P3

1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
3　黄灰色シルト　粘性・しまり弱



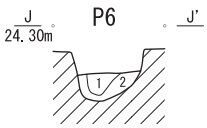
P4

1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱



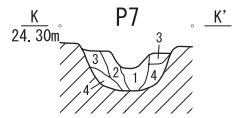
P5

1　褐灰色シルト　粘性・しまり強
2　１層に灰黄色シルトブロック混ざる
3　褐灰色シルト　粘性・しまり弱



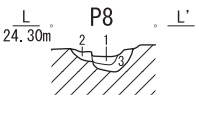
P6

1　褐灰色シルト　粘性・しまり強
2　灰白色シルト　粘性・しまり弱



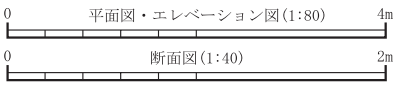
P7

1　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
2　黄灰色シルト　粘性・しまり強
3　灰白色シルト　粘性・しまり強
4　灰白色シルト　粘性・しまり弱

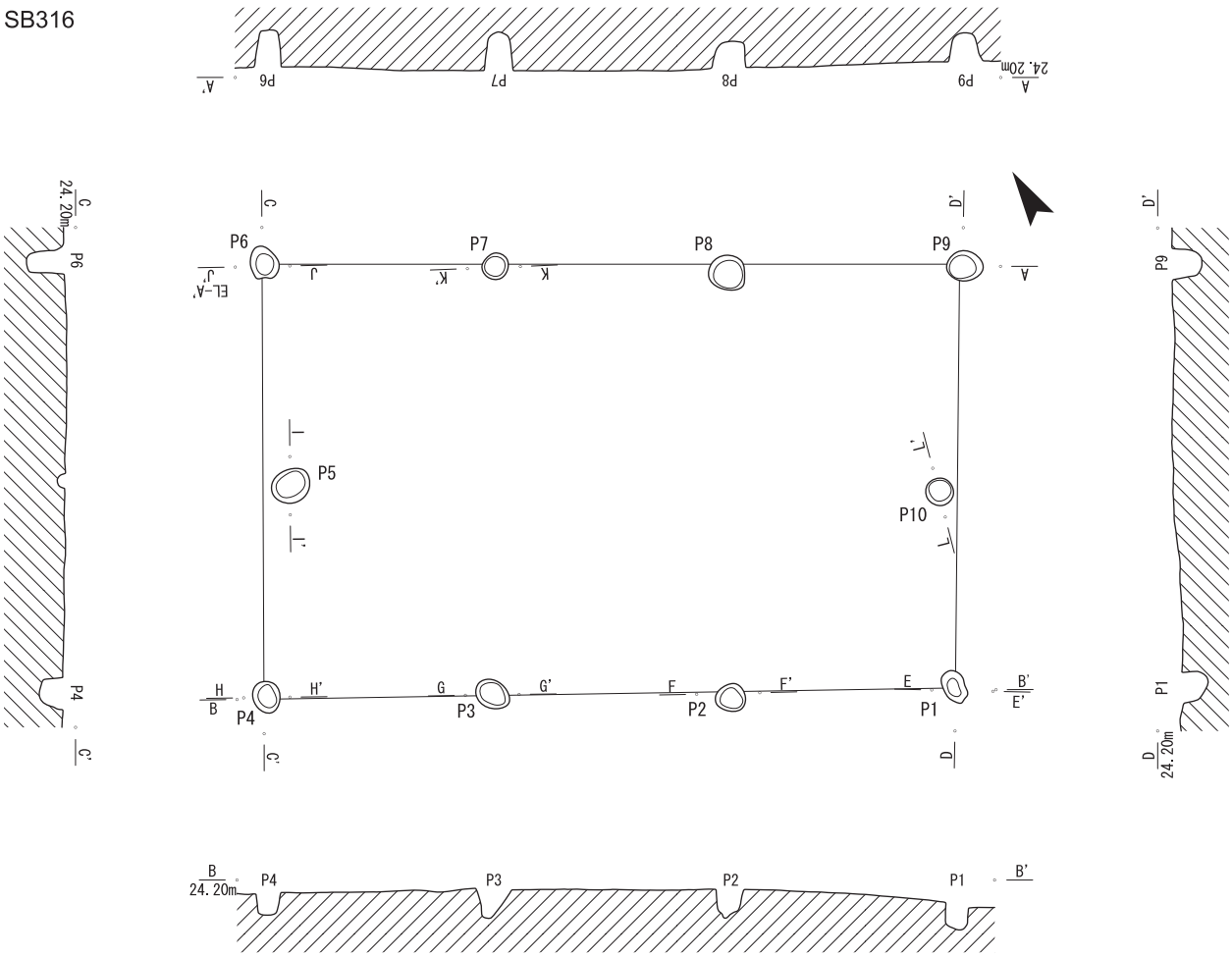


P8

1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
2　灰白色シルト　粘性・しまり弱
3　灰黄色シルト　粘性・しまり弱



SB316



P1
1　灰色シルト　粘性・しまり弱
2　灰黄色細砂　粘性・しまりやや強
3　灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色細砂ブロック混ざる

P2
1　灰色シルト　粘性・しまり強
2　灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色細砂ブロック混ざる

P3
1　灰色シルト　粘性・しまり強
2　灰白色シルト　粘性・しまり強

P4
1　褐灰色シルト　粘性・しまり強
2　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色細砂ブロック混ざる
3　灰～暗灰色シルト
　粘性・しまり強

P5
1　灰色シルト　粘性・しまり強
　灰白色シルト・灰黄色細砂
　ブロック混ざる
2　灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色細砂・1層ブロック混ざる
3　灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色細砂ブロック混ざる

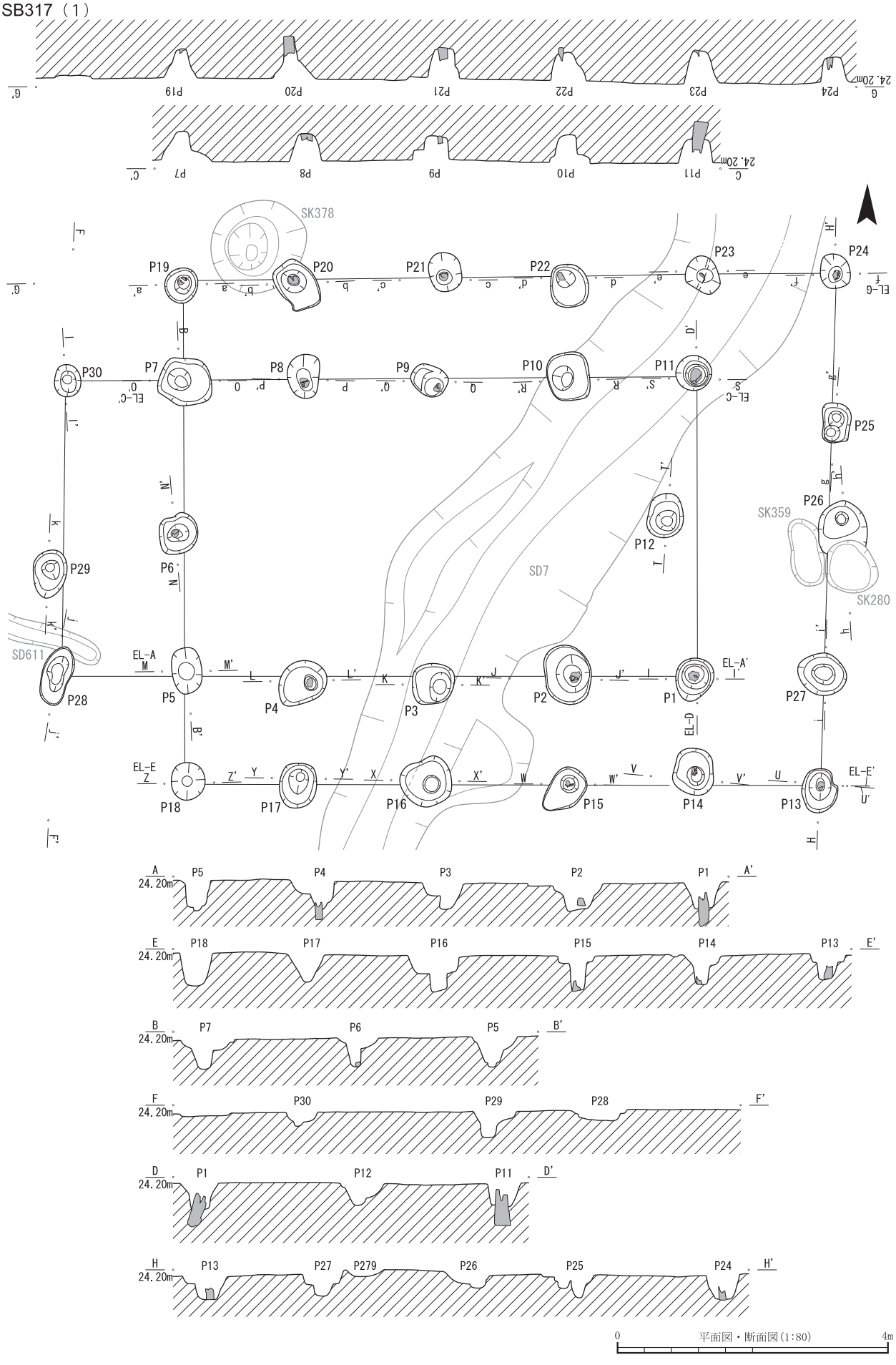
P6
1　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色細砂ブロック混ざる
2　灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色細砂ブロック混ざる

P7
1　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色細砂ブロック混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまり強

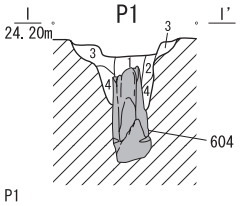
P10
1　灰色シルト　粘性・しまり強
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱

0　平面図・エレベーション図(1:80)　4m
0　断面図(1:40)　2m

SB317（1）

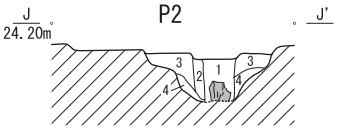

SK378
SK359
SD7
SD611
SK280
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P279
EL-A
EL-A'
EL-C
EL-C'
EL-D
EL-E
EL-E'
EL-G
EL-G'
24.20m
平面図・断面図(1:80)
0
4m

SB317（２）



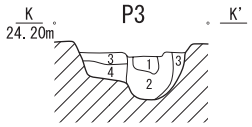
P1

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　φ10㎜の炭化物粒少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　黄褐色～オリーブ灰色砂少量混ざる
3　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　黄灰色シルト多量に混ざる
　黒褐色シルト少量混ざる
4　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり弱
　黄灰色シルト少量混ざる



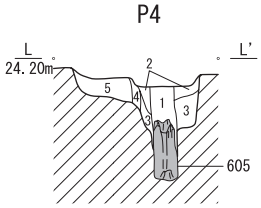
P2

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　黄褐色砂少量混ざる
2　黄褐色～オリーブ灰色シルト　粘性弱
　しまり強　黒褐色シルト少量混ざる
3　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　黄灰色シルト多量に混ざる　黒褐色シルト
　少量混ざる
4　オリーブ灰色シルト　粘性・しまり弱
　黄灰色シルト少量混ざる



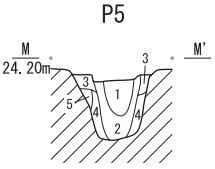
P3

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　黄褐色砂少量混ざる
2　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト多量に混ざる
3　灰オリーブ色シルト　粘性弱　しまり強
　黄褐色砂少量混ざる
　φ２㎜炭化物粒少量混ざる
4　灰色シルト　粘性弱　しまり強
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる



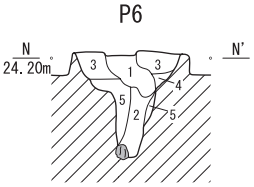
P4

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　オリーブ灰色シルト少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　オリーブ灰色シルト少量混ざる　黄褐色砂少量混ざる
3　オリーブ灰色シルト　粘性・しまり強
　黒褐色シルト多量に混ざる　黄褐色砂少量混ざる
4　オリーブ灰色シルト　粘性・しまり強
　黒褐色シルト少量混ざる
5　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　黄灰色シルト多量に混ざる



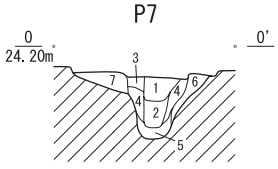
P5

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　オリーブ灰色シルト多量に混ざる
　φ４㎜の炭化物粒少量混ざる
2　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト多量に混ざる
　黄褐色砂少量混ざる
3　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　黄灰色シルト多量に混ざる
　黄褐色シルト少量混ざる
4　オリーブ灰色シルト　粘性・しまり弱
　黄灰色シルト少量混ざる
5　褐灰色シルト　粘性やや強　しまりやや強
　オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる



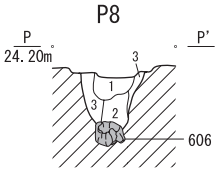
P6

1　黒色シルト　粘性・しまり強
　黄灰色シルト多量に混ざる
　φ７㎜の炭化物粒少量混ざる
　黄褐色砂少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　黄灰色シルト多量に混ざる　黄褐色砂
　多量に混ざる
3　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　黒色シルト少量混ざる　黄褐色砂少量混ざる
4　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　黄灰色シルト少量混ざる
5　黄褐色砂　粘性弱　しまり強
　黄灰色シルト多量に混ざる
　黒褐色シルト少量混ざる



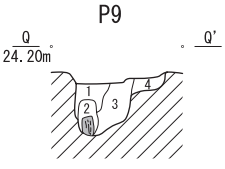
P7

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　黄褐色砂少量混ざる　φ１㎜の
　炭化物粒少量混ざる　オリーブ灰
　色シルト多量に混ざる
2　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　φ１㎜炭化物粒少量混ざる
3　オリーブ灰色シルト　粘性・しまり弱
　黒褐色シルト多量に混ざる
　φ１㎜の炭化物粒少量混ざる
4　オリーブ灰色シルト　粘性・しまり弱
　黒褐色シルト少量混ざる
　φ３㎜の炭化物粒多量に混ざる
　黄褐色砂少量混ざる
5　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト少量混ざる
6　オリーブ灰色砂　粘性なし　しまり強
　黄褐色砂少量混ざる
7　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　黄灰色シルト少量混ざる



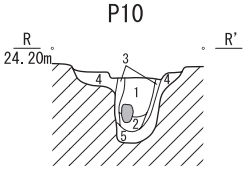
P8

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　オリーブ灰色シルト多量に混ざる
　φ５㎜の炭化物粒少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　φ５㎜炭化物粒少量混ざる
3　黄褐色～オリーブ灰色砂質土
　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト多量に混ざる



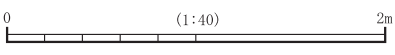
P9

1　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　オリーブ灰色シルト少量混ざる
　φ３㎜炭化物粒少量混ざる
　黄褐色砂少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　φ２㎜炭化物粒少量混ざる
3　黄褐色～オリーブ灰色砂質土
　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト多量に混ざる
4　オリーブ灰色シルト
　粘性弱　しまり強



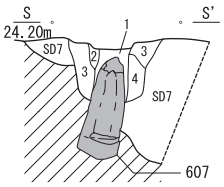
P10

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　オリーブ灰色シルト少量混ざる
　φ５㎜炭化物粒少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　オリーブ灰色シルト多量に混ざる
3　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　オリーブ灰色シルト多量に混ざる
　黄褐色砂少量混ざる
4　黄褐色砂質土　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト少量混ざる
5　オリーブ灰色シルト　粘性弱
　しまり強　黒褐色シルト少量混ざる



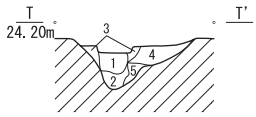
SB317（3）

P11



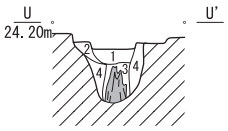
P11
1 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト少量混ざる
φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
2 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト多量に混ざる
φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
3 黄褐色～オリーブ灰色砂質土 粘性弱
しまり強 黒褐色シルト少量混ざる
黄灰色シルト少量混ざる
4 オリーブ灰色シルト 粘性・しまり弱
黒褐色シルト多量に混ざる

P12



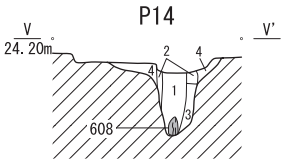
P12
1 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト少量混ざる
φ３㎜炭化物粒少量混ざる
2 オリーブ灰色シルト 粘性弱
しまり強 黒褐色シルト
多量に混ざる
3 黄褐色砂 粘性なし しまり強
黒褐色シルト少量混ざる
4 黄褐色シルト 粘性弱 しまり強
黄灰色シルト少量混ざる
5 オリーブ色シルト 粘性弱
しまり強 黄褐色砂少量混ざる

P13



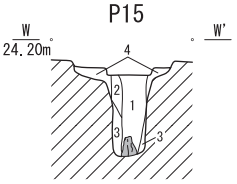
P13
1 黒褐色シルト 粘性・しまり強
オリーブ灰色シルト多量に混ざる
2 黄褐色砂 粘性なし しまり強
黒褐色シルト少量混ざる
3 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
4 黄褐色～オリーブ灰色シルト
粘性弱 しまり強 黒褐色シルト
少量混ざる

P14



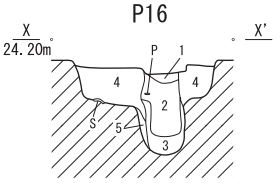
P14
1 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト少量混ざる
黄褐色砂少量混ざる
φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
2 黄褐色砂 粘性なし しまり強
黒褐色シルト少量混ざる
3 オリーブ灰色シルト 粘性弱
しまり強 黒褐色シルト
少量混ざる
4 黄褐色砂 粘性なし しまり強
黄灰色シルト多量に混ざる

P15



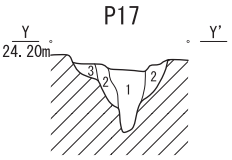
P15
1 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト少量混ざる
黄褐色砂少量混ざる
φ２㎜炭化物粒少量混ざる
2 黄褐色砂 粘性なし しまり強
黒褐色シルト多量に混ざる
3 オリーブ灰色シルト 粘性弱
しまり強 黒褐色シルト
少量混ざる
4 黄褐色砂 粘性なし しまり強
黄灰色シルト少量混ざる

P16



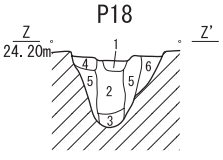
P16
1 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト少量混ざる
φ７㎜の炭化物粒少量混ざる
2 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト多量に混ざる
φ１㎜の炭化物粒少量混ざる
3 オリーブ灰色シルト 粘性弱
しまり強 黒褐色シルト少量混ざる
4 オリーブ灰色シルト 粘性弱 しまり強
黒褐色シルト少量混ざる 黄褐色砂少量混ざる
5 オリーブ灰色シルト 粘性弱 しまり強
黒褐色シルト少量含む

P17



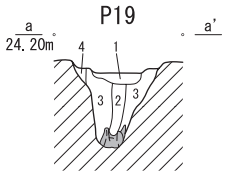
P17
1 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト多量に混ざる
黄褐色砂少量混ざる
2 黄褐色シルト 粘性弱 しまり強
黒褐色シルト少量混ざる
3 黄褐色砂 粘性なし しまり強
黄灰色シルト少量混ざる

P18



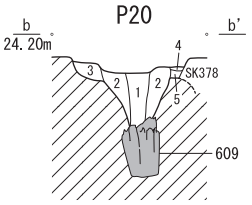
P18
1 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト少量混ざる
2 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト多量に混ざる
3 オリーブ灰色シルト 粘性弱
しまり強 黒褐色シルト多量に混ざる
4 黄褐色砂 粘性なし しまり強
黄灰色シルト多量に混ざる
5 黄褐色～オリーブ灰色シルト 粘性弱
しまり強 黒褐色シルト少量混ざる
6 黄褐色～オリーブ灰色シルト 粘性弱
しまり強 黒褐色シルト少量混ざる

P19

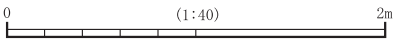


P19
1 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト・
φ７㎜の炭化物粒少量混ざる
2 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト少量混ざる
φ５㎜の炭化物粒多量に混ざる
3 オリーブ灰色シルト
粘性・しまり弱 黒褐色シルト
多量に混ざる 黄褐色砂少量混ざる
4 オリーブ灰色シルト 粘性弱
しまり強 黄褐色砂少量混ざる

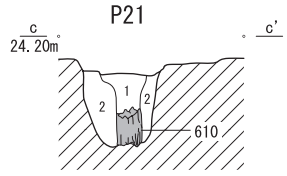
P20



P20
1 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト多量に混ざる
φ１㎜の炭化物粒少量混ざる
2 オリーブ灰色シルト 粘性弱
しまり強 黒褐色シルト少量
混ざる 黄褐色砂多量に混ざる
3 黄褐色砂 粘性なし しまり強
黄灰色シルト少量混ざる
4 黒褐色シルト 粘性強 しまり弱
オリーブ灰色シルト少量混ざる
φ５㎜炭化物粒少量混ざる
5 黄褐色砂 粘性なし しまり強
黒褐色シルト多量に混ざる

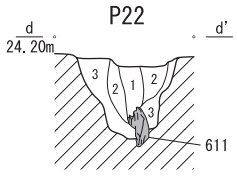


SB317（４）



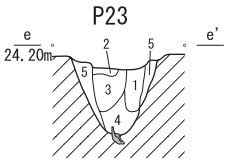
P21

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　　黄褐色砂少量混ざる
　　φ７㎜炭化物粒少量混ざる
2　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　　黒褐色シルト多量に混ざる



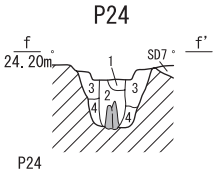
P22

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　　オリーブ灰色シルト少量混ざる
　　φ１㎜炭化物粒少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　　オリーブ灰色シルト多量に混ざる
　　φ１㎜炭化物粒少量混ざる
3　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　　黄褐色砂少量混ざる



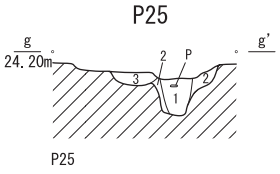
P23

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　　オリーブ灰色シルト少量混ざる
2　黄褐色砂質土　粘性弱　しまり強
　　黒褐色シルト少量混ざる
3　オリーブ灰色シルト　粘性弱
　　しまり強　黒褐色シルト多量に混ざる
4　オリーブ灰色シルト　粘性・しまり弱
　　黒褐色シルト少量混ざる
5　黄褐色～オリーブ灰色シルト　粘性弱
　　しまり強　黄灰色シルト少量混ざる



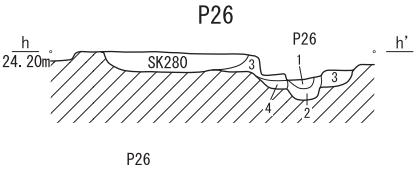
P24

1　黒褐色シルト　粘性・しまり弱
　　オリーブ灰色シルト多量に混ざる
2　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
3　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり強
　　黒褐色シルト多量に混ざる
　　黄褐色砂少量混ざる
4　オリーブ灰色シルト　粘性弱
　　しまり強　黄褐色砂少量混ざる



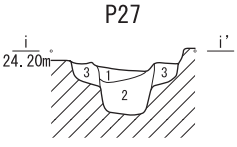
P25

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
2　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　　黒褐色シルト多量に混ざる
3　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　　黄褐色砂多量に混ざる
　　φ５㎜の炭化物少量混ざる



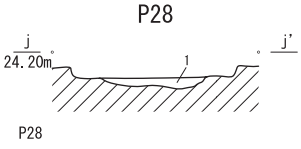
P26

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　　オリーブ灰色シルト少量混ざる
2　オリーブ灰色シルト　粘性弱
　　しまり強　黒褐色シルト少量混ざる
3　黄褐色砂質土　粘性弱　しまり強
　　黄灰色シルト多量に混ざる
4　黄褐色砂質土　粘性弱　しまり強



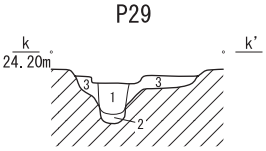
P27

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　　オリーブ灰色シルト少量混ざる
　　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
2　オリーブ灰色シルト　粘性弱
　　しまり強　黒褐色シルト多量に混ざる
　　黄褐色砂少量混ざる
3　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　　黄灰色シルト多量に混ざる



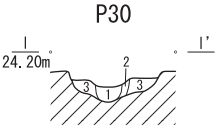
P28

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　　黄褐色砂多量に混ざる



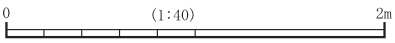
P29

1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　　オリーブ灰色シルト多量に混ざる
　　黄褐色シルト少量混ざる
2　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり強
　　黒褐色シルト少量混ざる
3　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　　黄灰色シルト少量混ざる

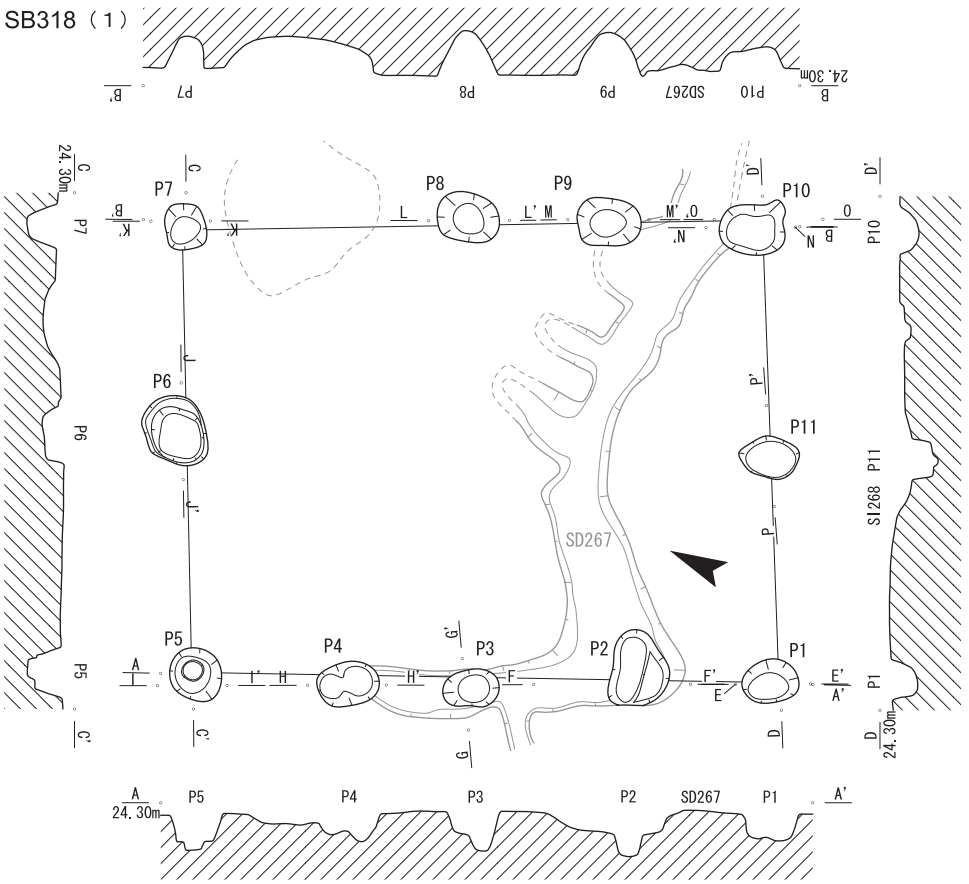


P30

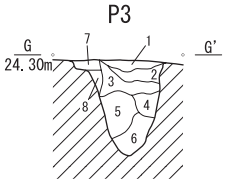
1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　　黄褐色砂少量混ざる
　　φ５㎜の炭化物粒少量混ざる
2　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　　黒褐色シルト少量混ざる
3　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　　黄灰色シルト少量混ざる



SB318（1）

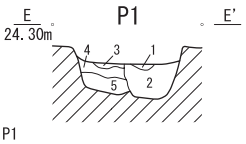


P3



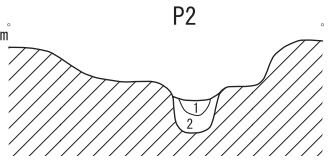
1　褐灰色シルト　粘性やや弱
　しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
2　褐灰色シルト　粘性やや弱
　しまりやや弱
　灰黄色シルト多量に混ざる
3　褐灰色シルト　粘性やや弱
　しまりやや弱
　φ３㎜の炭化物粒混ざる
4　２と同質
5　灰黄色シルト　粘性弱
　しまりやや弱
　灰色土わずか混ざる
6　灰色土　粘性やや強～中
　しまりやや弱～弱
　明青灰色シルト多量に混ざる
7　褐灰色シルト　粘性弱
　しまりやや弱　灰黄色シルト・
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
8　灰黄色シルト　粘性弱
　しまりやや弱
　褐灰色シルトわずか混ざる
　灰色土やや多く混ざる

P1



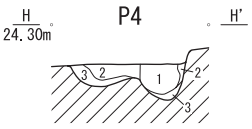
1　暗灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　褐灰色シルト混ざる　φ５㎜の炭化物粒混ざる
2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　灰黄色シルトブロック混ざる　φ５㎜の炭化物
　粒わずか混ざる
3　灰黄色シルト　粘性弱　しまり中～やや弱
　褐灰色シルトわずか混ざる
4　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまり中～やや弱
　明オリーブ灰色シルト多量に混ざる
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
5　３と同質

P2



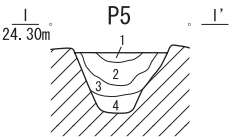
1　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物粒混ざる
2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルト混ざる

P4



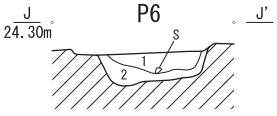
1　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　灰黄色シルト・φ10㎜の炭化物粒混ざる
2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　灰黄色シルトブロック多量に混ざる
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
3　灰黄色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　灰色土わずか混ざる
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる

P5



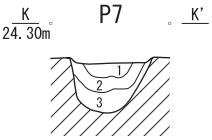
1　褐灰色シルト　粘性やや弱～中　しまりやや弱
　灰黄色シルト・φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる
2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　灰黄色シルト・φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
3　褐灰色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　灰黄色シルト多量に混ざる
4　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　灰黄色シルト・φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる

P6

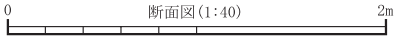


1　灰色シルト　粘性やや弱～中
　しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
2　灰黄色砂質土　粘性弱　しまり
　やや弱　褐灰色シルト混ざる

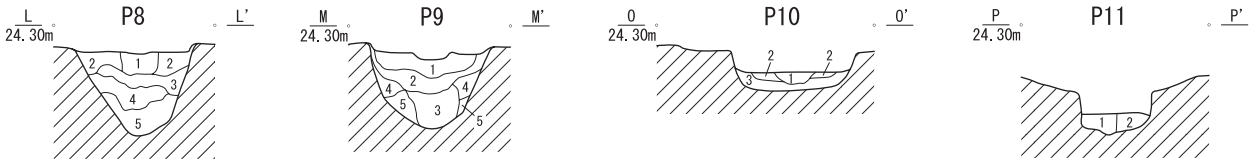
P7



1　明オリーブ灰色シルト　粘性弱
　しまりやや弱　褐灰色シルトわずか混ざる
2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルト・φ５㎜の炭化物粒混ざる
3　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルト混ざる
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる



SB318（2）



P8

1　灰黄色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
2　明オリーブ灰色シルト　粘性やや弱
　しまりやや弱　灰色シルト・φ５㎜の
　炭化物粒わずか混ざる
3　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルト多量に混ざる
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
4　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルト混ざる
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
5　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルト多量に混ざる

P9

1　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　灰黄色シルトブロック多量に混ざる
　φ10㎜の炭化物わずか混ざる
2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　青灰色シルトブロック混ざる
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
3　２と同質で青灰色シルトブロックやや多く混ざる
4　灰黄色砂質土　粘性弱　しまり弱
　褐灰色シルトわずか混ざる
5　明オリーブ灰色シルト　粘性やや弱
　しまりやや弱　褐灰色シルト混ざる

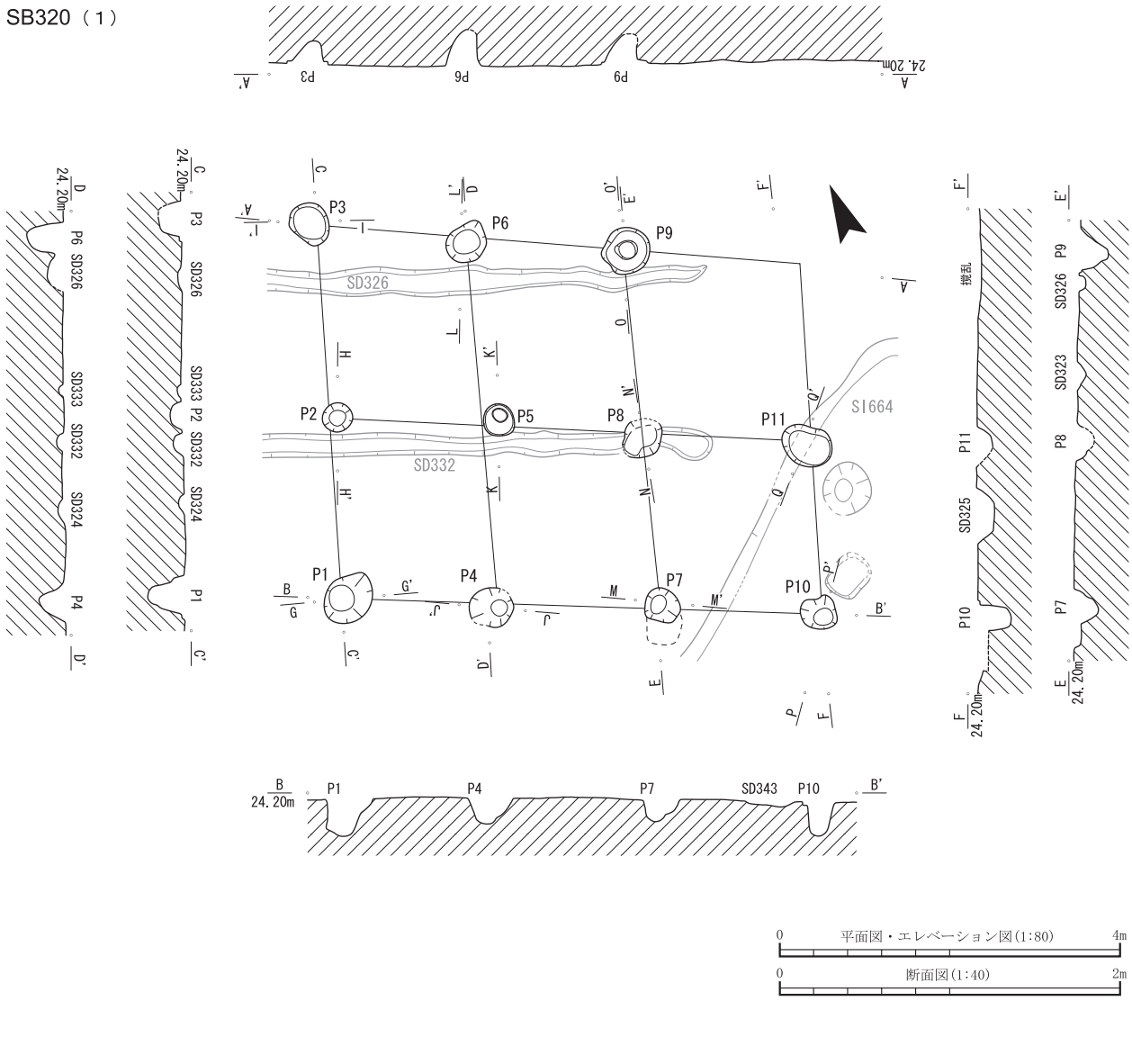
P10

1　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　灰黄色シルトブロック混ざる　φ５㎜の炭化物粒混ざる
2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　灰黄色シルトブロック混ざる
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
3　灰黄色シルト　粘性弱　しまり中～やや弱
　褐灰色シルトわずか混ざる

P11

1　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルトわずか混ざる
2　明オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　褐灰色シルトわずか混ざる

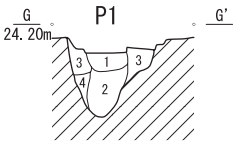
SB320（1）



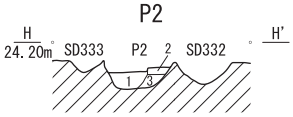
0　平面図・エレベーション図(1:80)　4m

0　断面図(1:40)　2m

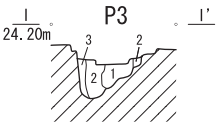
SB320（２）



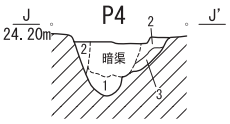
P1
1 褐灰色シルト 粘性・しまり強
明黄褐色シルトブロック混ざる
2 灰色シルト 粘性・しまり強
明オリーブ灰色シルトブロック混ざる
3 灰色シルト 粘性・しまり強
明黄褐色シルトブロック混ざる
4 灰色シルト 粘性・しまり強
明オリーブ灰色シルト混ざる



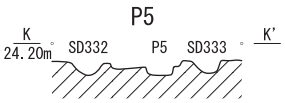
P2
1 灰白色シルト 粘性・しまり弱
2 灰黄色シルト 粘性・しまり弱
3 灰白色シルト 粘性・しまり弱
灰黄色シルトブロック混ざる

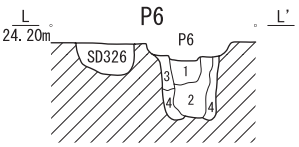


P3
1 灰色シルト 粘性・しまり強
オリーブ灰色シルトブロック混ざる
2 灰色シルト 粘性・しまり強
3 灰色シルト 粘性・しまり弱
灰黄色シルトブロック混ざる

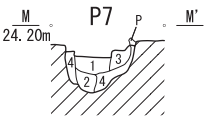


P4
1 灰色シルト 粘性・しまり強
微小な炭化物粒多量に混ざる
2 黄灰色シルト 粘性・しまり弱
φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる
3 黄灰色シルト 粘性・しまり弱

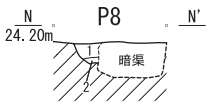




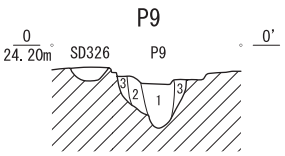
P6
1 灰白色シルト 粘性・しまり強
明オリーブ灰色シルトブロック混ざる
2 褐灰色シルト 粘性・しまり強
φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる
3 灰色シルト 粘性・しまり弱
灰黄色シルトブロック混ざる
4 灰色シルト 粘性・しまり強
灰黄色シルトブロック混ざる



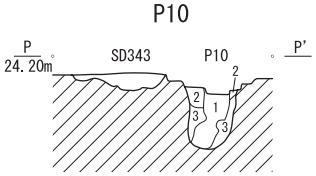
P7
1 灰色シルト 粘性・しまり強
明オリーブ灰色シルトブロック混ざる
2 褐灰色シルト 粘性・しまり強
灰黄色シルトブロック混ざる
3 １に類似し灰黄色シルトブロック混ざる
4 灰黄褐色シルト 粘性・しまり弱



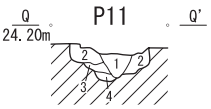
P8
1 灰色シルト 粘性・しまり強
灰黄色シルトブロック混ざる
2 灰白色シルト 粘性・しまり強



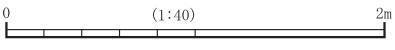
P9
1 黒褐色シルト 粘性・しまり強
層下部に微小な炭化物粒わずか混ざる
2 １に類似し灰白色シルトブロック
多量に混ざる
3 灰白色シルト 粘性・しまり強



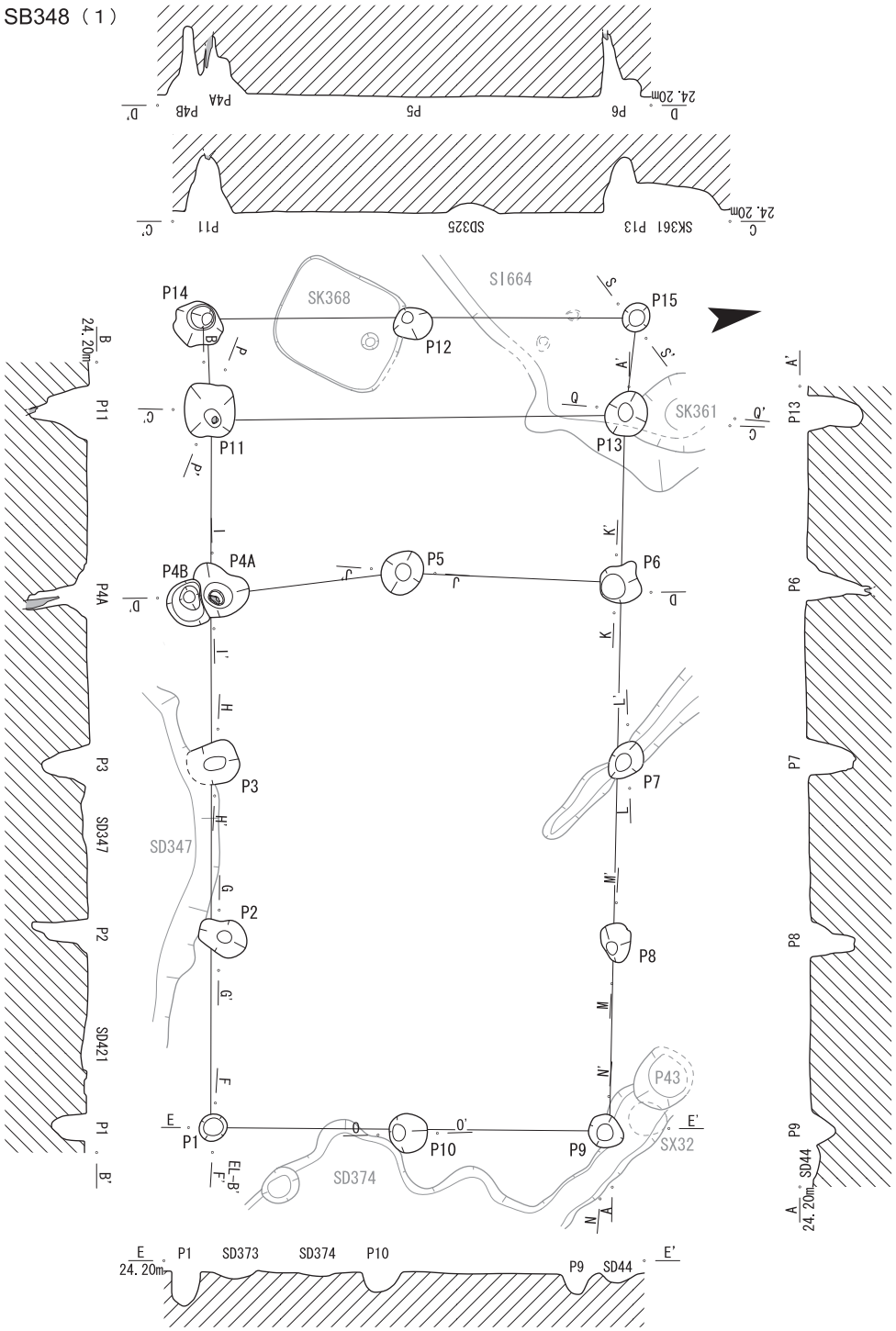
P10
1 灰色シルト 粘性・しまり強
微小な炭化物粒多量に混ざる
2 灰色シルト 粘性・しまり強
明オリーブ灰色シルトブロック混ざる
3 明オリーブ灰色シルト
粘性・しまり弱
灰色シルトブロック混ざる

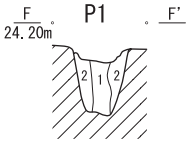


P11
1 灰色シルト 粘性・しまり強
灰白色シルトブロック混ざる
2 黄灰色シルト 粘性・しまり強
3 黄灰色シルト 粘性・しまり強
灰色シルトブロック混ざる
4 ３に灰黄細砂混ざる



SB348（1）

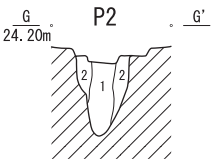




P1

1　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロックわずか混ざる

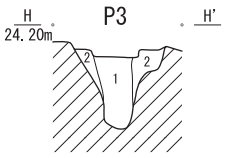
2　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる



P2

1　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック混ざる　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる

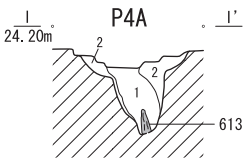
2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　灰黄砂混ざる　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる



P3

1　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック混ざる　φ５㎜の炭化物わずか混ざる

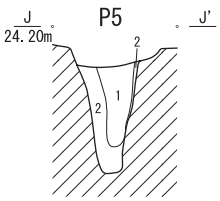
2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　灰黄色砂混ざる　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる



P4A

1　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック・φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる

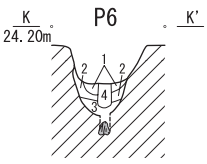
2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる



P5

1　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック混ざる　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる

2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　灰黄色砂混ざる　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる　φ５㎜の炭化物わずか混ざる



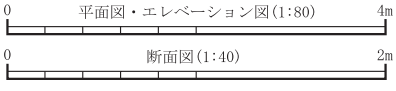
P6

1　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる　明オリーブ灰色シルトブロック混ざる

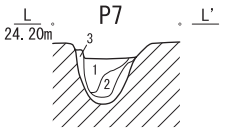
2　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる

3　黒色シルト　粘性やや弱～中　しまり弱　明オリーブ灰色シルトブロックわずか混ざる

4　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまり弱　φ５㎜の炭化物わずか混ざる　明オリーブ灰色シルトブロック混ざる

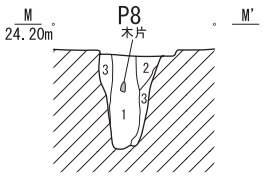


SB348（２）



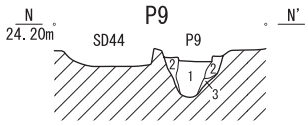
P7

1　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
2　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色ブロック多量に混ざる
3　明オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり弱　褐灰色シルトわずか混ざる



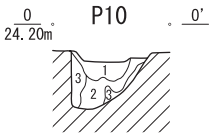
P8

1　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック混ざる
2　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる
3　褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる



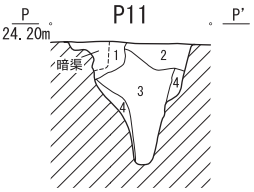
P9

1　黒褐色～褐灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルト混ざる
2　黒褐色～褐灰色シルト　粘性やや弱　明オリーブ灰色シルト多量に混ざる
3　明オリーブ灰色シルト　粘性弱　褐灰色シルトわずか混ざる



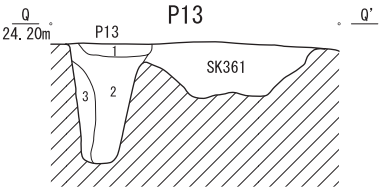
P10

1　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロックわずか混ざる　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
2　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック混ざる　φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる
3　褐灰色シルト　粘性弱　しまり弱　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる



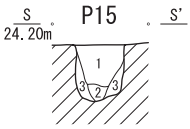
P11

1　褐灰色シルト　粘性弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック混ざる
2　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　φ30㎜の炭化物粒わずか混ざる　灰黄色シルト混ざる
3　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトわずか混ざる　φ50㎜炭化物粒わずか混ざる
4　明オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまりやや弱　黒褐色シルト混ざる



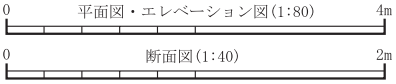
P13

1　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　灰黄色シルトブロックわずか混ざる　φ50㎜の炭化物粒多量に混ざる
2　黄灰色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック混ざる
3　２に類似し明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる

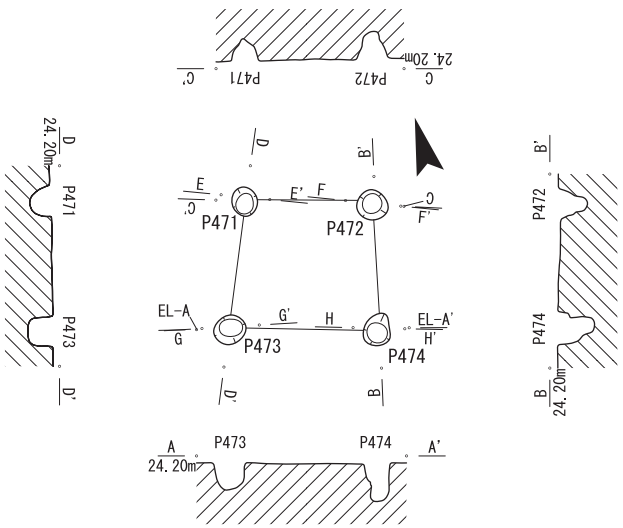


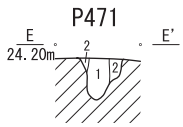
P15

1　黒褐色シルト　粘性・しまり強
2　１層土に灰白色シルトブロック多量に混ざる
3　灰白色シルトと黒褐色シルトがマーブル状に混ざる



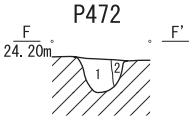
SB504





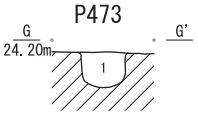
P471

1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり弱　灰オリーブ色砂多量に混ざる
2　灰オリーブ色砂　粘性なし　しまり強　黒褐色シルト多量に混ざる



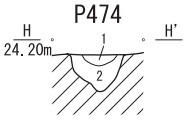
P472

1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり弱　灰オリーブ色シルト少量混ざる
2　灰オリーブ色砂　粘性なし　しまり弱　黒褐色シルト少量混ざる



P473

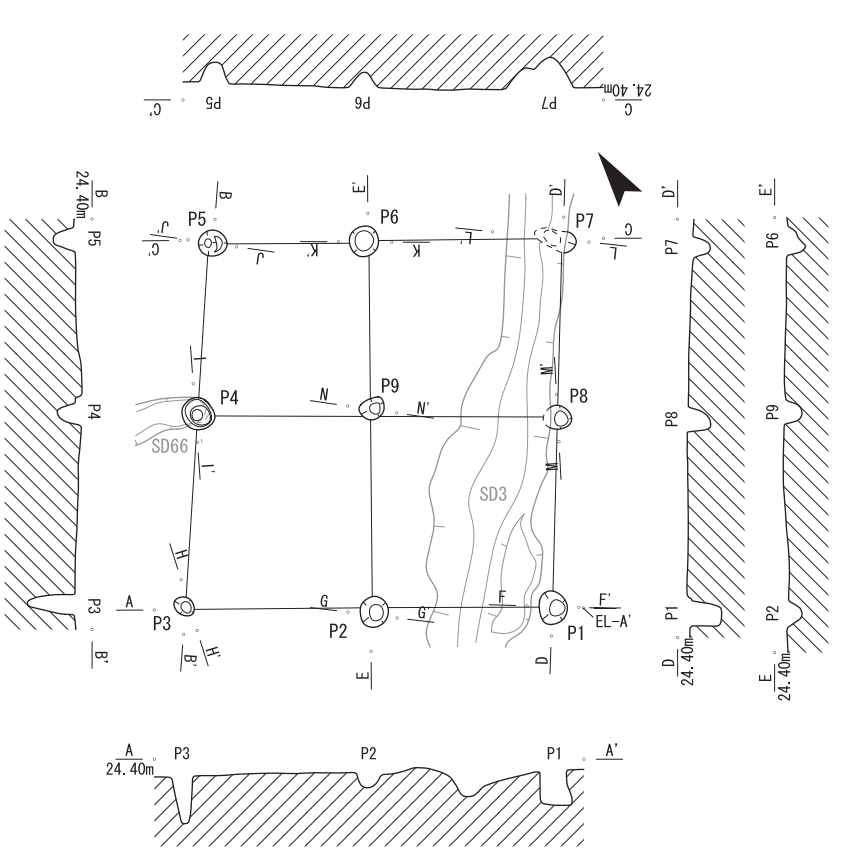
1　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる　灰オリーブ色シルト少量混ざる

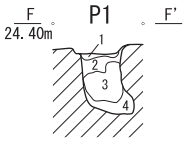


P474

1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強　灰オリーブ色シルト少量混ざる
2　黄灰色シルト　粘性弱　しまり弱　灰オリーブ色砂多量に混ざる

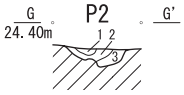
SB535





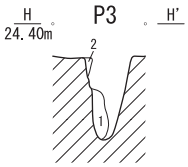
P1

1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
2　灰黄色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト少量混ざる
3　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト多量に混ざる
　φ３㎜の炭化物粒多量に混ざる
4　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト多量に混ざる



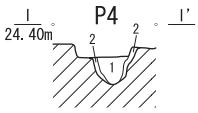
P2

1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト多量に混ざる
3　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト少量混ざる



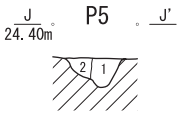
P3

1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり弱
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
2　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト少量混ざる



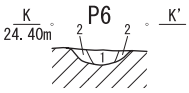
P4

1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
2　灰オリーブ色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト少量混ざる



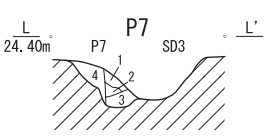
P5

1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
2　灰オリーブ色シルト
　粘性弱　しまり強



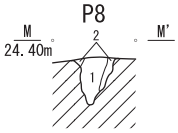
P6

1　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
2　灰オリーブ色シルト
　粘性弱　しまり強



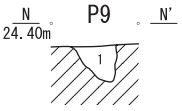
P7

1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
2　灰オリーブ色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト少量混ざる
3　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト多量に混ざる
4　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト多量に混ざる



P8

1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
　φ５㎜の炭化物多量に混ざる
2　灰オリーブ色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト少量混ざる



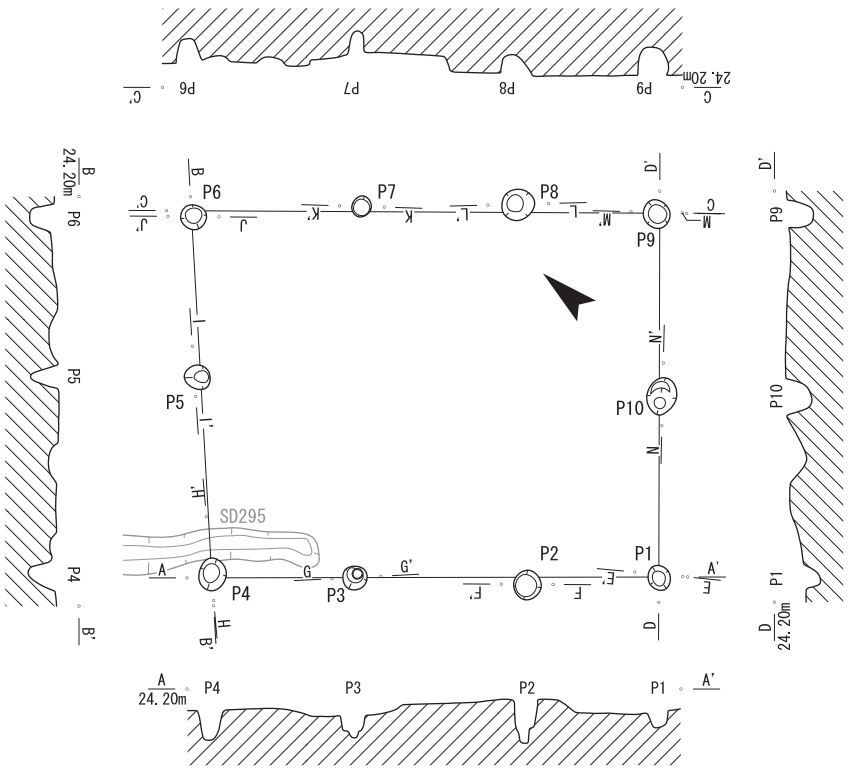
P9

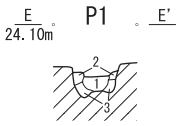
1　灰オリーブ色シルト　粘性弱　しまり強
　黄灰色シルト少量混ざる

0　平面図・エレベーション図(1:80)　4m

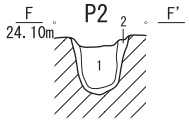
0　断面図(1:40)　2m

SB550

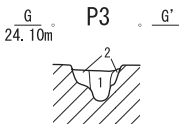




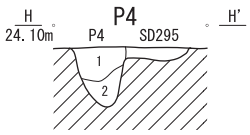
P1
1　黄灰色シルト　粘性・しまり強
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
3　灰白色シルト　粘性・しまり弱



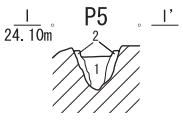
P2
1　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色シルトブロック混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱



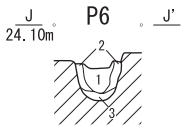
P3
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
2　灰白色シルト　粘性・しまりやや強



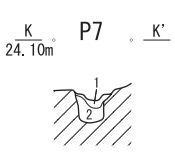
P4
1　黄灰色シルト　粘性強　しまりやや強
　浅黄色シルトブロック混ざる
2　黄灰色シルト　粘性強　しまり弱
　浅黄色シルトブロック混ざる



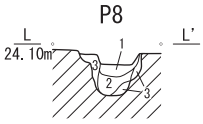
P5
1　黒褐色シルト　粘性・しまり弱
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱



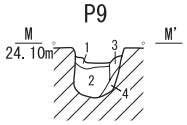
P6
1　黒褐色シルト　粘性・しまり弱
2　黒褐色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄細砂混ざる
3　灰黄シルト　粘性・しまり弱
　黒褐色シルトブロック混ざる



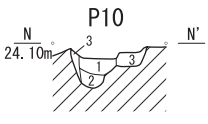
P7
1　灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色細砂混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色細砂混ざる



P8
1　灰色シルト　粘性・しまり強
2　灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色シルト混ざる
3　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
　灰色シルト混ざる



P9
1　灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄細砂混ざる
2　灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄細砂混ざる
3　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
4　灰黄褐色シルト　粘性・しまり弱

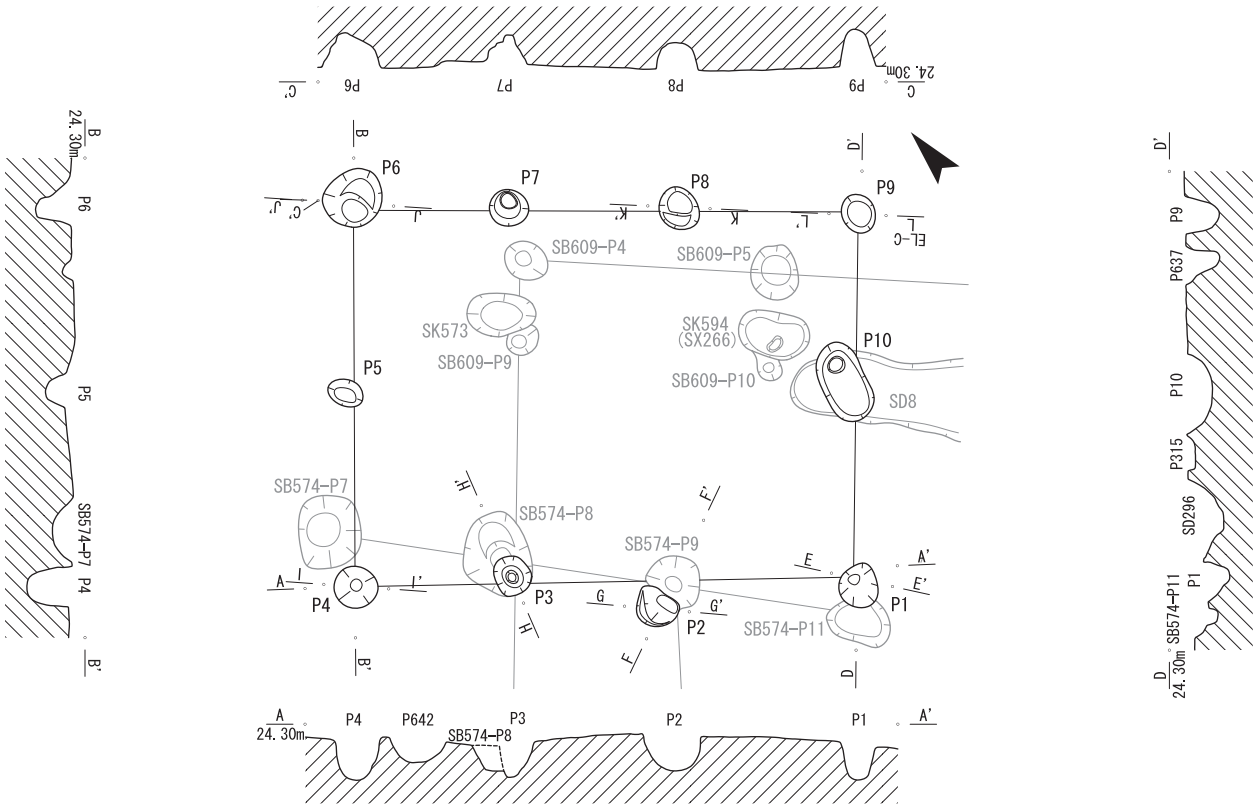


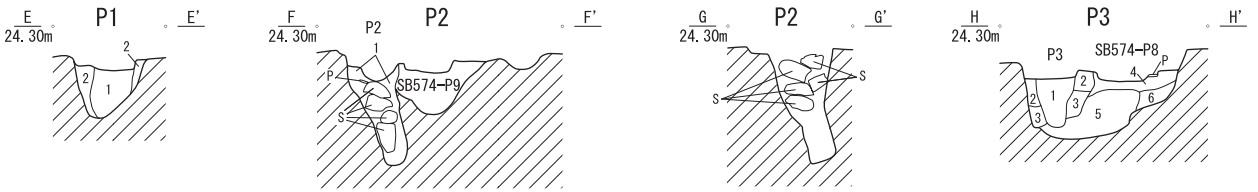
P10
1　黒褐色シルト　粘性・しまりやや強
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
3　褐灰色シルト　粘性・しまり弱

0　平面図・エレベーション図(1:80)　4m

0　断面図(1:40)　2m

SB571



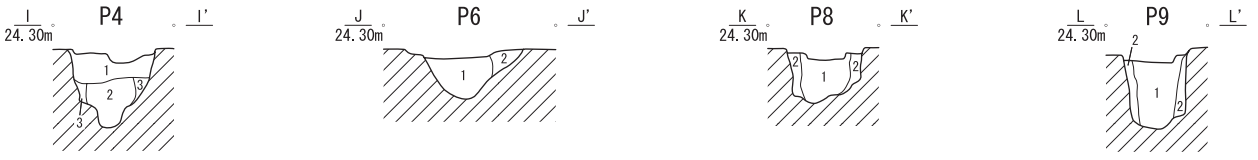


P1
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
　φ５㎜の炭化物粒少量混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
　灰黄色シルトブロック混ざる
　φ５㎜の炭化物粒少量混ざる

P2
1　暗灰色シルト　粘性・しまり強

P3
1　灰色シルト　粘性・しまり強
　暗灰黄色シルトブロック混ざる
2　黄灰色シルト　粘性・しまり強
3　灰色シルト　粘性・しまり強

SB574-P8
4　暗灰黄色シルト　粘性・しまり強
5　灰色シルト　粘性・しまり強
6　黄褐色シルト　粘性・しまり強



P4
1　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
3　褐灰色シルト　粘性・しまり弱

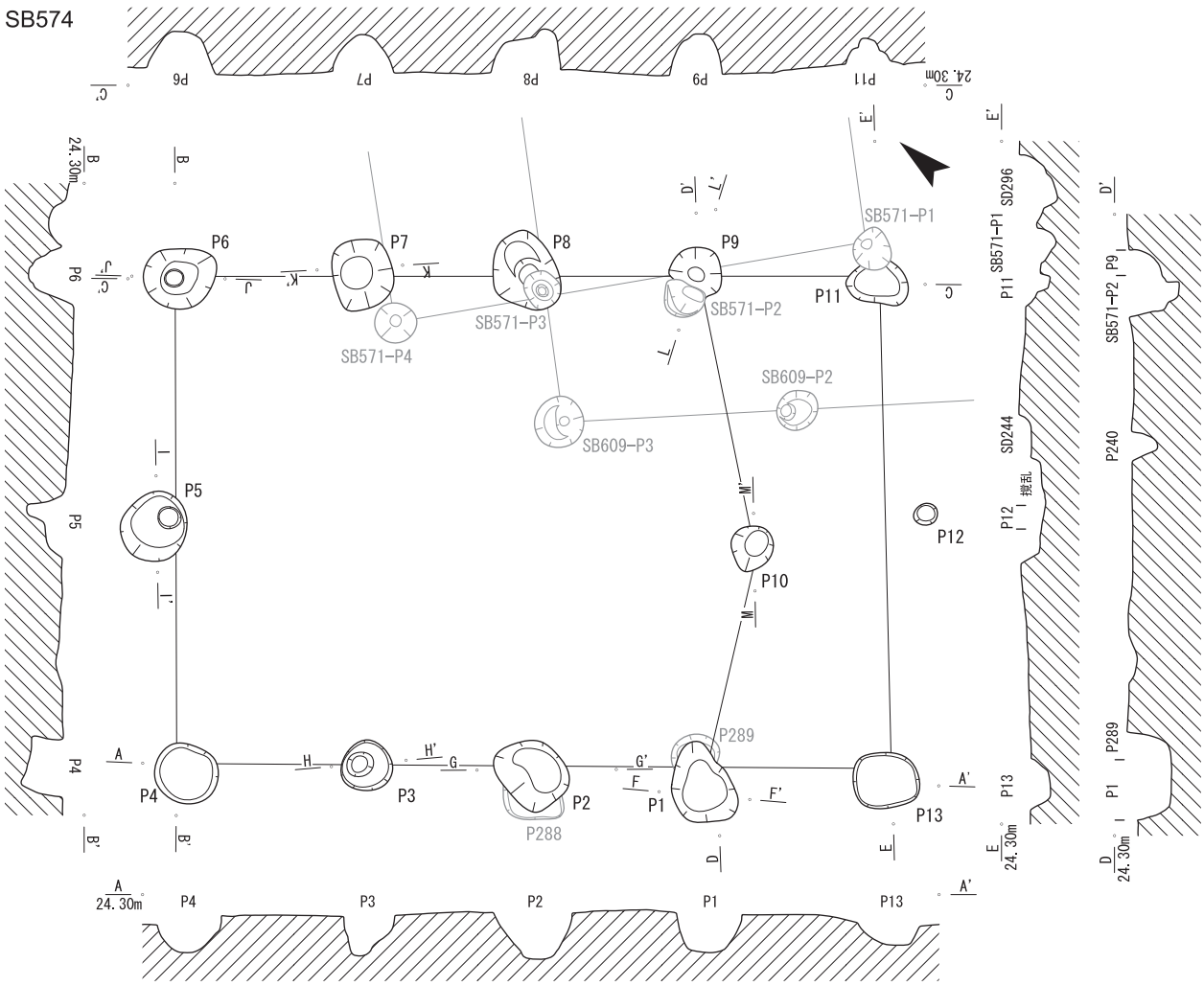
P6
1　青灰色シルト　粘性・しまり強
2　明黄褐色シルト　粘性・しまり弱
　青灰色シルトブロック混ざる

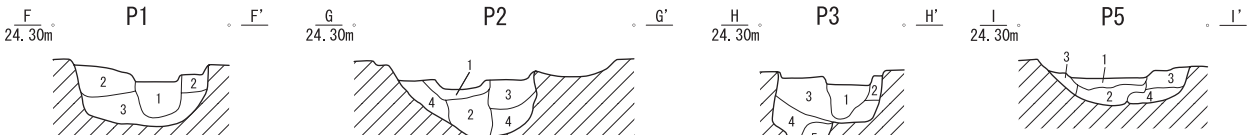
P8
1　灰色シルト　粘性・しまりやや強
2　灰色シルト　粘性・しまりやや強
　灰黄色シルトブロック混ざる

P9
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
　灰黄色シルトブロック混ざる

0　平面図・エレベーション図(1:80)　4m
0　断面図(1:40)　2m

SB574



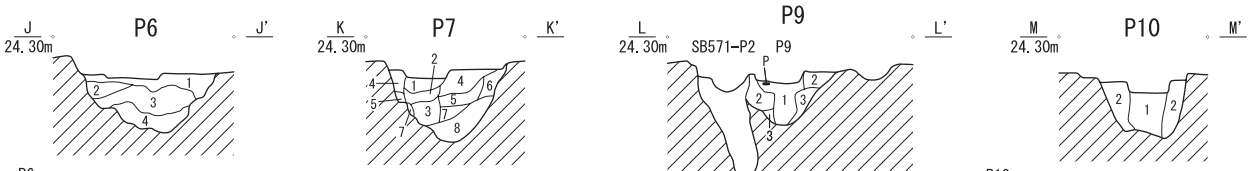


P1
1 黄灰色シルト　粘性・しまり強
にぶい黄色シルト多量に混ざる
層下部に炭化物粒混ざる
2 黄灰色シルト　粘性・しまり強
3 黄灰色シルト　粘性・しまり強
にぶい黄色シルト混ざる
炭化物粒混ざる

P2
1 黄灰色シルト　粘性・しまり強
2 黄灰色シルト　粘性・しまり強
にぶい黄色シルト多量に混ざる
3 灰黄色シルト　粘性・しまり強
黄灰色シルトブロック混ざる
4 黄灰色シルト　粘性・しまり強
灰黄色シルトブロック混ざる

P3
1 黄灰色シルト　粘性・しまり強
層下部に炭化物粒混ざる
2 暗灰黄色シルト　粘性・しまり強
3 黄褐色シルト　粘性・しまり強
4 にぶい黄色シルト　粘性・しまり強
5 黄灰色シルト　粘性・しまり強

P5
1 暗灰黄色シルト　粘性・しまり強
2 灰色シルト　粘性・しまり強
にぶい黄色シルト少量混ざる
3 黄灰色シルト　粘性・しまり強
4 黄灰色シルト　粘性・しまり強
にぶい黄色シルト多量に混ざる



P6
1 黄灰色シルト　粘性・しまり強
黄灰色シルト少量混ざる
2 黄灰色シルト　粘性・しまり強
3 暗灰黄色シルト　粘性・しまり強
灰色シルトブロック混ざる
4 灰色シルト　粘性・しまり強

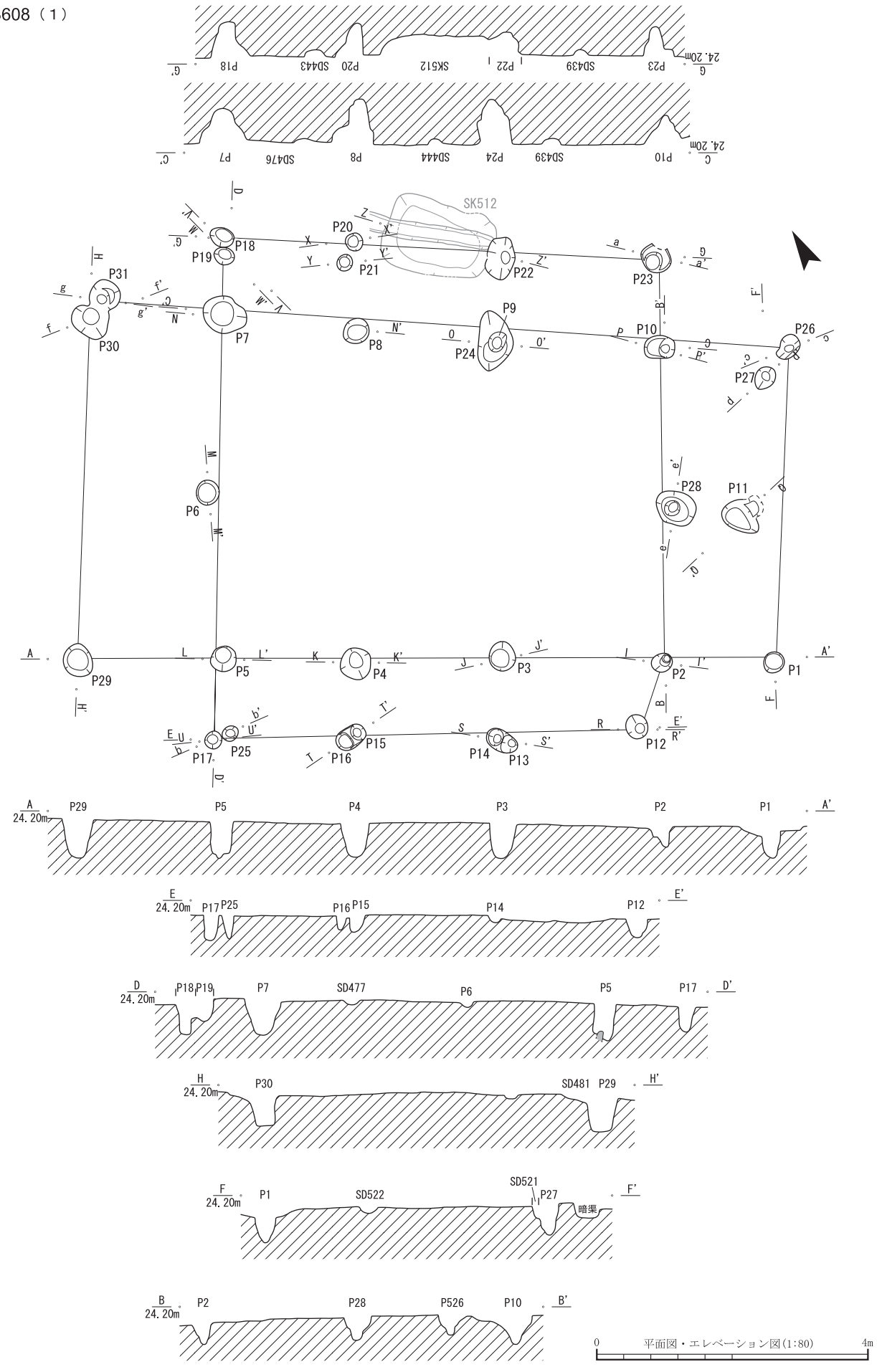
P7
1 黄灰色シルト　粘性・しまり強
2 黄灰色シルト　粘性・しまり強
にぶい黄色シルト混ざる
3 黄灰色シルト　粘性・しまり強
4 黄灰色シルト　粘性・しまり強
5 黄灰色シルト　粘性・しまり強
6 灰黄色シルト　粘性・しまり強
7 灰色シルト　粘性・しまり強
8 灰色シルト　粘性・しまり強

P9
1 黄灰色シルト　粘性・しまり強
2 灰黄色シルト　粘性・しまり強
3 黄灰色シルト　粘性・しまり強

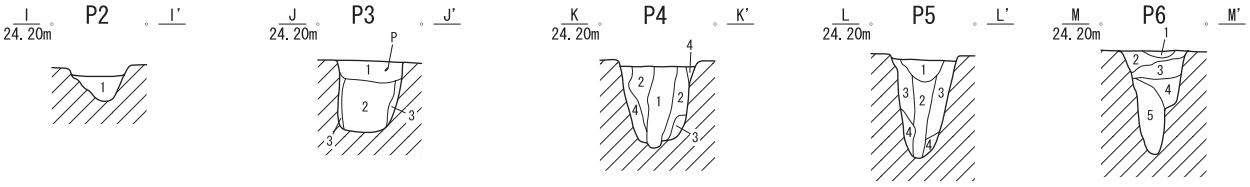
P10
1 灰色シルト　粘性・しまり強
灰黄色シルトブロック混ざる
2 灰黄色シルト　粘性・しまり強
灰色シルトブロック混ざる

0 平面図・エレベーション図(1:80) 4m
0 断面図(1:40) 2m

SB608（1）


SK512
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
SD439
SD443
SD444
SD476
SD477
SD481
SD521
SD522
暗渠
24.20m
平面図・エレベーション図(1:80)
0
4m

SB608（２）



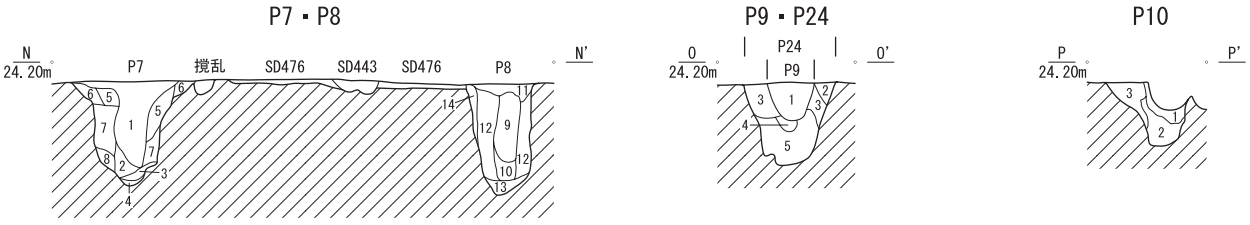
P2
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトブロック混ざる

P3
1　灰色シルト　粘性・しまり強
　灰オリーブ色シルトブロック混ざる
2　灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色シルトブロック混ざる
3　灰色シルト　粘性・しまり強
　明黄褐色シルトブロック混ざる

P4
1　灰色シルト　粘性・しまりやや強
2　灰色シルト　粘性・しまりやや強
　明黄褐色シルトブロック混ざる
3　灰白色シルト　粘性・しまり強
4　明黄褐色シルト　粘性・しまり弱

P5
1　灰色シルト　粘性・しまりやや強
　φ10㎜の炭化物粒少量混ざる
2　灰色シルト　粘性・しまりやや強
　灰白色シルトブロック混ざる
3　灰白色シルト　粘性・しまりやや強
　灰色シルトブロック混ざる
4　灰白色シルト　粘性・しまり弱

P6
1　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
2　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる
3　黒褐色シルト　粘性・しまり中～やや弱
　明オリーブ灰色シルトわずか混ざる
4　黒褐色シルト　粘性・しまり中～やや弱
　明オリーブ灰色シルト混ざる
5　黒褐色シルト　粘性中～やや弱
　明オリーブ灰色シルトわずか混ざる



P7
1　黒褐色シルト　粘性弱・しまり強
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
　植物遺体混ざる
2　黒褐色シルト　粘性弱・しまり強
　オリーブ灰色シルト多量に混ざる
3　オリーブ灰色シルト　粘性弱・しまり強
4　黒色粘土　粘性強・しまり弱
　オリーブ灰色シルト少量混ざる
5　黒褐色シルト　粘性弱・しまり強
　φ３㎜の炭化物粒少量混ざる
　黄褐色砂多量に混ざる
6　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　φ１㎜の炭化物粒少量混ざる
　黒褐色シルト少量混ざる
7　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　φ１㎜の炭化物粒少量混ざる
　黄褐色砂少量混ざる
　オリーブ灰色シルト多量に混ざる
8　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり強
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる

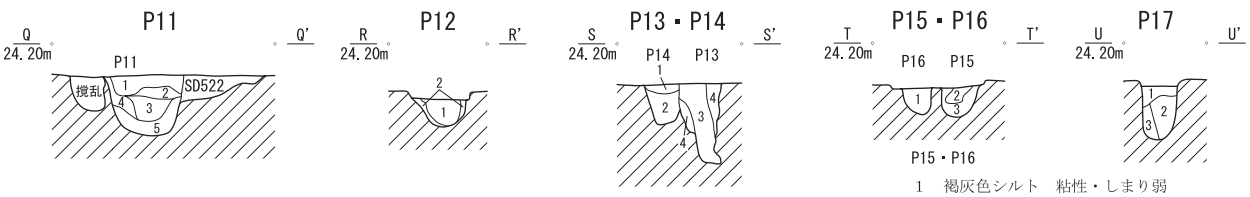
P8
9　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
　褐鉄鉱多量に混ざる
　植物遺体混ざる
10　黒褐色シルト　粘性強・しまり弱
11　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　φ５㎜の炭化物粒・黄褐色シルト・
　褐鉄鉱少量混ざる
12　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　φ３㎜の炭化物粒
　・灰オリーブ色シルト少量混ざる
13　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　灰オリーブ色シルト多量に混ざる
14　黄褐色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト少量混ざる

P9
1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　φ10㎜の炭化物多量に混ざる
　黄褐色シルト多量に混ざる

P24
2　黄褐色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト多量に混ざる
3　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　φ５㎜の炭化物粒少量混ざる
　黄褐色シルト多量に混ざる
4　黄褐色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト少量混ざる
5　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　φ10㎜の炭化物粒少量混ざる
　オリーブ灰色シルト多量に混ざる

P10
1　暗灰色シルト　粘性強　しまり弱
2　１に灰白色シルトブロック混ざる
3　浅黄色シルト　粘性強　しまりやや弱

0　断面図(1:40)　2m



P11
1　灰色シルト　粘性・しまりやや強
2　１に浅黄色細砂ブロック混ざる
3　１に灰白色細砂混ざる
4　灰色シルト　粘性弱
　浅黄色細砂混ざる
5　灰色細砂

P12
1　黒褐色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトブロック混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱

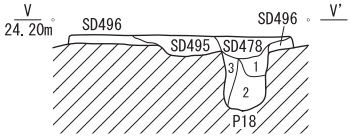
P13・P14
1　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
2　灰白色シルト　粘性・しまりやや強
　黄褐色細砂混ざる
3　灰色シルト　粘性・しまりやや強
　黄褐色細砂混ざる
4　明黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　３層ブロック混ざる

P15・P16
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
2　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
3　２層に灰黄色シルトブロック混ざる

P17
1　黒褐色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトブロック混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトブロック混ざる
3　灰黄色シルト　粘性・しまり弱

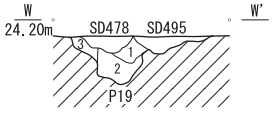
SB608（３）

P18



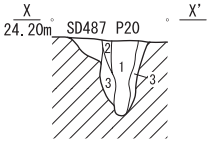
P18
1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり弱
　φ１㎜の炭化物粒少量混ざる
　オリーブ灰色シルト少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり弱
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
　オリーブ灰色シルト多量に混ざる
3　黄褐色～オリーブ灰色シルト
　粘性弱　しまり強
　φ３㎜の炭化物粒少量混ざる
　黒褐色シルト多量に混ざる

P19



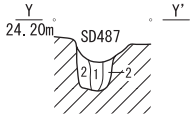
P19
1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり弱
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　φ３㎜の炭化物粒少量混ざる
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
3　黄褐色シルト　粘性弱　しまり強
　黄灰色シルト多量に混ざる

P20



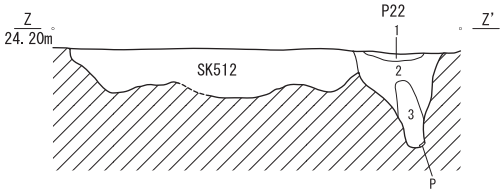
P20
1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり弱
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
　黄褐色シルト少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　φ10㎜の炭化物粒少量混ざる
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
3　黄褐色～オリーブ灰色シルト
　粘性・しまり弱
　黒褐色シルト多量に混ざる

P21



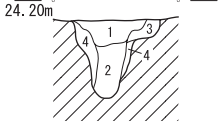
P21
1　黒褐色シルト　粘性・しまり弱
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
　オリーブ灰色シルト少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　黄褐色～オリーブ灰色シルト多量混ざる

P22



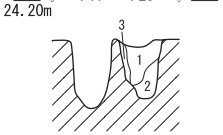
P22
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルトブロック混ざる
2　７に類似し灰黄色シルトブロック
　やや多く混ざる
3　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
　明オリーブ灰色シルトブロック
　混ざる

P23



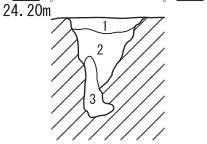
P23
1　灰色シルト　粘性強　しまりやや弱
　灰白色シルトブロック多量に混ざる
2　暗灰色シルト　粘性強　しまり中
　微量の炭化物粒混ざる
3　灰白色シルト　粘性強　しまり強
4　暗灰色シルト　粘性強
　灰白色シルト混ざる

P25



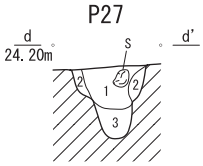
P25
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
　灰黄色シルトブロック混ざる
2　黄灰色シルト　粘性・しまりやや強
3　灰黄色シルト　粘性・しまり弱

P26



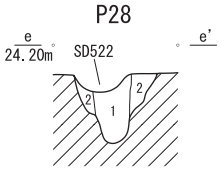
P26
1　灰色シルト　粘性強　しまり弱
　灰オリーブ色シルトブロック混ざる
　φ５㎜の炭化物粒混ざる
2　灰色シルト　粘性強　しまり弱
　青灰色シルト混ざる
3　青灰色シルト　粘性強　しまり弱
　暗灰色シルトブロック混ざる
　炭化物粒混ざる

P27



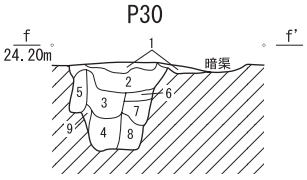
P27
1　灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　浅黄色細砂・灰色細砂混ざる
2　灰オリーブ色細砂　粘性・しまり弱
3　灰白色細砂　粘性・しまり弱
　φ10 ～ 20 ㎜の炭化物少量混ざる

P28



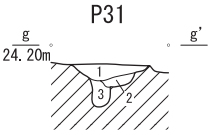
P28
1　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる
　φ５㎜の炭化物粒混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱～弱
　灰黄色砂質シルトブロック多量に混ざる
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる

P30



P30
1　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
　灰黄～明オリーブ灰色シルトブロックわずか混ざる
2　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
　明オリーブ灰色ブロック混ざる
3　黒褐色シルト　粘性中～やや弱
　明オリーブ灰色シルトブロックわずか混ざる
4　３に類似し明オリーブ灰色シルトブロックやや多い
5　黒褐色シルト　粘性・しまり中～やや弱
　灰黄色シルトブロック混ざる
6　５と同質
7　黒褐色シルト　粘性・しまり中～やや弱
　灰黄～明オリーブ灰色シルトブロック非常に多く混ざる
8　黒褐色シルト　粘性・しまり中～やや弱
　灰黄～明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる
9　８と同質

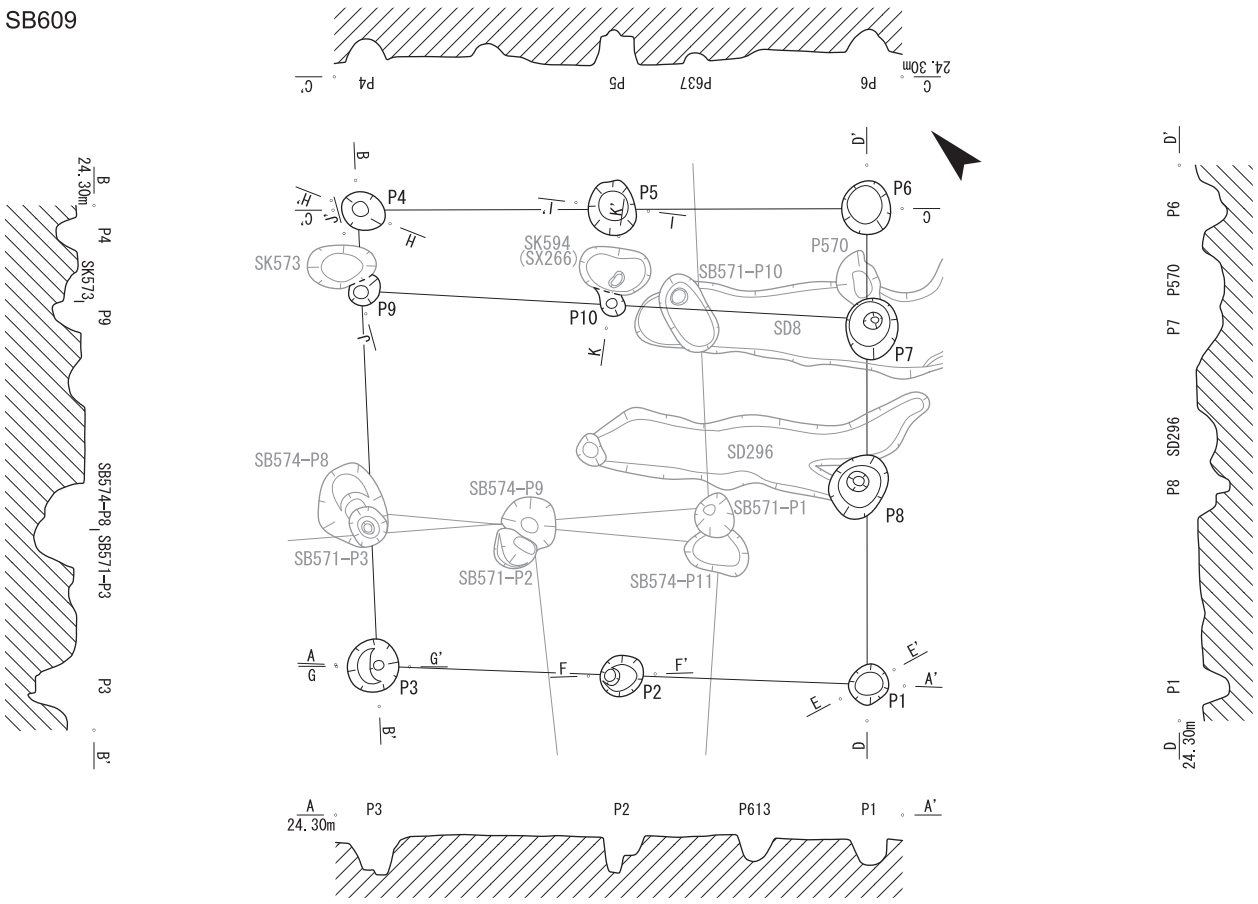
P31

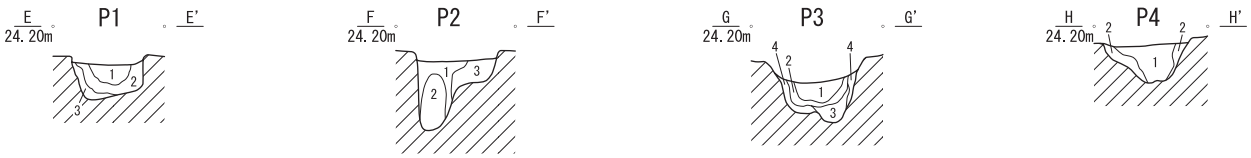


P31
1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
2　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　φ５㎜の炭化物粒少量混ざる
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
3　灰オリーブ色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色シルト少量混ざる

0　断面図(1:40)　2m

SB609



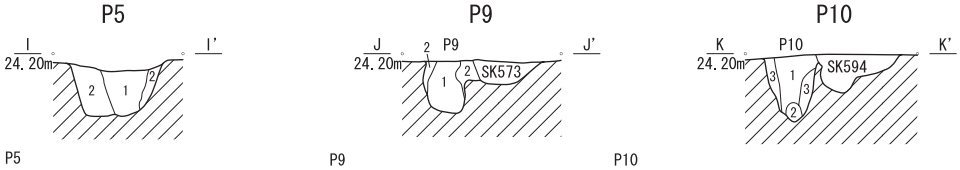


P1
1 褐灰色シルト　粘性・しまりなし
灰黄色砂質シルト多量に混ざる
2 褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
灰黄色砂質シルト混ざる
φ５㎜の炭化物わずか混ざる
3 灰黄色シルト　粘性・しまり弱
褐灰色シルトわずか混ざる

P2
1 褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
灰黄色砂質シルト混ざる
φ５㎜炭化物混ざる
2 黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
灰黄色シルト混ざる
3 灰黄色シルト　粘性・しまり弱
褐灰色シルトわずか混ざる

P3
1 褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
φ10㎜の炭化物わずか混ざる
灰黄色シルトわずか混ざる
2 褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
φ10㎜の炭化物わずか混ざる
灰黄色シルトブロック多量に混ざる
3 褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
灰黄色～明青灰色シルト多量に混ざる
4 灰黄色シルト　粘性・しまり弱
褐灰色シルトわずか混ざる

P4
1 黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
明オリーブ灰色シルトブロック混ざる
2 褐灰色シルト　粘性・しまり弱
灰黄色砂質シルト多量に混ざる



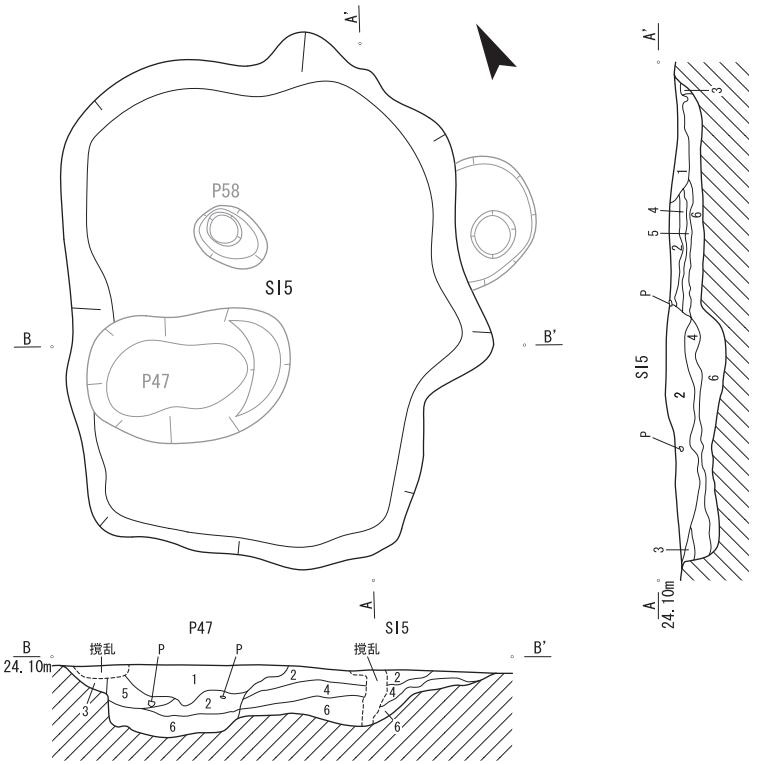
P5
1 黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
明オリーブ灰色シルトブロック混ざる
2 褐灰色シルト　粘性・しまり弱
灰黄色砂質シルト多量に混ざる

P9
1 灰色シルト　粘性・しまり強
2 浅黄色シルト　粘性・しまり強
黄灰色シルトブロック混ざる

P10
1 灰色シルト　粘性・しまりやや強
2 灰黄色粘土　粘性・しまり強
3 灰黄色シルト　粘性・しまり弱

0 平面図・エレベーション図(1:80) 4m
0 断面図(1:40) 2m

SI5



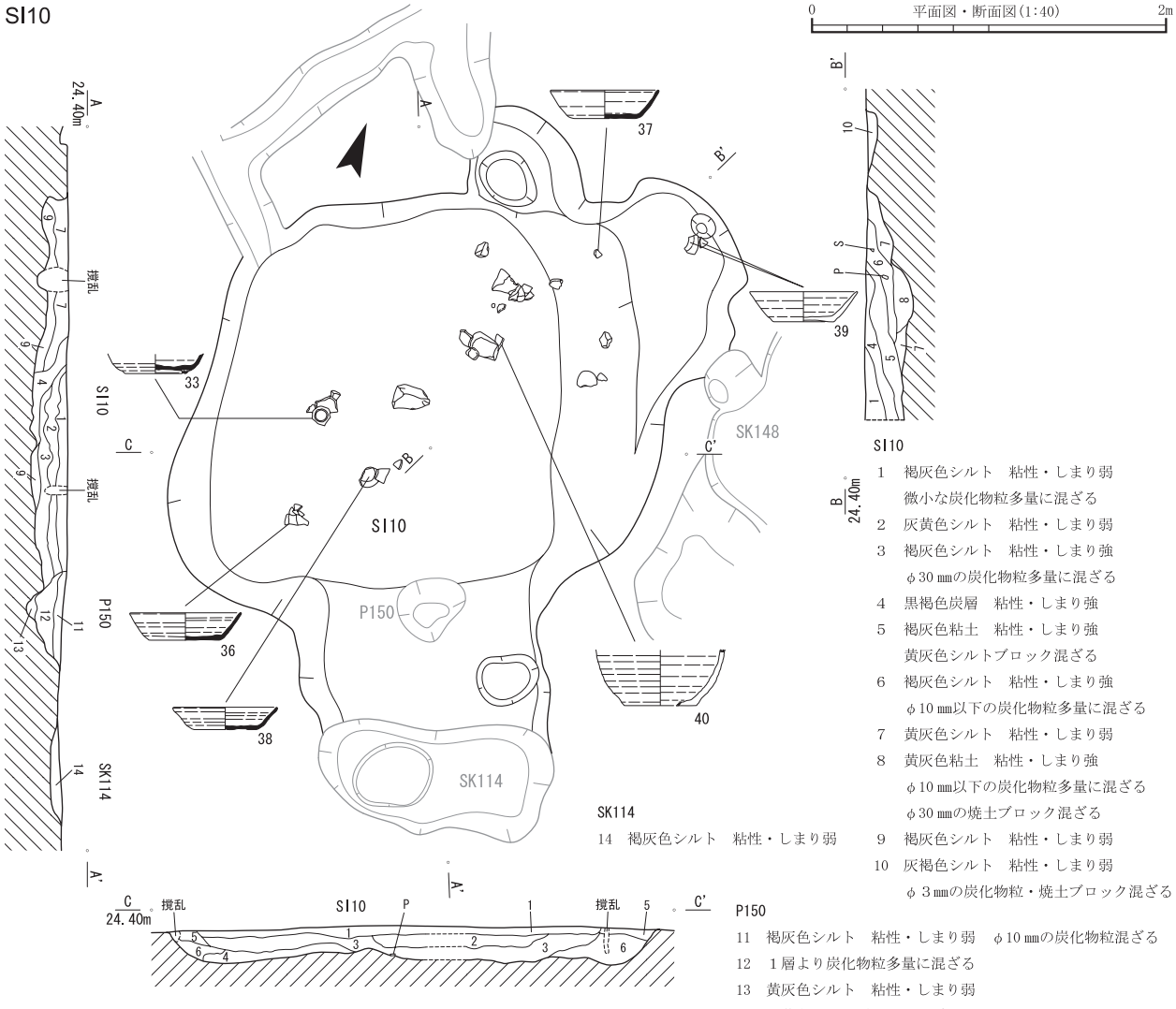
SI5

1　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　φ10㎜の炭化物粒多量に混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　φ５㎜の炭化物粒多量に混ざる
3　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　φ５㎜の炭化物粒多量に混ざる
　明黄褐色シルトブロック多量に混ざる
4　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　明黄褐色シルトブロック混ざる
5　灰白色粘土　粘性・しまり強
　４層土ブロック混ざる
6　明青灰色シルト　粘性・しまり強

P47

1　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　φ３㎜の炭化物粒多量に混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　φ５㎜の炭化物粒多量に混ざる
3　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　φ５㎜の炭化物粒多量に混ざる
　明黄褐色シルトブロック多量に混ざる
4　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　明黄褐色シルトブロック混ざる
5　青灰色シルト　粘性・しまり強
6　明青灰色シルト　粘性・しまり強

SI10



SK114

14　褐灰色シルト　粘性・しまり弱

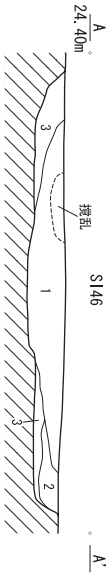
SI10

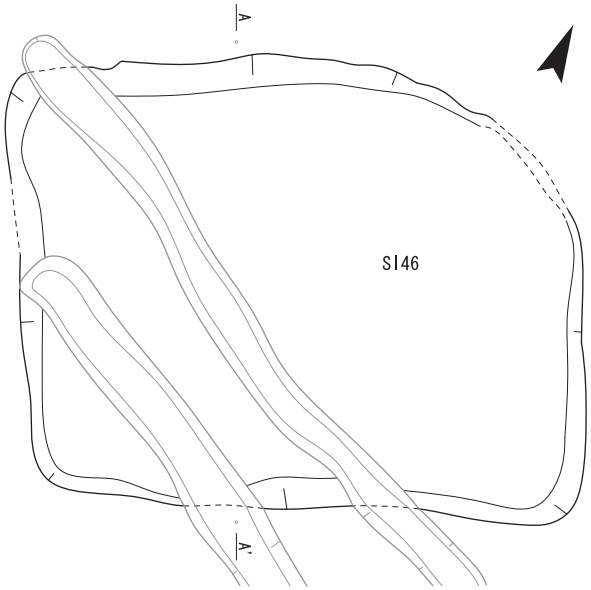
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　微小な炭化物粒多量に混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
3　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　φ30㎜の炭化物粒多量に混ざる
4　黒褐色炭層　粘性・しまり強
5　褐灰色粘土　粘性・しまり強
　黄灰色シルトブロック混ざる
6　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　φ10㎜以下の炭化物粒多量に混ざる
7　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
8　黄灰色粘土　粘性・しまり強
　φ10㎜以下の炭化物粒多量に混ざる
　φ30㎜の焼土ブロック混ざる
9　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
10　灰褐色シルト　粘性・しまり弱
　φ３㎜の炭化物粒・焼土ブロック混ざる

P150

11　褐灰色シルト　粘性・しまり弱　φ10㎜の炭化物粒混ざる
12　１層より炭化物粒多量に混ざる
13　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトブロック混ざる

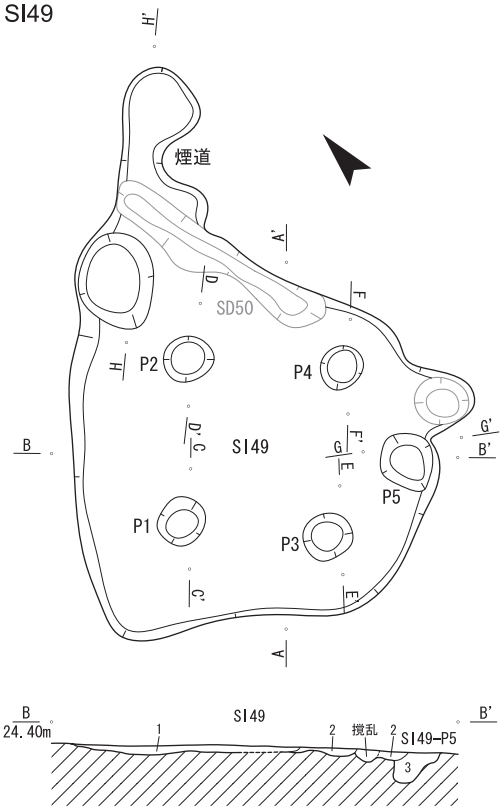
SI46

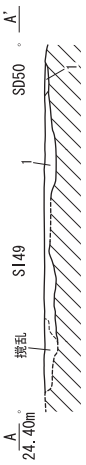


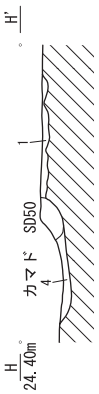


SI46
1　灰黄色シルト　粘性・しまり強
2　黒褐色シルト　粘性・しまり強
3　黄灰色シルト　粘性・しまり強

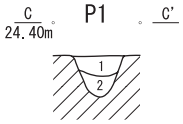
SI49



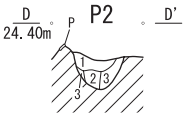




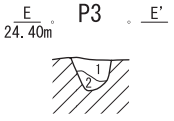
SI49
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　　微小な炭化物粒混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
3　黄灰色シルト　粘性・しまり強
4　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　　灰黄色シルトブロック混ざる
　　焼土ブロック混ざる



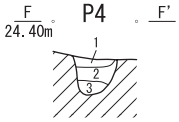
P1
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　　微小な炭化物粒混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
　　微小な炭化物粒混ざる



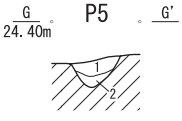
P2
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　　微小な炭化物粒混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　　微小な炭化物粒混ざる
3　黄灰色シルト　粘性・しまり弱



P3
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　　微小な炭化物粒混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　　微小な炭化物粒混ざる

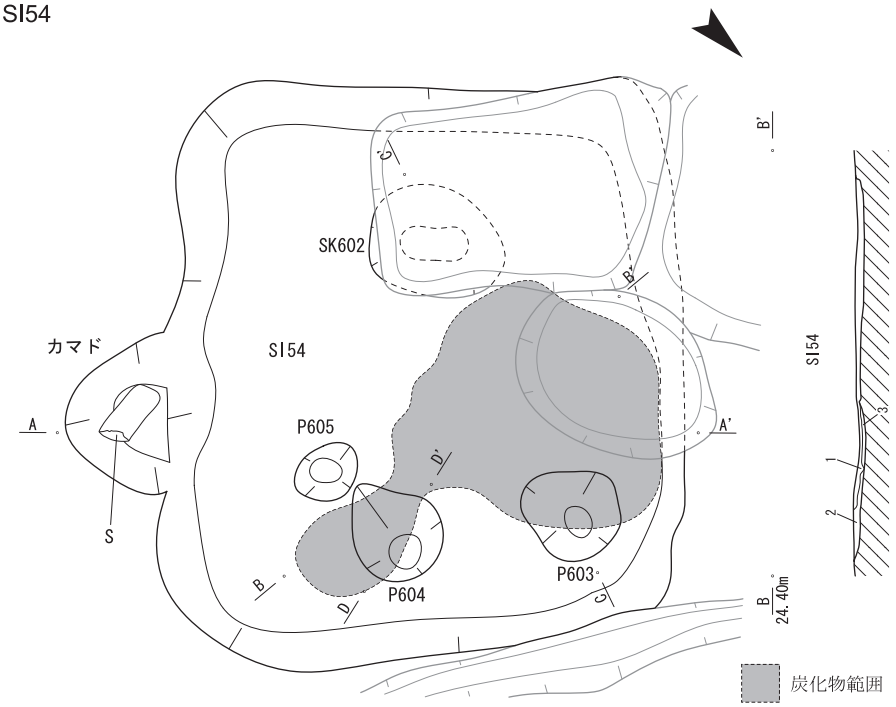


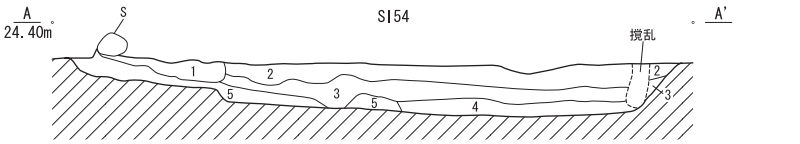
P4
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
3　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
　　φ10㎜の炭化物粒混ざる

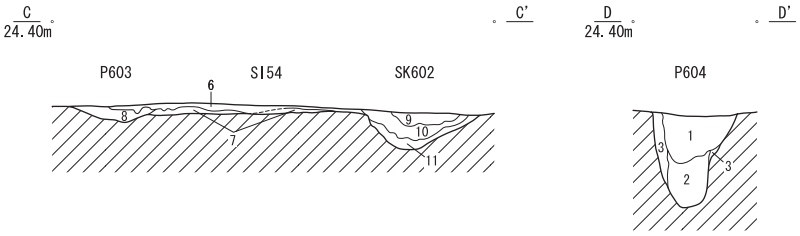


P5
1　黄灰色シルト　粘性・しまり強
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　　灰黄色シルトブロック混ざる

SI54







SI54

1　褐灰色シルト　粘性弱　しまり強
　微細な炭化物粒多量に混ざる
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
3　灰褐色シルト　粘性・しまり弱
　微細な炭化物粒混ざる
4　褐灰色粘土　粘性強　しまり弱
　φ10㎜の炭化物粒多量に混ざる
5　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
6　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　φ30㎜の炭化物粒多量に混ざる
　焼土ブロックわずか混ざる
7　明オリーブ灰～灰黄色シルト
　粘性・しまりやや弱
　褐灰色シルトわずか混ざる

SI54 内 P603

8　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　φ5㎜の炭化物粒わずか混ざる

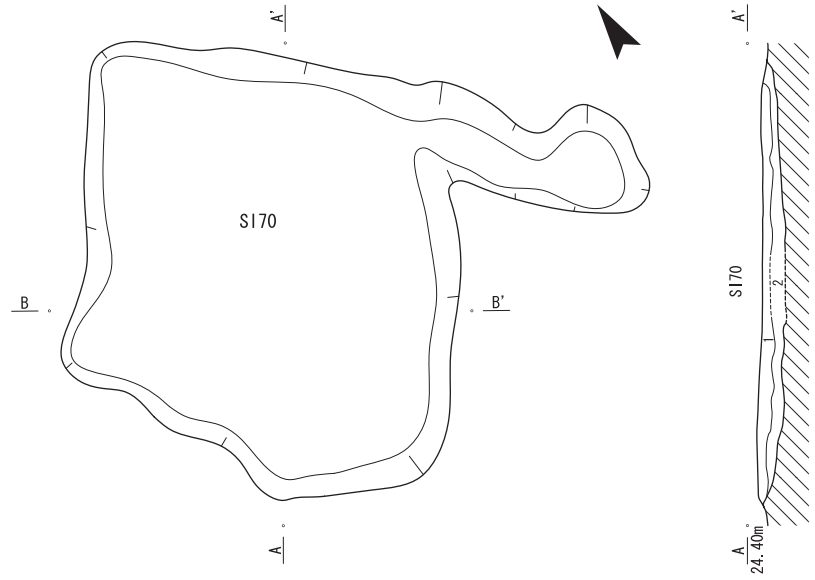
SI54 内 SK602

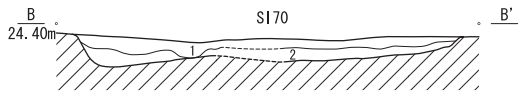
9　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルト混ざる
10　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色砂質シルト多量に混ざる
11　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　φ5㎜の炭化物粒わずか混ざる
　明オリーブ灰色シルト混ざる

SI54 内 P604

1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱～弱
　φ10㎜の炭化物粒混ざる
　灰黄色砂質シルト混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱～中
　φ5㎜の炭化物粒わずか混ざる
　明オリーブ灰色シルト混ざる
3　灰黄色砂質シルト　粘性・しまり弱
　褐灰色シルトわずか混ざる

SI70



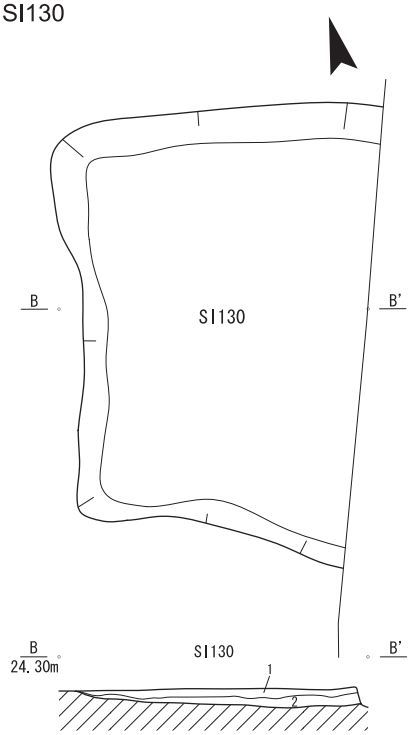


SI70

1　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色シルトブロック少量混ざる
　φ10㎜の炭化物粒多量に混ざる
　黒褐色粘土混ざる
2　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　灰黄色シルトブロック多量に混ざる

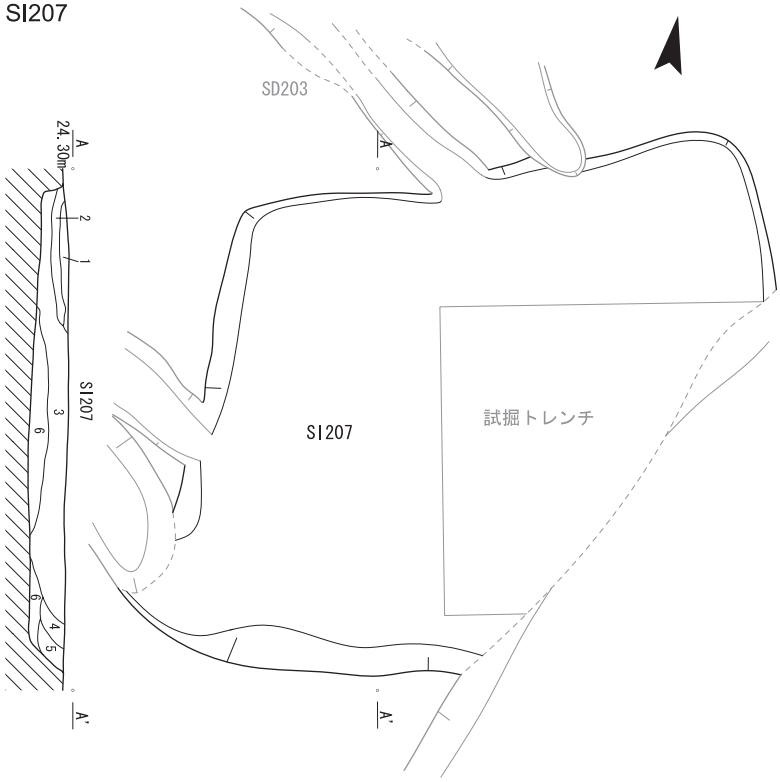
0　平面図・断面図(1:40)　2m

SI130



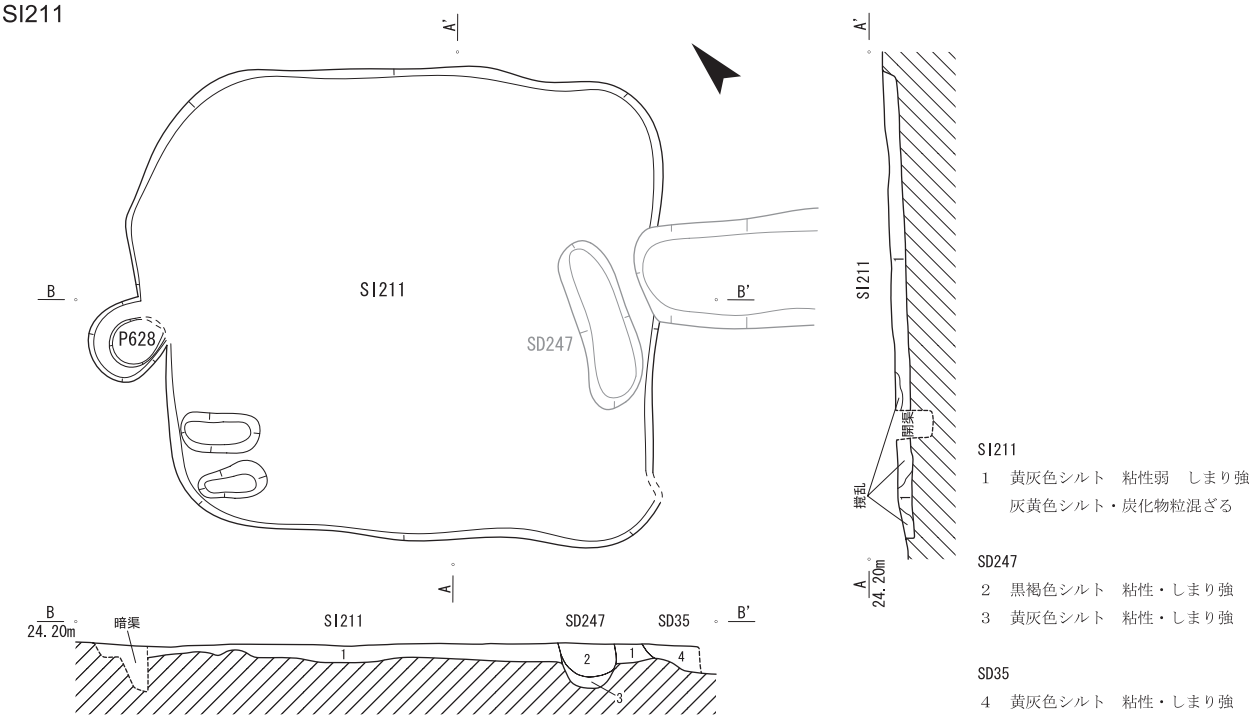
SI130
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルトブロック多量に混ざる
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
　褐灰色シルトわずか混ざる

SI207



SI207
1　黄灰色シルト　粘性・しまり強
2　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　黒褐色シルト混ざる
3　黄灰色シルト　粘性・しまり強
4　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　黒褐色シルト混ざる
5　黄灰色シルト　粘性・しまり強
6　灰黄色シルト　粘性・しまり強
　黄灰色シルトわずか混ざる

SI211



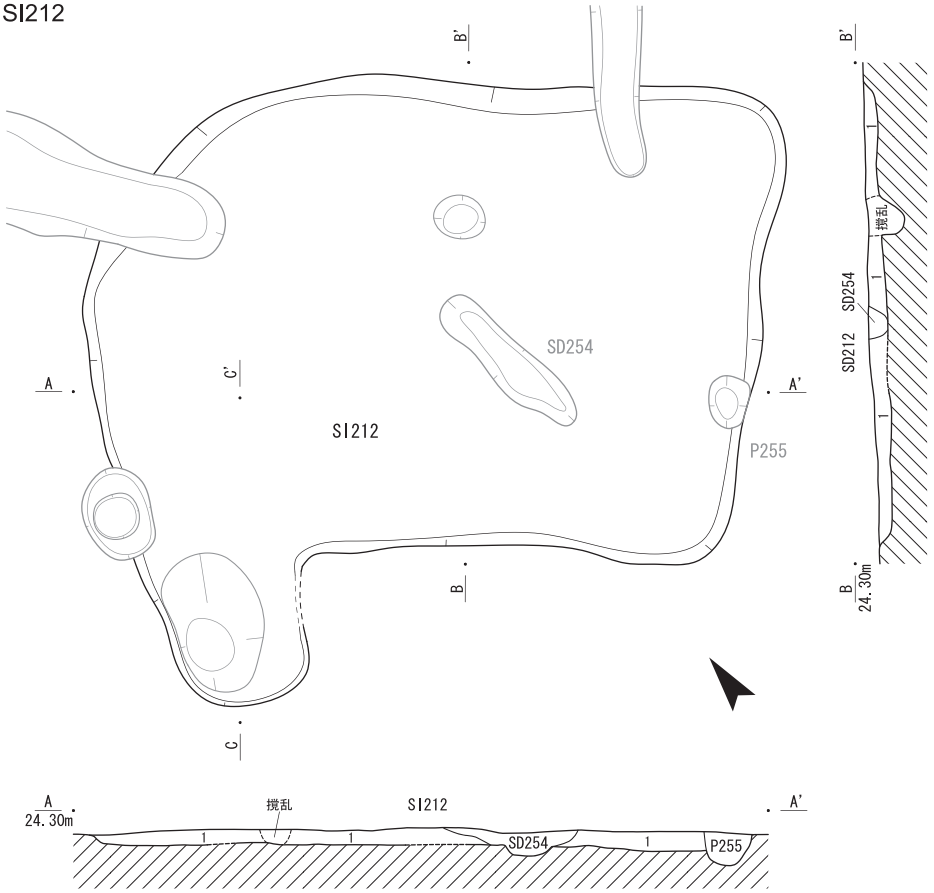
SI211
1　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　灰黄色シルト・炭化物粒混ざる

SD247
2　黒褐色シルト　粘性・しまり強
3　黄灰色シルト　粘性・しまり強

SD35
4　黄灰色シルト　粘性・しまり強

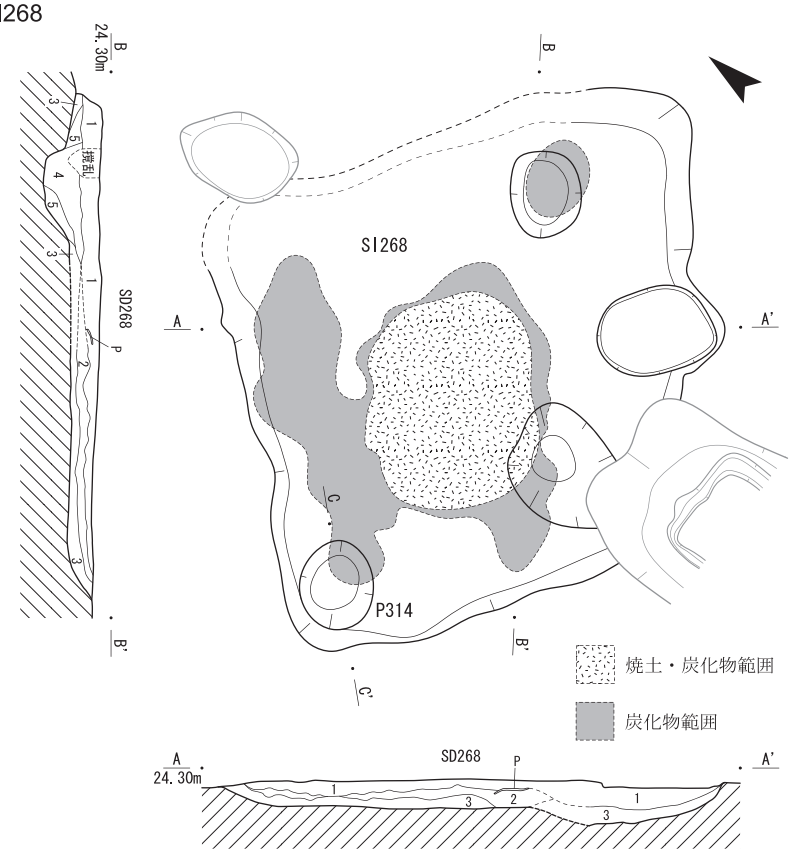
0　平面図・断面図(1:40)　2m

SI212

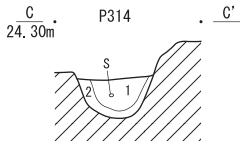


SI212
1　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
　黄灰色シルト多量に混ざる
　φ３㎜の炭化物粒少量混ざる
カマド
2　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色土少量混ざる
　焼土ブロック多量に混ざる
3　灰黄色シルト　粘性弱　しまり弱
　黄灰色土少量混ざる

SI268



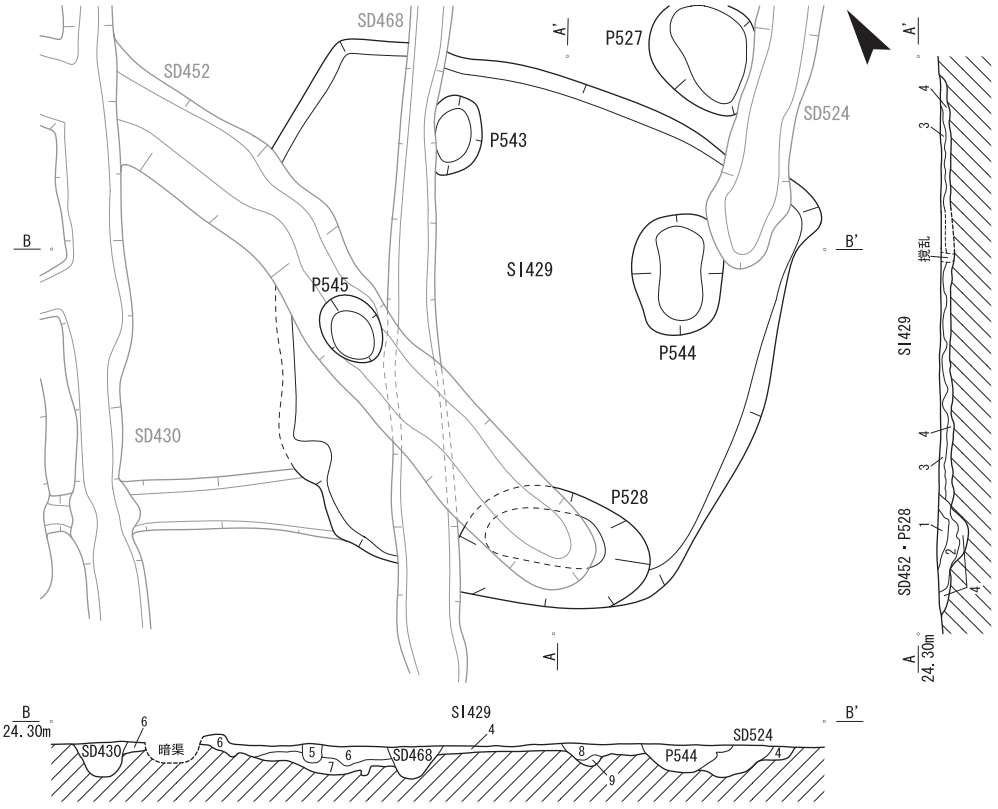
SI268
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　φ15㎜の炭化物ブロック多量に混ざる
3　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
　褐灰色シルトわずか混ざる
4　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
5　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルト混ざる



SI268 内 P314
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物粒混ざる
　灰黄色砂混ざる
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　褐灰色シルトわずか混ざる

0　平面図・断面図(1:40)　2m

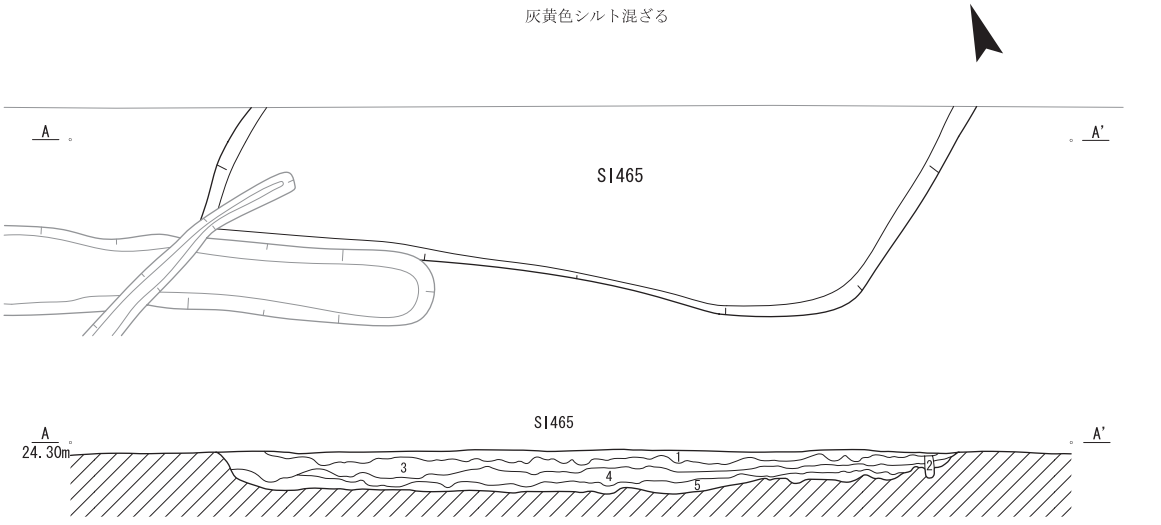
SI429



SI429

1　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルトブロックわずか混ざる
2　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルトブロック混ざる
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
3　黒褐色～褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルトブロック多量に混ざる
4　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
　褐灰色シルト混ざる
5　黒色シルト　粘性・しまりやや弱～中
　灰黄色シルトブロック混ざる
6　黒色シルト　粘性・しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
7　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルトわずか混ざる
8　黒色～褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルトブロックわずか混ざる
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
9　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルト混ざる

SI465

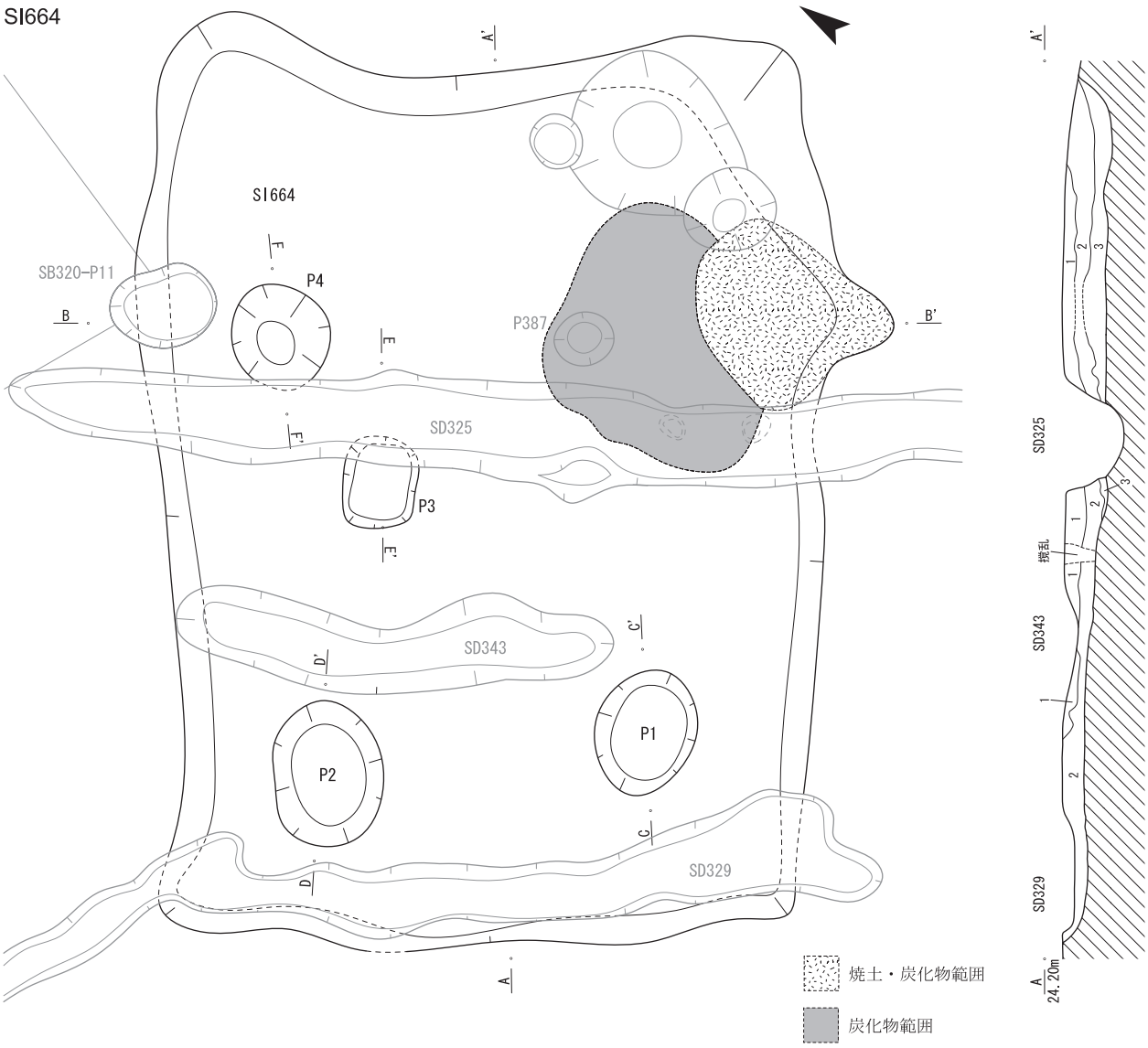


SI465

1　黒褐色シルト　粘性・しまり中
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルト混ざる
3　褐灰色シルト　粘性・しまり中
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
　灰黄色シルトブロックわずか混ざる
4　黒褐色シルト　粘性・しまり中
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
　灰黄色シルトわずか混ざる
5　灰黄色シルト　粘性・しまりやや弱
　褐灰色シルト多量に混ざる

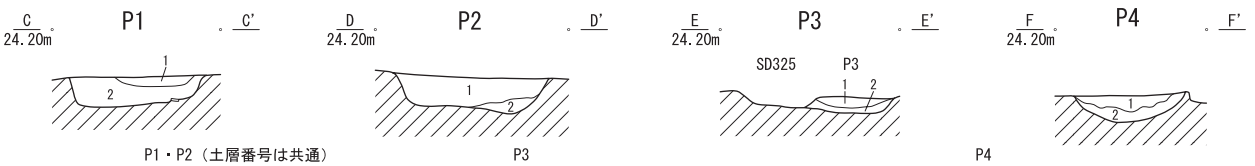
0　平面図・断面図(1:40)　2m

SI664



SI664

1　褐灰色～灰白色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色砂質シルト多量に混ざる
2　褐灰色～灰白色シルト　粘性・しまりやや弱
　1層より灰黄色砂質シルト多量に混ざる
　φ５㎜炭化物粒わずか混ざる
3　褐灰色～灰白色シルト　粘性・しまりやや弱
　1・2層より更に灰黄色砂質シルト多量
4　にぶい褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　炭化物粒多量に混ざる　焼土ブロック多量に混ざる
5　黒色シルト　粘性・しまりやや弱
　炭化物多量に混ざる　焼土ブロック混ざる
　灰白色粘土ブロック多量に混ざる
6　灰褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
　焼土ブロック混ざる　灰白色粘土ブロック混ざる
7　黒色～褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　焼土ブロック多量に混ざる　焼土層
8　６に類似し炭化物粒・焼土ともに更に多量
9　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
　炭化物粒混ざる
10　灰黄色砂質シルト　粘性・しまり弱
　にぶい褐色の焼土ブロックわずか混ざる



P1・P2（土層番号は共通）

1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　明青灰色砂質シルト多量に混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　1層より明青灰色砂質シルト多量

P3

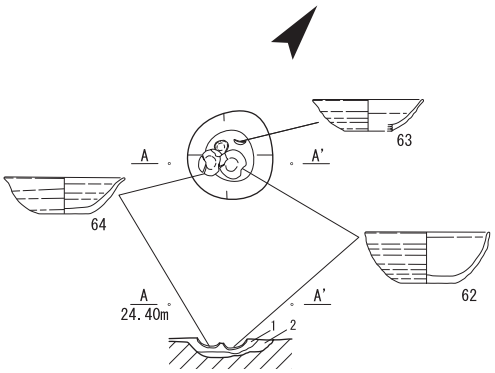
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　φ５㎜の炭化物粒多量に混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　明青灰色砂質シルト多量に混ざる

P4

1　青灰色細砂　粘性・しまり弱
　φ５㎜以下の炭化物粒少量混ざる
2　青灰色シルト　粘性強　しまり弱

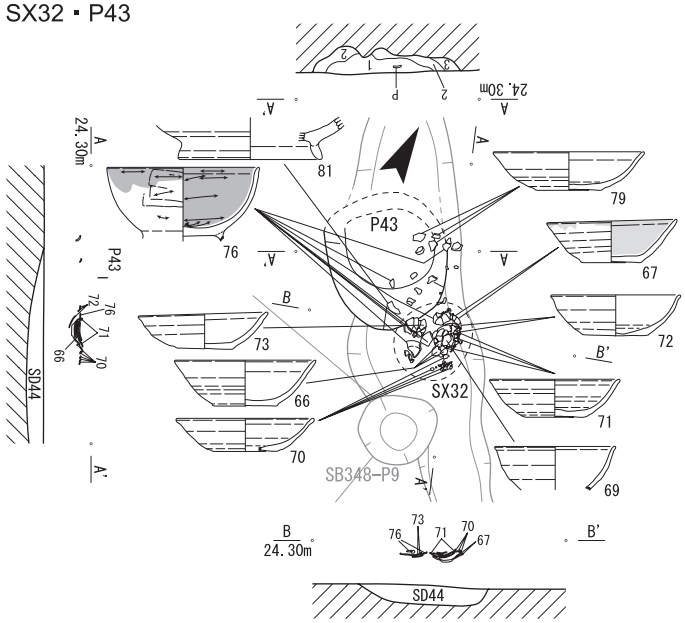
0　平面図・断面図(1:40)　2m

P2



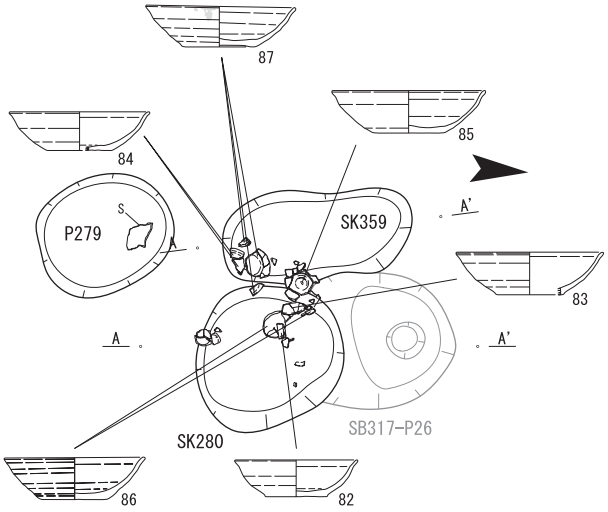
P2
1　灰色シルト　粘性・しまり強い
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱い

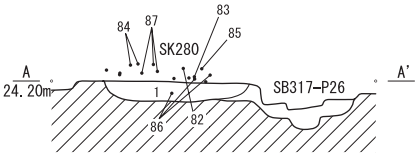
SX32・P43



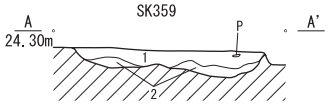
P43
1　黒～黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルトわずか混ざる
2　黒～黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルト多量に混ざる
3　明オリーブ灰色シルト　粘性・しまり弱
　黒褐色土わずか混ざる

SK280・SK359・P279



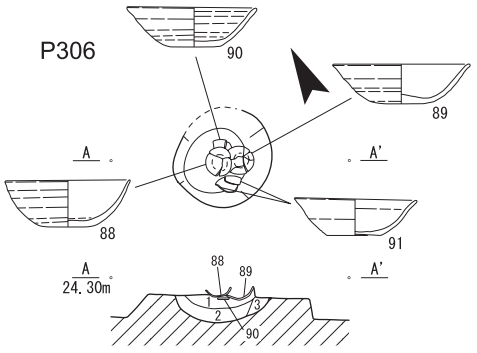


SK280
1　黒褐色シルト　粘性・しまり強　黄褐色砂少量・φ７㎜炭化物粒多量に混ざる



SK359
1　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　炭化物粒多量に混ざる　黄褐色砂少量混ざる
2　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　炭化物粒少量混ざる　黄褐色砂多量に混ざる

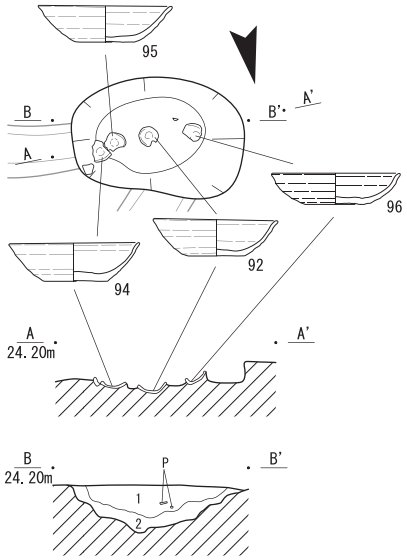
P306



P306
1　黒褐色シルト　粘性強　しまり強
　オリーブ灰色土・φ２㎜炭化物粒
　少量混ざる
2　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　オリーブ灰色土多量に混ざる
3　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり強
　黄灰色土少量混ざる

0　平面図・断面図(1:40)　2m

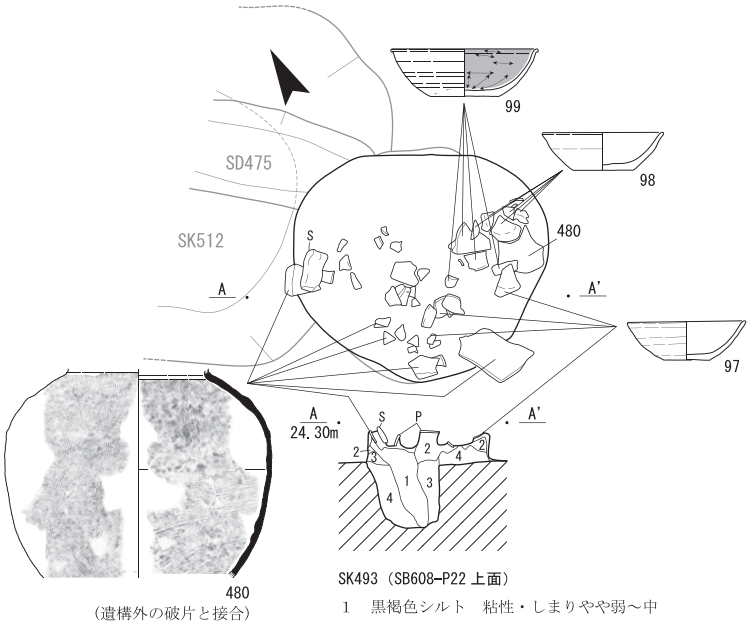
SK492



SK492

1　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまり中
　φ10㎜の炭化物混ざる
　明オリーブ灰色シルトわずか混ざる
2　褐灰色シルト　粘性やや弱～弱　しまり中
　φ10㎜の炭化物わずか混ざる
　明オリーブ灰色シルト多量に混ざる

SK493

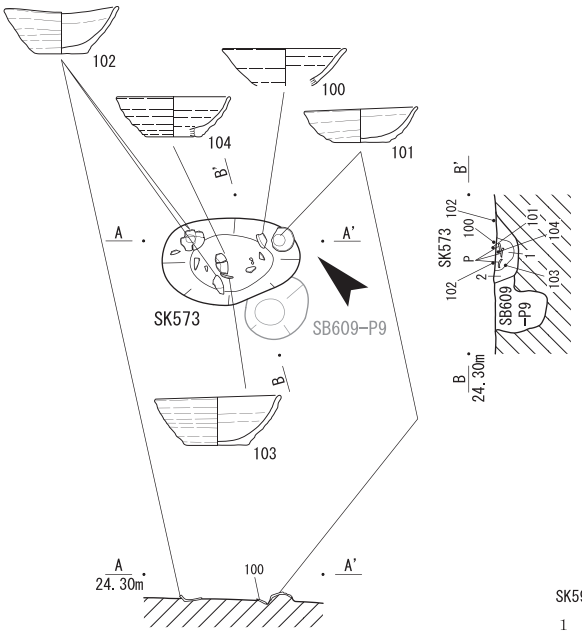


（遺構外の破片と接合）

SK493（SB608-P22 上面）

1　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱～中
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
　明オリーブ灰色シルトわずか混ざる
2　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱～中
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
　明オリーブ灰色シルトわずか混ざる
3　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色ブロック多量に混ざる
4　灰黄色シルト　粘性・しまりやや弱
　褐灰色シルトわずか混ざる

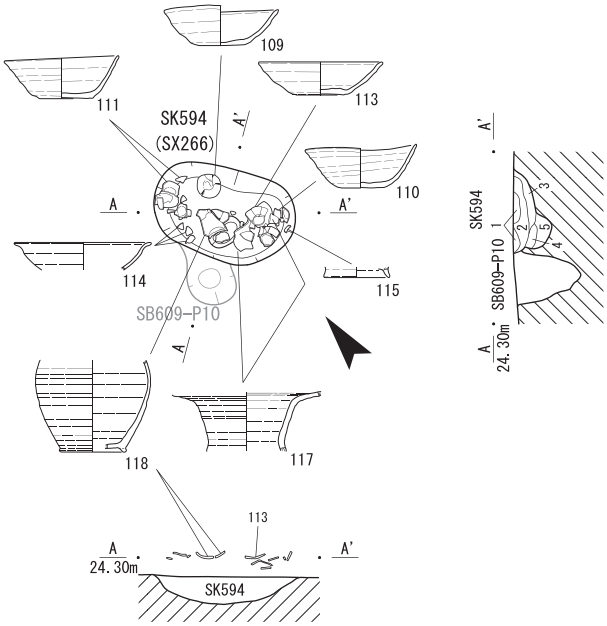
SK573



SK573

1　灰色シルト　粘性・しまり強
　黄灰色シルトブロック混ざる
2　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　黄褐色シルト多量に混ざる

SK594（SX266）



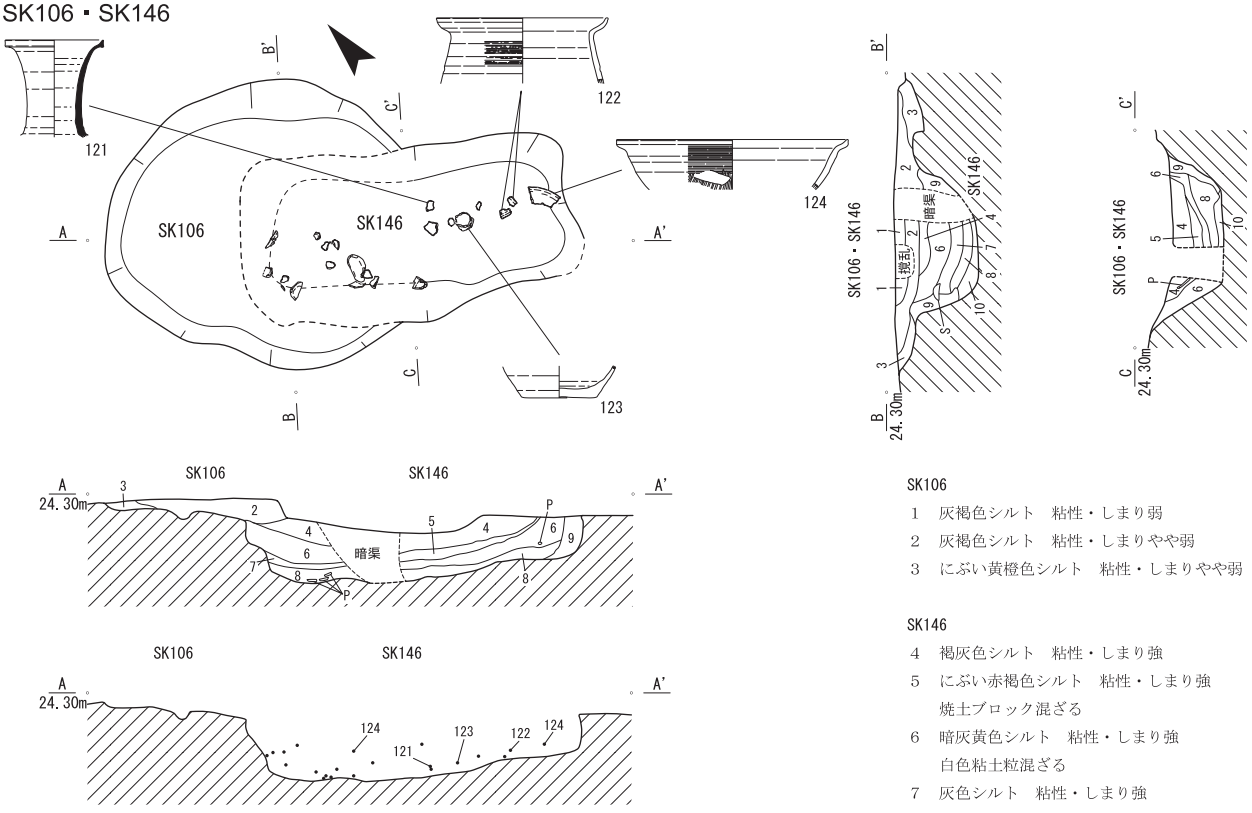
SK594

1　暗灰色シルト　粘性・しまりやや強
2　灰色シルト　粘性・しまりやや強
　灰黄色シルトブロック混ざる
3　灰白色シルト　粘性・しまり弱
　灰白色シルトブロック混ざる
4　灰褐色シルト　粘性・しまり強
　焼土層
5　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

0　SK493平面図(1:20)　1m

0　その他平面図・断面図(1:40)　2m

SK106・SK146



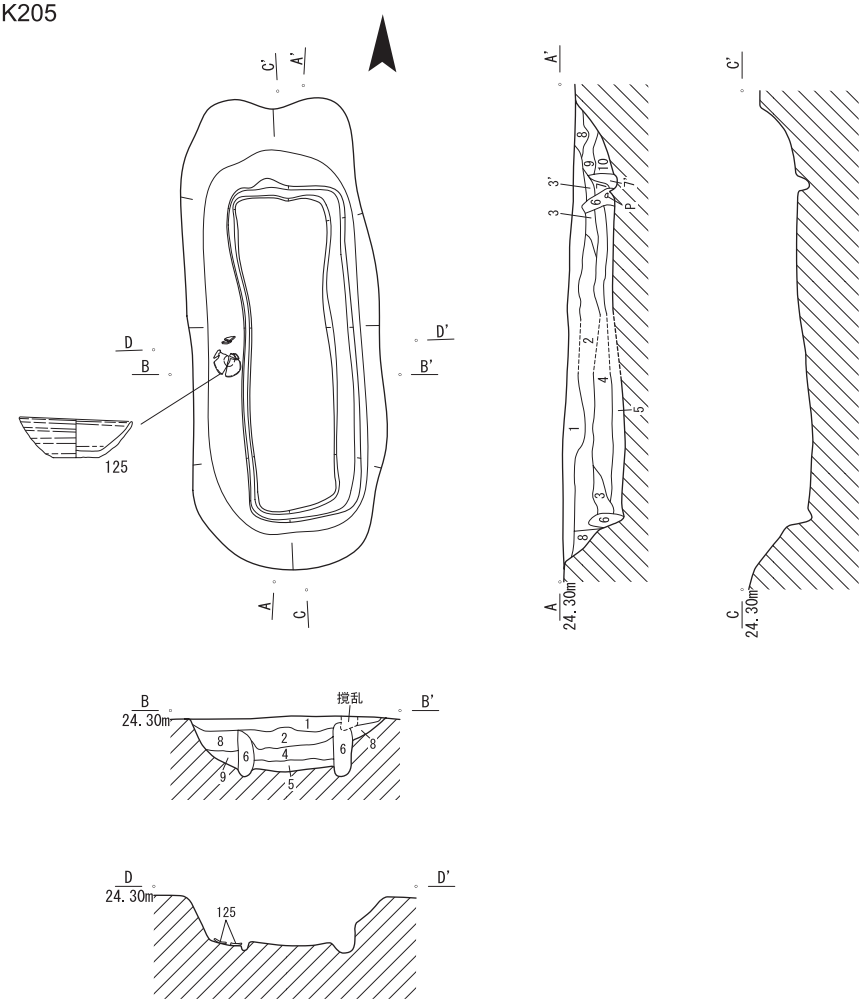
SK106

1　灰褐色シルト　粘性・しまり弱
2　灰褐色シルト　粘性・しまりやや弱
3　にぶい黄橙色シルト　粘性・しまりやや弱

SK146

4　褐灰色シルト　粘性・しまり強
5　にぶい赤褐色シルト　粘性・しまり強
　焼土ブロック混ざる
6　暗灰黄色シルト　粘性・しまり強
　白色粘土粒混ざる
7　灰色シルト　粘性・しまり強
8　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　炭化物粒多量に混ざる
9　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　褐灰色シルト多量に混ざる
10　褐灰色シルト　粘性・しまり強
　灰色シルトがブロック状に混ざる

SK205

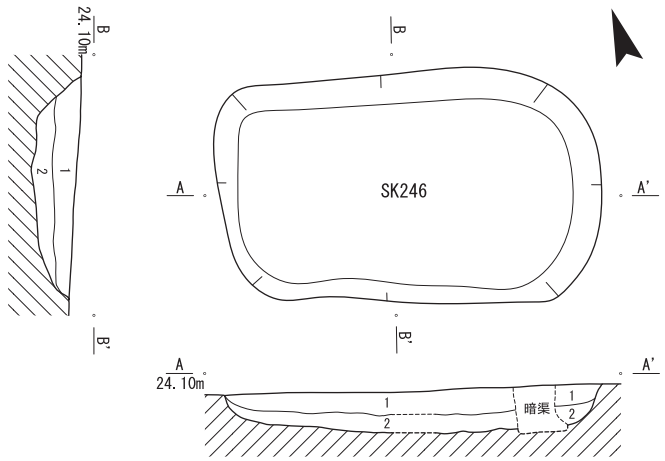


SK205

1　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや強
3　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
3’　3層に類似しやや色調が暗い
4　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
5　褐灰色シルト　粘性強・しまり弱
　微細な炭化物粒多量に混ざる
6　褐灰色粘土　粘性・しまり強
7　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
7’　7層に類似しやや色調が暗い
8　黄灰色シルト　粘性強　しまり弱
9　黄灰色粘土　粘性・しまり強
10　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

0　平面図・断面図(1:40)　2m

SK246



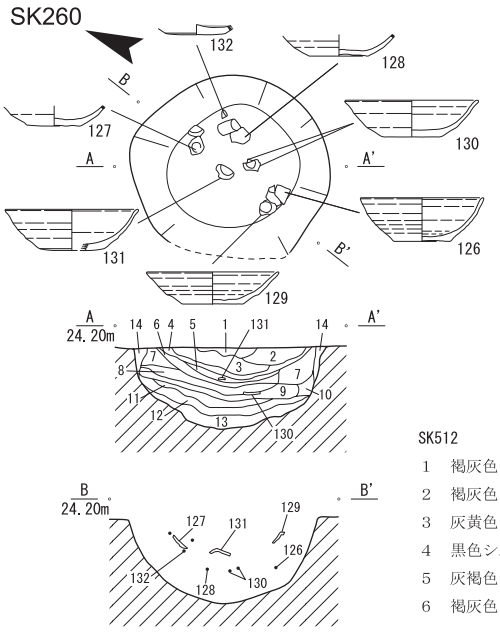
SK246
1　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトブロック混ざる
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトが多量に混ざる

SK482
1　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　φ３㎜炭化物粒少量混ざる
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
　φ５㎜炭化物粒少量混ざる
　灰オリーブ色シルト多量混ざる
3　灰オリーブ色シルト　粘性弱　しまり強
　黄灰色シルト少量混ざる

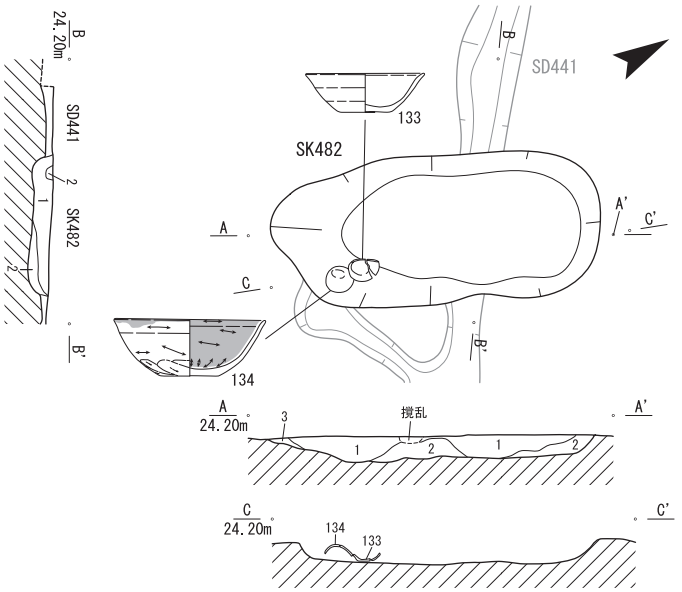
0　平面図・断面図(1:40)　2m

SK260

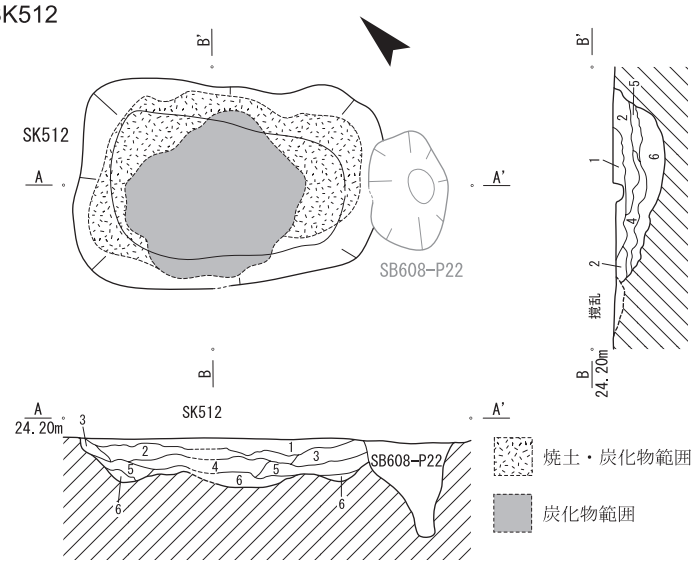
SK260
1　黒色シルト　粘性強　しまり弱
　焼土ブロック・φ10㎜の炭化物粒・灰白色土少量混ざる
2　黒色シルト　粘性強　しまり弱
　φ５㎜の炭化物粒多量に混ざる　灰白色土少量混ざる
3　褐色シルト　粘性弱　しまり強
　黒色土・φ３㎜の炭化物粒少量混ざる　焼土層
4　黒色シルト　粘性強　しまり弱
　φ２㎜の焼土ブロック少量混ざる　微細な炭化物粒
　多量に混ざる　灰白色土少量混ざる
5　黒色シルト　粘性強　しまり弱　焼土ブロック・灰白色
　土多量に混ざる　φ３㎜の炭化物粒少量混ざる　焼土層
6　黒色シルト　粘性強　しまり弱　焼土少量混ざる
　φ1.5㎜の炭化物粒多量に混ざる
7　黒色シルト　粘性強　しまり弱　オリーブ灰色土多量に
　混ざる　φ３㎜の炭化物粒少量混ざる
8　黒色シルト　粘性強　しまり弱　φ10㎜の炭化物粒・
　焼土ブロック多量に混ざる　焼土層
9　黒色シルト　粘性強　しまり弱　焼土ブロック少量混ざる
　φ20㎜の炭化物粒多量に混ざる
10　黒色シルト　粘性強　しまり弱
　オリーブ灰色土多量に混ざる　φ３㎜の炭化物粒少量混ざる
11　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり強
　黒褐色土多量に混ざる　φ５㎜の炭化物粒少量混ざる
12　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱　オリーブ灰色土多量に混ざる
13　灰色シルト　粘性弱　しまり強　オリーブ灰色土多量に混ざる
14　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり強　黒色土少量混ざる



SK482

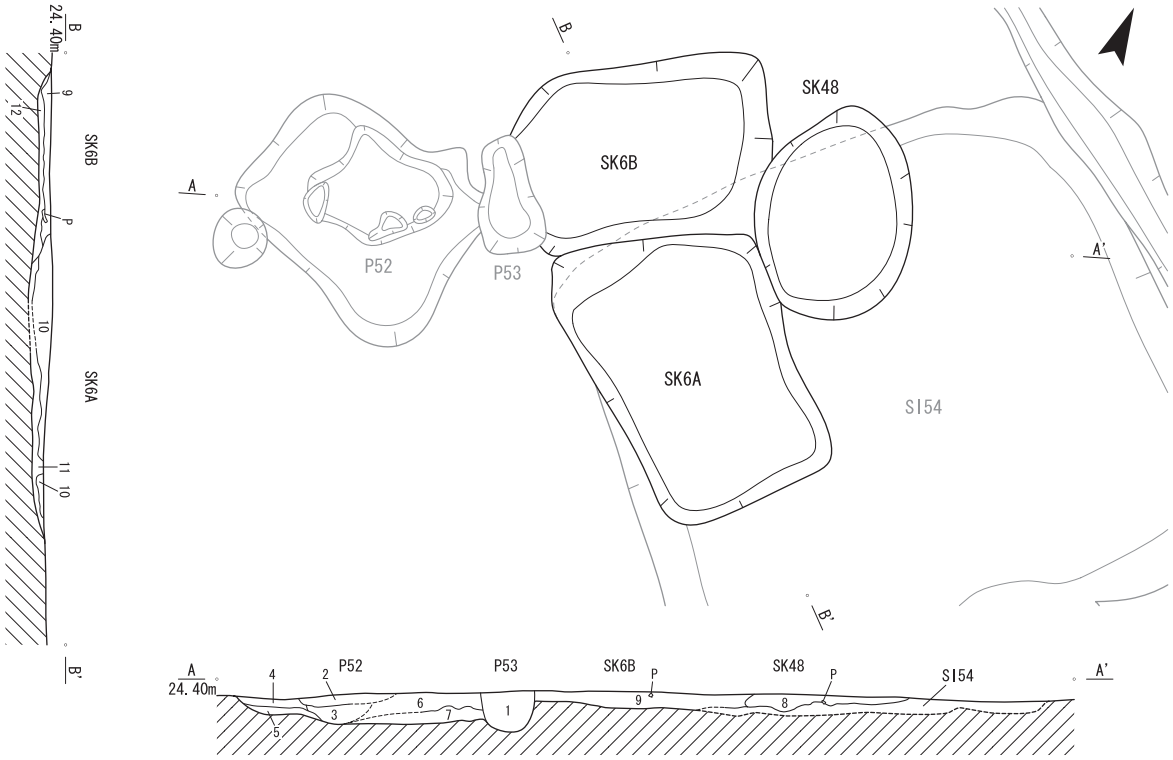


SK512



SK512
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱　φ５㎜の炭化物粒わずか　灰黄色シルトブロック多量に混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱　φ５㎜の炭化物粒わずか　灰黄色シルトブロック多量　骨片わずか
3　灰黄色シルト　粘性・しまり弱　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
4　黒色シルト　粘性・しまりやや弱　φ５㎜の炭化物を特に多量に含む　微細な骨片混ざる
5　灰褐色シルト　粘性・しまりやや弱　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる　灰黄色シルト・微細な骨片混ざる
6　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱　灰黄色シルトブロック多量に混ざる

SK6A･SK6B･SK48



P53
1　褐灰色粘土　粘性・しまり強

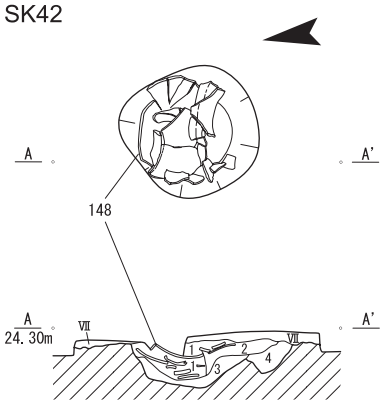
P52
2　褐灰色粘土　粘性・しまり強
3　褐灰色粘土　粘性・しまりやや強　灰オリーブ色シルトわずか混ざる
4　黄灰色粘土　粘性・しまりやや強　灰オリーブ色シルト多量に混ざる
5　灰黄色シルト　粘性・しまり弱　灰白色粘土混ざる
6　褐灰色粘土　粘性・しまり強　灰オリーブ色シルトブロックわずか混ざる
7　褐灰色粘土　粘性・しまり強　灰オリーブ色シルトブロック多量に混ざる

SK48
8　褐灰色粘土　粘性強　φ５㎜の炭化物粒混ざる

SK6A
10　褐灰色シルト　粘性・しまり強　φ10㎜の炭化物粒混ざる
11　灰黄色シルト　粘性・しまり弱　10層土ブロック混ざる

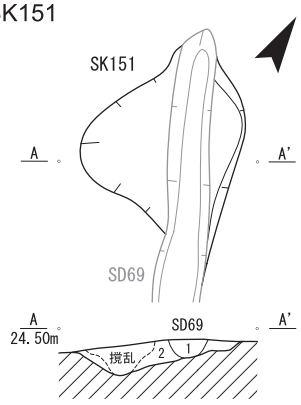
SK6B
9　黄灰色シルト　粘性・しまりやや強　微細な炭化物粒混ざる
12　灰白色シルト　粘性・しまり強

SK42



SK42
1　灰黄褐色粘土　粘性・しまりやや弱
2　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
3　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　黒色土ブロック混ざる
4　黄灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　黒色土ブロック混ざる

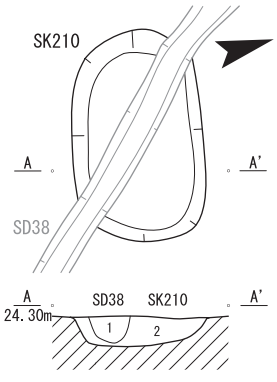
SK151



SD69
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰色シルトブロック多量に混ざる

SK151
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

SK210

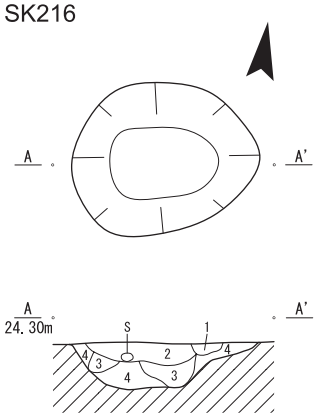


SD38
1　黒褐色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトブロック多量に混ざる

SK210
2　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルト多量に混ざる

0　平面図・断面図(1:40)　2m

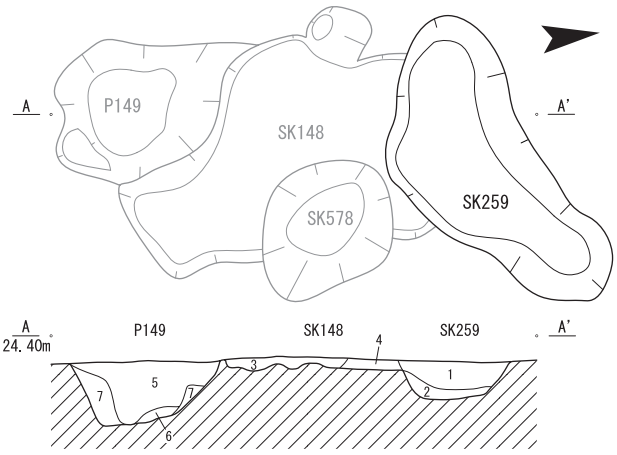
SK216



SK216

1　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　黒色シルト混ざる
2　黒褐色シルト　粘性・しまり強
3　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　黄灰色シルトブロック混ざる
4　黄灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルト多量に混ざる

SK259



P149

5　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　φ10㎜の炭化物粒多量に混ざる
6　灰黄褐色シルト　粘性・しまり弱
　φ10㎜の炭化物粒混ざる
7　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

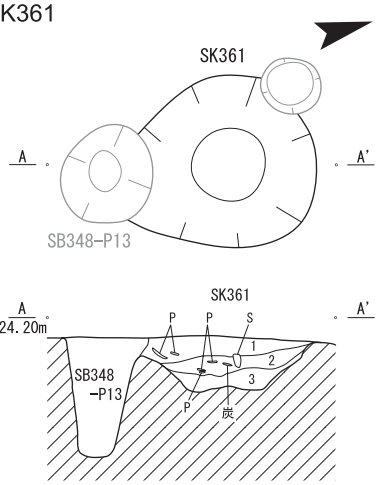
SK259

1　褐灰色シルト　粘性強　しまり弱
　φ10㎜の炭化物粒混ざる
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

SK148

3　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　焼土ブロック・φ30㎜の炭化物粒混ざる
4　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

SK361



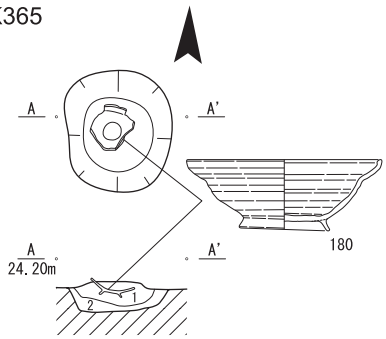
SK361

1　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルトブロックわずか混ざる
　φ５㎜の炭化物混ざる
2　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルトわずか混ざる
　炭化木あり
3　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰黄色シルトブロック混ざる

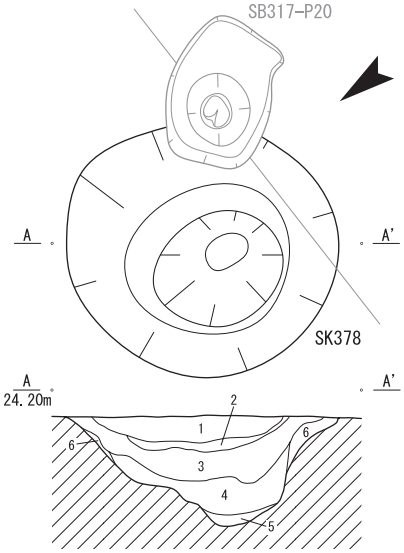
SK365

1　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
2　明オリーブ灰色シルト　粘性・しまり弱
　褐灰色シルトわずか混ざる

SK365



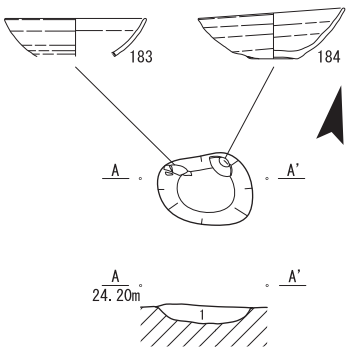
SK378



SK378

1　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　黄褐色砂少量混ざる
　φ５㎜の炭化物粒多量に混ざる
2　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　黒褐色シルト多量に混ざる
3　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　オリーブ灰色シルト少量混ざる
　φ７㎜の炭化物粒少量混ざる
4　黒褐色シルト　粘性強　しまり弱
　オリーブ灰色シルト多量に混ざる
　φ10㎜の炭化物粒少量混ざる
5　オリーブ灰色シルト　粘性強　しまり弱
　黒褐色シルト少量混ざる

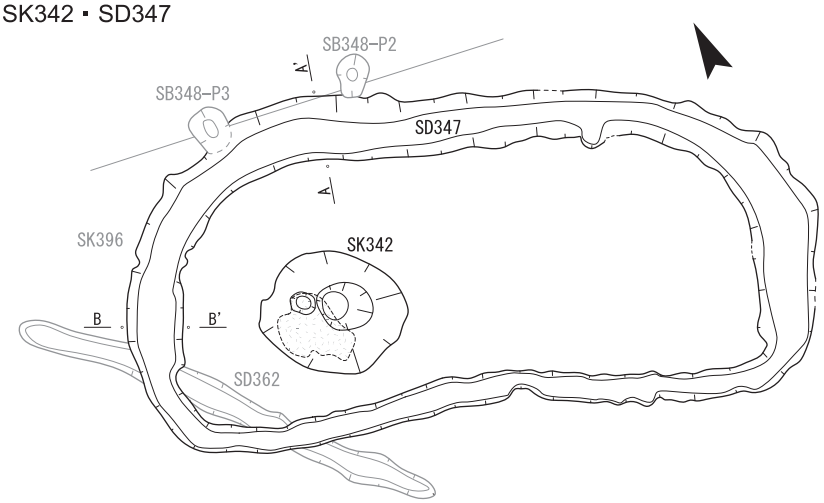
SK396

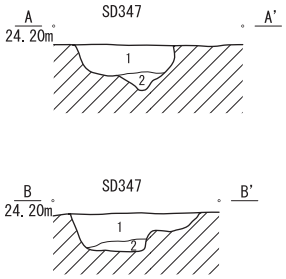


SK396

1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
　明オリーブ灰色シルトブロック多量に混ざる
　φ10㎜の炭化物わずか混ざる

SK342・SD347

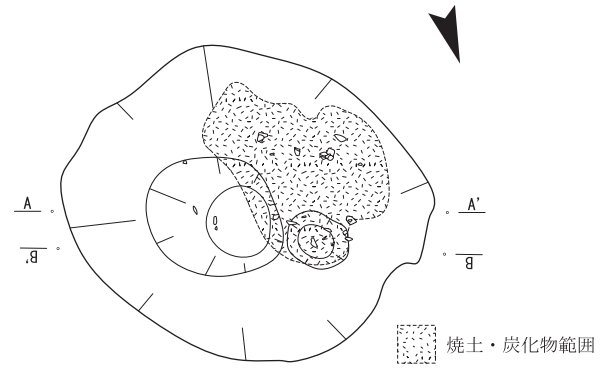


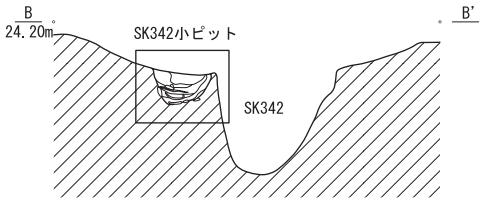


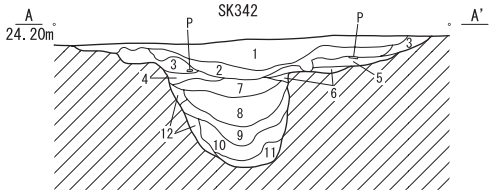
SD347（土層番号は共通）

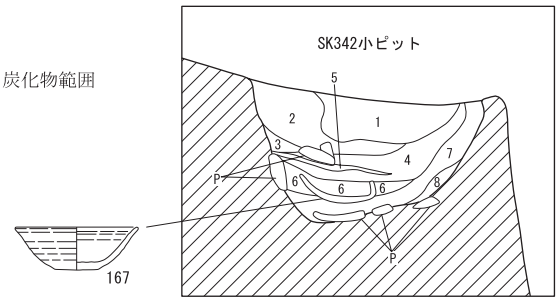
1　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　黄褐色シルトブロック混ざる
2　黄褐色シルト　粘性・しまり強
　1層土ブロック混ざる

SK342









1：10 拡大図

SK342

1　黒色シルト　粘性・しまり強　炭層
2　黒褐色シルト　粘性・しまり強　φ１～３㎜の炭化物粒多量混ざる　炭層
3　灰黄色シルト　粘性・しまり弱　φ10㎜の炭化物粒多量混ざる
4　黒褐色シルト　粘性・しまり強　φ10㎜の焼土ブロック・炭化物粒混ざる
5　浅黄橙色シルト　粘性弱　しまり強　焼土層
6　灰白色シルト　粘性弱　しまり強　還元化焼土層
7　暗灰色シルト　粘性・しまり極めて強
　灰白色シルト・灰黄色シルトブロック・φ５㎜の炭化物粒多量に混ざる
8　黒色シルト　粘性・しまり弱　灰白色土（灰）混ざる　炭・灰層
9　灰色シルト　粘性・しまり非常に強　灰白シルト・微細な炭化物粒多量に混ざる
10　黒褐色シルト　粘性・しまり非常に強　灰白シルトブロック・微細な炭化物粒混ざる
11　黒褐色シルト　粘性・しまり強　灰白色シルトブロック混ざる
12　灰白色シルト　粘性・しまり弱

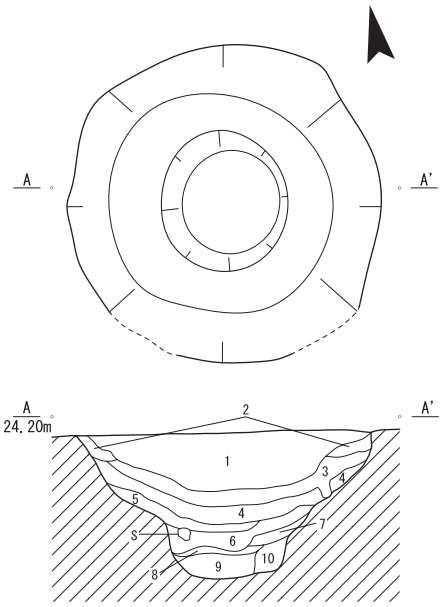
SK342 小ピット

1　黒褐色シルト　粘性・しまり強　炭層
2　橙色シルト　粘性弱　しまり強　焼土層
3　灰白シルト　粘性弱　しまり強
4　黒褐色シルト　粘性・しまり強　炭層
5　２層と同質　焼土層
6　１層と同質　炭層
7　４層に類似し焼土ブロック多量に混ざる　炭・焼土層
8　２層と同質　焼土層

0　平面図・断面図(1:40)　2m

0　SD347平面図(1:100)　5m

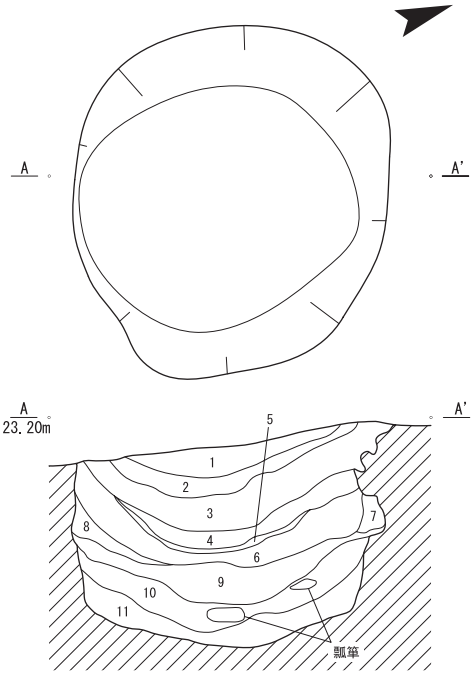
SE403



SE403

1　黒色粘土　粘性・しまり中～やや強　明オリーブ灰色ブロックわずか混ざる　植物遺体多量に混ざる
2　黒色粘土　粘性・しまり中　灰黄色シルトブロック多量に混ざる　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
3　黒色～黒褐色粘土　粘性・しまり中～やや強　明オリーブ灰色ブロック混ざる　植物遺体多量に混ざる
4　褐灰色粘土　粘性・しまり中　明オリーブ灰色ブロック多量に混ざる　φ５㎜炭化物わずか混ざる
5　明オリーブ灰色シルト　粘性・しまりやや弱　灰色シルトブロック多量に混ざる
6　褐灰色シルト　粘性・しまり中～やや弱　明オリーブ灰色砂質シルトが互層に堆積　暗灰色シルト混ざる　植物遺体混ざる
7　明オリーブ灰色シルト　粘性・しまりやや弱　灰色シルトが互層に堆積
8　黒褐色シルト　粘性・しまり中～やや弱　明オリーブ灰色シルトブロック混ざる　植物遺体多量に混ざる
9　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱　明オリーブ灰色ブロック多量に混ざる
10　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱　明オリーブ灰色ブロック多量に混ざる　φ５㎜の炭化物粒混ざる　９層より砂質

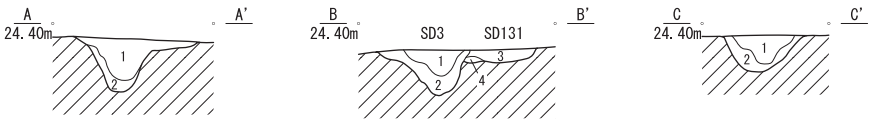
SE677



SE677

1　黒褐色～黒色粘土　粘性・しまり中
2　黒色粘土　粘性・しまり中　φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる
3　灰色粘土　粘性・しまり中　φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる
4　灰色～灰褐色粘土　粘性・しまり中　φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる　明オリーブ灰色粘土と植物遺体が互層に堆積
5　明オリーブ灰色粘土　粘性・しまり中　灰色土混ざる
6　４に類似しやや色調明るい
7　明オリーブ灰色粘土　粘性・しまり中　灰色土ブロック混ざる
8　灰色粘土　粘性・しまり中　明オリーブ灰色土混ざる　φ10㎜の炭化物わずか混ざる
9　明オリーブ灰色シルト　粘性・しまり中
10　灰色～灰褐色シルト　粘性・しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトと植物遺体が互層に堆積
11　灰色～灰褐色シルト　粘性・しまりやや弱　明オリーブ灰色砂質シルト多量に混ざる　φ10㎜の炭化物わずか混ざる

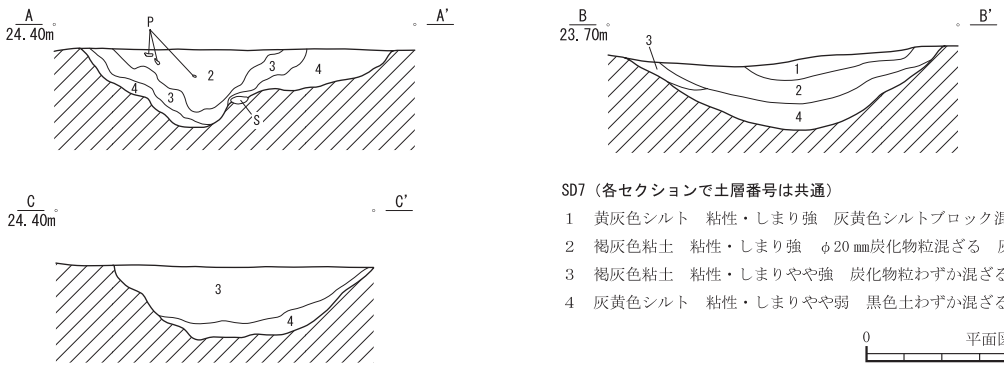
SD3



SD3（各セクションで土層番号は共通）

1　灰色粘土　粘性・しまり強　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
2　明オリーブ灰色粘土　粘性・しまり強　１層土混ざる
3　褐灰色シルト　粘性・しまり弱　明オリーブ灰色シルト混ざる
4　明オリーブ灰色シルト　粘性・しまり弱　灰色土わずか混ざる

SD7

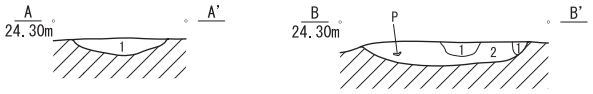


SD7（各セクションで土層番号は共通）

1　黄灰色シルト　粘性・しまり強　灰黄色シルトブロック混ざる
2　褐灰色粘土　粘性・しまり強　φ20㎜炭化物粒混ざる　灰白色土ブロックわずか混ざる
3　褐灰色粘土　粘性・しまりやや強　炭化物粒わずか混ざる　灰白色土ブロックわずか混ざる
4　灰黄色シルト　粘性・しまりやや弱　黒色土わずか混ざる

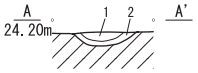
0　平面図・断面図(1:40)　2m

SD8



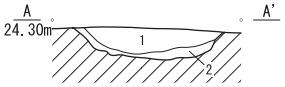
SD8
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱　明オリーブ灰色シルト
　ブロック多量に混ざる　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
2　明オリーブ灰色シルト　粘性・しまり弱　褐灰色シルトわずか混ざる

SD97

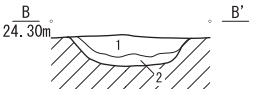


SD97
1　褐灰色粘土　粘性・しまりやや強
　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまりやや弱
　灰色土わずか混ざる

SD267

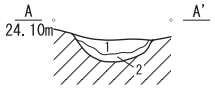


SD267
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱　褐灰色シルトわずか混ざる



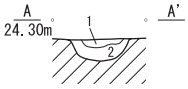
SD267
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱　褐灰色シルトわずか混ざる

SD273



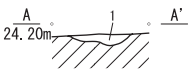
SD273
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱　φ５㎜の炭化物わずか混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱　褐灰色シルトわずか混ざる

SD302



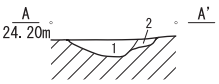
SD302
1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱　明オリーブ灰色シルトブロック
　多量に混ざる　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
2　明オリーブ灰色シルト　粘性・しまり弱　褐灰色シルトわずか混ざる

SD480

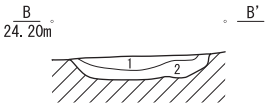


SD480
1　黄灰色シルト　粘性・しまり弱　黄褐色砂多量に混ざる

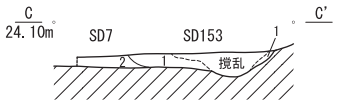
SD153



SD153
1　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱　黄灰色土少量混ざる

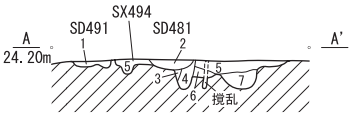


SD153
1　黒褐色シルト　粘性・しまり強　灰黄色シルトブロック混ざる
2　黄灰色シルト　粘性・しまり強　黒褐色土ブロック混ざる



SD153
1　黄灰色シルト　粘性・しまり弱　灰オリーブ色土混ざる
　φ５㎜の炭化物粒多量に混ざる
SD7
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱　灰オリーブ色土多量に混ざる
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる

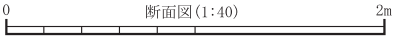
SD481・SD491・SX494



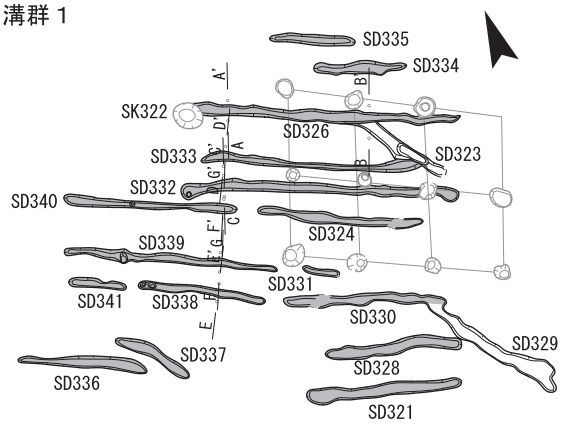
SD491
1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強　灰オリーブ色シルト少量混ざる

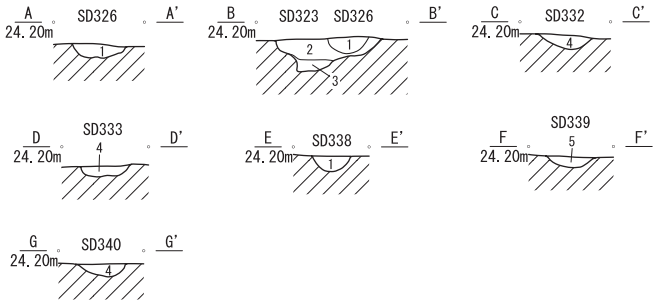
SD481
2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
3　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
4　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強　灰オリーブ色シルト少量混ざる

SX494
5　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
　灰オリーブ色シルト少量混ざる
6　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
7　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強



溝群１





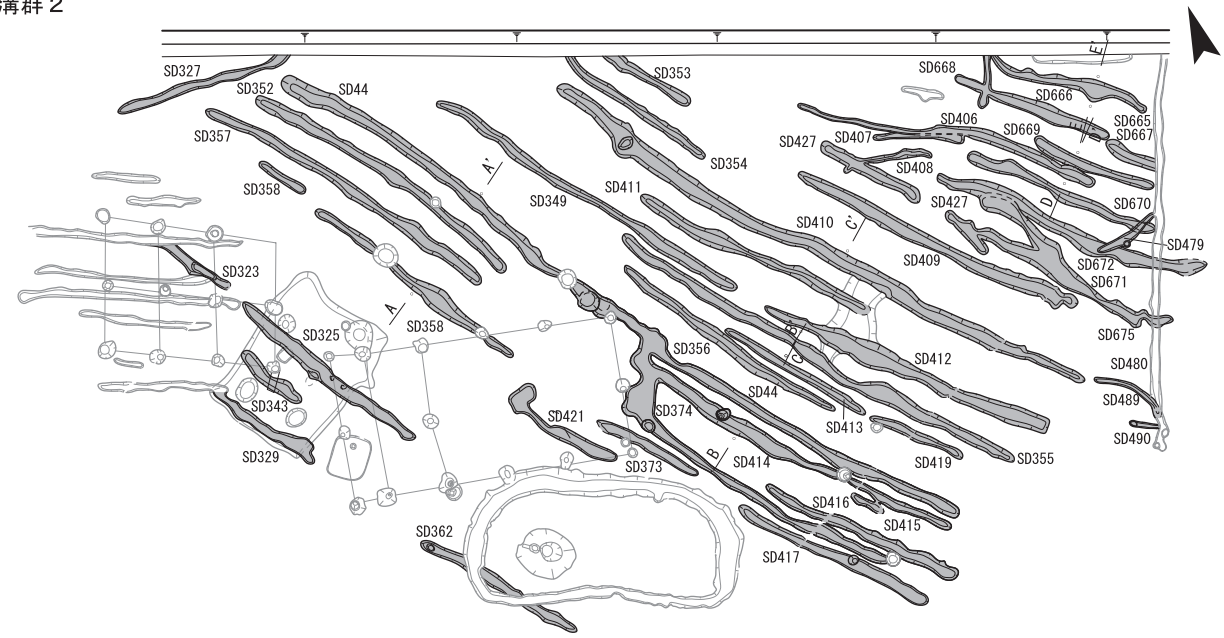
SD326・SD338（土層番号は共通）
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱

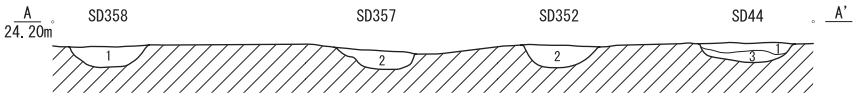
SD323
2　褐灰色シルト　粘性・しまり強
φ10㎜の炭化物粒混ざる
3　褐灰色シルト　粘性・しまり強
微小な炭化物粒多量に混ざる

SD332・SD333・SD340（土層番号は共通）
4　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
灰色シルトブロック混ざる

SD339
5　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
灰色シルトブロック混ざる

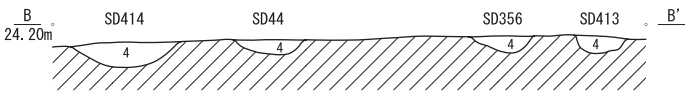
溝群２



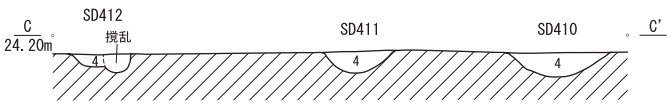


SD358・SD44（土層番号は共通）
1　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

SD352・SD357
2　褐灰色シルト　粘性・しまり弱



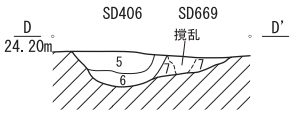
SD44・SD410 ～ SD414
3　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
１層より色調明るい
4　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
灰黄色シルト混ざる

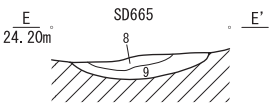


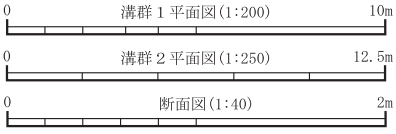
SD406
5　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
褐灰色シルトブロック混ざる
6　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
灰黄色細砂混ざる

SD665
8　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
9　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
黄灰色シルトブロック少量混ざる

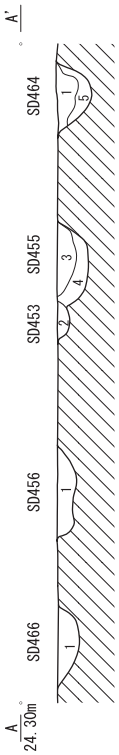
SD669
7　灰黄色シルト　粘性・しまり弱







溝群３



溝群３　Ａセクション

SD466・SD456・SD464

1　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
灰黄色シルト多量に混ざる
φ５㎜の炭化物わずか混ざる

SD453

2　黒褐色～褐灰色シルト　粘性・
しまりやや弱　明オリーブ色シルト
ブロックわずか混ざる　φ５㎜の炭
化物わずか混ざる

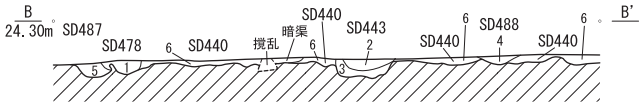
SD455

3　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
明オリーブ色シルトわずか混ざる
φ５㎜の炭化物わずか混ざる

4　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
明オリーブ色シルト　φ５㎜の炭化
物わずか混ざる

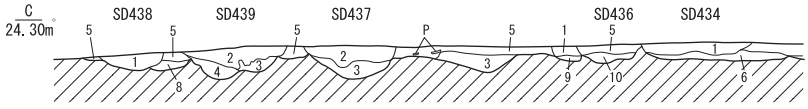
SD464

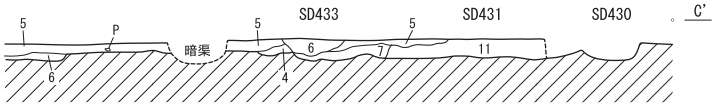
5　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
灰黄色シルト混ざる



溝群３　Ｂセクション

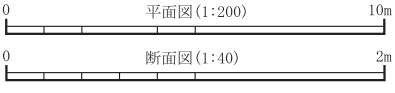
1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
3　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり強
4　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
5　褐灰色シルト　粘性弱　しまり強
6　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
オリーブ灰色シルト混ざる



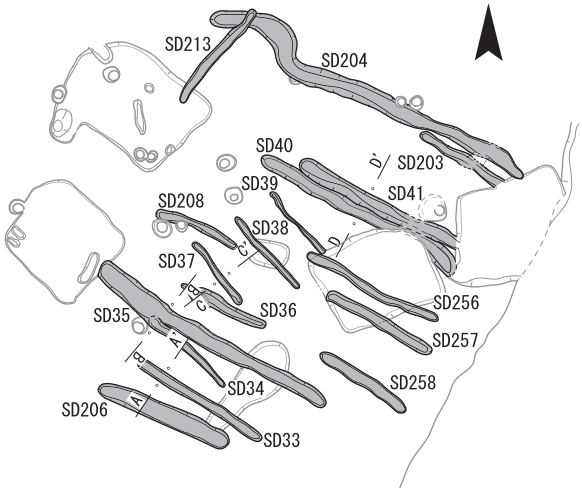


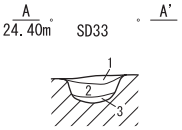
溝群３　Ｃセクション

1　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱　灰黄色シルト
ブロック混ざる　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
2　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱　灰黄色シルト
ブロック・φ10㎜の炭化物粒・微細な骨片わずか混ざる
3　褐灰色シルト　粘性・しまり弱　灰黄色シルトブロック
多量に混ざる
4　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱　灰黄色シルトブロック
多量に混ざる
5　黒褐色～褐灰色シルト　粘性・しまり弱
φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる
6　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
明オリーブ色シルトブロック多量に混ざる
φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
7　６に類似し明オリーブ色シルトやや多く混ざる
8　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
灰黄色シルト混ざる
9　黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱
灰黄色シルトブロック多量に混ざる
10　褐灰色シルト　粘性・しまりやや弱
灰黄色シルトブロックわずか混ざる
11　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
明オリーブ色シルト多量に混ざる
φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる

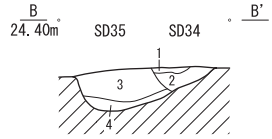


溝群４



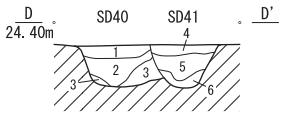


SD33
1　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色シルトブロック多量に混ざる
　φ１㎜の炭化物粒少量混ざる
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトブロック少量混ざる
3　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
　黄灰色シルト・黄褐色砂少量混ざる



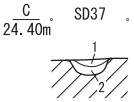
SD34
1　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　褐灰色粘土ブロック多量に混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまり強
　黄灰色シルトブロック・
　φ１㎜の炭化物粒少量混ざる

SD35
3　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色粘土ブロック・
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
4　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色シルトブロック・
　黄褐色砂少量混ざる



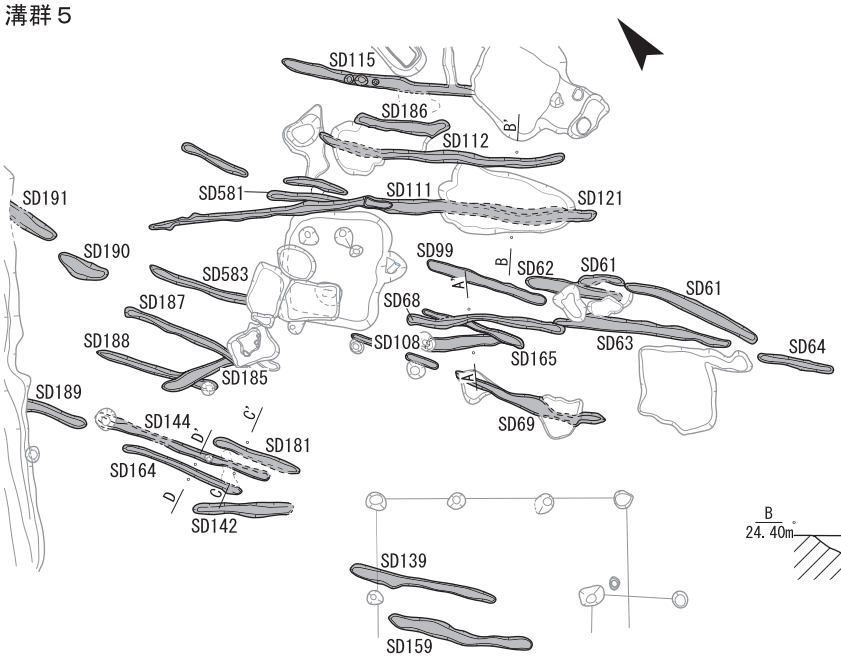
SD40
1　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　褐灰色シルトブロック多量に混ざる
　φ１㎜の炭化物粒少量混ざる
2　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色シルトブロック・
　φ３㎜の炭化物粒少量混ざる
3　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色シルトブロック少量混ざる

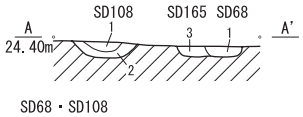
SD41
4　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　褐灰色～灰黄色シルトブロック・
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
5　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色シルトブロック・
　φ２㎜の炭化物粒少量混ざる
3　灰黄色シルト　粘性・しまり強
　黄灰色シルトブロック少量混ざる



SD37
1　黄灰色シルト　粘性・しまり強
　褐灰色シルトブロック多量に混ざる
2　暗灰黄色砂質シルト　粘性弱　しまり強
　黄灰色シルトブロック少量混ざる

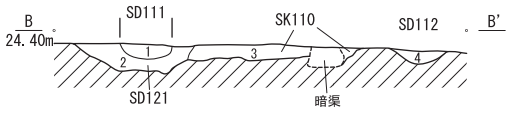
溝群５





SD68・SD108
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
2　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

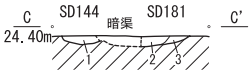
SD165
3　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　微細な炭化物粒混ざる



SD111・SD121
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　微細な炭化物粒多量混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
　微細な炭化物粒少量混ざる

SK110
3　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

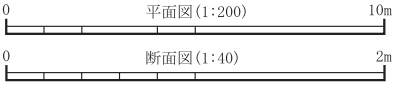
SD112
4　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　微細な炭化物粒多量に混ざる



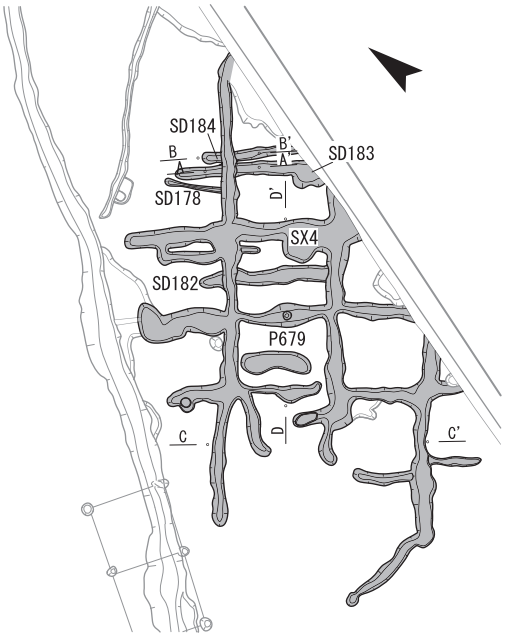
SD144
1　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　灰黄色土多量に混ざる

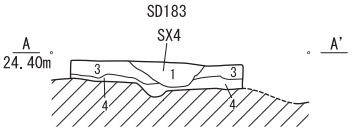
SD181
2　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　灰黄色土少量混ざる
3　灰黄色シルト　粘性弱　しまり強
　黄灰色土少量混ざる

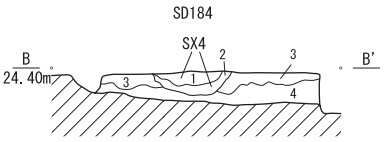
SD164
1　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　黄灰色土・灰黄色土少量混ざる



溝群６





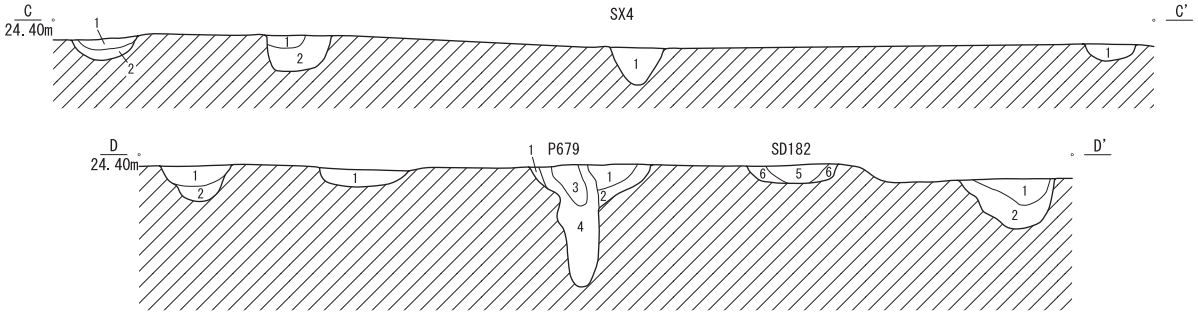


SX4（土層番号は共通）

1　褐灰色粘土　粘性・しまり強
2　褐灰色粘土　粘性・しまりやや強
　明オリーブ灰色シルトわずか混ざる

SD183・SD184

3　褐灰色粘土　粘性・しまり強
　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる
　灰オリーブ色シルト多量に混ざる
4　明オリーブ灰色シルト　粘性・しまり弱
　褐灰色土わずか混ざる



SX4　C・Dセクション共通

1　褐灰色シルト　粘性・しまり強　φ５㎜の炭化物粒混ざる
　灰黄色シルトブロック混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまり弱　灰黄色シルトブロック１層より多く混ざる

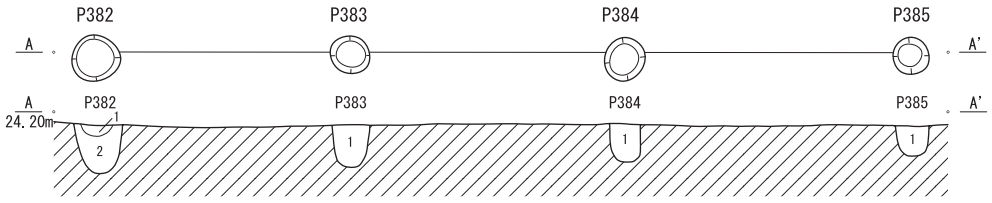
P679

3　褐灰色粘土　粘性・しまり強
　炭化物粒混ざる
4　褐灰色粘土　粘性・しまり強
　φ10㎜の炭化物粒多量に混ざる

SD182

5　褐灰色粘土　粘性・しまりやや強
6　灰黄色シルト　粘性やや弱
　灰色土わずか混ざる

SA680



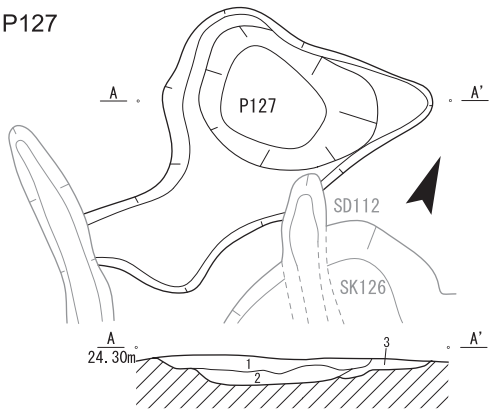
P382

1　黄灰色シルト　粘性・しまり強
2　オリーブ灰色シルト　粘性弱　しまり強　黒褐色シルト多量に混ざる　黄褐色砂少量混ざる

P383 ～ P385（土層番号は共通）

1　黒褐色シルト　粘性・しまり強　オリーブ灰色シルト少量混ざる

P127



P155

1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
2　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトブロック混ざる

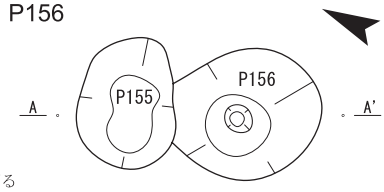
P156

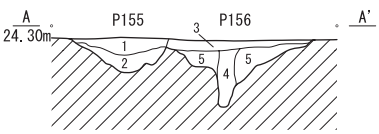
3　１層土に類似し黄灰色シルト多量に混ざる
4　３層土に類似し色調やや暗い
5　２層土と同質

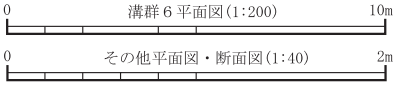
P127

1　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　灰黄色シルトブロック少量混ざる
2　灰黄色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルト多量に混ざる
3　２層土に類似し炭化物粒多量に混ざる

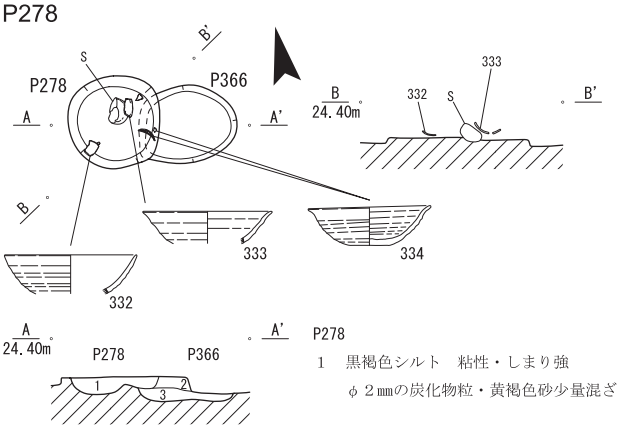
P156







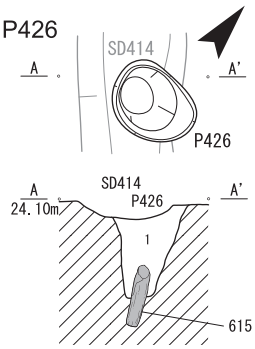
P278



P278
1　黒褐色シルト　粘性・しまり強
　φ２㎜の炭化物粒・黄褐色砂少量混ざる

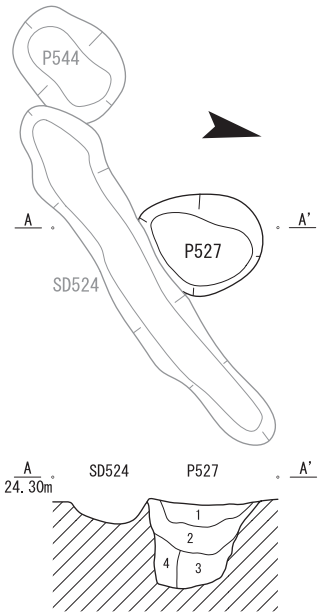
P366
2　黄灰色シルト　粘性弱　しまり強
　黄褐色砂多量に混ざる
3　黄褐色砂　粘性なし　しまり強
　黄灰色土少量混ざる

P426



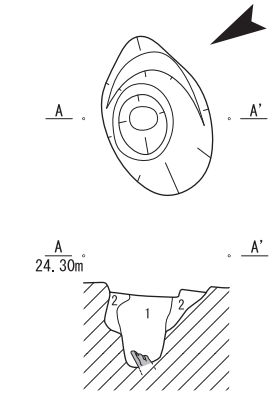
P426
1　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルト多量に混ざる

P527



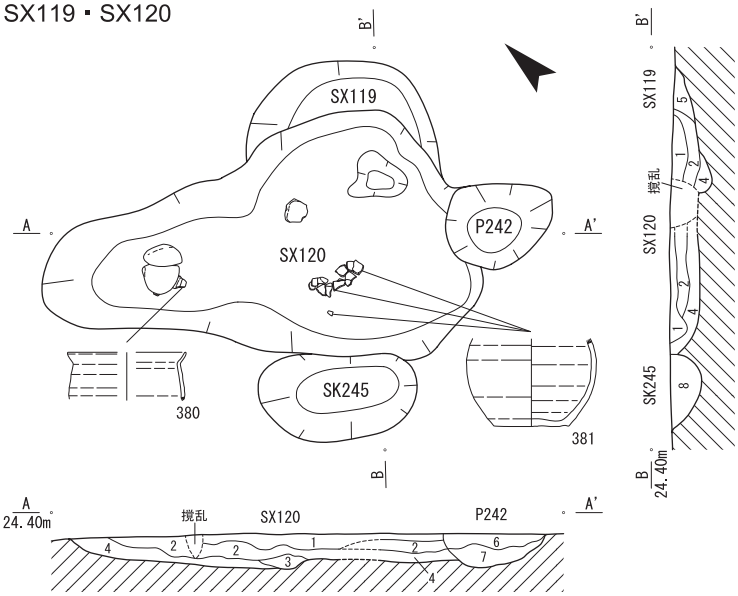
P527
1　黒褐色シルト　粘性・しまり
　やや弱　φ５㎜の炭化物粒わずか混ざる　灰黄色シルトブロック混ざる
2　黒褐色シルト　粘性・しまり
　やや弱　φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる　灰黄色シルトブロック多量に混ざる
3　黒褐色シルト　粘性・しまり
　やや弱　φ10㎜の炭化物粒わずか混ざる　灰黄色シルトブロック特に多量に混ざる
4　黒褐色シルト　粘性・しまり
　やや弱
　灰黄色シルトブロック多量に混ざる

P651



P651
1　灰色シルト　粘性・しまりやや強
2　灰色シルト　粘性・しまりやや強
　明黄褐色シルトブロック混ざる

SX119・SX120



SX120
1　黄灰色シルト　粘性やや強　しまり弱
　φ10㎜の炭化物粒混ざる
2　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　φ10㎜の炭化物粒多量に混ざる
3　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　灰黄色シルトブロック混ざる
4　黄灰色シルト　粘性・しまり弱
　微細な炭化物粒混ざる

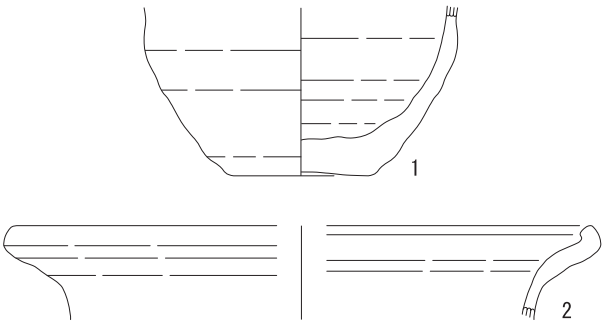
SX119
5　黄灰色シルト　粘性・しまり弱

P242
6　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　微細な炭化物粒混ざる
7　灰黄色細砂　粘性なし　しまり弱

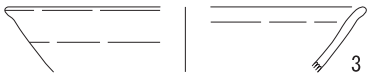
SK245
8　褐灰色シルト　粘性・しまり弱
　φ10㎜の炭化物粒多量に混ざる

0　平面図・断面図(1:40)　2m

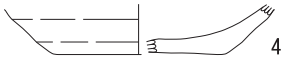
SB166



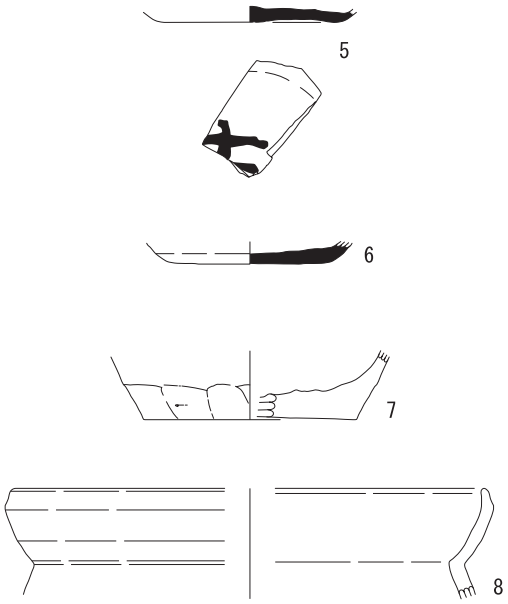
SB316



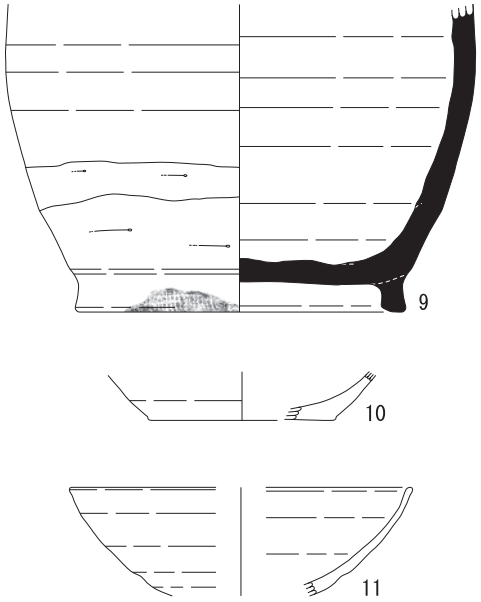
SB317



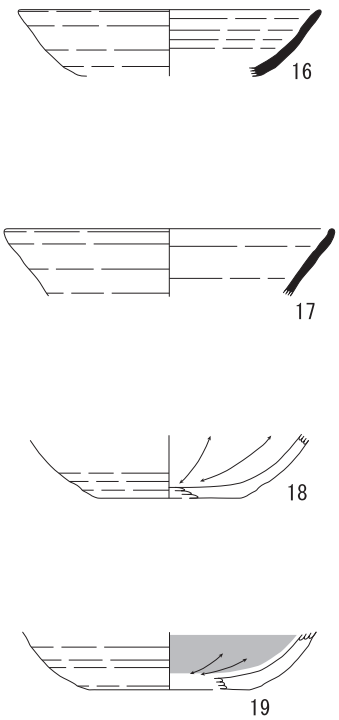
SB318



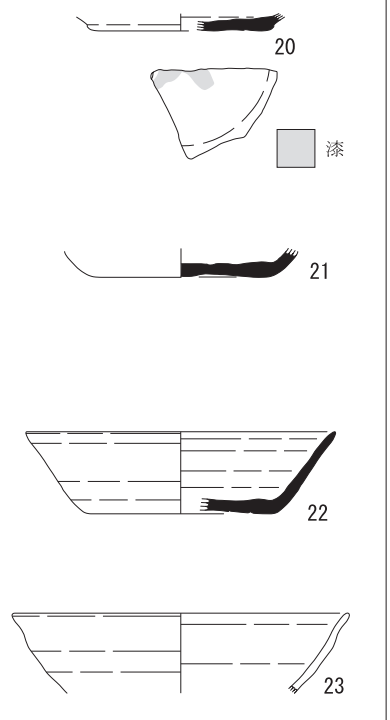
SB348

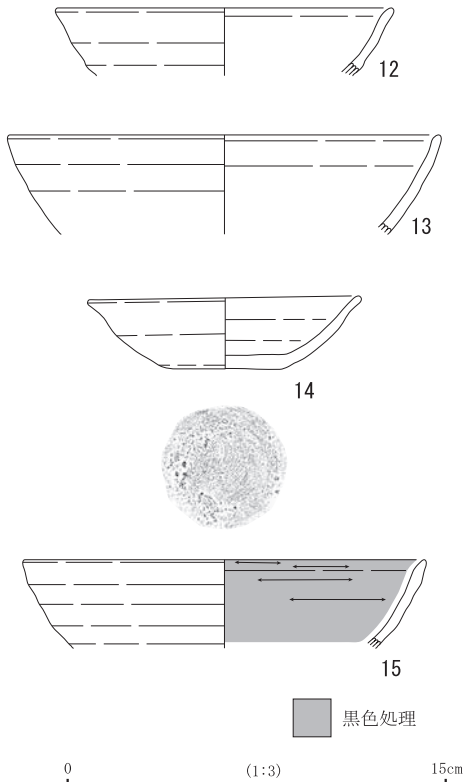


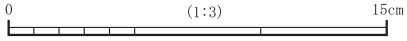
SB571

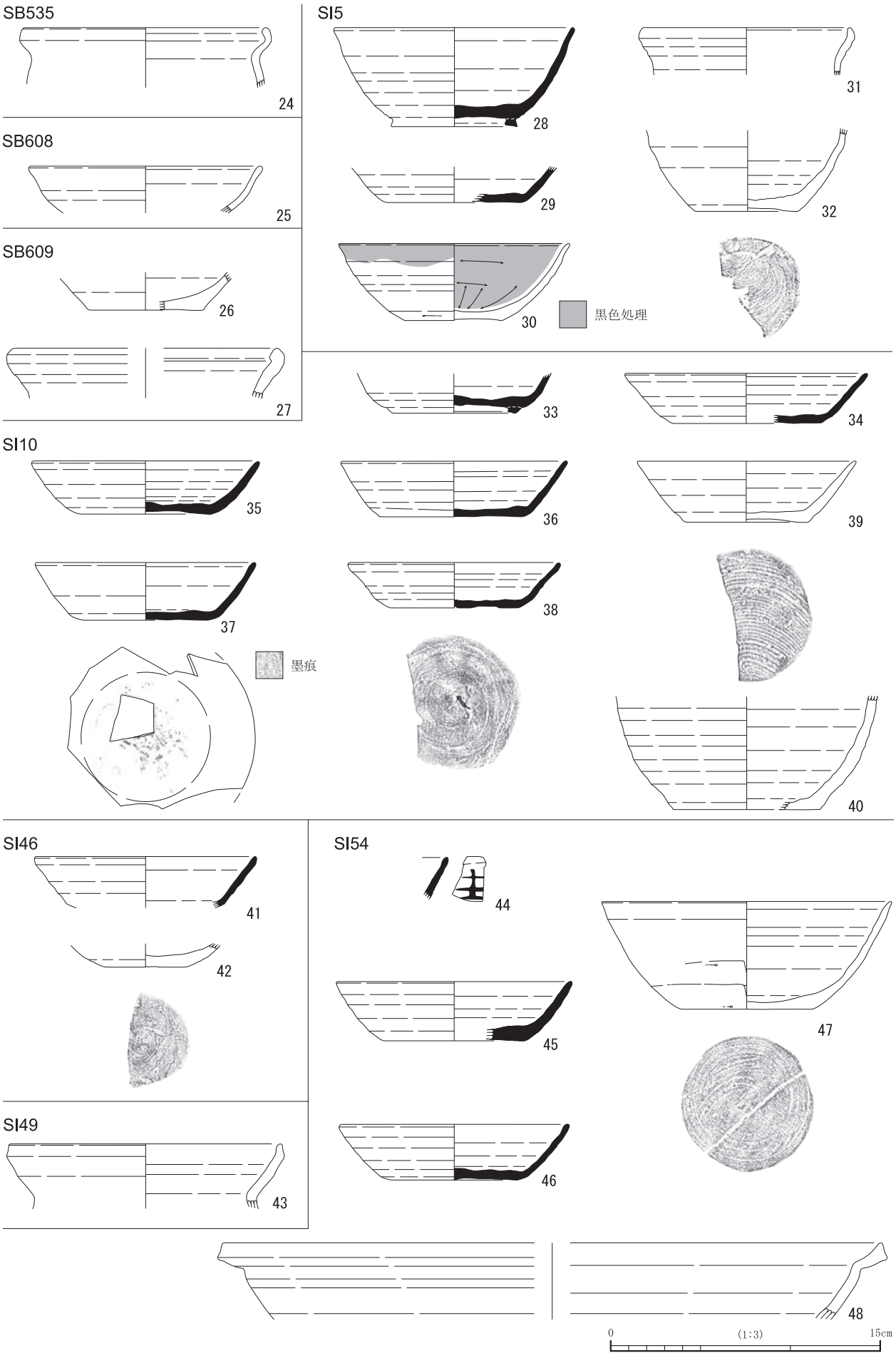


SB574

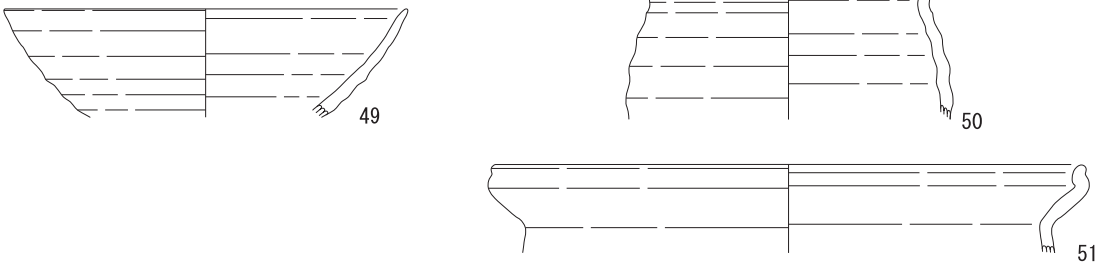




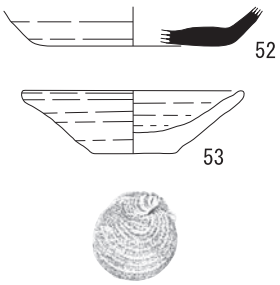



SB535
24
SB608
25
SB609
26
27
SI5
28
29
30
黒色処理
31
32
33
34
SI10
35
36
37
墨痕
38
39
40
SI46
41
42
SI49
43
SI54
44
45
46
47
48
0
(1:3)
15cm

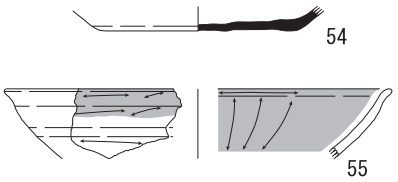
SI70



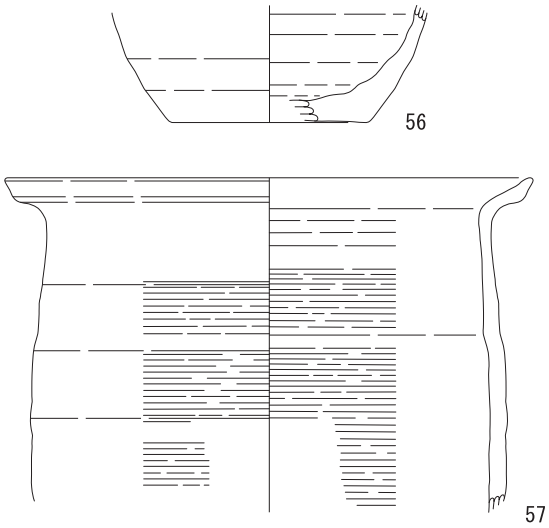
SI130



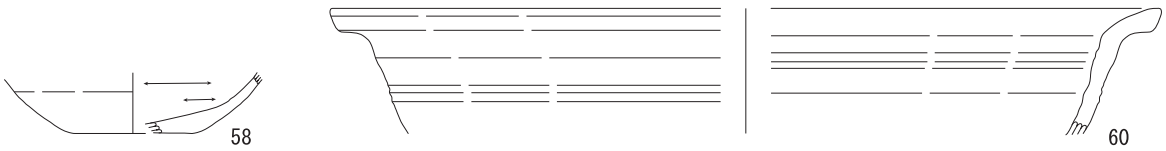
SI211

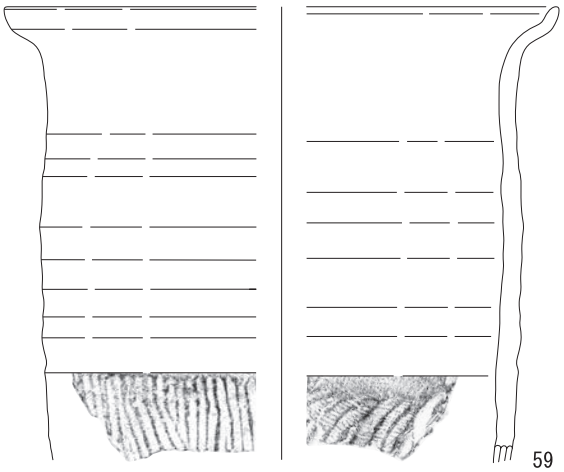


SI212内SD254

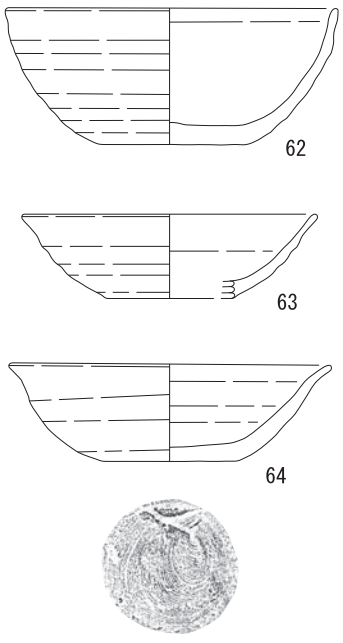


SI268

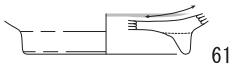




P2



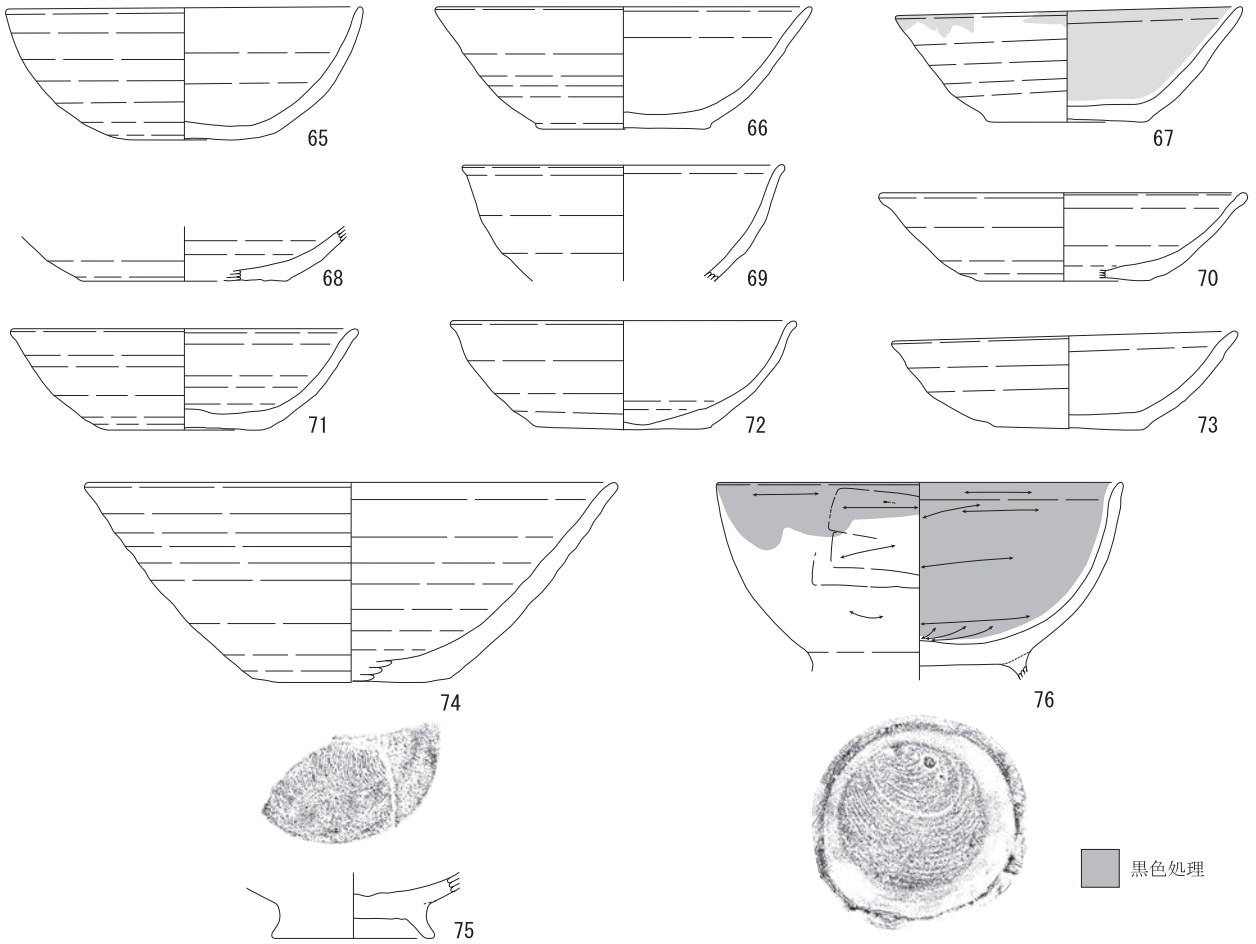
SI429



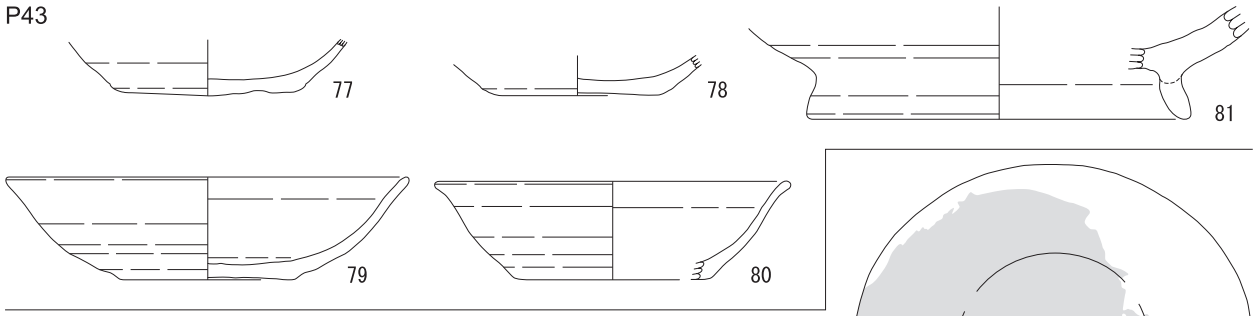
黒色処理

0　(1:3)　15cm

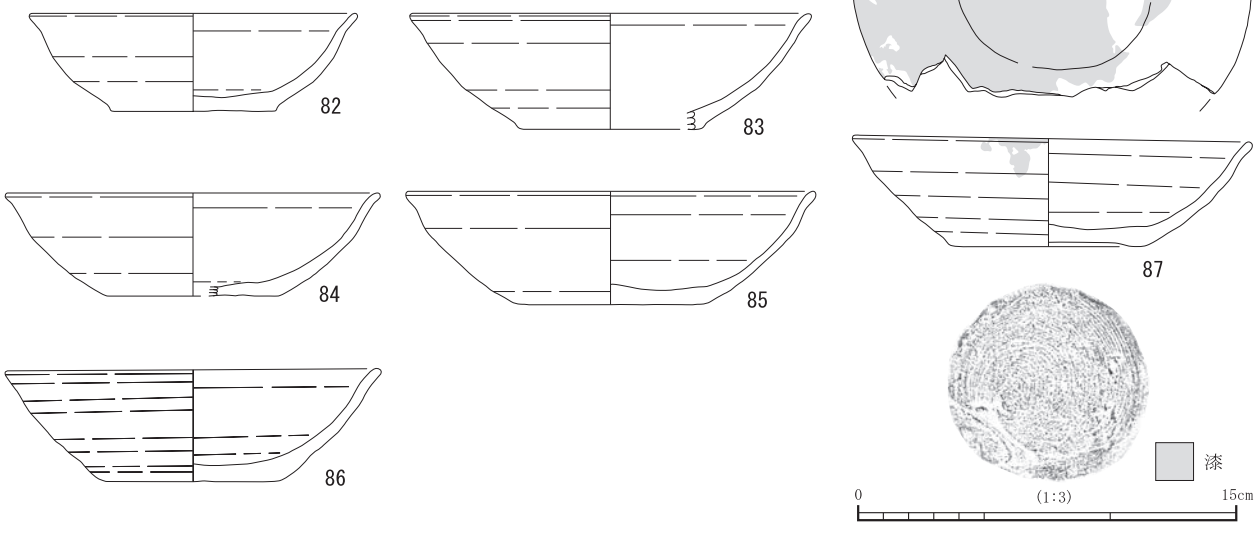
SX32



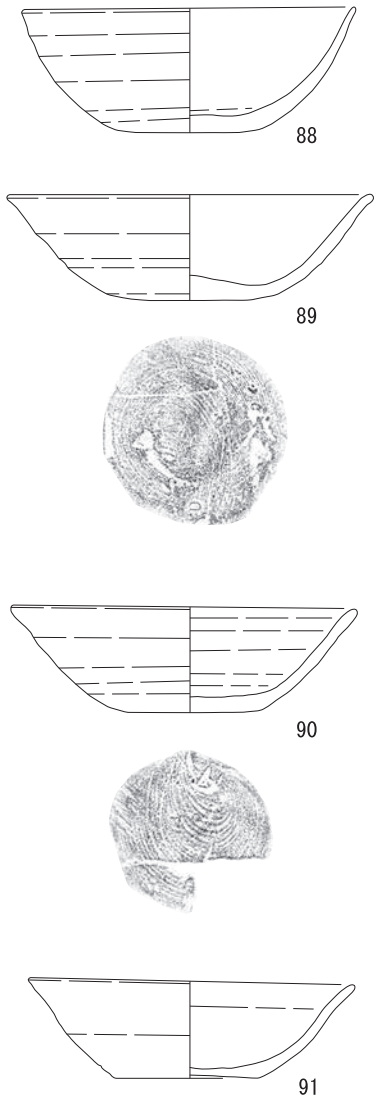
P43



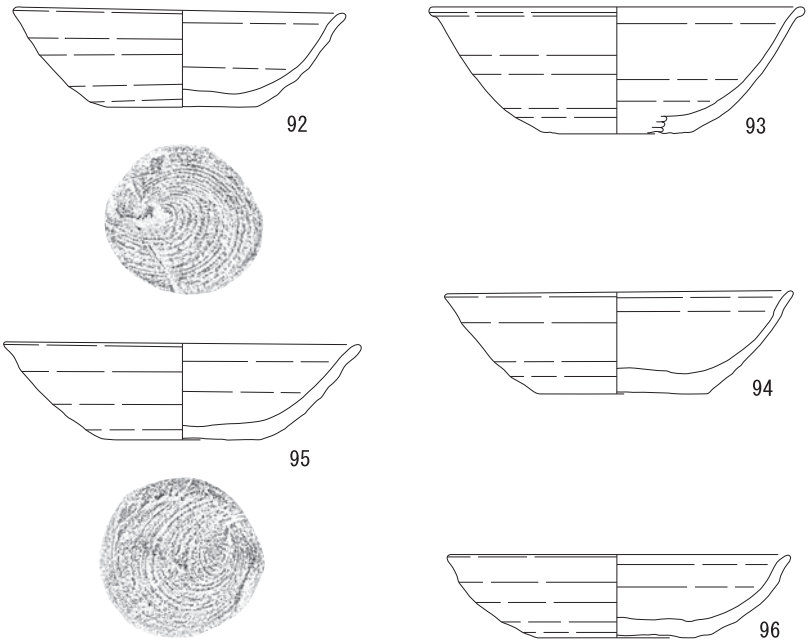
SK280



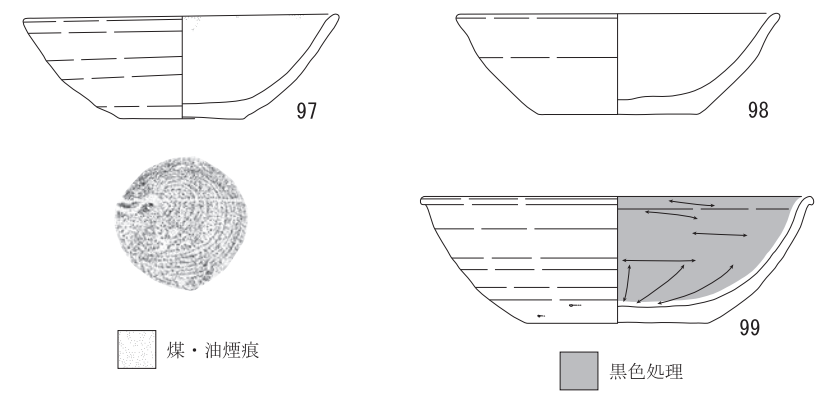
P306



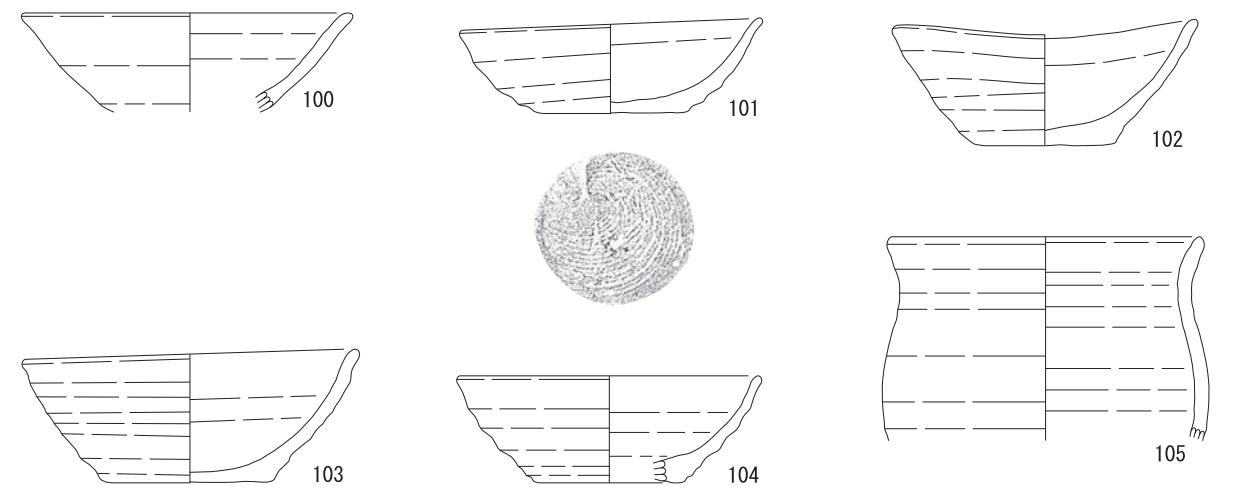
SK492

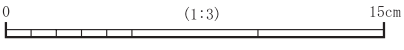


SK493

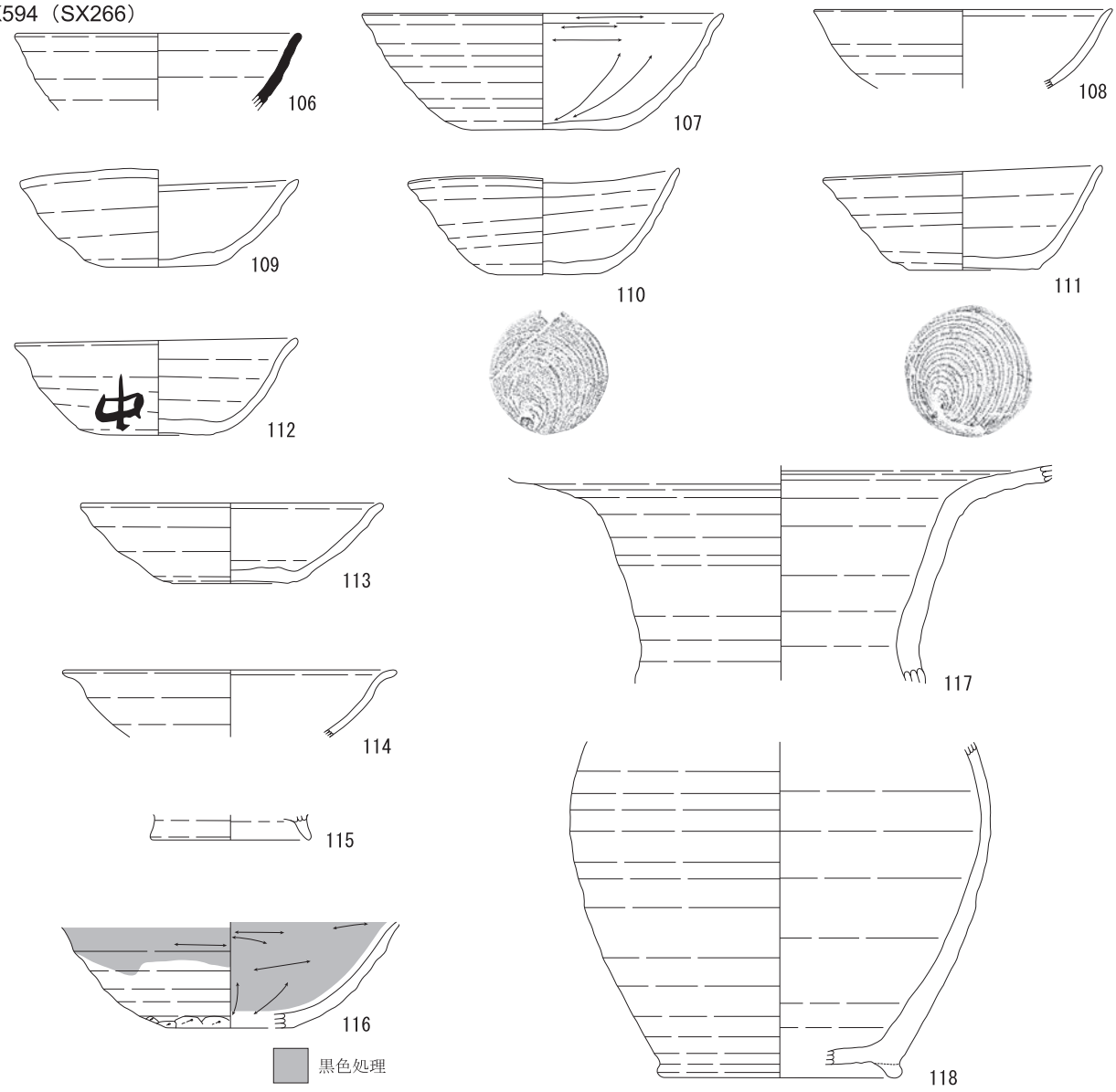


SK573

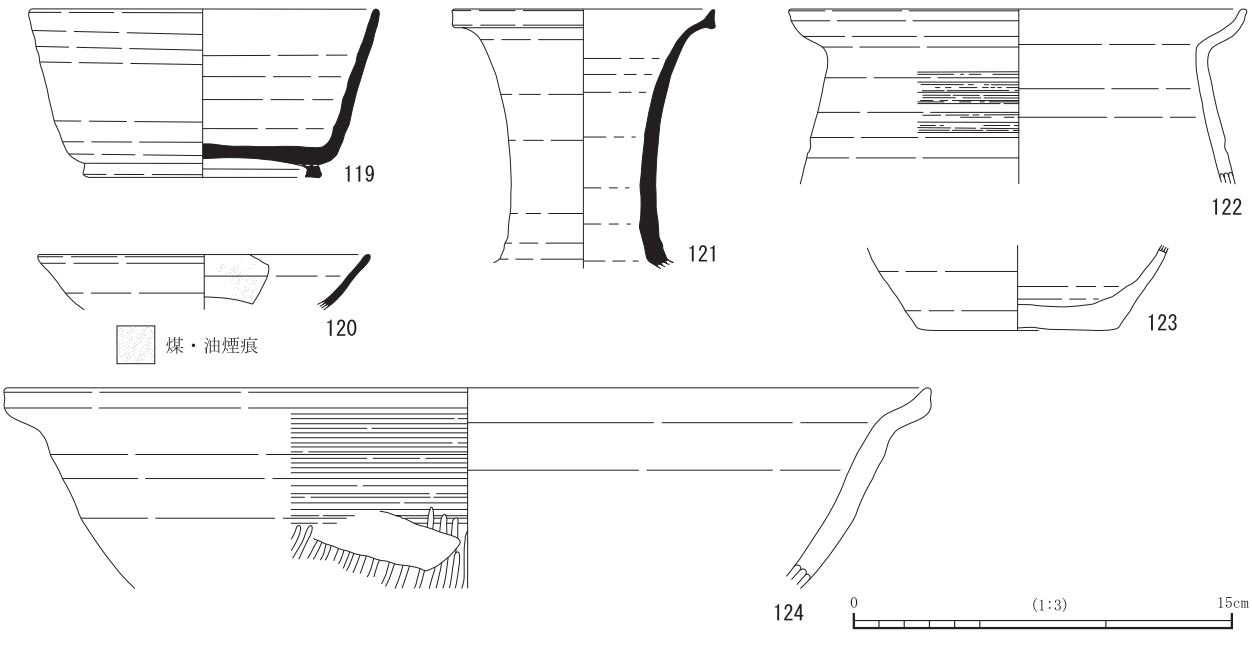




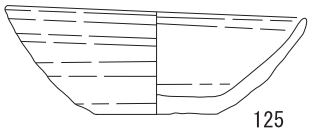
SK594（SX266）



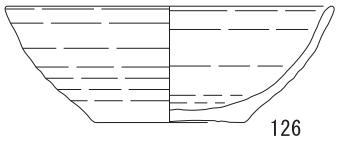
SK146

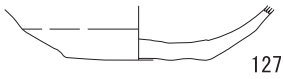


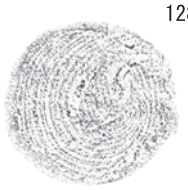
SK205

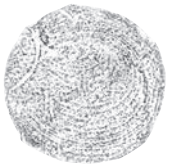


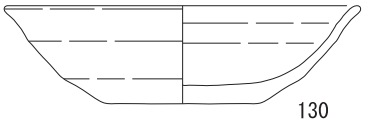
SK260

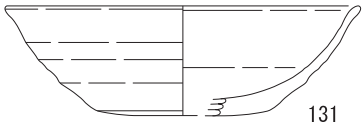


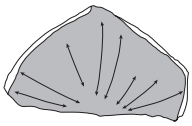


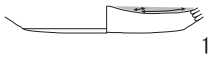






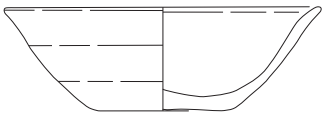


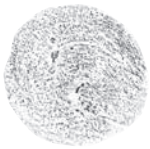


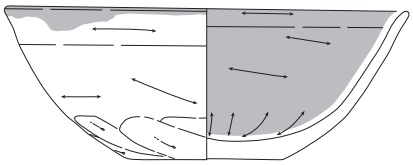


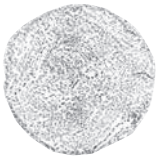
黒色処理

SK482

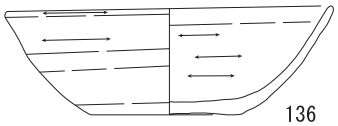


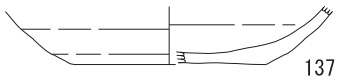




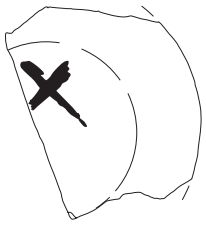


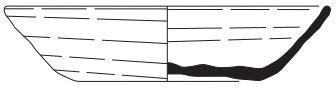
SK6

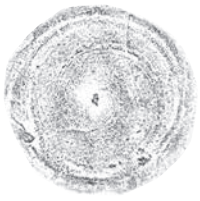


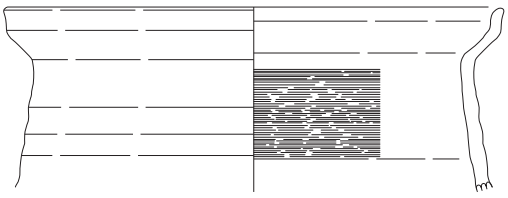


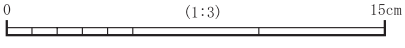
SK6B



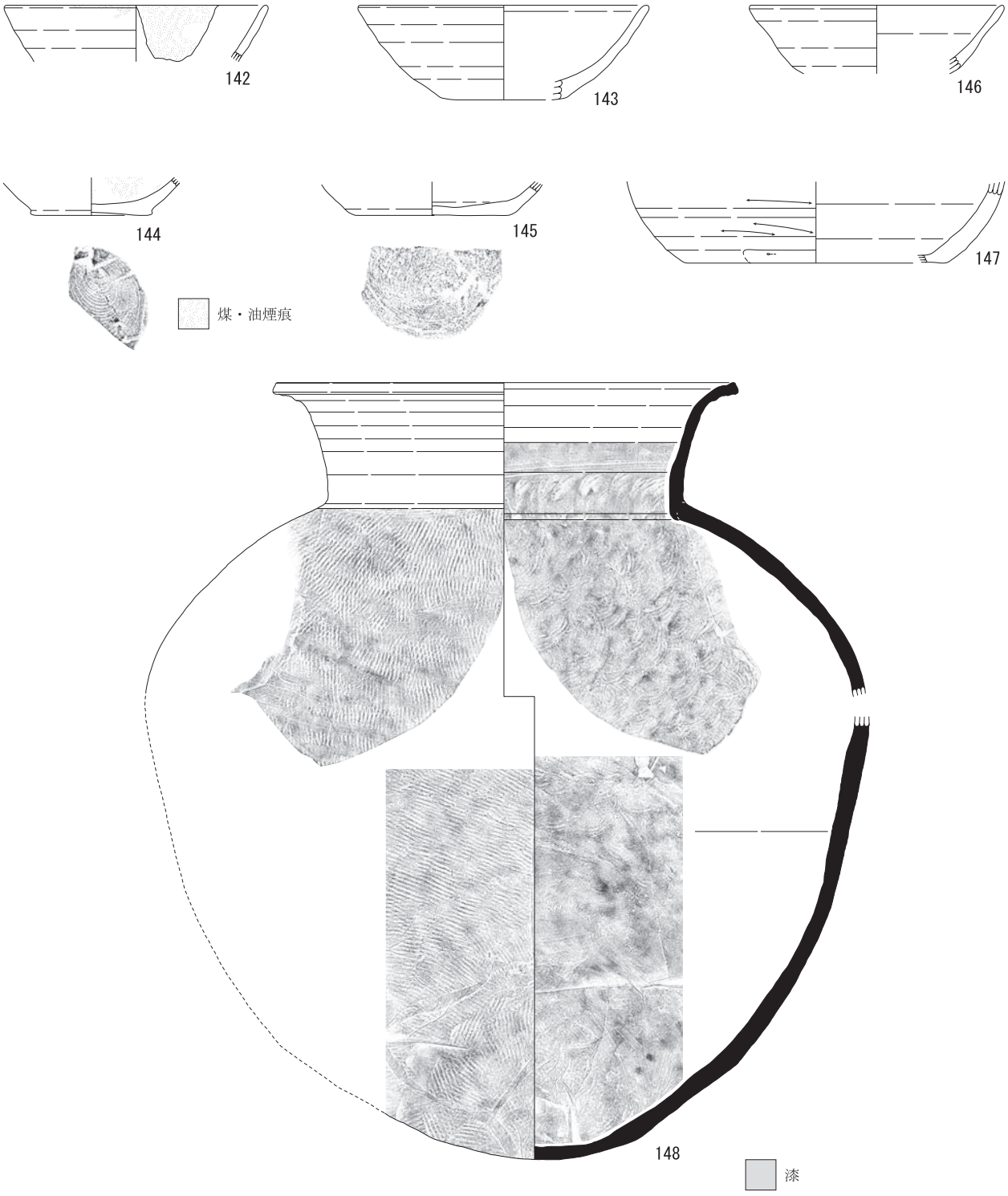




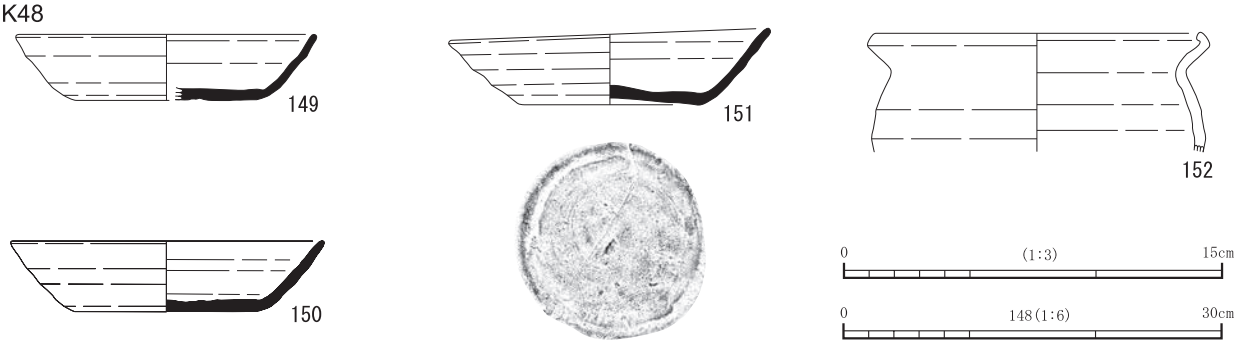




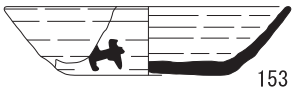
SK42


142
143
146
144
145
147
煤・油煙痕
148
漆

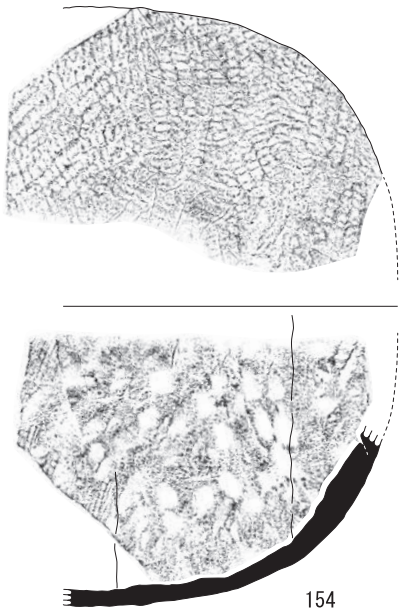
SK48


149
151
152
150
0
(1:3)
15cm
0
148(1:6)
30cm

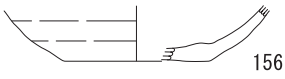
SK151

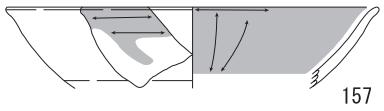


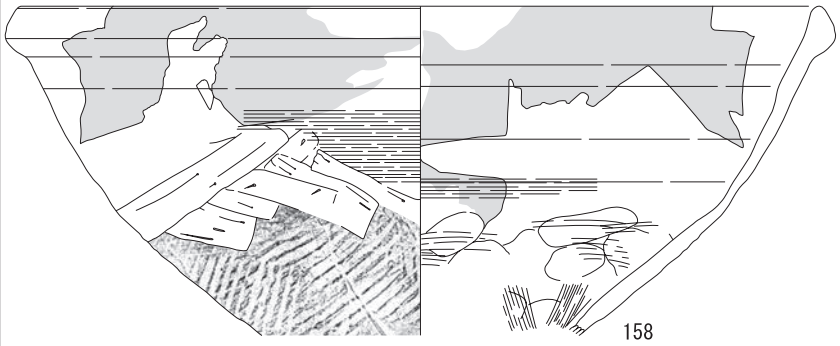
SK210

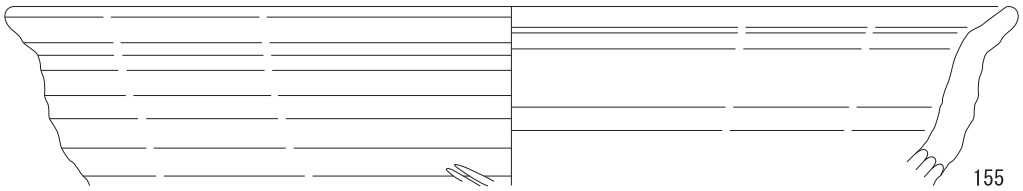


SK216

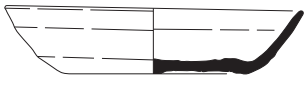


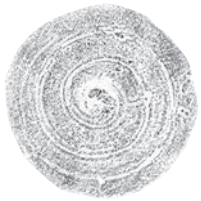




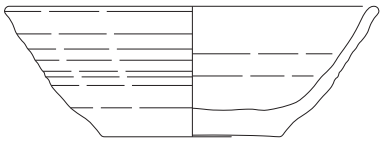


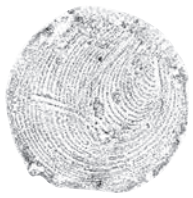
SK259

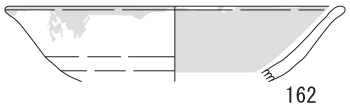


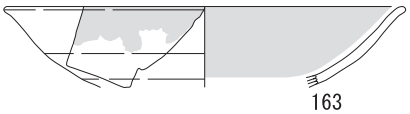


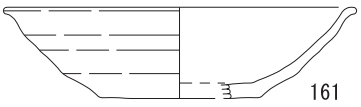
SK361









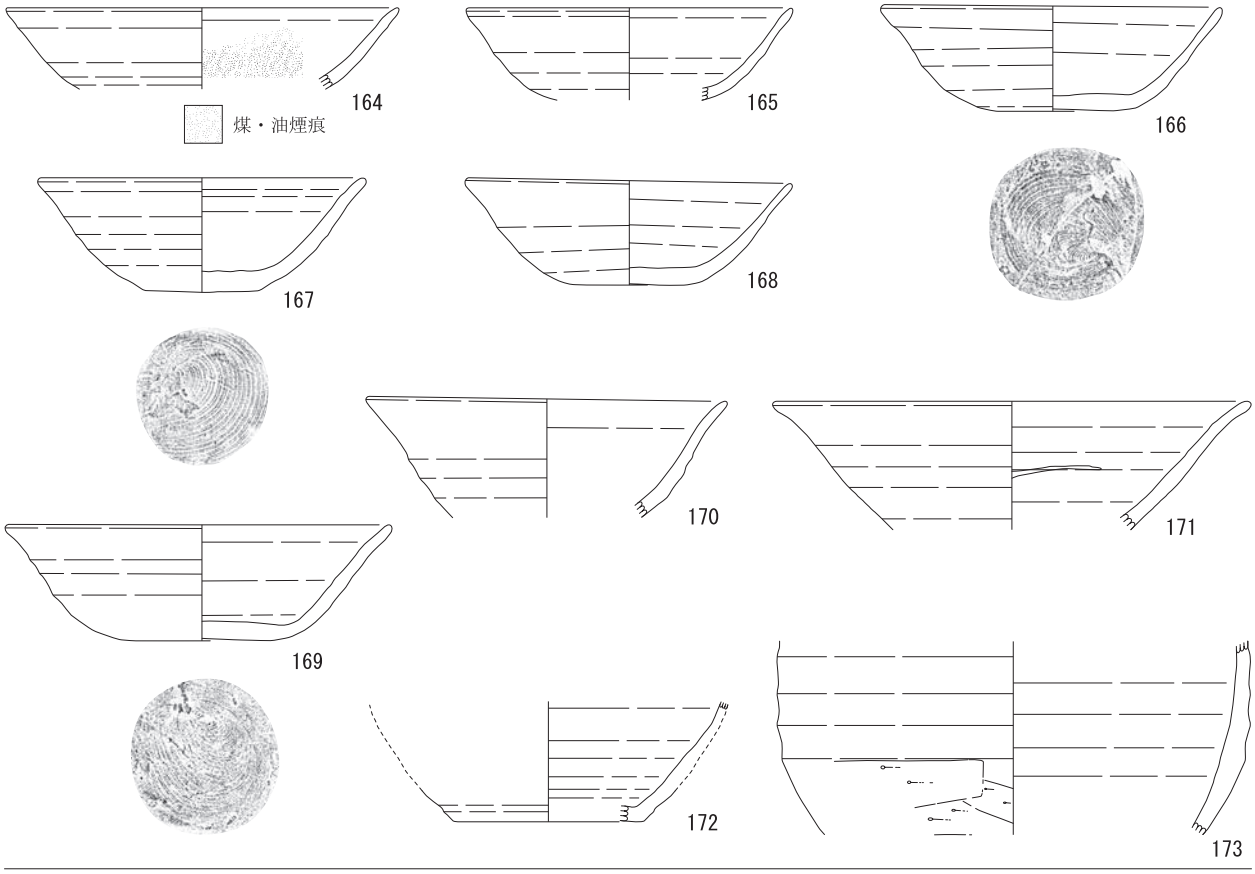


漆

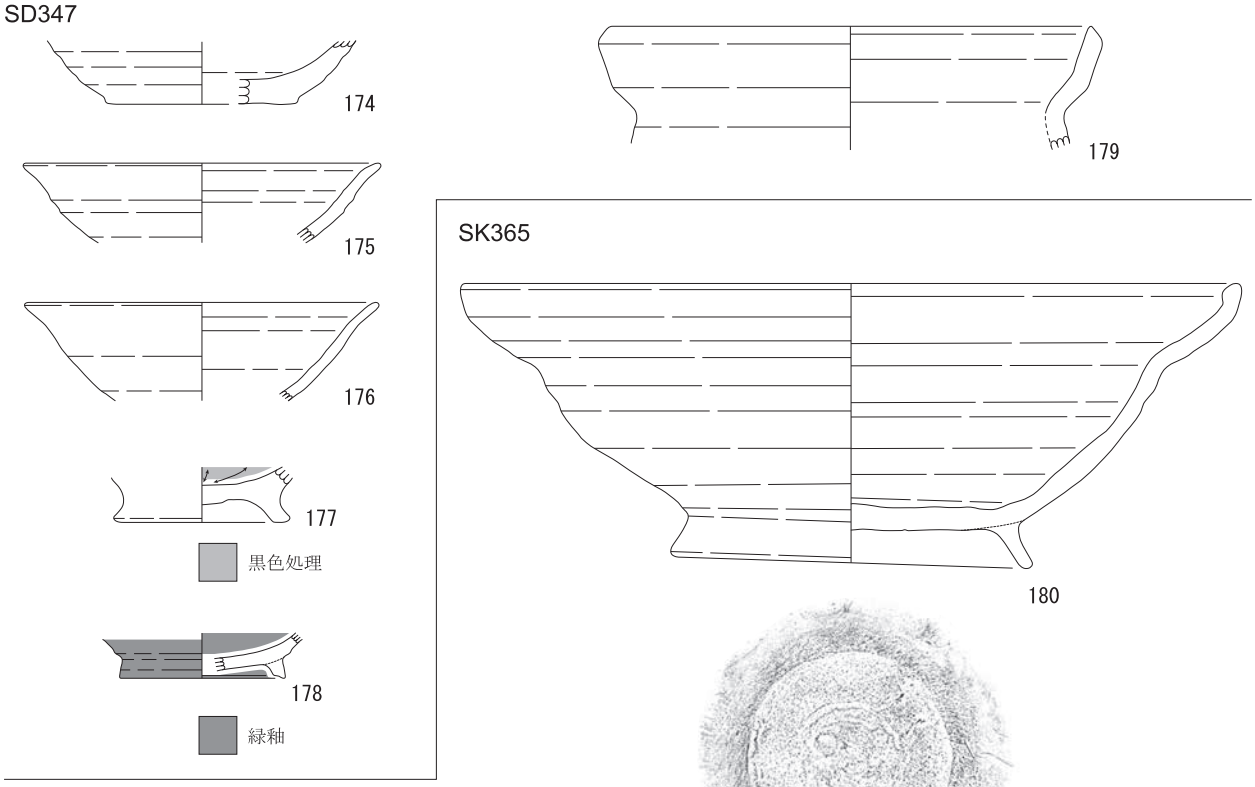
黒色処理

0　(1:3)　15cm

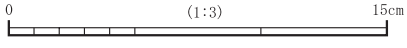
SK342



SD347

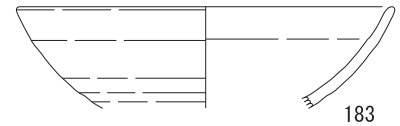


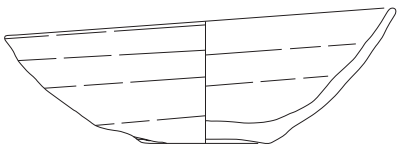
SK365

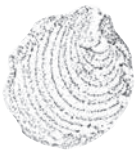


SK378

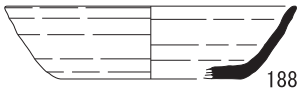
SK396



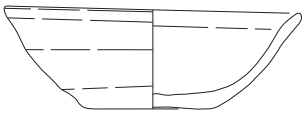


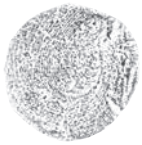


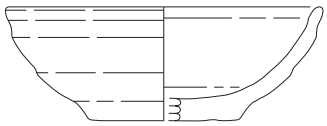
SD3

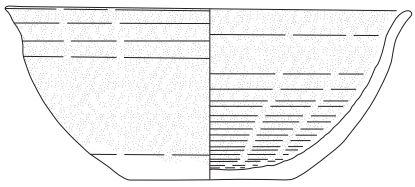


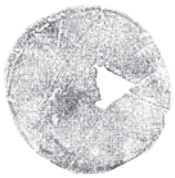
SE677





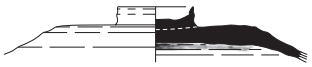


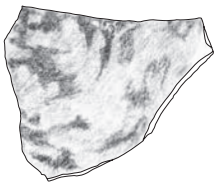




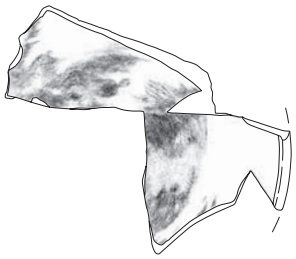
煤・油煙痕

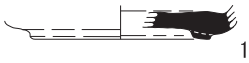
SD7

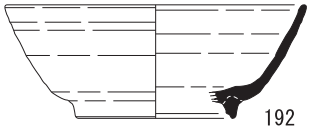


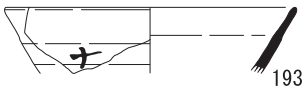


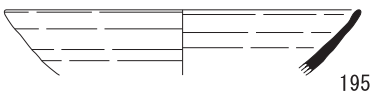
墨痕

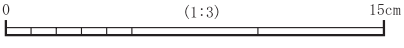




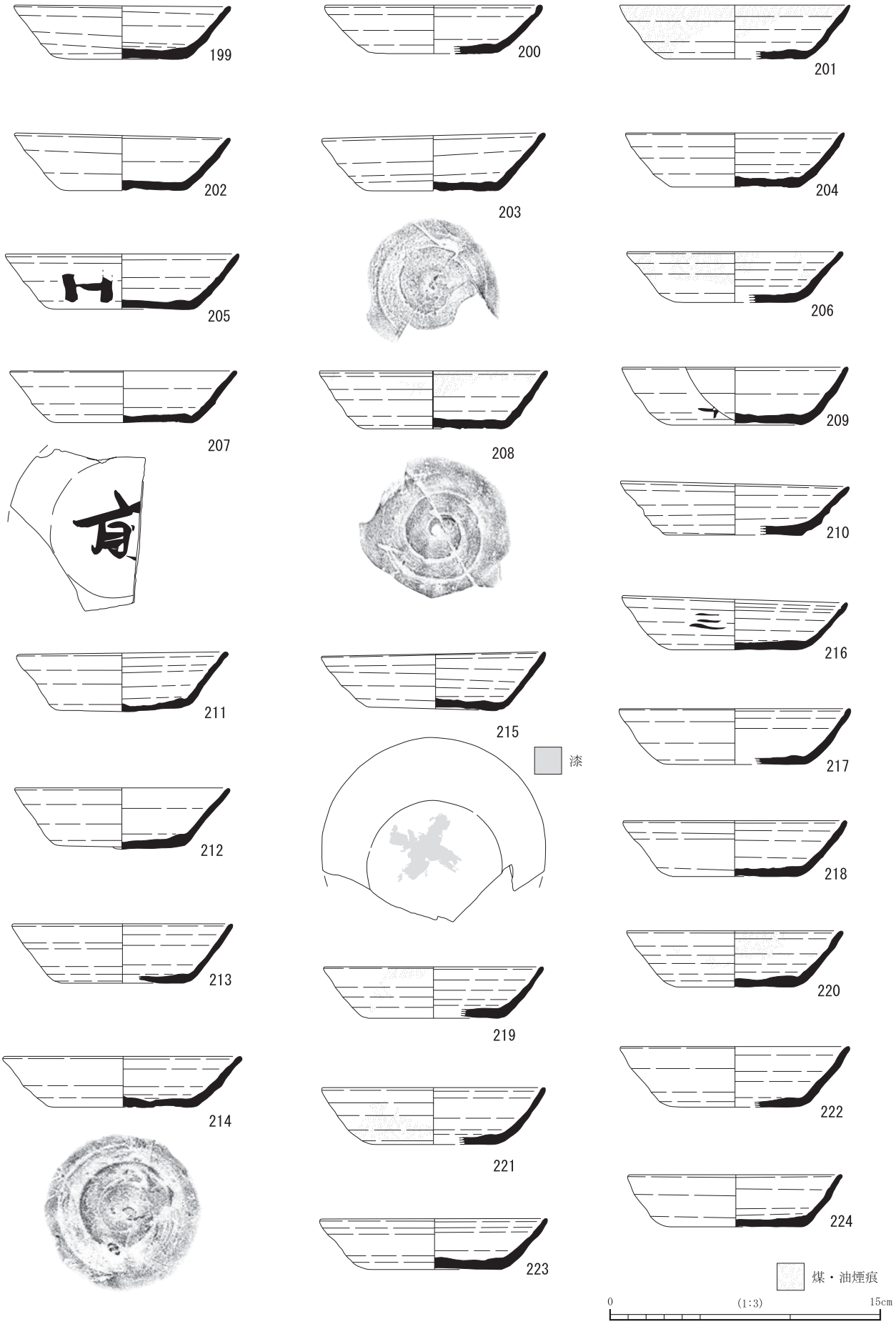




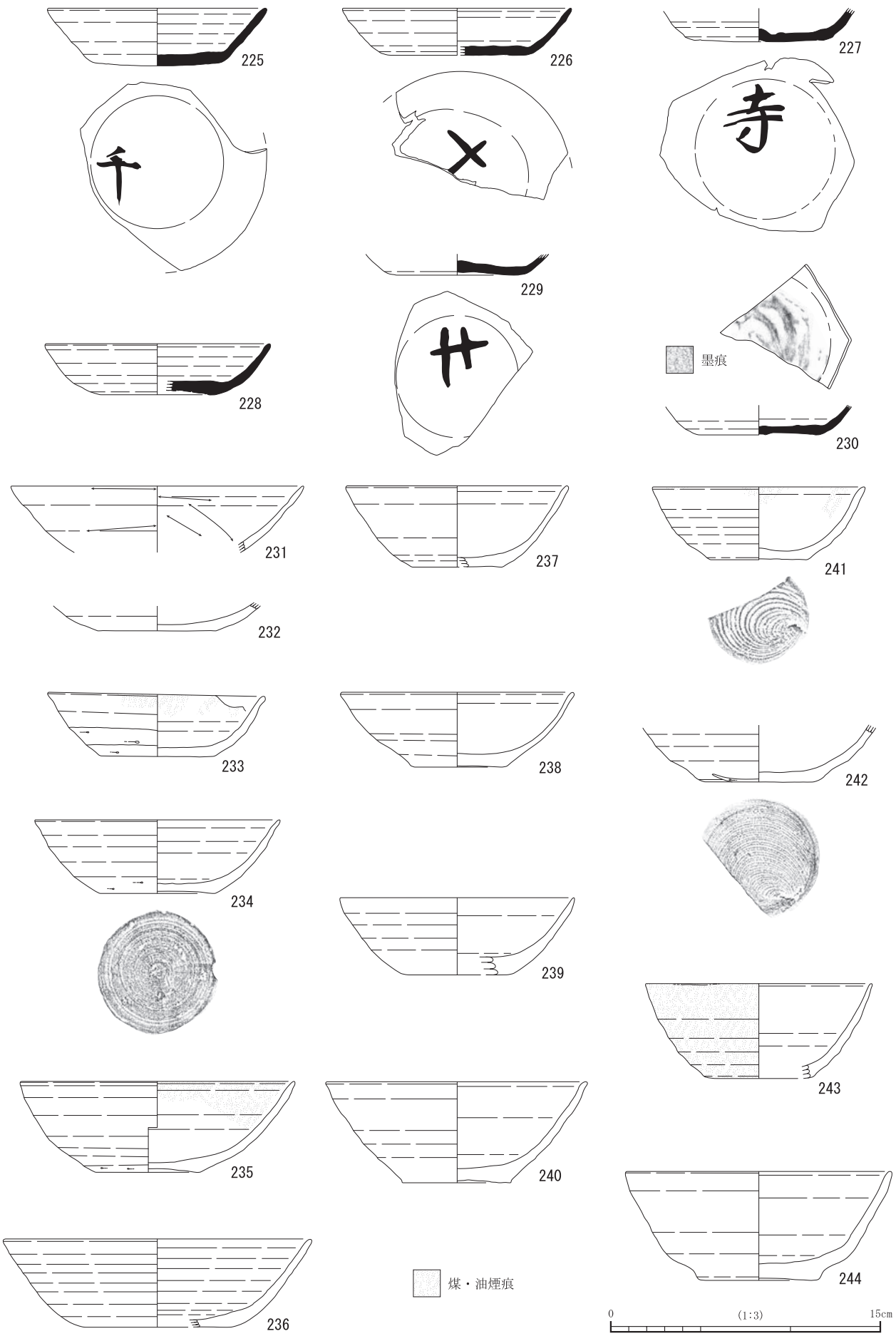




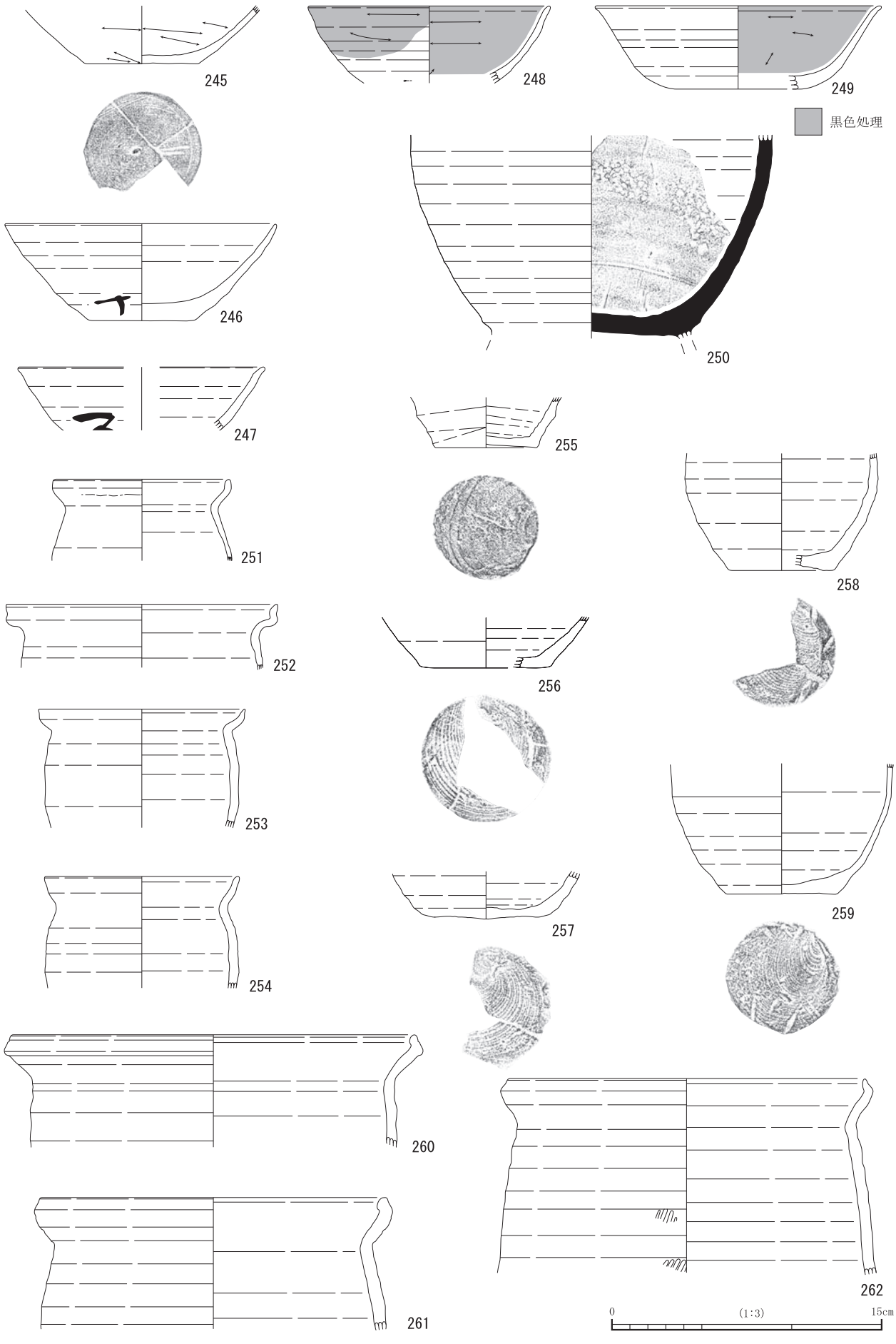
SD7


199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
215
216
217
212
218
213
219
220
214
221
222
223
224
漆
煤・油煙痕
0
(1:3)
15cm

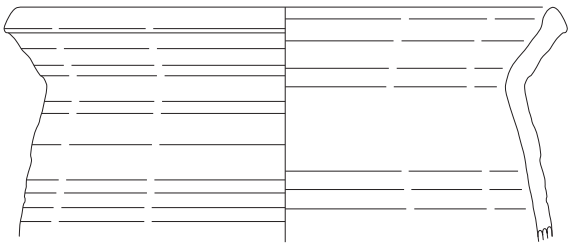
SD7

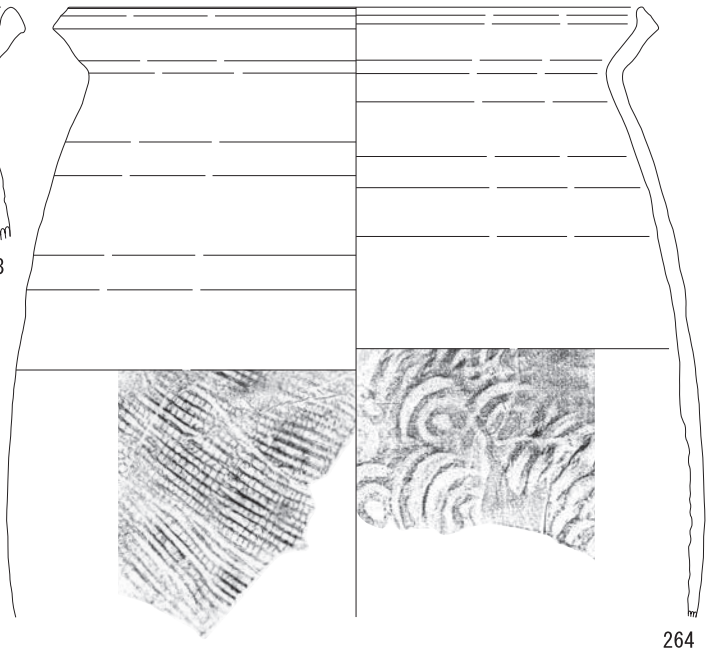

225
226
227
千
寺
229
228
墨痕
230
231
237
241
232
233
238
242
234
239
243
235
240
244
煤・油煙痕
236
0
(1:3)
15cm

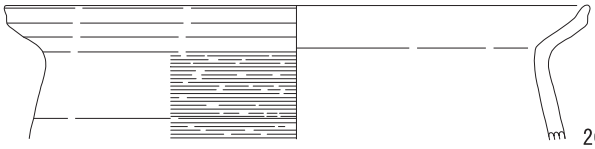
SD7

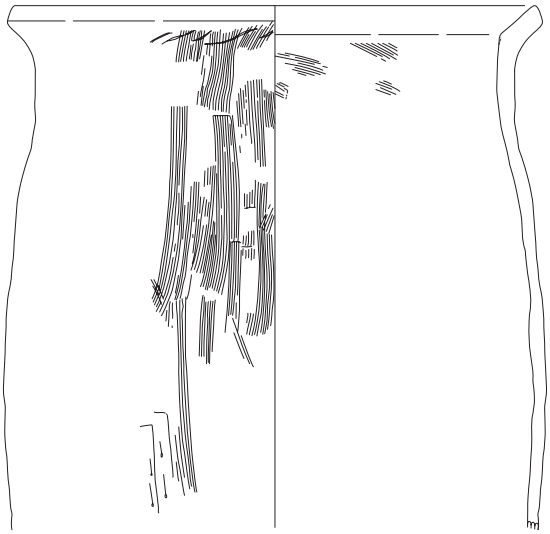

245
248
249
黒色処理
246
250
247
255
251
258
252
256
253
259
257
254
260
262
261
0
(1:3)
15cm

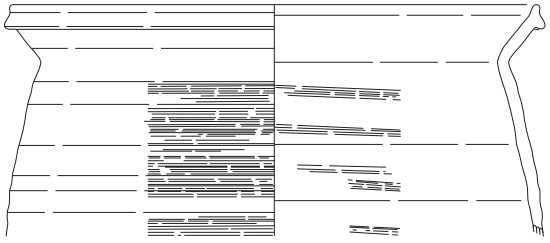
SD7

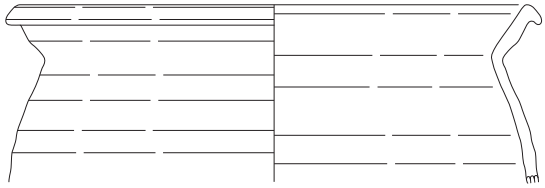

263

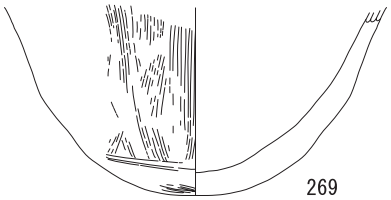

264

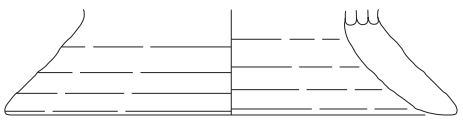

265

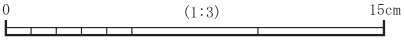

268


266

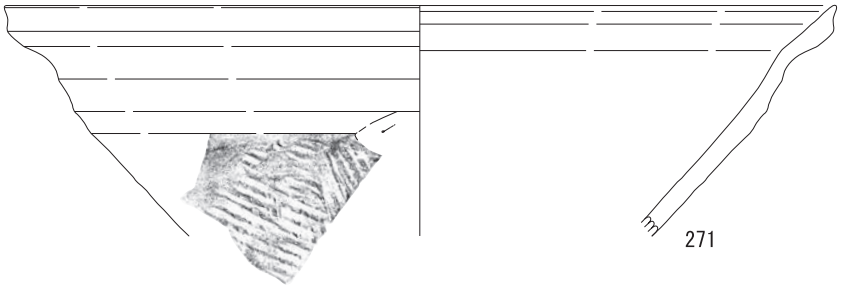

267

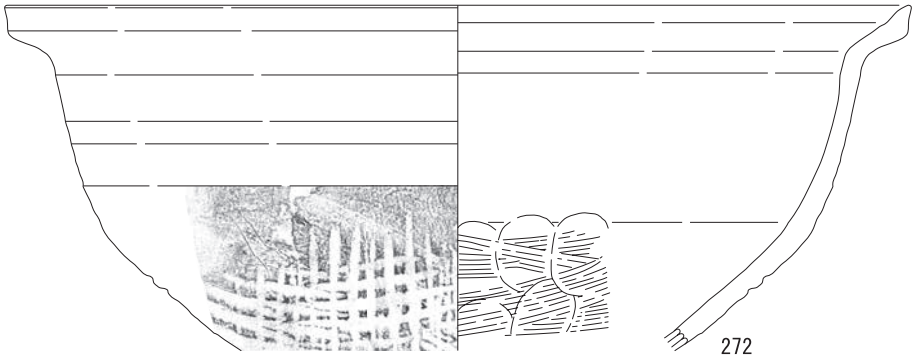

269

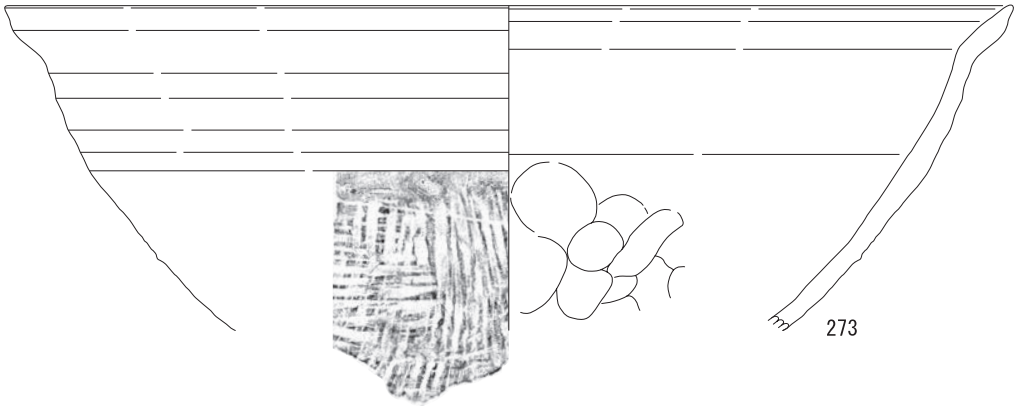

270

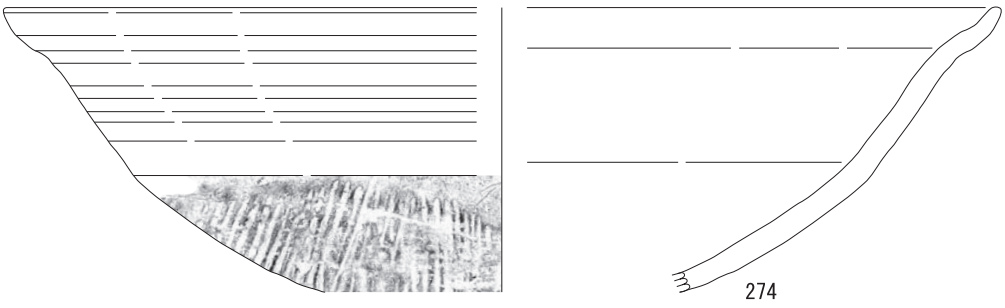


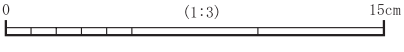
SD7

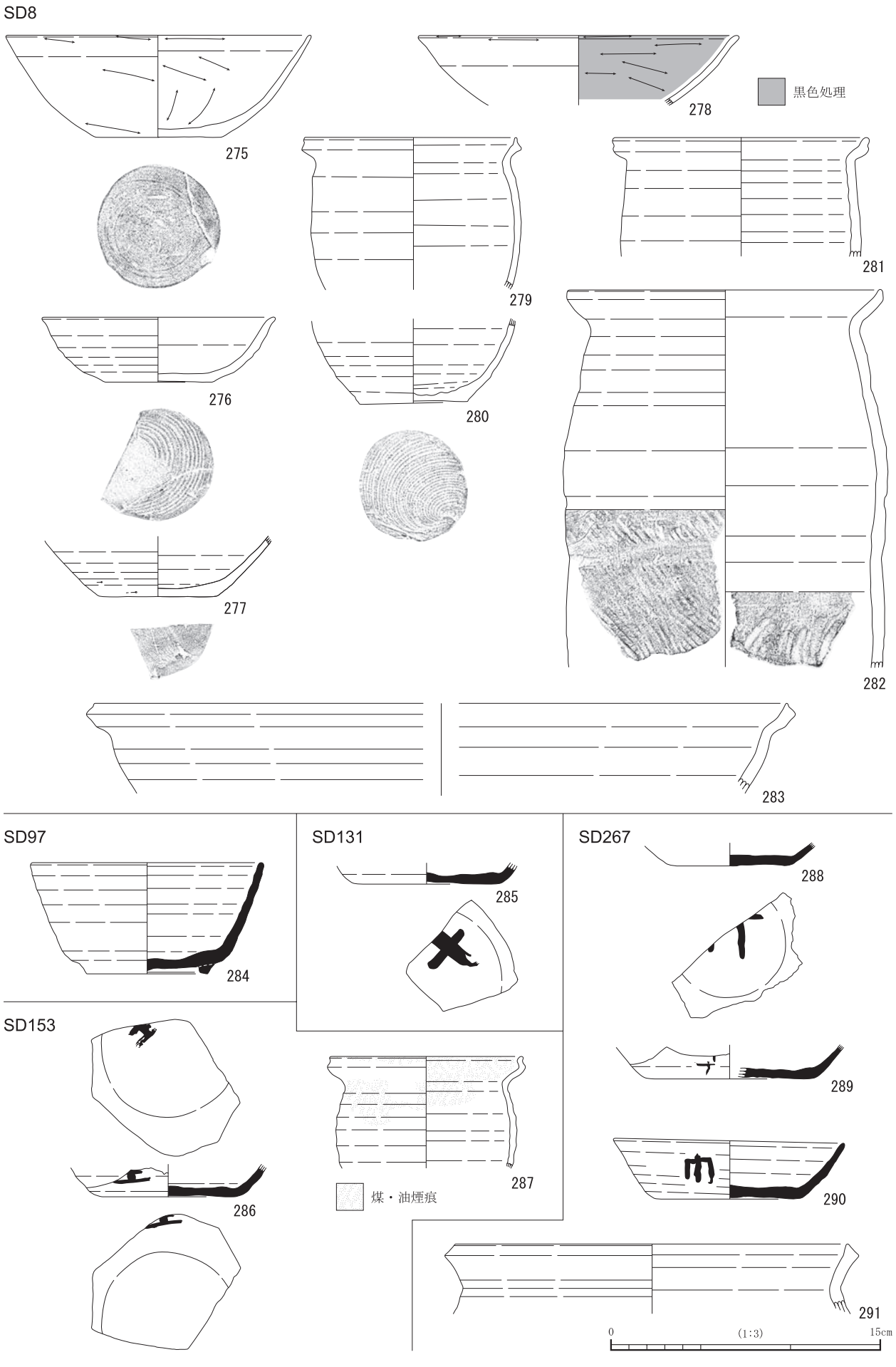




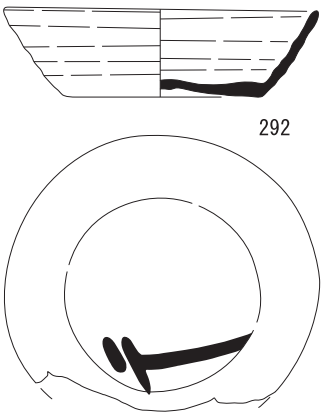




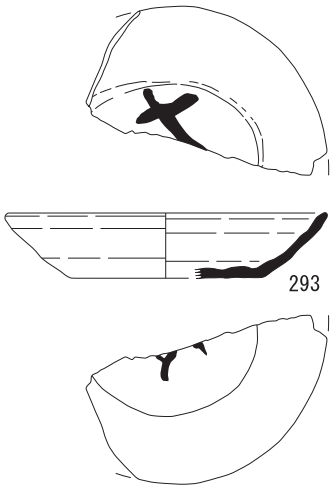



SD8
275
278
黒色処理
279
281
276
280
277
282
283
SD97
284
SD131
285
SD267
288
289
290
SD153
286
287
煤・油煙痕
291
0
(1:3)
15cm

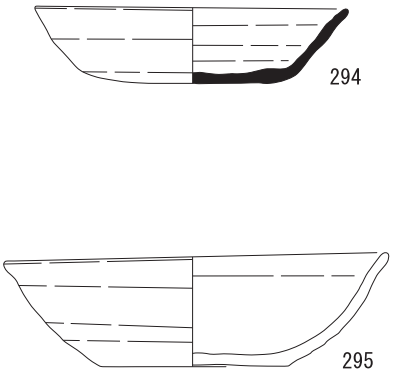
SD273



SD302

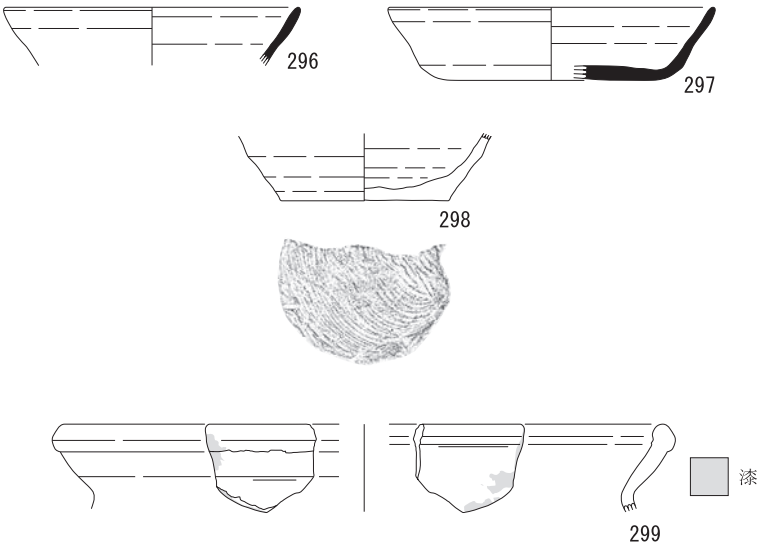


SD480

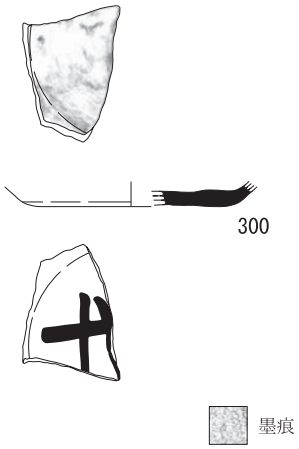


溝群 2

SD325



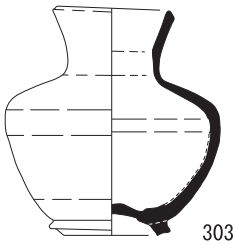
SD416



溝群 3

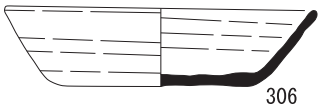
SD430

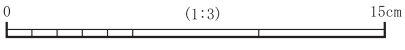
SD431



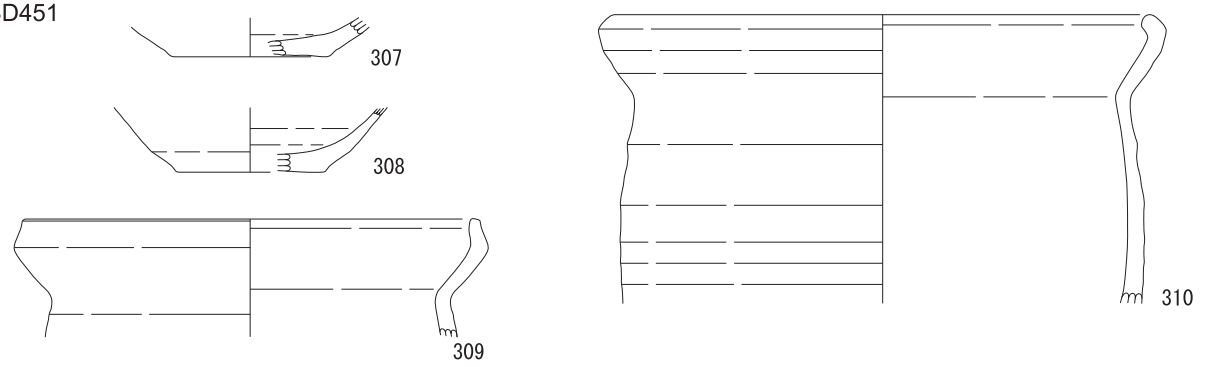
SD436

SD450

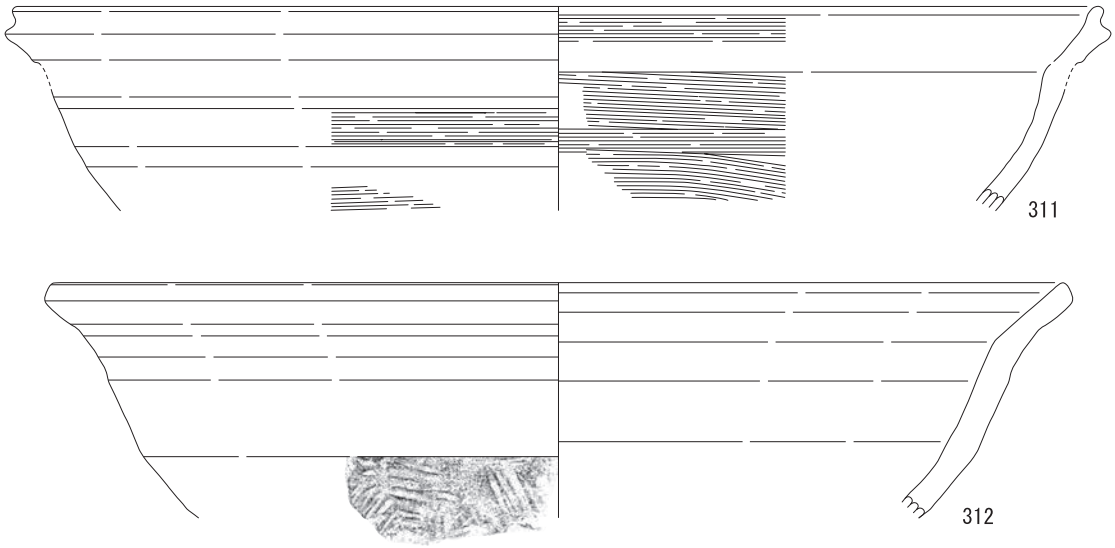




SD451

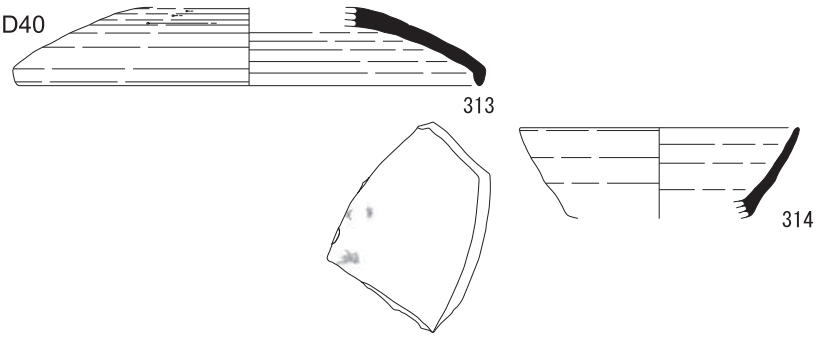


SD452

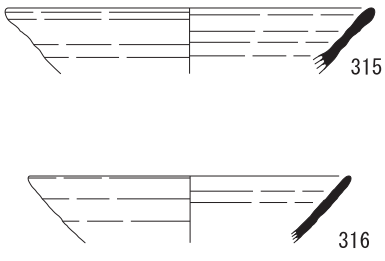


溝群４

SD40

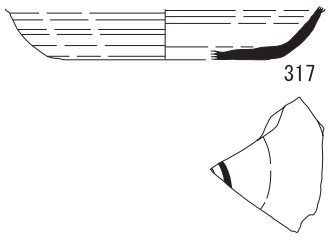


SD204

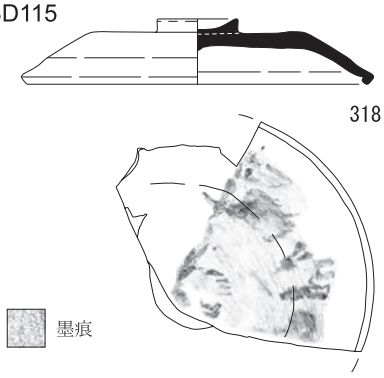


溝群５

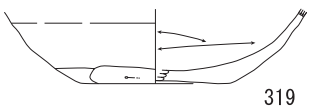
SD111

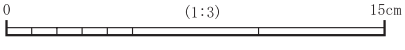


SD115

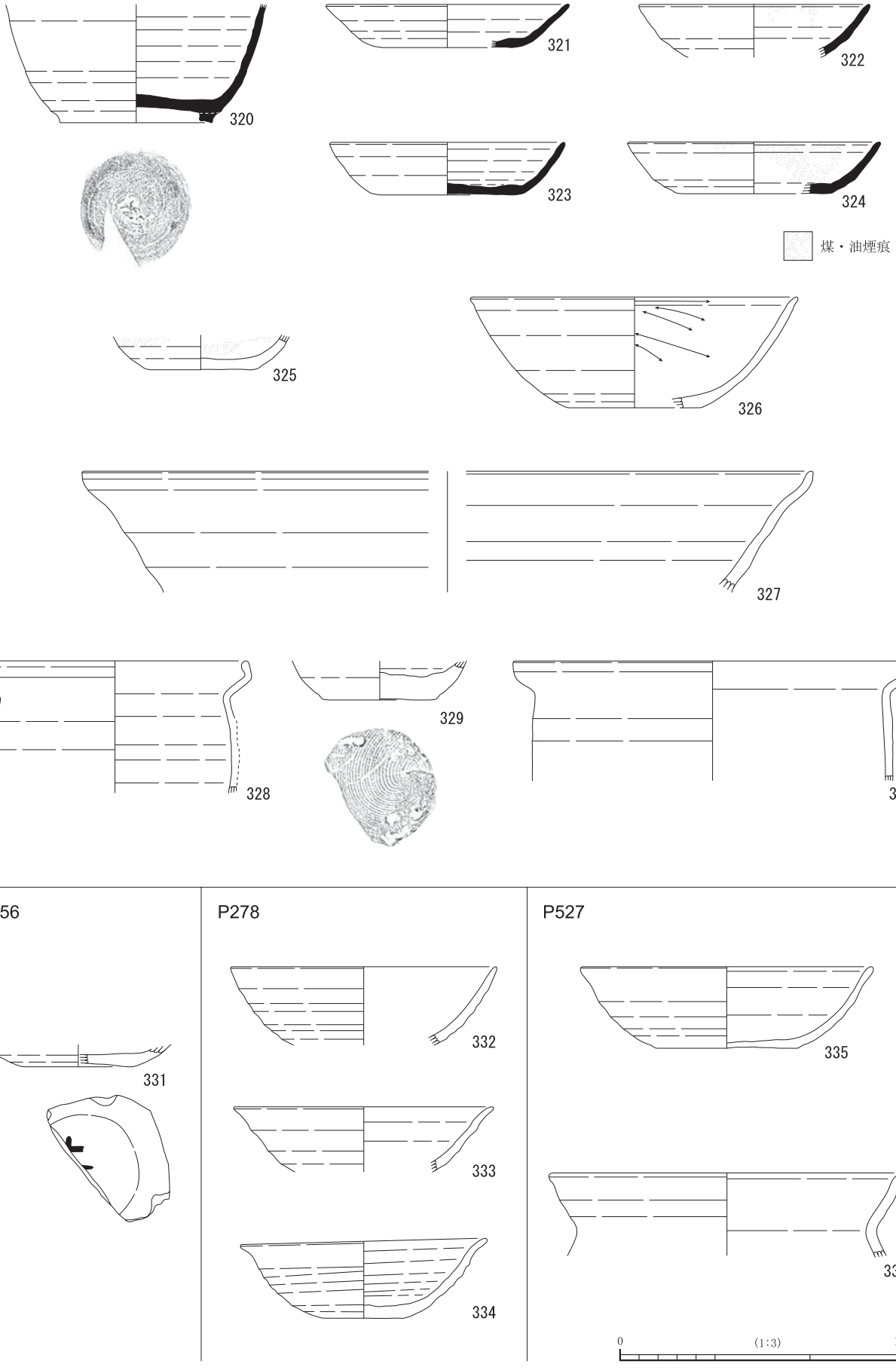


SD581

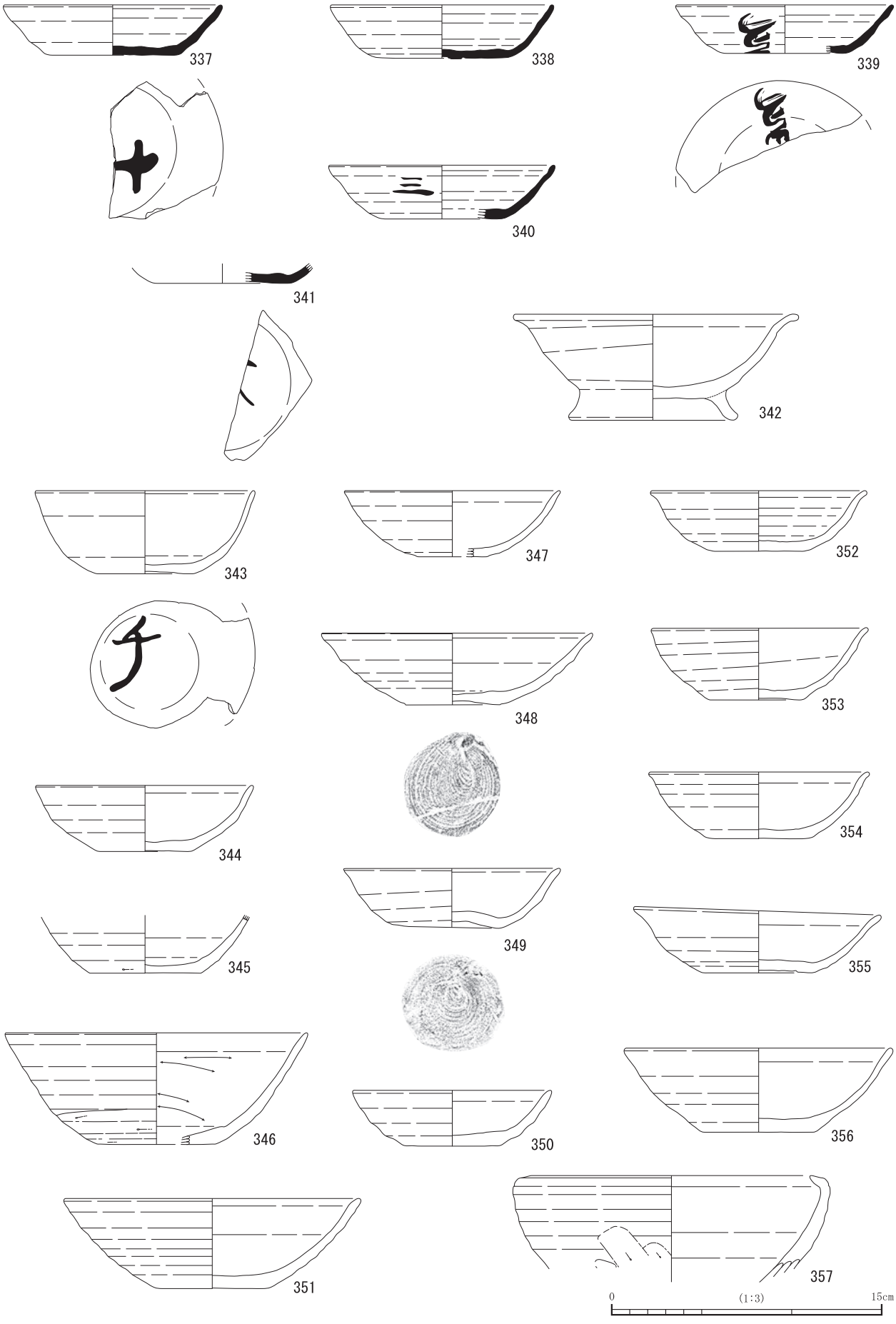




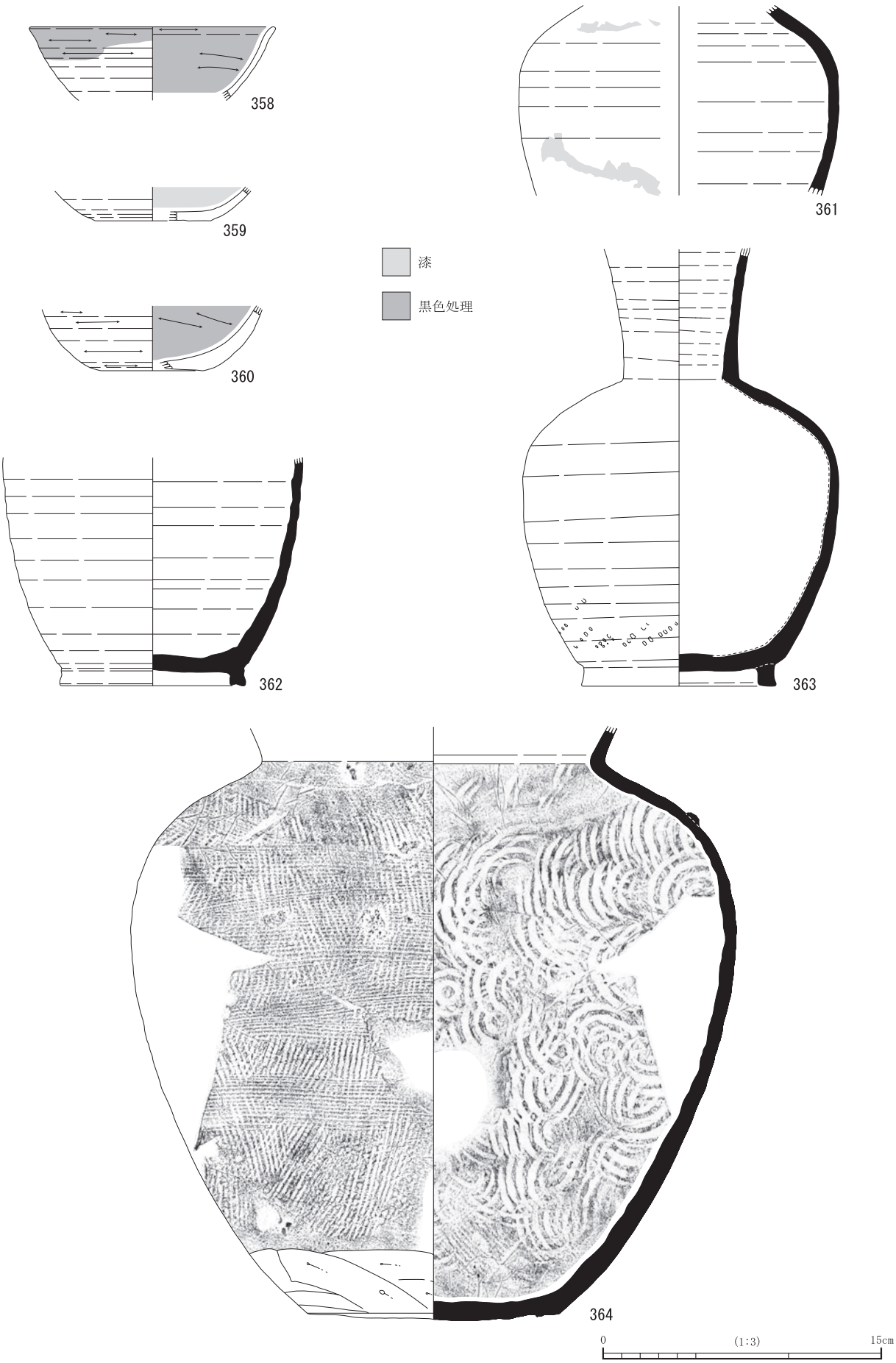
溝群 6
SX4


320
321
322
323
324
煤・油煙痕
325
326
327
328
329
330
P156
331
P278
332
333
334
P527
335
336
0
(1:3)
15cm

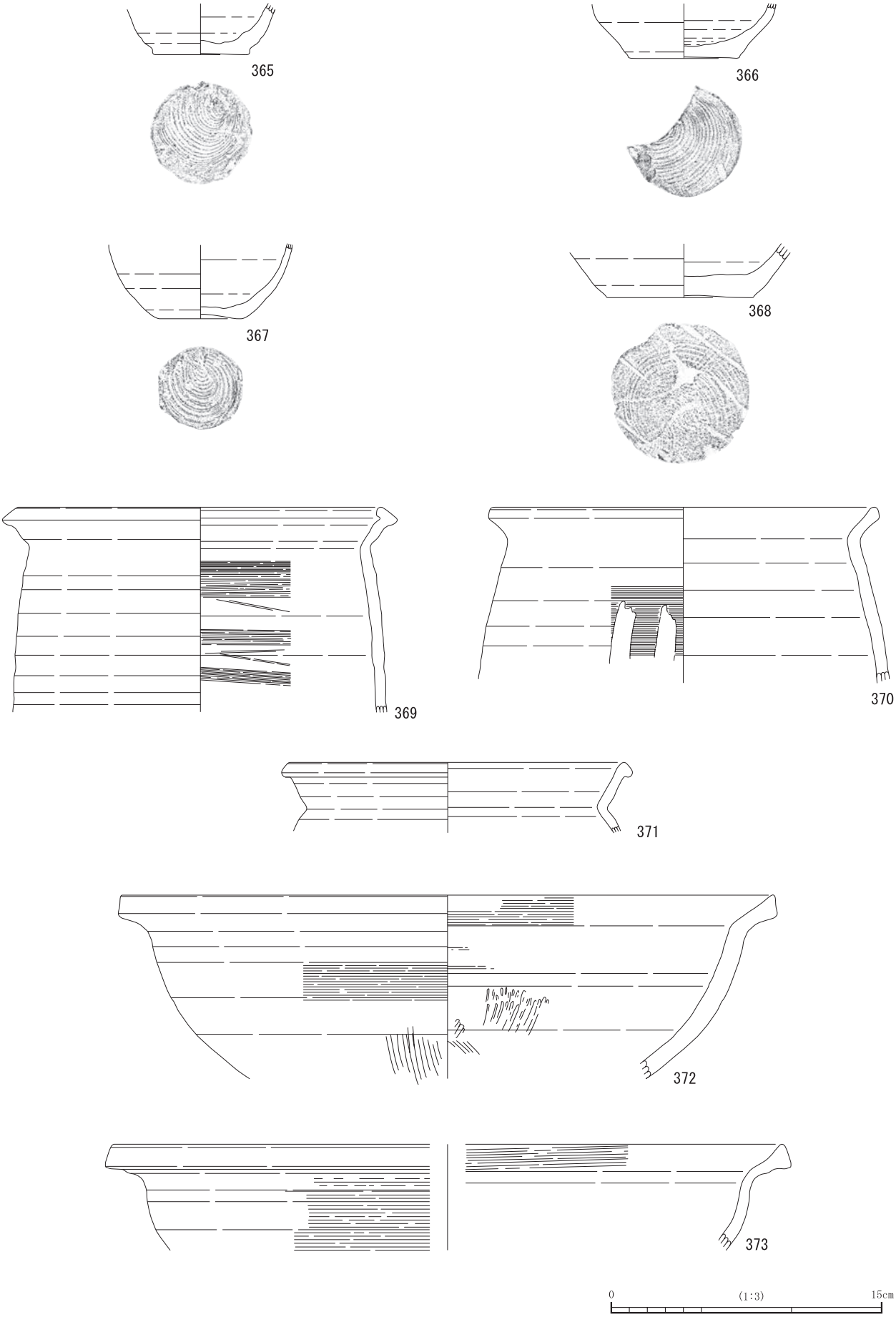
SX1


337
338
339
340
341
342
343
347
352
348
353
344
354
349
345
355
346
350
356
351
357
0
(1:3)
15cm

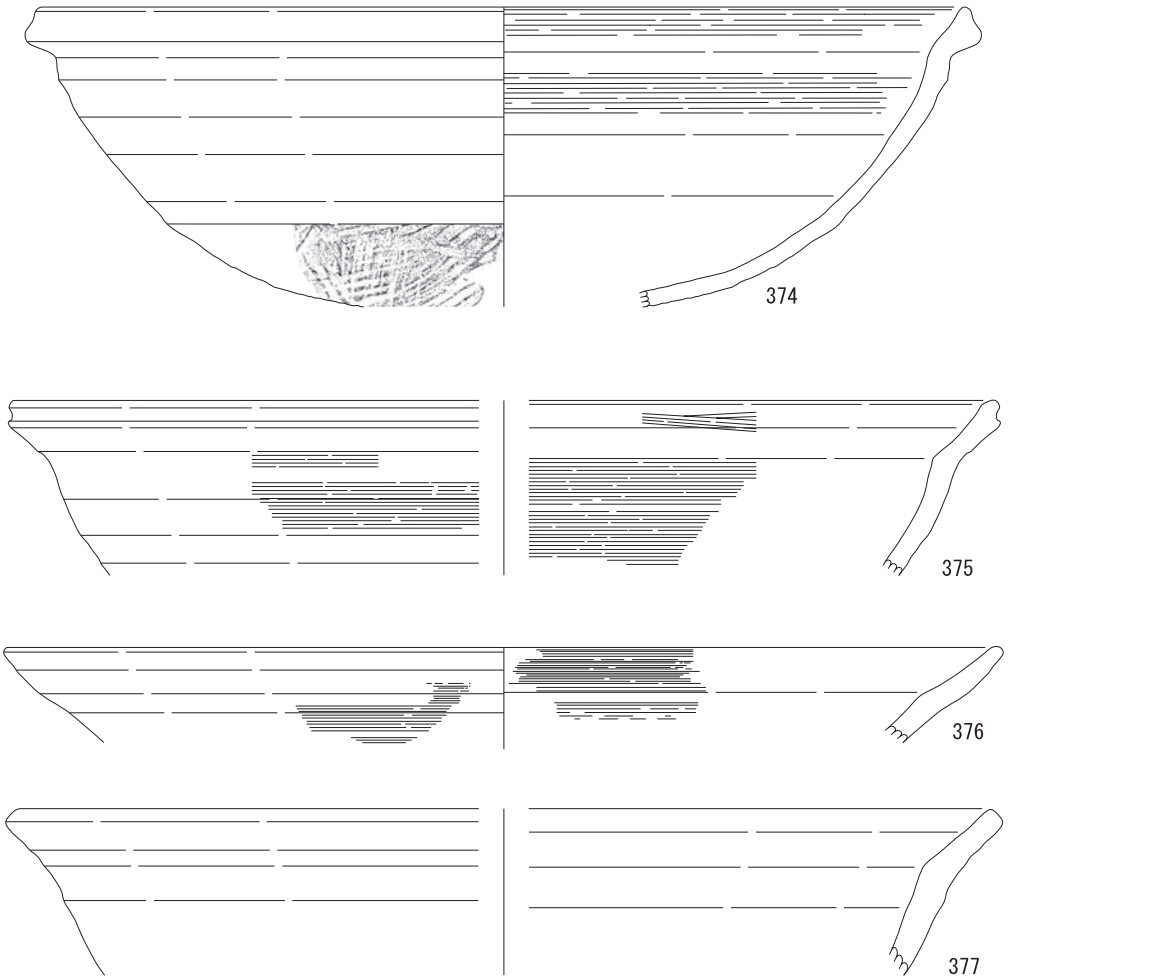
SX1



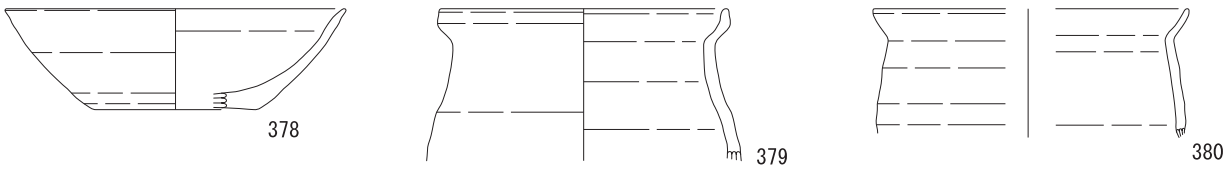
SX1

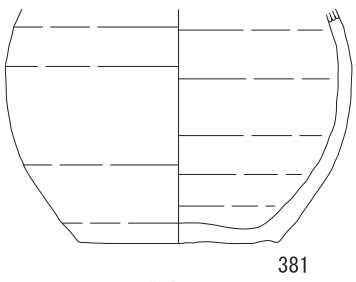


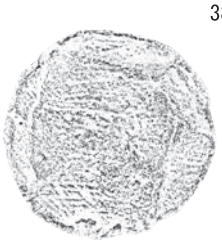
SX1



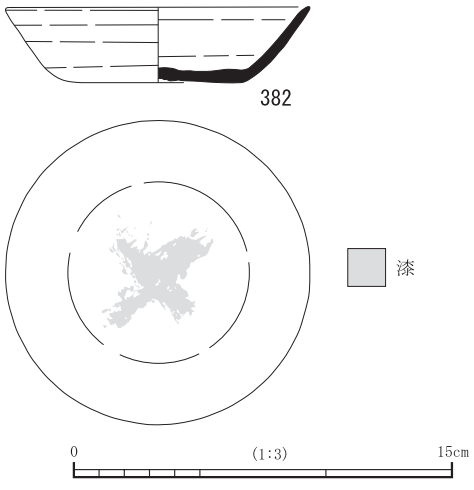
SX120



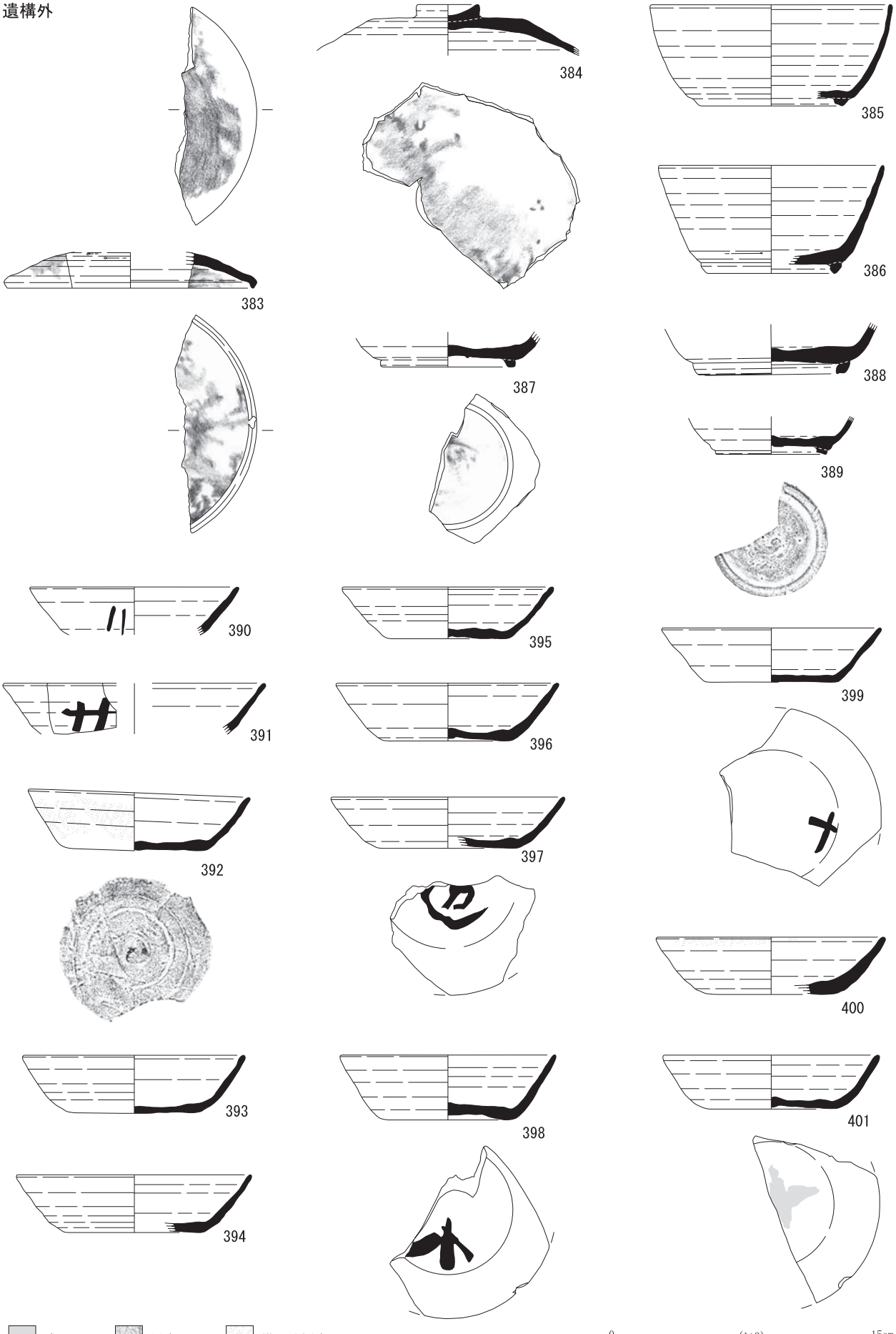




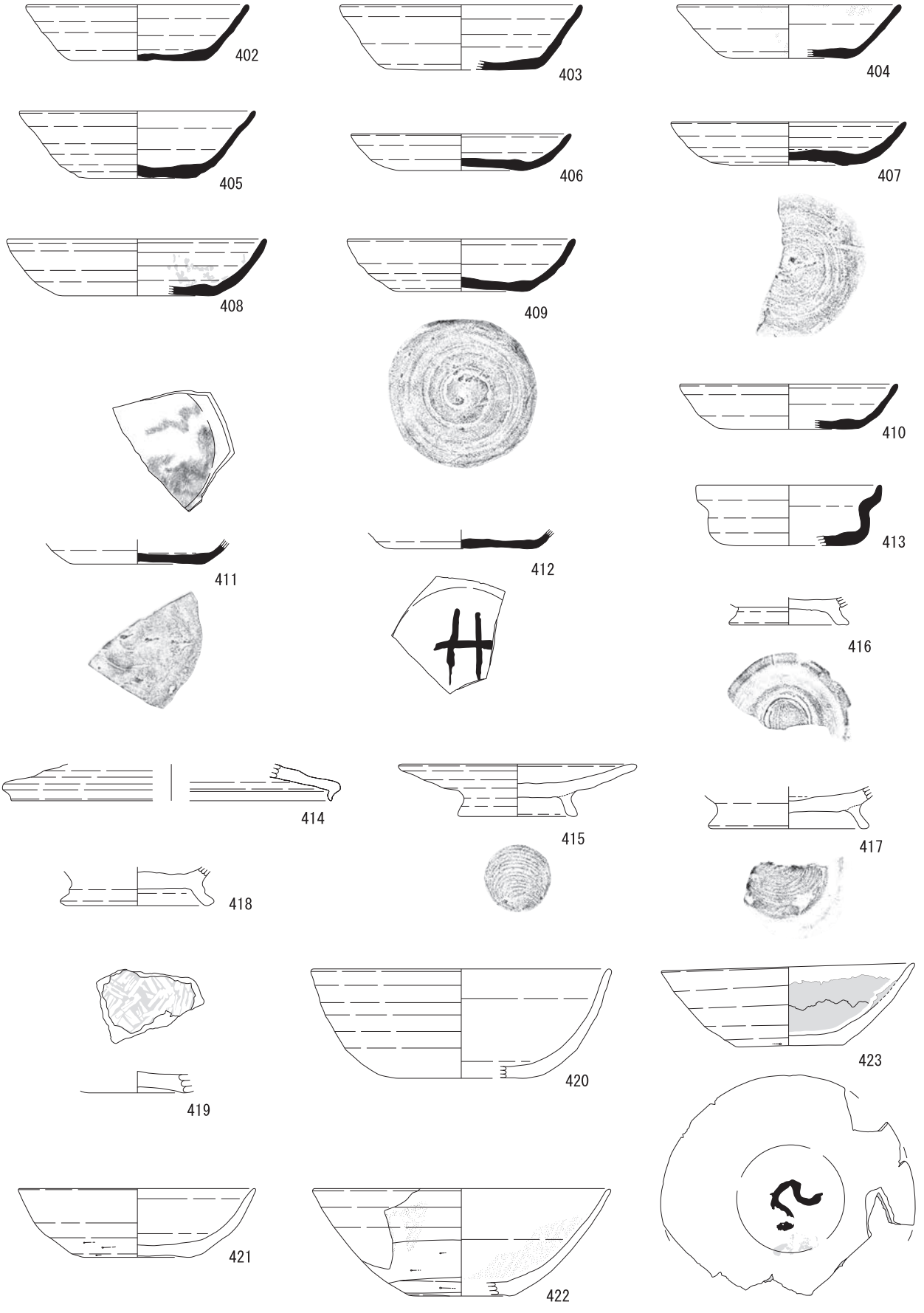
SX400



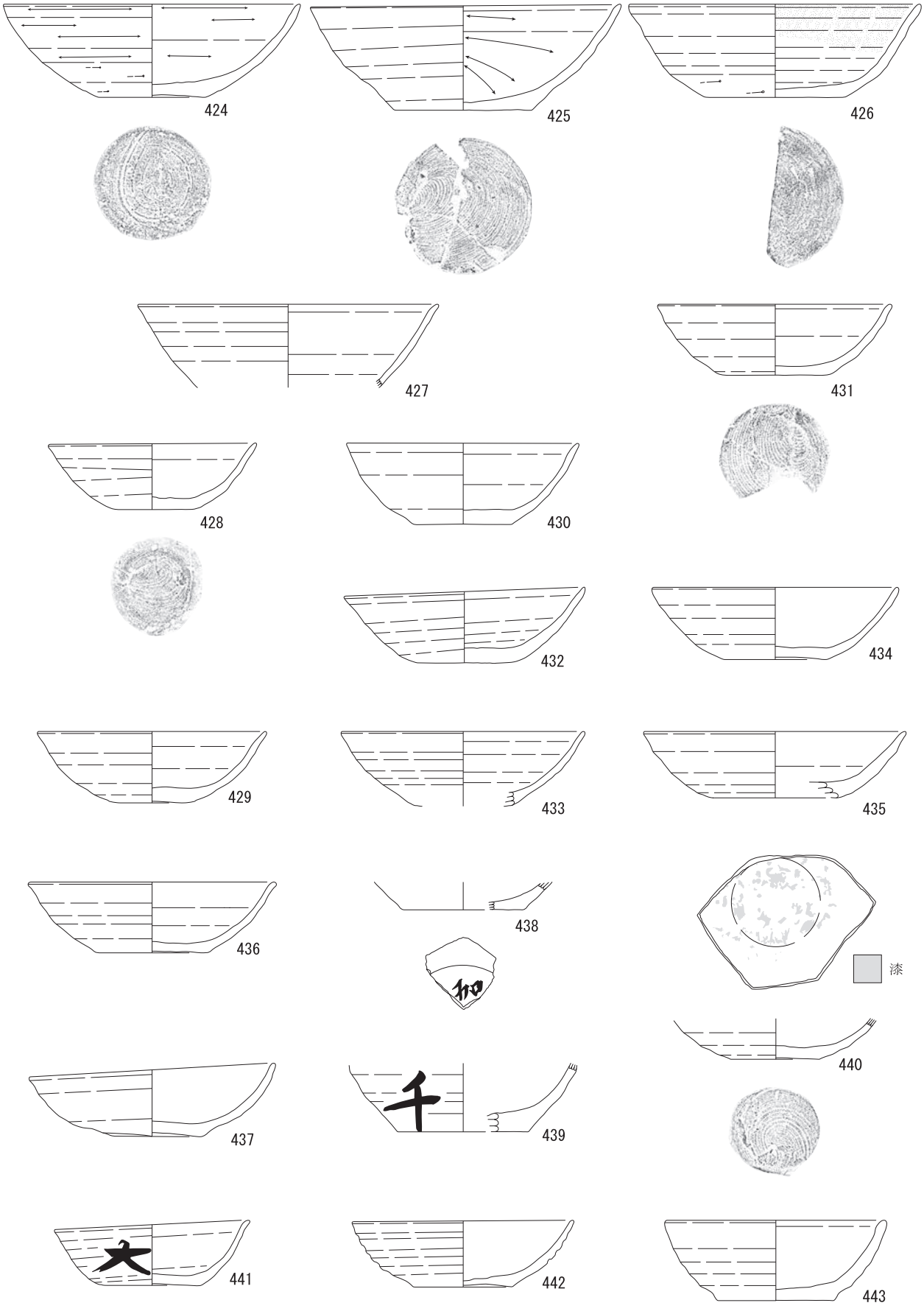
遺構外


383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
漆
墨痕
煤・油煙痕
0
(1:3)
15cm

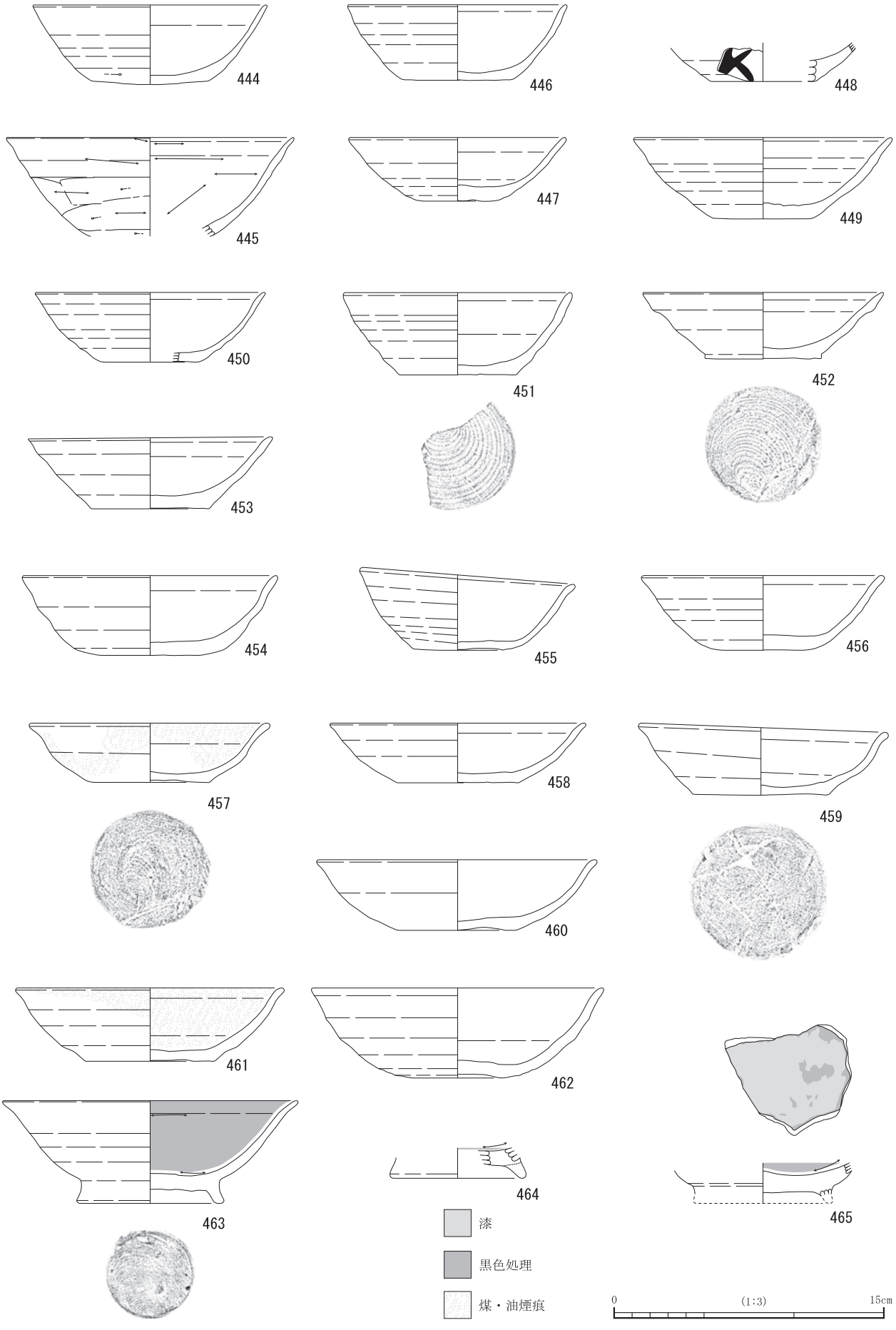
遺構外


402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
漆
墨痕
煤・油煙痕
0
(1:3)
15cm

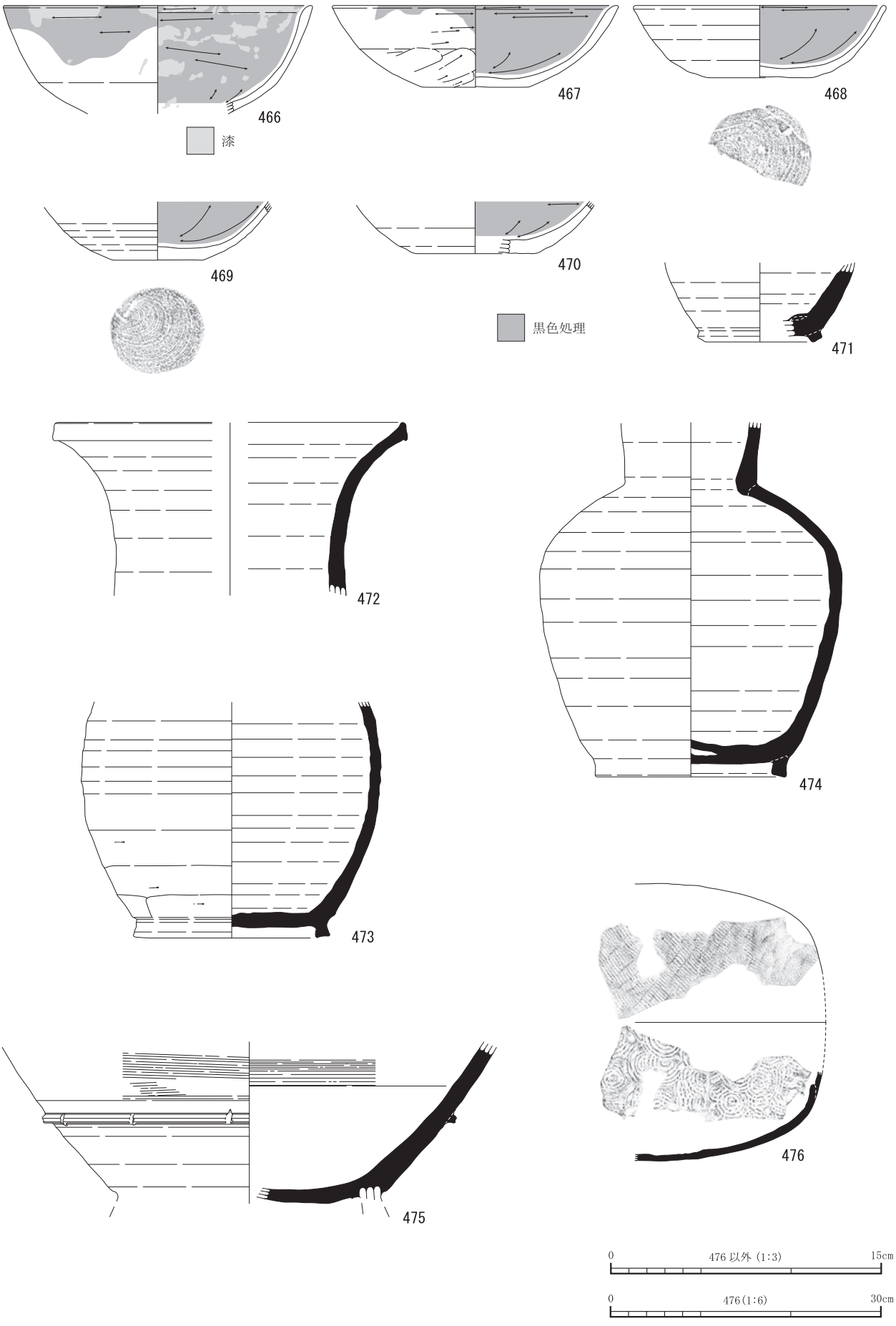
遺構外


424
425
426
427
431
428
430
432
434
429
433
435
436
438
漆
440
437
439
441
442
443
煤・油煙痕
0
(1:3)
15cm

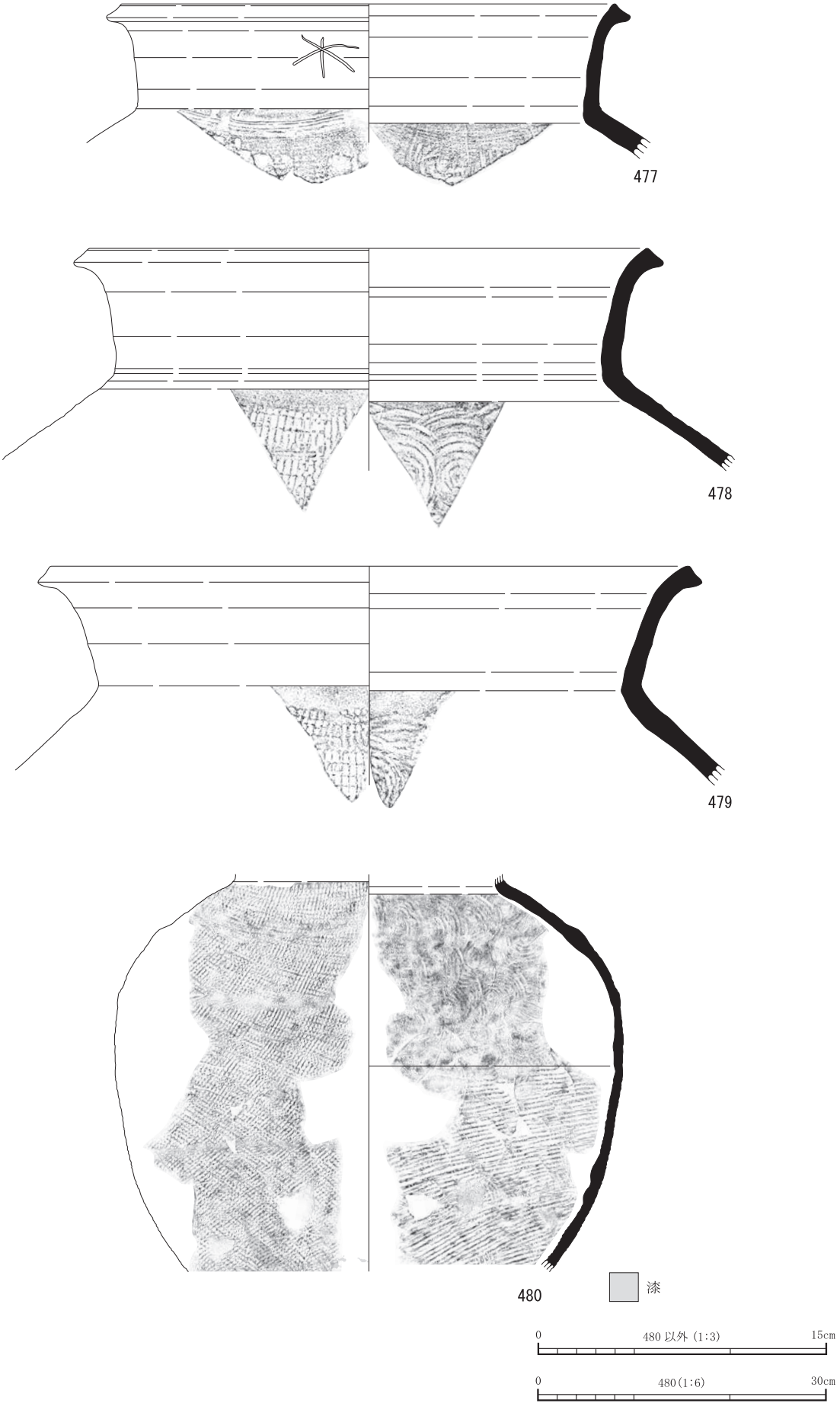
遺構外


444
446
448
445
447
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
漆
黒色処理
煤・油煙痕
0
(1:3)
15cm

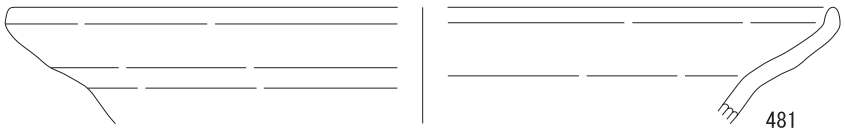
遺構外

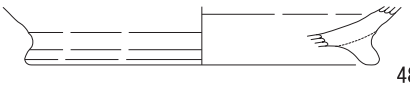

466
漆
467
468
469
470
黒色処理
471
472
473
474
475
476
0　476 以外（1:3）　15cm
0　476（1:6）　30cm

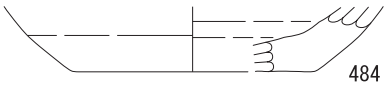
遺構外

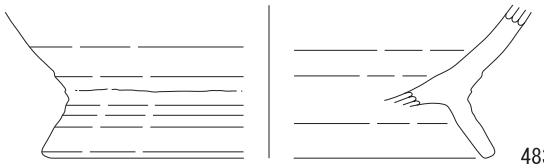


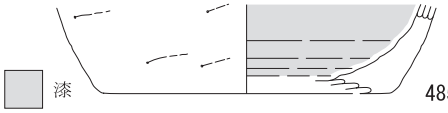
遺構外


481

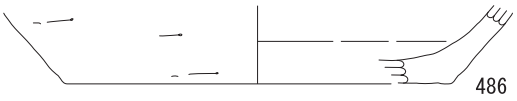

482

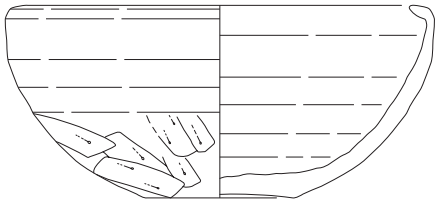

484

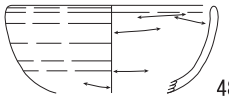

483

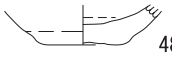


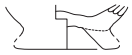
485

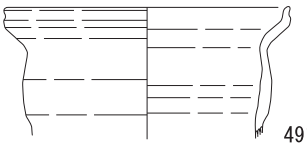

486

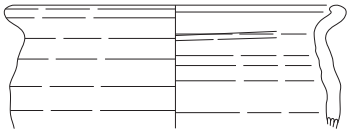

487

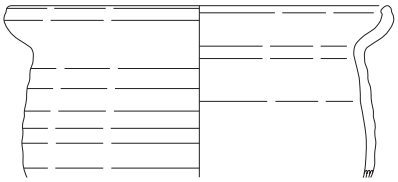

488

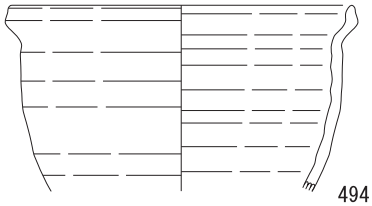

489

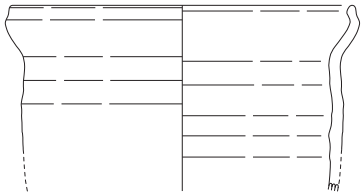

490

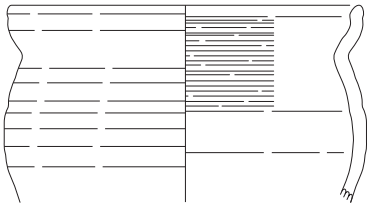

491

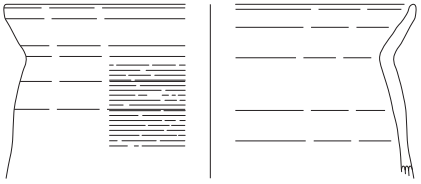

492

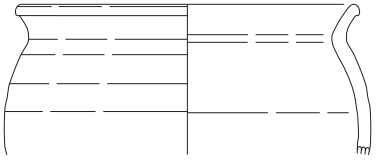

493

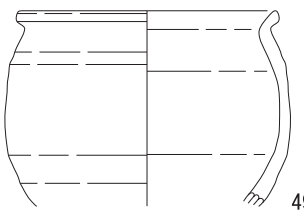

494


495

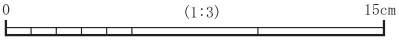

496


497

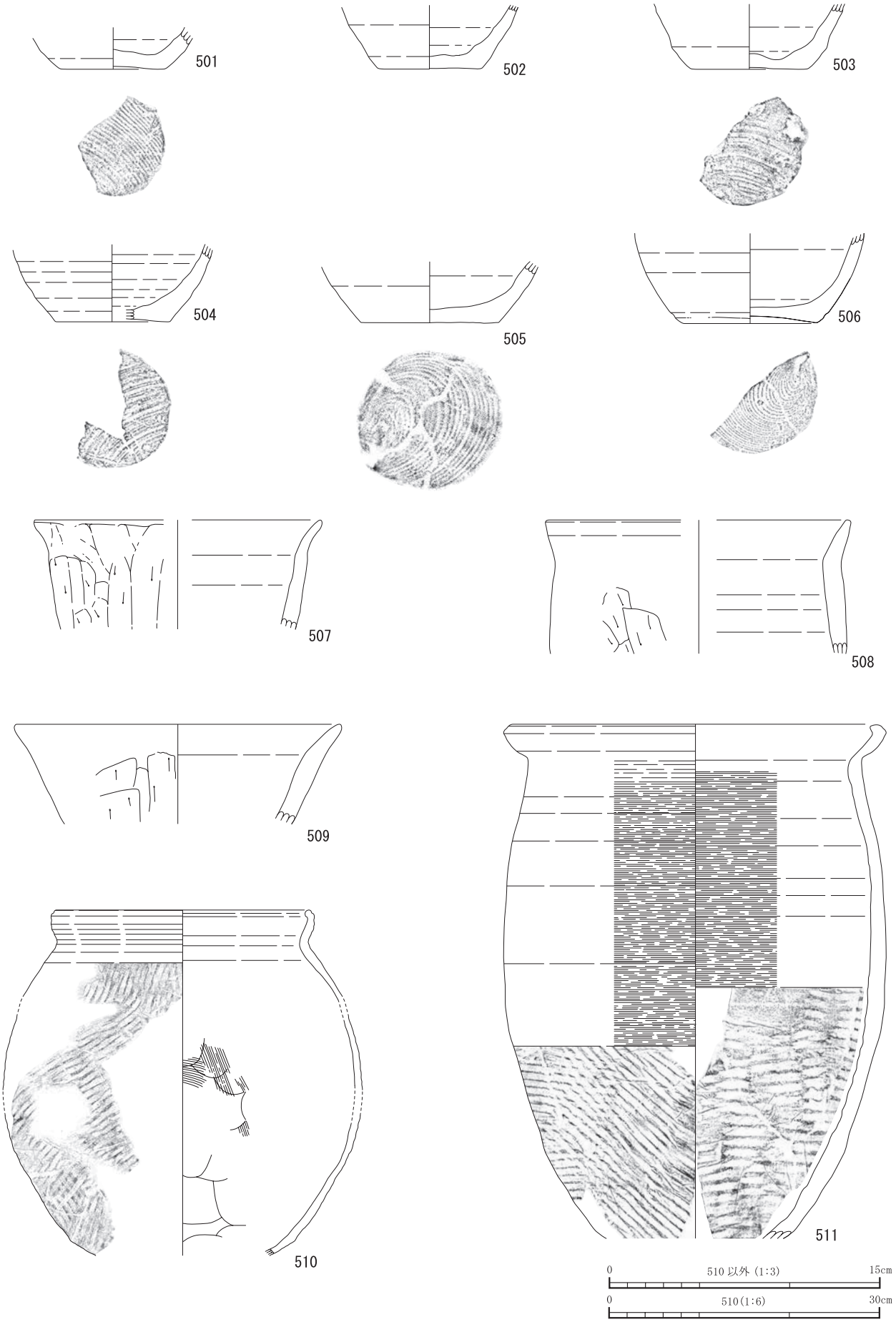

498


499

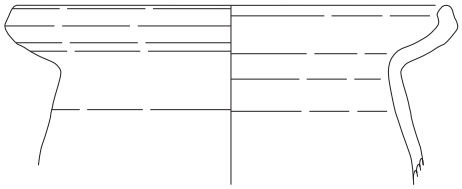
500

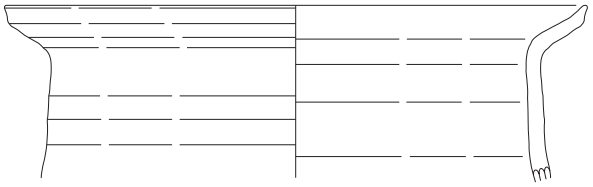


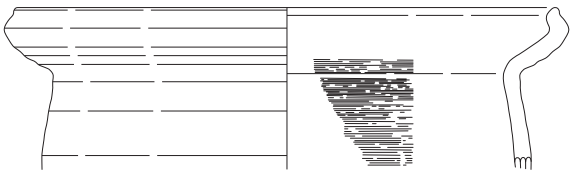
遺構外

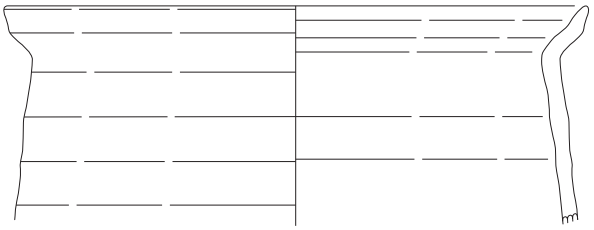

501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
0　510 以外（1:3）　15cm
0　510（1:6）　30cm

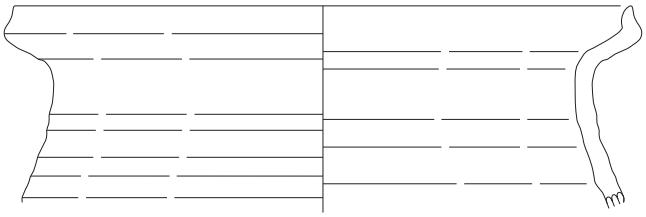
遺構外

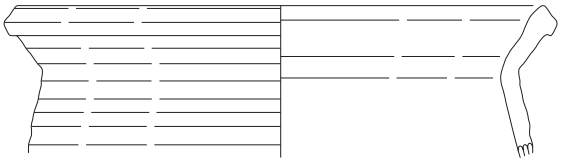

512

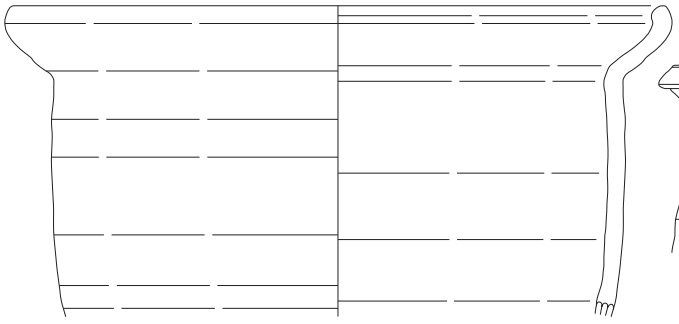

518

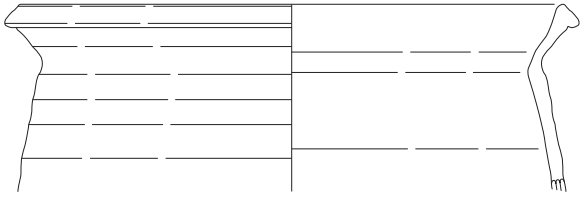

513

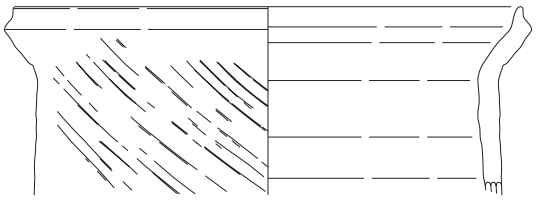

519

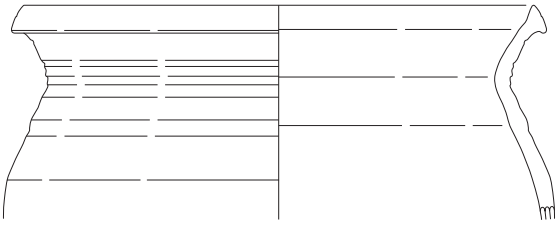

514

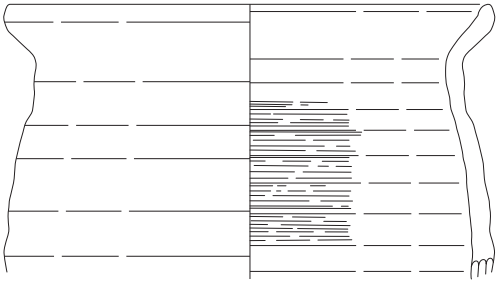

520

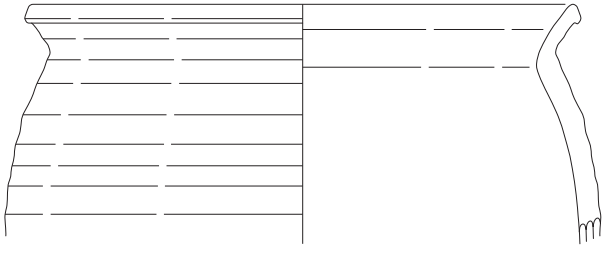

515

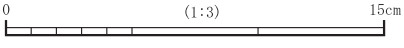

521


516

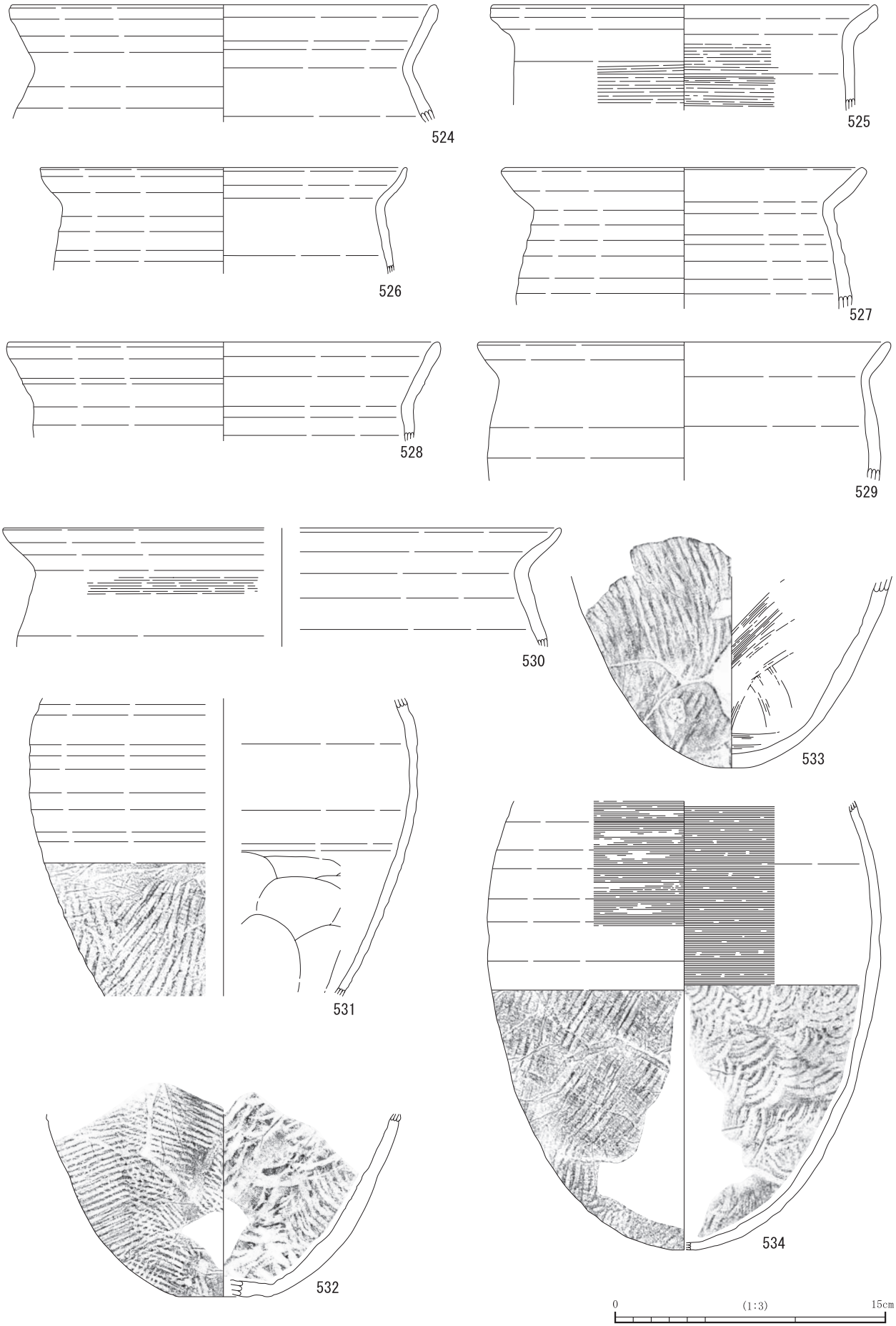

522


517

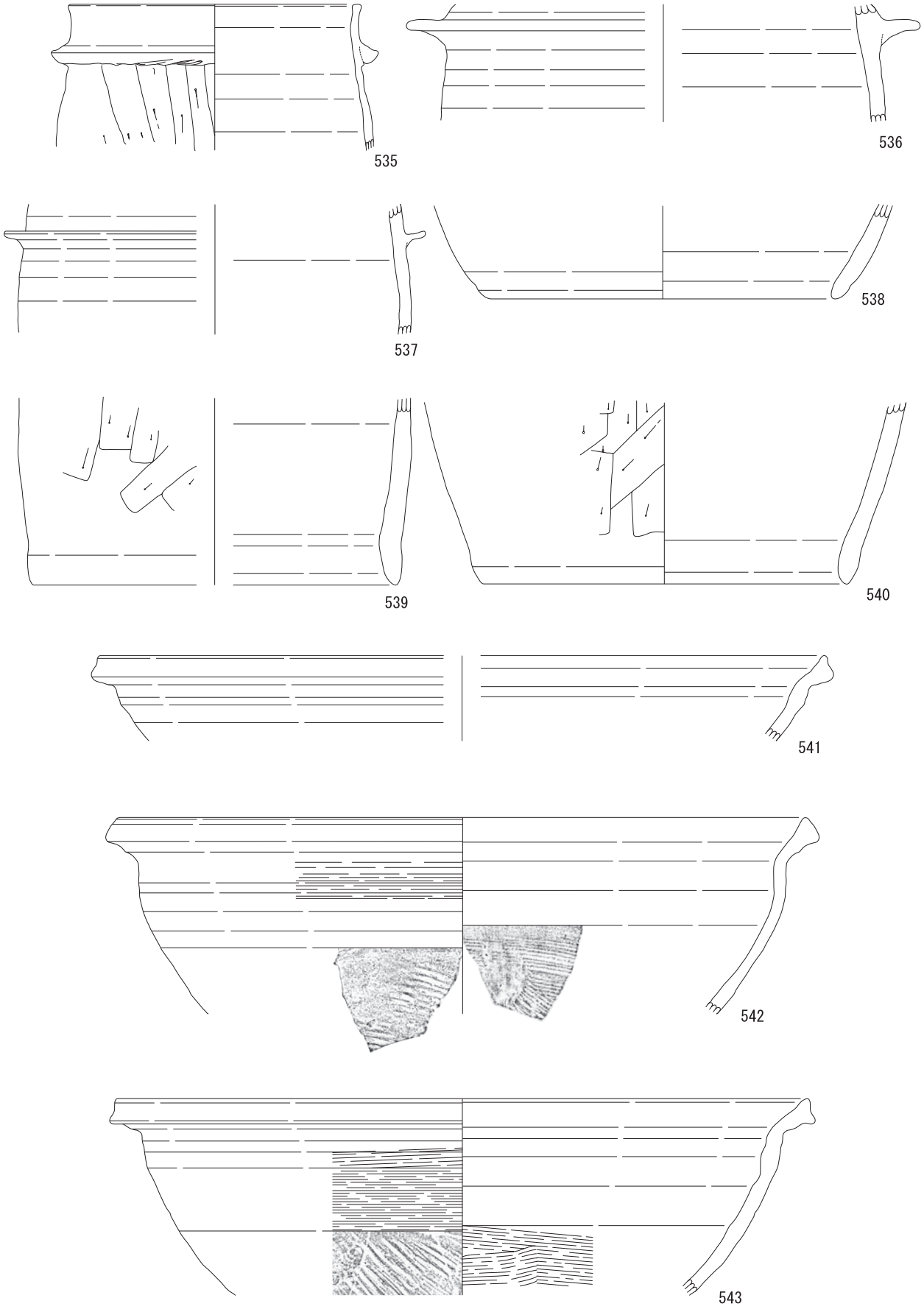

523



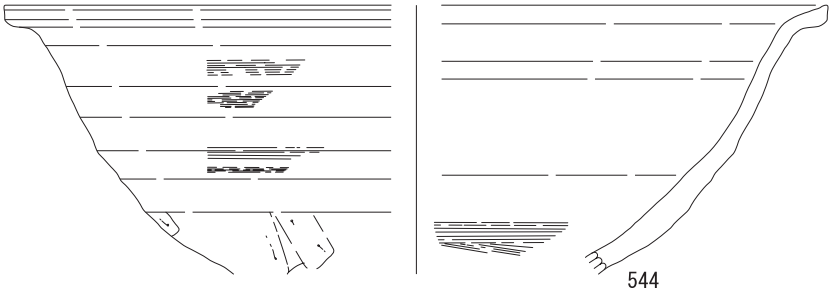
遺構外

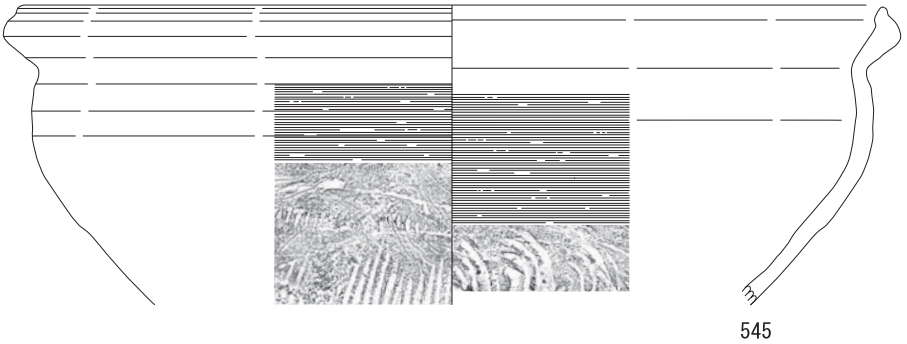


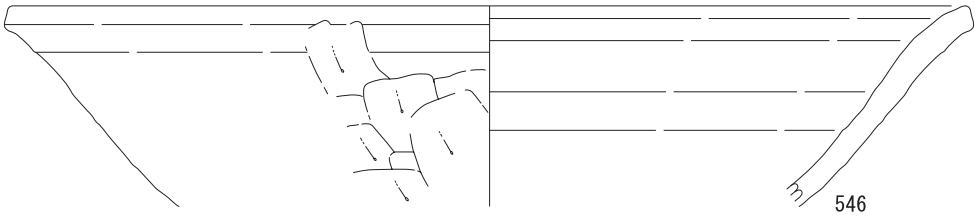
遺構外

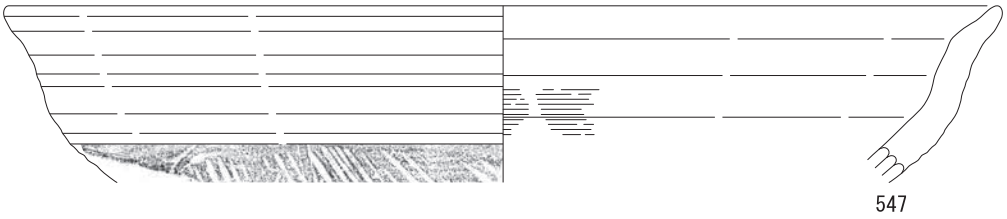


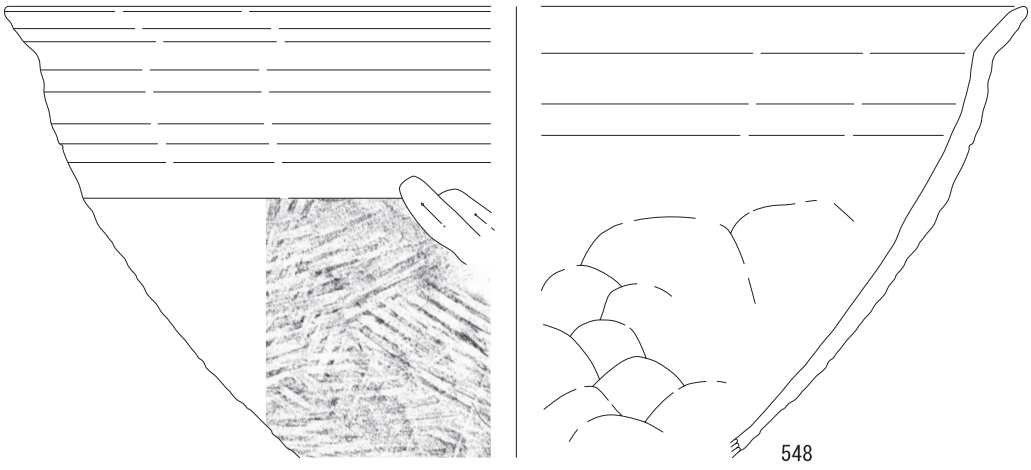
遺構外


544


545

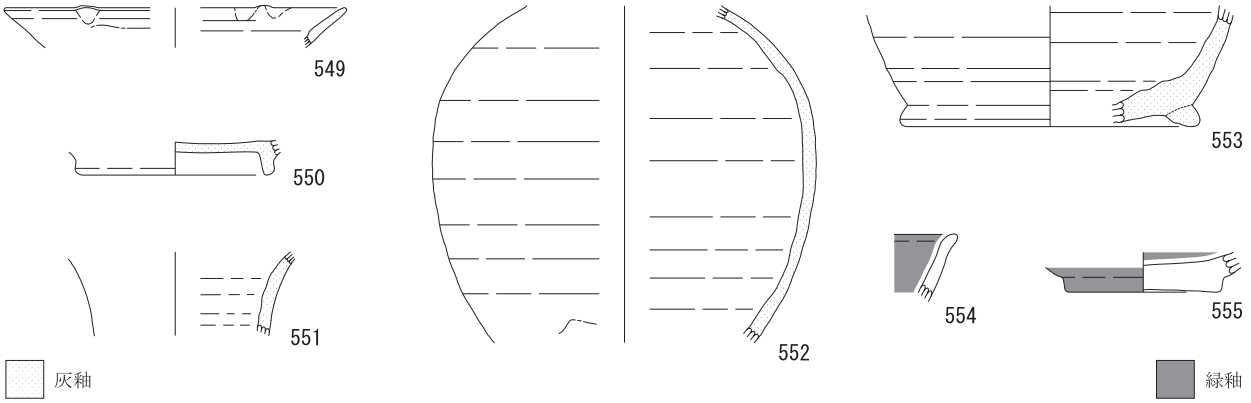

546


547

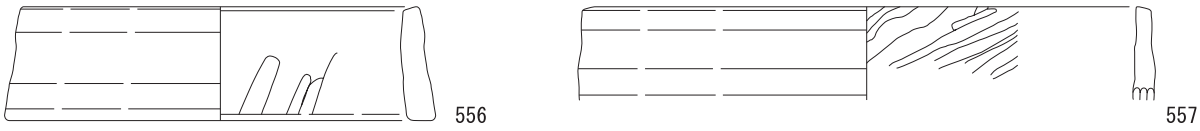

548

0　(1:3)　15cm

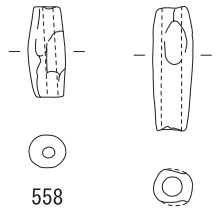
遺構外



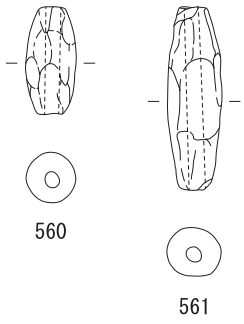
土製品



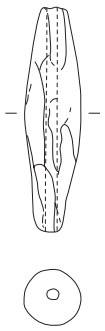
SI5



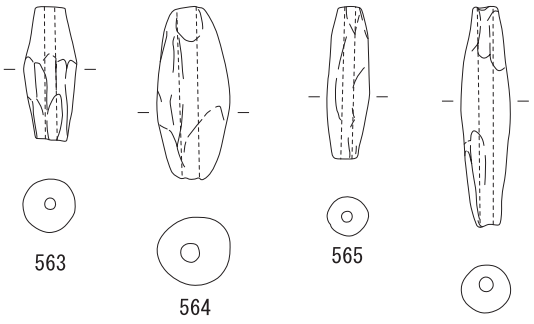
SK342

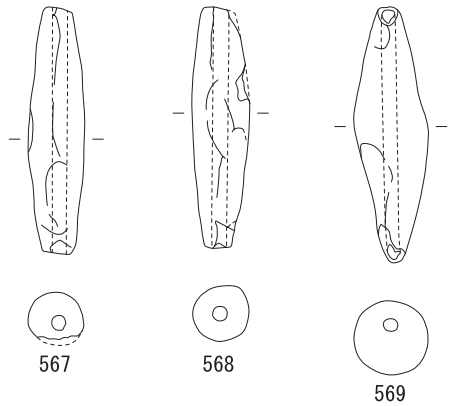


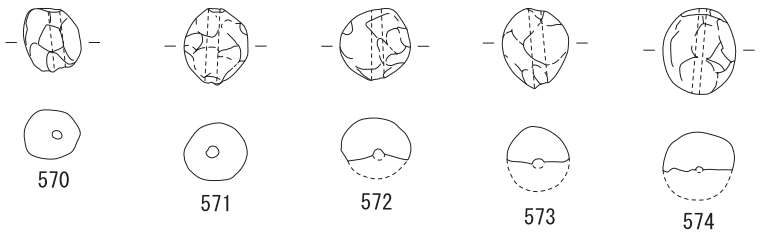
SD3



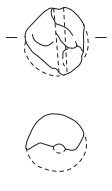
SD7



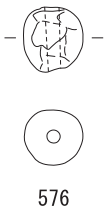




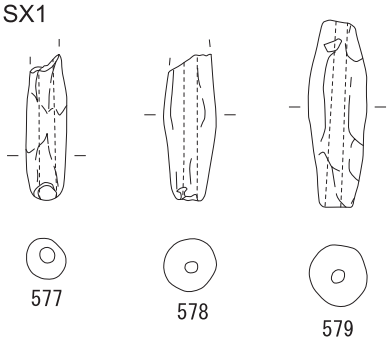
SD27

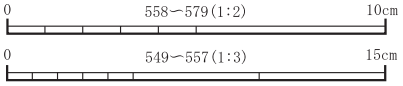


SD296

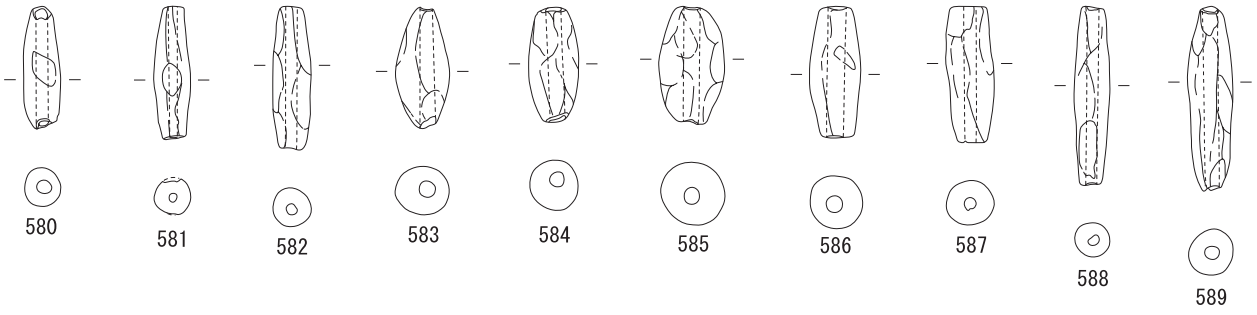


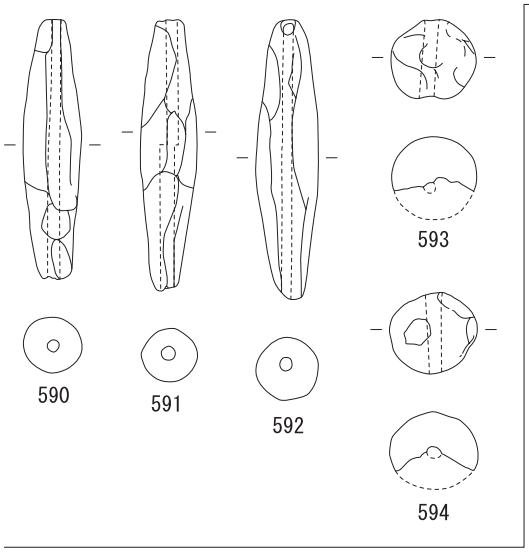
SX1



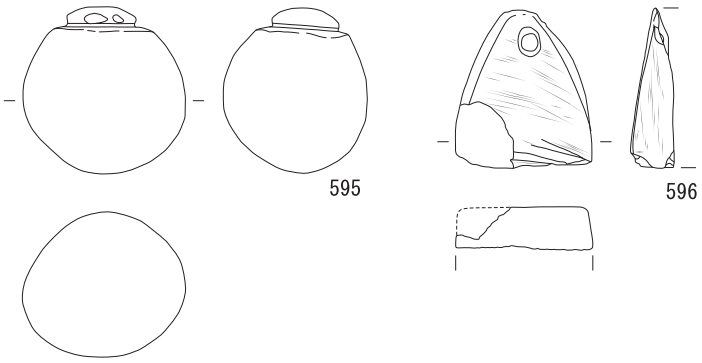


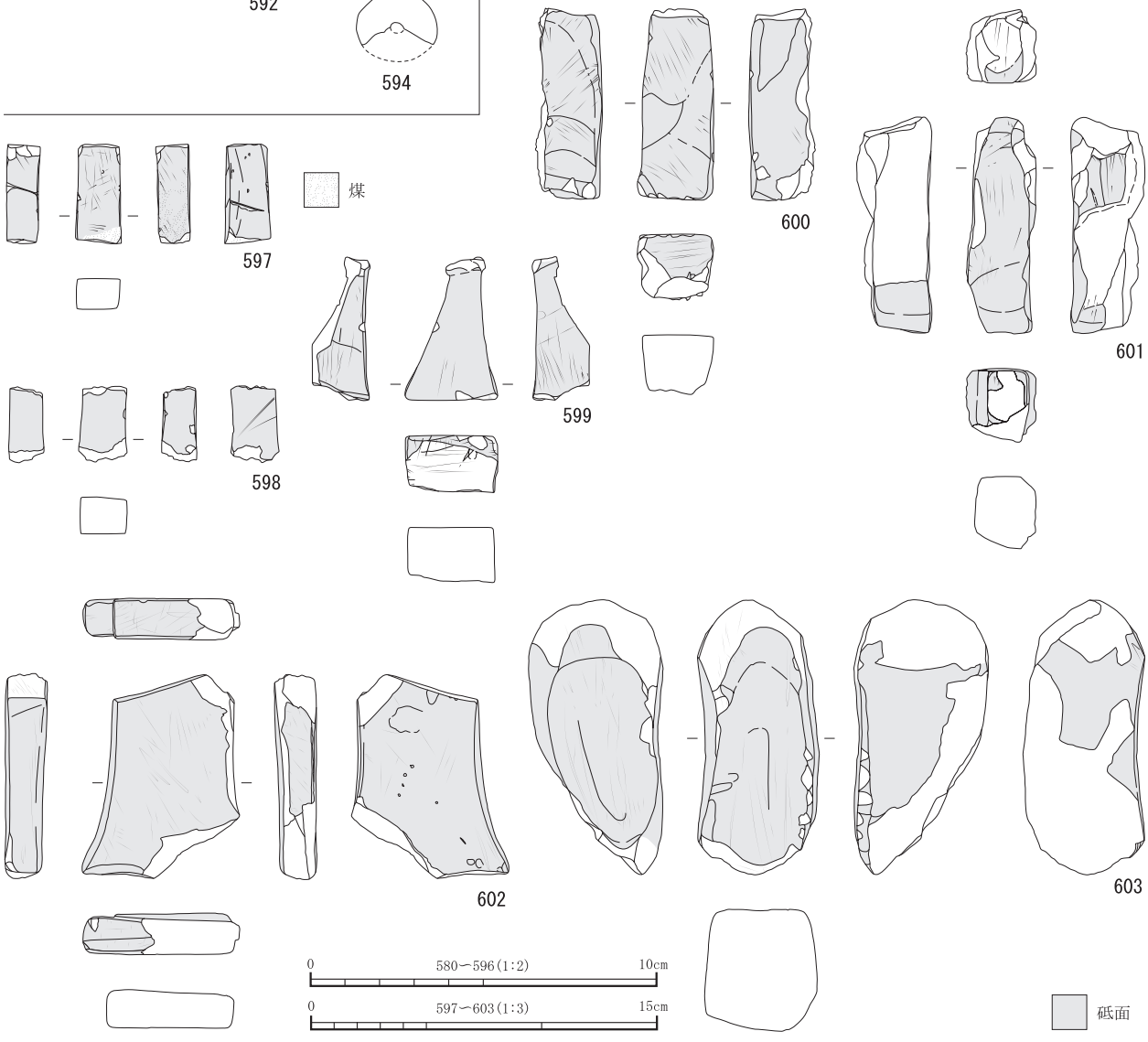
遺構外


580
581
582
583
584
585
586
587
588
589

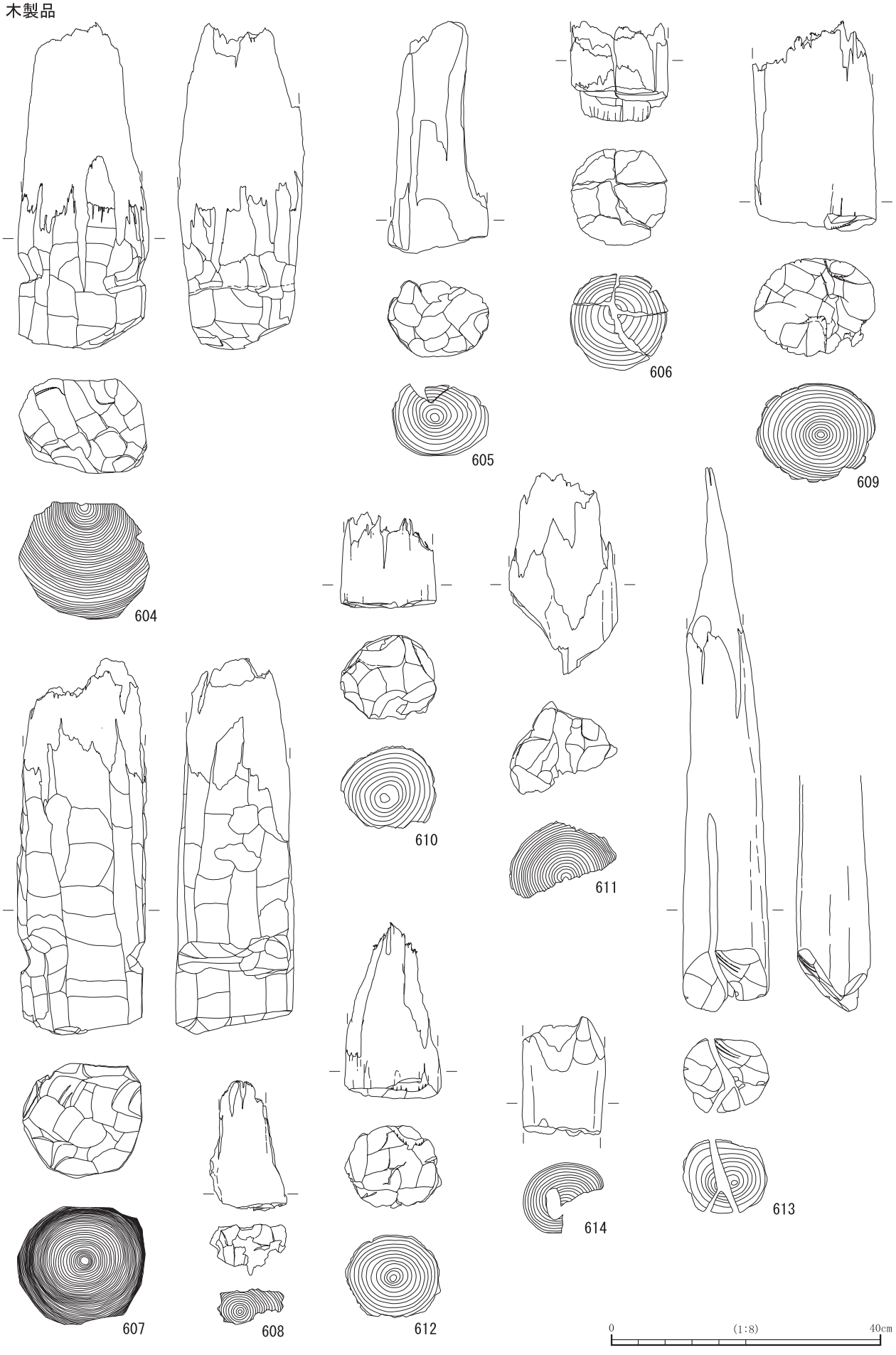

590
591
592
593
594

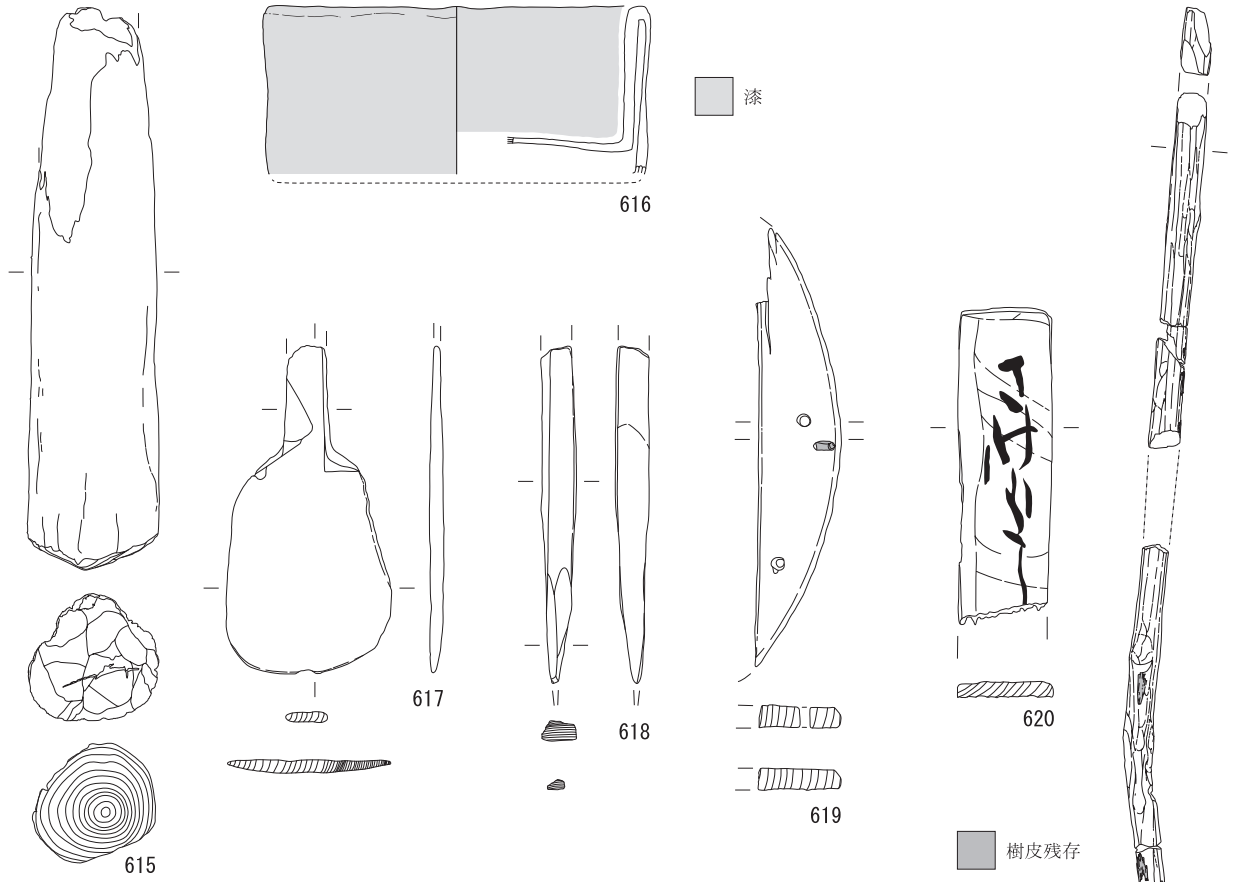
石製品


595
596

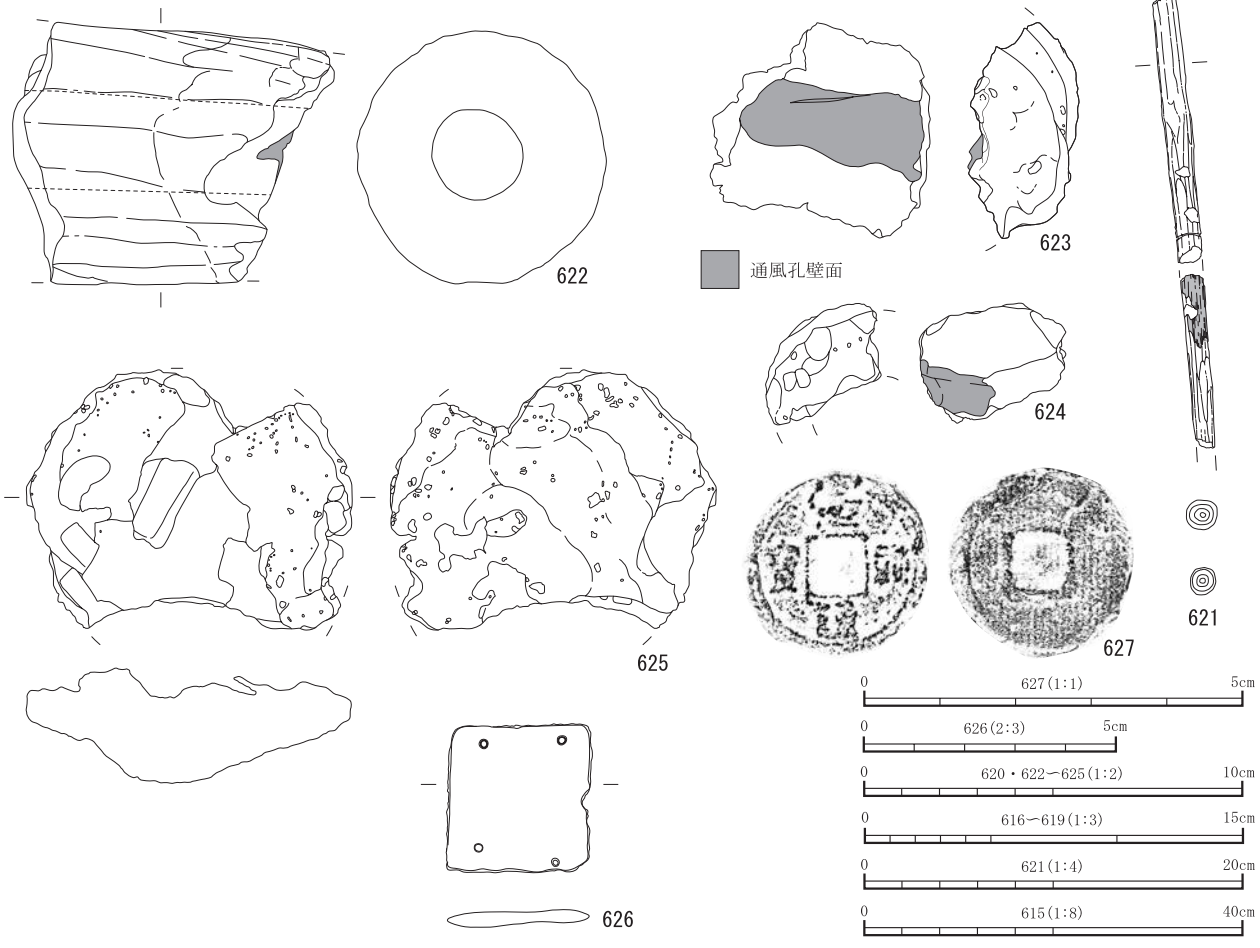

煤
597
598
599
600
601
602
603
0
580－596(1:2)
10cm
0
597－603(1:3)
15cm
砥面

木製品





鍛冶関連遺物・金属製品・銭貨



遺跡全景（南東から）

遺跡全景

遺跡全景（西から）

基本層序①（東から）

SB317 全景（南から）

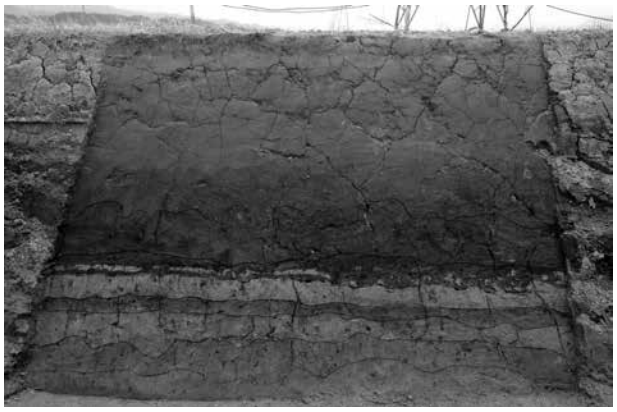
P306 遺物出土状況（南西から）

SK205 完掘（北から）

SK205 断面（南から）

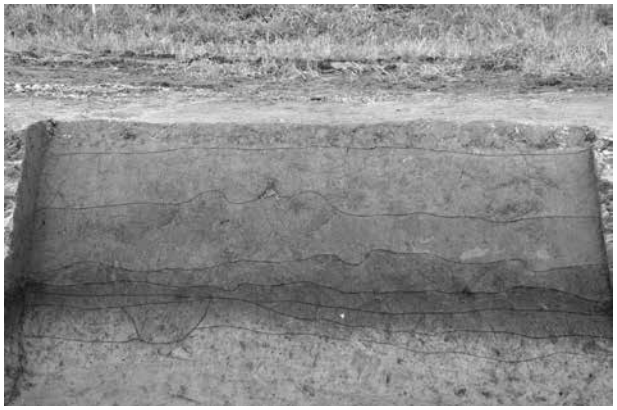
SK482 完掘（南から）

SK342 断面（北から）



基本層序②（北から）

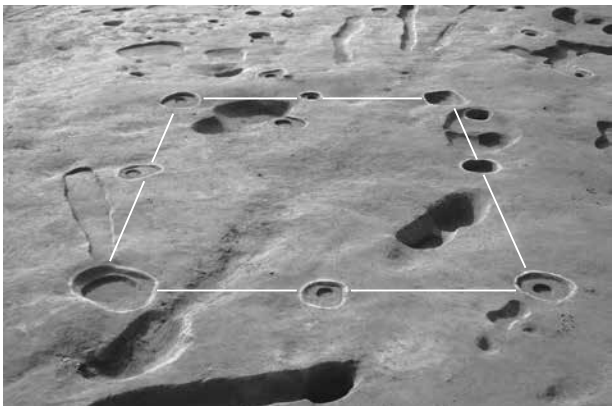
基本層序③（北から）



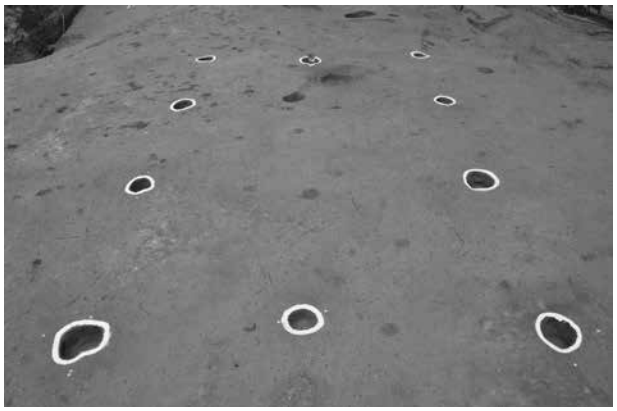
基本層序④（南から）

SX1 遺物出土状況（南東から）

SB166 全景（東から）



SB167 全景（東から）



SB316 全景（南東から）

SB317 － P 1 柱根出土状況（南から）

SB317 － P11 断面（北から）

SB317 － P11 柱根出土状況（北から）

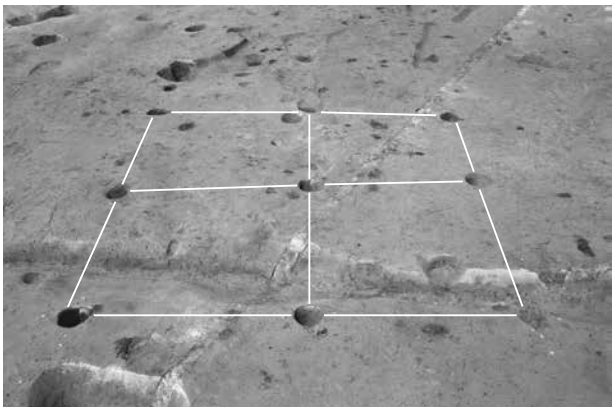
SB318 全景（南東から）

SB320 全景（東から）

SB348 全景（南東から）

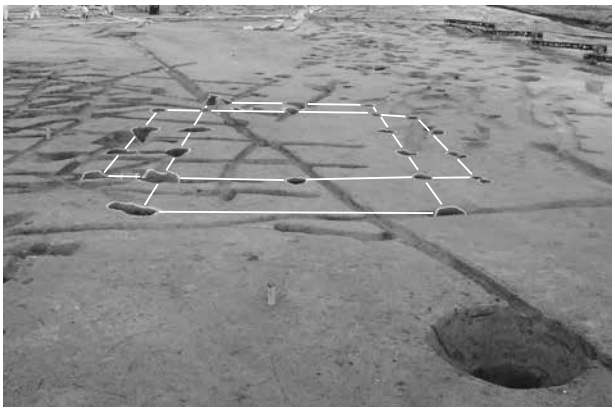
SB348 － P 4 柱根出土状況（北西から）

SB348 － P 6 遺物出土状況（北から）



SB535 全景（南東から）

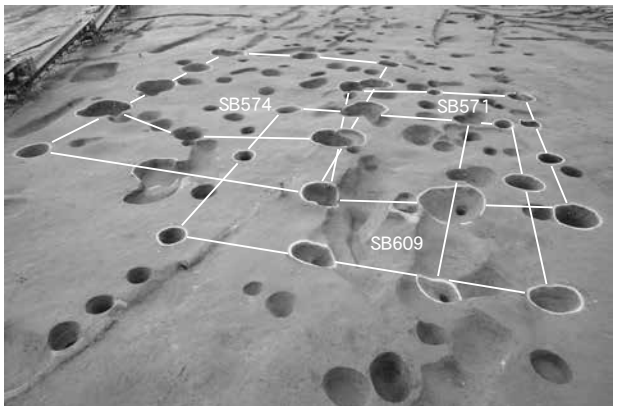
SB550 全景（北西から）



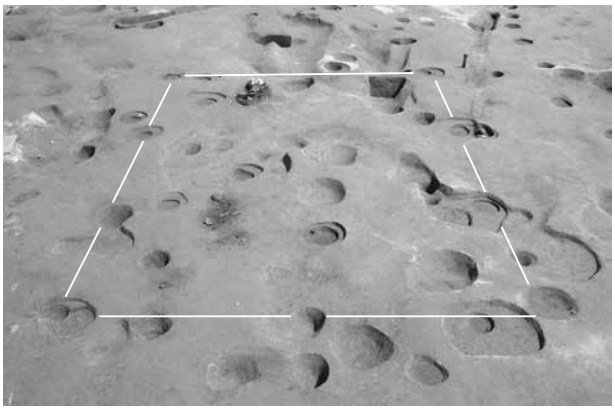
SB608 全景（北西から）

SB608 － P 5 柱根出土状況（北東から）

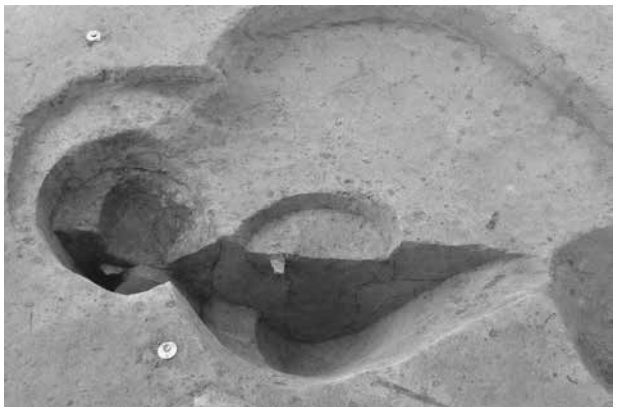
SB608 － P22 断面（南西から）



SB571・574・609 全景（南東から）

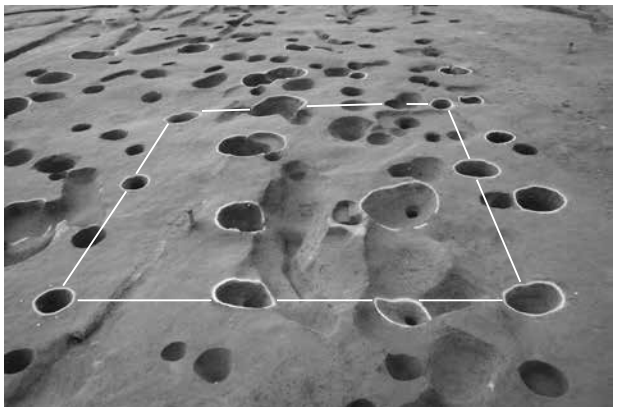


SB571 全景（東から）



SB571 － P 2 ・SB574 － P 9 断面（南西から）

SB574 全景（西から）



SB609 全景（南東から）

SI 5 完掘（南から）

SI 5 断面（南東から）

SI10 完掘（東から）

SI10 断面（南東から）

SI10 カマド断面（東から）

SI46 完掘（南西から）

SI46 断面（南西から）

SI49 完掘（南東から）

SI54 炭化物検出状況（西から）

SI54 断面（北東から）

SI70 床面検出（南西から）

SI70 断面（南東から）

SI207 完掘（西から）

SI207 断面（南西から）

SI130 完掘（南から）

SI212 完掘（南西から）

SI211 完掘（南西から）

SI211 断面（南東から）

SI268 床面検出状況（南西から）

SI268 断面（南西から）

SI429 断面（南東から）

SI465 断面（南から）

SI664 床面検出状況（北西から）

SI664 断面（北東から）

P 2 遺物出土状況（南から）

SX32 遺物出土状況（南西から）

SK280 遺物出土状況（南から）

P306 断面（南西から）

SK492 遺物出土状況（北から）

SK493 遺物出土状況（西から）

SK594（SX266）遺物出土状況（南東から）

SK573 遺物出土状況（南から）

SK573・SB609 － P 9 断面（南東から）

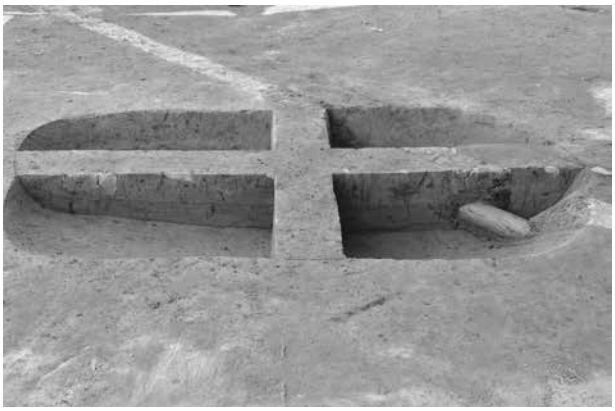
SK146 検出状況（東から）

SK146B 断面（東から）

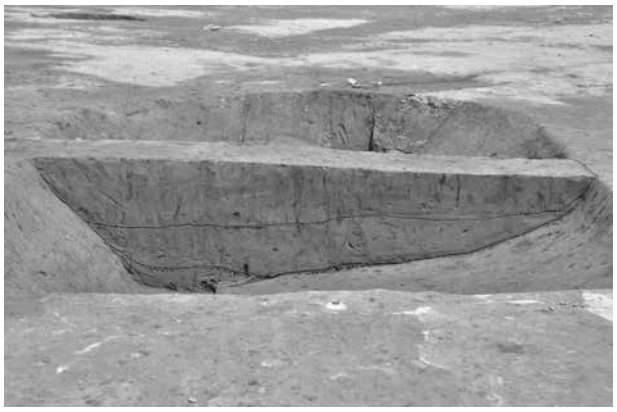
SK146A 断面（南から）

SK146 遺物出土状況（東から）

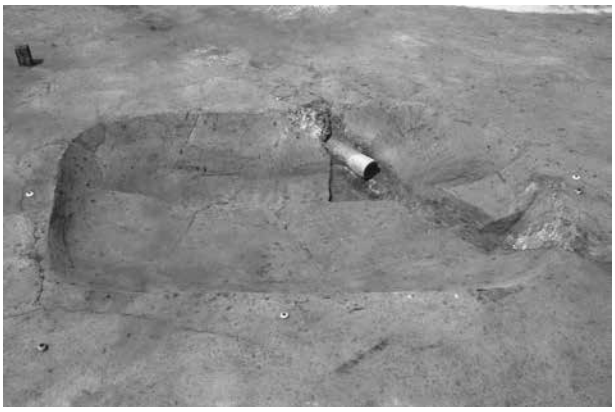
SK205A 断面（北東から）



SK246A 断面（南西から）



SK246B 断面（北西から）



SK246 完掘（南から）

SK260 断面（西から）

SK260 遺物出土状況（西から）

SK482A 断面（北東から）

SK482B 断面（南西から）

SK512A 断面（南西から）

SK512B 断面（南東から）

SK512 炭化物検出状況（南西から）

SK512 完掘（南東から）

SK 6 断面（南から）

SD69・SK151 断面（南東から）

SK42 断面（西から）

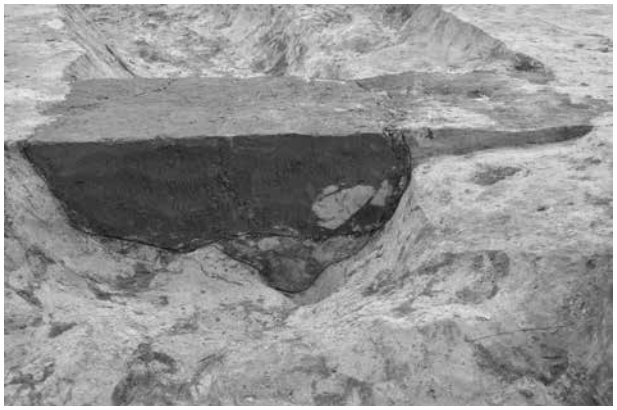
SK42 遺物出土状況（南西から）

SK216 断面（南から）

P149・SK148・SK259 断面（東から）

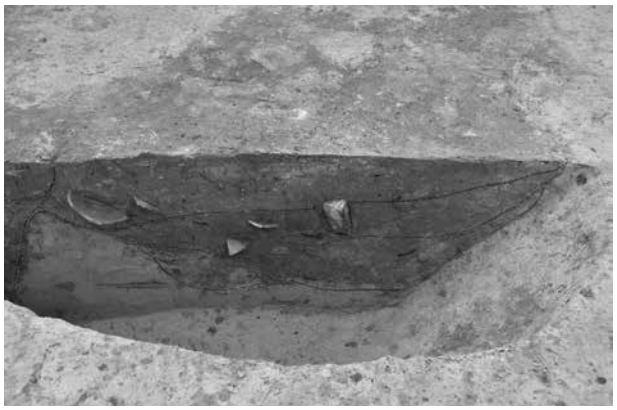
SK342 焼土検出状況（南西から）

SK342 完掘（南東から）



SD347　A 断面（南東から）

SK359 断面（東から）



SK361 断面（東から）

SB348 － P13・SK361 完掘（東から）

SK365 遺物出土状況（南東から）

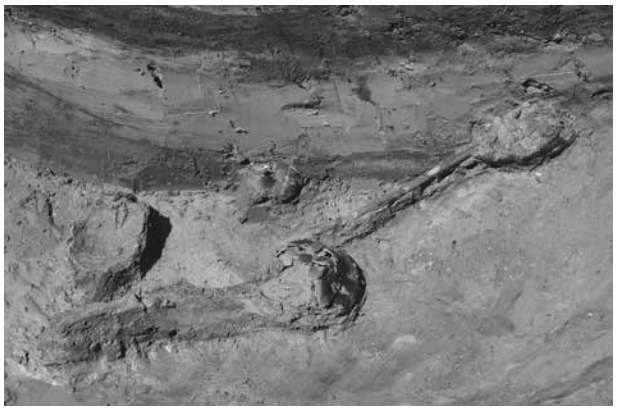
SK378 断面（北西から）

SK396 遺物出土状況（南から）

SK396 断面（南から）

SE403 断面（南から）

SE677 断面（南東から）



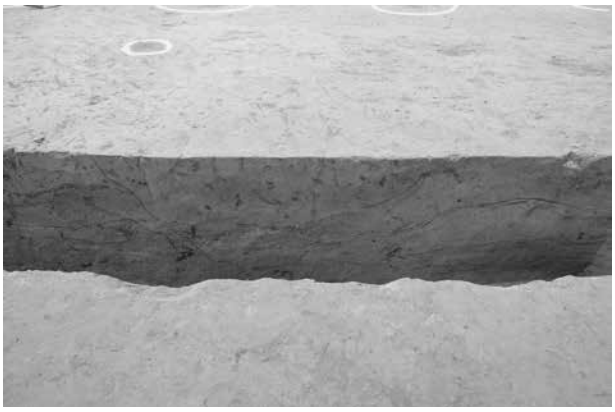
SE677 遺物出土状況（南東から）

SD 3B 断面（南西から）

SD 3 ・SD131 断面（南東から）

SD 7 遺物出土状況（南西から）

SD 7 A 断面（南西から）

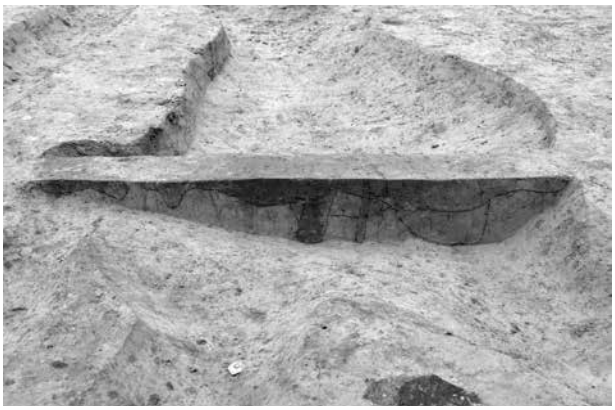


SD 7 C 断面（南から）

SD153 断面（南東から）

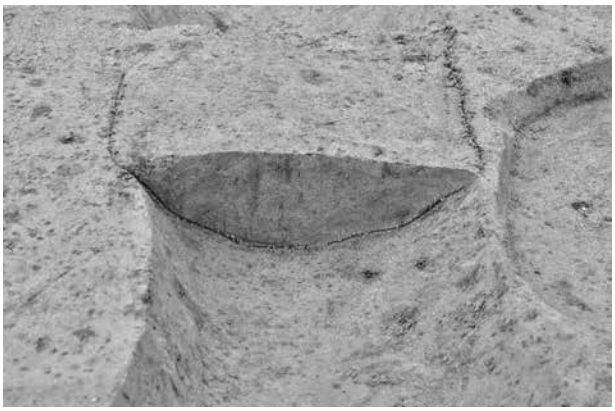
SD267 断面（南から）

SD480 断面（南西から）



SD481・491・SX494 断面（南西から）

溝群 1　SD323・326 断面（南東から）

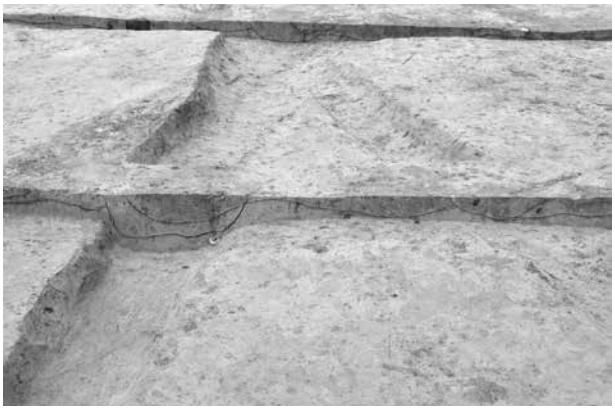


溝群 1　SD332 断面（南東から）

溝群 2　完掘（南東から）

溝群 2　SD356・413 断面（南東から）

溝群 3　SD432・437・438・439 断面（南西から）



溝群 3　SD440・443・488 断面（南西から）

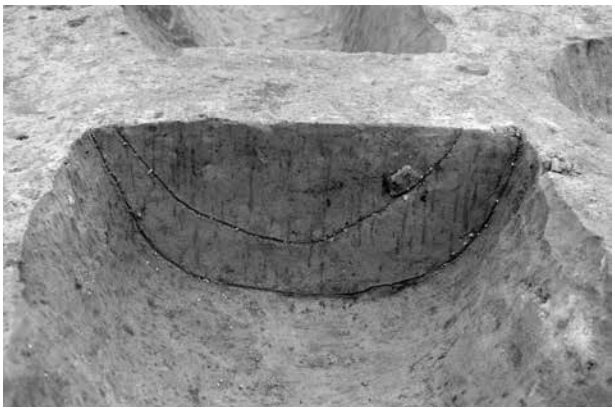
溝群 4　SD34・35 断面（北西から）

溝群 4　SD40・41 断面（南東から）

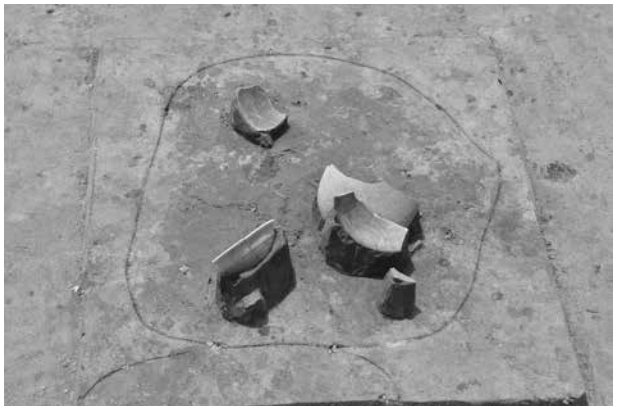
溝群 5　SD164 断面（南東から）

溝群 5　SK110・SD111・112 断面（南東から）

溝群 6　SX 4 検出状況（南から）



溝群 6　SX 4 断面（南西から）



P278 遺物出土状況（東から）

SK119・SX120・P242・SK245 断面（南西から）

SX120 完掘（南東から）

SX400 完掘（南西から）

作業風景 1

作業風景 2

SD7 出土遺物

主な土器埋納遺構・土器溜まり出土土師器・内面黒色土器（左列Ⅱ期、中列Ⅲ期、右列Ⅳ期）

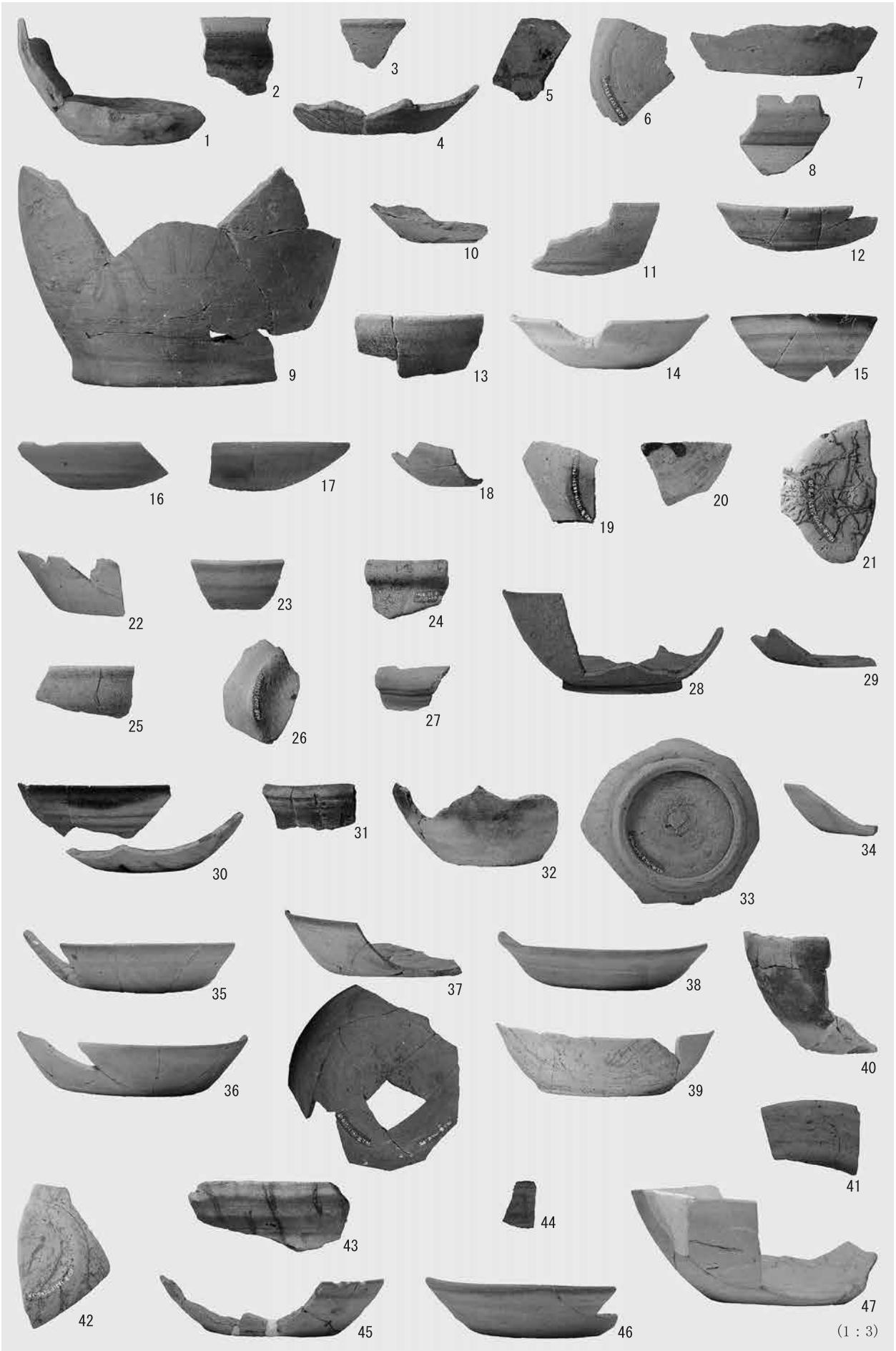
漆紙付着土師器（423）

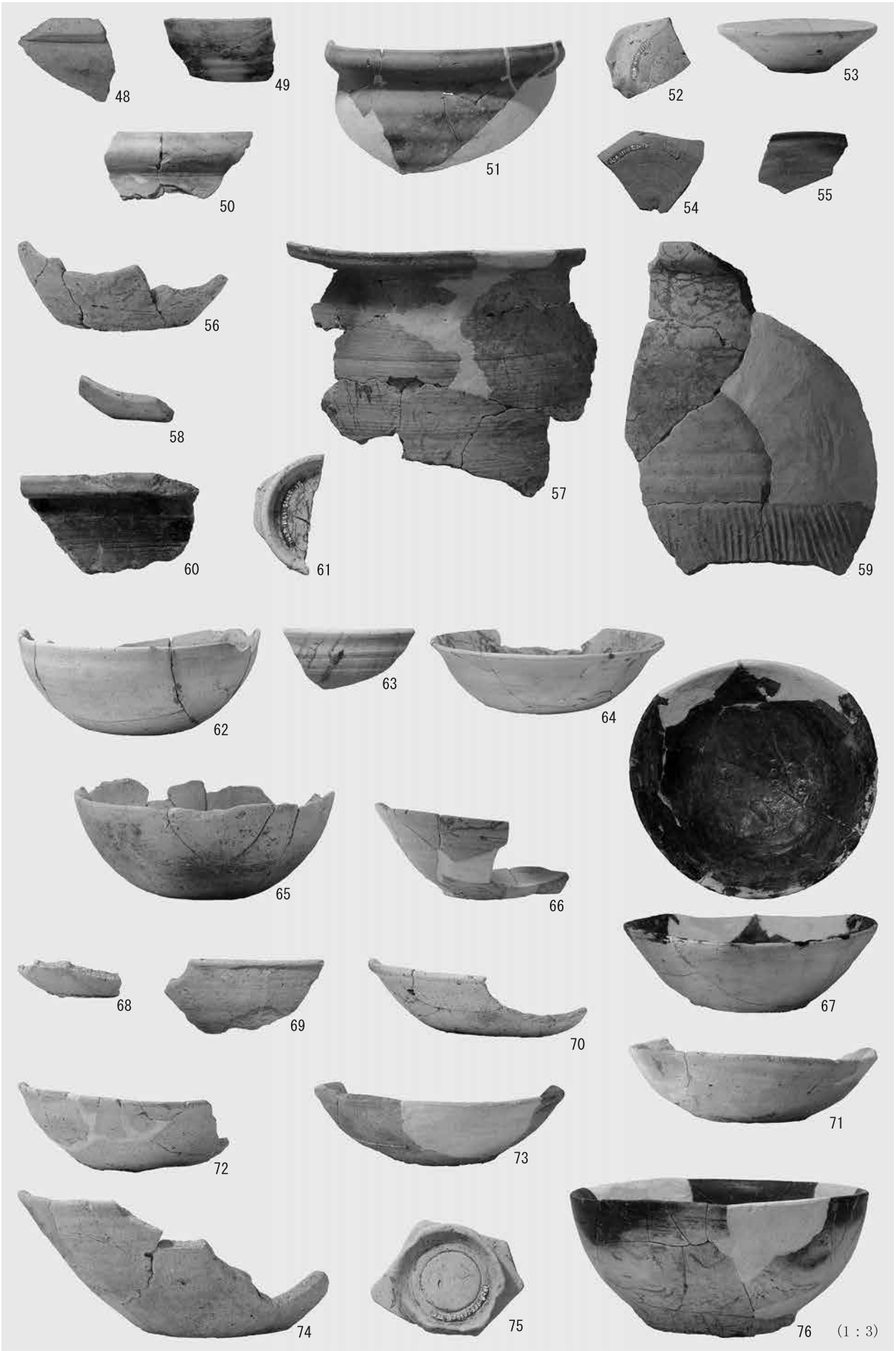
繊維付着土師器（158）

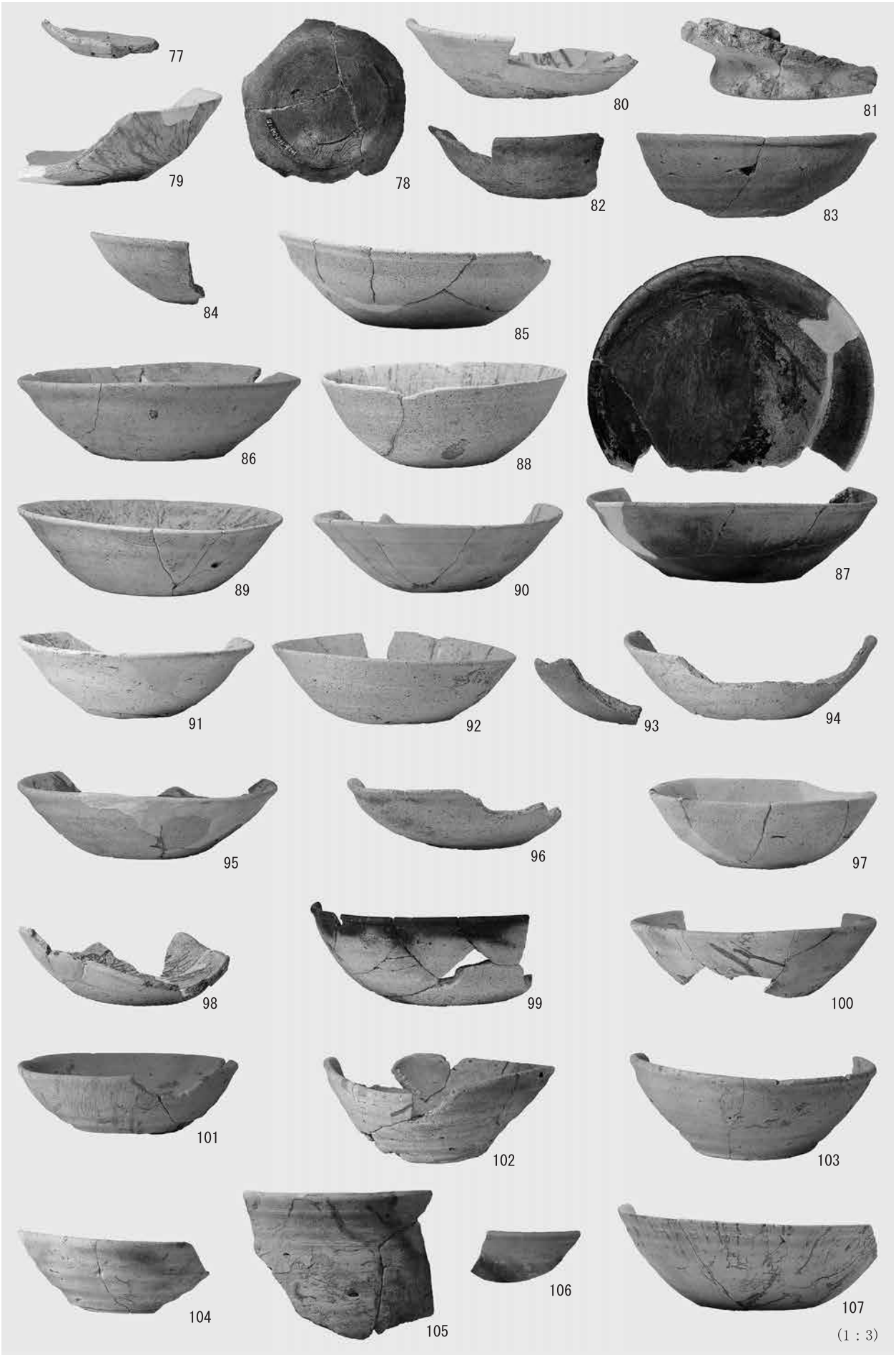
灰釉陶器・緑釉陶器

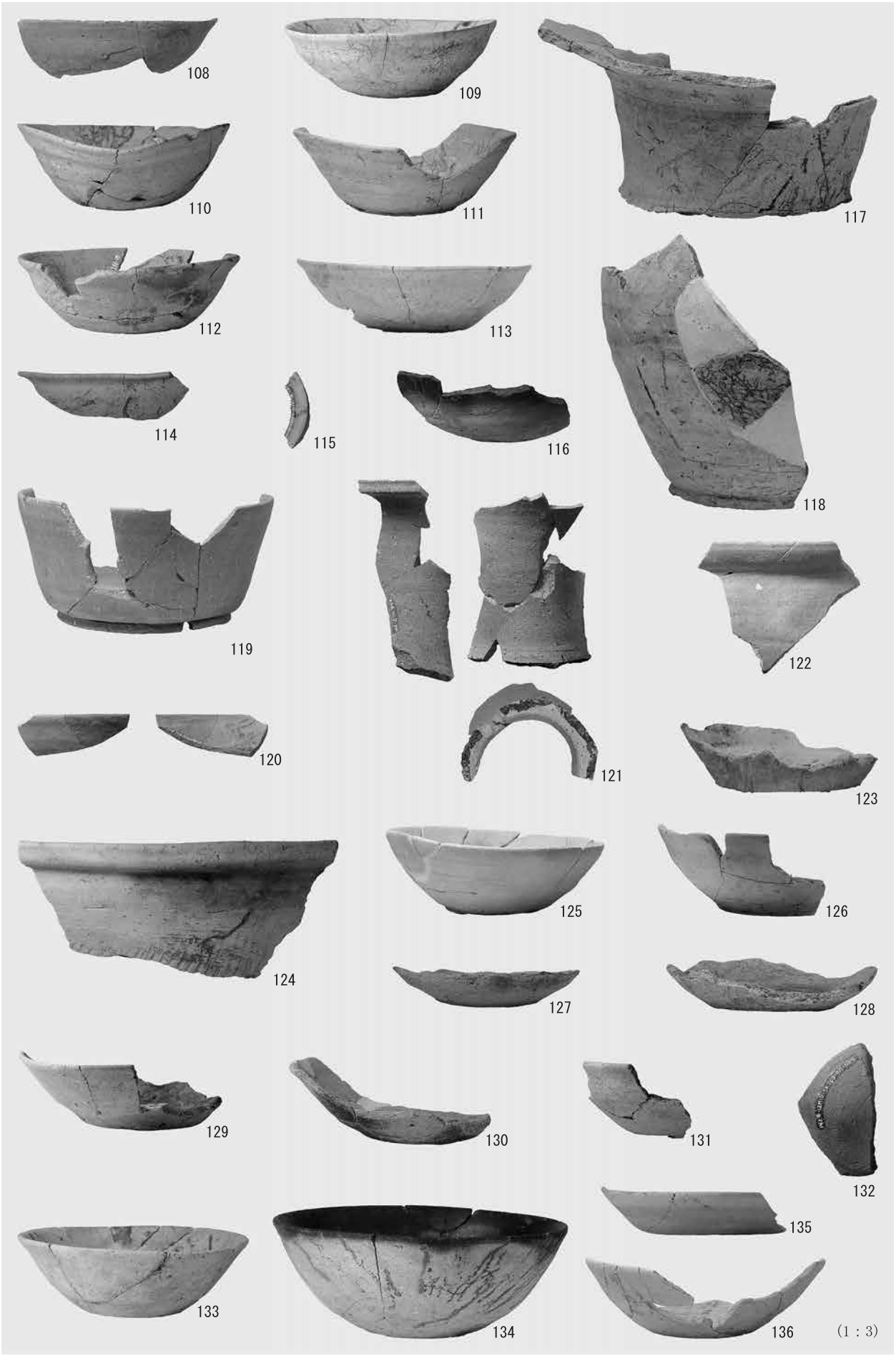
砥石・石錘・権状錘

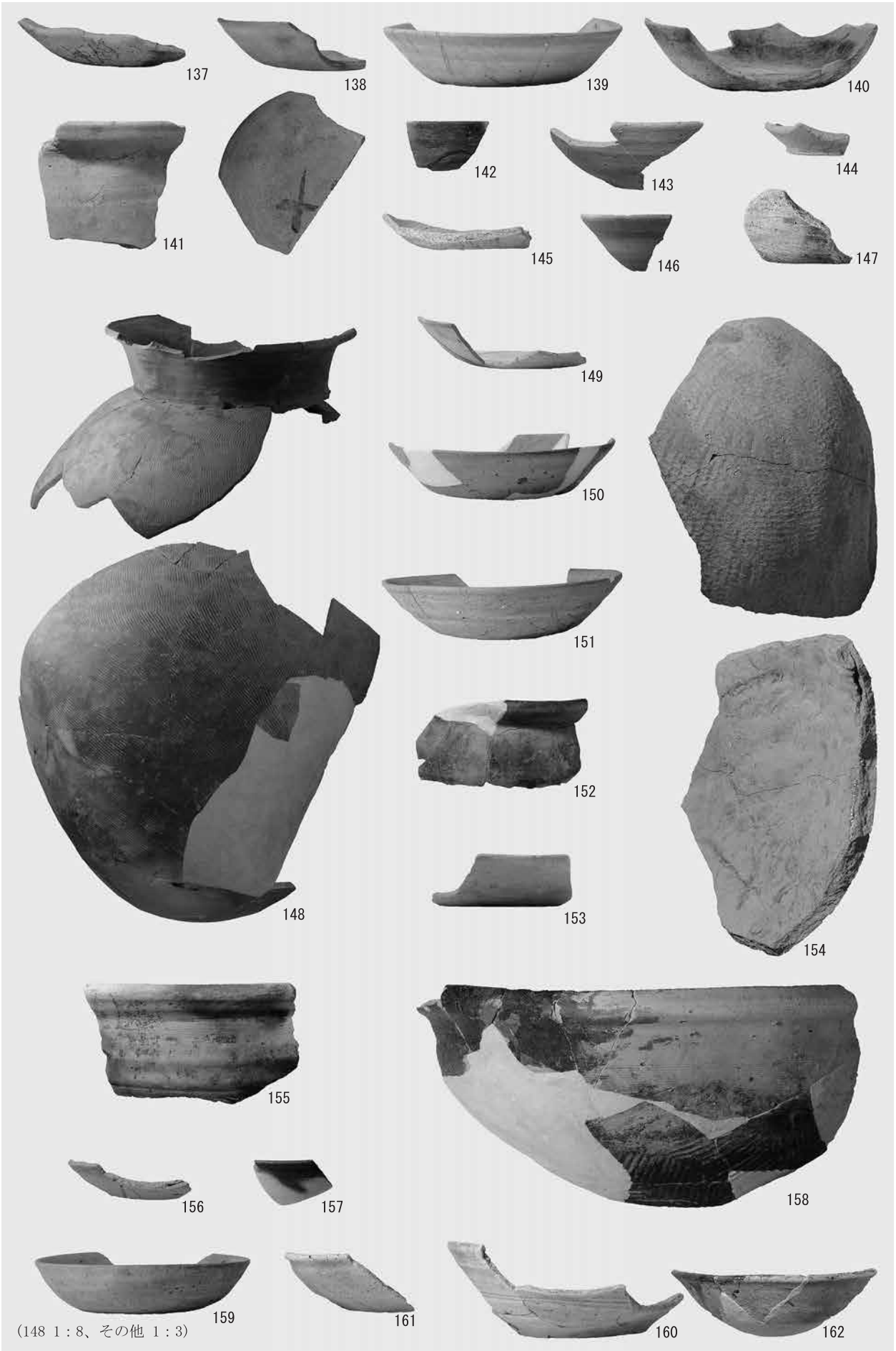
主な墨書・漆書・刻書（2：3）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
(1：3)

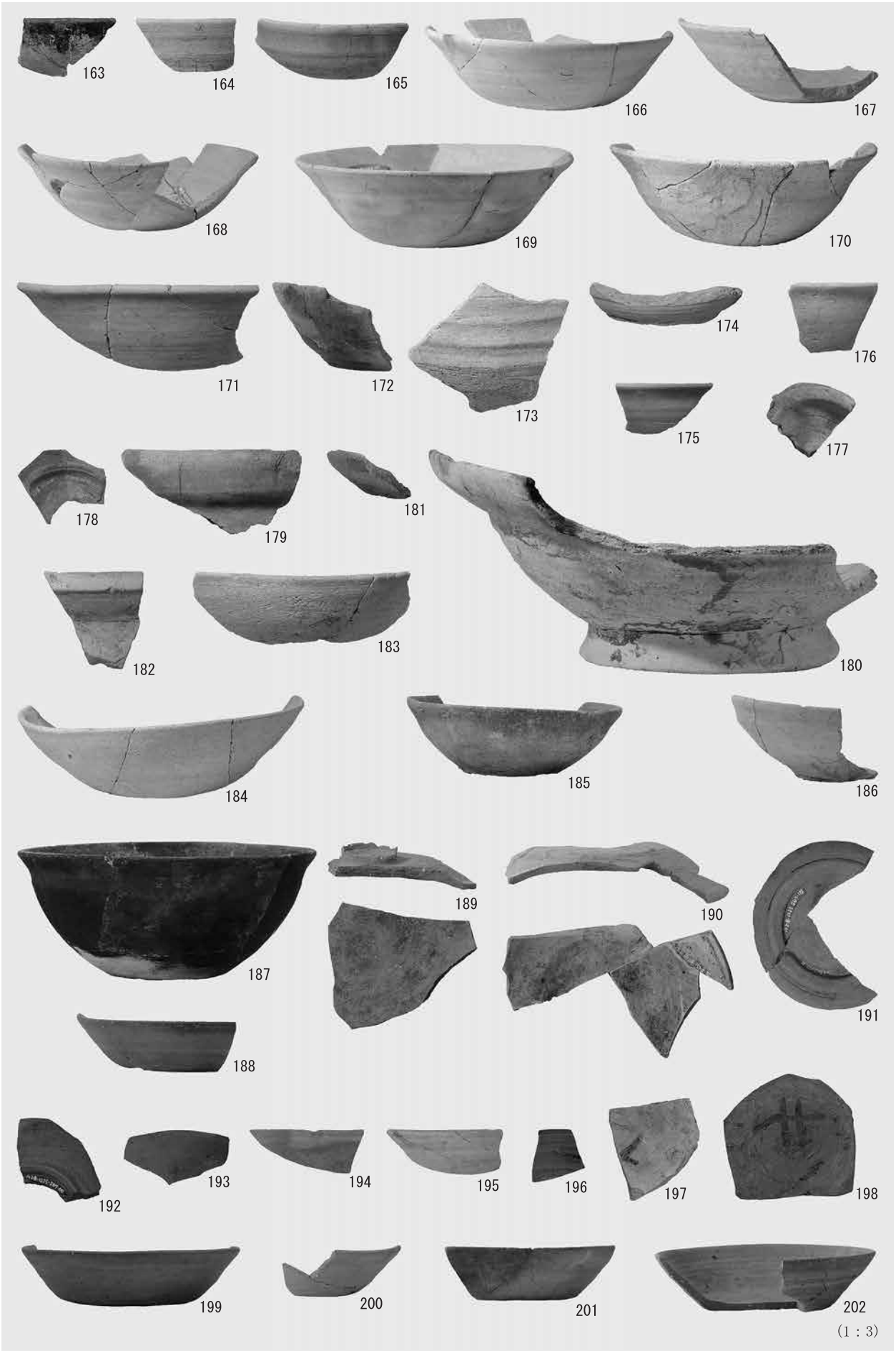

48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
(1：3)

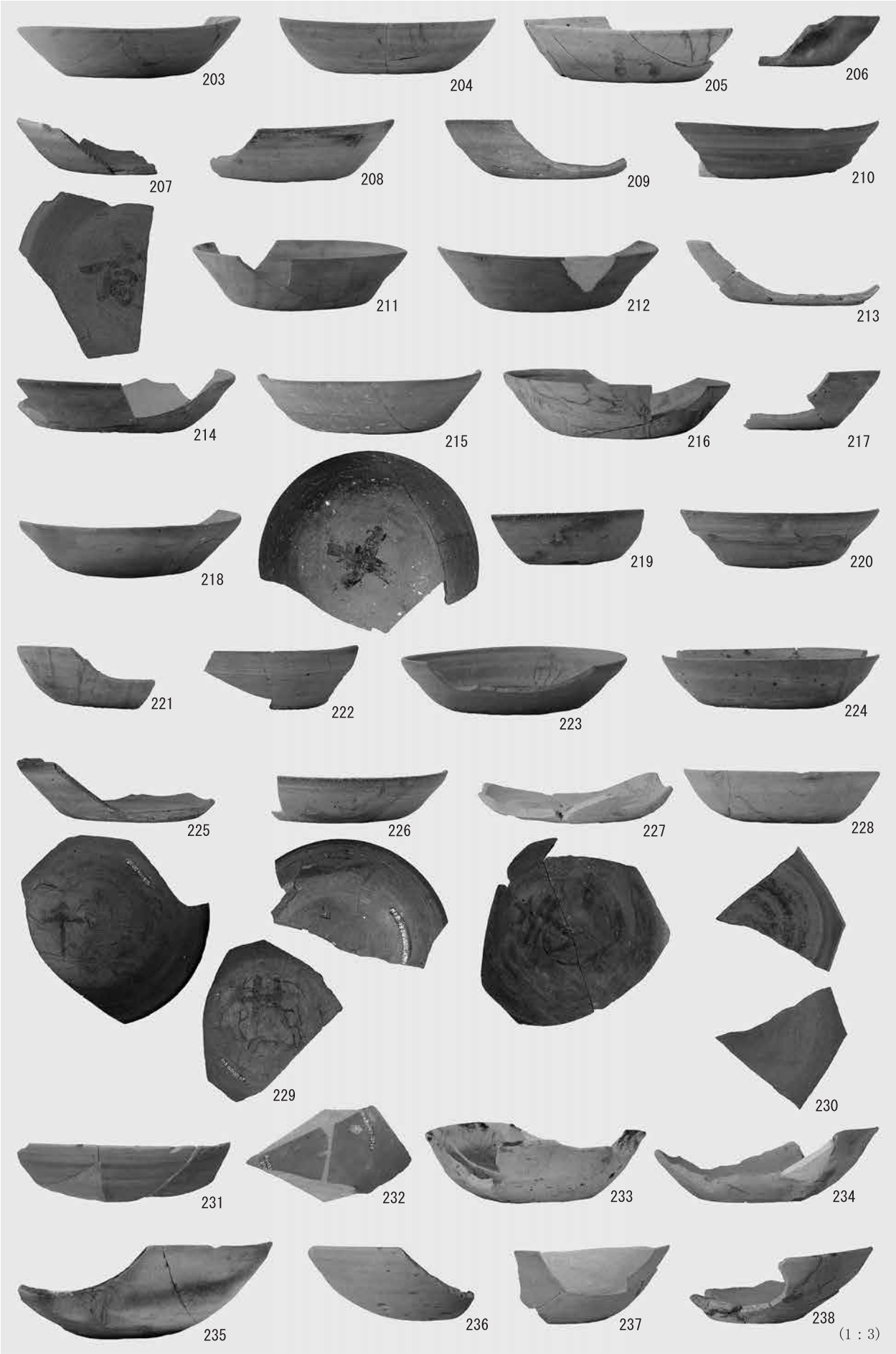

77
78
80
81
79
82
83
84
85
86
88
89
90
87
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
(1：3)

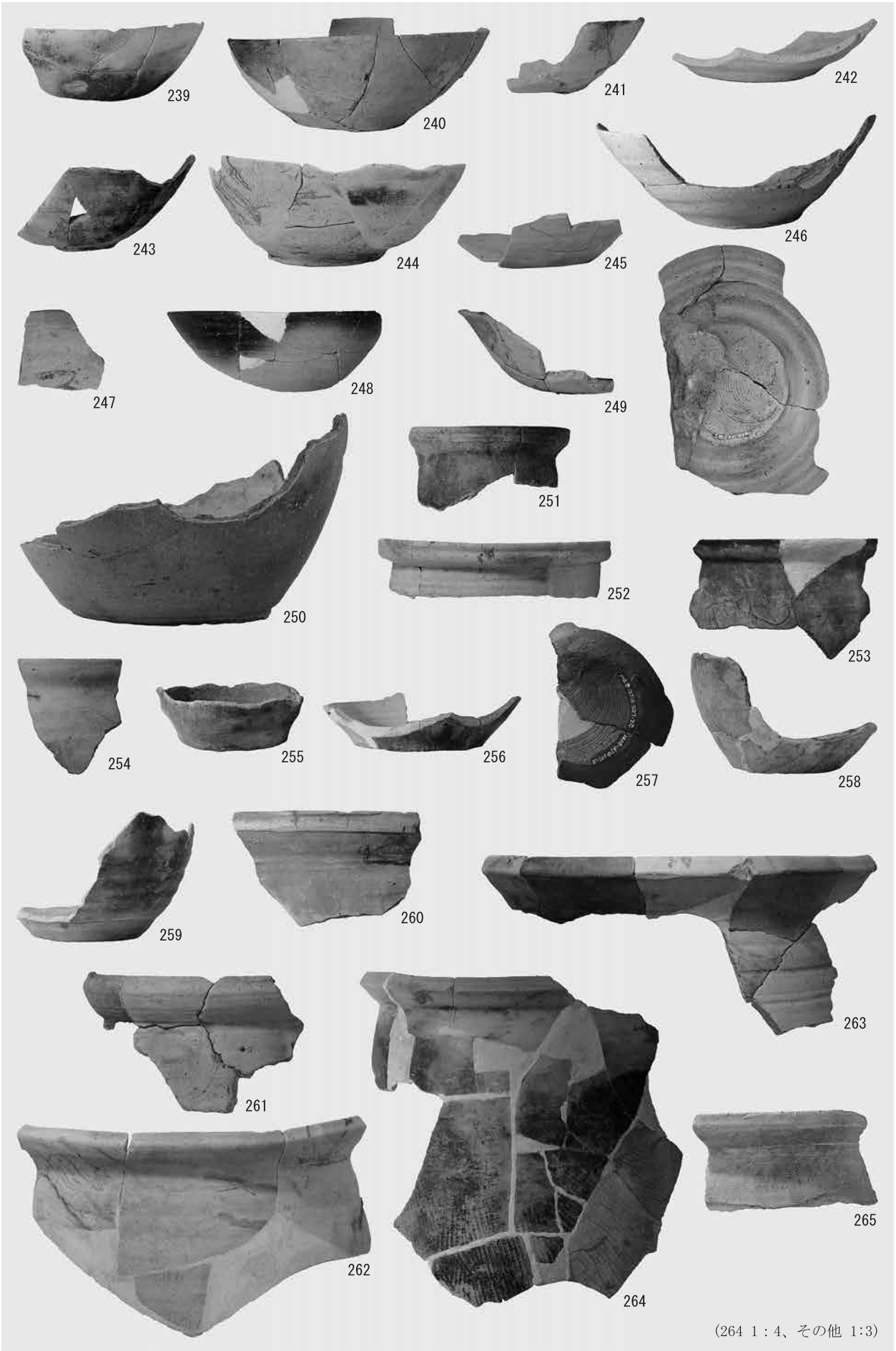

108
109
117
110
111
112
113
114
115
116
118
119
122
120
121
123
125
126
124
127
128
129
130
131
132
135
133
134
136
(1 : 3)


137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
161
160
162

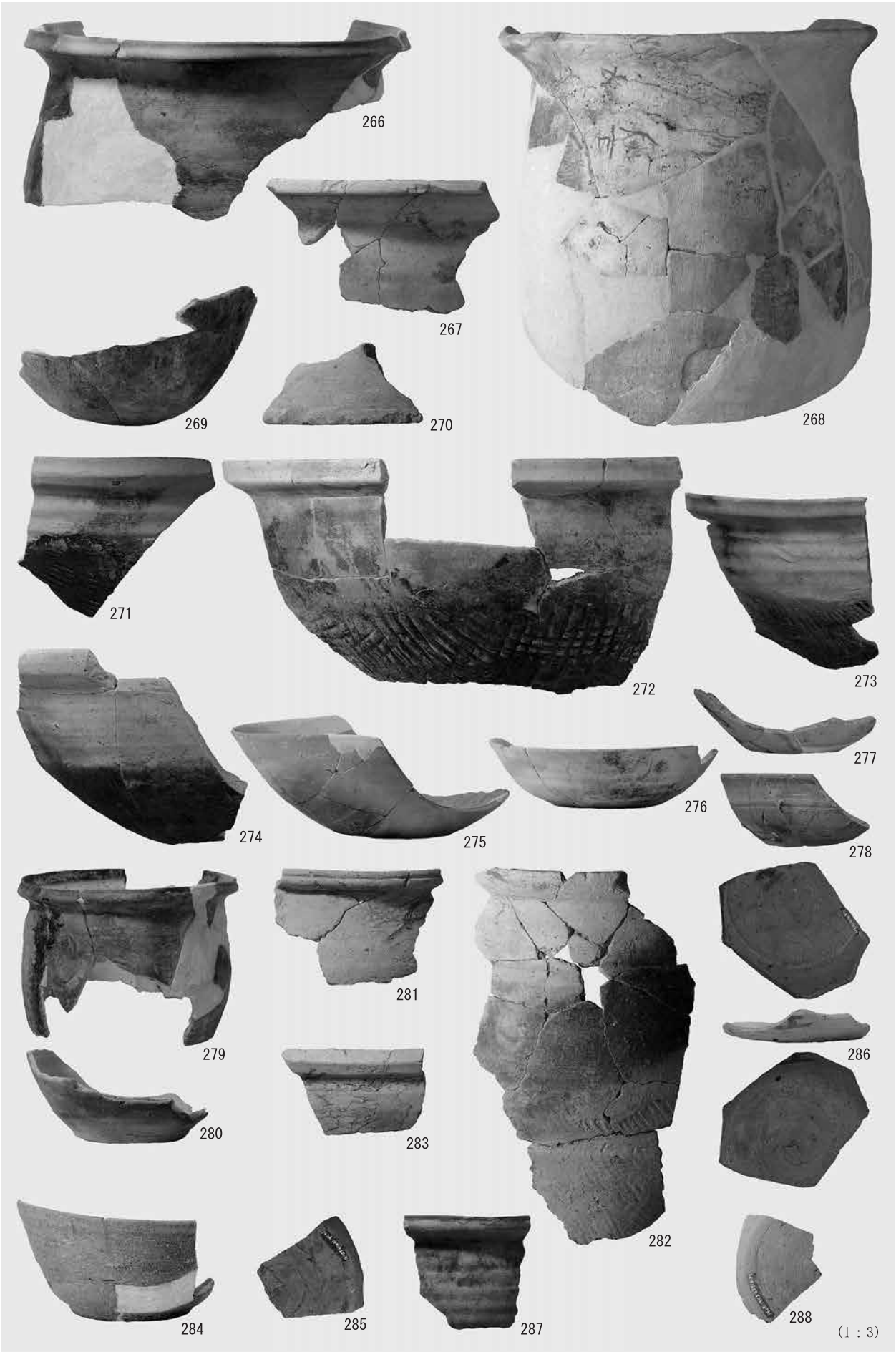
（148　1：8、その他　1：3）


163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
176
175
177
178
179
181
180
182
183
184
185
186
187
189
190
191
188
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
(1：3)

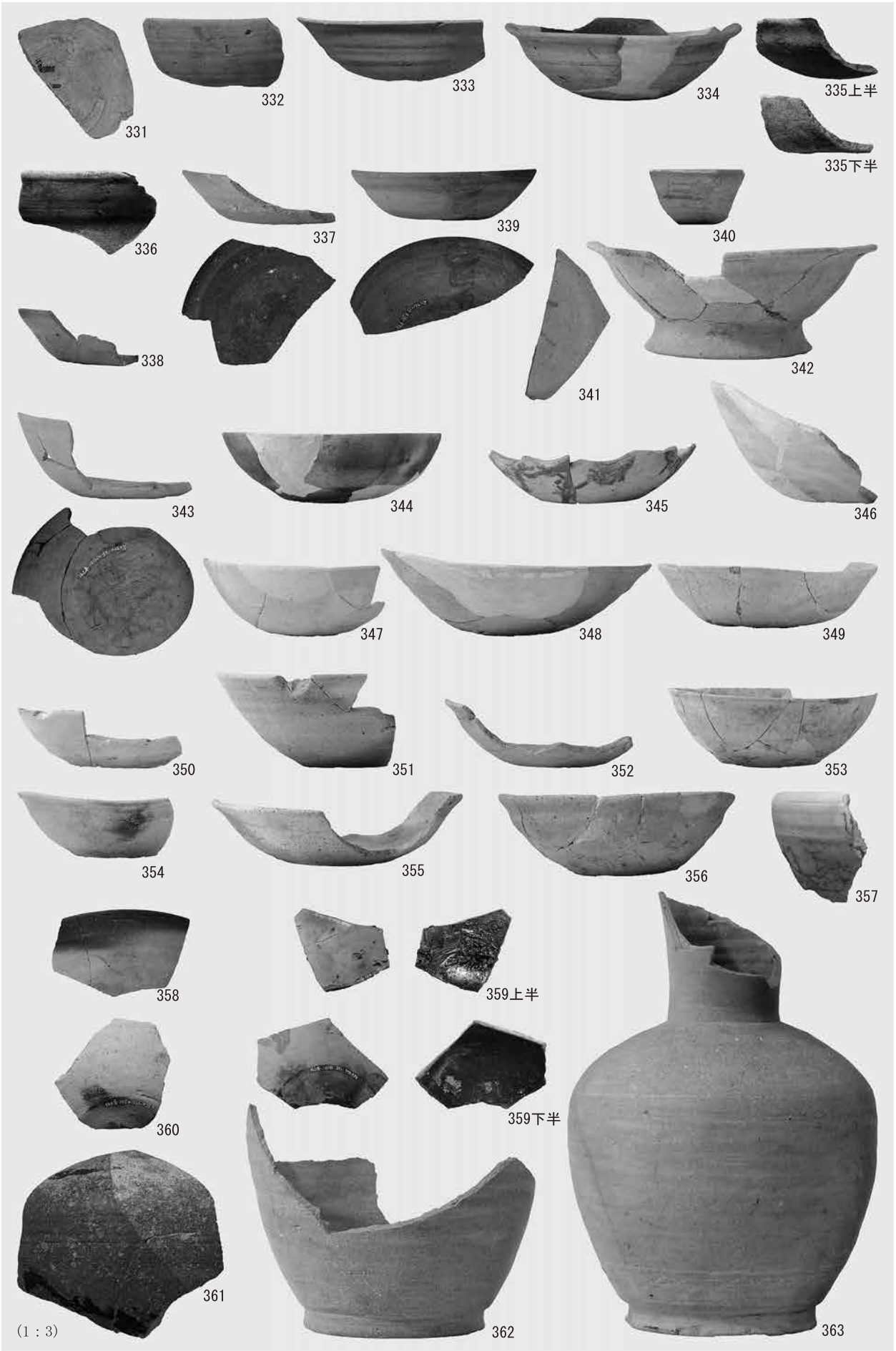

203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
(1：3)

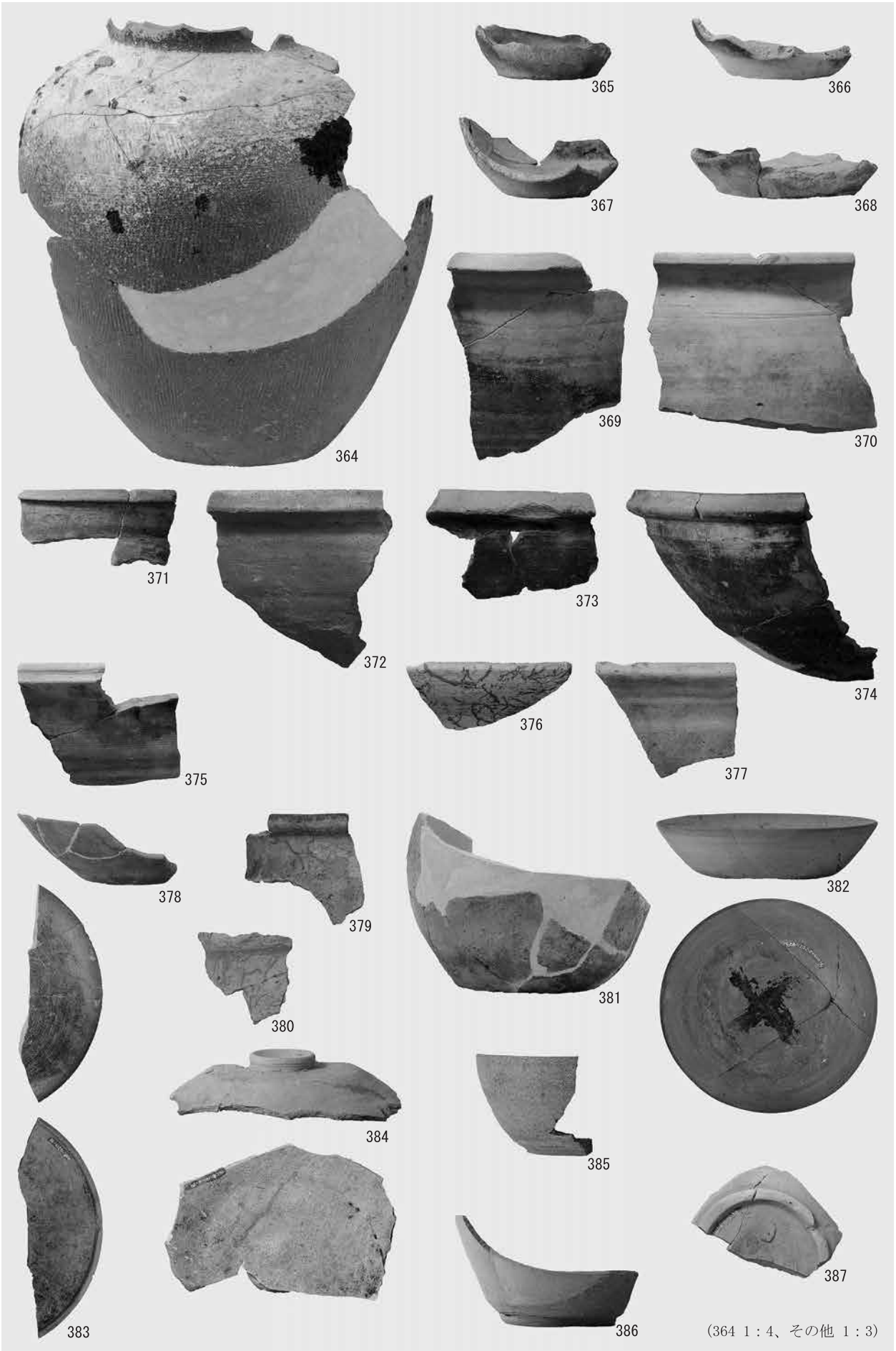

239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265

（264 1：4、その他 1:3）


266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
(1：3)

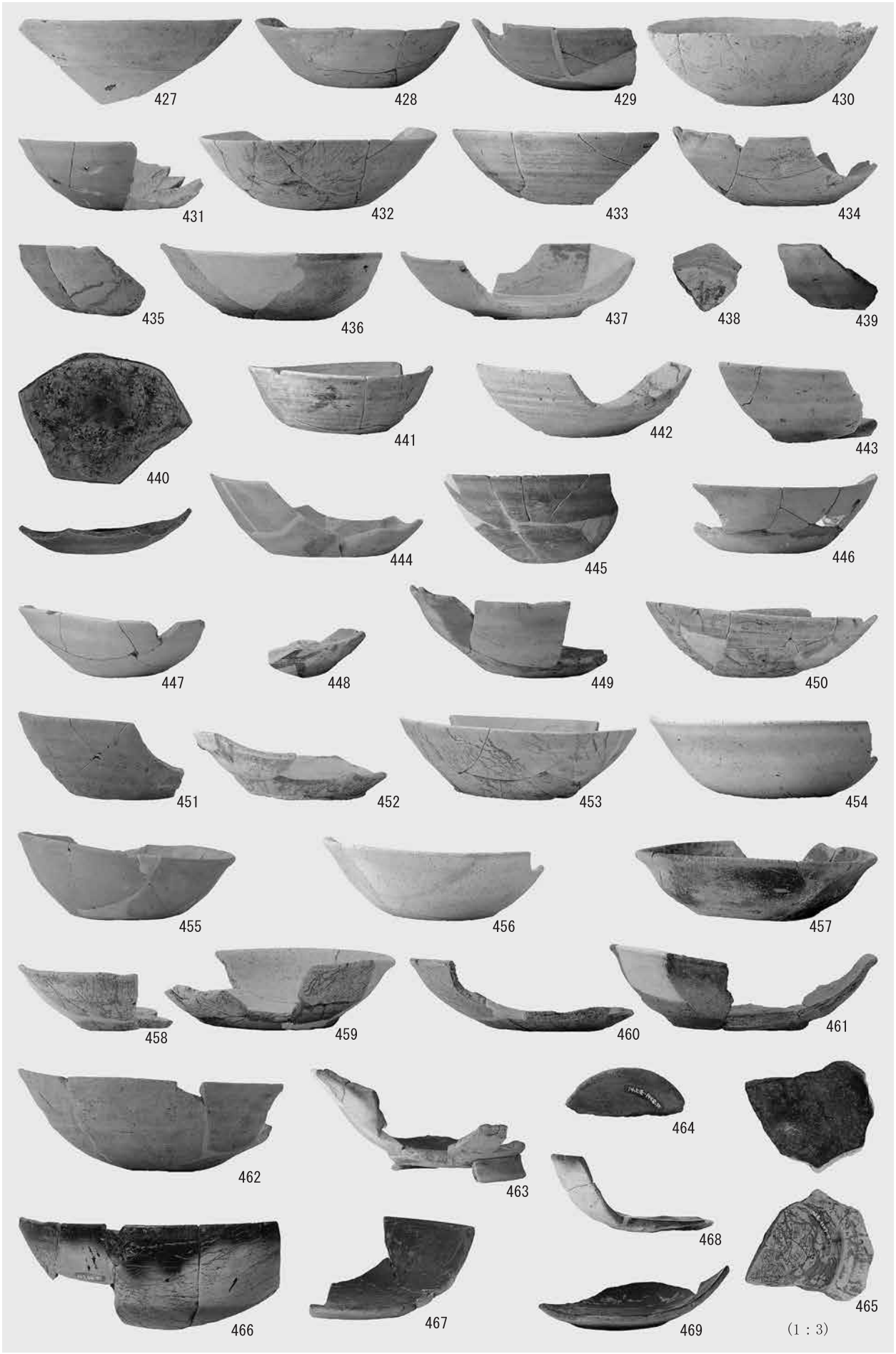
289
290
291
292
294
296
293
295
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
313
312
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
(1：3)

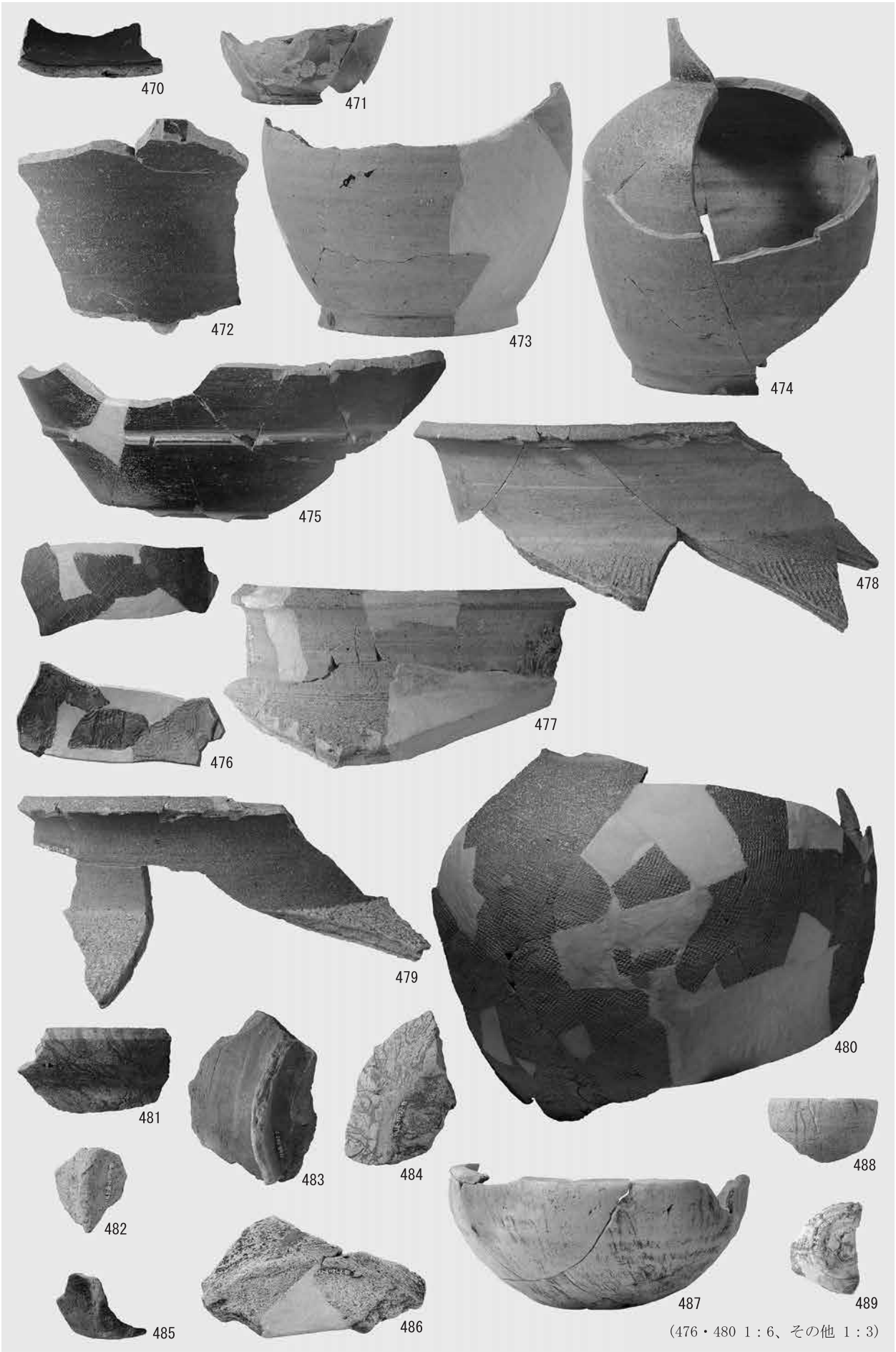

331
332
333
334
335上半
335下半
336
337
339
340
338
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359上半
359下半
360
361
362
363
(1：3)


364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387

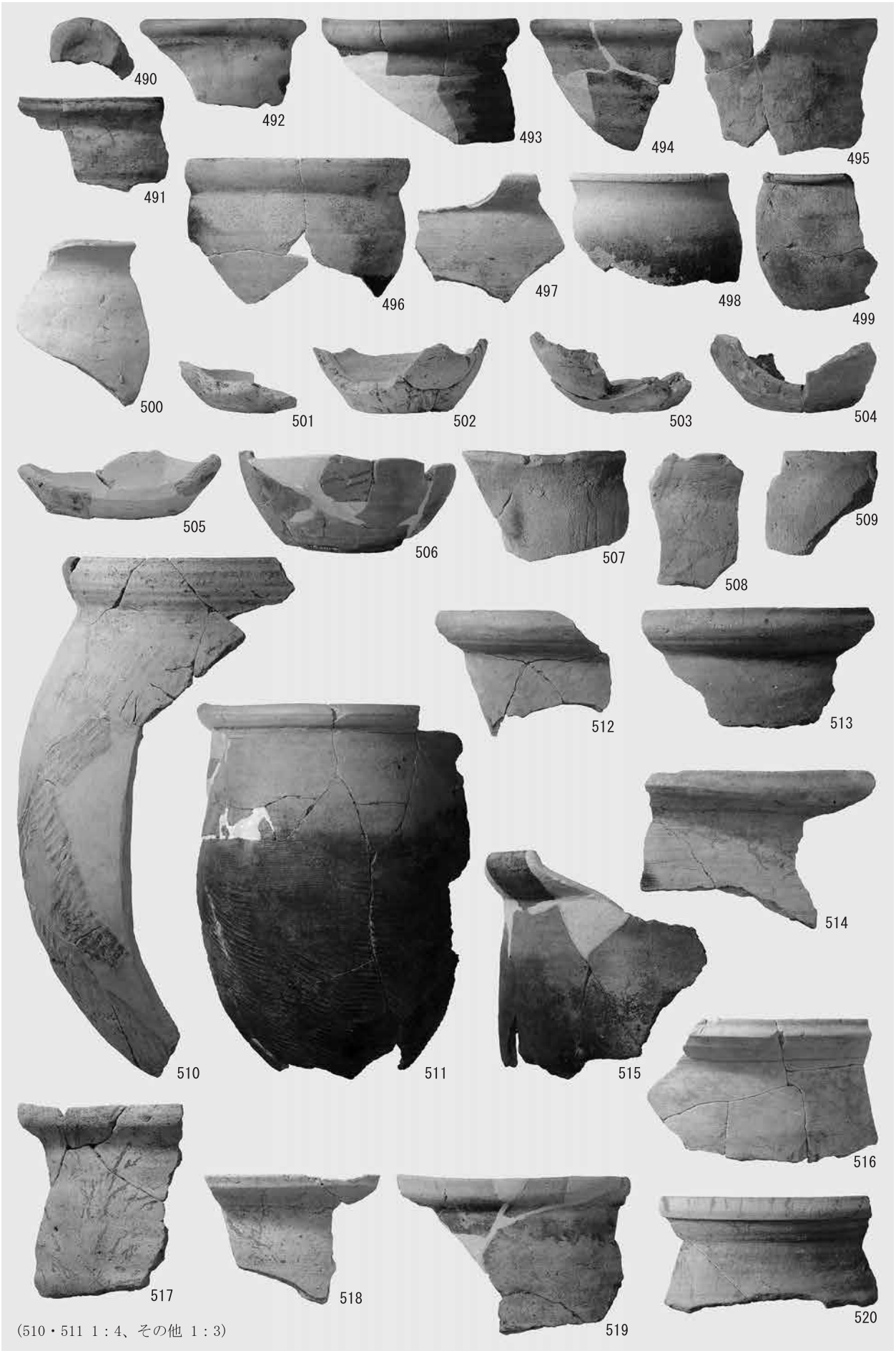
（364 1：4、その他 1：3）

388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
423赤外線撮影
(1：3)

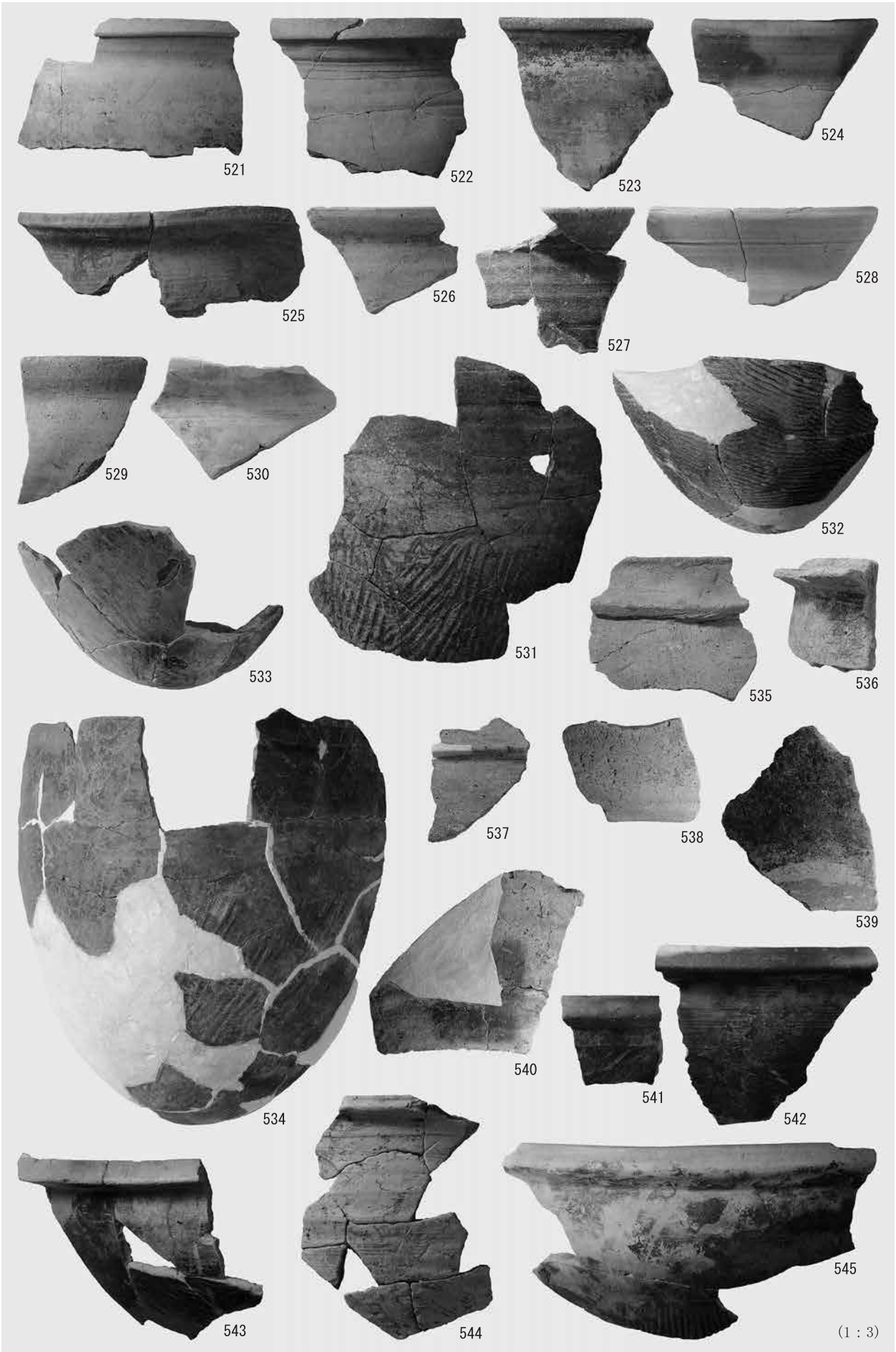

427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
(1：3)

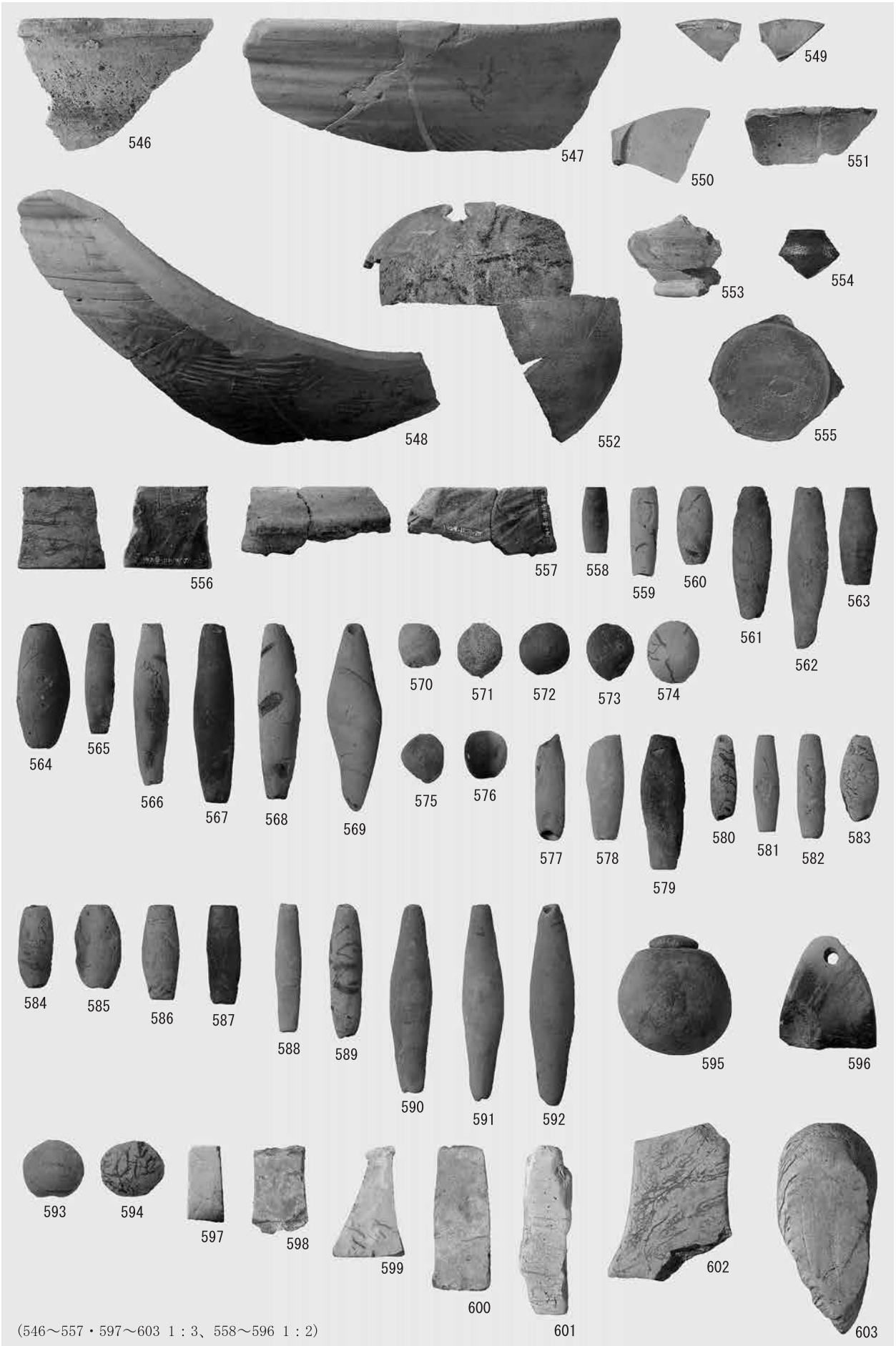


（476・480　1：6、その他　1：3）

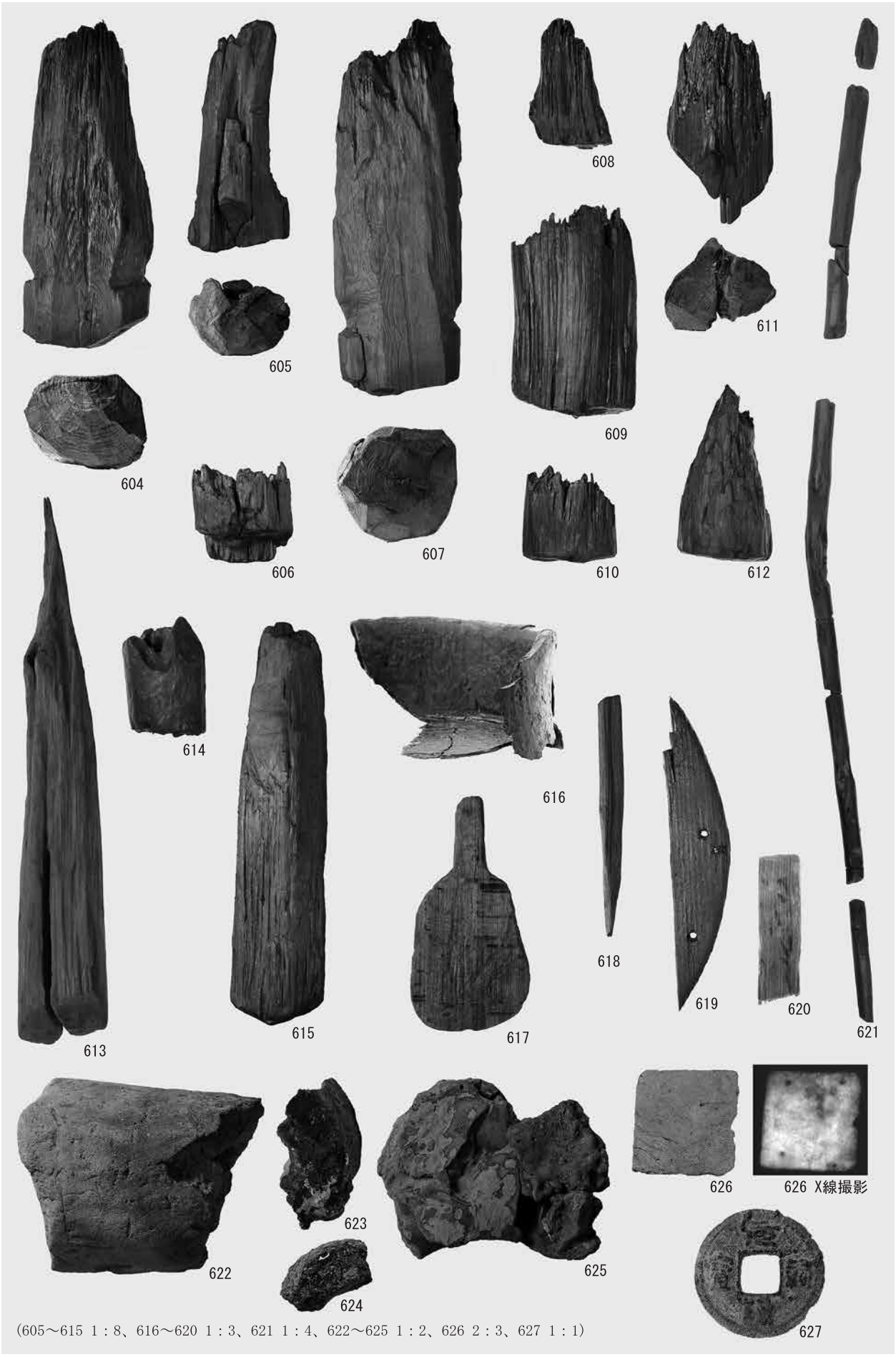


（510・511　1：4、その他　1：3）


521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
535
536
534
537
538
539
540
541
542
543
544
545
(1 : 3)



（546～557・597～603　1：3、558～596　1：2）



（605～615 1：8、616～620 1：3、621 1：4、622～625 1：2、626 2：3、627 1：1）

報 告 書 抄 録

ふりがな	じょうじょういせき
書名	上条遺跡
副書名	上条高畑土地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山賀和也・竹部佑介・パリノ・サーヴェイ株式会社・四柳嘉章
編集機関	長岡市教育委員会・株式会社大石組
所在地	〒940－0084　新潟県長岡市幸町２丁目１番１号　　TEL0258－32－0546
発行年月日	2016年3月11日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
上条遺跡（じょうじょういせき）	新潟県（にいがたけん）　長岡市（ながおかし）上条町（じょうじょうまち）	15021	1442	37°25′23″	138°51′30″	20140326～20140903	5,900㎡	土地区画整理事業及び病院建設事業

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
上条遺跡（じょうじょういせき）	集落跡	平安時代（９世紀後半～10世紀前半）	掘立柱建物跡・竪穴建物・埋葬関連遺構・井戸・畝状小溝群・溝・土坑・ピット	須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・土製品・土錘・砥石・石製品・柱根・木製品・鍛冶関連遺物・帯金具	四面廂建物を検出

要　約

上条遺跡は信濃川右岸の沖積地の微高地上に立地している。出土遺物のほとんどは平安時代であり、９世紀後半から10世紀前半を中心とした集落遺跡である。四面廂建物を中心とし、側柱建物や竪穴建物が建てられる。畠跡が広がり、住居と耕地が一体となっている。また、埋葬関連遺構があり、木棺墓や土坑墓などが検出された。遺物には漆関連遺物があり、漆工房があった可能性がある。土錘の出土から漁労が行われていたと考えられる。新たにこの地域に進出してきた新興勢力の集落と考えられる。

上条遺跡

上条高畑土地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成28（2016）年3月11日　印刷
平成28（2016）年3月11日　発行
発　行　　新潟県長岡市教育委員会
印　刷　　株式会社サンワプロセス